永久なるかな　―Towa Naru Kana―

風鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永久なるかな　―Ｔｏｗａ　Ｎａｒｕ　Ｋａｎａ―

【Ｎコード】
Ｎ１０３４Ｌ

【作者名】
風鈴

【あらすじ】
テンプレって思うだろう？俺もそう思う。

どうやら神様見習いの『手違い』で死んだらしい俺は、色々な特典付きで、所謂“マンガやゲームの世界”に転生させてもらうことになった。……いってしまえばまぁ、“二次創作”の主人公になるようなもんだわな。……といってもまぁ、『無限の魔力！』や『不老不死！』みたいな、頭抜けたチートが無い辺り、見習いの見習いたる所以なのかねぇ。

まぁいいさ。新しい人生を楽しませてもらいますか。

序章：転ばされた、ただでは起きぬ。（前書き）

※当作には以下の成分が多分に含まれておりますので、摂りすぎには注意しましょう。

・不定期更新　・チート能力系　・主人公最強
・ご都合主義　・テンプレ　・独自解釈

※『原作』を知らないと解らない部分が多々あると思います。ご了承下さい。

※流れは基本的に原作沿いになると思われます。

※ソゥユート、ユーフィーをください。

序章：転ばされた、ただでは起きぬ。

神様って、本当に居るんだなって思ったのは……死んだ後だった。

俺の前には今、腰まで伸ばした綺麗な黒髪の、とても可愛い女の子がいる。

深々と頭を下げて。

女の子曰く、ここは生と死の狭間。

女の子曰く、自分は神様（見習い）。

女の子曰く、あなたは私の手違いで死んでしまった。

女の子曰く、正規の手続きを踏んで死んだわけではないので、天国にも地獄にもあなたの行き場がない。

女の子曰く、間違って死なせてしまった事がバレると、正規の神様になる昇格試験に落ちてしまう。

女の子曰く、だからどうかこの事は内密に。

俺曰く、フザケルナ。

「……第一、手違いって何よ手違いって?間違って『死なせてしまう』ような手違いなんてあるのか!?」

そんな俺の言葉に、神様（仮）は酷く言いづらそうに口ごもっている。

ああ……なんだかすごくいやなよかんがする。

しばらくじとっと見つめていると、神様（仮）はようやく観念したかの様に口を開いた。

「その……死者を選別する実習の最中に、居眠りしてしまいまして……」

……ちょっとまて。

「……あ～……すまん、もう一度言ってくれるか？どうも死んだせいか耳がおかしくなったらしい。今、『居眠り』って聴こえたんだが？」

「……居眠りして、選別を間違いました……」

「……どこの世界にそんな大事そうな仕事の最中に居眠りするやつがいるんだよおい。そもそも居眠りは手違いとは言わねえええ！！！」

「ごめんなさいいいぃ！だって昨日の深夜ドラマが面白かったんですよおおお！！！」

「居眠りの理由が言うに事欠いて深夜ドラマだとゴルァアアア！！」

その後も、許してください！いいや許さん！と言い合う俺達だったが、最終的に神様（仮）の「生き返らせる以外なら何でもするから許してください」の言葉で、一応の決着を見た。

……神様のクセに弱いなって？

途中、強気に出てきたんだが、試しに大声で「この神様（仮）の上司のひとー！」って呼ぼうとしたら、慌ててさっきの台詞を吐いたんだよ。

さて、「何でもする」との言質を取ったからには、何をしてもらおうか？

……ちなみに、「何故生き返らせるのはダメなのか？」と訊いた

ところ、「生き返らせたら、間違って死なせたって言ってる様なものじゃないですか！」とキレられた。

……まぁいい。

さて、生き返れないのであればどうしたものか。正直、俺はまだ死にたくない。いやもう死んでるけど……いやようするに、もっと生きたいわけだ。

……と、そこで俺は思い付いた。いや、思い出したといった方がいいか？……まあとにかく、生前よく読んでいた、所謂二次創作の事を。

「よし決めた！俺をマンガとかゲームとかの、好きな世界に転生させてくれ。なんか超すごいパワー盛り沢山で」

そんな俺の提案に、神様（仮）は申し訳無さそうに、

「あの……転生と能力付加は良いのですけど、転生する世界は選べませんよ？あと出来れば具体的な能力を言ってください……それと、数も……5個……ぐら……ひぅっ！未熟でごめんなさいぃぃ！」

きっと聴いてるうちに、相当いやな顔になったんだろう、俺の顔をみて、言い切る前に謝る神様（仮）。

……それにしても5個かよ。どうしてくれようか。

「……あの……さっきの発言を取り消すことは……」

「却下」

「うぅ……」

それならばと、俺は体感で小一時間程考えるに考えたのだが……出た結論は、色々思いついたけど絞るの面倒くさいので、取り敢えず押し切ってみようだった。

「決めたぞ。いいか……？パッシブスキル、アクティブスキル、アイテム、基本設定をそれぞれ5個ずつだ。まず……」

「ちょ、ちょっと待ってぇぇ！！それぞれって何ですか、それぞれ

って！それじゃあ合わせて２０個じゃないですかぁ！」
「良いだろ、それぐらい。大別したら５個どころ４個だし、それぞれの内容も５個に抑えてるし」
「良い訳ないじゃないですかぁ！第一アイテムとか基本設定って何ですか、能力じゃないですよぉ！」
「細かい事は気にするな！」
「細かくないいぃぃ！！！」

……その後、喧々囂々のやり取りの末、能力の内容は二人で話し合って決める……と言う形で決まった。
能力の数？……大丈夫、きっと頑張ってくれる。
神様（仮）曰く、スキルなんて長く旅していれば、色々身につきますよぉ！との事だったが、気にしない。

「……何と言うか、そこはかとなく未熟っぷりが醸し出される能力になったが……仕方ない、ここは譲歩してやろう」
「……も、もしもの時の為に溜めていた神力が……」
「まぁ、俺と会ってしまったのがその『もしもの時』だったってことで」
「……ぅぅ……何かいい様に丸め込まれた気がする……」

…
……
……

そして――

「それじゃ、転生先の世界に送りますね。

先に言っておきますが、転生は当然産まれる所からのスタートなので、負担を避けるためにも物心が付くまではここでの記憶も有りませんし、記憶が戻るまで能力やアイテムも封印されていますから……」

「ああ。ま、前世の記憶があるだけでも御の字だと思っておいて、思い出したら色々試してみるさ。俺が言うのも何だが……これに懲りずに、正規の神様になれるように、頑張れよ」

いやホント……我ながら意地悪というかわがままというか随分と無理言った気がするが。

「はい！……何と言いますか、今まで生きてきた中で、一番濃い時間を過ごした気がします……。もう会うことはないでしょうが、お元気で」

「……ふむ。長い人生……神生？の中でも、俺とのひと時が最も濃いとは……光栄だとでも言っておく」

「長いって言うな！！これでも神の中ではまだ若いんです！」

そう言った神様（仮）の手のひらに、光が集まり、それが俺に向かって放られた。

光がその輝きを増しながら、ゆっくりと近づいて来る中、俺は「そういえば……」と口を開く。

「キミの名前、訊いてなかった」

……いや、ただの人間に名乗る名など無いのかもしれんが。だが、俺の言葉に、神様（仮）も「あぁ！」と言う顔をする。

……今の顔じゃ、単に忘れていただけなのか。まったく、最後の最後までどこか抜けた神様（仮）だったなぁ。……これから先、彼女は本当に大丈夫なのか心配になってきたじゃないか。

そんな事を考えている内に、光は俺の中へと吸い込まれて行き……

「わ、私の名前は――」

薄れ行く意識の中、慌てた様子で自分の名を告げる彼女の声だけ

が、俺の頭に響いていた――。

設定：スキル等（前書き）

※９４話終了現在　※随時更新。

神様（仮）曰く、私はがんばった。

設定：スキル等

『スキル』（パッシブ（P）＝常時発動型、アクティブ（A）＝任意発動型）

・魅了（P）
種族や敵味方問わず、他人……特に異性に好かれやすい体質。人外に対して特に効果が高いという謎オプションが付いた。

・能力値限界突破（P）
あらゆるステータスに限界が無い。……と思う程、伸びしろが有る。実際の限界値は不明。
無論伸びしろであるため、転生時の能力値は一般人と変わらない。

・多才（P）
あらゆる物事に対して才能がある。
無論才能があるだけなので、最初から上手く出来る訳がない。

・完全記憶能力（P）
一度覚えた事は忘れない。でもきっと都合の悪い事はすぐ忘れる。
実際には、脳の磨耗を防ぐために、不要な物から順次記憶領域の奥底に圧縮されていくため、それらを『思い出す』時には少々時間がかかる。

・見覚えの習得（P）
見たり食らったりした技術や体術等を習得する。
多才と完全記憶能力の効果の相乗により生まれたスキル。
無論、使いこなすには要練習である。

・神の加護（P）
転生自体に神の介入を受けているため、肉体及び魂に、意図せず神の加護を受けることとなった。
ご都合主義的展開の時はこれが働いているかもしれない。

・直感（弱）（P）
所謂『虫の知らせ』。

・ワールドゲート（A）
世界を移動する為の扉を作る能力。但し、一度訪れ、ある程度滞在した事のある世界以外は、ランダム移動となり移動先の指定は不可。

・七ツ胴（A）
マナで構築された『剣』は大剣状、密度は多めに。迅さと鋭さに主眼を置いて振り抜く事によって“七の胴を一太刀で切り捨てる”斬撃を放つ。
無論繰り出されるのは一撃に非ず、流れる様な連撃である。
ルゥ直伝。

・クロスディバイダー・偽（A）
左右それぞれに属性の反する『剣』を持ち、左右両刃を交差するように同時に斬りつけ、刃が交差した瞬間に起こる対消滅のエネルギーによって、斬撃と共に爆発にも似た衝撃を加える。
元は世刻望の技『クロスディバイダー』。

・月輪の太刀（ガツリンノタチ）（A）
月の輪を描く抜刀術。本来は黒マナ属性の攻撃スキル。

・北天星の太刀・偽（A）

マナで構築された『剣』を大剣状にし、下から掬い上げる様に切り上げる。
この技の要となるのは積み重ねた錬度である。故に現状においてカティマの様な威力が出せるわけでは無い。
元はカティマの技『北天星の太刀』。

・ライトニングフューリー・偽（Ａ）
身体能力強化を全開にして刺し穿つ突進技。紫電を発するまでに濃密に篭められたオーラフォトンによる一撃は、正に雷光の一閃と化す。
元は永峰希美の技『ライトニングフューリー』

・神剣『フラガラッハ』（Ａ）
刃先が単分子レベルの厚みしか持たない、鋭さを追求した片刃の剣。その形に『観望』を形成する。
モデルはＡＲＭＳに出てきた『ハンプティダンプティ』の同名の剣。
『観望』の形状変化が使用不能になった事に伴い、使えなくなった。

・オーラフォトンレイン『バロールの魔眼』（Ａ）
周囲の空間に散布した粒子状の『観望』に、手元に顕現させている『観望』を通してオーラフォトンを流し込み、３６０度、いたるところから撃ち出す。
『バロールの魔眼』の名は、モデルとしたＡＲＭＳに出てくる『マーチヘア』の技から拝借。
『観望』の使用不能に伴い、使えなくなった。

『所有アイテム』

・オートチェンジャー
　他世界のお金を、現世界にて使用できる通貨に自動で換えてくれる財布。
　お金が無限に沸いて出てくるわけではない。

・箱舟
　持ち運び可能なサイズに圧縮された異空間領地。
　外での１時間に対して、箱舟内の経過時間を６時間毎に設定可能。
（外界と同期、１時間＝６時間・１２時間・１８時間・２４時間）
デフォルトは同期に設定してある。
　外見は、片手に収まる程度の水晶球。
　モデルはネ○まのアレ。

・アルケミーストーン
　箱舟内に設置されており、魔力を通すと宝石や貴金属、鉱石、希少金属を生み出すことが出来る石。この場合の希少金属は、現代におけるレアメタルではなく、ミスリルやオリハルコン等、所謂魔法金属を差す。
　生み出す量は少量。箱舟内時間で２４時間に一度しか使えない。

・戦術オーブメント
　『英雄伝説　空の軌跡』シリーズにおいて、アーツと呼ばれる魔法を使うために必要な機械。
　クォーツを填め込むことで、様々な追加効果を得る事ができ、クォーツの組み合わせによって使えるアーツが変わる。
　ナナシ特製。

・結晶回路（クォーツ）　（　）はゲーム内効果
・水耀珠（ＨＰ＋１５％）

・金耀珠（消費ＥＰ－５０％）
・風耀珠（ＡＧＬ＋５）
・機功２（移動中と戦闘中に少しずつＥＰが回復する）
・蒼耀珠（ＡＴＳ＋１５％、ＡＤＦ－５）
・陰陽（移動中に少しずつＨＰ回復、魔獣に見つかりにくくなる）
・銀耀珠（最大ＥＰ＋１５％）
・黒耀珠（ＳＰＤ＋５０％、ＭＯＢ－２）
・翠耀珠（ＡＤＦ＋１５０、ＡＴＳ－９％）
・琥耀珠（ＤＥＦ＋１５％、ＳＴＲ－９％）
・紅耀珠（ＳＴＲ＋１５％、ＤＥＦ－９％）
・範囲２（アーツの効果範囲＋２）

『基本設定』

・転生者は、常に付き従う2体のサポーターを持つ。
サポーターの形状、性格、詳細な能力は、転生者による初期設定によって決まる。

・ワールドゲートによって世界から連れ出す相手には、「己と共に永久に歩む意思はあるか？」の問いを行い、相手の了承の言葉による魂の契約を行わなければならない。
魂の契約が行われた場合、契約者の魂の保存が行わる。
結果、契約者は転生者と同様、ワールドゲートを通過し他世界へ移動した瞬間に、出身世界より出た直後の年齢に、魂の復元が行われる事になる。
その際、肉体状態等は最善の状態へと修繕・適用される。

・転生者の所有物は、任意にその所有権を譲渡しない限り、決して紛失することは無い。

『作中登場済み魔法』

○神剣魔法
・マナリンク
（詠唱：廻る命の流れよ、友へと捧ぐ力となれ）

○オーバルアーツ（英雄伝説　空の軌跡シリーズ　※効果は作中の効果に変換）
・ティア（単体少回復）
・ティアラル（単体大回復）
・ラ・ティア（小範囲回復）
・ラ・ティアラ（中範囲回復）
・ラ・ティアラル（大範囲回復）
・ブルーアセンション（圧縮した水の塊を一気に解放し大爆発させる。単体）
・ダイヤモンドダスト（強烈な冷気を生み出す。「凍結」効果有り。小範囲）
・コキュートス（幾つもの巨大な氷柱を突出させる。「凍結」効果有り。特大範囲）
・シルフェンガード（風の防御壁を作り、近接する敵の動きを阻害し、自身の動きを後押しする。単体）
・シルファリオン（風の精霊の力により移動速度を上昇させる。単体）
・プラズマウェイブ（指定した目標地点へ向け、電撃を連続で叩き落す。直線）
・エアリアル（石つぶての混じった猛烈な竜巻を巻き起こす。中範囲）
・ゲイルランサー（指向性の突風を打ち付けて敵を遠ざける。直線）

・ラグナブラスト（裁きの雷を振り下ろす。直線）
・エアロストーム（巨大な竜巻を巻き起こし真空の刃で敵を切り裂く。大範囲）
・グランストリーム（激しい大気の奔流が敵を飲み込み縦横無尽に切り刻む。特大範囲）
・ラ・フォルテ（一定範囲内の味方に炎の守護を与え、打撃、斬撃等の攻撃力を底上げする。中範囲）
・ファイアボルト改（複数の火球を撃ち出す。単体）
・スパイラルフレア（白熱した炎の矢が空中を乱れ飛び、敵へ突き刺さる。中範囲）
・ボルカニックレイブ（エネルギーを一点に集中させ、大爆発を起こす。中範囲）
・アークプロミネンス（圧縮した炎の塊を爆発させ、地表上の敵を焼き尽くす。特大範囲）
・クレスト（大地による守護を得る。一定時間物理防御力上昇。単体）
・タイタニッククロア（局所的な地震を引き起こす強力なアーツ（特大範囲））
・クロックアップ（思考能力を増加させ、擬似的に「時間加速」状態にする。単体）
・クロックアップ改（思考能力を大きく増加させ、擬似的に「時間加速」状態にする。単体）
・オーバルダウン（一定時間、敵の魔法に対する抵抗力を減少させる。特大範囲）
・ソウルブラー（時空を震わせる波動を放つ。「気絶」効果有り。単体）
・シャドウスピア（生命を削る時の刃を敵の頭上に出現させ、撃ち込む。単体）
・Ａ－クレスト（範囲内の味方の魔法耐性を高める。中範囲）
・ダークマター（高重圧の空間を持って、敵を締め上げ、押し潰す。

単体）
・テンペストフォール（驚異的な破壊力で空間を圧搾する、失われたアーツ。特大範囲）
・セイント（味方一人の攻撃力と守備力を上昇させる。単体）
・ゾディアック（味方全員の攻撃力と守備力を上昇させる。特大範囲）

○『ネギま』より（始動キー『イン・フェル　レイ・ウィル　イン・フィニティ』）
・魔法の射手（氷）
・魔法の射手（闇）
・魔法の射手（光）
・氷結　武装解除
・闇の吹雪
・戦いの歌
・風化　武装解除

○オリジナル魔法
・神槍『スピア・ザ・グングニル』
（先端から三十センチ程まで、下がるに連れて末広がりになった、赤黒く輝く、三メートル程の槍を創りだす。↓の形が近い。投擲されると、純粋な破壊と消滅の力を伴った魔力弾となって、進路上にあるものを文字通り抉り取りながら突き進む）

永遠神剣之章：1．はじめまして、ひさしぶり。

俺こと、青道（あおみち）祐（ゆう）が全部を『思い出した』のは……通っている物部学園（もののべがくえん）がミニオンと言う敵――世界に満ちるエネルギーである“マナ”によって創られる、人造生命……だったかな――に襲われ、世刻（せとき）望（のぞむ）と永峰希美（ながみねのぞみ）が永遠神剣に覚醒し、永峰の守護神獣である、巨大くじらのものべーの背に乗って飛翔した瞬間だった。

そうそう、一応説明しておくと、神獣ってのは永遠神剣――ようするに、すごい力をもった剣だな――それぞれについている、言わば“永遠神剣の意思”そのものだ。

ちなみに、ものべーの背に乗って飛翔したのは俺たち個人じゃなく、学園施設そのものなわけだが……こうして体験してみると、呆れたでかさだな、ものべー。

今の俺……つまりは転生後の俺は両親を早くに亡くし、親類も無し。貧乏学生を地で行っている１８歳。物心が付くまで～って話しだったが、随分思い出すのが遅かったもんだ。……ふむ、こういった思考になるって事は、主体は前世の方になるんだろうか？

けど、これはこれで奇妙な感覚だ。何故って、確かに前世の記憶があって、けどこの世界に１８年間生きてきた記憶もあって、そのどちらも、確かに俺に変わりないんだから。

それにしても、いきなりこの世界とは……いやはや。

物部学園、ものべーと来たらもう分かっているだろうが……そう、よりにもよって『聖なるかな』の世界だ。……油断してるとアッサリ死にそうだ。十分に気をつけよう。

さて、記憶も戻ったからには……まずはサポーターを呼んでみようか。

俺がこの“サポーター”という設定を考えた時は、単に「色々補

佐してくれるのが居たらいいなぁ」程度にしか考えていなかったんだが……何と言うか、今の人生でも、この１８年間平々凡々な学生生活をしていただけって身としては……いやホント、あの時の自分を誉めてやりたい。

ああ、ちなみに今俺は、ミニオンの襲撃の際に避難していた体育館から、こっそり出て空き教室の隅に座り込んで隠れている。

「ナナシ、レーメ、居るか？」

部屋の中空へ向かって呼びかける俺。……端から見たら変な人なんだろうな。

むしろこれで出てこなかったら、俺ただの痛い人じゃねえか。

そんな事を考えているうちに、いつの間にやら俺の目の前には、１８ｃｍ程の少女が二人、浮かんでいた。

ちゃんと居てくれた様で何より。

名前から解る人は居るだろうが、見た目のモデルは何の因果か、この『聖なるかな』の世界に登場する同名の神獣である。

そう、だから“よりにもよって”なんだよな。この世界には二人のモデルとなった、言うなれば『オリジナル』のナナシとレーメがいるわけで……これじゃあ二人を大っぴらに連れて歩けないじゃないか。

「初めまして、マスター。

主に機械技術へのサポートを致します、ナナシです。宜しくお願いします」

「吾はレーメ。主に魔法技術へのサポートをする。よろしく頼むぞ、ユウ！」

ペコリとお辞儀するナナシと、ちょっと偉そげなレーメ。うん、二人ともイメージ通りだ。

そんな二人に「長い付き合いになるだろうけど、よろしく」と返し、右手を差し出すと、二人は「はい」「うむ！」と言いつつ、小さな手でそれぞれ俺の指を握ってきた。

……やばい、可愛い。
「……ところで、俺の記憶が戻るまでの間って、二人はどうなってたんだ？」
「はい、姿形は取れておりませんでしたが、意識体として常に側に居ました」
「……それって」
風呂とかトイレとか……その、溜まったモノを処理してるときとかもか？
なんて言葉を続けるに続けられなかった俺だったが、二人は俺の言いたいことを察したようで。
「……」
「……」
頬を赤く染めながら顔をそむけた。いや俺の方が恥ずかしい！恥ずかしすぎるっ！！
でもなんか二人の仕草に萌える……なんて思ったあたり、ダメかもしれない。
「……ごほんっ、ところでマスター。実はもう一人、会っていただきたい人物がいるのですが……」
「……へ？」
小さい二人に頬を緩ませていた……って言ったら、何だか自分がアブナイ人みたいだが……所に掛けられた、ナナシの意外な言葉に思わず間抜けな声が漏れた。もう一人って何だ？
「もう一人って？サポーターは二人だけだったと思うが」
「はい、それは間違いありません。……その、もう一人に関しては、本人からお話を聴いて頂いた方が早いと思いますので。レーメ」
ナナシと俺の話しを黙って聴いていたレーメは、ナナシに呼ばれると「うむ」と言いつつ、どこからともなく中に建物のミニチュアが見える水晶球を取り出す。
レーメが両手で……って言うか、全身で抱えるように持っている水晶球。あれって『箱舟』だよな？……どっから出した……のかは、

訊かないのがお約束か。
「彼女は箱舟の中に居りますので、中へお願いします」
彼女……ってことは女性か。まあいいか、ついでに今後の行動予定も立ててしまおう。
俺は二人にその旨を伝え、箱舟の設定を２４時間に設定すると、中に入った。
ちなみに、使い方やら何やらは『思い出した』時に一緒に頭の中に入っている。便利なもんだ。

…
……
……

箱舟……と言っても、別に本当に舟の形をしている訳じゃない。実際には、大きな洋館と広大な庭……といった感じだ。
さて、箱舟に入った俺は、ナナシとレーメを肩に乗せ、二人に案内されてある一室の前に来た。
扉をノックすると「はーい」と言う、どことなく聞き覚えのある気がする声と共に、パタパタと言う足音が聞こえて来る。
そして開いた扉の前に居たのは……メイド服姿の神様（仮）だった。
……何故？
最後に聴いたはずの、彼女の言葉が思い出される。
そう、彼女が最後に言ったのは、自分の名前。確か――
「ティルフェニア？」
俺が呼びかけると、その瞬間、彼女は涙目に――ありゃ再会に感動しているとかじゃなく、本気で落ち込んでる涙目だ――なりながら、「はい……」と　小さく返事をした。

部屋に通され、向かい合って座ることしばし。ティルフェニアが淹れた紅茶を飲んで気持ちを落ち着け、
「んで、また何でここにいるんだ？」
根本的な疑問を訊いてみる。
すると彼女はまだ少し肩を落としながらも、ぽつぽつと話し出した。

「……私たちには二つの名前がありまして……一つは通名とでも言いましょうか、普段使う為の名。他人に名を名乗る場合はこちらを使います。
そしてもう一つは、真名、もしくは神名と言い、これは決して他人には教えない……これを教える事は、その相手に従属する事を誓うに等しいと言えるものです」
そこで一旦区切り、「ここまでは良いですか？」と訊いてくる彼女へ、頷いて返事をする。
……って言うか、この時点でおおよその理由は解ってしまったが。
「……えっとですね……その顔はきっともう言いたい事は察してらっしゃるんでしょうけど……」
「……まぁ、多分あの時、俺の言葉で名乗って無い事に気付いて、焦ってるうちに俺の姿が消えるか何かしてきて、更に焦って間違って真名の方を名乗ってしまった……って所か？」
こんな感じかな？と予想を述べて見ると、ティルフェニアはがっくりとうな垂れ、
「……当たってるだけに何も言い返せない……うぅ……」
「つまり、俺に真名を教えてしまったために、俺に従属して、着いて来ざるを得なくなってしまった……と？」
俺の言葉に頷くティルフェニア。
「私も見習いとは言え神ですし、本来であればいくら名を明かして

しまったとはいえ、人間に従属するなどと言う事は無いのですが…
…その……あの時のやり取りを、実はお師匠様が全て見ていらっしゃったようで……」
そこまで言って、少し口籠った後、小さくため息をついてから続きを語る彼女。
「お師匠様曰く、『自業自得とは言え、良いようにあしらわれるとは情けない。あの青年の下で鍛え直して来い』だそうです……。
……そう言う訳ですので、これからよろしくお願いしますね、祐さん。あ、私の事はフィアと呼んで下さい」
ペコリと頭を下げるティルフェニア……もとい、フィア。
そんな彼女に、俺はふと思った疑問を、思い切ってぶつけてみることにした。
「じゃあよろしく、フィア。……ところで何故にメイド服？趣味か？」
「違います！クローゼットを開けたら、これしか入っていなかったんですっ！……こんな事をするのはお師匠様以外考えられません。今度会ったら絶対殴ってやる」
何か最後に不穏当な発言が聴こえた気がするが……まあいいや。
「ところでフィア」
「何ですか、祐さん？」
「そうそれだ」
「？」
余りにも唐突に繰り出した俺の言葉に、きょとんとするフィア。
だがそう、俺は思ってしまったのだ。彼女の話を聴いて、彼女の姿を見て。
そして一瞬で、俺のその考えは最早譲れないものとなってしまったのだ。
……だからこそ、これだけは何が何でも正さねばなるまい。
「キミ、従者。服、メイド服。イコール？」

「何故カタコト……？……って言うか、まさか……」
うん、どうやら俺の言いたい事を理解してくれたようだ。
「……」
うむっと一つ頷き、そのままじっと見つめ、彼女の次のセリフを待つ。
「……ご……ご主人様」
その言葉に、よく出来ましたという意味を込め、うんうんと頷いてやる。
やはりメイド服である以上、これは基本だよね。……なんかフィアががっくりしてるけど……まあ、気にしない。

永遠神剣之章：2．予想外の産物、でも助かる。

さて、フィアの事も一段落したので――
「……って、ええ!?ご主人様って呼ぶので確定ですか!?」
「うん」
「即答された……うぅ」
一段落したので――ちなみに、彼女の主な仕事は、箱舟の維持管理だ――今度は現状の確認と、今後の予定を決める事にする。
「とりあえず、ここは『聖なるかな』の世界で、今は学校にミニオンが襲撃した後。『剣の世界』に向かっている最中ってとこだな。そして俺の立場は、物部学園の3年生、現状なんの力も無い一般生徒……ってわけだ」
「ここまではいいか?」と訊くと、ナナシとレーメの二人はコクリと頷く。……ちなみにナナシとレーメは、俺の知識とある程度リンクしているらしく、大体の所は解っているみたいだ。
けど、フィアはその辺の知識は無いらしく、きょとんとしている。
「あの……ここが『聖なるかな』というものの世界と言うのはいいのですけど、『剣の世界』と言うのは?」
「えーっとな、ようするにこの世界って、いくつもの世界が寄り集まって、大きな世界を象ってるんだよ。
で、その寄り集まってる世界の事を分枝世界、その分枝世界を内包している大きな世界を時間樹って言うんだ」
「……成る程、つまり今は、その分枝世界の中で言う『ご主人様が転生した世界』から『剣の世界』に移動している最中……と言う事ですか」
さすが神様。理解が早くて助かる。
フィアの言葉にうんうんと頷いていると、ナナシが「それでは」と切り出してきた。
「では今後の予定ですが……リンクしている知識ではあやふやな部

分も多いのですが……マスターはこの先の展開はご存知ですか？」
「いや、言う通り一応大まかな流れは覚えてるけど、細かい部分は結構忘れてるなぁ……。この感じだと、大まかな流れもどれだけ合ってるか判らんな」
さしもの完全記憶能力とはいえ、現状で覚えていないものはどうしようも無い。
まぁ、今現在覚えてる事と、今後思い出した事は忘れ無いんだろうけど。
「……では、基本はマスターの覚えている展開に沿い、後は臨機応変に……と言った所でしょうか」
「まあそれしかないだろうな。俺たちっていうイレギュラーが居る以上、必ず俺の知っている通りに動くなんて考え無いほうがいいだろ。
本来、未来なんて何が起こるか判らないものなんだから」
……とりあえず当分は、箱舟を有効に使って訓練あるのみだな。
現状じゃ介入するしない以前の問題だ。
まあ俺としては最低限、“物語”を眺められる観客って立場でも問題は無いんだが。
その後、フィアに館の中を案内してもらい、構造を把握しておく。
そうそう、アルケミーストーンの部屋も当然の如く空だったので、物は試しとアルケミーストーンへと魔力を通してみた。
魔力の通し方はまぁ……レーメのアドバイスを聞きながら四苦八苦して何とか掴んだって感じだったが。まあ何にせよ、俺の中にある力を、しっかりと『魔力』として認識できたのは大きいと思う。
その結果、見たことの無い丸い石が３つ程産み出された。どうやらただの石ではないようだが……さてはて。
……
……

……

屋敷の探索を終え、最初の部屋――どうやらフィアが個室として使っているらしい――に戻ってきた俺達は、とりあえず直近の予定を立てる事にした。まあ要するに、今これからどうするかって事だな。

「とりあえず今は訓練あるのみだと思うんだが……この世界の魔法って、『永遠神剣』が無いと使えないんだよな？」

「うむ。……そうなる以上、現状できるのは異世界の魔法の習得、及び単純に肉体の強化等であろうな」

俺の疑問に答えたのはレーメ。……ってちょっと待て。

「異世界の魔法って……そんなん出来るのか？」

「……むぅ、吾を誰だと思っている？最初の紹介で言った様に、吾の役目は魔法技術全般のサポートだ。それには当然、この世界のみならず、他の世界に行った時も含まれるのだぞ？

……最も、今のユウの体力と魔力では、魔法を覚えた所で戦力にはならないと思うが」

「……うっ……痛い所を突いてくれるっ。

……そうなるとまずは生き残るために、身体強化系か回復系を覚えておいた方がいいのかねぇ……」

無論、同時に身体を鍛える様にするのは大前提だが。

その時、それまで黙っていたナナシが「それに関してなのですが……」と言葉を挟んで来た。

「どうした？」

「はい、先程屋敷の中を説明したとき、アルケミーストーンにより生成された石がありましたが……」

俺が頷いて続きを促すと、ナナシは先程の石をどこからともなく取り出してテーブルの上に置いた。

「この石……正確に言えば石ではありませんでした。……これは結（クオーツ）

晶回路です」
「……クォーツって、『英雄伝説　空の軌跡』シリーズに出てくるやつ？……っていうかクォーツの元になる鉱石のセピスじゃなく、クォーツで出てくるのかよ」
……いや、これには正直言って驚いた。神様（仮）製の魔法アイテムを舐めてたぜ。
驚いている間に、ナナシはどこからとも無く取り出したＰＤＡをクォーツにかざして居た。ちなみに彼女の持つＰＤＡは、当然彼女が使う様に創られているので超ミニマムサイズだ。……とりあえずさっきのレーメもそうなんだが、あれとかクォーツとかどっから出してるんだろうか。
「種類は……水耀珠、金耀珠、風耀珠ですね。ゲーム内効果で言うならば、水耀珠はＨＰ＋１５％、金耀珠は消費ＥＰ－５０％、風耀珠はＡＧＬ＋５になりますか」
いきなり各系統の最強のが出てくるとか……何と言うご都合主義。
「……ってか、クォーツの種類が判るとか……そのＰＤＡは何だ？」
「これですか？これはアカシック・レコードへの限定接続が可能な端末です。と言っても出来るのは私なら機械技術系統と一般・汎用知識への情報検索、レーメなら魔法技術系統と一般・汎用知識への情報検索程度なのですが」
今、さらりと凄い事を言われた気がする……。
――アカシック・レコード……うろ覚えだが、確か、この世のどこかに存在する、過去・現在・未来におけるすべての事象を記録したもの……だったか。
ちらりとフィアの顔を見ると、彼女も驚いた顔をしていた。
「……なぜフィアも驚く？」
「いえ……私にそんなのを持たせる権限なんて無いもので……」
えー……出所不明の謎ライセンス付きＰＤＡとか怖すぎるっ！とか思っていたら、
「ああ、これを持たせてくれたのは、フィアのお師匠だぞ？何でも

『不肖の弟子が迷惑をかけた侘びだ』だそうだ」
そんなレーメの一言で解決した。
……あ、フィアがまた落ち込んでる。元気出せ。

それはともかく。
「……ん～……なぁナナシ、ナナシは機械技術全般のサポートだよな？」
「はい」
「……じゃあ、俺用の戦術オーブメントとか創れるか？」
俺の質問に、彼女は再びＰＤＡを操作しつつ、しばし考えこむ。
「……はい、可能ですね」
そして、出た答えは肯定だった。……よしっ、これでとりあえず何とかなる目処がついたかもしれない。
「それじゃあ……」
早速、と言おうとした所で、それまで黙って話を聴いていたフィアが、
「……あの～……」
と、声を掛けてきた。
「ん？」
「……くおーつ、とか、おーぶめんとって何ですか？」
知らんのか。神様なのに。……まあいいや。
「簡単に説明すると、さっき言った『英雄伝説　空の軌跡』シリーズに出てくる道具で、戦術オーブメントってやつにクォーツってのを填めると、そのクォーツに付随する効果……ここにあるので言えば、ＨＰが１５％増えたりとかを得る事ができるんだ。で、そのクォーツの組み合わせによって、オーバルアーツ……要するに魔法みたいなのを使う事ができるんだよ」
そう説明してやると、フィアは「ふむふむ」と頷いていた。納得したようで何より。
「……さて、それじゃあ……とりあえずこれからは、俺は基本的な

体力作り、ナナシは俺のオーブメント作り、レーメは他によさそうな魔法とか無いか、調べておいてくれ。オーブメントさえあれば、オーバルアーツは多分使えるだろうし、頼んだぞ？」

「はい」

「うむ」

さて、やる事は決まった。あとはしっかりやるだけだな。

永遠神剣之章：3．息抜きと、顔合わせ。

……とまあ、それから7日間、ずっと体力作りに励んでいたわけだが……正直飽きた。けどこう言うのは続けないと意味が無いし、何より続けないときっと俺が死ぬ。死亡フラグ的な意味で。

そして昨日の夜、とうとう戦術オーブメント――形状は、少し大きめの懐中時計の様な形だ――が出来上がった。そのため、本日からはオーバルアーツと魔法の訓練も体力作りと平行して行く事にする。

……そう、魔法だ。

どうやらクォーツが杖等に代表される魔法発動体の簡単な代わりになるらしく、レーメの見つけたお勧めの中から、ネギまの魔法も練習していく事にしたのだ。

……まぁ、攻撃魔法から武装解除まで汎用性は高いからなぁ、あそこのやつは。

べ、別に男の理想、脱げ魔法が欲しかったわけじゃ……すまん、正直期待している。ぜひ欲しい。

……と、言うわけでさらに7日後、久しぶりに外に出てみる事にした。その際に箱舟時間を外界と同期させておくことを忘れない。……いや、だってフィアを一人で何日間も放置はできないしさ。ちなみに、本来は中に人が居ると時間の再設定は出来ないのだが、フィアだけならば問題はないらしい。

いきなり飛び過ぎだって？……まぁ、ずっと訓練しかしてないし、いいだろ。一週間程度じゃ魔法は初歩の初歩……『火よ灯れ』ぐらいしか使えるようにならんかったしな。レーメの補助があれば、『魔法の射手』を一発ぐらいは撃てるが。理想まで先は長いぜ。

フィアは「『多才』スキルもありますし、すぐに使いこなせる様になりますよー」なんて言ってくれたが……まあ結局の所、根気欲

続けるしかないわけで。
——そういや、つい中に長居してしまったが……考えてみれば、１４時間ほど行方不明になってたことになるんだよな。『箱舟』自体もその場に放置になるわけだし……うん、今度から入る場所には気をつけよう。
ってわけで外に出ると、いつの間にやら『剣の世界』に着いていたようで。
折角なので風景を見るために、屋上へ上がってみることにする。あ、勿論ナナシとレーメも一緒だ。姿を消してるけど、俺の両肩に乗ってる。

屋上に出ると、そこには何ともいえなく雄大な景色が広がっていた。
眼下に広が森林。はるか遠くに連なる山並み。遠くて判りにくいが、城も見つけることができた。
「これはまた凄いな……」
そう思わず一人ごち、しばし景色に見入っていると、後ろでガチャリとドアが開く音がする。
首だけで振り返ってみると、そこにあったのは一つの見知った顔と、二つの見知らぬ顔。
そのうち、見知った顔の方が俺の姿を認めたらしいので、軽く手を挙げておく。
「よ、斑鳩。こりゃまた何ともいい景色だな？」
見知った顔——生徒会長でもある、クラスメートの斑鳩沙月（いかるがさつき）へと声を掛ける。
そう、そして何よりも、彼女もまた神剣使い。ミニオンが学園を襲撃した際、月光の下、光り輝く剣を手に戦っていた姿は、今もはっきりと眼に焼きついている。
いや、その時の俺はまだ何も知らない状態だったからな。普段と全然違う斑鳩の姿が、インパクトが強すぎたみたいなんだ。

「あっはは、青道君は随分と余裕ね？望君なんて絶句してるのに」
望……って言うと、あの左右に斑鳩と見知らぬ少女を侍らせているうらやましいのが、“主人公”の世刻望か。……ってことは、もう一人の見知らぬ少女は永峰希美かな。
「こう見えて結構興奮している。……ま、別の世界で大冒険！ってのは、オトコノコの夢の一つだろ？」
俺の言葉に、斑鳩は「なるほどね」といいつつ苦笑で返した。
……さて、景色も堪能したし、戻りますかね。
俺は隣の三人へ「じゃあまたな」と声をかけつつ、屋上を後にした。
……あ、二人を紹介してもらうの忘れてた。

……
……
……

＊＊ｓｉｄｅ：沙月＊＊

最初のミニオン襲撃時に意識を失った望君が目覚め、現状を説明し、理解してもらうためにも屋上へ出る事にした。
今現在どこでどうなっているのかって言うのは、屋上からの景色を見てもらうのが一番理解できるだろうからだ。
望君の看病疲れで寝ていた希美ちゃんも起き、まだ足元の覚束ない望君を二人で支えながら、屋上へ向かう。
望君、驚くだろーなーなんて思いながらドアをくぐると――見知った顔の、先客がいた。
「あれ、誰か居る？」
「青道君？」

私と希美ちゃんの声が重なる。と、こちらに気づいたらしい彼が手を挙げたので、こっちも手を振り返しておく。
「知り合いですか、先輩？」
「え？うん、クラスメートなの」
そんな会話をしながら、縁へと近づく。うん、思ったとおり望君は驚いてくれているようだ。
「よ、斑鳩。こりゃまた何ともいい景色だな？」
と、そんな私たちの様子を眺めていたらしい、青道訓が声をかけてきた。
「あっはは、青道君は随分と余裕ね？望君なんて絶句してるのに」
いや、実際その通りなのだ。望君に限らず、今は大分落ち着いているが、大半の生徒は現状に理解が追い付かないのか、かなり混乱していた。……まあそれもそうだろう。普通に生活していればまずあり得ない事態なんだから。
だと言うのに、彼のこの落ち着きっぷりはどうなのだろうか？
「こう見えて結構興奮している。……ま、別の世界で大冒険！ってのは、オトコノコの夢の一つだろ？」
彼の言葉に「なるほどね」と返しておく。
彼はもう一度ぐるっと景色を見渡した後、「じゃあまたな」と言って去って行った。
まあ確かに、うちの学校の皆は何気に逞しい部分もあるし……彼みたいな順応の高い人もいてもおかしくはない。
けど、暁君の前例もあるし……一応、頭の隅に入れておきましょうか。

＊＊ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＊＊

……
……

……

屋上を後にし、ぶらぶらと歩いていると、学校に残っていた唯一の教員である椿早苗先生に声を掛けられた。そう、唯一、である。

俺達がミニオンに襲われ、元の世界を脱する事になったのは、学園祭の準備に追われて遅くまで学園に残っている時だった。

……まぁ、それを踏まえても、この学園施設において、居残りの監督していたのが椿先生だけってのは……大丈夫なのか、この学園。……いや、大丈夫じゃないからこんな状態になってるのか？……まぁいい。うん、なるべく迷惑かけないようにしよう。

それはともかく、なんでもこれから体育館で現状の説明があるとのこと。それを聴きたい生徒たちに伝えるために、走り回っているらしい。……先生ってのも大変だな。

一応俺も聴いておくかと、とりあえず体育館へ向かいながら、すれ違う目ぼしい生徒に、説明の事を話しておく。

んで、体育館に着。壁際に座り込んで待つ事にした。

「……ふぁ……」

……のだが、……眠い。さっき気を抜いたせいかねぇ……。

ここのところ慣れない訓練に力を入れすぎていたせいか、疲れが溜まってるのかもしれない。魔法の訓練に没頭してたり、何だかんだで睡眠時間も少なかったしな。

……まあ、箱舟から出る前に一日休養に当てればよかったんだけど。

（……すまん、ちょっと寝る。説明始まったら起こして）

念話でナナシとレーメにそう言って、眼を瞑る。

二人の返事を待たずして、俺の意識はストンと落ちた。

……

……
……
……はっと気が付くと、既に現状の説明は終わっていたらしく、体育館には斑鳩と椿先生、それに屋上で見た二人――世刻と永峰、あと知らないもう二人――確か、世刻のクラスメートだったか。名前覚えてねえや――だけがいて、話込んでいた。
　このまま眺めていても仕方無いので、立ち上がって近づくことにする。
「よぅ」
「あ～……やっと起きたの？声掛けても全然起きないから、どうしようかと思ったわ」
　そんな斑鳩の言葉に、他の皆もうんうんと頷く。
（俺、そんな熟睡してた？）
（うむ。吾が呼びかけても、全然眼が覚めなかったぞ？）
（……マスター、危険地帯での野営中でしたら命取りです）
（……あー……訓練で疲れて実戦で失敗したら目も当てられんよなぁ……気をつける）
　ナナシとレーメにも突っ込まれる俺。涙目。
　そうそう、ナナシとレーメ、それにフィアは俺と『念話』で話す事ができる。
　まあ言ってしまえばテレパシーみたいなもんだな。便利である。
「いやー……説明始まるまでちょっと休むつもりが、いつのまにか熟睡してたよ」
　そう言いつつ、斑鳩と椿先生以外の四人へと向き直る。
「ああ、俺は青道　祐。斑鳩のクラスメートな」
「世刻　望です」
「私は、永峰希美です」
「阿川（あがわ）美里（さとみ）よ」

「森信助(もりしんすけ)っす！」
俺の言葉に続く様に、他の４人もそれぞれ名乗る。
「で、今はどんな話をしてたんだ？」
「うむ、次に問題になるのは食料だな、と話していたのだ」
そんな疑問に答えたのは、６人の誰でもない声だった。
「望、何、その小さいの？」
（こやつが吾のモデルになった『レーメ』か）
椿先生の疑問の声に続き、“うちの”レーメのそんな念話が聞こえてくる。
（……ふむ、うちのレーメの方が可愛いな）
（う、うむ！当然であろう！）
（……マスター、それは贔屓目と言うものです）
（なんだとー！？）
「――うむ。吾はレーメ。ノゾムの神剣『黎明』の神獣だ。敬うように」
俺たちが念話で会話している間に、“世刻の”レーメの紹介が終わった様だ。
その後、結局有志を募って食料調達に行く事を決めた。……まあ俺は一歩退いてみてただけだけど。
それでその場は解散。俺は不参加。
思ったより寝れて気力も戻ったので、もうちょい箱舟に入ってくるさ。

永遠神剣之章：４．幻想と、現実。

夕方――

訓練も終え、食事も終わり、校内をぶらぶら散歩している時だった。

（ユウ！ものべーの外に魔力反応、恐らくはミニオンだ！）

レーメの突然の念話。それに続いて窓から見えた、神剣組三人が駆けていく姿。

その３人がものべーの外へと出て行った直後、俺の背筋をいやな予感が駆け抜けた。その予感に後押しされるように、念の為校門へ向かった俺の前に現れたのは――一人の、青ミニオンだった。

手にした武器を構えるミニオン。

……っていうか、何でこの時点で進入されてんだよ！俺が増えた分、敵も増やそうとでも言う歴史の辻褄合わせとでも言うのか？

くそっ……斑鳩たちは出て行ったばかり。戻るまでには、まだかかるだろう。……やるしか、ないか。

恐らく、永遠神剣どころか普通の武器すらない状態では、肉弾戦ではダメージは与えられない。

だったら！

（ナナシ、レーメ、サポート頼む！）

（イエス、マスター！）

（うむ！）

直後、俺に向かって猛然と駆け出すミニオンに対し、俺はアーツを発動させるべく、オーブメントを起動させる。

オーブメントはナナシの力でその駆動率を最大限まで上昇させ、オーバルアーツはレーメの力で、発動までの時間を最小限まで短縮される。

アーツを選択。対象は自分。

「『クロックアップ』」

紡がれる俺の言葉と同時に、周囲の時間が遅くなった。いや、正確に言うなれば、俺の思考速度が上昇したためにそう感じるのだが。

続いて次のアーツを想定しつつ、放たれる斬撃の角度を予想し、かわす。

アーツを練習するにあたって、常に意識し続けたのはこの、『アーツを使いながら行動する』だった。

ゲームのようにアーツを使おうとするたびに行動が止まっていたのでは、殺してくださいと言っているようなものだからだ。

けど、ハッキリ言ってこれがまたキツイ。

アーツを使う場合に必要なのが、『使いたいアーツを明確にイメージする』ことだ。つまり、使用したいアーツを選択し、それを何処に、もしくは誰に使うかを想定し、その効果を想像する。

つまりは、そのアーツを使う事に集中しなければいけないわけだ。これは、いくらオーブメントの補助があったとしても、他の事を行いながらと言うのはまず無理だ。実際今俺がそれを出来ているのは、偏にナナシとレーメのサポート、そして『完全記憶能力』のお陰に他ならないんだし。

「『シルフェンガード』」

その言葉と共に、風の防護壁が生れ、敵の動きを阻害しつつ、己の動きを加速させる。

それでようやくほぼ互角の動き……ったく、永遠神剣の加護ってやつが羨ましくなる。

幾度も振るわれる剣を避ける度、制服にいくつも傷が出来ていく。同時に、身体にもいくつも小さな切り傷が増えて来た。……まずいな、このままじゃジリ貧だ。と、下から振り上げられる剣をかわした時だ。がら空きになった敵の胴体が見え、反射的にそこを思い切り蹴り飛ばし距離を稼ぐと、すぐ次のアーツに移る。

アーツを選択、対象は相手に固定。

「『ソウルブラー』！」

その瞬間、敵の周囲の空間が強烈に振動し衝撃を与える。が、敵

はそれを耐え切った様で、再び剣を構えてこちらに向かってこようとした。

（レーメ！もう一度いけるか！？）

（まかせろ！）

アーツの練習の最中に気づいたのだが、俺とリンクしているレーメもまた、やろうと思えばアーツを放てる事が判った。そして、俺が準発動段階までもっていったものをレーメが、レーメが準発動段階までもっていったものを俺が代わりに発動する事もできる。これは大きな収穫だった。言ってしまえば間髪入れずに二発放てるって事なんだから。

……最も、今のレーメは主に俺に対する補助にその大半の能力を割いているので、簡単なものしか使えないのだが。要するに俺が強くならないかんと言うわけだ。……頑張ろう。

「ってわけで！『ソウルブラー』！」

「クッ……『アイスバニッシャー』！」

まずい！

俺のアーツに合わせる様に発された、青ミニオンの言葉にドキリとする。

だが、その敵の魔法をバニッシュする効果を持った神剣魔法は、その能力を発揮することは無かった。

その結果に、「もしかして」と言う考えが浮かぶが、まさかこいつを使って実験をするわけにも行かないので、とりあえず頭の片隅に入れておく。

「……なっ！」

そして、敵の驚愕する声が聴こえた直後、それをかき消す様に先程と同じ、空間を震わす音が鳴り響いた後、ふらりとしてその場に膝を着くミニオン。

今！

再びオーブメントを介し、アーツの起動に集中し、

「『ブルーアセンション』！」

俺の言葉に応え、ミニオンの全身を水球が包む。そしてそれは周囲の大気から水分を吸収しつつも急速に圧縮され、その密度が臨界に達した瞬間、爆発を起こした。

そして後に残ったのは、地面に倒れ付し、粒子と化していく青ミニオンだった。

……終った、のか。

そう気を抜いた瞬間、それは聴こえてしまった。

「……死に……た……無……」

……それを聴いた瞬間、愕然とした。

そして思い知る。創られた存在のミニオンとはいえ、それでも相手もまた『生きて』いるんだって。そこにある『命』は、本当に現実なんだって事を。

ああそうか、初めて『人』を『殺した』んだな、俺は。

（……マスター……）

（ユウ……）

ナナシとレーメの気遣わしげな声が聴こえ、俺は一度深呼吸をすると、小さく頭を振った。

しっかりしろ、青道祐。これはお前が選んだ道だ！

（……うん、大丈夫。ただちょっと、思い知っただけだから）

その時、両頬を優しく撫でられる感触がして……姿を見せられなくても、俺の事を気遣ってくれる二人に、少し気が楽になった。

（……ありがとう、二人共。俺さ、なまじ前世の記憶なんてもん持ってるせいなのかな。きっと舐めてたんだと思う。ここは所詮ゲームの世界なんだって）

そう、所詮はゲームの世界。そして俺は元プレイヤーだから……だから大丈夫なんだって、根拠の無い自信。

（けど、思い知った。……いや、思い知らされたよ。敵を……殺すって言う事の重さを）

そう、この世界に産まれ、生きて、存在している以上、俺に……
いや、誰にとっても、この世界は紛れも無い『現実』なんだ。
きっと、今の相手がミニオンだったから、死体が残らないだけまだマシなんだろう。
今でも結構我慢してるんだが、これで殺した相手の死体が残っていたら、俺はきっとここに汚物を撒き散らしていたに違いない。
（……後悔していますか？転生した事を）
（……フィア？）
その時だった、箱舟の中に居るフィアの声が聴こえたのは。
それは酷く不安そうで、ひどく辛そうな声で。
（……恨みますか？こうなる原因を作った私を）
……全く、何を思いつめてるんだか。思わず、苦笑が漏れた。
（馬鹿、ソレに関しては、俺はお前に無茶言って十分お返しはされただろ。恨んでなんかいねーよ。
……それに、『マンガやゲームの世界に転生したい』なんて言ったのは俺だ。だから、こうなった原因は俺にある。フィアが気に病む必要なんてない）
（でも……）
（だから！）
それでも何かを言い募ろうとしたフィアの言葉を遮って、強く念話を飛ばしてやる。
（だから、ありがとう、フィア。
……それと……まぁ、こんな情けない奴だけど、これからも支えてくれると助かるよ）
そんな俺の言葉に返ってきた返事は、
（……はいっ！）
悪くない響きだったと、思っている。
……そんな事があったからまあ、気づかなかったんだ。“彼等”に。
「……青道君？」

そしてそんな声に慌てて振り向くと、そこには俺の事を驚いた顔で見ている神剣組の3人の姿があった。

…

……

……

＊＊ｓｉｄｅ：沙月＊＊

ものべーの外に現れた神剣反応――ミニオン――を迎撃するために出た私たちだったが、戦い始めてすぐ、レーメが叫び声を挙げた。

「ノゾム！サツキ！ノゾミ！ものべーの中に神剣反応だ！」

「なっ……！？」

ソレに対して望君が驚きの声を上げ、希美ちゃんがものべーに思念を飛ばす。

ミニオンに入られた？……それともまさか……

「青道君が？」

屋上での違和感を思い出し、思わずそんな事を口走ってしまった。

「それって、あの先輩のクラスメートの人ですよね。あの人が神剣使い？」

私の呟きを聞きとがめたのか、望君がそう訊いて来た。

「ううん、ふともしかしてって思っちゃっただけだから。

……屋上で会った時に、いやに落ち着いてたのが気になって……ね。ほら、暁君の前例もあったから」

私の言葉に、暁君の名が出たからか、少し暗くなる望君。

と、その時それまでものべーと念話で話していた――といっても、明確なお話が出来るわけではないらしいけど――希美ちゃんが、

「それなんですけど、先輩……中に入ったのは敵みたいで……」

「……って、まずいじゃない！？望君、希美ちゃん、ここ頼める！？私は中に――」
「落ち着いてください！ものべーが言うには、その敵をあの……青道先輩？……が、食い止めてるっぽいんです」
幸いここにいる敵は多くない。二人に任せて中に戻ろうとした私を呼び止めた希美ちゃんは、前述の通り、明確に話が出来るわけではないらしいからか、どことなくぎこちなく説明する。
ああもう、何かよくわからない事態になってる！
「とにかく！ここをさっさと片付けて戻るわよ！！」
「「はい！」」

そしてその場の敵はなんとか追い払う事が出来た私たちは、すぐにものべーの中に戻る。
そこで私は――信じられないものを見た。

そこに居たのは確かに青道君で。

だけど彼は、武器らしい武器も持たずに。

神剣魔法とも違う魔法で、ミニオンと渡り合っていた。

「……ケイロン、彼から神剣の反応はある？」
私はそう自分の神獣に問いかけるも、
『……今ある神剣反応は、あそこに居るミニオンからのみ、です』
返ってきた答えは、否。

やがて、私たちが呆然としている間に戦闘は終わり、後にはマナとなって消えたミニオンを、沈痛な面持ちで見ている青道君と――その彼を、戸惑いの目で見る、私たちだけが残されていた。

side out

永遠神剣之章：5．説明と、協力。

「さて、説明してもらえるかしら？」
あの後、問答無用で生徒会室まで連行された俺の目の前には、ジトーっと半眼で睨んで来る……ああ、不審と言うより怒ってるな、あれは。うん。怒りの生徒会長の姿があった。
「説明って言うと……神剣組が取りこぼしたのか侵入してきた敵を、不思議パワーでやっつけた？」
「そ、それは悪かったっていうか、感謝してるって言うかだけど！そう言うことじゃなくて！その不思議パワーがなんなのかと、なんでそう言うのがある事を黙ってたのかってことでしょーが！」
おいおい余り興奮するなよ。後ろの二人もビビッてるぞ？
内心そうツッコミつつ、うーんと唸る。一体どこまで話したもんだかね。
正直こいつらになら全部話しても……いや、やめておこう。普通に考えて信じられるようなものでもないしな。
「そうだな……さっきのをどこから見てたのかは知らないけど……」
言いながらオーブメントを起動、アーツを選択、範囲を固定。……集中。
「『ラ・ティア』……ま、簡単に言えば、よくゲームとかに出て来る魔法みたいなもんだわな」
光が俺たち四人を包み、先程の戦闘で付いた小さな傷などを治していく。
三人は一瞬警戒していたが、その効果に今度は驚きの目を俺に向けていた。
「あの……先輩も神剣使いなんですか？」
どこか期待するような目で訊いて来る永峰だったが、俺が首を横に振って否定すると、直ぐにがっかりしたような顔になった。
「残念ながら。まぁ、言わなかったのは、今の俺じゃ大して役に立

てないからってのがあるな。……どうせ話すなら、もうちょい形になってからって思ってたんだが」

「でも、さっきはミニオンを一人倒したじゃない？……って言うか、形になってからって言う事は、青道君がその力を使えるようになったのは最近なのね？」

そう言って来る斑鳩だが、俺はもう一度首を横に振った。ああいや、力を使える様になったのが最近ってのは当たってるが。って言うか口が滑った。

「違うよ、斑鳩。『ミニオンを一人倒した』じゃなく、『ミニオンを一人倒すのでやっとだった』だ。……さっきも言ったが、俺は神剣使いじゃない。身体能力的には一般人レベルと大差ないのさ。だからぶっちゃけ、複数でかかって来られたら、生き残る自信はないぞ。それと力が使える様になった時期は最近。詳しい事は……まあ、秘密にしておく」

そう言うと、あからさまに落胆した様子になる三人。

なんつーか、こうまでしょんぼりされるとなぁ……はぁ……まだ力不足で不安だけど、仕方ないか。

「……けどまぁ、一人ぐらいなら相手取れる事は確かだし、後方支援ならもう少し役にたてるだろうから……これからは俺も手伝わせてもらうよ」

「ホントに？人手は幾らでもほしいから、助かるわ。……お礼と言っては何だけど、神剣使いでも無いのにそんな魔法が使える理由とか、そんなあなたは一体何者なのかとかは今は訊かないでおいてあげる」

斑鳩はそう言うと、一度、静かに、しかし深く息を吐く。

「最後に、訊くわ。貴方は私達の……いえ、この学園の、味方なのよね？」

一言一言を区切る様、ひたと俺の目を見据えて言う斑鳩の表情は、俺の言葉の真贋を見極めてやる、と言っている様に見えて。

だから、俺もしっかりと彼女を見据え、言ってやる。

「当然だ。どこまで出来るかはわからないけど、俺も全力でここを守ると誓う」

そのまま、互いに目を逸らす事無く見つめていると、斑鳩は不意にふっと表情を緩めた。

「……信じてあげる。期待してるわ、魔法使いさん？」

魔法使い……ね。確かに、現状アーツ……魔法しか使えない俺には、ぴったりの呼び名かもな。

「……善処しよう、リーダー？」

「……そこは見栄でもいいから『まかせろ』とでも言いなさいよ」

「……出来ない事はしない主義なんだ」

そう軽口を言い合って、

「「――ぷっ……ははは！」」

同時に吹き出した。

……思っていたよりも早く首を突っ込んでしまったが……ま、なるようになるさ。

（……楽しそうですね、マスター）

（……まったくだ）

拗ねるなよ。

「ところで、これからって言うと……」

俺と斑鳩の会話がひと段落着くまで待っていたのだろう、永峰がそう声を掛けてきた。

それに対して、俺と斑鳩は顔を見合わせ、軽く頷きあう。……どうやら、考えている事は同じのようで。

だが、答えを先に言ったのは俺たちのどちらでもなく、

「もちろん、撃退あるのみ！今回は撤退に終わったが、今後は倒すべきだ。そうでなければこの場所が危険になる」

ちっこいのだった。それに対して斑鳩も「えっと……その通りね」と苦笑しながら言っている。

「ふむ。……ではなんにせよ、今後は油断せず、敵対する者に出遭

い次第、倒していく方向でいいな？」
「ええ、それでいきましょう」
その後は襲撃前に話していたらしい、見回り等の事を決めて解散になった。
……俺も当然の如く夜の見回りに組み込まれたのは言うまでも無い。

…
……
……

＊＊ｓｉｄｅ：沙月＊＊

青道君から事情を聴き――って言っても、詳しい事は何も訊けなかったんだけど――、私は彼を信じる事に決めた。
明確な根拠なんて無いけど……まあ強いて言うなら、この学園を守るって言ってた時の眼、と、あの時戦い終わった後の表情、かなぁ。
何よりも、無理に訊き出そうとして物別れに終わるのが一番まずいし。我ながら甘いとは思うけどね。
当の彼は、見回りの予定を立てた後、一人さっさとこの場を後にした。
去り際にぼそっと「まあ色々思う事もあるだろうし」って言ってた辺り、私たちが彼の事について何がしか話すであろう事を察したのだろう。
「よかったのか、サツキ？あんなにあっさり信じる事にして」
そうレーメが訊いてくるが、私は頷いてそれに返し、今自分でも思っていた、彼を信じることにした理由を述べる。

「……そうか。まぁサツキがそう言うのであれば、吾には異存はない」
「俺達も、青道先輩に会ったのは今日が初めてだし……先輩の判断を信じます」
そう言うのは望君。その隣に居る希美ちゃんも、うんうんと頷いている。
責任重大だなぁ、これは。
「うん、解った。……もしも何かあった時は、私が責任を持ちます」
……けどまぁ、なんとなく、大丈夫な気はしてるんだけどね。……って言うのは、楽観的すぎるかしら？

＊＊ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＊＊

永遠神剣之章：6．発見、戦闘。

初めての実戦のあったあの日から数日。彼女達の内心は解らないが、少なくとも表面上は良好に過ごしていた。
おれ自身もまあ……夜中に飛び起きたりうなされたりする以外は、概ね良好だ。
いや正直、“忘れない”のがこういう所に影響するとは。これも自分の甘さのツケだし、慣れるしかないのだろう。
それはともかく。
あれから毎日定期的に生徒会室に集まる事になった為、今朝も生徒会室を訪ねたところ、三人が等身大のスタンドミラーを見つめながら何か言っていた。
……ああ、とうとう事態が動く頃か。
「おはよう。……何してるんだ？」
「あ、お早うございます、青道先輩」
「お早うございます、先輩。これで遠くの景色が見れるんですよ」
「お早う……って望君？そんなアッサリ言ったらつまらないじゃない」
そんな三人の言葉を受けて、俺もどれどれと鏡を覗き込む。
……思ってたよりもはっきり見えるんだな。
なんて思っていると、世刻が何かを見つけたらしく、一点を注視し、
「……何だろう、あれ……煙？」
「本当……望君、あの煙の根元、映してみて」
「はい。……っ！」
そして、切り替わった場面を見た瞬間、俺達全員は言葉を失った。
そこにあったのは、一人の男と多くのミニオン達による……虐殺の現場だったからだ。
俺はそこで何が行われているかは解っていた。解ってはいたが…

…現実に見るその光景は、ひどく胸糞悪くなる光景だった。

その後、助けに行こうと主張する世刻と永峰だったが、斑鳩とレーメに止められていた。……まぁ、気持ちは判るが、確かに下手に動くべきでは無いんだよな。そのせいで敵にこちらの存在を知らしめる事にもなりうるし。

……最も、そんな警戒も意味はなかったが。

「む!?い、いかん!あやつ、こちらの目に気が付いてるぞ」

そんなレーメの言葉が、響いたからだ。

言われて見てみれば、確かに画面……鏡面?……画面でいいや。画面上の男は確りとこちらを睨みながら、周囲のミニオン達に何がしかの指示を出している。

敵だ、と言うのは解っていたことだが、素人の俺が画面越しにでも解る程に、明確な敵意を叩きつけてきやがる。

その声は聴こえないが、画面の向こうの男の指示に応え、複数のミニオンが動いたのが見えた。

「斑鳩、まずいぞ!奴らここに来るつもりだ!……いや、前のミニオンが奴らの仲間だったなら、もう近くまで来てるかもしれない!」

「っ!そうね、すぐに迎撃の準備を!」

それからすぐ、斑鳩が避難の為に校内放送を、永峰が避難誘導を行い、そして俺と世刻は……侵入して来るであろう敵を抑える為、外へと飛び出す。

「……っていうか実質あまり戦力にならん俺より、斑鳩か永峰がこっち来ればよかったんじゃねーのか!?」

「もう遅いです、先輩!」

外へ出た俺達の前方には、丁度敵が侵入してきたところだった。数は……うん、いっぱい。

とりあえず俺が向かう先には三人……複数なんて無理だって思うだろ?俺もそう思う。ぶっちゃけ怖い。でも世刻の向かう先には三倍以上居るしな……何というか、頭が下がる。俺も弱音吐いてらん

ねーよ！

　既にオーブメントは起動し、ここに来るまでに自身と世刻へ補助アーツも掛け終わり――掛けた時、流石に驚いていたが――、次のアーツも準発動段階まで持っていっている。さて……

（ナナシ！レーメ！行くぞ！）

（はい！）

（おう！）

「『プラズマウェイブ』！」

　固まっていた敵へ向かって連続した落雷が突き進み、それが、戦いの開始の合図となった。

…

……

……

（マスター、右です！）

「了解っと！『ソウルブラー』！」

「っ！『アイスバニッシャー』！！」

「無駄だっての！『シャドウスピア』！」

　この戦闘で疑問が確信に変ったが、どうやら時属性アーツはこちらの黒マナ魔法と似たような性質らしく、バニッシュ魔法が効かないようだ。

　気が付くと、世刻の方から何人かこちらに流れてきているようで、俺を囲もうとしてくる敵の攻撃を、避け、かわし、何とかいなして、逃げ回り、敵の一角にアーツをぶち当て、こじ開けた隙間から抜け出した。

　細かい……どころか、結構ざっくりした傷もいくつも付くが気にしている余裕も回復させる余裕も無い。……いや痛いけど！我なが

らよく生きてるもんだ。まぁ、ナナシとレーメのサポートのお陰なのは明白なんだけどな。

そこ、情けないとか言わない！もうじき補助アーツの効果が切れそうなんだよ！そうなりゃこちとら身体能力は一般人だ！

そういやこの乱戦の中、二人は怪我とかしてないだろうか。……正直、姿が見えないのがここまで不安だとは思わなかった。

（マスター、我々ならば大丈夫です）

（うむ。吾等のことを案じてくれるのは有りがたいが、己の事を第一にするのだぞ）

（……それならいいんだけどな。でもまぁ、気をつけろよ？）

何気にたまに思考が漏れている気がする。……まあいいか。

二人から「心配有難う御座います」と「任せておけ！」という返事を受け取った後、敵へと集中し直す。

「っと、『ダイヤモンドダスト』！」

俺を追って上手く固まったところに、範囲アーツを叩き込むと、敵の周囲の空気が瞬間的に冷やされ、凍りついて二人が粒子となって消えて行った。残りもどうせどうせすぐ動くだろうけど。

今日までの間にもういくつかクォーツが手に入り、その中に運良く機功２のクォーツがあった。ＥＰ――オーブメントに蓄積される、アーツに使用するエネルギーだ――を回復する効果をもったクォーツなので、ＥＰ切れの心配はないのが救いだ。

自身に補助アーツを掛け直し、そこでちらりと世刻の方を見ると、向こうはあと一人程にまで減っていた。流石に早いなおい。

と、そのとき、

「ノゾム！何体か逃げるぞ！」

と言う世刻のレーメの声が聴こえてきた。

周囲を見渡してみると、確かに走り去っていくミニオン達の姿。

それと、それを追いかけていく斑鳩と永峰の姿も。

「世刻、レーメ、あっちは斑鳩達が追った！こっちもさっさと片付けて追いかけるぞ！」

なんて偉そうに指示飛ばしてるけど、正直、俺ほとんど役になってないんですけどね。

「とりあえず『ラ・ティアラ』！」

まあそんな哀しい事実には眼を瞑り、中範囲回復アーツで世刻と自分の傷を癒し、凍結から脱した敵へと向かった。

永遠神剣之章：7．出逢い、黒衣の少女。

「お、居た居た……斑鳩、無事か？」
結局撤退していった敵に俺と世刻は追いつく事が出来なかったのだが、どうやら斑鳩と永峰で対処できた様で。
森の中で一息付いていたらしい斑鳩を見つけ、声を掛ける。
と、彼女は一瞬驚いた様子でバッとこちらに振り無くと、声を掛けたのが俺であることを認めたのであろう、息を吐いた。
「ええ、こっちは無事よ。青道君は……何と言うか、制服、ボロボロね？」
そう苦笑しながら言って来る斑鳩に、「しょうがねーだろ」と言いながら肩をすくめて返す。実際、最早制服の上着は結構無残な姿になっているけど、体の傷はアーツで直せても、服の傷はアーツで直せないのだから仕方が無い。
「替えの制服も数少なそうだしなぁ……どっかで服を調達するか、修繕するしかないだろうな……ったく」
「……修繕……できるの？」
「なんとも微妙なニュアンスで訊いてきやがる。それはあれか、裁縫できるの？って意味か？それとも修繕できるレベルの状態じゃないって意味か？」
「……」
眼を逸らしやがった。失礼な、これでも一人暮らしの苦学生やってたんだ。裁縫ぐらいできる。それなりに。
それに最近は“多才”スキルのせいか、家事が以前より上達していたりする。いやまあ元々人並み程度だったから、上達しているって言っても推して知るべしって程度だし。制服の状態もまあ、修繕できるようなレベルの損傷度じゃないんだが。
「……お前等のその戦闘時に鎧姿に変身する力が俺も欲しい。くそぅ、一瞬裸になるとかのサービスカットも無く行き成り鎧姿になり

やがって。いっそ敵の永遠神剣でも強奪してやろうか」
そうなのだ。斑鳩達神剣使いの連中は、戦闘時になるとバッと鎧姿になるのだ。詳しい原理は知らないが、恐らく神剣使いの肉体はマナで構成されているから、それを変換しているんだろうけど。
彼等は真剣のマスターになった時、既存の肉体からマナで構成された体になる……はず。ミニオン達が死ぬ時、光の粒子――マナの粒子となって消えていくのも同じ理由。体がマナで構成されているから。
「……あはは。と、ところで望君は？」」
そんな俺の不穏当な発言を苦笑でやり過ごした斑鳩は、世刻の姿が見えないのに気づいたのだろう、そう訊いて来た。
「世刻なら永峰のほうへ向かったよ」
「……むぅ。希美ちゃんが心配なのは解るんだけど……ちょっと寂しいわね」
あ、がっかりしてる。……愛されてるなぁ、世刻。
「……まぁ、斑鳩なら大丈夫だって信頼されてるってことだろ」
「うん、そう言う事にして……てっ！」
その時、斑鳩が途中で言葉を切ったかと思うと、突如森の奥の方へ振り向いた。
「多数の神剣反応……！まずいわ、急ぎましょう！」
「っ！ああ！」
そういって駆け出す斑鳩に続き、俺も駆け出す……って速えよ！
「ええいもう！『シルファリオン』！」
飛ぶように駆けて行く斑鳩を追いかけるのに、アーツで移動力強化しても着いていくのがやっととかもうね。
……
……
……

「ハァ……ハァ……はぁ……あーやっと追いついた……っていうかまた多いなおい」
森の中をすっとばす斑鳩を追いかけ、遅れること少し。ようやく追いついて三人と合流すると、そこには多数のミニオンがひしめいていた。
「遅いわよ、青道君」
「無茶言うな……こちとら魔法を使えるだけの一般人だ……」
「魔法を使える人は一般人って言わないんじゃ……」
「そこ、うるさい」
「えええ!?」
「……何か皆余裕あるな」
「うむ。頼もしいと言えばいいのか何と言えばいいのか……」
そんな緊張感の無い会話をしつつも、俺たちはそれぞれに戦闘態勢を整えていく。
俺達が臨戦態勢になるのに習うかのように、ミニオンたちもまた剣を構えだした。
「……せめて後一人ぐらい居ればな……」
そう言うのは世刻。まったくだ、俺もそう思う。早く来いカティマ。
……って言うか来るよな?来なかったらどうしよう。いやまあそこまで流れを改変する様な事はしてない……っていうか最早俺自身流れに呑まれてる様な気がするから、多分大丈夫だろうが。
「そうは言っても居ないものは仕方ないであろう?何、ユウも加わって四人。何とかなる」
「待てレーメ。接近戦に俺を数えるなと」
「それじゃ、皆、行くわよ!」
「ええい!俺の話を……」
聴け!と、無駄だと思いつつも突っ込もうとした時だった。

「むっ……待て！」
と言う世刻のレーメの言葉に、飛び出そうとした斑鳩の動きが止まる。
レーメは何かを感じるのか、目を閉じ集中している。
「来た！」
次いで出た言葉の直後に、敵の一角が後方から崩れ、一人の、黒の鎧に身を包み、大剣を持った金髪の少女が飛び込んで来た。
「貴方たち！大丈夫ですか！？」
「誰だ！？」
世刻の誰何の声に、少女はミニオン達への警戒はそのままに、言う。
「我が名はカティマ。カティマ＝アイギアスっ。異変を察して駆けつけました！
火急の事態ゆえ、まずはこの状況を打破しましょう！」
「助かる！皆、一気に行くぞ！」
そして俺の掛け声を合図に、皆は敵へと突撃した。……俺？後方支援ですが何か？前衛も増えたしね。
「『ラ・フォルテ』！」
（『ラ・ティアラ』！）
俺と、俺のレーメのアーツが続けて発動し、皆の攻撃力を炎の力で底上げし、傷ついた体を癒していく。
「デュアルエッジ！」
「インパルスブロウ！」
「リープチャージ！」
「血河の太刀！」
皆の様子を見ても、順調に敵を倒していくのが見える。
「……っと『スパイラルフレア』！」
「っ！有難う御座います！……ハァ！」

カティマの背後から切りかかろうとしていた敵に範囲アーツをぶち込み、礼を言ってきた彼女へ片手を挙げて返す。

いえいえ、礼を言うのはこっちですよ。うん。

……彼女の加勢のお陰で、どうやら問題なく行きそうだ。

ちなみに敵の撃破数でいうならば、カティマ＞斑鳩＞世刻＞永峰＞［越えられない壁］＞俺……である。

（……マスター、マスター今はサポートに徹しているのですから、撃破数にこだわる必要はありません）

（その通りだぞ、ユウ。それに、気づいているぞ？サポートに徹しながら、皆の体捌きを観察しているだろう？）

（……ばれたか。まぁ吸収できるもんはしとかないとな。それと、あー……うん、ありがとう）

慰められた。だがやはり俺の思考が読まれているような気がするのは……お約束ですね。うん。

…

……

……

その後どれほどの時間戦い続けていただろうか。最後に出てきたくそ強い白ミニオンを倒し終えた時には、辺りは既に茜色に染まっていた。

そこでようやく一息吐く事が出来た俺達は、助けに来た少女――カティマに話を聴く事が出来た。何でも彼女は、数日前にものべーが空に現れた所をバッチリ見ていたようで、そのお陰でここに来れたらしい。そのせいか、何故か俺達を『天使』などと呼ぶにいたった。……何でも、天空を裂きて現れしは、天よりの使い……みたいな、『天使』に関する伝承があるんだとか。

その後、カティマの計らいで彼女の住む村に招待してもらう事になったのだが……。その前に、何故か学園の皆＋カティマで写真を撮ることになった。……やれやれ。

言いだしっぺはまあ阿川なんだが。こんな状況なのに逞しいのな。

……いや、こんな状況だからこそ、か。

「……世刻、お前も入って来い。俺がシャッター切ってやるから」

「いや……でもですね」

「いいから行けって！……息抜ける時に抜いておかねーと、後々潰れるぞ？」

渋る世刻の背中を軽く蹴って押してやる。

あいつはただでさえ、永遠神剣と前世――この世界の神剣の担い手達の殆どは、かつて『神』と呼ばれた者の転生体だ――に振り回され、悩んでいたはずだしな。

世刻が入ったのを見て、シャッターを切ろうとして……気づいた。

自分の手が小刻みに震えてる事に。……世刻のやつには気づかれなかっただろうか？

先程までの戦闘が思い出されそうになり……頭を振って、止めた。

震えを無理やり押さえつけるように、声を出す。

「よーし！じゃ、行くぞー！……チーズっ！」

いつの日か、これも懐かしい思い出となる様、想いを篭めて。

それからは、カティマの村に行きたい希望者を調べたり、永峰がものべーの魂（ウィル）を分離させ、手のひらサイズのちびものべーを生み出したりと、やはり、何だかんだで騒がしい皆だった。

永遠神剣之章：8．置かれた現状、降した決断。

「……先輩、本当に良いんですか？」
そう質問して来たのは永峰だ。
まぁ、要は俺が村には行かず、学校に残ると言ったから出た問いなのだが。
……結局、カティマの村に行かない生徒達もいたわけで。椿先生が残るとは言っていたし、一応安全ではあろうと言う話ではあったのだが……。
「ああ。安全とは言っても、一応仮にも戦える者が残った方が、学校に残る生徒達も安心だろうしな。
……ま、気にせず行って来い」
そう言って皆を送り出し、俺もものべーの中に入る……と、椿先生が出迎えてくれていた。
「……青道君、本当に良かったの？」
「……先生、永峰と全く同じ事言ってますよ」
なんとも、気を使ってくれる。思わず苦笑が漏れた。……いや、ありがたいなーって思ってさ。
「曲がりなりにも戦える人間が居た方が、残ってる連中も多少は安心できるでしょう？」
それでもやはり申し訳なさそうな顔をする先生に、「まぁ、あいつらが戻るまで、俺も羽を伸ばさせてもらいますよ」と言うと、
「……そう、解ったわ。じゃあ、それまでゆっくりしてて」
と言ってくれた。……まあ、本当につかの間なんだけど。

……
……
……

深夜、外に出てグラウンドが見える位置に座り込み、空を見上げる。
知らない星座が輝き、月が地面を照らしていた。
……あの後、晩飯を無理やり詰め込んだは良いが、結局誰も居ないところで全て戻してしまった。……もったいない。

「……マスター、大丈夫ですか？」

しばしぼうっと空を眺めていると、不意にそんな声が耳元に響いた。
ふと肩を見ると、ナナシとレーメが姿を現していて。
……まあ夜中だし大丈夫かな、と思いつつも、二人を手に乗せ、体で隠すように前に持ってきて、膝の上に乗せる。
「……ん～……自分で思ってるより、結構キテルみたいだなー……戦ってる最中は目の前の事に精一杯だから大丈夫なんだけど」
言いながら、二人の頭を撫でる。……うん、いい手触り。癒される。
「……ん……まぁ、無理も無い。アーツと言う物が有ったとはいえ、言ってしまえば一般人が戦場の只中に突っ込んだようなものだ。吾としては、よくやったと思うぞ？」
「私も同意見です。あの状況では……端的に言えば、殺し合いの初心者であるマスターが、生き残った事自体、誉められる事です」
「……うん、二人とも、ありがとう」
「私も、そう思います。……ご主人様はもっと御自分を誇るべきですよ」
「……うん、フィアも、ありがとう……って」
返事をしてから気づいたが、念話じゃなくて声だった？
と思って首だけ振り返り後ろを見てみると、箱舟にいるはずのフ

ィアの姿が。
「……出てきたのか。っていうか出られたのか。誰かに見られなかったか？」
「大丈夫ですよー。抜かりはありません！それと、別にあそこに括られている訳ではないですから、出られますよー」
明日になって『真夜中に現れる謎のメイド！』なんて噂が立ったら……それはそれで面白いかもしれないが。
それから結構長い間、夜風に当たりながら四人でとりとめもない話をして過ごした。
その間も、やはり脳裏には戦いの光景が浮かぶのだけど。その度に察した三人が、それとなく気を使ってくれたりして。そんな三人の励ましに、さっきよりも心が軽くなるのを感じた。
……我ながら単純だとは思うけど……うん、悪くない。
「……ご主人様、どうかしましたか？」
「ん？」
「いえ、今笑ってましたから」
「……いや、辛い時に側にいてくれる人が居る俺は、幸せだなって思ってさ」
……ホント、悪くない。

と言う訳で翌日。朝一で戻ってきた斑鳩達に、昨夜カティマの村で有った出来事に対する説明と意見を聴きたいとの事で、体育館に全員が呼び出された。
そこで説明された、この世界の実情。
反乱により滅ぼされたアイギア王家。滅ぼしたダラバ＝ウーザと言う男――ものべーで遠見をしたあの時、村で虐殺を行っていた男だ――と、アイギア王家の生き残り達であるレジスタンス――カティマ達の戦い。

それに協力して欲しいと言われたと言う事。
そして、この世界より脱出しようにも、世界が意図的に、恐らくは神剣使い――ダラバ＝ウーザ――によって閉ざされている為に出られないという事。
そして学園の皆が降した決断は――戦うこと、だった。
ハッキリ言えば、ダラバによって世界が閉ざされ、やつを倒す意外にその原因を除けないのであれば、俺達には選択肢なんか無い。
でも。
それでもやはり、“流される”のと“自ら進む”のでは雲泥の差があって。
皆が、“戦う”と決断したのは、きっととても大きくて、きっととても凄い事なんだろう。

……
……
……

学園の決定をカティマに伝えに行ったところ、世刻が感極まった彼女に抱きつかれていた。羨ましいやつ。
「バーカ。望のバーカ」
おお、永峰が荒んでいる。いやまったく、愛されてるね、世刻。
とりあえず俺も便乗しておこう。
「世刻のバーカ」
「ちょっ！先輩まで！？」
ハハハ、モテる男の宿命だと思って諦めろ。

閑話休題（それはともかく）

その後、肝心のダラバの情報を貰い……どうやら、反乱を起こす

前は「アイギアの飛将」とも呼ばれた、老練の戦巧者ってやつらしい。しかも神剣の使い手としても有能。……強い神剣使いだってのは覚えていたが……いやはや、なんとも強敵だ。

そして改めてよろしく、と、それぞれがカティマと握手を交わすと、

「それと、もう一つ、俺達の仲間のことなんだ……」

と言う世刻に、斑鳩が続ける。

「私たちと手を組むってことは、非戦闘員である彼等も巻き込むことになるの。万が一の場合、彼等だけは逃がすから。そのつもりでいねて」

……ま、当然だな。戦えない連中を無駄に危険に晒すわけにはいかない。

それに対するカティマの答えは、

「わかっています。望むたちの大切な仲間です。私たちが命を張ってお守りします」

と言う、なんとも頼もしいものだった。

そして、事態は動く。

補給拠点、アズライールの陥落の報告。そして、それの奪還作戦の発動。それは偏に、ダラバ率いるグルン＝ドレアス帝国への宣戦布告に等しく……俺たちの、本格的な『戦争』の始まりだった。

永遠神剣之章：8．置かれた現状、降した決断。（後書き）

ストックが切れそうです。
ので、更新速度はきっとがくっと落ちます。
……切れるの早いなって？まあね！

永遠神剣之章：9．ちょっと待て、マジですか。

アズライールを奪還する為に挙兵する事が決まった後、ブリーフィングにて、その作戦の概要が説明された。

最終目標は言うまでもなく、パルター湖畔の街、アズライール。そしてそこに向かう道は二つ。シーズーの町を経由するか、ラダの町を経由するかだ。だが、そこでカティマがとんでもないことを言ってくれやがりました。

「……我々はこれよりアズライールに侵攻するのですが、そこへ向かう道はシーズーを通るかラダを通るかの二通りがあります」

広げられた地図を指し示しながら語るは、反乱軍の大将、クロムウェイ。カティマの側近だ。

側近が大将ってのも不思議なもんだが、ようはカティマは象徴みたいなもんなんだろう。確か彼女、アイギアのお姫様だし。

「報告によりますと、そのどちらにも鉾と兵士が配されているのですが……どうやら、比重としてはシーズーの方には鉾が多く、ラダの方には兵が多く配されているようなのです」

そこまでクロムウェイは言うと一度言葉を切り、そしてその後をカティマが続ける。ちなみに、鉾というのは、この世界におけるミニオンの呼び名だ。

「本来であれば、一刻も早くアズライールに着く為に、ラダを一点突破して行きたいのですが……シーズーをそのまま残すと言うのは、後顧の憂いを残す事になります。

下手をすれば、鉾の大部隊に後背を突かれる恐れもあります。

だからと言って、シーズーを落とすのならば、四人の神剣使い全員で向かわねば時間が掛かりすぎるでしょう。その場合、ラダには兵のみで向かわせる事になってしまいますが……ハッキリ申しますと、神剣使いでもない一般の兵では、少数と言っても鉾が相手では、

どれほどの犠牲がでるか想像も付かないのです」
……ああうん、何か展開が読めた。言いたい事は解る。解るんだが、なんというか、勘弁してくれ。
「……ですが、我々にはダラバの予想もつかない様な戦力が居ます」
この時点で、斑鳩は気づいたのだろう。カティマの顔を驚愕した顔で見ると、次いで俺の方へ顔を向けた。……こっち見んな。
そしてカティマ。それ以上言うな。
「……祐。ラダの町は、貴方にお任せしたい」
……ホント、勘弁してくれ。
……結局――その作戦で行く事になったのは、言うまでもない。
……貴方ならば可能だと信じています、とか真正面から言われたら、やるしかないだろうが。

…
……
……

＊＊ｓｉｄｅ：カティマ＊＊

「……先輩、大丈夫かなぁ……？」
シーズーの町へ向かう道すがら、希美のそのような呟きが聴こえてきました。
「ラダに居る鉾の数はそう多くは無いと報告を受けています。彼程の戦士であれば問題はないでしょう？」
私がそう言うと、三人はきょとんとしたあと、顔を見合わせます。
……私、何か変な事を言ったでしょうか？
「ねえカティマ、青道君ほどの戦士って……なんでそう思ったわけ？」

何を異な事を。
確かに神剣は持っていないと聴きましたが、にも関わらず魔法を使え、鉾を相手取る事ができる上、出会った時にあれほどの激戦の只中に居たのです。さぞ有能な戦士なのではないでしょうか。
そう思っていた事を告げると、三人はもう一度見合わせ……
沙月殿から衝撃的な言葉が返ってきました。
「……あのね、カティマ？青道君は、確かに魔法は使えるけど、前に、魔法が使える様になったのはつい最近だって聴いたし、身体能力的には一般人と変わらないはずよ？
ちなみに、あの時の戦いの事を後で訊いたら、『正直いっぱいいっぱいだった。途中で強化魔法が切れた時は死ぬかと思った』って言ってたわ」
そして、その沙月殿の言葉に続くように、望が口を開きました。
「……あの時戦闘が終わった後、写真とっただろ？……先輩がシャッター代わってくれた時に気づいちゃったんだけど、あの時先輩、震えてた」
「それって……」
「うん、多分、先輩も怖かったんじゃないかと思う。……なんか、生身で魔法なんて物が使えて、いつも飄々とした雰囲気だから解り難いけど……考えてみれば、先輩だってついこの前までは普通に学生してたんだとしたら……殺し合いなんてあれが始めてなんだろうし、当然なんだよな、怖いのなんて」
……私は、もしかしたらとんでもない事を頼んでしまったのではないでしょうか？
ですが、そこでふと疑問が湧きました。では、なぜ……
「……なぜ、皆はそんなに落ち着いていられるのですか？今の話を聴くと……その、私はとても大変な事を祐に頼んでしまったと思うのですが？」
そんな私の疑問に、三人は再度、顔を見合わせ、
「まぁ、その為にも彼には助っ人をつけたし。それにそうね……彼、

本当に出来ない事はハッキリ『できない』って言うだろうし……」
「そうだな。……俺も希美も、青道先輩との付き合いは短いけど……」
「うん、先輩が『やってやる』って言ってた以上、やってくれるって思います」
……そうですよね。一度『信じる』と言って私が頼んだのです。
その私が信じなくてどうすると言うのか。
よし！アズライールで合流したときに良い報告が出来るよう、こちらも頑張りましょう。

＊＊ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＊＊

永遠神剣之章：１０．ラダ、そしてアズライールへ。

ラダを目指し進軍する俺の周囲には、背丈の半分ほどの物体が５つ程浮かんでいる。

……いや、この言い方は失礼か。“彼女たち”は、俺の頼もしい味方なのだから。

鎧のような物でその身を包んだ、俺の背丈の半分程のクリスタル。そのクリスタルの中に入っているのが、今回のラダ&アズライール攻略に関して、俺と共に戦ってくれるクリスト族の少女達だ。

かつて彼女達が住んでいた世界が滅びに瀕した時、斑鳩によって救われた、クリスト族の最後の生き残り達。

彼女達は特殊な波長のマナの中でしか生きられず、普段は今の様にクリスタルの中に入っていなければいけないらしい。

それはともかく。

「あー……君たち……そんなに密着されると歩きにくいんだが」

どう言う意味だって？言葉通りの意味さ。

なぜか彼女等、俺にほぼ密着するかの様に集まってきている。……正直歩きにくいし、姿を消してるナナシとレーメが潰されないかと不安でもある。

本来であれば、見目麗しい美少女達に密着されるなど、嬉しい悲鳴になるのだろう、が。……何度も言うが、彼女達が、鎧に包まれたクリスタルの中に入ってさえいなければ、だ。

戸に角も、俺の言葉に慌てた様にパッと離れる彼女達。

「申し訳ありません、祐さん。……その、何故か貴方の身体に、凄く清浄なマナの残滓が有った物で……」

そう言うのは、彼女達のリーダー的存在である、白のクリスト・ミゥ。

（……俺の身体に残ってる清浄なマナって？）

そんなものがあるのか？とナナシとレーメに訊いてみると、意外

な答えが返ってきた。
（恐らくは、箱舟内のマナではないかと）
（箱舟の？）
（……うむ。あれは仮にも神であるフィアが作った上に、それの維持管理も彼女が行い、その上彼女が常駐しておる。……言ってしまえば、あそこは神域のような物になっているのだろう）
「……なるほどねぇ……」
っと、つい声に漏れた。
それが耳に入ったのか、丁度俺の正面を飛んでいた青のクリスト・ルゥがこちらを向く。
「ふむ……なるほど、と言う事は、その清浄なマナの残滓に心当たりがあるのかな？……うん、差し出がましいようなのだが、よろしければ今度我々をその場所へ連れて行ってくれないだろうか？
正直言うと、きみの身体に残っていたマナは我々にとっては非常に心地が良い」
そんなルゥの言葉に同意するかのように、他のクリスト達もこちらを向いた。
……何と言うか、鎧で見えないんだが、じっと見られているのは感じます。はい。
――結局、いつか必ず案内するってことで、この場は勘弁してもらった。プレッシャーに負けました。はい。
ああ、もちろんそう言う場所があるって事は秘密にしてもらうが。

…

……

……

「……っ！来たぞ、敵だ！」

ラダへ向けて進む事しばし、道の向こうから哨戒中であろう鉾達が見えた。
敵は三人の小隊規模。一気に畳み掛ける！
「逃がしてこちらの事を知られるのは厄介だ。一気に行くぞ！」
周囲のクリストたちへと呼びかける。……さて、彼女たちと上手くやれるだろうか？
「……ま、やってみないとわからないってか！『ラ・フォルテ』！」
アーツでクリスト達の攻撃力を上げると、次のアーツの準備をしつつ、敵に向かって駆ける。
接近戦はしたくないが、敵をここに引き止めるためにも、注意をこちらに向ける必要があるのだ。
敵は俺達に気づいたのか、臨戦態勢を整えるのが見えた。……どうやら、こちらが神剣使いでは無いからか、援軍を呼ぶつもりは無いらしい。
「……燃え盛れ。『ファイアボルト』」
「やらせない！『アイスバニッシャー』！」
迫る俺に敵が神剣魔法を撃とうとするが、ルゥが即座に打ち消し、その間に俺は敵に肉薄した。
その間にレーメによって時間加速（クロックアップ改）と風の防壁（シルフェンガード）は掛けられている。というか掛かっていないと俺が死ぬ。
間近まで迫った俺に対して、その手にした武器で切り捨てようと鉾たちが殺到するが、俺はそれを避けながら敵が上手くまとまるよう動いていく。
脳裏に描くは、カティマや斑鳩の洗練された動き。それらを分解し、組み直し、俺なりの動きへとアレンジしていく。
「くらえっ『ダイヤモンドダスト』！」
そして敵が何とかまとまったところで、他の敵を青ミニオンとの間に挟んで壁にしつつ、アーツを叩き込んだ。
アイスバニッシャー対策に、アーツを発動させるタイミングを隠してみたわけだが……うん、素人の付け焼刃でも何とかなるもんだ。

そしてアーツにより巻き起こされた猛烈な凍気に、二人の鉾が凍結した。これでしばらくは動けまい。
「祐さん下がって！『イミネントウォーヘッド』！」
「……っ！」
そこに突き刺さる、緑のクリスト・ポゥの攻撃。岩を操り敵にぶつけ、その瞬間に爆砕する。そしてその土煙に紛れ、敵の目の前へと転移した黒のクリスト・ゼゥが、闇の羽で斬撃を浴びせる。
この瞬間不利を悟ったか、凍結しなかった鉾が撤退しようとするが、
「逃がしません！」
「えーい！『ファイアボルト』！」
ミゥが強烈な閃光と衝撃によってそれを阻止し、赤のクリスト・ワゥが神剣魔法を浴びせた。
「……多勢に無勢で悪いな。『スパイラルフレア』！」
そして止めに俺の範囲アーツ。幾条もの白熱した炎の矢が降り注ぎ、三人の鉾はマナの霧となって消えていった。
「ふむ……神剣も無しに不思議な魔法を使い敵と戦うと、沙月に聴いた時は信じられなかったのだが……強いのだな、祐は」
そう言ってきたのはルゥ。と、気が付くと他の皆も集まって来ていた。
俺は彼女達へ、頭を振って返す。
「強く無いよ、俺は。実際今最後にまとめて倒せたのも、皆が先にダメージを与えてくれていたからだしな。
だから皆の協力が必要だし、皆が居てくれて助かってる。……ありがとう」
そう、事実俺は弱い。
今戦えているのも相手がミニオンだからで、この先現れるであろう敵の神剣使いとは、まともに戦えるとは思えない。……今のままでは。
……と言っても、急激に強くなる術など無い以上、地道に力を付

けていくしかないのだけど。
「それはこちらこそ、です。祐さん。……どこまでご一緒に戦えるかは判りませんが、改めて宜しくお願いしますね」
俺の言葉に、ミゥが五人を代表するように言い、俺達は再びラダを目指した。

……

……

……

その後、ラダを守っていた鉾達へ奇襲を掛ける事に成功し――恐らく、哨戒していた敵を殲滅する事が出来たのが、功を奏したのだろう――、若干危ない部分もあったが……いや、危なかったのは俺なんだがな。思っていたよりもあっさりとラダを落とす事が出来た。
シーズー方面の本隊へラダを落とした報告の伝令を飛ばし、小休止を挟むと、アズライールへ向けて進軍を開始する。
そして、アズライール近郊へ着いたとき、森の中から戦闘音が聞こえてきた。
それを聴いた俺達は、すぐにその音の方へと向かって走り出す。
恐らくは斑鳩達であろうからだ。
（ナナシ、レーメ、折角だからでかいの一発、やってみようか）
（……オーブメントの状態オールグリーン。……何が折角なのか解りませんが、行けます）
（こちらも行けるぞ。だが、あまり調子に乗りすぎないようにな）
（りょーかい……っと）
折角だから、今使えるものの中でも最も集中時間のかかるやつでもやってみよう。
オーブメントの制御をナナシに任せ、レーメのサポートを受けな

がらアーツのために集中を高めつつ、森の中をクリスト達と駆ける事しばし――アーツの方に気を取られて、途中何度か転びそうになった。……気を付けよう――多数の鉾と対峙する斑鳩達の姿が眼に入った。

やはり数の暴力と言うものは馬鹿にできないらしい。少々苦戦しているようだ。

「よう、無事か？」

そう言いつつ俺は彼等の横に飛び出し、並びつつも、発動寸前まで持っていったアーツを解き放つ。

その間、突如飛び出した俺達へ神剣魔法が放たれたりもしたが、それらはルゥが打ち消したり、ワゥが魔法防御の高さを生かして防いでくれた。有りがたい。

「まぁとりあえず……喰らっとけ！『コキュートス』！！」

次の瞬間、周囲の気温が急激に下がり、敵の足元から巨大な氷柱が飛び出し、貫き、凍りつかせ、砕け散る。

水属性の全範囲攻撃アーツだ。さすがに現実的に全範囲なんて訳にはいかないが、それでもこの場にいる鉾の、俺が認識できる全てを範囲に収める事は出来、恐らく、斑鳩達との戦闘で弱っていたのであろう、四割程の敵が粒子となって消えていき、二割程が氷付けになった。

撃った瞬間、いくつかアイスバニッシャーの声も聴こえて焦ったのだが……まあ、打ち消されなかったところを見ると、コキュートスの威力がバニッシュ可能な威力を超えていたのだろう。

「っ！今っ！！」

そしてその瞬間を逃さず、斑鳩の号令と共に敵へ突貫する神剣組み。

いや、俺が飛び込出してアーツぶっ放して敵の戦列が崩れるまで、大して間があったわけじゃないんだが……流石の判断の良さだなぁ。

そんな彼女達を、アーツを放った位置から眺めていると、

「……祐さんは行かないのですか？」

そうポゥが訊いてくるが、俺は首を横に振った。
「疲れた。見てる」
「ふぇ？」
だってまぁ、一応記憶が戻ってからトレーニングは欠かしていないし、水耀珠のクォーツで底上げされているとはいえ、体力的には一般人とそう変わらんのだよ。
正直、森の中を駆けて来たので結構イッパイです。足場が悪い所を走るのは、思っていた以上に体力を削られるんだ。顔には出さないようにしてるけどね。
……てなことを、まぁ記憶の事とか細かい事は除いたが、説明したら納得してもらえた。
いやまあ、周囲の警戒と、いざとなったら放つアーツの用意ぐらいはしてるけどな。
ちなみにポゥが「疲れが取れるかは解りませんけど」と言いつつアースプライヤーをかけてくれた。良い娘だ。

永遠神剣之章：１０．ラダ、そしてアズライールへ。（後書き）

精霊天翔は全然やれていないため、クリスト達の口調に関しては大目に見てくださいな。

永遠神剣之章：11．アズライール、その結末。

「……何だかんだ言いつつ結局戦うんですね」
「ははは。アースプライヤーもらっちゃったしなー」
そんなポゥの感想はさておき、この場の敵は殲滅する事に成功したわけで。
ああ、結局俺も動きましたよ。
いやまあ、皆が頑張ってるのに、一人だけ動かないのもね。
「おう、お疲れー」
敵を殲滅し終わり、俺の所に集まってきた皆を出迎える。
「うん、お疲れ様……って、まだ終わったわけじゃないけどね」
「……だな、後はアズライールだけか」
「そうですね。ですがアズライールに配置されていた鉾のほとんどは今の戦闘に出ていたと思われますから……残るアズライール自体は油断さえしなければ問題はないかと」
「……じゃあ、さっさと片付けようか」
世刻の言葉に俺達は頷き合い、アズライールへ向けて進みだした。

「……それにしても……そんなに時間も経ってないはずなのに、すっかりクリストの皆と仲良くなったのね？」
「あー……まーなー」
と言うのも、クリストたちが俺の周りを固める様に飛んでいるからなのだが。
それもこれも、ラダ攻略戦の時に俺がゼゥを庇って若干大きめの傷を負ってからなんだが。……まあ、庇えたのは良いが、傷を負ったのは俺が未熟だったからに他ならんし、ナナシとレーメにも思い切り心配かけちまったな。……慌てた余り、二人がクリストの皆の前に姿を見せてしまったぐらいに。

クリスト達にはある程度の事情を話し、ナナシとレーメの事は黙っていてもらうことにした。その代わり、正式に箱舟に招待させてもらう事にしたが。ああ、傷はさっさと治した。痕も残ってないぜ。

そんな中、そのゼゥがぽつりと言う。

「借りと……約束がある」

「約束？」

「うん。……だから守る」

「……約束ってどんな？」

「……秘密」

そんな様子に、斑鳩は苦笑をもらしていた。

「いやほんと、仲良くなったわねー」

「……まーなー……」

約束って、やっぱり箱舟に案内することだよなー。……そんなに楽しみなのか。

そうこうしているうちに、俺達の前にアズライールの町が現れる。それと当然の毎く、その前に展開している鉾達も、だが。

こちらが敵の姿を認めた様に、敵も又こちらの姿を認めたのだろう、互いに臨戦体制を整えて行く。

俺も前衛組みに補助アーツを掛け、そして同時にそれが戦闘開始の合図となった。

…

……

……

戦闘自体は始終俺達の優位に進み、敵を殲滅する事に成功した俺達はアズライールへと入る。

そしてそこで俺が見たものは……戦争と言う名の、虐殺の痕。
そこに生きるモノは無く、そこに在るのは、切り裂かれ、押しつぶされ、ナカミをばら撒き、乱雑に放置されたナニカ。
そこに在るのは、“かつて人であったもの”のみ。
遺体のほぼ全ては眼を覆いたくなる様な状態で。俺は、込み上げて来る吐き気を堪えるので精一杯になっていた。
そう、俺の目の前に在るのは、老若男女問わず……正に老人も赤子も、町人も兵士にも関わらず皆殺しにされた、“かつて町であったもの”だった。

脳裏にギシリ、と音が走る。

ああそうだ。アズライールと聴いてなぜ思い出せなかったのか。

この展開を、惨状を、思い出せていれば、もっと急いでここにくることができていれば、ひとりでもスクウコトガデキタノデハナイノカ。

（マスター！！）
（ユウ！！）
「！！」
ガンッと頭に響く思念で我に返る。眼を閉じて、息を吐き、頭を振って、心を取り戻す。
負の感情に呑まれるな。受け止めろ。思い上がるな。全てを一人で背負える程に、俺は強くは無い。
（すまん……大丈夫だ。ありがとう）
二人に礼を言って、もう一度しっかりとこの光景を見据える。
周囲には、悲哀の篭ったカティマの雄叫びが――そう、それはまさに雄叫びとしか形容できない、声が、響いていた。

その後、精神的にピークに達したのか、それとも張り詰めていたものが切れてしまったのか、そのまま気を失ってしまったカティマをものべーに運び、保健室に寝かせた。

俺達も遺体の火葬を手伝った後、カティマの様子見もかねて保健室で休憩する事になった。尤も、俺は夜風に当たりたかったために、カティマの事は他の皆に任せ、一人屋上に出たが。

状況が状況なだけにか、この時間にはもう屋上に人は居なく、俺はその場にごろりと横になる。

ヒヤリ、とした地面の感覚と、涼しげな夜の風が心地良く。眼を閉じて、大きく息を吸い、大きく息を吐く。それを幾度か繰り返していると、昼間の戦いの疲れが和らぐような気がする。

っと、不意に腹の上に重みを感じ、首だけを向けてみてみると、ナナシとレーメが姿を現し、乗っていた。……と言うか、ナナシは座り込んでいるだけだが、レーメは既に俺の腹の上にうつ伏せに寝転がっている。いやまあ良いんだけど。暖かいし。

とりあえず、地面に投げ出していた手を、二人の頭へもっていき、左右の手でそれぞれ撫でた。

うん、やっぱり良い手触り。癒される。

さて、これからどうなるのだったか。

今頃保健室では、斑鳩達にカティマが自分の事を話しているだろう。

自分が王族の生き残りであること、王位継承には神剣の他に、継承の証が必要であること……そうだ、証だ。

確かこの後、それを求めにカティマが一人で抜け出すのではなかったか？

そして彼女に追いつくタイミングは、道中の街が鉾に襲われ、彼女が敵に囲まれているとき。

どうするべきか。

彼女が一人で行動するのを止めた場合、最悪なのは、本来であれ

ば彼女と合流する街が、鉾によって壊滅させられる恐れがあること。
問題はなぜ敵がこのタイミングで、その街を襲ったのか、だ。
……思い出せ。
……思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ！
……っ！……確か……ものべーで近づく斑鳩達を迎撃するため、鉾を配し、カティマを追い詰めるため、更に街を襲わせた……だったか？
ゲームで世刻らが間に合ったのは、カティマが一人で鉾を食い止めていたからだ。
……あー、くそっ！だったら、カティマが俺達と供に行った場合、街はアズライールの二の舞になる可能性が高いじゃねーか！
時間は無い……どうする……？

「ユウ」

不意に俺を呼ぶ声が聞こえ、思考に埋没していた意識をその声の主――レーメへと向けると、彼女は起き上がり、俺をひたと見つめていた。

「ユウは、どうしたい？」

今、それを悩んでいる……いや違うな、これはそんな問いじゃない。
そう、俺は今、どうしたいのか？
……ああそうか。

「……俺は、アズライールの二の舞を防ぎたい」

例えアレが決められていた運命だとしても。敷かれたレールの行く末の結果だったとしても。

俺はアレを防ぎたかった。

「……では、このままカティマの行動を放っておいても問題はありませんね？“原作”とは多少のズレがあるでしょうが……八割がた、上手くいくでしょう」

……ナナシもか。

……ああ、そうだな。もう解ってる。

「でも、ここは“原作”じゃない、“現実”だ。どうなるかなんて解らない。最悪……カティマが死ぬかもしれない」

「ふむ。……ふふふっ。その顔は、これ以上は吾等から何も言う必要はなさそうだな？」

……ったく。

……そうだな、覚悟を決めるか。

「……ありがとう、二人とも」

何の覚悟かって？……そりゃもちろん、あとで斑鳩辺りにガッツリ怒られる覚悟さ。

永遠神剣之章：１１．アズライール、その結末。（後書き）

さて、今回で本当にストックが（ｒｙ
なので、今後はまったりペースになります。まったり。

永遠神剣之章：１２．束の間の、休息。

現在俺は、一人抜け出して証を取りに出たカティマを追跡中である。

あれから、アズライールに駐屯している軍の近くでカティマが来るのを張り込み、皆が寝静まった頃、案の定彼女がこっそりと抜け出したのを確認したわけで。

カティマが先行せねば次の街を救えないのであれば、そうなるように……いや、それ以上にカティマを手助け出来る様に、彼女の後を追うことを決めた。

この後、彼女が食い止める事になる時は、尋常ではない数を相手にする事になったはず。そう、それこそ“死”を覚悟するほどの。

俺にどれだけの事が出来るかは解らないが……まぁ、居ないよりはましだろう。

斑鳩達のうち誰かについてきてもらう事も考えたが……この後カティマを追って来てもらうことを考えると、向こうの人員を減らすわけにはいかない。

尚、カティマと供に行かずに彼女の後をつけることにしたのは、俺が一緒に行く事で彼女の足が鈍り、街が襲われる時に間に合わなくならないように、だ。……心配しすぎかもしれないけど、一応な。

「……と、まあ、こんな感じの事があって今俺はここに居るわけだ」

そう……いや、もっとある程度ぼかす感じにではあるが、俺はそういった説明を隣にいるルゥにした。

うんそうなんだ。

何というか……こっそり抜け出したカティマをこっそり追う俺をこっそりつけるルゥ……って図式が成立していたらしい。いつの間にか。

いったいいつから？と問う俺に、「小腹が空いたので食料を（厨房に）調達に出たところ、ものべーからこっそり出ていこうとしている祐の姿が見えたので、追ってみたのだ」……と、いたずらに成功したかのように、楽しそうに言われてしまったよ。

「まぁそんなわけだから、下手をすりゃ死ぬ可能性がかなり高くなる。戻った方がいいぞ？」

「……はぁ、まったく……見くびらないでもらいたいな。

“死ぬ可能性が高い”……その程度の事で、仲間を見捨てるような人間ではないつもりなのだが？」

「――くっ……はは っ」

ルゥに言われた事で、思わず、笑いが漏れた。

「む……何が可笑しいのか、聴かせていただきたいのだが」

「ん？あ、違う違う！」

突如笑った俺に対し、少しむっとしたルゥが問い詰めて来たので慌てて否定する。

うん、別に彼女の言葉が可笑しかったわけじゃないんだ。

「いや……自分の馬鹿さ加減が可笑しくてさ」

「……どういうことかな？」

「……あの時――アズライールで、俺は俺の弱さを自覚した。少しずつでも、もっと強くならねばと決意した。全てを一人で背負える程に、俺の背中は広くは無いと戒めた。……はずだったんだけどな」

はぁっと息を一つついて、顔を挟み込むように、両手で軽く自分の頬を張る。

パンッと乾いた音が鳴り、次いで、俺はルゥに頭を下げた。

「すまん、危険なのは重々承知してるんだが……助けて欲しい」

「……ふふっ……了解した。私の力の及ぶ限り、きみを守ると誓おう」

「ありがとう。頼りにしてるよ」

「……ユウ、そこは見栄でも『自分が守る』ぐらい言って欲しいものなのだぞ？」

と、その時それまで黙って俺達のやり取りを聞いていたレーメが言ってきた。

いやまあ、俺もそう自身をもって言いたいのは山々なんだが……善処します。はい。

その後、俺たちはアズラ大平原に沿うように存在する森の中を進みつつ、その先にあるアズラサーセの街を目指す。

街の名前は道中会った旅の商人に訊いた。街の名前を聴いて思い出したが、そこがカティマとの合流地点で間違いないだろう。

彼女を追っている、とは言っても、彼女の姿を視界に収めている訳ではないが、目指すべき場所が判っているので問題はない。少々急ぎ気味の、わずかな日程の旅ではあったが、こうした野宿をするような所謂旅らしい旅と言うのは新鮮だった。

道中は、ルゥが二人の事を既に知っている為、ナナシもレーメも姿を現しており、フィアも時折箱舟から出て来たり、箱舟内でルゥが結晶体――彼女達が普段入っているクリスタルの事だ――から出ても平気か試したりと、色々と普段とは違う事をしていたのも、新鮮さの一因だろう。

ああ、ちなみにルゥは、箱舟内での生身での活動に問題は無いようだ。逆に「ずっと居たいぐらいに心地が良い」って言ってたぐらいだしな。むしろ、一人だけ先に体験してしまって、ほかの皆に申し訳ない、とのこと。

……そこまで言って貰えると、こちらとしても嬉しいもので。まぁ、フィアのお陰なんだが。

何より驚いたのは、結晶体から出たルゥの姿が、俺の胸ぐらいの背丈まで大きくなったことだ。

彼女達が入っている結晶体。これの特質として、その結晶体のサイズに合わせて、入れるモノの大きさを変えるのだとか。

何でも、かつて彼女達の故郷である煌玉の世界を巡る戦いの折に

使われた、対象を小さくして捕獲する、捕獲用のアイテムを参考に創られているのだとか。

それを聴いて、詳しくは知らない『精霊天翔』の中に、そんなアイテムがあったことを思い出した。……世界は繋がって居る、か。

結晶体に入っていない、生の彼女を見るのは初めてな上、俺と差ほど背の変わらない姿で改めて見た彼女は、うん、綺麗だった。皆と合流したら、他のクリスト達も招待しよう。是非。

……なんて事を考えていたら、ナナシとレーメに頬を抓られた。痛い。

それはともかく。普段神剣魔法を使ってる事から解るように、彼女達も本来は永遠神剣の使い手だ。

ちなみにルゥの永遠神剣は、第八位『夢氷（むひょう）』。彼女の身の丈ほども有る、大剣型の永遠神剣。

現在は結晶体に入っていなければ戦闘に出る事もままならない為に、永遠神剣自体を戦闘に用いる事はできないそうだけど。

その話を聴いたとき思ったのはただ一つ、「もったいない」だった訳で。

で、ふと思った訳だ。この箱舟のマナを利用できないかと。

「なぁフィア。ペンダントとかに出来るサイズぐらいの物と、箱舟の空間をつなげる事ってできないのか？」

「繋げる……と言うと、箱舟本体に接触しなくてもここに来れる様に、と言うことですか？」

「いや、箱舟からペンダントへの一方通行でいいから、マナを通せないかな、と」

「……なるほど。そう言うことですか。……そうですね、材料さえあれば可能だと思いますよ」

……何でも訊いてみるもんだ。

フィアが言うには、必要となる材料は、この箱舟の外郭に使われている鉱石と同じもの。

この箱舟、外から見ると、水晶のようなものの中に屋敷や庭のミニチュアが入っている……と言った見た目なわけで、様はその“水晶のようなもの”が必要なのだそうだ。

だが残念ながら、この世界には無い謎物質で出来ているようで…まあ無いものは仕方が無い。と言うわけで、この話はお預けになった。

もしかしたら、アルケミーストーンで生成される可能性はある…との事なので、手に入る様ならやってみようと思う。

ちなみにあのアルケミーストーン。どうやらあれは、魔力を通す者の意思によって、ある程度生成される鉱石や宝石の傾向を偏らせる事ができるようだ。

あれの仕組みは、錬金術（アルケミーストーン）の石の名の通り、通した魔力を鉱石や宝石に『錬金』して生成されるらしい。

つまり、最初に俺が魔力を通した時にクォーツが出たのも、全くの偶然って訳でもないようである。

要するに、漠然とでも『戦う力が欲しい』と思っていた俺が魔力を通したため、石がその意を汲んで、俺の魔力をセピスに錬金し、そのセピスがさらに錬金され、クォーツになった、と言う事だ。いや全く、石の癖に粋な計らいをしてくれる。

そんなわけで、今後アルケミーストーンに魔力を通すときは、箱舟の外郭と同じ物質が欲しいと念じながらやれば、それが出てくる確率も上がるのではないだろうか、と言うことだ。

まあそんな紆余曲折を経て、俺達はアズラサーセへと到着した。

カティマは既にここに着いているだろう。

道中、鉾の動きが活発化してきた事を感じるに辺り、どうやら斑鳩達もこちらに向かってきてくれているようだ。

時機に鉾の大軍もやってくるだろう。無事にここまで来れた以上、

カティマの後を追う必要も無い。さっさと合流すべきだ。
そう結論付けた俺達は、敵が攻めに、そしてカティマが迎撃に来るであろう北門へと向かった。

「ルゥ、俺の背中、キミに預ける」
「……ふふっ、承知した。ならば私の背中は、祐に預けよう」

気合を入れろ。
ここからが、正念場だ。

永遠神剣之章：１２．束の間の、休息。（後書き）

・結晶体入りのクリストが成人男性の半分程の大きさ
・結晶体の元は透徹城
・その他、クリストに関する設定

上記は永久なるかな独自の設定のため、精霊天翔とは齟齬があるかもしれません。

永遠神剣之章：１３．沙月と、カティマ。

＊＊ｓｉｄｅ：沙月＊＊

カティマの身の上話等を聴いた翌日。その日は朝から慌しかった。
その原因は、私たちの元を訪れた、クロムウェイ達。彼らの口から飛び出した言葉は、思ってもみないことだった。

――カティマが消えた。

恐らくは昨日言っていた、王位継承のために必要な、もう一つの『証』を取りに行ったのではないかと言うこと。
それを受けて今後の事を話し合うべく、主要メンバーを生徒会室に集めたのだけど……。
「青道君はどこ行ったのよ！」
そう、彼がどこにも居ないのだ。
こんな大事な時に、と声を荒げてしまった時だった。
「あの、先輩、これ」
青道君の部屋を調べた望君が差し出してきた、『斑鳩へ』と書かれた折りたたまれた紙。
うん、すごく、嫌な予感がするわ。
私はそれを受け取り、そっと開いて……そこに書かれた文字を見た瞬間、

「あ、の、馬鹿ーー！！」

思わず、叫んでいた。

「……あはは……」

私がつい机に叩き付けた書置きを拾って見た、希美ちゃんが苦笑してる。
アレにはこう書かれていた。

『ちょっと家出娘を連れ戻して来る。気持ちは解るが、さっさと追って来い』

その後、カティマを追いかけるのを渋る私と、他の生徒達との多少の口論を経て、結局はカティマを追う事になった。
だって仕方ないじゃない。……この先は、敵の領土の真っ只中なのだ。それはすなわち、戦う力のない皆を今まで以上に危険にさらすと言う事。
戦いに参加すると言った以上、ちゃんとした作戦を立て、然るべき戦略の元に進軍するのならば、私だって反対はしない。
けど、今回は違う。言ってみればカティマの独断先行によってもたらされた事態なのだ。
私は生徒会長として、それをどうしても納得する事が出来なかった。
けど、森君達に言われてしまった。
カティマももう、自分たちの仲間なのだ、と。その仲間を見捨てる人に、生徒会長は任せられない、と。
そこまで言われて……引き下がれる訳がないじゃない！
うん。やってやろうじゃないの！
それに……カティマをやっぱり独断で追った、もう一人の問題児も連れ戻さないとね。
まぁ彼の方は、カティマと違って敵に直接狙われている訳では無いし……さっきミゥが報告に来てくれたけど、どうやらルゥが一緒

に居るらしいから、大丈夫だろう。カティマを追っていけば、そのうち合流できるでしょう。

……それにしても、まさかルゥがあんな――ちょっと祐と駆け落ちしてくる、なんて――書置きを残すとは思わなかったわ。

……青道君の悪い影響でも受けたのかしら。頭が痛い。

それから、クロムウェイが情報収集の為に放っていたらしい兵が、旅の商人がこの先にあるアズラ大平原の向こう、アズラサーセへ向かうカティマらしき人物を見たらしい、と報告してきて……私達もまた、アズラサーセへ向けて進軍を開始したのだ。

そうそう、その商人、何でも宙に浮く鎧を連れた青年にも会った、との事なんだけど……

「……青道先輩らしき人と一緒にいたって言う、二人の妖精と一人のメイドって、なんなんでしょうね？」

「……私が訊きたいわよ……」

心底不思議そうに訊いてくる希美ちゃんに、私は答える術をもたなかったのは言うまでもない。

……なんというか、彼に関しては深く考えたら負けな気がするわ。

＊＊ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＊＊

…

……

……

＊＊ｓｉｄｅ：カティマ＊＊

私は今、迷っている。

私が継承者の証を探しに出たせいで、私が今居る街、アズラサーセへと鉾の大軍が迫っているのだ。

いや、すでに街の南……恐らく、反乱軍が迫っているのだろう、そちらに部隊は展開しているのだが、さらに――かなりの量の鉾が、この街へと向かっていた。

目的など、訊かぬでも解る。

アズライールと同じ事をしようとしているのだ。反乱軍……いや、私に対する見せしめと挑発だろう。

出てねば、アズライールの二の舞になるぞ、と言う。

私が証を探しに出たのは、大儀のため。

このまま圧制……いや、暴政を続けるダラバを放っておくことはできない。そしてそれを止める事が出来るのは、自惚れでも何でもなく、王位継承を出来る私だけなのだ。

でも。

いくら大儀のためとはいえ、鉾が迫るこの街を見捨てて、証があるとされる場所へと向かって良いのか？

そうだ、これからの事を考えるならば、私は先に進まねばならない。

だけど。

そう、だけど。

私は、私自身は、それでいいのか？

……否だ。

証を探すのが目的だけれど、それでもこの街を見捨てるなんてことはできない！

私が名乗り出れば、鉾は間違いなく私を目掛けてくるでしょう。

私は、逃げ惑う人々を掻き分けるように北門へ向かい、静止する人を振り切り、門を破って侵入してきた鉾に向かいあう。

そうだ、これで、私は助からないかもしれない。けど、この街は、民は守れる。

今は亡き父と母にも約束した……かならずや、アイギアの国を復興させ、この世界に永久の安寧をもたらすと……。

「ですがアイギアス……私には、王たる資格はないのかもしれません」

そう、己が神剣にささやき、鉾へ斬りかかろうとした時だった。

「そんな事は無いさ。民を慈しみ、その為に己を差し出す事ができるお前は……立派な為政者だよ」

そんな声が聴こえたのは。

――次いで、周囲の気温が急激に下がり、ひしめく鉾達を足元から幾つもの巨大な氷柱が突き上げる。

これは――あの時、“彼”が使っていた――

「けどまあ、誰にも相談も協力も求めずに独りで来たのは――減点だな」

そしてそう言いながら現れたのは――やはり、祐だった。

side out

永遠神剣之章：１４．防衛、アズラサーセ。

＊＊ｓｉｄｅ：カティマ＊＊

「何故……祐がここに？」
思わず声にでた私のそんな疑問に、彼は軽く肩をすくめ、
「付けてきた」
なんとも、そうあっさりと言ってくれました。……皆に内緒で出てきた以上、周囲には充分気を配って居たつもりなのですが。
その旨を言おうとする私を、彼は「まあ待て」と押し止めます。
……そうですね。確かに今はそんなことを話している場合ではありませんでした。
「祐、ここは危険です。すぐに逃げてください」
私がそう言うと、彼は一瞬きょとんとし、
「あ～……うん、なる程。ルゥ……ルゥの気持ちがよく解った」
「ふむ。解ってもらえて何より。キミも彼女も、もう少し仲間を頼るべきだ」
「ま、そんなわけだから、俺じゃあ頼りないだろうが、一緒に戦わせてもらうぞ。そのために来たんだしな」
そう言いつつ、彼独自の補助魔法をかけてくれる。
「……感謝します、二人とも……っ！はぁ！」
私達の会話の隙をついて斬りかかってきた鉾二体を斬り飛ばし、私は一度だけ頷いた。
「後で独断先行で動いた事は怒るから、気にするな。直に斑鳩達も来る。どうせならそれまでに片付けるぞ！」
「ふふっ……お手柔らかに。……カティマ＝アイギアス、参る！」
駄目ですね、私は。
彼らに迷惑をかけないように、と黙って出てきたと言うのに、望達が追いかけて来てくれていると聴いて、嬉しく感じてしまう。

それに……。

いつもよりも格段に軽い身体を駆り、鉾を屠りながら、同じように戦闘を開始している祐達の方を見る。

初めて見た時より、確実に彼は強くなっている。

彼の使う魔法に関しては解らないが、体捌きや敵の攻撃の見切り、位置取りなどといった判断等は、間違いなく、それもかなり、上達しているでしょう。

……百の訓練よりも一の実戦、とは良く言いますが、彼の場合は正に、ですね。

それに加え、先程の補助魔法に、周囲の鉾の相手をしつつも、私の方にも攻撃魔法で支援を、傷つけば回復魔法を掛けてくれる。……まったく、頼りないどころか、彼ほどのオールラウンダーもそうは居ないでしょうに。

そしてそんな彼を的確にフォローするルゥ殿。

祐へ向かう敵の魔法を確実に打ち消し、消せない物は逸早く注意を呼びかけ、かわし、時には自らブロックする。

そうして傷ついた時は、祐がすぐさまに回復している。

何とも、そんな息の合った二人に頼もしさを感じつつ、私は次の敵へと斬り込んでいった。

＊＊ｓｉｄｅ　ｏｕｔ＊＊

…

……

……

まったくもって、凄まじい。

それが、ひしめく敵の只中を当たる側から一刀の元に斬り捨て、

駆け抜けるカティマを見た俺の感想だ。
これが正に、神剣使いの本気って奴なんだろう。
いや、まだ神剣からギリギリまで力を引き出しているわけじゃないだろうから、もっと上があるのか？……いやはや何とも。
「むっ……祐、後ろだ！」
「……っと、すまん。大丈夫か？」
カティマの様子を伺いながら戦っていた俺に飛んできた、敵の槍をブロックしてくれたルゥへ回復（ティア）アーツをかける。
「うむ、助かる」
いえいえこちらこそ、と返しつつ、近くの鉾にまとめて範囲アーツをぶち込み、再度カティマへ眼をむける。
まだまだかなりの多勢に無勢だが、何とか持ちこたえられてはいるが……どうやら敵さん、カティマが『カティマ＝アイギアス』であるからか、それとも彼女の方が脅威であると感じたのか、もしくはその両方か。カティマの方へ集中し出しているようだ。
その分こっちはさっきよりは楽とは言え……それでもまだまだ敵の数は多い。
（レーメ、『クロックアップ改』をカティマに）
「『シルフェンガード』！」
そろそろ切れそうな雰囲気の補助アーツを掛け直し、すぐに援護に入れるよう、ルゥとカティマの状況に注視する。
……カティマが着実に敵を減らしているとはいえ、このままでは下手をすればジリ貧か。
少なくとも……如何に『機構２』によって少しずつ回復するとは言っても、攻撃アーツは控えなければ、ＥＰは持たないだろうな。
……直接戦う力が、欲しい。
――っ！
一瞬、耳鳴りにも似たキィンと言う音が頭に響き、集中が途切れ、一度頭を振って仕切り直す。。
……無い物を欲しても仕方が無い。今は目の前の事に、集中しろ！

（レーメ、アーツは回復と補助に回して、攻撃は『魔法』でやるぞ。いけるか？）
（問題ない、行けるぞ！）
レーメのお墨付きに、俺は魔法発動対の代わりにしているオーブメントを構える。
一応補足しておくと、アーツに必要なＥＰは、オーブメントにて生成・蓄積され、それを消費して行使される。
それ故に魔力を直に使う『魔法』とは別に使用できるんだ。
「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ
氷の精霊　２０頭　集い来りて　敵を切り裂け　魔法の射手　連弾・氷の２０矢！！」
詠唱を終えた瞬間、氷で出来た矢が鉾達へ向けて降り注いだ。
その時、再びキィンと、耳鳴りのような感覚を感じたが、頭を振って振り払った。
……
……
……

その後も、何とか順調に戦い続け、あともう一息と言ったところで斑鳩達が追いついてきた。
彼女等の姿を認めた瞬間、一瞬目の前が暗くなり、ふらりとした。
……っ、まだ終わってない、気を抜くな。
そう言い聞かせ、再び鉾達へと視線を向けるのと同じくして、斑鳩達が戦列に加わった。
「祐、沙月達が参戦した。もう大丈夫だから、先に休んだ方がいい」
恐らく今俺がふらついたのを見られたのだろう、ルゥがそう言ってくれる。

ありがたい、けど、まったくもって情けない。いや、もちろん俺がな？

ふらついた原因は解ってる。長時間の戦闘に加えて、初の実戦での『魔法』の使用。何のことはない、体力と魔力、精神力の低下だ。もう一度、カティマ達の様子を見る。……うん、敵の数はもうわずかだ。確かにもう平気だろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて……ルゥ！！」

休ませてもらおう、そう言おうとルゥの方を見た時だった。彼女の背後から、一体の鉾が斬りかかろうとしているのに気づいたのは。

咄嗟に彼女を押しのけ、

「魔法の射手！闇の５矢！！」

詠唱破棄で『魔法の射手』を放つ！

鉾は咄嗟の攻撃に反応できず、俺の魔法に貫かれて粒子と化していった。

……っていうか、咄嗟に詠唱破棄なんて良く出来たな、俺。火事場のなんとやらってやつだろう……けど……。

（……悪い、今のが止めだ……限界）

急速に意識が遠くなっていくのを感じつつ、なんとかナナシ達に念話を送ったところで、俺の意識は途切れた。

永遠神剣之章：１５．バレちゃった、まあいいや。

ふと気がつくと、俺は真っ暗な空間の中に居た。
右も、左も、上も、下も、立っているのかも、座っているのかも、己の身体すらも見えない空間。
やもすれば、身体を動かす感覚すらも解らない。止まっているのか、歩いているのか、走っているのか。
眼を閉じているのか、開いているのかすらも解らない暗闇の中、

――キィン。

そんな、耳鳴りにも似た音が鳴った。
その音は、右からか、左からか、上からか、下からか、それとも俺の中から聴こえたのか。

――キィン。

音が鳴る。

――キィン。

まるで、ナニカを語りかけるかの様に。

――キィン。

音が鳴る。

――キィン。

まるで、ナニカを問いかけるかの様に。

――――――――せ。

それに思い至った時。

――――――――示せ。

音は、明確な“声”となって。

――――――――我に示せ。

俺に、届いた。

『汝が全てを、我に示せ』

“声”はただそれだけを俺に訴える。
繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し。変わることなく訴える。
いい加減聞き飽きた。話しかけても答えは無いし。
全てを示せ？いったいどうしろと言うのか。記憶でも覗かせろと？
なんとなく、そんな事を考えた時だ。
まるで先程の、“音”が“声”になった時の様に、まるで俺がその考えに至るのを待っていたかの様に、

『然り』

“声”がそう言った、その瞬間だった。
重圧の様な圧迫感と、ゾクリとした感覚に襲われる。
誰かが居るわけではない。視線を感じるわけでもない。だけど、確かに、解る。
視られている。
現在も、過去も、前世ですらも。
“俺”と言うモノを構成する、記憶も、知識も、存在そのものすらをも。
どれだけの時間視られていたのだろう。刹那の間の様でも、永劫の時が流れた様にも感じた、まるで俺の全てを暴き出されるようなその感覚に――
「あああああああああ！！！」
思わず叫び声をあげた瞬間、俺は飛び起きていた。
「……ゆ……め……？」
不意に漏れたそんな自分の呟きを、頭を振って否定する。
あの重圧も、感覚も夢などであるわけが無い。
何よりも、最後に聞こえた言葉が、未だに耳に残っている。
『ようやく見つけた』
それが一体何を意味する“見つけた”なのかは解らない。俺自身なのか、俺の中のナニカなのか、俺の記憶の中のナニカなのか。まったくもって解らない。けど、あれは恐らく――。
その時に、ふと視線を感じた。
そういえば、ここは何処なのだろうか？
とりあえず、現状の確認をする為にも、周囲を見渡そうとした時、
「……マスター！！」
「ユウ！！」

おもむろにナナシとレーメに飛びつかれていた。
「……っとと」
余りの勢いに、思わず後ろに倒れ込みそうになりつつも二人を受け止めると、今度こそ改めて周囲を見渡した。
場所は……保健室か。居るのはベッドの上。胸元にはナナシとレーメ。右横には俺の右手を握り、安堵した表情のフィア。そして周囲にクリストの皆と斑鳩と世刻と永峰とカティマと世刻の頭の上にレーメってちょっと待てい。
眉間を押さえ、気持ちを落ち着け、もう一度改めて周囲を確認し、うん、変わらない。
「あー……説明を求む」
さっぱり把握できない現状に、俺が何とか搾り出せたのは、そんな一言だけだった。
……
……
……
聴くところによると、どうやら俺は五日程も眠っていたらしい。
あの時俺が気を失った後しばらくして、突如激しくうなされ始めたという。
それからすぐに、ナナシとレーメを伴ったフィアが現れ、ずっと俺に付きっ切りになっていてくれたそうで。
何でも、普段常に感じられている俺の気配が、その時まるで、ナニカに遮られているかの様に感じられなくなったそうだ。
直接俺に触れれば、その原因も特定で出来るかと思い、居ても経

っても居られずに来てしまったらしいが、解ったのは、ナニカが俺の精神に接触している、と言う事。

……やっぱり、アレは夢じゃなかったんだな。

ちなみにその間、“継承の証”があるのはミストルテの街である旨の情報を得た上、すでに件の街は開放し、“継承の証”こと、“プロジア文書”も手に入れ、カティマが即位宣言をしたとの事。

なるほど、なんとなくカティマの立ち居地が世刻に近い気がするのはそのせいか。物理的な意味で。

今は忙しい中を縫って、俺が目覚めそうだとの報せに飛んできてくれたそうで。

「あー……ありがとう。それとおめでとう」

「いえ、祐こそ、無事に目覚めてくれてよかったです」

そして今は、ダラバへ和平の使者を送り、その返答を待っているとの事だ。

そこまで説明を聞いて、なるほどっと一息ついた。

とその時、話がひと段落するのを待っていたのだろう、斑鳩が、

「ところで……」と声を掛けてくる。

「青道君の目が覚めたら説明してくれるって言ってたんだけど……その三人は何者？……特に、その、レーメそっくりな子」

その言葉に、三人は若干ばつの悪そうな顔をする。

けどまあ、バレちゃったもんは仕方ないし、簡単にでも説明するしかないよなぁ。

いつかは話そうと思っていた訳だし、それが多少早まったってだけさ。

……ってわけで、ナナシとレーメは、この世界の二人をモデルに生み出された存在であること。俺の前世は、こことは全くの別の世界の人間であること。ある事情で、ちょっとした特殊な力をもって転生することが出来た俺が、転生先で自分のサポートをしてくれる者が欲しかったために生まれたこと。俺の使う特殊な魔法も、その特殊な力の一つであること。フィアはまあ事情が違うが、彼女もま

た俺のサポートをしてくれていること……を掻い摘んで説明した。
凄く驚かれたわけだが……まあ当然だわな。
「まぁ……バレちゃったもんは仕方ないしな。三人ともども、改めてよろしく頼むよ」
説明はそれで終わりと切り上げる俺のそんな言葉に、皆何かと思うところはあるだろうけど、首肯して返してくれたので一安心だ。
後は時間が経てば慣れてくれるだろう。きっと。世刻のレーメが凄く複雑な顔をしていたが。

情勢が動き出したのは、それから約一週間後。
ダラバからのからの和平への拒絶の答えにより、俺達はグルン・ドレアス城砦都市へと進軍を開始する。

永遠神剣之章：１６．合流、二人。（前書き）

いつのまにかお気に入りが１００件超えてました。
拙作の様なものを読んでくださる皆様に感謝です。

永遠神剣之章：16．合流、二人。

グルン・ドレアス城砦都市。元アイギア王国王都にして、現グルン＝ドラスの首都。

それ故に、これまでで尤も多くの鉾と兵が迎え撃ってくるであろうことは明白だ。でも、進まなくちゃいけない。この世界の人たちの為にも、俺達の為にも。

案の定、とも言うべきか、最初の拠点であるラハーシアを目指す俺達の前に現れる、大量の鉾達。それでも慎重に、そして順調に進む俺達だったが、そんな中、俺は違和感を感じていた。

……いや、違う。違和感じゃない。これは、あの時感じていたモノと同じ――

「……視られている……」

「……マスター？」

思わず漏れた声を聞きとめたナナシが疑問の声を上げたが、頭を振って何でもないと返しておく。

……けど、間違いない。一挙手一投足を、行動の全てを、俺の何もかもをも見極めんとするかの様な『気配』。

「……っ」

つい舌打ちしそうになって、堪える。そんな事をしても『これ』が消えるわけじゃないだろう、むしろ、ナナシとレーメに不安を与えるだけだ。

「……ところでマスター、先程から感じるこの、我々を観察するような『気配』について、何か心当たりは？」

「うむ、吾も気になっていたところだ。……これだけ無遠慮に視られると、さすがに不快になるぞ」

……と思ったら、どうやら対象は“俺達”の様で。

「あー……あれだよ、俺が気を失ってるときに、俺の精神に接触し

てきた奴。多分な。
……ま、今は気にしてもどうする事も出来ないし、先を急ごう」
「……わかりました」
「……うむ」
正直気になるってレベルじゃないんだ……いや悪い意味で。要するに鬱陶しいことこの上ないんだが、俺達はとりあえず、その『気配』を意識の外に無理矢理追い出し、先を行く皆の背を追った。
ちなみに、二人との会話が念話じゃないのは、その存在がバレタ時点で隠れるのをやめたからだ。
あれ以降、二人はほぼ常に俺の両肩に座っており、お陰でまあ色々な視線で見られるようになってしまった。……ま、俺としてはいつも隠れていてもらうのは申し訳なかったし、他人からの視線なんざ、別になんてことは無いんだが。
フィアは基本、箱舟から出てくる事は少ないので問題はないんだけど、あの時のメイドさんはいつもどこに居るんだ？と聴かれて困る事は幾度か有った。
彼女の存在が知られるのは構わないけど、箱舟の存在が知られるのは遠慮したいので、適当に誤魔化して済ませたが。
ああでも、ルゥ以外の、箱舟に入った事の無いクリストの娘達は、ちゃんと約束通り招待させてもらった。
ルゥ同様に、結晶体から出て居心地が良いと喜んでくれたのには……うん、招待して良かったと思っている。

まあそんな事を考えている間も事態は動いているわけで。
何だかんだで着実に敵を倒し、ラハーシアを占領していた。
随分と人事だなって？……いやまあ、例の『気配』で少々散漫になってるってのもあるんだが……どうやら箱舟でたっぷり英気を養えたらしく、クリストの皆がかなり張り切ってくれていたので、余り俺の出番はなかったんだよ。哀しい事に。
それにしても、俺達を“監視”する『気配』は段々その強さを増

している。……何と言うか、数が減って密度が増した？みたいな感じ。

そんな中、一時の休憩を得た俺達の下へ、伝令の兵が飛び込んできた。

その内容は、先にある、レジアシスの街からの鉾の増援が迫ってきた、と言うもの。……なんつーか、解っちゃいたが、こうぽこぽこ湧いて出てこられると正直辛いな。

そしてその報告を受けたカティマは、己が突破口を開くといって飛び出そうとし、世刻が自分も行くといって一緒に飛び出して行った……ってちょっと待てこらーー！！

何というか、もう少し落ち着けと言いたい二人を、斑鳩と永峰、クリスト達と追いかけた。

…

……

……

二人に追いついたとき、既に戦闘は終わりそうだった。

予想外だったのは、見知らぬ人が二人ほど増えていた事だろうか。

あれが誰か、ぐらいは解ってる。アズラサーセでカティマが寝込んでいなくて、足止めを食らっていたわけじゃないから、タイミングがずれるんじゃないか、なんて思っていたが、どうやら問題は無かったらしい。……間違いなく、タリアとソルラスカだろう。斑鳩が驚いた顔してるし。

「タリア、タリアよね！？やっぱりこの世界に来てたのね」

……うむ、合ってた。それにしても、戦ってるところをちらっと見れたが、二人とも強いね。まあ、強い人が増えるのは大歓迎だ。

遠巻きに、会話の進む皆の様子を眺めながら、そんな事を考えて

いると、不意にタリアと目が合った。
……そのまましばし見つめ合う。……いや、別に色っぽいもんは何も無い。ただ何というか、ここで眼を逸らしたら負けな気がする。それだけだ。
「……ところで沙月、何故神剣の気配も無い一般人が、こんな前線にいるのかしら？」
「まあまあタリア。青道君は確かに神剣は持っていないけど、結構強いのよ？」
「はぁ！？マジかよ沙月？……ぜんっぜんそんな風には見えねえけどなぁ」
「……」
「む……」
ああ成る程、世刻や永峰の情報は事前に受けていたけど、俺はこの旅が始まってからの合流だから知らないのか。
斑鳩の台詞に反応したのはソルラスカだった。そしてソルラスカの台詞にピクリと反応するナナシとレーメ。
（……マスター）
（どうした？）
（アーツの使用許可を）
（……何で？）
（あの男にマスターの力を思い知らせてやります）
って、『例の気配』にイライラと言うかピリピリしてるのはわかるが、ソルラスカの言葉ぐらいでそんな不機嫌になるんじゃない。俺が強くないのは事実なんだから。気持ちは嬉しいんだけどな。
ちなみに今の念話で解る通り、ナナシもアーツを使える。
レーメもまたしかり何だが、ナナシが機械技術へ特化しているとは言っても、魔法の事を何も知らないわけではない。世界によっては“魔法と科学の融合”なんてのもあるだろうし、当然だろう。それにオーバルアーツと言うもの自体、本来戦術オーブメントとクォーツがあれば、誰でも一定以上の威力で発動できるようになってい

る物だ。っていうか、そのための戦術オーブメントなわけだし。
……寧ろ、その特性上オーブメントを最大効率で稼動させられる分、俺やレーメがただ使うよりも、威力の高いアーツをぶっ放せるんじゃなかろうか？
今までナナシがアーツを使ってこなかった理由はいくつかある。オーブメントの制御に神経を割いていたり、周囲の状況を把握してもらっていて、適切なアドバイスや忠告をしてもらったり、だ。そして何よりの理由が、アーツを発動する際に消費されるＥＰにある。
ナナシやレーメがアーツを使用する際、使用されるＥＰは俺のオーブメントに蓄積されているものから使用される。本来は一人で使用する物なのだ。平行利用するにしても、せいぜいが二人。三人でぶん回せば、あっという間にＥＰが尽きるのは目に見えているだろう。
そんなわけで、それ及び前述のサポートをする理由により、ナナシは今までアーツを使ってこなかったわけなのだが。
まあそんな長々とした説明はともかく。
（ナナシ、俺は別に何とも思ってないから、あの程度の事で怒るんじゃない）
（……解りました）
（……ふむ、では吾が……）
（レーメも！）
（……むぅ）

「むかつくー。なにあいつ感じわるー」

ふと気づくと、永峰のそんな声が聴こえた。
どうやら念話に夢中になっている間に、斑鳩達は一旦ものべーに向かったようだ。その際にタリアにきつい一言を残されたようで。
「ごめんなさい、希美。彼女も悪い娘じゃないんですよ？」
そんなフォローをミゥがしているが、今一納得がいかないようだ。

まぁ、そのうち慣れるだろう。永峰も、タリアも。

……この先にあるレジアシスを落とせば、あとはグルン・ドレアス城砦都市を残すのみだ。

斑鳩達が戻ってくるまでの間に、なんだかどっと疲れたように感じる精神を休めるため、俺はそっと眼を閉じた。

永遠神剣之章：１６．合流、二人。（後書き）

ユーフィー抱き枕は反則だと思う。威力が。
いえ買いませんよ？

永遠神剣之章：17．レジアシス、その道中。

それは、レジアシスへ向かう道すがら、幾度目かの鉾との遭遇時の事だった。

「……なぁ、あの鉾たち、祐が相手してみろよ」

そんなソルラスカの一言。

指し示す先に居るのは、４小隊１２名の鉾達。まだ戦闘に入るには遠い距離だ。

「……はい？」

「……何馬鹿な事言ってるのよ、ソル」

俺とタリアの声が重なった。

「い、いや、だってよ？話では神剣を持って無くても鉾とやりあえるって聴いても、俺もタリアもまだ実際にその様子を見てねえじゃねーか」

タリアの視線に少々たじろぎながらも言うソルラスカ。いやお前、そこで怯むんなら言うんじゃねえよ。

まあ確かに、先の休息地点からここまで、相変わらず俺の周囲はクリスト達が固めているため、俺はほぼサポートオンリーになってたけどさ。いや感謝です。彼女達には今度ちゃんと礼をしないとなぁ……。

まあそれはともかく。

いや何というか、神剣使いが二人も増えた上、その増えた二人は実戦経験豊富な使い手。加えて、ラハーシアを落とした後に来た敵の援軍、あれにレジアシスの総戦力の結構な割合が割かれていたらしく、ラハーシアを発ってからここまで、俺やクリスト達までがフル稼働するような大乱戦にはなっていなかったわけで。

……言ってしまえば、俺の出番は特になかったんです。はい。

「……それもそうね」
そしてソルラスカの言葉に納得してしまうタリアさん。おいおい。
助けを求めてみようかと斑鳩を見ると、
「……あはは、がんばって」
「……マジかよ……」
眼を逸らしやがった。どうやら逃げ場は無い様である。
「……はぁ、しゃーない。……ナナシ、レーメ」
ついガシガシと頭をかきながら、ため息を吐いてオーブメントを起動させる。
レーメの名を呼んだ時に、世刻のレーメがぴくりと反応するのが見えた。うん、紛らわしいよね、ごめんな。
「マスター、よろしいのですか？」
「どっちにしろ二人には、今の俺の出せる力ってのは把握してもらわないといけなかったしな、丁度いいさ。……ってわけで、頼むよ」
「……そう言う事でしたら」
「時間も勿体無いし、まとめて一気にいくぞ」
その一言で、二人とも俺の意図を察したのだろう、アーツの準備に入る。多少ＥＰが勿体無いが、まあいいだろう。敵の数も多いし、死ぬよりマシだ。
こちらの様子に感じるものがあったか、鉾達が武器を構えて向かってくる。それを見て、補助アーツで自己強化しつつ、鉾達へ向かって駆け出した。今の俺の役目は一つ。時間を稼ぐ事。
敵の先頭と接敵し、振り降ろされる剣を半身になってかわすと空いた胴へと肘撃を加え、一瞬怯んだところを後続の鉾へ向けて蹴り飛ばす。
「『エアリアル』！」
蹴り飛ばした鉾に巻き込まれ、四人ほどが固まったところを狙い放ったアーツは、局所的な竜巻を巻き起こし、その内に巻き込んだ鉾達を翻弄する。
次のアーツの準備をしつつ、他の敵に向き合おうとした所で、

「うぉっとぉ！」
敵の後方から投擲された槍を咄嗟に横に飛んでかわす。次いで放たれた神剣魔法を避けた所で、アーツへの集中が解けてしまった。
「――っ！」
その瞬間感じる、ゾワリとした気配。俺は勘に従って転がる様にその場を避ける。
見てみると、俺が居た場所を黒の鉾が切り裂いていた。
脇腹にズキリとした痛み。どうやらかわしきれずに軽く斬られた様だ。……バッサリ行かれなかっただけマシか。
アーツで傷を癒しつつ、数歩下がって鉾達と対峙する。
その時だ。
「燃えろ……灰になるまで……『フレイムシャワー』」
こちらに向かって神剣を構える赤の鉾の姿が……って、まずい！
敵の攻撃に備え、咄嗟に身構えた俺だったが、予想された炎も熱も届く事は無かった。いつの間に来ていたのか、俺の背後から、既にすっかりと聴き慣れた声が聴こえたからだ。
「やらせない！『アイスバニッシャー』！」
「ルゥ！助かった！『オーバルダウン』！」
「いや、私こそつい手を出してしまった。すまない」
声の主へと例を言いつつ、先程対峙している間に準備していたアーツを解き放つ。瞬間、周囲を不可視の力場が包み込む。
元来であれば、敵のオーブメントの動作を阻害し、アーツを封じると同時に、アーツに対する抵抗力を下げる効果があるもの。この世界でなら、『魔法』に対するレジストを下げる効果になるんじゃないかと思ったんだが……まあ実証できるものでもないし、下がってると思おう。
「「『コキュートス』！！」」
次いで放たれる、ナナシとレーメの二重奏。
世界は氷に包まれ、幾重にも穿たれる氷柱は、無慈悲に敵を蹂躙する。

氷が砕けて消えた時、そこに残ったのは満身創痍な鉾達。その数は五。想定以上の威力。うん、さっきのオーバルダウンは効いていた様で何より。

「ワゥ！ゼゥ！左頼む！『スパイラルフレア』！」

俺の声に反応したワゥが一条の熱線を放ち、ゼゥが空間を渡って闇の爪で斬り捨てる。同時に、固まっていた三名の鉾を、俺のアーツが打ち抜いて、その場の鉾は全てマナの霧となった。

「……まったく、つい反応してしまったけど、貴方の実力を見せるのに私達に指示してどうするの？」

「……あー、うん、つい。まあ、その前までである程度は判っただろ。問題ないさ」

敵を殲滅し終わったのを見て、皆が近づいてくるのを待つ間、ゼゥにそんなツッコミを受けた。いやまあ仰るとおりなんだが。

実際、アズライール奪還作戦の時から、戦闘時や作戦行動時は大抵クリストの誰かといたからなぁ……。今の戦闘でも、敵の神剣魔法をルゥがバニッシュしてくれるのを前提に行動してしまった部分もあったし。……途中でアーツへの集中を切らした時だな。その後のフレイムシャワーをルゥがバニッシュしてくれてのって、それに気づいたからなんじゃなかろうか。

信頼するのはいいが、甘えるのは良くない。……気をつけよう。

「祐、やるじゃねーか！見直したぜ！」

近づいてくるなりそう言って、バンバンと背中を叩いてくるソルラスカ。痛えよ。

「そうね、それに関してはソルの言う通りね。……正直、本当に神剣も無しに鉾と遣り合えるとは思わなかったから。

ま、足手纏いにならないようにしてくれればいいわ」

そう言うのはタリア。いや、俺としても二人にそう言ってもらえたのは何より。タリアの言い方に引っ掛かる部分はあるがまあ……ツンデレ乙って事で。

「ありがとさん。まあ鉾以上の神剣使いが相手だったらこうは行か

んだろうけどな」
「……さ、それじゃあ青道君の実力も解った事だし、レジアシスを一気に落とすわよ！」
この場を締める斑鳩の言葉に各々首肯し、俺達は再びレジアシスを目指した。

「……ところでソルラスカ」
「ナナシ……だっけか、なんだ？」
「今回は多めに見ますが……マスターに不必要な無理をさせる様な事は無いように」
「お、おう。……ちっちゃい癖にこえーなおい……タリアみたいだぜ」
「なんですって！？ソル！！」
「聴いてたのかよ！？」
「聴こえたの……よ！！」
「ぐふぅ……」
……ソルラスカ、南無。

……
……
……

結局、レジアシスは別段苦労する事無く落とす事が出来た。変わった事と言えば、これまでよりもタリアの位置取りが前衛寄りだったことぐらいだろうか。
……まあ、俺がそこまで過保護に守る必要が無いってのが判ったからなんだろうけど、何だかんだ言いつつ、こっちの事気にかけてくれてたんだよな。……いやほんと、素直じゃないねぇ。

で、この日はここで進軍は終わり。残るはグルン・ドレアスのみとはいえ、このまま進軍すれば夜戦となってしまうからな。
後続の一般兵達が追いつくのを待つのを含めて、レジアシスで陣を張って野営をすることとなった。
その夜の事だ。
俺は夢を見た。
暗闇に、漂う夢。
またか……なんて思った直後、気づく。前とは違う。
前は、空間自体に俺自身が溶けているような、俺の魂のみがそこに有るかのような感覚。今は、俺の身体を含めて、全てがそこにある感覚、とでも言えばいいだろうか。
何にせよ、前と同じでこれも“只の夢”では無いんだろうな……
そんな風に思った時だ。

「……初めまして、と言えば良いかえ？『渡りし者』よ」

背後から、そんな声が掛けられた。

慌てて振り向いたそこに居たのは、一人の少女。
夜の闇より黒い髪、吸い込まれそうな程に深い黒の瞳、絹の様に艶やかで、雪の様に白い肌を、漆黒の服で包んだ少女。

「……ユーフォリア？」

会った事は無い。けど、判る。そう、その姿は、髪や瞳、服の色さえ違えど、まだ見ぬ少女……『悠久のユーフォリア』に瓜二つだった。

「……いかにも、妾のこの姿は、ぬしの記憶にある悠久の担い手の姿を模したもの……くふふっ、なに、細かい事は気にするでない。

この姿は妾にとっても馴染む。何も問題はなかろう」

……まったくもって、訳がわからない。恐らくは夢だろうが、突然放り出された空間に、突然現れたユーフォリアそっくりな少女。

そんな俺の気持ちを察したか、少女は何とも楽しそうに笑い、言う。

「く……ふふふっ、なに、此度は只の顔合わせ……いや、単に妾がぬしを見てみたかっただけのこと。……永き時の果てにようやく出逢えた、担い手足りえるものの姿を……のう？」

「担い手って……それって……！」

少女の言葉を問いただそうとしたその時、不意に意識が遠く……いや、覚醒していくのが解った。

「残念ながら、時間じゃ。……なに、また逢える。その時を楽しみにしているぞ？」

「待ってくれ！！」

叫びながら、飛び起きる。

荒い息を吐きながら周囲を見渡すと、そこは先程までの暗い空間じゃなく、野営の時に宛がわれていた天幕の中で。

「……これじゃあ……まるで――っ」

思わず漏れた声を飲み込む。……誰が聞いているか解らないんだ、気をつけろと言い聞かせるも、考え自体が消えるものではない。

そう、これじゃあまるで……“ナルカナに呼ばれる世刻望”みたいじゃないか――。

永遠神剣之章：１８．突入、グルン・ドレアス。

早朝、レジアシスを発った俺達は、グルン・ドレアス城砦都市へと進軍した。
やはり首都だけあって、守る鉾達は最精鋭なのだろう。これまでで最も強い鉾達だった。
だが、こちらには神剣使いが六名。こんなところで負けるもんじゃない。
俺達は都市へと続く街道に展開していた鉾を倒し、グルン・ドレアスの城門へと辿り着いた。

「……ついにここまで来ました……」
「ここにダラバがいるのね……」
「絶対、勝てるよね？」
「もちろんだ。勝って、元々の世界に帰ろう」
感慨深げにカティマがつぶやき、中間達が意気込みを新たにしていく。
そんな中俺の脳裏には、以前見た“夢”と、昨夜に見た“夢”の事が渦巻いていた。
飛び起きた後に思った事は、覆せない考えとして胸の内にある。
けど、もしもそうならば――
“夢”を通じて接触してきた、謎の声と謎の少女。
それぞれが発した言葉たち。
何がしかの想像はできる。けど、果たしてそれがどこまで合っているものなのか。
全く、訳が判らない。……一体、俺に何が起きているのか――……止めよう。今はこんな事を考えている時じゃない。
小さくかぶりを振って、それまでの考えを頭の隅に追いやる。
「それでは突撃します！私についてきてください！」

同時に聴こえる、カティマの号令。
俺達は、城門を守る最後の鉾へと挑みかかった。

…
……
……

「望ちゃん！あそこにいる一般人が戦いの巻き添えになってる！」
グルン・ドレアスへ突入した俺達は、城下に展開した鉾と兵を倒しながら、王城を目指す。そのうちに、不意に聴こえた永峰の声。
その指し示す方を見れば、兵に斬られたか、魔法の余波を食らったのか、血を流す市民が幾人も居た。
それを見て、助けようと言う永峰と、ダラバの元へと向かうのが先決だと言うカティマと世刻。
幾許かの言い合いの末、
「今は自分が出来る事をやりましょう。ね？」
「……わかりました」
「望、行きましょう。一気に王城まで突っ切る！」
「おう！」
永峰を諭すような斑鳩の言葉に永峰がしぶしぶ頷き、皆がカティマの声に応じて駆け出したところで、俺は一人、足を止めた。
「……青道君？」
それに気づいた斑鳩が足を止め、問いかけてくる。
「……どうもカティマは、ダラバの事になると周りが見えなくなっちまうのかね。……確かにダラバを倒すのが一番の解決策だけど、だからといって、助けられる人を助け無いなんてのは、な。……クロムウェイ達が追いつくまで、一般人の保護でもしてるさ。俺一人抜けた所でどうとでもなるだろ？」

「それは……けどなんでそんな」
グルン・ドレアスに入ってから、散見される鉾との戦闘。いくつかのソレを経て、俺は不意に思った。本当にこのまま王城まで突っ走って、大丈夫なのか？って。
確かに、『原作』じゃあそれで何とかなっていた。けど……そう、だけど、だ。
「それに、ここに突入してから若干とはいえ鉾とぶつかっている。……俺が考える最悪のパターンは、俺達の侵攻ルート外に鉾が居るって事だ。そうなったら、クロムウェイ達一般兵じゃ鉾に対抗できずに、結果として市民の保護も出来なくなる可能性もある。……アズラサーセの街は守ったのに、この街がアズライールの二の舞になったんじゃ、本末転倒だろうが。……まぁ、永峰には『お節介が一人残った』とでも言っておけ」
「……まったく、貴方って人は。……ありがと」
「……沙月。私達も、残って祐さんのお手伝いをしたいのですが」
その時、斑鳩と同様立ち止まって話を聴いていたミゥが声を上げた。そしてそれに同意する、他のクリスト達。
「……わかった、よろしくお願いね」
苦笑しながらも、仕方ないなぁと言う表情で言う斑鳩。悪いな、ほんと。
「……まぁ、カティマが無茶しないようフォロー頼むわ。さっさとダラバを倒して来い！」
皆の元へ行こうと背を向けた斑鳩にそう声を掛けると、片手を挙げて返してきた。それを見送った後、ミゥ達へ向き直る。
「……悪いな。実際に鉾が居るかどうかもわかんないのに、手伝ってもらって。……ありがとう」
「気にしないでください。私達は、私達がやりたいからやるだけですから」
にこり、と笑いながら言うミゥに、頭が下がる。
「それでも……うん、それでも、ありがとう。

……よし、それじゃあ俺達も動くか。ポゥとワゥはミゥと一緒に西回りで、ルゥとゼゥは俺と一緒に東回りで、二手に別れて、索敵と出来る限りの救助をしながら王城を目指すってのでどうだ？」

「はい、異存はありません。……それじゃ、ポゥ、ワゥ、行きましょうか。祐さん、お気をつけて」

「ああ。ミゥ達も気をつけて。……絶対無理はしないようにな？」

そう言うと、「それは私たちのセリフですよー」とポゥに苦笑しながら言われてしまった。むぅ。

…

……

……

……結果として、俺の懸念は当たっていたと言える。けど、それに気がついたのは、事が悪い方へと転んでからだった。

救助すべき人が多かった、鉾を捜す傍ら、一般兵にも気を配らなければならなかった、……その結果、俺は初めて、鉾ではない、一般の兵を手にかけた。

そんな、色々な事があったから、気が散漫になっていた。……なんてのは、言い訳にしかならないんだろう。

ズガンッ！と言う轟音と供に、「キャア！」と言う悲鳴が聞こえた。

聞き覚えのある声。

振り返れば、いつの間に接近されていたのだろう、武器を振り下ろした格好の白い鉾と、吹き飛ばされたルゥ。

そしてルゥに巻き込まれる様に弾き飛ばされた、ゼゥ。……いや、そうなる様にルゥを吹き飛ばしたのか。

「ルゥ！ゼゥ！」
そして、白い鉾の奥に神剣を構える赤い鉾が――。
「くそっ！」
それを見た瞬間、俺は二人に向かって駆け出していた。
何故もっと早く気がつかなかった？何故ここまで接近されるまで、気がつかなかったんだ俺は！！
先程の一撃は、随分と重い音がしていた。
今神剣魔法なんて喰らったら――。
撃たれる前に赤い鉾を倒すには、俺では火力が足りない。足りるアーツを使うには、時間が足りない。
二人を回復させて凌がせるにしても、敵よりも早く使える回復アーツでは、できてどちらか一人だ。範囲回復アーツの基点は、“空間”ではなく“人”。二人を同時に範囲に入れるには、二人の距離が離れすぎている。せめて俺が二人の間に入る事ができれば、俺を基点に二人を範囲に収めることが出来るんだ。
だが、駆け寄る俺を邪魔する様に、白い鉾が立ち塞がる。
「邪魔だああ！どけええ！！」
「くっ……ユウ、行け！『ダークマター』！！」
振るわれる武器を避けたところで、レーメの放った『ダークマター』が白い鉾を重圧で押し潰し、追撃を押しとどめる。
あと少し。
だが、そこまでだった。
「燃え尽きろ……『フレイムシャワー』」
無慈悲に紡がれる言葉。
伸ばした手は、届く事無く。
「……祐、すまない」

そんな、ルゥの言葉が聴こえた。

……ルゥとゼゥが死ぬ？何故？……間に合わないから。何故？俺が弱いから。俺に力が足りないから。

……ふざけるな、認めるものか！！

「あああああああああアアアア嗚嗚！！！！！」

気がつけば、叫んでいた。

間に合わないのなら、間に合わせればいい。足りないのならば、足せばいい。

何としても、俺の全てを使ってでも！

……その瞬間、世界が止まって見えた。

――『渡りし者』よ。

……その瞬間、“声”が聴こえた。

――我が声に応えよ。

それは、あの時の――。

――“力”が欲しいか？

力が、欲しい。

――何故（なにゆえ）に、“力”を求めるか？

守りたいものが、あるから。守りたいものが、出来たから。

――ならば、我が声に応えよ。

守りたいものを守れるだけの――

――“力”が欲しければ――

力を！！！！

――くれてやる！！！！

そして、世界は色を取り戻し、俺はかつて無い“力”が湧いてくるのを感じていた。

ズキリとした頭痛。脳に直接“力”の使い方を、その姿を、その

特性を、流し込まれるような感覚。
瞬間、俺はそれ等を理解した。いや、理解させられた、と言った方が正しいだろうか。……どちらでもいい。どうでもいい。今は只、それを上手く使うだけ！
全身の力を、足へ。全力をもって、加速しろ！
ルゥの元へと辿り着く。間に合った！
降り注ぐ炎が迫る。
俺はルゥを抱え、ゼゥの元へと一足飛びで飛ぶ。
チラリと、ナナシとレーメの姿を捜すと、離れた所に居るのが見えた。……良かった、二人は敵の魔法の範囲外だ。
降り注ぐ炎が『視える』。
それに備えるように掲げた腕に沿い、ルゥとゼゥを覆える程の大型（タワーシールド）の盾を形成する。
形成したソレへとマナを注ぐと、バリッと、雷の爆ぜるような音と供に盾がオーラフォトンに覆われ、力場となした。
次いで、着弾する『フレイムシャワー』。
力場が歪む。
破られてたまるかと、更にマナを練り、叫ぶ。

「……お前の“力”を見せてみろ！『観望』！！」

＜言われるまでも無い！！＞

脳裏に応えるは、最初の“夢”と同じ声。先程、俺に語りかけてきたものと同じ声。
バチリッと言う音と供に精霊光が爆ぜ、降り注ぐ炎が治まるのを見て、ルゥとゼゥの様子を伺うと、驚いた様子でこちらを見る二人が有った。
……無事な姿に、安堵の息が漏れる。けどすぐにかぶりを振り、切り替える。まだ敵が居なくなった訳じゃない。

あとで説明する、と二人に声を掛け、俺は盾を長剣へと変えて、鉾達へと向き合った。

突如現れた神剣使いに、鉾と言えど多少は戸惑うのだろうか、一瞬気配が揺らぐのが『視えた』。

その隙を突いて、先程の『ダークマター』で弱っていた白い鉾へと肉薄し、袈裟懸けに斬り捨てる。次いで赤い鉾へと向かいながら長剣を長槍へと変えて、突如間合いが変わった事に動揺する鉾を貫いた。

マナの粒子へと変わっていく鉾達。それを見届けた後、ルゥとゼゥの元へ足を向けると、ナナシとレーメが二人に回復アーツを掛けている所だった。

「……祐、それは？」

「……永遠神剣……なの？」

俺の手にした槍を見ながら言うルゥとゼゥ。俺はそれに頷いて返す。ナナシとレーメは……うん、記憶のリンクを通じて理解しているのだろう、こくりと頷いた。

――永遠神剣第五位『観望』。“視る”事に特化した能力を持つ、群体を持って一つの“個”と成す、ナノマシン型永遠神剣。それが、俺が手にした“力”だった。

永遠神剣之章：１８．突入、グルン・ドレアス。（後書き）

モデル@ＡＲＭＳ
……まるわかりですね。

永遠神剣之章：１９．決着、グルン・ドレアス。

鉾を退けた俺達は、再開した索敵と救助の最中、クロムウェイ達と合流する。

彼らもまたグルン・ドレアスに入ってから、索敵と非戦闘員の救助を行っていたらしく、そのお陰で、俺達が戦った鉾が最後の鉾であったことが判った。

そのため、クロムウェイと別れ急ぎミゥ達と合流し、俺達は王城へと向かっていた。

その道すがら、ミゥ達へ先程あった事を説明すると、

「……祐さん、二人を助けていただいて、ありがとうございました。……それにしても……永遠神剣に見初められた……ですか」

ほぅ、と息を吐いて言うミゥにかぶりを振って返す。

「いや、俺も鉾の接近に気づかなかったからな。……『観望』が力を貸してくれなかったらと思うと、ぞっとするよ」

「でも……これで私たちが祐さんを守らなくても、大丈夫になっちゃいましたね」

そんな、少し寂しそうにポゥが言ってきた……いやいやいや、俺としてはまだまだ頼りにしてるんだが。

その事を伝えると、戸惑った雰囲気できょとんとするポゥ。

「いや、ほら、まだこの“力”にも慣れないしさ。……それに、慣れたとしても、俺としては今一番安心して背中を任せられるのって、ポゥ達なんだよ。

確かに、こと戦闘能力で言えば、神剣を直接扱える斑鳩達のほうが上だろうけど……この旅が始まってから俺が一番長く一緒に戦ったのって、ナナシとレーメを除けば皆なんだよ。……だから、頼りにしてる」

俺がそう言うと、一泊置いて「はいっ！」と言う元気の良い返事が返ってきた。うむ。

「ああ、そうだ。ナナシ、レーメ」
「はい」
「うん？」
「さっき実際に神剣を使ってみて思ったんだが……形状変化を駆使して戦おうとしたら、慣れるまでそれに手一杯になりそうなんだよ。だから当分、アーツに関しては二人に完全に任せる」
そうなのだ。『観望』は群体で構成されるナノマシン型神剣……と言うだけあって、その姿を俺の思った通りに自在に変えることが出来る。先程の戦いであれば、最初は盾、次に剣、最後に槍、と言った具合だ。
最も、形成した形を保つには必ず俺と接触していないといけないらしく、俺の手から離れた場合は、霧散する様に元の粒子状の形に戻るようで。つまりは飛び道具としては使えないって事だな。
それでこの形状変化。唐突に武器の間合いを変える、などで相手を翻弄できるのはいいんだが、それを上手く行う為には、俺自身が様々な武器に精通していなければ宝の持ち腐れになってしまうわけで。
ようするに、今現在の俺の実力では、戦闘中にアーツにまで思考を割く余裕が無い、って事だ。
形状変化させずに、形を固定して使えばいいじゃん、なんて言われそうだが……折角の変幻自在。使わないのは勿体無いじゃないか。
まぁ、アーツの方は俺だけではなく、ナナシとレーメの二人も扱えるのだし、それならいっその事全面的に任せてしまおう、と言う事である。
「……そう言うことでしたら」
「うむ。心得た」
俺の考えを説明し、了解を得た所で走る事に専念する。
……急ごう。今も尚、戦いは続いているのだから。

…

……

……

城へ向けてひた走る俺達の前に城門が見えた。そのまま、駆け抜ける様に城内へと突入する。

今だ勝ち鬨が上がらないと言う事は、城内の掃討、もしくはダラバとの戦闘が長引いていると言う事。

前者ならまだいい。後者であった場合、考えられるのは、原作通りのダラバとカティマの一騎打ちだ。

「……『観望』、神剣の気配が集まっている所へ誘導してくれ」

＜承知した＞

脳裏に『観望』の声が響く。

その導きに従って進むうちに、“それ”は聴こえてきた。

「ちっ……！」

「剣戟……ですね」

「ああ」

ナナシの言葉に頷いて返す。そう、聴こえてきたのは剣戟の音。それは間違いなく、カティマとダラバの一騎打ちの音だろう。

やがて、その音の発生源である部屋――謁見の間へと辿り着き、突入した俺達の前に広がっていたのは、予想通り、剣を打ち合わせるカティマとダラバ、そしてその二人を固唾を呑んで見守る皆だった。

歩を緩め、歩いて皆の下へと近づく。

「あ、先輩」

と、俺に気付いた永峰が声を上げ、一瞬、皆の視線がこちらへ向いた。

俺はそれに片手を上げて返すと、とりあえず斑鳩の所へ向かう。

「……ところで斑鳩。俺はカティマが無茶しないようにフォローし

てくれって言ったんだが……なんで一騎打ちなんぞしてやがる」
「……私が、この分枝世界の未来は、この世界の者が決めるべきって言ったのよ」
俺の問いに答えたのはタリアだった。
斑鳩もばつの悪そうな顔をしつつも頷いて同意する。
それに対し、思わず「……はぁ」っとでかいため息が漏れた。
「……斑鳩。その二人と合流してから、考えが『旅団』寄りになってるんじゃないのか？」
そんな俺の言葉に訝しげな顔をする斑鳩とタリア、そしてソルラスカ。恐らくは、俺が『旅団』の名を出したことにも引っ掛かってるんだろうが、それは今どうでもいい。
世刻と永峰は、俺達の様子とカティマの様子を、交互にを不安げに見守っている。
「解らないか？……これで万が一にでもカティマが負けたらどうする？反乱軍……いや、総大将の居なくなった『元アイギア国軍』は瓦解するぞ。そしてダラバが、そんな自分に対して反乱を起こした連中を許すと思うか？俺は思わんね。下手すりゃ一族郎党皆殺しさ。おまけにいえばプロテクトを一筋縄で解除するとも思えんしな。そうなれば俺達がこの世界を出ることも難しい。……更に言えば、そうなったら学園の皆にだって今以上に危険が及ぶ可能性が高い」
そこまで一気に言ったとき、斑鳩や世刻達のはっとする顔が見えたが、そのまま言葉を続ける。まあ実際には、カティマを討てば満足して、プロテクトを解いてさっさと俺達を追い出すかもしれんけど。
「それにだ。言わせて貰うが、俺達含め……物部学園の皆はもう“この戦争”に、首どころか頭までどっぷり関わってるんだよ。言うなれば“この戦争”は、この世界の者達の戦争ってだけじゃない。あの時、カティマを手助けすると皆が決意したあの瞬間から、“俺達の戦争”なんだ。……それを、『この世界の未来はこの世界の者が決める』？……それこそふざけるな、だ！」

思わず激昂しそうになった気持ちを、一度深呼吸して落ち着かせる。

「……カティマは『アイギア国軍』の総大将だ。指導者だ。象徴だ。旗頭だ。……そんな人物は、本来おいそれと一騎打ちなんぞするべきじゃ無いんだよ。……第一、今こうしている間にも、外じゃ兵士達が命を散らしているんだ。それを忘れるな」

だからこそ、俺は以前アズラサーセでカティマの後を追い、圧倒的不利な戦いに加勢した。あの時だって本当なら……アズラサーセがアズライールと同じ結果になる恐れが無いのであれば、カティマを無理やりにでも止めたかったぐらいなんだ。

そう言い切ると、俺の言った事に色々思うことがあるのだろう。皆は一様に押し黙ってしまった。部屋の中には、カティマとダラバの奏でる剣戟の音がただ響く。

「はぁ……まぁ、俺の言葉が絶対なんてわけはないが……一理はあるだろ。俺ももっとちゃんとカティマと話しておくべきだったよ。……何にせよ、ここまで来たらもうカティマを信じて待つしかないさ」

そして俺は口を噤む。そう、あとはカティマが勝つのを信じるしかないのだ。

（……ああ、そうだ。『観望』、聴こえるか？）

＜……聴こえている＞

（この部屋に、俺達とダラバ以外の神剣使いが潜んでいるはずだ。……気付かれない様に『視て』おいてくれ）

＜……エヴォリア、と言ったか。……承知した＞

そんな『観望』の答えに一瞬驚くが、すぐに思い当る。……そう言えば、こいつ俺の記憶視てたな。

（……ナナシ、レーメ、聴こえていたか？……っていうか、そう言えば『観望』の声って二人にも聴こえてるのか？）

（はい。どうやら我々がこうして行っている、複数間の念話と同じものの様ですので）

（うむ。恐らくは『観望』が吾等にも聴こえる様にしているのだろう。……ユウの記憶を視たのであれば、吾等の関係も理解しているだろうからな）
（そっか。……じゃあ、いつでも動ける準備をしといてくれ）
（イエス、マスター）
（心得た）
『観望』、そしてナナシとレーメとの念話を終え、カティマとダラバが演じる剣舞へと眼を向けた。
激しさを増すそれは、クライマックスが近い事を物語っていた。
そして一際激しい攻防の後、カティマが弾き飛ばされ、壁に激突する。
「カティマ！くそっ！」
「待てよ。カティマのやつ、まだやる気だぜ？」
その様子に世刻が駆け出そうとした所で、ソルラスカに止められていた。
その言葉どおり、見ればカティマは剣を支えに立ち上がり、ダラバに向かって構えている。
＜……『渡りし者』よ＞
そんな折、不意に『観望』の声が聴こえた。
カティマの方も気になるが、『観望』の方へと集中する事にする。
（……そういえば、その『渡りし者』ってのは何なんだ？お前の次に夢で逢った娘も言ってたけど）
＜……汝の事、であることは理解していよう？＞
（そりゃな。何度も呼ばれてるし）
＜……ならばそれでよい。それよりも……だ。見つけたぞ＞
気にするなってことか。……まあいいや。
（それで、どこだ？）
＜……あの柱の陰に居る。……油断せぬようにな＞
その言葉に俺は内心で頷いて返すと、カティマ達へと意識を戻した。

その時その瞬間、カティマの剣がダラバの身体を貫いていていたところだった。
「ふ……ふふふ……やはり……定められた運命からは逃れられなかったか」
その身を剣に貫かれながら、笑うダラバ。
「私の苦しみはここで終わるが……私が背負った苦しみは、貴殿に受け継がれる。
これから先……永遠に、自らの血に宿った呪いに……苦しめられるがいい……」
そう言いながら、自ら『心神』を引き抜くと、
「さらばだ……」
ダラバは、その場に静かに崩れ落ちた。
放心するカティマに駆け寄る皆。
「みんな、油断するのは早いわ。神剣はまだ消えていない。息がある証拠よ」
そんな中、タリアの声が響く。確かに未だ、『夜燭』は倒れたダラバの手に握られたままだ。
「おい、ちゃんとダラバに止めをさしておいた方がいいんじゃないか？」
確かに、油断して不意を撃たれたら堪ったもんじゃないしな。ソルラスカがそうカティマに促した時だった。

「そうはいかないわ。その体は今から私が使うんだから」

聞き慣れない声が響く。
次いで突如俺達の前に現れたのは、異国風の衣服を纏った少女。
「……っ！ダラバの部下か！？」
「まだ敵が残ってたの？」
「……そいつはこの世界の人間じゃねぇ。……エヴォリア、捜してたぜぇ……！」

驚愕の声を上げる世刻と永峰に対し、ソルラスカが否定し、武器を構えた。
「旅団がこの世界に干渉してくるとはね。お陰で予定が狂っちゃったわ」
「ダラバに鉾を提供していたのはテメエだな？光をもたらす者はこの世界も滅ぼそうってのか！？」
「そうよ。そしてその計画はまだ進行中」
そう言いながら、倒れたダラバに近づいていくエヴォリア。
だが次の瞬間、瞬時にその場を飛び退り、距離を開けた。……彼女とダラバの間を、猛烈な勢いで雷が駆け抜けたからだ。
……確かめるまでも無い。レーメの放った『プラズマウェイブ』のアーツだ。
その間に俺は駆け出し、皆の前に躍り出てエヴォリアと対峙する。
「青道君！？」
斑鳩が驚愕の声を上げる。まぁ無理も無い。鉾じゃない、本当の意味での『神剣使い』の前に飛び出したのだから。
そして案の定、突如自分に向かってきた俺に対し、恐らく今邪魔をしたのも俺だと気付いたのだろう、エヴォリアがその手を向ける。
「ちっ！邪魔よ！」
彼女が見につけている腕輪――永遠神剣『雷火』――が光を発し、俺に向かってその力を振るおうとしたところで――
「……くっ！」
その力は、彼女に向かって飛来する複数の火球――ナナシの放った『ファイアボルト改』のアーツ撃ち落す為に振るわれた。
その隙に、俺は『観望』を杖の形にして手の内に現す。
「……なっ！」
「この気配……永遠神剣！？」
後ろで皆の驚く気配がする。……けどとりあえず今は無視。
俺は『観望』をエヴォリアへ向け――
「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……氷結　武装解

除！！」

……今まで魔法発動体の代わりとしていたオーブメントではなく、『観望』を杖として使用したのは、永遠神剣自体が『マナ存在』であるために、魔法発動体となるのではないか？と思ったからだ。

……まあそれを言ったら、こいつを受け入れた時点で俺自身もマナ存在となってるはずだから、いざとなればこの身一つでも使えるのかもしれないが。

……とりあえず、俺のその考えは当たっていたらしい。エヴォリアへ向かって氷の嵐が吹きすさび――カラン、と乾いた音を立て、『雷火』がエヴォリアの後ろへ飛んで落ちる音がした。

……『氷結　武装解除』の魔法は、相手の装備を凍らせ砕く魔法だが……流石に永遠神剣は砕けなかったらしい。うん。永遠神剣は、な。

「……え？」

それは誰の声だったのだろうか。俺の放った魔法が効力を現し、痛いほどの沈黙が落ちた謁見の間によく響いた。

その後に続いたのは――

「……き……きゃあああああ！！」

意外にも可愛らしい、エヴォリアの悲鳴だった。

後ろで「望ちゃん！見るなー！！」とか「ソル！あんたもよ！！」とか「今はそんな場合じゃないでしょーー！！」とか聴こえるがまあ無視。

俺は咄嗟にへたり込んで身体を隠した“全裸の”エヴォリアを見据る。うむ、眼福。

いや実際、ここで敵から眼を離すなんてのは只の自殺行為な訳で。

……それにしても、この程度の事なら冷静に対処してくるかとも思

ったが……まあ、余りにも予想外な事態に混乱してるんだろう。マナで服を再構成すればいいのに、裸のままエヴォリアは若干涙目になりながら、上目遣いで俺を睨んでいる。

「……お前、名は何と言う！？」

「青道　祐」

「……青道　祐……覚えてなさい！次会った時は必ず殺してやるから！！」

エヴォリアはそういい捨て、『雷火』をその手に呼び戻して、空間に溶ける様に消えて行った。

……ふっ。その格好のその表情でそんな事言っても、萌えるだけだぜ。

「……マスター……」

「……」

「……祐……まったく、きみと言うやつは……」

若干……いやかなりナナシとレーメとクリストの皆の視線も痛かったりするけど……うん、仕方ないんだよ。俺にはこの方法しか思いつかなかったんだから。うん。

「……ゴホンッ……それはともかく、カティマ」

「っはい！」

「……ダラバに止めを。まだ外では戦いが続いてるんだ。さっさと戦争を終わらせるぞ」

その言葉で現状を思い出したのだろう、カティマが頷き、ダラバへと近づく。

「……ダラバ将軍……さらばっ！」

……こうして、ダラバはマナの光と消え、城下に歓声は轟き、俺達の『剣の世界』における戦いは幕を閉じた。

永遠神剣之章：２０．神剣と、神獣。

グルン・ドレアスの戦いから三日程経った。
ダラバが倒れ、エヴォリアも去った為に、既にこの世界から鉾の姿は無く、グルン・ドラスの残党にさえ気をつければ、もう学園の皆は安全と考えていいだろう。
それを実感してか、それとも“この世界から出られる”と言う事実があるからか、学園の皆の表情も明るい。
昨日はカティマの正式な戴冠式が行われ、彼女は晴れて『新生アイギア王国』の女王となった。
そんな喜びに満ちる世界の中、俺は皆を生徒会室に集めていた。
勿論、神剣の事を説明するためだ。
俺の前には斑鳩。その横にタリアとソルラスカ。俺の左右に世刻と永峰。俺の後ろにクリストの皆。もちろんナナシとレーメは肩の上。ああ、世刻のレーメは世刻の前、机の上に座っている。ついでに森とカメラを構える阿川ってなぜお前等が居る。……まあいいや。さすがにここまで揃うと生徒会室も手狭に感じるなぁ。ちなみに当然ながらカティマは居ない。色々忙しいんだよ、彼女。女王様だしね。

「さて……」
誰も喋らない沈黙を破り、斑鳩が口を開いた。
「青道君。そろそろ説明してくれるかしら？」
単刀直入だなおい。だが、主語が抜けてるぜ？
俺は斑鳩をじっと見つめながら言う。
「……説明、と言うと……エヴォリアを剥いた事についてか？」
「違うわよ！！その時に持ってた杖みたいな永遠神剣についてに決まってるでしょうが！！第一その為に集めたんでしょ！？」

「解ってるよ。冗談だ」
いいツッコミだったぞと続けてやると、がっくりと疲れた顔でため息を吐かれた。やれやれ。
とりあえず、あの時と同じ様な状態――質素な杖の形状――で、『観望』を出す。
「これだろ？」
周囲の皆の、息を呑む音が聞こえた。
「さて、質問は？」
「……まあ違うだろうけど……今まで、神剣使いだって隠してたの？」
とは斑鳩。俺はそれに、
「いいや。今まで隠していて今頃明かすぐらいなら、もっと事前に――それこそアズラサーセの時に神剣使うし、あの時隠していたなら今も隠し通そうとしてるさ」
「じゃあ、実はやっぱり先輩も前世が神様で、私たちと同じ様に突然目覚めたとか？」
これは永峰。俺はそれにも、かぶりを振って答える。
「いいや。俺は神の転生体じゃないのは確かだよ。まぁ、突然使える様になったってのは同じだけどな。
……どうやら、“俺の中のナニカ”が、こいつが“捜していたナニカ”と合致したらしくてな。まあ良く言えば、永遠神剣に選ばれた、だな」
そんな俺の言に、タリアが「そんなことって……」と言うのが聴こえた。
ま、この時間樹で生まれた神剣使いは、イコール神の転生体だってサレスに教えられてるんだろうから無理もないか。
まあ、何にだって“例外”は存在するってことだ。時間樹外の神剣である『求め』等と契約した、高峰悠人達しかり、な。
「そんなこともあるのさ。……で、こいつを使える様になった経緯だが――タリアとソルラスカは居なかったけど、俺がアズラサーセ

防衛戦の後、数日寝込んでいた事があったろ？あの時、夢の中でこいつが接触してきたのが最初だ」

あの時は永遠神剣だって確信していたわけじゃないけどな。恐らくそうだろうとは思っていたが。

「で、グルン・ドレアス突入後の、皆と別れて城下の索敵をしているときに鉾の奇襲を受けてな。その時にこいつが語り掛けて来たんだよ。『力が欲しければ、我が呼びかけに応えよ――』ってな」

「へぇ……あれ、けど、何でわざわざグルン・ドレアスに入るまで言ってこなかったんだ？その前にも鉾とは戦闘してたのに……」

そんな、ぽつりと洩らした世刻の疑問に答えたのは、俺の後ろに居たルゥだった。

「……グルン・ドレアスにおいて奇襲を受けたのは、祐と供に行動していた私だったのだ。それによって私とゼゥが危機に陥った時、祐が『観望』の力をもって助けてくれた」

「……じゃあ、青道君は二人を助けるために、神剣と契約したんだ？……ありがとう」

そういって頭を下げる斑鳩に苦笑がもれた。

「鉾の接近に気付かなかったのは俺もなんだし、気にするな。それに、二人を助けるために出来る事をしただけだし、こいつを手にしたこと自体、後悔なんてしてないさ」

「……ええ、わかったわ。

ところで、その永遠神剣の能力は？杖型ってことは特殊攻撃系なんでしょうけど」

「……いや、どちらかと言うと、直接攻撃型の神剣だよ」

言いながら、『観望』を剣の形に変えてみせる。

「改めて紹介しよう。……永遠神剣第五位『観望』。群体を持って一つの個を成す、ナノマシン型の永遠神剣さ」

何度か『観望』の形を変えながら説明し、最後に粒子状に霧散させて消したところで、

「それじゃあ、先輩の神獣ってどんなのなんですか？」

と永峰の言葉が。
そこでふと疑問に思う。……神獣って居るのか？
神獣は言うなれば、“神剣の意思”が顕現したもの。その姿は担い手の潜在意識による……と言うのは解るんだが、『観望』の意思は既に神剣の状態で有している。現状でこいつとやり取り出来る時点でそれは明白なわけで。
その状態で神獣って出せるんだろうか？いや、『悠久』や『叢雲』は意思と神獣が共存？しているだろうから出来るのか？
何てことを考えていたら、
＜……第三位以上の上位神剣であればそれも可能であろうが……我程度であれば、本能のみの神獣が出る可能性もある。試すのであれば気をつけよ＞
『観望』からそんな忠告を頂いた。
それを皆に伝えたところ――剣の状態の時点で、神剣とやり取り出来ることにも驚かれたが――とりあえず広いところで出してみよう、と相成りました。

……
……
……

広いところ、と言う事で校庭に移動し、皆が見守る中、神獣が出る様に集中してみた。
ゴクリ、と誰かが息を呑む音が聞こえたような気がした、次の瞬間――俺の前の地面にマナが集まり、光を発する。
そしてその光が晴れた、そこに居たのは――。

「……わぁ……」

永峰の感嘆の声が聴こえた。
そこに居たのは、暗褐色の斑紋をあしらった灰色の体毛を持つ、その太く長い尻尾を含めれば2m程になるだろう体長の、一頭の雪豹。特徴的なのは、その尾が二股に分かれている事だろうか。
雪豹は正面に立つ俺の姿を認めたか、静かに近づいて喉を鳴らす。意を決してそっと撫でてみれば、眼を細めて額をこすり合わせて来る。……どうやら、理性なく襲い掛かってくる獣、と言うわけでは無い様で何よりっていうか何この可愛い生き物。
「……『観望』、お前の意識はいまどこにある？」
＜……我が意思は変わらず我が内に有り。……ふむ、どうやら我の意思と神獣との共存は出来たようだな。いや、その神獣もまた我であるのは変わりないのだが。……面白いものだ＞
ふと気になった事を訪ねて見れば、そんな答えが返ってきた。要するに、こいつにもその辺の仕組みはよく解らんってことか。
雪豹の頭を撫でながらそんな風に考えていると、ふと物欲しそうな顔の永峰と眼が合った。
「……あー……触ってみるか？」
「はいっ！」
「私も私も！」
即答かよ。そして阿川、お前もか。
けど、流石に見た目が大型肉食獣だからか、若干恐る恐る手を伸ばす二人。だが、その手が触れたとき、雪豹は自らそれに頭をこすり付けた。
その様子にほっとする二人、と、俺。流石に、俺は大丈夫でも他人にも大人しいとは限らんし。とりあえずいつでも動けるように力を入れていた身体からその力を抜いて、二人の様子を改めて見ると、
「わぁ……ふかふか……」
思い切り和んでた。……いやいいんだけどさ。周りの皆もその様子を生暖かく見守ってるし。

「ところで先輩、この子、名前はどうするんですか？」
「あー……名前か。そうだなぁ……ノーマ、だな」
「いい名前ですね！……よろしくね、ノーマちゃん」
「……先輩、この子が子猫とかだったら、『ナノ』ってつけるでしょ？」
ありがとう、永峰。そして俺の思考を読むな、阿川。
まあとりあえずあいつらは放っておいて、斑鳩の方へと顔を向け、
「……とりあえず神獣も出たし、俺が皆を呼んだ理由は全部終わったぞ？」
「うん、じゃあとりあえずこの場は解散ってことで」
そう斑鳩が締め、その場は解散になった……んだが、なぜか皆ノーマの方へと向かっていく。
「いやぁ……何か希美ちゃん見てたら、私も触りたくなって……」
はいはい、好きにしろ。……やれやれ。

永遠神剣之章：２１．旅立ちの時、いつか見た景色。

神剣のお披露目から二日。グルン・ドレアスでの戦いの終結から、五日が経った日だ。

食堂で朝食後のまったり感を満喫していた時だった。周囲の生徒達が、ざわざわと騒ぎ出した事に気付く。

何だろう、と思う間も無く、俺の横に誰かが座る気配。

ふとそちらを見てみると、眼に入ったのはメイド服。……って。

「……周囲が騒がしいと思ったら……フィア、出てきたのか？」

俺の横に座ったのは、箱舟から出てきたフィアだった。彼女は「箱舟の中に一人で居るのも暇なんですよー」なんていいつつ、持参してきたらしいティーセットから、お茶――恐らく紅茶だろう――を注ぎ、俺の方へも差し出す。

何か一度皆の前に出てから、どんどん開き直ってきたな、おい。

「ん、サンキュ。……んで、暇だからってだけじゃ無いんだろ？」

そう訊くと、「あ、やっぱりわかりますか？」なんていいつつ、懐から細長い箱を出し、差し出してきた。

それを開けてみると、中に入っていたのは五本の細長いベルト状のもの。片端に止め具と、中ほど二箇所に小さな鉱石がついたそれは――

「チョーカー？」

「はい。……以前、ルゥさんが初めて箱舟にいらっしゃった時に、ご主人様が思いついていたものの試作品です」

あの時思いついていたものってーと……。

「……彼女達が専用部屋や箱舟以外でも、結晶体の外に出られるようにする為のアイテム、か？」

「はい。つい先日、ようやく箱舟の外郭に使用している鉱石と同じ物が、アルケミーストーンから産出されましたので。……この世界の戦いに間に合わなかったのは、申し訳ないのですが……。チョー

カーにしたのは、多少激しく動いても簡単には外れないように、ですね。

その途中に嵌っている二つの鉱石を媒介に、身につけた者の身体を覆うような形で、箱舟内のマナを循環させます。……尤も、その効果が箱舟に由来する以上、使えるのは私たちが『この世界』に居る間、になってしまいますが」

フィアの説明を聴いた後、受け取ったチョーカーをしばしの間眺めつつ、入れてもらった紅茶を飲む。

別にわざわざ今持って来なくても良かったろーに……なんて思うが、少しでも早く渡したかった、との事。

その間、ノーマは彼女の膝の上に頭を乗せ、彼女はそれを撫でつつカップを傾けている。

「……なんかここだけ別世界ねぇ」

そんなとき、そんな声が聴こえ、そちらを向けば、居たのは斑鳩とソルラスカ。

「ねえ青道君。前も訊いたけど、彼女って普段どこに居るの？……学園内で見た記憶が無いんだけど」

「前も答えたけど秘密。……って思ったけど、“これ”をクリストの皆へ渡す都合もあるし、話しておくか」

そんなやり取りをしつつも、俺達の前に座った二人にも紅茶を勧めたところで、

「ミゥ、ルゥ、いい所に」

通りがかった二人に気付き、呼び止めた。どうせだから、チョーカーの効果を試させてもらおう。

「……ってわけで、実際に上手く効果があるか試したいんだが」

「……要するに、それを着ければ外に出ても大丈夫……ってこと？」

斑鳩と、ついでにソルラスカへの箱舟の説明と、同時に件のチョ

ーカーの説明を行い、斑鳩がそう確認してきたので頷いて返す。
「……解りました。では、私から」
率先して答えたのはミゥだ。やはり姉としては譲れないのだろう。
「じゃあ、悪いけど結晶体から出てもらえるか？」
「はい」
ミゥは短く返事をすると、眼を閉じて意識を集中させる。と、結晶体の中の彼女の身体が淡い光を発し、次いで粒子となった後、結晶体の外に出て再び彼女の姿を形取る。
その瞬間、先程フィアが現れたときのように、周囲がざわざわとざわめいた。
まあ無理も無いか。皆にとってはたまに眼にするクリスタルの様なものから、突然美少女が出てきたのだらか。
「では、どうすればいいですか？」
やはり若干苦しそうな表情で言うミゥを後ろを向かせると、俺はそっと彼女の首に手を回し、箱から取り出したチョーカーを一つ、つけてやる。その瞬間、ふっと彼女の息が和らいだ気がした。
「……じゃあ、マナを練ってもらえるかな？」
「はい」
短く返事をし、眼を閉じて集中するミゥ。『観望』を通してみれば、彼女の中に白いマナが渦巻いているのが『視え』た。
そして彼女の手の中に顕現する、錫杖型の永遠神剣『皓白』。
「……どうだ？」
「……すごいです、祐さん」
ぽつり、と感嘆の声を漏らすミゥ。そしてそれを聴いて、固唾を呑んで見守っていた斑鳩とソルラスカもほぅっとため息を吐いた。
「……ふむ、では、私も頼む」
次いでルゥがそう言うと、彼女も結晶体から抜け出して俺の前に姿を現し、後ろを向いた。これは俺につけろって事だよな。
周りはもう騒然だ。
とりあえず、ミゥと同じようにルゥにもチョーカーをつけてやる

と、彼女も一息ついた後、そっと首に巻かれたそれを指でなぞり、小さく微笑んだ。
「……で、ルゥもどうだ？」
「……うむ、すこぶる快調だ。……まさかこうして皆と接することが出来るようになるとは思わなかった。
……出来得るなら、他の皆にも味わわせたいものだな、この気持ちは」
……うん、大丈夫そうだな。俺は二人が別段苦しそうにもしていない事を確認した後、フィアに紅茶をもう一杯貰い、

「それに……こういうのを祐に手ずから着けられると、まるで君のペットにさせられた気分だ。……ふむ、この形は、君の支配欲の現れか？」

「ぶふーー！！」
「うおおお！！？何しやがる祐！！」
「ゲホッケホッ……うあー……すまん、ソル。っていうかルゥ！何を……って言うかミゥも赤くなるな！って痛い痛い痛いナナシ！レーメ！耳を引っ張るんじゃない！！」
「あー……すまない、ちょっとした冗談だ」
……勘弁してくれ。

……
……
……

そんな事があった日の午後。
もうじき、俺達はこの『剣の世界』を旅立つ為、今は学園の皆総

出で、この国の人たちに貰った物資――主に食料だ――を、ものべーに運び込んでいるところ。
それを尻目に、世刻と永峰がじゃれ合ったりしてるんだが……。
「おいおい。お前ら……痴話喧嘩もそれぐらいにして、手伝ってくれよ」
「アイギアの人たちからもらった食料がまだ半分も残ってるのよ。全部ものべーに積み込まない出発できないわ」
森と阿川に怒られてた。いやまったくその通り。
ちなみに俺は、『観望』を台車と言うか荷車状態にして、一気に運んでる。うん、何気に便利です。
＜……汝は我を何だと……＞
黙れ。使えるものは何でも使う、これ基本。
いや、武器や防具以外の形とか取れるのかなーと試してみたら出来たんだよ。この分だと、他にも色々使えそうだ。ほんと、便利です。
ちなみに、俺の横に並ぶようにして、この二日ですっかり学園の連中にも認知されてしまったノーマが歩いている。最初はさすがに驚かれたり、騒がれたけどな。……なんか、俺関係だと解った途端に余り騒がれなくなった。納得いかん。
……いやまぁ、謎のメイド――フィア――だとか、謎の妖精――ナナシとレーメ――だとか、前科があるからなんだろうが……たまに学園の皆からどう思われているのか気になったりするのは、間違いではないはずだ。
それはそれとして、最近ナナシとレーメは俺の肩の上ではなく、ノーマの上に乗っている事も多い。確かに手触りいいからな、こいつ。毛皮ふかふかだし。
「……ふむ、寂しいのか、ユウ？」
レーメ、お前は俺を何だと思っているのか。別に寂しい訳じゃなく、今まで有ったものが無いのは、何か物足りないだけだ。
「……しょうがないですね」

「……やれやれ」
そういいながら俺の肩の上に戻ってくる二人……って、何か凄く遣る瀬無い。くそう。

とりあえずものべーに荷物を運び戻って来たら、カティマとクロムウェイと供に、世刻が歩いていく所だった。
……目先の仕事に集中しすぎて乗り遅れた、と。
「……マスター……」
「……はぁ、まったく……」
そんな可哀想な子を見るような目で見るんじゃない。
こちらに気付いたらしい、集まっている他の面々へ手を挙げながら、彼等の下へと向かった。
「……先輩、ものべーに荷物運ぶために使ってた台車から神剣反応してたんですけど、あれって……」
「うん。『観望』」
まさか、と言った感じで訊いてきた永峰に肯定で返すと、彼女は「便利ですねー」と納得するだけだったのだが……
「……その神剣の使い方って……どうなの？」
むしろ傍で聴いていた斑鳩の方が驚きだった様だ。……流石永峰。『黎明』で肉の解体をした女。
「便利だろ？」
「……確かに便利だけど……いいの、それで？」
「いいの。それよりカティマ達、来てたんだな」
「ええ。これから忙しくなるから、今の内にお別れ言いに来たって。青道君にも会いたがってたわよ？是非お礼を言いたかったって」
「……そうか」
俺は、カティマ達が去った方を眺めながら、小さく息を吐いた。
「ま、縁があればまた逢えるさ。……さ、それじゃあ残りもさっさ

と運んでしまおうぜ。……つーわけで『観望』、もう一働き頼むわ」
＜……好きにせよ＞
「……『観望』は何て？」
「好きにしろってさ」
何とも諦め気味な口調で言ってくる『観望』に苦笑を漏らしつつ、俺は目の前の作業に戻った。

◇◆◇

そして二日後。俺達はとうとうこの世界を旅立つ。
神剣組は生徒会室に集まり、窓から徐々に小さくなっていく地上を眺めている……はずだ。
はず、と言うのも、俺はクリストの皆を伴って、屋上に出ているから。
あの時、この『剣の世界』に初めて来た時にここから見た風景。
あの印象は、今も鮮烈に心に残っている。
だからだろうか、旅立つ今も、ここに来たのは。
それともう一つ。
横に居る、俺と同じ様にこの風景を眺める五人を見やる。
「まあ皆は見慣れてるかもしれないけど」
そう前置きすると、五人はその視線を俺の方へと移してきた。
「いいもんだろ？……結晶体越しじゃなく、生身で見るこういった景色もさ」
そう、それが、俺が今ここに居る、一番の理由。
「……はい。緑豊かで、風が気持ちよくて……こうしていると、煌玉の世界を思い出します」

ぽつり、と、それでもこの場に響く、ミゥの言葉。
彼女達の瞳に浮かぶのは、今は無き故郷への望郷の念か、それとも哀悼の想いか。……それとも、その両方か。

「またいつか……皆で見たいもんだな」

その言葉に皆はただ静かに頷き、俺達は、ものべーが一声鳴いて速度を上げるまでのしばらくの間、眼下に広がる世界を眺めていた。

永遠神剣之章：２１．旅立ちの時、いつか見た景色。（後書き）

少々……いやかなり？無理やり感がありますが、クリスト達を結晶体の外に出しちゃいました。いやまあ、アズラサーセに向かう途中の話で、既にそれは決定事項だったのですけど。
それに伴い……と言う訳ではないですが、ストーリー上の整合が取れれば、になりますが、精霊天翔のエピソードに関する話（ネタバレ含む）を組み込むかもしれません。……確約できない辺りが未熟の現れですが。
精霊天翔自体がまだ発売半年経っていない為、ネタバレっていいのかなー、まあいいかーと思いつつ、このような告知とさせていただきました。

ここからチラ裏。→も十分チラ裏ですが。

もともと、個人への感想返しの中でも何度か言っていますが、クリスト達がここまで前面に出てくるとは思っていませんでした。
「キャラが勝手に動く」とはよく言いますが、改めて事実だなぁと実感する次第です。
それに伴って、……もう遅い気もしますが……あまり変な事を書かないように、と、精霊天翔をとりあえず2周（ノーマル&キャラ別ＥＮＤ。誰を選んだかは……ご想像にお任せします）したところ、思っちゃったんですねー。あ、あそこであのキャラ出したら～とかこういう展開にしたらどうか～とか。
そんな訳で、上記の様な事を書いた、と言う事です。
でも絶対入れるってわけじゃないですから、いつになったら精霊天

翔関係の話入れるんだゴルァ！なんて思っても言ったらだめですよ！

……と、自分への予防線を張っておくｗ

以上、チラ裏終わり。

永遠神剣之章：２２．悪夢、帰りきて。

ズズズズズン……と、地響きの様な音を立て、校舎が揺れる。
まるで地震の様だが、そうではない。……当然か。ものべーは飛んでいるのだから。
と、その時教室のドアが開き、斑鳩が姿を見せた。
「どう、みんな？景色を楽しんでる？」
「ああ、斑鳩先輩！すごいっすよ、この景色！」
「この光景……私たちは宇宙に出ようとしてるんですか！？」
そんな森と阿川の質問に斑鳩は、
「じゃあ、そろそろ他の景色も見えるし、色々説明するわね」
と、教室の電気をつけた。
その間、世刻や永峰は外の景色に見とれ、斑鳩と一緒に入ってきたカティマもまた、ほぅ、と感嘆の表情を浮かべながら外の景色に見入っている。
……そう、カティマだ。
結局彼女は俺達の旅に同行する事にした様で。
「クロムウェイ達には苦労を掛けますが……やはり恩を受けたままと言うのは、私の……いえ、我々アイギアの者の気がすまないのです」
との事。
俺としては、この先も長い戦いが続く事が解っているだけに、彼女の様な有能な神剣使いが加わってくれるのは大歓迎だ。
確かに、即位したばかりで国を離れて大丈夫なのか？と思ったりもするんだが。……尤も、彼女としては、俺達の世界を鉾――いや、ミニオンから救い、そして戻るだけだと思っているのだろうが。
それを考えると……事前にしっかりと、一筋縄では元の世界に帰れないって事を説明しておくべきだったのではないだろうか。
いやまあ、一般生徒達の混乱を考えると言うわけには……ってのの

は解るんだが、どうせ次の世界に行ったらばれるんだしなぁ。
まぁ、そんなことを考えたところで、既にここまで来てしまっている以上詮無い事なのだが。

と、その時、パンパンッと手を打ち合わせる音が響いた。
「はい注目。皆が色々と抱えている悩みを解決する時間が来たわよ。ちゃんと説明するから、聞いてね？」
そう斑鳩が宣言した、次の瞬間だ。
まるでそのタイミングを計っていたかの様に、窓から見える景色が一変した。

言うなれば、樹木。
着かず離れずを繰り返す、巨大な枝。
幻想的で、幻惑的で、ともすれば神々しさすら感じられる――これが、時間樹……。

「この周りすべてが、時間樹と呼ばれる存在。言うなれば世界そのもの。……尤も、私達が認識しているそれぞれの世界より、もっと上位のものだけどね」

「上位って、どういうことですか？」
そんな世刻の質問に、斑鳩は窓から見える一点を指差す。
「皆、あの黒い枝を見て？あれが分枝世界と言われる理由よ。私達が今まで居た場所。剣の世界ね」
「剣の世界？」
聞きなれない言葉だったのだろう、カティマが疑問の声を上げた。
「ああ、剣による戦いが行われていたから、私達がそう呼んでいたの」
「ふむふむ……では、あの黒い枝の中に、私達の世界があるのですね？」

「そうよ。例えば、今からあの枝に突っ込んでいけば、カティマさんの世界に戻れるわけ」
斑鳩の言葉に、その場に居た皆がなるほど、と頷く。
「俺達が教わっていた宇宙って、何だったんだろうな……？」
そんな中、そう漏らしたのは森だった。
「別に、あなた達が教わっていたことが間違っているわけじゃないのよ？」
「じゃあ、俺達の言う宇宙ってのはどこにあるんですか？」
そう言うのは世刻。ああそうか、彼等としては、あそこに入ったらすぐ剣の世界に出ると思っているのか。
「その分枝世界の中にあるのよ」
「……つまり、あの中に入ると宇宙があって、そこに『剣の世界』と言う名の惑星がある、と考えればいいんだろ？
俺達が今ここから見ているあの黒い枝は、宇宙を外側から眺めたものだ、と」
「ええ、そう考えてもらって、概ね間違ってないわ。
つまり、私達の世界があって、その外側に宇宙。そしてそこに通常では越えられない壁があって、その外側に時間樹の空間があるの」
それで皆、大体理解したようだ。
だがなんつーか……こうして実際に眼にすると、とんでもねえ世界だな、時間樹。
「……つまり、ものべーはその越えられない壁を越えることができるんですか？」
「そうよ。途中、宇宙みたいな空間もあったでしょ？」
……そう考えると、とんでもねえ神獣だな、ものべー。
「まあ、頭でごちゃごちゃ考えるより、実際に見たほうが理解度が増すでしょ？」
確かに。百聞は一見にしかずってのはこう言う事言うんだろうな。
「それで先輩……結局私達の元々の世界はどこに有るんですか？」
そこで上がった、永峰の当然の疑問。

まあそりゃ思うよな。

「そんなの分からないわよ」

シン、とした。いや何というか、空気が。

「……斑鳩、もう少し言い回しに気をつけろよ」

「あ、ああ！ごめんごめん！私が所属している組織の拠点からなら、元々の世界のある分枝世界の座標を割り出せるの。だから、その私達が拠点としている世界にいけば大丈夫！」

いやまあいいんだけどさ。……締まらないなぁ。

どうやら自信満々に大丈夫と言い切った事で、話を聴いていた一般生徒の不安も和らいだようで。

そのタイミングで、チャイムが鳴った。これ幸いと生徒達を昼食に送り出す斑鳩。

「いやぁ、危ないところだったわ。思わず本音で言っちゃったし」

「本音と言うと……元々の世界の場所が分からないってことかしら？」

そういうタリアに頷いて返す斑鳩は、

「ええ。本拠地に戻れば分かるとはいえ、ちょっと正直に言い過ぎたわ」

そういって苦笑した。

その後、俺達も食堂へ行って昼食を取ったのだが……太陽と月をも創ってしまうものべー……凄えよあんた。

…

……

……

結局のところ、彼女達が本拠地としている『魔法の世界』に行くことも叶わなかった。

いや、俺としても結果は分かっていても、過程自体は覚えていなかった為にかなり驚いたのだが。

大きく揺れたり小さく揺れたり……まあ何と言うか、揺れる揺れる。

その時俺は皆に断り、クリスト部屋に現状説明に行ってたんだけど、途中会った一般生徒はやはり慌てていた様だ。当然だけど。

彼女達、俺が渡したチョーカーで普通に出られる様になったとはいえ、やはり元々身体に合ったマナで満たされている、通称クリスト部屋が一番居やすいらしく、普段もそこに居ることが多い……というか殆どだ。

ミゥ達は俺の話の中で、やはりものべーが擬似太陽と月を創ってしまったことに驚いていた。ワゥは大はしゃぎだったが。

……それにしても、アズライール奪還の時に初めて彼女達と組んでからと言うもの、こういったちょっとした連絡も、すっかり俺が行うことが多くなった気がする。いや、斑鳩が学園全体を気に掛けないといけないってのは解ってるし、別に不満は無いんだが。彼女達と居るの落ち着くし。

『魔法の世界』に行けない理由は、何度か、世界のある枝の位置がずれるほどの次元震――地震のようなものだ――が起こったらしく、斑鳩やタリアの持っていた世界座標が約に立たなかったのが原因なわけで。

現状俺達に出来るのは、次元震が起きる前に『魔法の世界』があった座標へ行き、その近くの適当な世界に入ってから、そこを元にして『魔法の世界』の場所を割り出す、と言うこと。

「ようするに、なる様になるしかない！ってことだよね？」

そんなワゥの言葉に、苦笑しながら頷くしかない俺だった。

が、次の瞬間――。

「ぼえーーーーー」

ものべーの咆哮と供に襲い来る衝撃と、次いで訪れるフリーフォールの様な落下感。

「うおおおお！」

「きゃあああ！」

「ふあああああ！」

そしてその感覚が収まった時、部屋はえらい状況になっていた。

「う～……びっくりしました……何があったんでしょう？」

「あぁ……多分次の分枝世界に入ったんだと思う。……確認してくるわ」

「あ、はい。行ってらっしゃい」

皆に見送られて廊下に出て、生徒会室に向かう。

廊下に散見される生徒達も、さっきの衝撃には随分と参ったのだろう様子が見て取れた。

その途中、気付いてしまった。その、有り得ない光景に。

眼を閉じて、目頭を抑えて、軽くマッサージしてからもう一度見る。

だが、現実は無情にも変わらなかった。

いやいやいやいやいや！何でアンナモノがここにある！！

「くそ！まずは情報が欲しい……人里を捜さないと！」

＜……『渡りし者』よ。我を使え。我は元より、数多の世界に散り、『捜すため』にこの姿を持って生み出された。この世界を調査することなど造作も無い＞

慌てる俺の脳裏に届いた、正に天啓とも言うべき、『観望』言葉。

ホントお前は使えるやつだ！

「頼んだ！ここが本当に『精霊の世界』だと仮定するなら、一際巨大な木に町があるはずだ！まずそこを捜せ！」

＜承知した＞

「ナナシ！生徒会室に行って、俺達が行くまで行動を起こすなって

伝えてこい！」
「イエス、マスター！」
「レーメ、俺達はクリスト達のところに戻るぞ！」
「うむ！」
突然叫ぶように指示を与え出した俺に、周囲にいた生徒達が怪訝な視線を向けてくるが、そんなものに構ってる暇はなかった。
俺の身体から、『観望』が散っていく感覚がしたと同時に、ナナシは生徒会室へ、俺とレーメは来た道を全速で戻る。

「すまん、皆急いで俺と一緒に来てくれ！確認してもらいたいものがある！！」
突然戻ってきて言い放った俺に、クリストの皆は驚いた表情を見せていたが、俺の雰囲気に只ならないものを感じたのだろうか、すぐに頷いて着いてきてくれた。
先程“ソレ”が見えた場所へと戻る。
道中『観望』から、ここから北東へ行った所に大木があり、その枝の上に街があるのを見つけたと報告された。仕事早え。ナイスだ『観望』。そしてここが『精霊の世界』である事が半ば解り、軽くショックを受けたのも事実。
そしてその場所へ着き、そこにある窓から外を指し示すと、クリストの皆は正に『固まった』。
……確認しなくては。アレが本当に同じものなのかどうか。その為に彼女達を連れてきたのだから。
「……ルゥ、恐らく当時アレを一番良く観察していたのは、君だろう？……間違いないか？」

「あ……あぁ……間違いない。……見間違いなど、するものか……！」

搾り出すようなルゥの声に、彼女達の雰囲気が固く、重くなっていく。

「……なぜ……アレが……？」

ぽつりと、ミゥの声が響く。

「……うそ……」

「そんな……」

絶句する、ポゥとワゥの表情も、険しいのが手に取るように解る。

「……スールード……ッ！！」

憎しみすら混めたゼゥの声が、重々しく周囲に染み渡った。

そう……俺達の前に広がるその光景は、鬱蒼と茂る、ジャングルのごとき密林と、そこに突き立つ、巨大な剣だった。

永遠神剣之章：２３．現状と、検討。

「……祐さん」

ぽつり、とミゥが、突き刺さる大剣からその視線を外す事無く俺を呼ぶ。

「あなたは……私達の世界で起きた事も、知っているのですか？」

そんな問いがミゥからあって、改めて自分の行動を思い起こせば……あぁ確かに、そう取れるな。

まったくもって当然の問いだろうなと思う。俺が同じ立場だったとしても、同じ事を訊くだろう。

「……いや、俺が知っているのは、君達の世界にもあれの様な剣が刺さっていた事、ぐらいだ。……あの剣が何を意味していたのか、あの剣を誰が刺したのか。そう言った事までは知らない。……正確に言えば、知る前に今の俺になった、ってとこだけどな」

ただ、君達の様子を見るに、良いもんじゃないってのは確かだろうな。

そう続けると、彼女達は揃って苦い顔をする。その反応からも確かだろう。

「……確かに、我ながらさっきまでの……いや、今もか。今の俺は混乱しすぎだと思うよ。……流石にあんなものがぶっ刺さってるとは思わなくて取り乱した。……悪いな」

「いえ、いいんです。……ただ少し気になっただけですから。それに、祐さんの取った行動は、不測の事態に対して何等問題は無いと思います」

そう言ってくれたミゥにありがとうと返すと、彼女も微笑んで返してくれた。

……けどまぁ、ここで会話を終わらせる訳にはいかないんだよな。酷く言い出し辛いけど。

彼女達の様子から察するに、彼女達にとって、あの剣は忌まわし

い物で、この世界にそれがある事に混乱しているかもしれない。けど、俺にとってもこれは余りにも想定外だ。……もしアレが、本当にヤバイものなのだとしたら。アレを刺した相手がどれほどの者か、知る必要がある。その為にも、取り急ぎ彼女達を連れてきたのだから。

俺は一度深呼吸すると、改めて彼女達の方へ向き直る。

「……言いたくないかもしれないし、嫌な事を思い出させるかもしれないけど……あの剣の事、教えてくれないか？」

その言葉に、彼女達が息を呑むのが解った。けど、ここで退いちゃいけないんだ。

「……あの剣がヤバイ物なんだとしたら、俺はそんなものをこの世界に刺した人間の事を知る必要がある。……守りたいものを、守るためにも」

「……解りました。あれは――」

結果を言えば、聴いて良かったとも、聴かなければ良かったとも言える。正直言って、げんなりだ。

生徒会室に皆を待たせているために、大分簡単に、ではあったが説明を受け、それでもあの剣がどんなものか、あの剣の担い手がどんな人間かは、嫌という程に解った。

「……少なくとも千年以上を生き、世界に自らの分身を送り込み、世界や人からマナを搾取したあげくに滅ぼす、見た目少女の化け物……か」

「信じられません……よね？」

俺のつぶやきに、ポゥが不安気に訊いてくる。

確かに、普通なら信じられないだろう。そんな人間がいるなんて。

「そうだな……普通なら信じられないし、信じたくないだろうな。そんなのが敵だなんて」
そう言うと、皆の顔が強張るのが見えた。が、俺は構わずに先を続ける。
「けど、残念ながら俺には“そういった存在”の心当たりが有るんだよ。……例によって“知識だけ”だけどな」
「本当……ですか？」
「ああ」
「……それは？」
……エト・カ・リファ、絶対なる戒め、激烈なる力、赦しのイャガ……それにもう一人加わるのかと思うと、頭が痛くなる。……確証はない、が、恐らく間違いはないだろう。
いつの間にか目の前に来ていた生徒会室の扉を開け放ちながら、彼女達へ向けて一言だけ言い放った。
「エターナル」
……
……
……
「すまん、遅くなった」
「ほんと、遅いわよ！……って、ミゥ達まで……。
青道君が来るまで動くなって、ナナシが凄い勢いで来たけど、どうしたの？」
斑鳩が特に慌てもせずに訊いて来るので疑問に思い、窓の外を見てみると……なるほど、角度的にここからは見えないのか。
「永峰、悪いがゆっくりとものべーを旋回させてもらえるか？」

「？……はい」
そんな俺の突然の頼みに、皆も訳が判らないといった様子で居たのだが、ものべーがその場で旋回し、その光景が見えた瞬間、
「なんだ……あれ……」
「……うわ……」
「すごい……あんな巨大な剣が……」
そんな、感嘆ともとれる世刻や永峰、カティマの声と、声も無く険しい顔で立ちすくむ斑鳩とタリア、ソルラスカ。
……そうか、やはり旅団の皆は、ミゥ達から話を聞いていたんだな。
「青道君、あれって……」
「ああ。アレが俺が皆を引きとめた理由、だ。……ミゥ、話、頼めるか？」
「はい」
何かいいたげな斑鳩に頷いて返し、ミゥを促す。先程に続いてもう一度、と言うのも気が引ける所があるが、彼女達から言ってもらった方が“重み”が増すだろう。
もっとも、旅団メンバーには今更だろうが。……いや、そうでもないか。少なくとも、現状を再認識してもらえる。
「……既に滅んでしまった私達の世界、『煌玉の世界』。そこにはあの剣と全く同じものが突き立っていました。
私たちはあれを『幻の大剣』と呼んで、信仰の対象としていたんです。……我々クリスト族が寿命を向かえると、その身体や魂は『命の雫』と言う、マナの結晶となります。そして『命の雫』は、あの大剣を通じ、『大いなる力』と一つとなる、と。
……ですがそれは、我々クリスト族と、煌玉の世界を滅びへ誘い、蝕む呪い……でした」
世刻達がはっとするのが見え、……守れなかった、間に合わなか

った煌玉の世界の事を思っているのだろうか、斑鳩達もまた、その表情を固くしながら聴いている。

「そう……『大いなる力』は、我々クリスト族へ寿命を迎えると『命の雫』となる呪いをかけ、煌玉の世界からマナを搾取していたんです。……あの剣は、世界を滅びへと誘い、蝕む呪いの源だったんです。

……剣の名は、永遠神剣第四位『空隙』。そしてその剣の担い手にして、私たちの世界へ呪いをかけた者……少なくとも千年を越える時を生き、世界に分身を送りこみ、世界から、人から、マナを搾取する存在。その者の名は、『スールード』。……それが、私達の世界を滅ぼした者の名です」

ミゥが話を終えた瞬間、生徒会室は沈黙に包まれた。

「……何だよ、それ」

そんな中、ぽつりと世刻の声が響いた。

「あの剣、破壊しよう。あんなもの有っちゃいけない！」

「ああ、そうだ！その話、俺も乗るぜ！」

そう思い至るのは、ミゥの話を聴けば当然だろうと思う。

世刻の声にソルラスカも同調したところで、斑鳩がピシャリと言い放った。

「ダメよ」

「何でですか！？」

「学園の皆はどうするの？相手は一般の人にものろいを掛けて、マナを奪う様な奴なのよ。確実に、ものべーを狙ってくるでしょうね」

「……っ」

斑鳩の言葉に唇を噛む世刻だが、

「……落ち着け、ノゾム。サツキの言う事は尤もだ」

そうレーメに諭されると、頭に上っていた血が降りたようだ。小さく深呼吸している。

「……すみません、少し焦りすぎました」
「ううん、いいのよ。望君の気持ちも解るし」
「それで……これからどうするの？」
今後の行動を問うタリアに、斑鳩は少しだけ考えたあと、不意に俺の方へを顔を向けた。
「青道君はどう思う？」
俺かよ。まぁ話を持ってきたのが俺だからしゃーないか……。
「……そうだな、とりあえず情報が欲しい。あの剣がいつから刺さっているのかとか、この世界がどんな世界か、どんな状況になっているのか、とかな。……ってわけで、街に行こう」
「街に行く……のはいいのですが、その肝心の街がどこにあるのかが問題ですね。……窓から見えるだけでもこの密林です。人の居る場所を捜すだけでも一苦労でしょう」
そんなカティマの言葉は皆の気持ちを代弁していたようで、皆同意するようにうんうんと頷いている。
確かに、俺も向こう側だったら一緒に頷いてるところだ。
「ところがまあ、大丈夫なんだわ。……ここから北東にしばらく行った所に、一際馬鹿でかい巨木がある。そこの枝の上に街が造られてるぞ」
「……は？……って、何よそれ！？青道君この世界に来た事あるの！？」
ねーよ。
いや驚いてる驚いてる。その様子に、思わずクックックと含み笑いしてしまったら殴られた。痛え。
「落ち着け斑鳩。……『観望』だよ」
「……どう言う事？」
「『観望』が今の、俺がナノマシン型と呼んでいる形状で生まれたのって、無数の世界に散らばって“ナニカ”を捜すためだったらしいんだわ。こいつの特性が『視る』ことってのも、それに起因してるみたいだしな。まあそんなわけで、この世界に粒子状のままの『

観望』を飛ばして、人の居る場所を捜してもらったわけだ」
「成程……って、『観望』の特性の『視る』事って？てっきり姿を自在に変えられるのが一番の特徴かと思っていたけど。……それに、『観望』が捜していた“ナニカ”って言うのは？」
「『視る』事は……まあ色々、としか言えないな。俺も気付いたら『視え』ていたって感覚で使ってるし。……経験則で言うなら、敵の動きに対する見切り、練られたマナの色や流れ、発動された魔法の動き……そんなもんだな。姿を変えられるってのは、あくまでそれに付随する副次的なものに過ぎないってことさ。
それとこいつが捜していた“ナニカ”については俺も知らん。訊いても教えてくれないんだよ」
まあ俺からは以上だと締めて一歩下がり、判断は任せる事にし、隣に来たミゥの頭に手を置いた。
きょとんとしながら見上げてくるミゥ。
「いや、すまないな。君たちにしてみれば、今すぐあれを破壊しに行きたいだろう？」
「……そう、ですね……ですが、それが難しい事も理解していますから」
「……そっか」
……っと、どうやらどうするか決まった様だ。
「それじゃあ、青道君の言う、北東の大木に行ってみましょうか。希美ちゃん、お願い」
「はい。ものべー、お願いね」
永峰の言葉に続いてものべーの鳴き声が聴こえ、学園は風景を後ろに流しながら、ゆっくりと進み出した。
……さて、どんな展開が待っているのやら。

永遠神剣之章：２４．出会い、再会。

ものべーで北東に進む事しばし。見えてきた、巨大なという言葉すら霞む程の大木に、皆は言葉を失っている。
いや、気持ちは解る。実際に見てみるとこれは凄い。まあ離れてもなお見えるあの大剣も大概凄いけどな。
大木にある街には、幾つもの空飛ぶ船が停泊している港の様なものがあり、ものべーもまたそこに停泊する。
さて、次に上がるのは、果たしてまず誰があそこに行くのか、と言う事だ。
「さて……問題は誰があそこにいくか、ね。町の中で戦いなんて起きないでしょうけど……」
「念のため、神剣保持者だけで行った方がいいんじゃねーか？何かあってからじゃ遅いんだし」
斑鳩の呟きに答えたソルラスカの言葉に、斑鳩はふむっと考え込み、
「……そうね、今回はソルの意見を採用しましょうか」
そう言うとぐるっと皆の顔を見回した。
異存は無いので頷いておく。
「あの、先輩……理由聞いてもいいですか？学園の皆も出たいと思うんですけど……」
そう問いかけたのは永峰だ。まあそう思う気持ちは解るけどな。
永峰の問いに、斑鳩は「そうね……」と前置きしてから、
「前回はカティマさんが居てくれたから、抵抗もなく集団で村に入れたけど、今回はそういったツテが何も無いわ。
それにここの停泊所の様子を見るに、色んな世界の人たちがこの町には来ているみたいでしょ。町の中で戦いなんて起きないだろうとは言っても、絶対じゃないし、武器を持っていないと困る事があるかもしれないから」

「わかりました。……じゃあ、皆にも伝えないといけませんね」
「ええ。それは私が言っておくわ。……さて、それじゃあ誰が行くか決めましょうか。……えーと、じゃあ望君、望君とあと二人程選んでくれる？」
「はい……ってええ！？俺が行くのは決定なんですか？」
「そうよー。あ、青道君は除外してね？彼は彼で行ってもらうから。……ってわけで青道君、クリストの誰を連れて行くか、決めてね？」
俺は何気に一緒に行動する事は少なかったが、やはり何だかんだで世刻はこのメンバーの中心に居るから行くのは解るんだが……ここで名指しで俺に来るとは意外だった。いやまあ別にいいんですけどね。恐らくは俺には“剣”の方を中心に調べろって事なんだろう。
「ちょっと斑鳩、彼は彼でって大丈夫なの？何を調べればいいのかとか……」
タリアにそう言われた斑鳩がこちらに視線を向けてくる。
「……クリストの誰かと一緒にって事は、俺には“剣”について調べろって事なんだろ？ってことは世刻達はこの世界の現状についてって事になるが……まあ恐らくどちらも切り離せるもんじゃないだろうから、結局は同じかも知れないけどな。別方向からのアプローチで、多角的に判断したいとか、そんな感じか？」
こんな感じだろうか、と思った事を言ってみると、斑鳩はうんうんと頷いている。
「……大丈夫そうね」
そりゃどうも、とタリアに返して、クリストの皆を見ると、皆期待に満ちた目で見てくれている。
……いやまあ皆行きたいってのは解るけどな。余り大人数になるわけにも行かないし、連れて行くのは多くて二人ぐらいかなぁ。ミゥかルゥのどちらかは必須だろうが……そうだな。
「……じゃあ、ルゥとポゥ、来てくれるか？」
「うむ、承知した」
「はい、解りました」

うむ、特に反発も無くアッサリ決まった。良きかな良きかな。…
…ワゥが若干不満そうだが、我慢してもらおう。
世刻達の方は……まだ若干もめてるな。具体的に言えば斑鳩と永峰。
斑鳩が行く事は決定した様だが、永峰も行きたいと言ってるな。
まぁものべーの関係があるから無理だろうけど……ってやっぱり無理だった。もう一人はソルラスカになったようだ。
「絶対、ぜーったい、終わったらす・ぐ・に帰って来るんだよ！？」
世刻が永峰に詰め寄られてる。いやはや、モテる男は辛いねぇ。

…
……
……

「それじゃ、私たちは酒場へ行って来るわ」
「ああ。俺達は町を一回りしたらそっちへ行くよ」
そんなやり取りの後に斑鳩達と別れ、俺とルゥ、ポゥの三人はこの樹上の町の中へと歩き出した。
酒場で情報収集、と言う言葉が出た時に、世刻が「ゲームじゃあるまいし」と言っていたが、酒場に情報が集まるのは事実であるそうで。
まあ、旅人にしろ町人にしろ、人が集まる場所であることは確かだしな。とはいえ、酒場以外でも話を聞くことは出来る、と言うことで、斑鳩達が酒場にいくなら、俺達は町中を巡ってみようかという事になった。
ましてや、俺達が聞きだしたいのは、あの大地に突き立つ“剣”の事。である以上、流れの旅人よりも町の人から話を聴けた方がいいわけで。

それに、まず何も起こらないだろうとは思うが、もしもの時に町の構造を把握してあるかどうかってのは重要だしな。
まあそんなわけで、広場に居る人や店の店員さん何かに色々聴いてみましょうか、と言う事なのだが……。
その予想外の、俺にとっての出会いと、ルゥとポゥにとっての再会は、斑鳩達と別れてから向かった広場であった。

「さて、それじゃあ――」
この辺から聴き込みしようか。俺の前に立つルゥとポゥへそう続けようとした時だった。

「……あんたたち、もしかしてルゥとポゥかい！？」

そんな声が背後から聞こえたのは。
呼ばれたルゥとポゥは、まさか、と言う顔で俺の背後に居るであろう人物を見ている。
何だろうと思いつつ後ろを向くと、そこには長い薄紅色の髪の、露出の多い服のお姉さんが一人。……うん、初対面でジロジロ見るのも失礼だよな。うん。我慢だ、俺。
そして、その姉さんの後ろには、赤と黒を基調にした衣服に白銀の鎧をあしらった、暗赤色の髪の少女が控えていた。

「ユーラさん！リーオライナさん！」

その二人の姿を認めたポゥが駆け寄り、ルゥがそれに続く。
結晶体ではなく、生身の二人を見て声を掛けた……ってことは、『煌玉の世界』の頃の知り合いか。
眼が合った赤髪の二人へ軽く頭を下げ、俺も彼女等の方へと向かう。
「二人は、ルゥとポゥのお知り合いで？」

「ああ、そうさ。坊やは？」
坊や扱いについ苦笑が漏れたところで、二人の視線が若干ずれてる事に気付く。……ああ、肩の上か。
「青道祐。彼女達の仲間、ですよ。で、この二人が」
「……ナナシです。」
「……レーメだ」
ペコリと軽く頭を下げるナナシとレーメに、物珍しげな視線を向けるお姉さん。
「神獣……では無いようだし、珍しいね。
ああ、アタシはユーラ。古物商さ」
「……リーオライナだ」
自己紹介も終え、立ち話もなんだしどうしたものか……と思った所で、
「これから店に戻るところだったんだ。積もる話も有る事だし……来るかい？茶ぐらい出すよ？」
そんな絶妙なお誘いに、俺達は顔を見合わせ、頷くのだった。

……
……
……

「次元鯨で漂流……ねぇ。中々面白い事態になってるじゃないか」
そう言ってくっくっくと笑うユーラ。
「いやいや、漂流してる身としては笑い事じゃないんだけどな？」
そう言うと、「違いない」と言いつつまた笑うユーラ。やれやれ。
口調が砕けているのは、彼女の店――彼女の住居兼店舗を搭載した船だ――に着いてしばし、「そんな堅苦しくなくていいよ」と彼女に言われたからだ。

今は俺達がこの世界に来た理由を、ざっと説明し終えた所。ルゥ達が生身で活動している事にも、活動できる理由にも当然驚かれた。リーオライナは平気なのかと聴いたら、どうやら彼女は元々『煌玉の世界』の出身ではないらしく、平気らしい。

「じゃあ、アンタ等がこの世界に着いたのは、全くの偶然なんだね。……アタシはてっきり、あの“剣”が有るからかと思ったよ」

「ではユーラは？」

「ああ、商人仲間から、馬鹿でかい剣が突き刺さった世界が有るって聴いてね。様子を見に来てみたら“あの世界”と同じ様な剣が本当に刺さってるじゃないか。

で、しばらく様子をみようと留まっていたら、今日アンタ等に会ったってとこかね」

……ふむ。と言う事は、彼女はアレについて情報を集めてたりするんだろうか？

「……では、ユーラはあの“剣”についての情報を集めているのか？……だとしたら、良ければ私達にも教えてもらえないだろうか」

同じ考えに至ったのだろう、ルゥがそうユーラへと問いかけると、彼女はふむ、と頷き、

「そりゃ、アンタ等にだったら構わないけどね。……アンタ達はどこまで知っているんだい？」

「『煌玉の世界』での事なら、大まかな流れを。敵に関してなら、どんな相手かは聴いています」

そう答えたのはナナシ。それにレーメが続ける。

「具体的に言うならば、スールードの容姿、正確、考え方などだな」

「……ならいいか。とは言ってもアタシ達もそう突っ込んだところまでは判らないよ」

ユーラはそう前置きすると、あの“剣”について解っている事を話てくれた。

それによると、あの剣がこの世界に突き立ったのは、今から約三

年前。『煌玉の世界』に現れた様な『悪魔』の姿は見られず、代わりに見えるのは、感情を持たず、言葉も通じない人形の様な人間――この世界の人間は、ヒトモドキ、と呼んでいる様だ――だった。ヒトモドキはその前――約十年ほど前――からもたまに散見されていたが、あの“剣”が現れてからは、その頻度が増しているらしい。そして今現在、スールードらしき人物の姿を見たものは居ない。……と言った所の様だ。

彼女の話を聴き終えた瞬間、思わず頭を抱えた。

……考えれば考える程に、最悪の答えしか見つからない。

「む……どうした。大丈夫か？」

そう声を掛けてくれたリーオライナへ頷いて返し、彼女達へ解っている事と、俺の考えを説明する。

俺達の敵に『光をもたらす者』と言う組織があること。そこの連中は、ミニオンと言う、下位神剣を持つマナ存在を兵士として使うこと。ミニオンは――創りだす者にも拠るだろうが――基本的に感情は薄く、命令を忠実にこなす人形の様な存在であること。

そこまで言ったところで、彼女達も俺の言いたい事を解ってくれたのだろう、何とも言えない表情をしている。

「ユーラのくれた情報から察するに、『光をもたらす者』は約十年前からこの世界で活動を始め、三年前、“剣”の登場と供に活発化しだした。……考えられる可能性は二つ。一つは、スールードと『光をもたらす者』が敵対関係にあり、スールードと戦うために、ミニオンを量産している。もう一つは……」

「スールードと『光をもたらす者』が協力関係にあり、“剣”の何がしかの能力を使って、ミニオンを量産している、か……。アンタの考えではどっちだと思う？」

「後者」

間髪入れずに答える。っていうかそれしか思い浮かばねえ。

「あの……作戦行動中に突如乱入された、と考えると、前者の方が可能性があるのでは……？」

おずおずとそう言ってきたのはポゥ。なるほど、そう言う考えもあったか。……でもなぁ……。

「そうだな……旅団に属していたルゥとポゥは知っているだろうけど、『光をもたらす者』の目的って、言うなれば時間樹の剪定なんだよ。弱小分枝世界を滅ぼして、その分のマナを他の世界に回すっていう、な」

そう説明すると、ルゥとポゥはコクリと頷き、ユーラとリーオライナはなるほど、と頷く。

「対して、ルゥ達に聴いたスールードの行動は、世界からマナを搾取すること。けど、マナを搾り取られた世界の行く末は、結果として滅びるしかない。……要するに、過程と目的は違えど、こと“世界を滅ぼす”と言う点においては、両者の行動は一致してるんだよ」

「……成程。であるならば、無駄に争うよりは協力した方が良い、と言う事か」

そう続けたリーオライナへ「そう言う事」と返し、ガシガシと頭をかいて、大きくため息が出た。

「確かに、ポゥの言う可能性もある。けど俺としては最悪な方を想定しておきたいのさ。……取り越し苦労になれば一番なんだけどな」

そう言うと、皆も俺の言葉に納得してくれたようで、成程、と頷いてくれた。

……ああ待てよ、確かこの世界では、『光をもたらす者』は精霊回廊を占拠して、そこをミニオン生成プラントにしていたはず。……ってことは“剣”には別の目的がある？……考えられるとするなら、『煌玉の世界』にしたような、呪いの媒介、永遠神剣の本能とも言うべき、マナの収集ぐらいか？

……はぁ、考えたところで具体的なもんは解らない、か。

「……礼を言うよ、ユーラ、リーオライナ。とりあえず仲間と合流して、情報交換と今後の対策を考えてみるさ」

「そうかい？……まぁ、何か有ったら相談しなよ。出来る限りは力になるさ」

「ああ。どちらにしろこの世界にはしばらく居る事になるだろうから、今度はミゥ達も連れて顔を出すよ」

そろそろ斑鳩達とも合流すべきだろうと言うことで、俺達はユーラの店を後にし、酒場へと足を向けた。

永遠神剣之章：２５．精霊の娘、ルプトナ。

ユーラ達と別れ、斑鳩達との合流場所に決めていた酒場へ向かう。
道中町並みを見渡して思うのは、確かに機械類がまるで見受けられない、と言うことだろうか。
樹上にあるだけあって、自然と一体化した町だなぁ。なんて思いながら進む事しばし、目的の酒場へ着いたので中に入り、ぐるりと見渡す。
店内の雰囲気は、これぞ酒場！と言った様な感じだ。……解らんって？要するに、ファンタジー系のゲームに出てきそうな酒場、と言えばいいだろうか。うん、こう言う雰囲気は嫌いじゃない。
そこで、俺達の姿を見て取ったのだろう、手を振る斑鳩達の姿を見つけたので、そちらへ向かう、と、何か美味そうな料理を食ってた。店員の娘――レチェレ、だったか――がサービスしてくれたらしい。……そういやそんな展開だったな。
とりあえず食べ終わるのを待って、ものべーに戻る事にした。話はそれから。全員居るときに話した方がいいだろう、と言うことで。
その際に、隣のテーブルに座っていた、赤髪の女性と眼が合った。ぺこり、と頭だけ下げると、向こうはにこりと微笑んでいた。
談笑する斑鳩達へと視線を戻す。俺は今、上手く動揺を隠せているだろうか？
大丈夫だ、慌てるな。アレはただの欠片にすぎない。
「それじゃ、行きましょうか」
いつの間に食べ終わっていたのだろうか、そう斑鳩に声を掛けられ、頷くと俺は酒場の外へと出て、出来るだけ離れたところで――。
「……っ……ぶはぁっ……」
恐らく、我ながら緊張していたのだろう、知らず止めていた息を吐いた。
――赦しのイャガ。永遠神剣第二位『赦し』を持つエターナル…

…その、欠片。

この世界……時間樹エト・カ・リファへ入った際、強大な力を持つ者は、強制的に『神名（オリハルコンネーム）』を植えつけられ、力を制限される。

神名は、力の弱いものが持てば、その神名に即した力を身につける事のできるブースターとなる、が、力の強い者にとっては、その神名の扱える範囲の力までしか振るえないと言う、枷にしかならないものだ。

それを嫌ったイャガは、己の身を無数の分身に分ける事で、神名を植えつけられないレベルまで力を分散し、この時間樹に入り込んだ。その分身――イャガの欠片が、さっきの女性。

中には細分化しすぎたせいで本来の目的を忘れ、その入り込んだ世界に適応してしまった欠片もあるそうだが――この世界の彼女がそうかどうかなんて、判断は付かない。……どちらにしろ、今は動いていないのだから、気にしすぎるのも良くは無いと解ってるんだが……、正直、生でその姿を見てしまうと、なまじ知識としてある分、意識してしまうな。

……少なくとも彼女は、『叢雲』が動かない限りは派手な行動は起こさない……はず。今は目の前の問題に集中しよう、うん。

…

……

……

「それじゃあ、まずはこっちで解った事ね」

そう前置きして斑鳩が話した内容は、

この世界では人間と精霊が争っている。何でも、人間と精霊が争っている理由は、地上の開拓をしに行った人間の開拓団を精霊が殺したからだと言うのだが……。それにともなって、地上の森のほぼ

全ては精霊の支配地域で、精霊側には『精霊の娘』と呼ばれる、ルプトナという名の少女が居て、よく食料や燃料調達などを邪魔してくる。ここ数年は特に、ある程度深くまで入ろうとすると、必ず邪魔してくるそうだ。その話を聴いた――話してくれたのは、たまたま酒場にいた町の責任者であるロドヴィゴと言う男性――時に一緒に話を聞いていた酒場の店員――レチェレ曰く、「ルプトナさんは悪い人じゃないです」とのことなのだが。

……とまあ、この様なところ。

次に俺も、ユーラ達に聴いた事を話していく。その内に、やはり皆の表情は険しくなっていった。

「……“剣”の登場と供に活発化しだした“ヒトモドキ”……ね」

「ああ。……今の話を踏まえて俺の予想するところでは、“ヒトモドキ”はミニオン。生み出したのは『光をもたらす者』。そしてスールードと『光をもたらす者』が手を組んでいる……ってとこだな」

「恐らくはそうでしょうね。……となると次の問題は、精霊と『光をもたらす者』の関係ね」

そうタリアが言うと、同意するように頷く皆。

……さて、『原作』通りであるならば、精霊が『光をもたらす者』に騙されて精霊回廊を奪われた事になる。

……であるなら、精霊と『光をもたらす者』は敵対関係にあるのは確実なんだが……まあ、恐らくは現状もそれと同様で間違いないだろう。そう判断できるのも、斑鳩達がレチェレから話を聴けていたのが大きい。

そう考え、つい「ふむ」と一人頷いた所で、

「……青道君、何か考えがあるの？」

と斑鳩に問われた。……どうやら見られていたようだ。

「ん～……まぁ、一応は」

そう答えると、「聴かせてもらえる？」と促されたので、頷いて返す。

「じゃあまぁ、俺の勝手な考えなんだが……恐らく精霊と『光をもたらす者』は敵対している、だろうな」
「……その理由は？」
「ルプトナの存在とレチェレの話、だな」
そう言うと、なるほど、と言う顔をしたのは斑鳩とカティマとタリア。
今一よく判っていない顔をしているのは、世刻と永峰とソルラスカ。
「……どういうことだ？」
案の定、ソルラスカがそう訊いてきた。
「つまりだ、『精霊の娘』と呼ばれている以上、ルプトナってのは精霊側に属している事。ルプトナと言う名が解っていると言う事は、ルプトナは話しが通じる相手である、と言う事。……名前なんてのは、自分から名乗るか誰かから紹介されないと判らんものだしな。そしてさっき斑鳩が話してくれた、レチェレから聴いたって言う話」
そこまで言ったところで、永峰が「そっか」と言いながらポンと手を打つ。
「そのレチェレさんが言ってたのは、『ルプトナさんに助けられた』、『ルプトナさんに邪魔された人の中に殺された人は居ない』って言う事。……ルプトナさんと話が通じるっていう事は、ルプトナさんはミニオンの様な存在ではなくて、ルプトナさんが『光をもたらす者』だとしたら、レチェレさんを助ける理由も、町の人の邪魔をするときに、殺さないようにする理由も無い……って事ですね？」
「良く出来ました。……さらに言うなら、ここ数年は、ある程度まで深く入ろうとすると必ず邪魔してくる……ってのは、それ以上入るとミニオンに襲われるから……って事じゃないかと思うし、恐らくルプトナは神剣使い……もしくはそれと同等の強さを持っている、と考えられるな」
「なるほど……精霊と『光をもたらす者』が敵対しているのなら、精霊とミニオンとの間に戦闘が起こっているはず。……となると、

精霊側で戦っている可能性が一番高いのは、人間たちの邪魔もしているルプトナってことか」

そう結論付けた世刻に「まぁ、レチェレの言を全面的に信じるのであれば、だけどな」と付け足しつつ頷いて、斑鳩に「俺の考えは以上」と伝えると、後の判断は任せる事にした。

斑鳩は皆の視線を受けつつしばし考えると、「よしっ」と頷いて顔を上げた。

「それじゃあ、明日はまずロドヴィゴさんに会って、地上に降りる際に護衛として雇ってもらうことを交渉しにいきましょうか」

この世界にいつまでいるか判らないけど、先立つものは必要だしね。そういった斑鳩は、「それと」と繋げる。

「出来るならルプトナって娘にも話を聴きたいわね。今日聞いた人間と精霊が争っている理由……開拓団を全滅させたのが、もし精霊ではなくミニオンなのだとしたら……精霊と人間の間を取り持つ事が先決だと思うの。じゃないと……この世界に住む人たちが手を取り合って協力しないと、そう遠くない未来にミニオン……いえ、『光をもたらす者』にこの世界は滅ぼされるかもしれない」

斑鳩の言葉に、皆は思い思いに頷いて返した。特に、ついこの前自分の世界を『光をもたらす者』に脅かされていたカティマの決意は強いようだ。

「それじゃあ学園の皆は、明日ロドヴィゴさんに『学生服を着た人たちは危険な人たちじゃない』って事を説明してから、自由行動って事にしていいですか？」

「そうね。そうしましょうか。……じゃあ、今日はこれで解散。あ、早苗先生には私から言っておくわね」

永峰の問いに斑鳩がそう答えてこの場を締め、この場は解散となった。

……

……
……

明けて翌日、突然の申し出であったにも関わらず、無事にロドヴィゴさんとの話し合いをする事が出来た。

その際に、以前彼等の開拓団を殺したのは精霊ではなく、ヒトモドキ――ミニオンの可能性が高い事を伝えるも、やはりと言うか、彼等は「ヒトモドキも精霊の一味でしょう」と疑って止まない。

だがまぁ、どちらにせよ、次の調達部隊が地上に降りる際には連れて行ってくれるそうだ。それについては一安心である。彼等にしろ俺達にしろ、食料や燃料は調達しなければ生きていけないのだから。

ちなみに、次の調達部隊が降りるのは五日後。どうやら昨日降りたばかりだったようで、斑鳩達が酒場でロドヴィゴさんと会ったのも、彼等が丁度地上から戻ってきた所だったからだとか。

「それじゃあ、明日にでも一度、神剣使いのみで一度地上に降りてみましょうか」

ロドヴィゴさんとの会見を終えた後の、斑鳩の提案。

それに各々頷いた後、実際に地上に降りる人選をする。現在、ものべーに居る神剣使いは、クリスト達が神剣の能力のみではなく、神剣そのものを使える様になった為に、計十二名。念のため、の事もあるので、半数は上に残る事になる。

試しに行きたい人ーと立候補を取ってみたところ、全員の手が上がった。……みんな好奇心旺盛ですね。

「……どうしましょうか？」

「ジャンケンでいいんじゃね？」

皆を代表するようなポゥの呟きに答えた俺の声に、皆がまぁそれでいいか、と頷く。いやだってそれが一番後腐れ無くていいじゃん。

まぁ実際は能力が偏ってもまずいので、各属性に分かれて行く人と残る人をそれぞれ決めるわけだが。……あれ、俺って何になるんだろう？

「白……でよろしいのでは？」

「白……でいいのかねぇ？」

まあいいか。「オーラフォトンを使ってましたし」と言うナナシの言葉に従って白にしておく。うん。俺は白属性だ。多分。

いやまあ、あの時――初めて『観望』を使った時――練りこんだマナがオーラフォトンになったのも……いやそれ以前に、そのマナが『オーラフォトン』である事を認識したのも無意識……いや、『観望』に流し込まれた知識か？まあ兎に角、意識して使ったわけでは無いから、自分ではさっぱりなんだが。

……と、言うわけで。

順調な協議の末に決まったメンバーは、斑鳩、世刻、ソルラスカ、ワゥ、ポゥ、そして俺である。……あれ、良く考えたら、ルプトナは世刻の前世である破壊神ジルオルを感知して狙って来るんだっけか。……ま、まぁ、無事に世刻が行くことになったから良しとしよう、うん。

兎に角、明日行くメンバーも無事に決まったので、本日は自由行動となった。ああ、無論学生服集団が無害だと言うのは伝えてあるし、無力である事も伝えてある。

学園の皆にも放送でその旨は伝え、破目を外さない様に言い含めてあるので、トラブルは起きない……と、信じたい。まぁ、皆も下手にトラブルを起こせば、危なくなるのは自分たちの身だと言うのは解ってるだろうから大丈夫だろう。

ちなみにミゥ達は、ルゥとポゥの案内でユーラの店に顔出しに行くらしい。

各言う俺は、久しぶりに箱舟に篭る事にした。本格的な戦闘になるまえに、自分の能力の再確認もしておきたいしな。出来る事と出来ない事、出来た方がいい事、使える様になった方がいいもの等な

ど、だ。

…

……

……

そして翌日、俺達は今樹上の町から降り、地上の森林へと足を踏み入れている。

「はぁ～……こりゃすげえな」

ソルラスカがそう言うのも無理はないだろう。実際、俺もそんな感想しか出てこない。

俺達にすれば、カティマの世界の森も大概に凄いと思ったが、ここはそれ以上……比べ物にならないほどだ。

とりあえず今日の俺達の目的は、基本的には周辺地形の確認。あわよくばルプトナとの接触。

「……なんつーか、周辺地形も何も見事に森ばかりだな」

ぼそりと言った俺の言葉に、ポゥが「そうですねー」と苦笑いを浮かべる。その時だった。

「見つけたぞ！！」

そんな声と供に、俺達の前に一人の少女が降り立つ。

東洋風の……強いて言うなら、巫女服を崩した様な服装の、黒髪の少女。

その少女は、世刻を指さして言う。

「……感じる。ボクには解るぞ！お前が『災いをもたらす者』だな！ボクの名前はルプトナ。精霊の娘、ルプトナだ！ジルオル、覚悟

しろ！」

その言葉と供に、少女――ルプトナは、世刻に向けて飛び掛ってきた。

「ちょ……ちょっとまて！何だジルオルって！俺は世刻　望だ！」

ギャリッと言う音と供に、彼女の靴と世刻の剣が交差し、ルプトナはその反動を利用して飛び退る。いや、身軽だね、ほんと。

「セトキ、ノゾム……？なるほど、そっちが転生体としての名前なんだね。でもそんなの関係ないよ！」

「……転生体？」

「『災いをもたらす者』、ジルオル改め、ノゾム！覚悟しろ！」

ルプトナは再び構えを取り、皆もまた武器を構える。

「……青道君、何、それ？」

そんな中、斑鳩が俺が手に持っているものを見て、そう声を掛けてきた。

俺が手に持っている物……網状の、塊。

「ん？武器」

「ちょっ！ふざけ……ている訳じゃなさそうね？」

「当然だ。ほら、気をつけろ」

ルプトナの狙いはあくまで世刻とはいえ、こちらに対して何もしてこないと言う訳ではない。

俺と会話していた隙を突いて斑鳩に放たれた蹴りを、彼女の腕を引いて位置をずらし、逸らさせる。

「ありがと！」

そう言ってルプトナに斬りかかって行く斑鳩を見送りつつ、俺はタイミングを見計らっていた。

ルプトナの動きは素早い。さすが野生児。その上武器が靴型永遠神剣だ。機動力は群を抜いているだろう。今でもルプトナの動きに互角についていっているのはソルラスカだけだ。

「そこぉ！ランサー！」

「祐さん！」
俺に向けて放たれた三連撃を、ポゥが前に出てブロックしてくれる。次いで追いすがったワゥが、炎に包まれた『剣花』の左の刃で袈裟懸けに斬りかかるも、ルプトナはそれを下がってやり過ごした。その瞬間、ワゥはさらに身体を回転させ、右の刃を振りぬくと、刃と柄の部分が分かれ、鎖に繋がれた刃の部分がルプトナへ向かって飛んでいく。
「うわっ！ちょっ！」
炎を纏って向かってきた刃を、慌てつつもその足先を凍りに包んで蹴り返したところで、世刻がルプトナに斬り込んだ。
「大人しくしろ！」
「嫌だよ！」
『剣花』を蹴り返すのに振り上げた足で、そのまま『黎明』を防御すると言う無茶な鍔迫り合いをするルプトナ。
ソレは奇しくも、俺が狙っていた瞬間だった。

「どっせーい！」

手に持っていたそれをルプトナに投げつけると、それは空中で広がり、ルプトナに覆いかぶさった。世刻ごと。
「うわわわわ！？」
「ちょ、先輩！？」
「くっそー！こんなもの、すぐ破って……って、破けない！？」
ルプトナがもがけばもがくほどに網は絡みつき、二人は大混乱。
周りで見るのは苦笑いである。
「……なんか、『観望』ってまともに武器として使われる事の方が少ないんじゃ？」
ぼそりとした斑鳩の声が聴こえた気がするが、気のせい気のせい。
「ははは、無駄だルプトナ。そんなナリでもそれは永遠神剣。破く事なんてできないさ」

もがくルプトナに近づきながらそう言うと、彼女は驚愕の顔でこちらをみやる。
「そ、そんな！？投網型の永遠神剣だなんて、そんなものが……」
「世の中にはぴこぴこハンマー型の神剣だってあるんだ。投網型が有ったって可笑しくねーぞ」
投網型永遠神剣『豊漁』ってか？いや実際は投網型じゃないですけどね。
なんか後ろから「ぴ、ぴこはん！？」とかって聴こえてきたがまあ無視。
俺はもがくのを諦めたルプトナの前にしゃがみこんで、視線を合わせる。
「なあルプトナ。先に聴かせて欲しいんだが」
「なんだよ……？」
「数年前に、地上に降りた人間たちの開拓団を全滅させたのは……君たち精霊か？」
俺の問いに、他の皆も固唾を呑むのが解った。
そんな雰囲気を察したのだろうか、ルプトナも真っ直ぐに、俺と視線を合わせて来る。
「違う。精霊達は、殺したりなんてしない！やったのは、変な、感情のない人形みたいな奴等だよ！」
ルプトナのその答えに、皆も、そして俺もほぅと息を吐いた。
斑鳩の方を見ると、彼女はこくりと頷く。それを受けて、俺は『観望』を粒子に戻し、網を消した。
「人間たちは、アレを精霊の仕業だと思ってるんだ。……だから、君に頼みがある。
人間と精霊の仲を修復するために、話し合いの場を設けたいんだ。だから、その事を精霊の長に伝えてもらえないかな？」
突如解放された上に、行き成り「橋渡しになれ」と言われて、驚いているのだろう、きょとんとするルプトナ。
「……解ったよ。けど、今回だけだからね！今は負けたから、

そっちの願いを聞いてやるだけなんだから！」
　がーっと言う擬音が聴こえそうな感じに言うルプトナに苦笑しつつ、わかったわかったといっていやると、今度はむすっとしてしまった。いやはや、何と言うか、表情の良く変わる子だ。
　それじゃあ頼んだよ……と送り出すまえに、と。
　彼女に近づいて、彼女にだけ聴こえる様に声を落とす。
「……それとな、ルプトナ。世刻のやつはまだジルオルに呑まれていない。あいつも、必至にジルオルと戦ってるんだよ。……だから、あいつを狙うのやめてもらえないかな？」
　ルプトナは驚いた様子で俺の顔を見て、次いで世刻を見てから、
「……考えておく」
　そう言って、その場を後にし、森の奥へと入って行った。
　それを見送った後、仲間の方へと向き直り、「酷いですよ、先輩」と文句を言ってきた世刻に「良い撒き餌だったぞ」と誉めてやる。
「悪いな、斑鳩。勝手に話進めちまった」
「良いわよ。元々精霊と人間の中を取り持つって言うのが目的だったし。……何ていうか、思ってたよりも素直で良い娘みたいね。
　……それじゃ、一旦上に戻って、皆やロドヴィゴさんへ報告しましょうか」
　斑鳩はそう締めると、俺の方へ近づいてきて、声のトーンを落としてきた。
「ね、最後にルプトナと何話してたの？」
「……ジルオルと世刻について、な。世刻はまだジルオルに呑まれてないから、狙うのやめてくれってね」
　まぁ、隠すことでも無いし、隠したとしてもルプトナからばれるだろうしって事で話して置く。
「……そんなことまで知ってるのね」
「……ま、それなりに。……何と言うか、何もかもが丸く収まれば良いんだけどなぁ」
「……まったくね」

最後に二人で苦笑して、俺達は帰路に着いたのだった。

永遠神剣之章：２６．調達部隊、地上にて。

町へ戻った俺達は、残っていた皆やロドヴィゴさんへと下界であった事を報告する。

案の定と言うか、ロドヴィゴさん達はやはり、開拓団を殺したのが精霊では無いと言う事を信じ切れていないようであったが、それでも向こうが話し合いに応じるのであれば……と了承してもらえた。

恐らくは、四日後の次の食料調達時に、何らかの接触があるだろう……ということで、その日までは俺達も好きに過ごすこととする。無論、町中とものべー内に限る、ではあるが。

また、まず安全ではあろうとは思うが、神剣組は町中巡回とものべー常駐のローテーションを組んだ。……とは言えまぁ、フリーの時間が増えた事は事実なわけで。この時間を利用して、俺はやはり箱舟を利用して鍛錬に励むこととする。……足引っ張るわけにはいかんしな。当然ながら、前述の巡回などもあるので篭りっぱなしと言う訳には行かないが。

……そんなこんなで四日が過ぎた。

この四日の間、まず最初にカティマから剣術の基礎を、ミゥから棒術の基礎を学んだ。応用の技に関しては、今まで散々敵から放たれたものや、側で見ていた仲間のものなどの記憶（ストック）があるのでいいが、それらを使える様に練習するにしても、やはりまずは、基本が確りしていなければどうしようもない。その為の基礎だ。

尤も、これ許かりは反復練習の継続あるのみなので、日課にしてじっくりやるしかないのだが。

魔法に関しては、幾つかの新しいものと、あとはひたすらに数を撃っての練習及びスピードアップ。こちらもやはりコツコツこなして行くしかないのである。

その後はクリストの皆や、他の仲間たちからも、武器の扱い方や体術などの講釈を受ける。

世刻や永峰なんかは、神剣や前世の記憶からの情報のフィードバックで体が自然と動くとのことなんだが、俺はその辺は全く無いので、実際に見て、動いて、体で覚えていくしかないのだ。……ま、フィアから授かった“多才”スキルや“完全記憶”のお陰で、身につける速度は他の人より早いみたいなので助かっているが。

……

……

……

「皆さん、揃いましたかな？……では行きましょうか」

ロドヴィゴさんの言葉を合図に、町の青年団と学園からの有志、そして俺達が地上へと降りる。

女性陣は主に食料の採取、男性陣は燃料や石材、木材などの材料の採取に別れる。その為、念のため斑鳩達の方へはナナシに付いてもらっており、何か有ったら念話ですぐに知らせるように言ってある。

「この辺の木を切り倒せばいいんだよな？」

そんなソルラスカの声が聴こえ、そちらの方を見ると、ソルラスカがその爪型永遠神剣でもって、次々と木を切り倒して行く。爪で切り倒すとかどうやってんだと思わなくも無いが、技でも使っているのだろう。

一方で世刻は、『黎明』でもって岩を砕く……というより斬っていた。いやお前等、役割交代しろよ。

「止めぬかー！刃毀れしたらどうする！？」

「こんなんで刃毀れするぐらいなら、もうとっくに折れてるよ」

そんな世刻と世刻のレーメのやり取りも聴こえて来る。……がんばれレーメ。

そんなこんなで採取作業を続けていた時だった。
＜……北西及び東にミニオンだ。気をつけよ＞
念のために、と周囲に散布していた『観望』からの警告の声。
「世刻！ソル！北西と東に敵だ！
ロドヴィゴさん！町の方角には敵が見受けられませんので、非戦闘員をすぐに集めて、慌てず速やかに退避を！」
事前に『観望』を撒いておくことは伝えておいたので、世刻とソルラスカはすぐに武器を構え、ロドヴィゴさんも俺の忠告通りに行動してくれる。
「ノーマ、来い。……非戦闘員のガードを」
ノーマを呼び出しそう命令すると、ノーマは一度喉を鳴らしてから退避する人たちの方へと向かって行った。
それを見送り、こちらの状況を伝えるためにナナシに念話を送る。
（ナナシ、こちらにミニオンが現れた。そっちにも出る可能性が高いから、斑鳩達へ伝えておいてくれ）
（はい。――っ！どうやら同時に仕掛けてきた様です。今しがたルプトナが現れ、囲まれているとこちらに忠告を）
（そうか……気をつけろよ？）
（イエス、マスター。……マスターもお気をつけて）
ナナシとの念話を終え、世刻とソルラスカに向こうにも敵と、ルプトナが現れた事を伝える。
その間に大分敵が接近してきたようで、周囲から神剣の気配を感じ取れる。
俺も『観望』を剣状にして出して構えつつ、
「「『セイント』！」」
レーメと共に攻守を上昇させるアーツを全員に掛け、迎撃の態勢を整えたところで、ミニオン達がその姿を現した。
「いっくぜえええ！！！」
ソルラスカの雄叫びを合図に、三方に分かれて敵に向かって駆け出す。――まずは覚えたての一撃！

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ　ニウィス・テンペスタース・オブ（ウェニアント・スピーリトゥス・キアーレス・オブスクルーヌム・インフィニティ・オルコト・テンペスタ・サンターリス）来たれ氷精　闇の精！　闇を従え　吹雪け　常夜の氷雪　闇の吹雪（スクランス）！！」

呪文を唱えながら肉薄し、解き放つと共に派生した氷を伴った闇の奔流は、直線状に居た五人程のミニオンを巻き込んで吹き飛ばす。

その直後、襲いかかってきた青ミニオンの斬撃を受け流して空いた胴を斬り払い、そのまま振り上げた『観望』を大剣（グレートソード）へと変化させて振り下ろし、斬りかかって来た二人のミニオンへ叩き込んだ。

その直後、視界に写る大気が赤色のマナに染まっていくのが『視え』た。

「――っ！ユウ！」

「解ってる！」

レーメの忠告の声に、『観望』を盾に変化させて身体を隠すように構え、

「おおおおお！！」

思い切りマナを流し込んで、強固な力場（オーラフォトンバリア）を形成する！

直後訪れる、爆音を伴った衝撃に、盾の向こうが紅蓮に染まった。

一斉に放たれたファイアボルトだろう、雨の如く降り注ぐ炎弾。

それを受け止める力場が軋みを上げた。

「レーメ！」

「解っておる！『グランストリーム』！！」

先程とは逆のやり取りの末に放たれたレーメのアーツは、瞬時に俺を中心に巨大な大気の奔流を発生させ、絶え間なく降り注ぐ神剣魔法を吹き飛ばし、更に周囲のミニオン達を切り刻む。

アーツの風が止むのと同時に、俺は姿勢を低くして前方へと駆け出した。直後、頭上を通り過ぎた『ファイアーボール』と思わしき炎弾が後ろに炸裂する音がしたが、無視して駆け抜ける。

「はあああ！！」

長刀状に変化させた『観望』による、薙ぎ払い二連。次いで振り上げ、巨大なハンマーに変化させながら振り下ろす！

ドゴンッという大地を震わせる音と共に、三人のミニオンを弾き飛ばし、次いで、攻撃の直後を狙ってきた赤ミニオンの攻撃を、左腕を覆うような手甲に変化させて受け止めた。

受け止めたはいいんだが、武器に炎を纏わせた攻撃だったために、熱くて痛え。

「『ゲイルランサー』！！」

そのまま押し合いになりそうになった所で、レーメのアーツによって生まれた指向性を持った激風が、赤ミニオンと、その背後から来ていた黒ミニオンを吹き飛ばす。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）！！　連弾・光の7矢（セリエス・ルーキス）！！」

そこに魔法をぶち込んでやったあと、『観望』を大剣にして、横合いから迫ってきていた白ミニオンに対して振りかぶり、

「……ルゥ直伝、七ツ胴！！」

連続した斬撃を叩き込んだところで、動きを止めた。

見回せば、とりあえず俺の周囲にいたミニオンは、今のが最後だったようだ。

一度息を吐き、今の戦闘で負った傷をアーツで癒してから軽く深呼吸して、気持ちを落ち着けると、

「……よし、世刻達の援護に行くぞ」

「うむ」

レーメと頷きあい、世刻達の方へ向かうことにする。

…

……

……

先に世刻に加勢し戦い始めたところで、ナナシから向こうでの戦闘が終了したので、こちらに合流するとの念話が入った。

ああ、今回地上に降りているのは九人。その上で男性陣と女性陣に分かれているので、向こうの方が神剣使いの人数が多いのだ。
その後に合流、こちらのミニオンも殲滅する事に成功した。

「マスター！ご無事でしたか？」
合流後、飛びついてきたナナシを受け止めてやり、頭を撫でる。
うん、いい手触り。
「ああ。ナナシも無事でなにより。……あれ、そういえばルプトナは？」
合流した中に、ルプトナの姿が見えなかったので訊いてみると、どうやら向こうの敵を殲滅したあたりで別れたらしい。
彼女によると、精霊の長老は会談を承諾。だが向こうからは自由に動けないために、彼らの住む場所へ来て欲しいとのこと。時間は三日後。ルプトナを町の近くへ寄越すので、彼女に案内してもらうようにとのことだ。
俺達は一度町に戻り、ロドヴィゴさんへと報告。彼もそれを承諾し、三日後再び俺達を護衛に雇う事になった。
その後、再び有志を募り、今回逃げるときに放って行った物資を回収し、今日の調達は終了する。

町に戻った後、今回の慰労を兼ねて、レチェレの酒場で打ち上げをする事にしたのだが……。
「いやぁ～無事に会えて良かったわぁ」
そう言って朗らかに笑う、赤髪をショートボブにした女性。肩から胸元までを露出した服から見える谷間と、深いスリットの入ったスカートから覗く足が、何とも眼の保養になって素晴らしい。うん、斑鳩とタリア、ソルラスカの所属する『旅団』のナンバー2、副団長のヤツィータだ。
俺と同じテーブルについて料理をつついていた、タリア、ソルラスカと会話するヤツィータを観察していると、不意に彼女と眼があ

った。
「ところで君……」
ヤツィータはにんまりと笑いながら語りかけてくる。
「さっきから見てるけど……気になる？」
そう言ってきゅっと胸元を強調するように寄せながら、見せ付ける様に身体を傾けるヤツィータ。
うんとても。
そういいながらガン見したら、正直ねぇと若干呆れながら姿勢を戻された。ちっ。
「そういえば、君が望君？」
「うんにゃ、世刻はあっち」
そう言って、永峰と斑鳩と話していた世刻の方を指してやる。
ヤツィータは「ちょっと行ってくるわね～」と言いつつ、向かって行った。
あれ、そういや俺まだ自己紹介してねえや。……まあいいか。とりあえず目の前の料理に集中しよう。

……三日後は恐らく、今日以上のミニオンに襲われるだろう。と言うのも……今日のミニオンの襲撃が、まるでルプトナと俺達が接触するのを阻止するかのようなタイミングだったからだ。
杞憂に終わればいいんだけど……な。
そんな事を考えながら、ふと気がつくと、タリアとソルラスカの姿は無く、隣にはいつのまにかルゥが居た。
彼女のほかにクリスト達の姿が見えない辺り、先に戻っただろう。
クリスト達は俺達に比べて、食べる量は少ないようなんだが、反面ルゥは見た目に似合わずというか、良く食べる。……とはいえまあ、普通の人と同じぐらいなんだけど。
「ああそうだ、ルゥ、プリン食べる？」
さっき隣のテーブルで食べていたのが美味そうだったので頼んだ

物だ。
「む、プディングか。とろける様な舌触りに至福の甘味はまさにデザートの王様、あのプディングか……うむ、是非いただこう」
ニッコニッコしながら受け取り、頬張るルゥは、見ているだけで幸せになれそうだ。うん、可愛い。
他のテーブルでは、皆が思い思いにくつろいでいるのが見て取れる。
……そうだな。今はしっかり英気を養おう。大丈夫。俺達なら何が起こっても、乗り越えられるさ。

永遠神剣之章：２６．調達部隊、地上にて。（後書き）

気がつけば、いつの間にかお気に入りが２００件を越えていました。
拙作の様なものを読んでくださり、大変有難うございます。
この場を借りて皆様へ感謝を。

永遠神剣之章：27．会合前、事前準備。

「成程……人間と精霊を和解させる話し合い……ねぇ」
物資調達の為に下に降りた日の翌日、俺は町に出た生徒達の見回りも兼ねての散歩途中、ユーラの店を訪れていた。
これまでも町中の巡回の際は顔を出していたので、もうすっかり顔なじみになってしまったが。
昨日の事や、今までに解っている事、俺達の判断なんかをざっと話すと、彼女はふむ……と一つ唸ったあと、
「それで、態々それを報せに来たってことは、何か話があるんだろう？」
「ああ。ここに来る前に酒場に寄って聴いた話なんだが……この森の奥地には、ここの人間ではない誰かが建てた、石造りのピラミッドの様な建物があるそうなんだ。無論、精霊がそんな人工物を作るはずも無い。で、精霊と人間の仲が悪化した、件の開拓団殺害事件が起こったのも、そのピラミッドの辺りってことらしくてね」
そこで一旦区切り、ここまではいいか？と問いかけると、「ああ」と頷くユーラとリーオライナ。
俺は出された茶を一口飲むと、続きを話し出す。あ、このお茶美味え。
「精霊でも人間でもない、誰かが建てた奥地にあるピラミッド。その時に限って、そんな奥地まで襲われる事無く辿り着いた開拓団。そこで襲われた彼等。そして、悪化した精霊と人間の仲」
「……成程ね、何とも解りやすい構図じゃないか」
「だろ？……で、問題となるのは、開拓団が襲われたのがピラミッドの側って事と、明後日の精霊との話し合いが、こちらから向こうへ出向く、と言う事」
「……ふむ。つまり、精霊と話し合う為に奥地に言ったロドヴィゴ達が、この機会に開拓団が襲われた場所を見たい、と言うのではな

いかと言う事か？」
そう訊いて来たリーオライナへ、一つ首肯して返す。
「ついでに言うと、話し合いがうまく行こうが行くまいが、十中八九そうなると思ってる」
「何でだい？　流石に彼等だって、奥地は危険だって事は重々解ってるだろう？」
「……結局、彼等が精霊達を信じきれないからさ。だからどちらにしろ、自分たちの目で確かめようと思うんじゃないかってな」
そう言うと、彼女達も得心が言ったのか頷いている。
まぁ、俺がこういった結論に辿り着けるのも、関係した情報を狙って仕入れられるのも、『原作』でそうだったからってのがあるんだが。
……といっても、それに固執しすぎて――つまり、『原作』でそうだったから、今もそうに違いない……なんて決め付けだな――失敗しては目も当てられないから、その辺は気をつけないといけないけど。
それに何より一番大きいのは、俺には頼りになる相談役が居るって事だろうかね。無論、ナナシとレーメ、それにフィアの事だ。
常に共に行動して居るナナシとレーメは言わずもがなだが、フィアにほぼ直接関わらない第三者的意見を聴けるのは大きい。
中からでは嵌って解らない事でも、外から見たら簡単に抜け出せるってのは、案外多い事だったりする。なので、よほど時間が取れない時でなければ、一日の終わりに必ず箱舟に入って、彼女を交えての意見交換ってのが、俺達の今の日課だったりする。
まあそれはともかく。
「で、だ……その敵の重要拠点と思わしきピラミッドがある方向は、あっちだそうでね」
そう言いながら、一方向――方角にして北西の方を指す。
「で、その方角には……何があると思う？」
このメンバーの中で、こんな言い方をすれば、何があるかなんて

のは聴かなくても解るだろう。
　事実、二人の表情は険しく、まったくもって厄介だ、って顔になっている。
「……流石に解るか」
「はぁ……そりゃあね。……“剣”、だろ？」
　やれやれ、と肩をすくめながら言うのはユーラ。俺はそれに「正解」と返し、リーオライナへと向き直った。
「……で、一応念には念を入れてってとこなんだけど……よかったらリーオライナも来てもらえないかと思ってな。護衛対象も増えるし、戦える人手は多いほうがいいと思うしな」
　リーオライナはふむ、と唸ると、ユーラと視線を合わせる。
「アタシは構わないよ。アイツが来る可能性もあるってんだろ？
……でもいいのかい？　アンタ、リーオライナの実力知らないだろ？」
「確かに知らないけど、大丈夫だろ。ミゥ達からある程度話は聴いてるし、今もこうして、ユーラが自分の護衛……ってか助っ人として連れてきてる。裏を返せば、護衛を出来るだけの実力があるってことだしな」
「……なるほどね。ま、それならアタシからは言う事はないさ」
　ユーラが肩をすくめながらそう言うと、リーオライナは静かに頷いた。
「……解った。では、よろしく頼む」
「ああ、こちらこそ。
……あ、ところでこのお茶もらえる？」
「なんだ、買ってくのかい？」
　うん、だって美味かったんだもの。
……
……

……

ユーラの店を後にしてから、町を一回りし、学園に戻ったところで、地上に降りていた学生達を引き連れたソルラスカと世刻に会った。

実は昨日、ミニオンに襲われたとはいえ、地上に降りた学生はかなりリフレッシュできたようで、他にも降りてみたいと言う者達が多く居たのだ。

そのため、町のあるこの大樹の側であれば比較的安全であろうと、ソルラスカを教官としたサバイバル実習が行われていた。

実習は午前と午後の二回。今の時刻はもうじき昼である事から、彼らはそれの午前組みだ。

学生達の顔は、どれも生き生きとした風に見えるのは、気のせいじゃないだろう。

「世刻、ソル、地上はどうだった？」

「特に問題は無かったぜ。ミニオンも出なかったしな」

そう言って笑うソルラスカ。まあ何も無かったのならいいじゃないか。

その後、昼食を取りに行くという二人と別れた所で、妙なものを見つけた。男子生徒がずらっと並んでいるのである。

「まあ考えるまでも無く予想は付きますが」

と言うナナシの言葉に苦笑しつつ、その列をなぞる様に進んでみると、辿り着いたのは『保健室』。

入り口から様子を覗いてみると、中に居た白衣を羽織った人物と眼が合った。

「あら、祐君じゃない。はぁい」

呼ぶな、手を振るな、ヤツィータ。ほら、周りの男子生徒の視線が痛え。

「はぁ……まったく、男と言うやつは」

奇遇だなレーメ。俺もその意見には同意する。
きっと一瞬で苦い顔になったのだろう、俺の表情を見たヤツィータが苦笑してる。
ああちなみに、ヤツィータとの自己紹介は今朝の内に済ませた。
その彼女は今目の前にいる男子生徒を診察し終わると、一緒に立ってドアから顔を出した。
「皆、そろそろお昼に行ってきなさい。と言うわけでぇ、急患以外は終了よ。また午後にねぇ？」
その言葉に、並んでいた男子生徒達はがっくりと肩を落として散っていく。その光景が何とも言えなく……っていうかお前等、なぜ俺を睨む。俺は関係ないっつーの。
生徒達を見送った後、「入りなさいな」と言うヤツィータの言葉に従って中に入る。
実は彼女、様々な医療技術を収めて居る為、ここに居る間は不在だった保険医を買って出てくれたのだ。
くれたのだが。
「何だって保健室に、あんな行列ができるんだよ……」
つい漏れたそんな呟きを聴きとめたヤツィータは、「ああ、これよこれ」と言いつつ一枚の紙を俺に差し出す。
……ヤツィータスタンプカード。
ああ、これか。保健室を利用するとポイントがもらえて、溜まったポイントに応じて膝枕やら何やら、“ご褒美”が貰えるという。
……いやなんつーか。
「……俺が言うのもなんだが……男ってバカだな」
俺の呟きに、三人はうんうんと頷いていた。

…
……
……

まあ、そんなこんなで一日を過ごし、定時連絡でリーオライナの事を皆に伝えた後は、今夜は夜番の見回りは入っていないため、箱舟に入る。

ユーラの店で買って来たお茶を飲みながら、今日の事を話し終えたところ、フィアは「うーん」と唸って考え込んだ。

「どうした？」

「いえ、今の話を聴いて、ご主人様が今すべきは何かなぁ……と」

「ふむ……何か良い案はある？」

そうだなぁと考えつつも、折角なのでフィアに聴いてみることにする。まぁ、明後日までの僅かな時間で俺が出来る事ってのも、たかが知れてるとは思うが。

「そうですね……やはり、火力でしょうか」

……火力が足りないと言われたようでちょっと凹む。……確かに、他の皆より実力は低いとは思うが、総合力ではそうでもないと思うんだけどなぁ……って言うのはうぬぼれだろうか。うぬぼれですね。

なんてつい考え込んでしまったら、雰囲気を察してしまったのだろうか、フィアが慌てた様に否定し、

「あ、違うんですっ！　えっと、当日ご主人様達はピラミッド……ひいては“剣”の方へと向かう事になりそうな訳ですけど……それは確かに危険な事なんですけど……同時に、チャンスでもあると思うんです」

そこまで言われて、ようやく彼女の言いたい事が解った。いやはや、俺も大概に察しが悪い。

「なるほど……『一撃』の重さか」

「はい。あの“剣”を打倒できる程の、高い火力。それが必要かな、と」

「んー……けど、それって結局、一朝一夕じゃどうにもならんよな

？」

俺がそう言ったところ、それまで俺達の話を聴くだけだったレーメがふふんと笑い、、

「ユウ、その為の箱舟と、吾等であろう？」

む……なんとも頼もしい。……よし、じゃあやってみますか。

…

……

……

それから箱舟の時間経過を、外部での1時間が内部での24時間へと設定し、箱舟時間で約二週間程を掛けて取り組んだ。

結論から言えば、出来たと言えば出来たし、出来なかったと言えば出来なかった。……途中で気付いたんだが、“剣”の耐久度がどのぐらいかなんてのが解んないんだよな。実際。

つまりは、“剣”をぶっ壊せるか解らんが、中々に高威力の攻撃は出来た、と言う事だ。

「難点は、撃つまでに時間が掛かりすぎることだよな」

「その辺は……皆に頑張ってもらうしかなかろう。あとはユウが魔法の扱いに熟達すれば問題は無い」

「……精進します」

時間が来た。

俺達はものべーを出たところでロドヴィゴさん達、町の代表者と合流し、地上に降りる。

「原作」では着いて来たレチェレだが、今回俺達は別に精霊達と戦いに行くわけではないので、彼女は同行していない。……まぁ、それがいい。間違いなく安全な道中ではないからな。

地上にて待つこととしばし、ルプトナが現れた。町の皆はやはり若干警戒するが、まあ仕方ないだろう。

そして俺達は、彼女の案内で森の奥へ向かい、進み出した。

永遠神剣之章：２８．精霊と、人間。

案の定、と言えばいいのだろうか。
森の奥へ進み出してしばし、それは現れた。――神剣反応。それも、一つや二つじゃない。大量に、だ。
後ろに通す訳には行かない。青年団の有志達には、昔地上に降りていた人たちの集落跡に、拠点を築いてもらっている。俺達は彼等に一旦拠点まで下がっている様言うと、敵を殲滅すべく進み出した。
そして森をしばし進むと、ミニオン達が待ち構えているのが見えた。その数はざっと四十ほどか。
「行くわよ、皆！」
斑鳩の号令を合図に、俺達は各々武器を構えると敵に向かって突撃した。

木と木の間をすり抜ける様に迫る敵の一人を剣によって刺し貫き、直後別のミニオンから繰り出された振り下ろしの斬撃をバックステップでかわす。
それとほぼ同時に放たれた、ナナシとレーメによる連続した『ダークマター』のアーツが、そのミニオンを圧殺するのが見え、狙いをその後ろから迫っていた、別のミニオンへと変えると、武器を突き出した。

……
……
……

ザァっと、マナの霧となって消え行くミニオンを見送り、足を止める。

どうやら今のが最後のミニオンだったらしく、この辺りには敵の姿は無い。

――あの最初の接敵の後も、ほぼ断続的にミニオンとの戦闘が続いていた。

もうじき会合の場である、精霊たちの住む場所へと辿り着く。ルプトナの話によれば、精霊の長老が居るのは、街とピラミッドの中間地点から、ピラミッドの方へ寄ったあたり。言うなればまだようやく半分なのである。

それでこのミニオンの数。……まったくもって嫌になる……っと、いかんいかん。嘆いた所で変わらないんだ、頑張らねば。

さすがに戦いの連続であったために、この辺りで一度休憩を取ることになった。

ロドヴィゴさん達は、もうすぐなのだからと早く行きたい様であったが、無理をして死んでは目も当てられないのだ。我慢してもらうしかない。

「今のところは順調……って言っていいのかねぇ……」

「どうなんでしょう？　話し合いに行くのに敵に襲われているのを順調とは言えないと言うべきか、それとも誰も怪我も無く進めているから、順調と言うべきなのか」

「だよなぁ……ん？」

思わず漏れた独り言に答える声に振り向くと、耳の様な飾りのついた白いフードが眼に飛び込んできた。ああ、ミゥか。結晶体の中に居た時は後ろに垂らしていただけのそれを、外に出てからはいつもかぶってるんだよな。

フードをかぶっていない状態だと、その白い神官衣（ローブ）と彼女の落ち着いた雰囲気から、なんとも厳かな感じがするんだが……。

「その猫耳ローブをかぶると途端に可愛らしくなるから不思議だ」

「……声に出てるぞ、ユウ」

……おっと失敗。まあ、ミゥがはにかみながら「えっと……ありがとうございます」と言ってくれたので良しとしよう。決して苦笑されていたのではない、はずだ。うん。

「ところで、町の人達とルプトナの様子は？」

「若干ピリピリしてますね。……どうやら、町の人達はやはりまだルプトナさん……精霊側を信じ切れていない様で、彼女もそれを感じとってしまっている見たいです」

成程ねぇ……彼らもここに来るまで後方に下がっていたとは言え、ルプトナがミニオン達と戦う姿を見る事も有ったろうに……やっぱりそう簡単に気持ちを切り替えられないわな。

「ま……一緒に行動してくれてるだけ良しとしとくか」

「はい。あとは何事も無く和解してもらえるといいんですけど」

苦笑しながら言うミゥに「まったくだ」と返したところで、出立の時間となった。

さあ、行こうか。

……

……

……

ミニオン達を倒しながらさらに奥へと歩を進めると、突如森が途切れた。

そしてそこに現れたのは、巨大なストーンサークル。

「ここが……」

「うん、ここに長老たちが居るよ！」

思わずぽつりと声に出た俺の呟きに、ルプトナが答えた。

そして彼女はそのままストーンサークルの中央部辺りへ進み、

「長老～～！！　人間達を連れて来たよ～！！」

と、声を上げる。次の瞬間――。
「見て！」
永峰がそう言って、ストーンサークルの中央、ルプトナが立つ前の辺りを指差す。
そこには、つい今まで無かった淡い光が立ち昇っていた。
そしてその光の中から現れる、身体に対してやけに大きい頭と、その顔の真ん中に位置する大きな一つ目の、身体全体が淡く光る、緑の肌の小柄な老人。
――精霊の長老だ。
「……よう来られた、人間達よ」
そう言った長老に対して、ロドヴィゴさんが思わず身構えようとして、何とか自制した様子が見て取れた。
「あの方が長老でしょうか？」
カティマの言葉に長老は一つ頷くと、
「いかにも。ワシが精霊を統べる者、長老ンギじゃ」
そんな彼に対して、俺達の中からロドヴィゴさんが進み出て、正面に相対する。
一応、危害を加えようとしたら止められる様に構えておくか。……まあさっきの様子からしたら大丈夫だろうが。多分。
「……単刀直入に伺う。かつて我々の開拓団を――私の兄を殺したのは、お前達か！？」
あー……やっぱり、俺達にいくら説明されたとは言え、納得は出来ていなかったんだろうなぁ。
けど、話しているうちに激昂したロドヴィゴさんに対して、長老はあくまで冷静な様で。
「……なぜ我々が、お前達人間を殺す必要がある？
我々はこの下界で、静かに暮らしていきたいだけじゃ。わざわざ人間達を殺して、ワシらになんの利益がある？」
そう反論する彼に対して、ロドヴィゴさんは「それは……」と言葉に詰まってしまっていた。

「では質問を変える。……ここまで護衛してくれた彼らが言うに、恐らく開拓団を殺したのはミニオン……あのヒトモドキだろうと言う。

あれをこの世界に呼び込んだのは、お前達精霊ではないのか！？」

「それも違う。あのヒトモドキを生み出しているのも、ワシらではない」

「嘘を吐くな！　あのヒトモドキ達はお前達の使う『精霊回廊』とやらを通じてこの世界に来ていると言う話だぞ！」

そんなロドヴィゴさんの言葉に、今度は長老が「それは……」と言葉に詰まっていた。

……って、ちょっと待てよ？　ロドヴィゴさんへ、その情報を提供したのは『誰』だ？

精霊回廊を使っている、なんてのは、そんなに簡単に解るものなのか？

「それを踏まえて、少し確認したい事があるのだけど、いいかしら？」

と、その時二人の会話に、恐らくこのままだ埒が明かないと思ったのだろう、タリアがそう割って入る。

「何かね？」と訊く長老に対して、タリアは言葉を続けた。

「私の知ってる限り、精霊たちは今話しに出た、精霊回廊という独自の移動経路で自由に世界を行き来したり、連絡をとったりすることができる。

また、精霊回廊に入っていさえいれば、精霊たちは半永久的に生き続けることができる。あなたたちが人間よりも長い寿命をもっている理由だわ」

「うむ。よく知っておるな。……精霊回廊とは我々にとって、人間達で言う水や空気の様なものじゃ」

「で、確認したいこととってのは何なんだよ？」

……ソルラスカ、焦れるの早すぎだ。ほら、急かされてタリアがちょとムッとなってるじゃないか。

「……確認したいのは、長老。あなたのその身体の大きさです。
この世界のように自然が豊富で、恐らくは大きな精霊回廊がある様な所の精霊と言うのは、固体によっての差と言うのはあるけど、得てして体が大きくなるものなのよ。
けど長老、あなたは小さすぎる。いたずらに大きければいいと言う物ではないにせよ、精霊を統べる者という立場である以上、ある程度の大きさ、威厳は必要だと言うのに、今の貴方は私達よりも小さな姿。……それは、なんらかの事情があって、身体を維持するエネルギーの消費を押さえるためじゃないかしら?」
そんなタリアの問い詰めに、長老は完全に言葉に詰まっていた。
その長老の様子を見やりつつ、タリアは更に言葉を続ける。
「そしてなんらかの事情とはズバリ、長いこと水や空気を自由に摂取できない……ようするに、この世界の精霊回廊を自由に扱えないんじゃないかしら?」
彼女のその結論に、驚愕の表情を浮かべたのは、長老ではなくむしろロドヴィゴさんだった。
「なっ……で、では、精霊回廊を使ってミニオンを呼び込んでいるのは……」
「まぁ、前も言いましたが恐らくは間違いなく、『光をもたらす者』でしょうね」
「『光をもたらす者』って、前に長老が言ってた!?」
「これ、ルプトナ! それを言うでない!」
ロドヴィゴさんに返したタリアの言葉を聴いたルプトナが驚いた声を上げ、長老が慌てた声で制止するが、時既に遅し。
「どういうことですかな?」と問いかけるロドヴィゴさんに対し、長老は大きくため息を吐き、
「ふぅ……そればっかりは明かしたくなかったのじゃが……」
そう前置きしてから話だした。
『光をもたらす者』に騙され、精霊回廊を占領されてしまった。
と言う事。

やがてやつらはあのピラミッドを建て、ミニオンはそこから生まれてくるらしい、と言う事。

そうこうしているうちに、今度はあの“剣”が精霊回廊に突き立てられ、あの“剣”は精霊回廊を通じて、世界に流れるマナを吸い上げているらしい、と言う事。

それが、長老から語られた話だった。

けどまあ、一般人たるロドヴィゴさん達は、いきなりマナだのなんだの言われてもよく判っていない様子。少し補足しておこうか。

「……マナってのは、世界に満ちる魔力にして、生命力そのもの。命はマナによって生まれ、死した命はまたマナに還る。そうやって循環しているものなんです。本来は。

先程の長老の話で解りましたが、『光をもたらす者』は、あのピラミッドを使い、精霊回廊を通じて、この世界のマナを使用してミニオンを生み出している。そして先程、ロドヴィゴさんは『精霊回廊を通じて、ミニオンがこの世界に来ている』と言いましたが、おそらくは逆。精霊回廊を通じて、この世界で生まれたミニオンが、他の世界に輸出されている、のでしょう。でなければ、この世界にミニオンが溢れているはずですから。……問題はこの、この世界のマナを使って生み出された大量のミニオンが、他の世界に送り出されている、と言う事。……これが続けば、どうなると思いますか？」

そこで言葉を区切り、青年団の皆と、長老の顔を見回す。彼らは、俺の言葉の意味を考えているようで、

「……資源の枯渇――」

やがて、青年団の誰かの、ぽつりとした呟きが周囲に響いた。

「……そう。命の源たるマナはこの世界から減り続け、やがて新たな命の生まれない台地となるでしょう。それにもまして、三年前からはあの“剣”が、さらに大量のマナを精霊回廊から吸い上げているようですし――」

「マナを搾り取られて、この世界は滅びる、と言うことですか」

うめくように言うロドヴィゴさん。どうやらようやく、この世界

の現状を理解してもらえたようだ。
そこで俺は彼等に、一昨日ユーラの店で話した事――開拓団がピラミッド付近で壊滅させられたのは、『光をもたらす者』の策略ではないか――を話す。
「……では本当に……兄達を殺したのは、精霊ではなくその『光をもたらす者』とやらなのですね……」
「だから言っておったじゃろ。ワシらは人間なぞ襲わんと。勝手に肉親の仇じゃと決め付けおって。人間達が愚かなのは知っておったが、これおほどとはのう……」
そう言った長老へ、ロドヴィゴさんが反応するよりも早く、響く声があった。
「愚かなのは、長老たちも同じだよ！」
それは、ルプトナの叫び。
「長老たちが騙されなきゃ、こんなことにはならなかったんだ。それにロドヴィゴさんたちは家族を……大事な人を殺されてるんだよ？ボクだって長老が殺されたら、復讐したいって思うよ！」
「それは……そうじゃのう……」
「それに長老たちは隠し事ばっかりして、ボクたちに何も説明してくれなかった。精霊回廊のことだって、教えてくれたのはつい最近じゃないか！
今の話を最初からロドヴィゴさんたちに説明せいていれば、もう少し早く誤解が解けたかもしれないのに……愚かなのは長老も一緒だよ！」
きっと彼女は、身内がこの世界の危機を招いてしまった事がショックだったのだろう。
そして何より、それを自分に教えてもらえて居なかった事が。
「……そうじゃな。ワシらは最初から、人間と解り合えるとは思っておらなんだ。此度の話し合いとて、ルプトナに頼まれなければ行おうとも思わなかったじゃろうて。それが誤解を増幅させてしまうとは考えずに……のう」

「わかったら、反省しなきゃ。いつまでもそんなんじゃ、この世界は光をもたらす者に滅ぼされちゃうよ！」

そんなルプトナの訴えに、ロドヴィゴさんは深いため息を吐いた。

「しかし……我々と彼等は、根本的に違うのだ」

「っ！　まだそんなこと言うの？」

「いや、その通りじゃ。ワシらは精霊。人間ではない。住む世界も価値観も、何もかも違う。……じゃがな、このままでは光をもたらすものに、この世界をいいようにされてしまう。それだけはワシも避けたい。それは人間の衆も同じじゃろ？

ルプトナの言うた通り、ワシらも言葉が足りなかったのは事実じゃ。すぐに仲直りとはいかんかもしれんが、この世界が平穏になるまでいがみ合うのは止めにせんか？」

……それは、歩み寄りの言葉。

長老の口からそれが出たとき、ロドヴィゴさんは驚きを、ルプトナは嬉しさをにじませていた。

ソレに対してロドヴィゴさんは……大きく頷く事で、返した。

「こちらこそ、一方的に敵視してすまなかった。……このまま彼等に、肉親だけではなく、住む場所まで奪われる訳にはいきません。

……人間達の仲には、私がそうだった様に、精霊に偏見を持つものも多い。

すぐに全面協力とはいかないかもしれませんが、将来必ず、精霊と共存できるように、こちらも努力していくつもりです」

「うむ。人間と精霊、力を束ねてこの世界の危機を救わねば、共倒れになるじゃろう。……それにもう、この身体で暮らすのは疲れたわい」

それが、この世界でいがみ合い続けた、人間と精霊の和解の瞬間だった。

……うむ。思っていたよりもスムーズに行ってよかった。

「それもそうですね。ミニオンを……いえ、『光をもたらす者』をこの世界から追い出すために、みんなで力を合わせましょう」

そう斑鳩が締め、世刻がルプトナに、「これからは仲間だな」といいつつ握手している。
というか、ルプトナは握手を知らなかったようで、世刻に手を握られて赤くなってるが。……いや、流石だ世刻。
それを尻目に、俺は先程気になっていた事をロドヴィゴさんに聴いてみる事にした。
「ところでロドヴィゴさん、先程言っていた『ミニオンが精霊回廊を使っている』と言う情報は、誰から聴いたんですか？」
俺に問われたロドヴィゴさんは、考え込みつつも訝しげな顔をした。
「……おかしいですね。あのような重要な情報をくれた方を忘れるはずはないのですが……まるで、靄が掛かったかのように思い出せないのです」
「……靄……ですか？」
俺達の会話が聞こえたのだろう、他の皆も、こちらに注目しているのが解るが、俺はそのロドヴィゴさんの答えに、凄く、嫌な予感がしてならなくて。

「思いだせるのは……そう、鈴の様な髪飾りをつけていた女性――と言う事でしょうか」

その言葉に、クリストの皆と、リーオライナが、息を呑むのが解った。
そして、俺も。
ロドヴィゴさんが言ったその特徴は、ミゥ達から聴いていたから。

「……スールード……っ」

リーオライナの、憎しみの篭った様な呟きが、周囲を満たした。
和解できた事に対する喜びも、安堵感も、そしてスールードがこ

の世界にはもう居ないのではないか――そんな甘い考えも何もかも、根こそぎ吹き飛ばされた感じ。恐らく……いや、間違いなく、居るんだろう。あそこに。

クリスト達の方を見やると、彼女等もただ静かに頷いて。

……そうだな。どちらにしろ、俺達はやるしかないんだ。この世界を救うためにも。

永遠神剣之章：２９．いざ、森の奥へ。

正式にルプトナを仲間へ加え、ピラミッドを目指す……その前に、一度精霊たちが隠れ家にしている洞窟へ案内してもらい、話し合いを行う事になった。

これ以上は、さすがにロドヴィゴさん達一般人を連れて行くには危険過ぎる。そう主張する俺達に対し、ロドヴィゴさんはやはり、このまま足手まといで終わるのは忍びない、と、同行を求める。だがやはり、さすがに無理があると解っては居たのだろう。彼らも行かない事を了承したところで、別の問題が浮上した。彼等を一旦町まで帰すか否か、だ。

帰すのであれば、ここから彼等だけで戻すわけに行かないので、俺達も一度同行して戻ることになる。それに対してロドヴィゴさん達が、そこまで迷惑をかける訳には……と言ってくる。

そんなやり取りが堂々巡りになりそうな所で、タリアが声を上げた。

「青年団の人達の事も問題だけど、あのピラミッドを破壊するに当たっても、問題があるわ」

「問題ですか？」

そう問いかける永峰に頷き、タリアがそれを説明する。

この辺りの高台からも見えるピラミッド。その周囲に、マナの嵐が取り囲んでいるのを見た、と言うのだ。

――マナの嵐。その名の通り、膨大なマナが嵐の如く渦巻いているのである。

その一空間に存在するにしては多すぎるマナが、激しい勢いで流動するその空間は、神剣使いの様な身体をマナで構成された、所謂『マナ存在』に対して大きな――対抗する力が足りなければ、容易にその存在を消滅させてしまう程の悪影響を及ぼす。……言うなれば、神剣使いに狙いを絞った強固な防御壁だ。

そんな説明がタリアからなされ、世刻と永峰が、自分たちが実は純粋な人間ではなくなっていた事に少なからずショックを受けた後、長老がそのマナの嵐の付近に、それを制御する装置らしきものを見たことがある、と補足する。……無論、その装置も小規模なマナの嵐が取り巻いていたそうだが。

俺達が皆、どうしたものかと頭を悩ませた時だ。ロドヴィゴさん達、青年団が名乗りを上げたのは。

「……マナの嵐とやらは、我々人間には悪影響は無いのですな？……ならば、その制御装置の破壊は、我々が行いましょう」

その宣言に、誰しもが言葉を返せなかった。

でも確かに、それがベターな選択なんだよな。……あとは、マナの嵐の外から、マナの嵐ごと大規模な火力でぶち抜くって手しかないが、その後にも戦いが控えている以上、その方法は避けたい。

「……解りました。お願いします」

「先輩！？」

ロドヴィゴさんに対して了承の意を返した俺に対し、世刻が声を上げる。言いたい事は解る。――危険なのだ。何しろ、敵の本拠地の只中なのだから。

「……言いたい事は解るけどな、世刻。それしか方法が無い事も、解ってるだろう？」

「それは……で、でも、死ぬかも知れないんですよ！？」

そう言う世刻に対して答えたのは、俺ではなくロドヴィゴさんだった。

「……心配してくれて、有難う。だが、あのピラミッドを放っておけば、いずれこの世界が滅びてしまうのでしょう。そんな事は、この世界に生きる者として、許すわけには行かない。……それにこれは、直接奴らと戦う事の出来ない我々が出来る、肉親の敵討ちでもあるのです」

そう言い切るロドヴィゴさん達から感じる意思は硬く、世刻もまた、それ以上は何も言わなかった。

「……解りました。ですが、マナの嵐の近くまでは私たちもサポートできます。でも、マナの嵐の中に入ったら手を出せない。……どうやって装置を破壊するのです？」

「そうですね……これを使いましょう」

斑鳩の質問に答え、ロドヴィゴさんは背後にいた青年団の一人に合図を送る。と、その人は持っていた手荷物の中から、細長い筒の様なものを取り出した。俺達の世界にあるものにそっくりな、先端から導線の飛び出したそれは、紛う事なきダイナマイトである。

「それってもしかして、爆弾？」

「ええ。念のため、いざと言う時の為に用意していたのです。尤もこの様な形で役に立つとは思っていませんでしたが。これでしたら、制御装置も破壊できるはずです」

「それでワシらを吹き飛ばすつもりじゃったか？……やれやれ、物騒なことじゃわい」

「……しかし今は違う。この世界のために。我々の子どもや孫が、この世界で暮らしていけるために、これを使うんです。なあ、みんな？」

ロドヴィゴさんの声に応え、青年団の皆から「おう！」と言う勇ましい声が上がる。それはとても力強さに満ちていて、彼らもきっと、あれを精霊たちに復讐の為に使うよりは、未来を掴む為に、この世界を守る為に使う方が、心情的にも楽なんだろうな。

そんな彼等を、長老は目を細めて見ていた。

「子の為、孫の為、か。ふん、寿命の短い人間の考えそうな事じゃ」

「長老……そんな言い方しなくたって……」

そして、長老の言葉に不満気な声を漏らすルプトナに笑いかけ、言葉を続けた。

「ワシらはなにもできん。じゃが、人間達に助けられた事は、ワシらはずっと記憶しておくじゃろう。

幾許の時が過ぎ、たとえこの世界から人間達がいなくなったとしても、今日ここに居る人間達の顔は、ワシらがずっと覚えておく。

……その為にも、この世界を守らんとな」

「……長老」

長老の言葉を聴いたルプトナの声は、今度は嬉しそうだった。

……なんつーか、皆基本的にいい人たちなんだよな。それが、僅かなすれ違いが大きな軋轢を生んでいた。……何ともやり切れないものだ。

「じゃあ、今日はもう遅いから、作戦は明朝決行ね。それでいい？」

タリアの言葉に皆が了承を返し、ここに作戦が決まった。

手順は至極簡単。俺達がロドヴィゴさん達をマナ嵐の近くまで送り届け、そして彼らが制御装置を破壊。マナの嵐が消えたら、ピラミッドへ突入する。それだけだ。

無論、作業を終えたロドヴィゴさん達の危険が出来るだけ減る様に、周囲のミニオンはなるべく倒さなければならないが。

恐らく、“剣”に向かうのはその後になるだろう。ここから見える光景から判断するに、“剣”の所在はピラミッドの後ろにある。マナの嵐の範囲外ではあるようだが。

だが、不安はある。

『原作』通りであるならば、ピラミッドにて俺達を待ち構えているのはベルバルザード。武器も魔法も巧みに操り戦い、倒した相手の武器を収集するような『光をもたらす者』屈指の武闘派。

……そんな奴と戦った後に、エターナルと思われるスールードと戦う、と言うこと。……ミゥ達から聴いた話で判断するに、スールードは基本的に分体で活動している様なのが救いではあるか……。

……なんにせよ、行き着く結論は結局の所、『やるしかない』のだが。

…

……

……

明けて早朝、俺達は洞窟を出立し、ピラミッドへと足を向ける。
ピラミッドへ近づくにつれ、かすかに地面が鳴動している事に気がついた。
そんな道中、俺達を迎え撃つのは、相も変わらず大量のミニオン達。
「皆！　敵を後ろに行かせないようにね！」
斑鳩の号令に「応！」と返事をし、長老の案内で森の中を敵と戦いながら進む道中、俺はソレに気付いてしまった。
――今までも散々世話になっているが、俺の持つ永遠神剣『観望』を所持する事により得られる固有の能力に、『視る』と言うものがある。
これは随分と汎用性の高いもので、マナの流れや量、質なんかも『視る』ことができる。以前、大気に赤マナが満ちるのを『視た』ことで、範囲型神剣魔法が来るのが解った、などだ。
……何が言いたいのかと言うと、だ。ピラミッドへ向かっている道中である現在、『視て』しまったんだ、“剣”を。
正直言って、ヤバイ。
何がヤバイって、今現在アレが溜め込んでいるだろう、マナの量と質だ。
『観望』を通して『視た』“剣”は、恐らく中心部分であろう所に、一際大量のマナが溜まっている上に、全体もまたマナで発光し、所々から溢れたマナが、紫電を発して弾けている。
――一目見て解った。アレはもう臨界が近い。……となると、この大地の鳴動は……。
吸い上げたマナをスールードに送り、ミニオンの生成にも使っているだろうにも関わらず、あの状態。
一体どれほどのペースで精霊回廊からマナを吸い上げていると言うのか――。

俺はすぐにソレを斑鳩達に伝え、行動の変更を伝える。
「斑鳩、悪いがロドヴィゴさん達をマナ嵐の所まで送ったら、俺はすぐ“剣”に向かう」
「……そうね……けど、大丈夫なの？　随分と拙い状況のようだけど」
「……そうだな。恐らくは、中心辺りの一際大きなマナ溜まりになっている部分、あそこが多分、全体を循環しているマナの基点になっていると思う。――だから、誘爆することも出来ないぐらいの火力で、中心のマナ溜まりを吹き飛ばす。……そうすれば、『最悪の事態』は避けられるはずだ」
この予測は、ナナシとレーメが俺から得た情報で判断したもの。他の人にはどうか知らんが、俺にとってはこれ以上無いほどに信頼の置ける予測である。
ちなみに、『最悪の事態』は言うまでも無い、この世界が崩壊すること、だ。
斑鳩は俺の言葉を吟味するように考えたあと、俺の眼を見つめて、口を開いた。
「……ソレほどの火力に、心当たりは？」
「一つだけ。もともとはあの“剣”を破壊するために考えたものが。……まぁ、“剣”を破壊できるかどうかはわからないが、マナ溜まりを吹っ飛ばすぐらいなら有るはずだ」
「……分かったわ。じゃあ、あっちは青道君に任せる。ミゥ達とリーオライナさんは、彼に着いて行って」
斑鳩の決定に俺達は頷き返すと、再びピラミッドを目指す。
その足は、先程よりも急ぎ気味になっていたのは言うまでもなく。
……
……
……

「それじゃ、ここは任せるぞ」
ピラミッド付近、マナが渦巻く前まで来た所で、皆にそう告げる。
皆からも異口同音に、「そっちもしっかりね」との言葉を貰い、その場を別れ、マナ嵐を迂回する様に“剣”へと駆ける。
駆けながら、既に俺とナナシとレーメの三人掛りで、移動力向上(シルファ)アーツ(リオン)は全員に掛け終えてある。
「祐さん！　前方にミニオン！」
「鎧袖一触で駆け抜けるぞ！」
アーツによって底上げされた俺達の速度は、ミニオンの予想を上回っていたのだろう、言葉通りろくな反応もさせない間に接近し、通り抜け様に斬り捨てる。
道中、ズドン！と言う盛大な音が聴こえた。恐らく、ロドヴィゴさん達が装置の破壊に挑んだ音だろう。
向こうの結果も気になるが、俺達の目標はそちらではない。何より、大地の鳴動は“剣”に近づくに連れてはっきりと解るほどになって来ている。
「見えたぞ！」
道中に配されたミニオンを出会いがしらに斬り捨てながら森の中を進むと、やがて“剣”の大地に刺さった部分が見え、同時にその剣の腹の、地面に程近い高さに空いた穴から、ミニオン達がぞろぞろと現れて来るのも見えた。
「相手にしている暇はない、一気に片付ける！　援護よろしく！
ナナシ、レーメ、いくぞ！」
「はい！」
「任せよ！」
俺の言いたいことを察し、二人はすぐにアーツの準備に入る。うん、さすがだ。
俺も遅れじとアーツを使用するために集中し、二人とタイミング

を合わせる。
敵に近づくまでの間、俺の接近に気付いた敵が神剣魔法の準備に入ったのが見えた。その数はざっと十人。……タイミング的に厳しいか？
そう思った時だった。
「『メガバニッシャー』！！」
俺の後ろに追従していたルゥが叫び、そのマナを解き放った瞬間、辺りの空間が、敵や、敵の神剣魔法もろとも凍結した。それは正に、バニッシュ能力を持った全体凍結魔法。何とも凄まじい“切り札”だな。
思わず感嘆の余り切らしそうになった集中を持ち直し、ナナシとレーメに目配せする。
コクリ、と頷く二人に頷き返し、同時に解き放った。奇しくもルゥと同じ系統のものを。
「「「『コキュートス』！！！」」」
瞬間、ルゥの魔法に追撃を掛けるように、俺達を中心とした周辺一帯に凍気が広がり、台地から氷柱が付きあがり、ミニオン達に壊滅的な打撃を与えて砕け散る。
少々オーバーキル気味では有るが、ギリギリを見越して撃ち漏らしたんじゃ意味が無いから無問題だ。そして思惑通り、後には動く敵は無く、ただマナの粒子となって消え行くもののみがあった。
俺は入り口に駆け寄りながら、先行させて『観望』で中を覗き込み、敵の姿がない事を確認しておく。
「よし、入り口の敵は一掃した。突入しよう！」
「はい！」
異口同音の皆の返事を聞きつつ、俺は暗く口を開けた入り口へと突入する。
目指すは中枢のマナ溜まり。そこまで行けば、何とかなると信じて。

永遠神剣之章：３０．進む先、立ち塞がるもの。

“剣”の中に突入した俺が見たのは、永遠神剣をモデルに創られたとは思えないような、機械じみた機構。明らかにコンピュータとしか思えないものがあると思えば、巨大な歯車が音を立てて回っている、不可思議な、それでいてメカニカルな構造だった。

――っ、眼を奪われている場合じゃない。気を取り直し、先へ進む。

“剣”の内部、中央部分は巨大な吹き抜けになっており、側面沿いに、恐らくミニオンのためのものだろう、大人が二人並んで通れる程の通路が、坂を描いて続いている。

俺達はその坂を、先頭に俺とルゥ、中列にゼゥとポゥ、後列にミゥとワゥの並びで駆け登り、リーオライナは何と飛べるらしいので、俺達の横、吹き抜けの部分を飛んで――無論、敵からの狙撃等で狙われないよう、なるべく俺達の近くを、だ――フォローしてもらう。

しばらく坂を登って行った所で、恐らくは剣の端、刃の部分に当たる場所だろう、踊り場の様な少し広い、折り返しの為の空間があり、そこに六名のミニオンが待ち構えているのが見えた。

……なるほどね。狭い通路を登ってきた俺達を、広いところで待ち受ける。

こっちはこの通路の狭さ故に否応無く二列にならざるを得ず、対して向こうは存分に多人数で相対し、数の有利を作り出せるって訳か。

相手の意図が解っていつつも、今はそれに策を講じる余裕も無いのが哀しいところだ。

チラリと右横を併走するルゥの顔を見ると、丁度彼女も俺の方を見た所の様で、目が合い、コクリと頷く。

「いっけー！『ファイアーボール』！！」

「……ふっ！」

直後、俺達の後ろからワゥの声が聴こえ、頭上を越えてミニオンの只中へと打ち込まれる神剣魔法。

そしてそれに合わせる様に、左に並んで飛んでいたリーオライナが、その先端に四つの突起が付いた、円筒状の神剣、『怨恨（えんこん）』の先からマナの弾丸を打ち出した。

二人の攻撃は違わずミニオン達の中心へと着弾し、その間俺とルゥは速度を上げ、ミニオン達がワゥとリーオライナの攻撃を避けるために左右に分かれた為に生まれた、ぽかりと空いた隙間へと飛び込み、背中合わせに武器を構える。

「ルゥ、背中は任せる！」

「任された！」

相対するミニオンは二人。直後、左の方から武器のぶつかり合う音が聴こえた。ゼゥとポゥがそれぞれ敵と矛を交えたのだろう。

「おおおお！！」

俺は双剣状にした『観望』の左の刃で、突き込んで来た緑ミニオンの槍を受け流しつつ、右の刃で青ミニオンへと斬り付ける。

攻撃を防ぎ、防がれつつも、俺は左右のミニオンへと休むことなく斬りかかった。

ルゥが任せろと言ったのだから、後ろは大丈夫。ゼゥが受け持ってくれているのだから、左は気にしない。ただ前の二体に集中すべし！

幾度と無く剣戟を繰り広げ、戦線を維持しつつも、防ぎ、防がれ、斬り付け、斬り付けられ、俺と二人のミニオンは、互いに小さな傷を作りつつ、攻防を繰り返す。

……って言うかこいつら強えぞ！？

こいつら実はエターナルアバターじゃ――ミニオンは、生み出す人物や環境によって、色々と呼び名が変化する。エターナルアバターはその名の通り、エターナルに生み出されたミニオンだ――ないだろうな、なんて思いつつ、突き出された緑ミニオンの槍をかち挙げ、空いた腹に左の刃で斬り込むと、敵のマナの力場と神剣の刃が

ぶつかり合って火花を散らす。
その隙を突いて上段から斬り込んで来た青ミニオンの刃を受け止めたところで、ズガンッ！と言う音と共に、槍を構え直して居た緑ミニオンの右腕が爆ぜた。
チラリと見ると、神剣を構えているリーオライナの姿。
有り難い！　……と思った瞬間眼に映る、ウサミミを模した様なぴょこんと跳ねた長いリボンと、ふわりと後ろに流れる黒いツインテール。
一足早く敵を倒したゼゥが、リーオライナの攻撃で怯んだ緑ミニオンに斬りかかったのを視界の端に収め、俺はその意識を青ミニオンに絞り、相対す。
左の刃で突きこみ、防がれた所で右の刃で胴を狙う。それを一歩下がってかわされるも、こちらも一歩踏み込み、返す右の刃で横凪にする。と、青ミニオンのマナのブロックと刃がぶつかり合うが、流石に防御に長けた緑ミニオンのようには行かなかったか、『観望』の刃が敵のブロックを抜いて浅い傷を作った。
――隙が出来た。
さらに一歩踏み込みつつ、左右の刃へオーラフォトンを巡らせ、交差する様に振りかぶり――
「はあああ！！」
振り抜く！！
両刃が交差するように敵を斬った瞬間、巡らせたオーラフォトンが互いに干渉・反応して衝撃を生み出す。
世刻の技のクロスディバイダーを参考にさせてもらったが――あちらは双剣を打ち合わせて共鳴させた衝撃だが――うん、存外うまく行った。
マナの霧となるミニオンを見送り、周囲の様子を見ると、どうやら他の皆も戦闘を終えたようだ。
……と、俺達をふわりとした光が包み込み、今の戦闘で負っていた浅い傷が消える。

ああ、レーメの回復アーツか。
「……ふぅ、それにしても、随分強いミニオン達だったわね」
「ん……やっぱりゼゥもそう思ったか？」
そう訊くと、ええ、と返って来る。
「まぁ……敵の本拠地、と言うか、重要拠点なんだから、当然と言えば当然なんでしょうけど」
「だな。……よし、じゃあ先に進もうか」
目的地まではまだかかるだろう。俺達はさらに先へ目指し、歩を進めた。

……
……
……

その後も折り返しの踊り場に着く度にミニオンとの戦闘を行い、それでも何とか全員大きな怪我も無く、俺達は中枢と思われる場所へと辿り着いた。
“剣”全体を流れるように巡るマナの中枢であるだろう、マナ溜まりの場所。最早普通に視認出来るほどに濃密に蓄えられたそのマナの中心、そこには浮かぶようにして、一本の剣が浮いていた。
その剣の姿形は、この大地に突き刺さる巨剣と瓜二つで——恐らくあれがこの巨剣のモデルとなった、永遠神剣第四位『空隙』なのだろう。
そして、その場に辿り着いた俺達を迎えたのは、
「よくぞここまで参られました。歓迎いたしましょう。そして、お久しぶりですね。クリストの巫女達よ」
鈴が転がる様な声で発せられた、そんな台詞だった。
それを発したのは、頭頂で結わえられた艶やかな黒髪が二房の流

線を描いてなびく、炎を象った緋色の文様が描かれた、白い胴当てと袴、腰布や肘から先を覆う袖でその白磁の様な肌を包んだ、鈴の形の髪飾りをつけた少女。

「……あれが――」

スールードか、と続けようとした瞬間だった。

「グゥッ！」

思わずくぐもった呻き声が漏れる程の、腹に響くプレッシャー浴びせられた。

「そして貴方が――此度の、巫女達の『希望』ですか。……ふむ。人間よ。貴方は何故戦うのですか？　この世界に起きている事、それは貴方にとって何も関係が無い事。だと言うのに貴方は、この勝ち目の無い戦いにその身を投じようとする……」

それは純粋な疑問だったのだろう。小首を傾げ、可愛いとすら思える仕草で問うスールードに、現状を忘れて思わず苦笑が漏れそうになる。

「……そんなのは簡単だ。この世界で、関わった人達が居るから。この世界に生きる、人の営みを見てしまったから。守りたいと思えるものが、今この世界にあるから。……別に眼に映る全てを守れるなんて思っては居ない。けど、守りたいものは、守りたい人は、仲間たちは、守って見せる！」

「……ならば一つだけ忠告しましょう。――来るのならば、初めから全力で来ることです。それが、貴方達にできる只一つの事なのですから――」

そんな、やもすれば神々しさすら感じる少女が、ふわりと言う擬音が似合う微笑を浮かべた瞬間――ばさり、と、その背に一対の翼と、その手に一本の剣が現れる。

「……っ！」

一際強くなるプレッシャーに、身体が震える。……アレで分体だってのかよ……冗談じゃない。『観望』を通して『視れ』ば、濃密なマナが渦巻いているのが解る。

そしてスールードが俺達に見せ付ける様に、その剣を一薙ぎする。
次いで俺達の中を縦断する様に走る、一筋の光。
――ゾワリ、とした。瞬間、叫んでいた。
「っ！　散開！！」
その声に瞬時に反応してくれた皆が、俺とほぼ同時にその場を飛び退った次の瞬間、光に沿うように“空間が裂けた”。
くそっ……アレに構っていたら、いつまでたっても目的なんざ果たせそうもないな。
俺と同じ方へ跳び、既に神剣を構え臨戦態勢を取っているルゥへ声を掛ける。
「……悪い……五分、いや、三分でいい、時間を稼いでくれないか」
理由は言えない。奴に聴こえたら『標的』を知らしめる事になるから。
だけど、ルゥはそれだけで俺の言いたい事を察してくれたらしく、力強く頷いてくれる。
「任せるがいい、祐。君の背中は私が……私達が、守ってみせる」
そんなルゥの言葉が嬉しい。
「ああ、信じてる。……レーメ、ナナシ、やるぞ！」
「うむ！」
「はい！」
その返事を合図に、俺は術の制御に集中を開始し、ルゥはスールードへと駆け出し、それを合図にするように皆も向かっていくのが見えた。

今直接攻撃されれば、まず間違いなく、簡単に俺は仕留められるだろう。けど大丈夫。皆が居るから。
剣戟と、爆音をバックグラウンドに、俺は只ひたすらに、魔力を練る。
レーメが言うには、魔法に最も必要なのは『想像力（イマジネーション）』と『集中力（コンセントレーション）』

なのだと言う。
特に俺の様な、様々な世界の、理（ことわり）も仕組みも理論も違う多種の魔法を同時に使用する様な者にとっては。
だから俺は、『想像』し、『創造』した。強大な障害を打倒できる力を。
とは言えゼロから生み出すには余りにも時間が足りない。ならばどうする？　簡単だ、どこから持ってくるなり、参考にすればいい。その為の知識はあるのだから。
そして俺達が参考にしたのは、『ダイの大冒険』に出てくる『極大消滅呪文（メドローア）』だった。
メドローアは、炎と氷の相反する属性の魔法力を合成する事によって、あらゆる物を文字通り消滅させる性質の魔力弾を作り出す魔法。
だがそれを放つには、膨大な量の魔法力と、緻密な魔力コントロール技術が必要となる。それらはまだ俺には無い。
ではどうする？　……無いのならば、代用すれば良い。
用いたのは二つの魔法と、二つの術式。
光と闇の『魔法の射手』と、『ネギま』に出てくる魔法の一つである、『闇の魔法』を構成する術式、『術式固定（スタグネット）』と『術式統合（ウニソネント）』だ。
光と闇、相反する属性の『魔法の射手』を、オーラフォトンを緩衝材とする事によって固定させ、『術式統合』によって一つの魔法とする。
一見すればメドローアよりも制御が大変そうではあるが、俺一人で全てを制御しなければいけないメドローアと違い、こちらの場合『術式固定』と『術式統合』は、レーメに任せることができる。そしてレーメのサポートをナナシが行うことによって、より確実性を増す。
要するに、一人じゃ無理なら三人でやればいいって事だ。
……そして俺に今出来る事は、限界まで己の力を搾り出す事。

正直スールードを侮っていた。中途半端な威力じゃ必ず防がれる。
だから俺は、己の全てを賭けて、確実な一撃を創りだす！
「……イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ
光の精霊百五十柱　集い来たりて敵を射て！！　魔法の射手
！！」
俺の発した百五十と言う数に、レーメとナナシの二人がビクリとするのが見えた。
解ってるさ、無茶だってのは。けどやるしかないんだ。必至に時間を稼いでくれている皆の為にも！
「……術式固定」
「……レーメ！？」
俺の意を汲んだレーメに、ナナシが悲痛な声を上げる。
レーメはそんなナナシを見て、ただ一度こくりと頷いて。
「……術式固定」
ナナシが、レーメに続いた。……二人の内面でどんなやり取りがあったのかは知らないけど……悪いな、ほんと。
「……イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ
闇の精霊百五十柱　集い来たりて敵を射て！！　魔法の射手
！！」
正直先の光の魔法の射手で、俺の魔法力は空に近い。だから捻出する。俺の身体から。
幸いにも『観望』を手にしたその時から、俺の身体はマナで構成された『マナ存在』となっている。
――マナとは生命の源である。と言うのは、先にロドヴィゴさん達に説明した事だ。だが他の世界になると、マナとは魔力の源であるとも言う。
果たしてどちらが正しいのか？　……俺の考えは、両方。要するに変化する方向性の違い、とでも言えばいいのだろうか。
水が熱せられれば蒸気となり、冷やされれば氷となる様に。ある方向ではマナは生命力となり、肉体となる。そしてある方向では、

マナは精神力となり、魔力となるのではないか、と。
先にも言った様に、魔法に必要なものの一つは『想像力』だ。
だから俺は、想像し、想像する。己の身体を構成するマナを、魔法力へと！
「……術式固定」
「……術式固定」
ズズっと、己の身体から何かが抜ける様な感覚。ソレと同時に、自分自身が薄くなった様な奇妙な感覚。
……まだ、大丈夫。
「……オーラフォトン……展開っ！」
更に自身のマナを練り、己の中でオーラフォトンと化し、『魔法の射手』を包むように、混ぜるように、流し込む。
「……術式統合！」
「……術式……統合っ！」
レーメに続いたナナシの声が響いたその瞬間――俺の手の中に顕現する、赤黒く光る、穂先から三十センチ程まで、下がるに連れて傘のように広がった穂先を持つ三メートル程の槍。矢印の形を想像してもらえれば一番解りやすいだろうか。
「――っ」
一瞬目の前が真っ暗になり、足元がふらついた。
耐えろ、俺。まだ倒れるわけには行かないんだから。
狙うのは、今にも臨界に達しようとしているマナ溜まりの中心にある神剣。槍を構え、狙いを定める。
……名前と言うのは、重要な要素だ。
魔法にしろ技にしろ、名をつけられて初めて、真の威力を発揮する事ができるという。
だから俺は、ただ『貫け』と想いを篭め、この魔法の名を、解放し、『空隙』へ向けて、解き放つ！
「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！！」

その瞬間――

「くっ……あああああああ！！！！」

一筋の閃光と、スールードの叫びが、この場を満たした。

永遠神剣之章：３０．進む先、立ち塞がるもの。（後書き）

元ネタ@おぜうさま。

永遠神剣之章：３１．結末と、決意。

俺はその瞬間を、『観望』を通して視ていた。
目視できる速さじゃないってのも、確かにある。けど一番の理由は、俺の眼が霞んで上手く見れなかったからだ。
……マナが足りない。身体を構成するマナが。
そして、思い知らされた。俺はまだスールードを甘く見ていたらしいと言う事に。
光と闇という、相反する属性の『魔法の射手』を合成して作られた『スピア・ザ・グングニル』は、俺の手を離れた瞬間にその均衡を崩し、周囲のものやマナそのものを巻き込みながら対消滅を起こし、道筋にあるものを抉り取りながら突き進んでいく、破壊と消滅の属性を持つ、純粋な魔力の塊と化す。
だと言うのに、スールードはあろうことか、俺が『スピア・ザ・グングニル』を放つ直前に俺の狙いを察し、周囲のルゥ達を薙ぎ払い、標的である『空隙』と俺の間の射線上に身を割り込ませ、己の左腕で魔法の軌道を無理やり逸らしやがった。
はっきり言って冗談じゃない。今のは間違いなく、俺に放てる最大の一撃だったと言うのに。
『観望』を通して視つつも、一度目を閉じて、開く。
……ようやく焦点が合って来た肉眼に映るのは、弾き飛ばされ気を失っているのか動かない満身創痍な皆と、左腕を肩口から失いつつも悠然と浮かぶスールードと、溜め込まれたもののうち、右側の三分の一を抉り取られたマナの塊と、いまだ健在にしてマナを集め続ける『空隙』。そしてその背後、直径四メートルほどの大穴を空け、青空を覗かせる“剣”の外壁だった。
ふらりと、身体が揺らぐのを必至に堪える。正直言って、もう俺の魔力も、体力も、精神力も、身体を構成するマナすらもギリギリだった。

……けど、諦めるわけには行かない……。守りたいものを、守りたい人を守るためにも。俺のことを信じてくれた皆の為にも……！

「……ナナシ、レーメ……もう一度だ」

「駄目です、マスター！　これ以上は身体が持ちません！！」

「ナナシの言う通りだ、ユウ。これ以上は吾も認められん」

ギリっと、自分の歯を食いしばる音が聴こえた気がした。

……ああそうだ、二人の言う通りさ。正直言って、もう一発撃つ様な余裕は欠片も無い。自分の馬鹿さ加減に、反吐が出そうだ。自身に放てる最大の一撃をと意気込んで、限界まで力を引き出した割りには防がれて自爆しただけ。守りたいはずの仲間の身を危険に晒しただけだなんて、全く持って情けない。

でもだからこそ、尻拭いはしないといけないだろう！

決して諦めないと言う想いを篭めて、悠然と浮くスールードを睨みつけ、『観望』を片手剣にして構える。

そんな俺にナナシとレーメは何か言いたそうだったけど、これ以上は無理だと思ったのか、補助アーツを掛けてくれた。

……ごめん。それに、ありがとう。

そして、スールードに向けて踏み出そうとした時だった。

「ふ……ふふふ……あはははははは！！」

周囲の空間に哄笑が満ちる。

それの発信源――スールードは心底楽しそうに笑いながら俺を見やり、

「面白い……人の身でありながら、この私にここまで報い、尚もまだ挑もうと言う貴方の気概に免じ、この場は退いてあげましょう」

そう言いながら『空隙』に近づき、それを手に取った。

俺はそれを只呆然と見ていることしか出来なかった。急な展開に上手く付いていけなかったとも言えるが。

けど、一瞬でも『助かった』と思ってしまったからだろうか、一瞬ふらりと身体が揺らぎ、何とか堪える。正直今膝を付かずに立っている事を誉めてやりたいぐらいだ。

恐らくはそれに気付いているのだろう、彼女は、それでも立ち続ける俺を興味深げに眺めたあと、口角を上げ、まるで――そう、愛おしいものを見るかのような表情で、口を開く。

……そういえばミゥが言っていたな。あいつは、絶対に無理だと解っていても尚足掻く人間の姿を愛おしく思う、と。そして――。

「人間よ。万が一にでも、この場を脱する事が出来たのならば――また、逢いましょう」

そんな言葉を残し、空間に溶ける様に、スールードはその姿を消した。

そのまましばし、周囲の様子を伺い、念のためにと『観望』でも見てみるも、何もなく。

「……助かった……のか……？」

自分の口から漏れた言葉に、頭(かぶり)を振る。“助かった”じゃない、“見逃された”だ。

それにまだ安心なんて欠片も出来ない。あいつが『空隙』を持ち去ったせいで、中心となるべき“核”を失った、膨大なマナ溜まりが暴走し始めたのが感じられる。

このままあれが暴発すれば、三分の一程度を吹き飛ばしたからこの世界自体が消えてなくなるって事はないだろうが、この辺り一体は吹き飛ぶほどの爆発になるに違いない。

その時、暴走するマナに中(あ)てられたのか、スールードに吹き飛ばされて気を失っていた皆が目を覚ました様で、俺の近くへと集まってきた。

「祐……スールードは？」

「……見逃されたよ。ピンチなのは変わらないけどな」

姿の見えない奴の事を訪ねてくるルゥへ、そう返し、詳しくは助かってからなと続け、ぐるりと、皆の様子を見ると見事にボロボロだった。

「……レーメ、皆に回復アーツを」

「うむ。……『ラ・ティアラル』」

皆の身体をアーツの光が包み込み、その傷を癒す。……とは言え、今からでは脱出して爆発の圏外に逃れるのは無理だろう。……せめて、斑鳩達が爆発圏外に居てくれればいいのだが。

俺一人ならば助かる方法はある。――ワールド・ゲート――この、『聖なるかな』の……『永遠神剣が理を支配する世界』から脱する門を開き、別の世界に移動すればいいのだから。……けど、そんなのは嫌だ。皆を犠牲にして俺一人が助かるなど、認められる訳がない。

……もう一度、『スピア・ザ・グングニル』で、残ったマナ溜まりを吹き飛ばすしかないか。

結局その結論に達し、怒られるだろうなと思いつつ、ナナシとレーメへ声を掛けようとした、その時だった。

――ふむ、中々に絶体絶命と言うやつよな。

脳裏に響く声。

それは、以前夢の中に出てきた少女のものと同じで――周りの皆にも聴こえたのか、「誰だ!?」と言いつつキョロキョロと周囲を見回している。

――残念ながら、妾（わらわ）はそこにはおらぬ。こうしてぬしらに語りかけられるのも、マナの暴走によってその辺りの“時空の壁”が不安定になっておるからであるしの。

声はそこで一旦止まるが、俺達が何かを言う前に、再び脳裏に響きだす。

――さて、『渡りし者』よ。ぬしの状態は把握しておる。……今、ぬしを失うわけにはいかぬゆえに、妾が力を貸してやろうではないか。

その声と共に俺の中に流れ込むマナ。それは優しくも力強く、暖かくて心地良い。
そのマナが体中を巡るにつれ、四肢に力が戻っていくのを感じる。
――『観望』を通じて、ぬしに妾のマナを送り込んだ。それならばやれるであろう？
声に「ああ」と返し、ナナシとレーメには「もう大丈夫」と頷いておく。そしてミゥ達には、何かあってもすぐ動ける様に、すこし離れて待機していてもらうと、俺は再び、魔法の展開に入った。……勿論、今回は脱出する余力を残しておくのを忘れない。
そして――。
「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！」
放たれた閃光は狙い違わず、暴走し、臨界に達しようとしていたマナ溜まりを根こそぎ消し飛ばし、先に開いた穴を広げるように大穴を開け、空へと消えた。
「やった！」
「やりましたね、祐さん！」
その様子を見ていたミゥ達が、安堵と歓喜の表情を浮かべながら駆け寄ってくる。
そんな中再び、声が聴こえた。
――『渡り……者』よ。頼みがある……〝時空……〟が正常……戻りつつあ……ゆえに、詳し……は言えぬえ……観望』に……。
それは先程までとは違い、途切れ途切れで、まるで電波状況の悪い電話のようだ。

今聴こえた内容からして、先程言った“時空の壁”とやらが正常に戻ろうとしているからしい。……ってことは、暴走していたマナの影響がなくなった証左と考えていいだろう。

結局、声はそこで途切れてしまった。……彼女には、感謝しても仕切れない。前々から感じていたが、どうやら『観望』とつながりがあるらしいので後で訊いておかねば。

……と、その時だ。ズドンッと言う、何かが爆発するような音が、どこかから聴こえた。

そして次いで起こる振動――。

「っ！　拙いぞ。恐らくは“剣”全体に巡らされていたマナが、大本のマナ溜まりが無くなったことによって小規模の暴走を起こしたのだろう」

そのリーオライナの言葉を肯定するかのように、連続で起こる爆発音。それと共に振動も大きくなり、ガゴンッとどこかで何かが崩れる音がした。

……って、“剣”自体が崩壊しようとしてるのか！？

皆と顔を合わせると、どうやら皆同じ考えのようで。

「……急げ！！」

掛け声と同時に、皆揃って駆け出していた。

走りながら、移動力向上（シルファリオン）アーツを全員に何とか掛けて、道中爆発やら崩落やらをかわしつつ、揺れに揺れて不安定な足場を走る走る走る！

地面が見えたところで一気に飛び降りショートカット。そのままの勢いで転がる様に全員が脱出し、何とか距離をとった所で、“剣”は轟音を立てて崩れ落ちた。

「……正に危機一髪！　だね～」

ふぃーと汗をぬぐうような仕草で、ワゥが笑いながら言った。

そんな彼女の様子に思わず笑みが漏れ、「まったくだ」といいつつ彼女の頭を撫でてやる。

崩れ落ちた“剣”を見やると、砂埃の中、小高い丘の様な陰が見

えるのみ。
思わずその場にへたり込む様に座り込み、ただじっと、“剣”があった場所を見つめる。
ようやく砂埃が落ち着いたそこには、ただ大量の瓦礫があるのみで……つい先ほどまでそこにあったと言うのに、まるであの“剣”が存在していた事自体が嘘のようで。
一息吐いた後、自然と集まるように俺の周囲に座っていた皆の顔を見渡して……俺は先のスールードとのやり取りを聞かせた。
「……結局さ、スールードには負けちまったよ。こうしていられるのも、お情けで見逃してもらったからに過ぎないし、最後に予想外の助っ人があったからだ。……全くもって情けないよ。大口叩いた割にはこの体たらくさ」
悔しくて悔しくて情けなくて、ぎりっと歯を食いしばっていた。
『観望』を手に入れて、確かに俺は以前より強くなったのだろう。だから、思いあがっていたのかもしれない。
そして、解っていたつもりで解っていなかったのだろう。この世界には、とてつもない化け物が居るのだという事を。化け物と称してもまだ足りぬ程の者達が居る、と言う事を。……そしてそれを、嫌という程に、思い知らされた。
ふと、ルゥが俺の手を取った。両手で包み込むように。……いつの間にか、自分でも気付かぬうちに握りこんでいた拳を。
「……それでも……それでも、私たちはまだ生きている。祐に聴いた話では、恐らくスールードは再び我々の前に立ち塞がるだろう。ならばその時に、今回の借りを返そうではないか」
キミが無事でよかった、と、無理をさせてすまなかった、と。そんなルゥの、皆の、言葉が、気持ちが嬉しくて。
「……うん……ありがとう……」
だから誓うよ。どんな障害にも屈しないように、皆を守れるように、皆と支えあえるように、強くなると。

永遠神剣之章：３２．想うこと、願うこと。

“剣”を離れ、斑鳩達と合流しようと、ピラミッドの方へと足を向ける。その道中、マナ嵐もピラミッドそのものも無くなっているのが見て取れ、彼女等も敵を撃退する事に成功したのだと解った。

斑鳩達と別れた地点辺りまで戻ったところ、そこには既に皆が集まって居て、こちらに気付いたのだろう、手を振っているのが見て取れた。どうやら欠員は居ないようだ。

「無事だったか」

「大丈夫だった？」

異口同音に言葉が滑り出て、互いに顔を合わせて思わず笑みが漏れる。

ひとしきり互いの無事を喜んだ後、詳しい報告は戻ってから、と言う事にし、帰路に着くこととなった。

その道中、俺は脱出した後より気になっていた事を確かめる為、『観望』へと意識を向ける。

それは、あの時――“声”が聴こえなくなる直前に言っていた事。“頼み”と“観望”という単語。

（……なあ『観望』。あの時の声の娘とお前ってどういう関係なんだ？　最後に聴こえた“頼み”の内容って、お前は知っているのか？）

一瞬の間。次いで、朗々たる調子の声が脳裏に響く。

＜……彼の者は我が母。我を生み出せし造物主。世界の狭間に幽閉されし者。其は枝に非ず、樹にも非ず、理の世界の狭間。故に求む。“世界を渡りし者”を。故に願う、根幹たる地、その更に奥にて“世界を繋ぐ門”を開く事を＞

（……分枝世界でも、時間樹そのものでもなく、“永遠神剣が理を支配する世界”と、“全く別のモノが理を支配する世界”。すなわ

ち、理の世界の狭間……ですか。……なるほど、だからこそ、マスターを選んだのですね）

つまりは、本当の意味で『世界』を渡る事が出来る術。それを行える者を捜し求めていて、そこに俺が現れたって事か。……なんて偶然……いや、本当に偶然か？

人の意思……想いや思念は時として絶大な力を持つ。それはこの世界も例外じゃないく、事実、『原作』ではだが、暁は意念の力をもって理想幹を攻撃していた。

……ってことは、その“世界の狭間”に居る彼女の、そこから出たいと言う想い。『観望』の、そこから出したいと言う想い。それらの……人間（ひと）を遥かに凌ぐであろう強い想いが干渉して、俺が『この世界』に転生したのだとしたら？

（……なるほどね。じゃあ、根幹たる地ってのは、この時間樹の幹……いわゆる、理想幹……か？　だとすると、その更に奥ってのは……）

俺の疑問に答え、『観望』は言う。――汝等に曰く、『ログ領域』と。

この時間樹内にて起こった出来事（ログ）の全てが記録されている、ログ領域。どこにでも繋がっているとも言えるし、どこにも繋がっていないとも言える場所。

……参った、と思う。理想幹ならまだしも、ログ領域にまで入れとは……。

だが、あの時。“声”の彼女が力を貸してくれなければ、間違いなく皆諸共死んでいた。言うなれば――自分のみならず、ミゥ達の恩人でもあるのだ。……出来うる限りは、その願いに応えたいと思う。

それに……だ。先程の、推論とも言うにはおこがましい、只の思いつきに過ぎない考えではあるけれど……その考えが合っているのだとしたら――俺達は、出会うべくしてこの世界にいるのだろう。

だから、もう一つだけ――ログ領域にてゲートを開いた結果、俺

達に害が有る様な事は無いんだな？　とだけ訊いて、当然だ、と答えを貰い。……まぁ、有ったとしても馬鹿正直に「害が有る」などと言う事は無いだろうが。

まだ『彼女』に関して、全てが解っているわけではないし、その人となりを良く知っているわけではないけれど……二度の接触から感じた雰囲気では大丈夫だと思う。それに……うん、そうだな。信じたいんだ、俺は。『観望』を……共に戦ってくれる、“仲間”の一人を。

だから、『観望』には「何とかやってみる」と了承の意を返して、念話を終えた。

…

……

……

町に戻った俺達は、レチェレの店で打ち上げの様なものを行う事になった。まぁ、青年団の人たちに連行されたとも言えるわけだが。

始まるまでの間、ロドヴィゴさんによって町の有力者達を始めとする住人達へ、過去の事件の詳細、この世界の危機からの脱却、そして、精霊たちとの和解への一歩。それらの事実が余すことなく伝えられた。

町の代表者にして、精霊嫌いで有名だったロドヴィゴさんの口から語られた事によって、それらは町の人たちに信じられていく事になるだろう。

それでも、直ぐには変われないかもしれない。けど彼等なら、必ず精霊達といい関係を結んでいけると信じている。

レチェレの店の中には、俺達や地上に降りて一部始終を共にした

青年団のほか、多くの町の人たちが集まっていた。
レチェレはロドヴィゴさんの話を聴いて、今は精力的に店の中を動き回っている。……彼女はルプトナに助けられた事もあって、精霊たちの事を信じていたから、それが間違って居なかった事が嬉しいのだろう。
「よーしそれじゃー、カンパーイ！」
何とも単純だが勢いのあるソルラスカの音頭に続き、あちこちから杯がぶつかる乾いた音が聴こえた。……ってか、ソルラスカが音頭を取ってる所は皆スルーなのな。まあ、自然と溶け込んでしまっている所が、彼の彼らしいところなんだろうが。
今一その場の雰囲気に溶け込めない事を自覚しつつ、そんな店内の様子を端の方のテーブルから観察する。原因は解ってる。ただの俺の弱い精神に起因しているだけ。……目の前に並ぶ料理を只々口へ運ぶ。うん、うまい。
「……よく食べますね」
そんな声が聴こえたのでそちらを向くと、頭にレーメを載せた世刻と、永峰の姿が。
どうやら店内の勢いに押されてここまで流れて来たらしい。
「あー……今回の戦いで、ちょいと消費のデカイの使っちまったからなー……正直言うとさっさと食って寝たい」
一度目の『スピア・ザ・グングニル』は言わずもがな、“声”の少女にもらったマナで撃った二度目のにしても、下手に手を抜いてマナ溜まりを暴発させるわけにも行かなかった為、「身体をちゃんと動かせる程度」を残して全て使ってしまったのだ。故に、現在も尚俺の身体はマナ不足である。
「それより、ピラミッドじゃ活躍したらしいじゃないか」
「望ちゃん、凄かったんですよ」
「必至でしたから。正直余り覚えて無いんです」
町に戻ってくる道中聞いた話だと、ベルバルザードを追い返すに至った一撃を加えたのが世刻だとか。

そんな俺の言葉に永峰が肯定し、世刻が苦笑を漏らす。
「先輩こそ、“剣”では凄かったそうじゃないですか」
お返しとばかりに世刻にそう言われて、「俺も、それこそ必至だったからな」と、先程の世刻と同じように苦笑が漏れた。
「それに皆がいたからこそ、だよ。俺一人じゃ中心部に辿り着くことすら出来なかったさ」
「……それは俺もですよ」
「……そっか」
互いに顔を見合わせ、そして同時に再び苦笑をもらす俺達。そんな時だ。
「のぞむく～ん……って、あら？　三人でそんなところでなにしてるの？」
ふらり、と斑鳩が現れた。
顔がうっすら赤く、呂律も若干怪しい。……酔ってやがる。
何となく……うん、嫌な予感がする。ここに留まっていてはきっとろくな事にならない。
「……世刻」
「はい？」
「……まかせた」
立ち上がり、回れ右。後ろから「ちょっ！　先輩！」とか「酒を呑まないやつが居ていい場所じゃねーんだよおお！」とか「完全に酔っ払ってるよこの人！」とかって声が聴こえたけど、振り向くな。振り向いちゃいけない。
一歩一歩遠ざか……ろうとしたところで、横合いからガシッと右腕を掴まれた。
恐る恐る右を見ると……俺の腕にしがみついているヤツィータが。
「あらぁ～？　どこ行くのぉ？　……あぁ、望君ばかり構われてるから寂しいのかなぁ？」
にやっと言う表現が似合いそうな笑みを浮かべながら、上目遣いに見上げてくるヤツィータ。

そんな彼女に対して、常時であれば出てくるはずの、彼女の色々と柔らかい感触に対する感想やら感動やらを根こそぎ吹っ飛ばし、

「……とりあえず酒くせぇ……」

そんな言葉しか出なかった俺だが間違っては居ないはずだ。色気も何もあったもんじゃねえっす。また随分呑んでるなぁおい。

「なによ～……失礼な反応ねぇ……良いじゃない多少のお酒の匂いぐらい。呑んでるんだから」

「いや、どんだけ呑んでるんだよっていうな。そして離せ」

「もう……いじわるねぇ。よし、いいわ！　こうなったら脱いじゃう！」

と、そんな俺の言葉に頬を膨らませたヤツィータだったが、次の瞬間そんなことをのたまう……って、その時、呑んだときの彼女の特徴を思い出した。

曰く、“呑むと脱ぎたがる。でも脱ぐ前に吐く”。

そして案の定、その顔色を青くするっておいまて！

「……うっぷ……あ、だめ、吐きそう」

「ここで吐くなよ!?」

そう言っては見たもののそのまま放っておけず、危険な雰囲気のヤツィータを引っ張ってトイレに押し込んだところで、自分の口から「はぁ……」と小さくないため息が漏れた事に気付いた。

「……なんて言うか、どっと疲れた……」

「……まったくです」

「うむ……」

ナナシやレーメと顔を見合わせて互いに苦笑を漏らし、ヤツィータに扉越しに先にものべーに戻っている事を伝えて、その場を後にする。

そのまま酒場から出ると、辺りはすでに日は暮れていて、空には煌びやかな、溢れんばかりの星が瞬いていた。

出てくる途中に見かけたが、どうやらユーラも来ていた様で、ミ

ゥ達やリーオライナと楽しそうに話していた。彼女達の表情は皆明るく、多分、スールードにやられ、見逃された結果とは言え、彼女達にとって忌まわしいモノの象徴であろう“剣”を、犠牲を出す事無く破壊できたからだろう。

彼女達とて、『スールードに勝てなかった』と言う事実は身に染みているだろう。けど、喜ぶべき所はしっかりと喜ぶ。その気持ちの切り替えの上手さ。失敗を糧として前へ進む意思。

……強いな、と思う。そして同時に、自分自身の弱さを自覚する。

あの直後は、強くなって見せると決意したつもりだった。けど、時間が経つほどに思い知る。

俺だって解っている。勝てなかったとは言え、死んでいない限りは負けではない。生きている限り、次に勝つチャンスは決してゼロでは無いと言う事。奴は言った。生き残ったならばまた逢いましょう、と。それは偏に、再び俺の前に現れると言う事。

……記憶の海の中から浮かび上がる、奴に相対した時の圧力。己が持つ力が通じなかった事に対する、絶望感。それに、無力感。

褪せる事の無いその記憶に、じわりじわりと魂が締め付けられる。身体が微かに震えだす。

勝てなかった。通じなかった。次は殺されるかもしれない。守れないかもしれない。……怖い。ああそうだ、俺は怖いんだ。初めて、圧倒的強者を前にして本当の意味で理解した、自分の、仲間の……“死”への恐怖。

ぶるりと、一際大きく身震いしてしまったところで――ふわり、と、両頬が温かいものに包まれた。

声にださずとも、見ずともに解るその感触に、心と身体の震えが止まった。

……そうだ、大丈夫。俺は独りじゃないのだから。……二人が側に居る事を自覚するだけでそう思えるのだから、いやはや、我ながら単純だ。

――人の足を止めるのは絶望ではなく“諦観（あきらめ）”　人の足を進める

のは希望ではなく“意思”――そんな言葉があったことを思い出す。
大丈夫。解っている。大切なのは、諦めない事。歩き続ける事。
「……二人とも、有難う。……大丈夫、俺は進めるから」
――そうだ、進んでいこう。一歩ずつでも。

永遠神剣之章：３３．別れ、旅立ち。

この世界での戦いから、約一月が経過した。
思っていた以上に長く滞在する事になったのは、生徒達への配慮の部分が大きい。と言うのも、前の『剣の世界』では、ものべーの中に居たとは言え、直接的に命に関わるであろう戦場へ繰り出し、この世界においてもまた、ほぼついて早々にミニオンの存在の発覚と、心休まる日が無さ過ぎた為に、精神的に限界が来ている生徒が多かったのだ。
幸いにも、ピラミッドも“剣”も無くなった為にこの世界からミニオンが姿を消し、この町の人たちは皆親切で、町としての機能も確りとしているために、滞在にはもってこいだった。
その為、生徒達の心のケアも兼ね、この世界にしばらく滞在していたのだ。
……だが、それもそろそろ良いだろう、と言う事で、数日前にこの世界から出る事が決まり、今朝その準備も終わった。
そして今日一日は自由時間とし、この世界で世話になった人たちへの挨拶回りに使い、明日出立する事になった。
そんなわけで、俺は今ユーラの店に来ている。
「すまなかったね、全然力になれなくてさ」
そう言うユーラに「そんなことない」と頭(かぶり)を振って答える。そう、ユーラとリーオライナとは、ここでお別れだ。
恐らくスールードが今後現れるとすれば、俺達の前である可能性が一番高いために、リーオライナは後ろ髪引かれる所は有る様であったが、やはり残してきた他のクリストの民をいつまでも放って置く事が出来ないからだそうだ。
「お前たちに逢えて良かった」
そう言って差し出されるリーオライナの手を握り返す。
「また逢おう」

「ああ、必ず」
二人と握手をし、俺はユーラの店を後にした。
この後は、ロドヴィゴさんやレチェレ等の場所を回り、同じように挨拶をしていった。

「というわけで、我等が旅団員に新しいメンバーが加わったわ」
「おっすルプトナです。よろしくお願いします」
ものべーに戻り、最近ちょこちょこ箱舟から出ているフィアと一緒に生徒会室でのんびりしていると、ルプトナを伴った斑鳩や世刻達が現れ、開口一番斑鳩がそう言い放った。
そう、ルプトナも結局、俺達と共に行く事になったのだ。と言うのも、色々な世界を見て回り、人と精霊が上手く共存できる方法を見つけたいのだとか。
……まぁ、彼女の様子から察するに、世刻と一緒に居たいというのもあるのだろうが。確かルプトナ自体が、ナルカナがジルオルを捜すために生み出した存在だったはず。そう言った事も影響しているんだろうが、一番はやはりこの精霊の世界での戦いを通して、信頼できる仲間が出来たってことが大きいのではないだろうか。……なんて、何を言っても勝手な予想に過ぎないのだが。
ルプトナに皆が返事を返していくのを、生徒会室の窓際にぼーっと立ちつつ、それにしても……すっかりものべーイコール旅団になってるなぁ……なんて考えながら眺めていると、ルプトナと目が合ったので片手を挙げて返しておく。
「どうしたの？　何か不景気な顔しちゃって」
そんな俺達の様子を見て取ったか、ヤツィータがこちらに来つつ、そう声を掛けてきた。
「そんなつもりは無いんだけど……そんな顔してたか？」
「明確にではないですけど、不機嫌そうな雰囲気は出てましたよ。理由の予想はつきますけど」
そんな苦笑混じりのフィアの言葉に、ヤツィータは「あら、じゃ

あどうして？」と問いかける。
「おそらくですけど、ご主人様はいつのまにか『旅団』に組み込まれている、と言う現状に落ち着かないのかな、と」
フィアの予想を聞いて、「あー、それはあるかも」と口に出してしまった。
いや何と言うか、言われてみると確かに、そう言った思いはあるなーと思ってさ。
「あら……『旅団』は嫌い？」
「いや、『旅団』自体に隔意は無いよ。ただ……」
苦笑しつつも、嫌われちゃったかしら？　何て言うヤツィータには頭を振る。
そう、別に彼等がどうと言う事は無い。要するに、俺の考え方の問題なだけだ。つまり、例えそれしか選択肢が無いとしても、自分自身で選んで進みたいんだ、俺は。かつて『剣の世界』で、この学園の皆が“戦う事”を選んだ時の様に。
「……成程、入るか入らないかを明確に問われたわけでもなく、なし崩しの内に一員になっているのが気に食わない、と」
「……まぁ、そんなとこ。俺としては自分の立場のベースは、あくまで『物部学園』だって思っているからかな、そう思うのも。
……ま、『旅団』にしろ『学園』にしろ、同じ一つの集団として動いている以上、所詮そんなのは呼び方と意識の違いに過ぎないのは解ってるんだけどさ。……だからまぁ、今言った事は気にしないでくれると助かる」
こんな事で集団の意思統一を乱してもメリットは無いしな、と続けると、ヤツィータは「それはそうだけどね」と苦笑しつつ、
「けど、そういった細かい意識の摺り合わせって結構大事なのよ？　それを怠ったばっかりに、思想に食い違いが生まれて、貴重な戦力が居なくなりました。……なんてなったら目も当てられないもの」
「……何だかんだで結構ちゃんと考えてるんだな」
「そりゃあ、一応ナンバー2なんてやってますから」

そう言って互いに苦笑したところで、
「そうだ、ヤツィータ。今のうちにアジトの座標を教えてくれる？　準備は万全にしておきたいから」
斑鳩がそう言ってきた。それに対してヤツィータは、「ちょっと待ってね」としばし黙考すると、ばつの悪そうな表情を浮かべる。
「あー……ごめん、沙月！　間違って古い方の座標持ってきちゃったみたい」
「はい？　……って、えええ！？　古いのって、私が持っているやつと同じ！？」
「え？　もしかして、また座標が無いんですか？」
「いや～、合流する事ばかり考えてて……迂闊だったわぁ」
永峰の驚いた声に、参ったわね～と、全然参った様子もなく言うヤツィータ。うん、大して気にしてないな、あれは。
対して斑鳩は、本気で参ったと言わんばかりに頭を抱え、「またランダムワープで跳ばなきゃいけないわけ……？」と唸っている。実に対照的だ。
「……大変だな、斑鳩。がんばれ」
「他人事みたいに言わないでよ！　何でそんなに落ち着いてるのよ？」
「いやだって俺にはどうしようもないし。何とかなるって……たぶん」
「そうそう。いいじゃない、どうせそんなに離れてないわ。多分すぐに見つかるわよ」
……俺としては、順当に行けば無事に着くであろうと言う、確信とまではいかないが、考えが――無論、『原作』によるものだ――あるからなのだが……ヤツィータのこの軽さは何なんだ。
「……そうだ！　青道君の不思議パワーで座標とかわからない？」
「無茶言うな、それが出来ればもうやってる。そして落ち着け」
「うぅ……そうよね。……ごめんなさい、取り乱したわ」
多分ヤツィータの言葉が余りに予想外だったんだろうな。……に

しても不思議パワーって……そう言う認識かよ。
ちらりと隣のフィアを見ると、目が合って、互いに苦笑い。そしてフィアは小さく首を横に振る。……さすがに無理らしい。
そんな時、俺達のやり取りを見ていたルプトナがおずおずと口を開いた。
「あの……ボク、その座標ってやつ、長老から貰ってるんだけど」
「え、ほんとに!?」
「うん……長老が言ってたけど、望たちはどこか行きたい場所があるんでしょ？　長老はそれを見たって」
ルプトナの言葉に、世刻は頭を抑えて「ああ、あの時の……」と呟いている。どうやら、ピラミッドを壊してから俺達が合流するまでの間に何か……あー……確か、頭の中見られたんだっけか？
「座標さえわかれば、問題ないんだよね？」
「うん、それじゃあ、座標を教えて」
ルプトナにそう訊いた永峰を見て、斑鳩がにやりと人の悪そうな笑みを浮かべた。
……とりあえず、永峰に合掌しておく。
「……何やってるのよ？」
「……タリアならこの後斑鳩が何をするか、解ると思うんだが。……ってわけで、永峰の冥福を祈っておいた」
「……あぁ」
俺の行動に得心が行ったか、タリアがやれやれと呆れながらため息を吐いた。
「……ルプトナちゃん、ちょっと来て」
「ん？　うん。うん……え、そんなことしていいの？」
その間にルプトナを引っ張って部屋の隅に移動した斑鳩は、こそこそと彼女へ耳打ちしている。
そんな二人の様子に、永峰は「なに話してるんだろう？」ときょとんとしているが……そうか、知らぬが仏とはこう言う事か。
「そんなわけだから、お願いね」

「わかったよ」
話を終えたルプトナが、永峰へ近づいていく。
そのただならぬ様子に、永峰がごくりと喉を鳴らした。
「ま、まままままさか～」
あ、気付いた。そして時既に遅し。
「希美、ちょっとだけ、我慢しててね」
ルプトナが永峰のに両頬に手を当てる。そして――惨劇が。
「んーーーー！！！」
生徒会室の机に押し倒された永峰は、その唇をルプトナの唇に塞がれ、しっかりと押さえつけられ、逃げられずにもがいている。
「ん……ちゅ」
「ルプトナ……ちょ……もうっ……」
「……うわー……」
「……随分長いわね……」
「ルプトナが……積極的に攻めているように見えるが」
「……若いっていいわねぇ……」
まったくもって眼福である。あー……阿川にカメラ借りとけばよかった。
「……ふぅ～」
「……ガクガク……ざ、座標入力終わり……ガクガク」
「希美ちゃん、これで大抵の準備は整ったわね？」
「うん……あとは旅立つだけ……」
ようやく解放された永峰が、虚ろな目でつぶやく。見てるほうはいいとしても、やられた方はたまったものでは無いようである。……当然か。
あ、さすがに斑鳩もまずったかなーって顔してる。
「希美、大丈夫か？」
「……望ちゃん、今の私に話しかけないで。私、汚れちゃったから」
「それぐらいで泣くなよ」
「ほっといて……これでセカンドまで、うぅ……」

そうか、ファーストは『剣の世界』から旅立つ時に、斑鳩にやられたんだっけか。……なんか流石に可哀想になってきたな、おい。

「……永峰、逆に考えるんだ。座標を持っていたのが、俺やソルじゃなくてよかったと。……まぁその場合は、流石に別の方法だろうけどな」

「今もその別の方法がよかったー！」

どうやら一言余分だった様だ。……いや、実際はそんな別の方法があるかなんて知らないんだけど。

「フォローすると思いきや突き落とすとは……祐、恐ろしいやつ」

……

……

……

そして翌日、ものべーの前に集まった俺達は、町の人たちの見送りを受けていた。

「私たちに出来るのは、食料を提供することぐらいだが、この世界を離れても頑張ってくれたまえ。……早く君達の世界に戻れるといいね」

手を差し出してくるロドヴィゴさんと、握手していく。

「この世界を救ってくれた君達に恥じぬ様、我々も精霊たちと共に頑張っていくよ」

そう言うロドヴィゴさん達の表情は柔らかく、希望に満ちている。

……きっと、彼らがいれば大丈夫だろう。

「皆さん……本当に行っちゃうんですね……」

「……レチェレ、長老達のこと、頼んだよ。いつか長老達が町に来たとき、案内してあげて」

「ルプトナさん……ひっく……」

固く目を瞑り、抑えるような声を漏らし、レチェレが嗚咽を漏らす。

斑鳩に押し出された世刻が彼女の頭を軽く撫でると、堰を切ったかのように、ぽろぽろと涙が溢れて落ちた。

「ぁ……ご、ごめんなさい……笑って送り出そうって……昨日から考えてたのに……うっく……ふぇぇ……」

「そんなに泣かないで。すぐに戻ってくるから」

ルプトナの言葉にコクコクと頷き、差し出された斑鳩のハンカチで涙をぬぐうレチェレは、今度はしっかりと顔を上げて俺達を見た。

「えぅ……絶対……絶対に、皆さんのこと、忘れません……！　だから、約束してください……また皆さんで、この世界に遊びに来てくれるって……」

「ああ、約束する」

「レチェレも、元気でね」

世刻とルプトナの言葉に、未だ瞳を涙で濡らしつつも笑顔を浮かべ、頷くレチェレ。

そんな様子に、俺達の顔にも自然と笑顔が浮かんでいた。

「えっと……これ、お弁当です。……うちの料理、いっぱい入ってますから……」

「ありがとう、大事に食べるよ」

レチェレの差し出した大きな包みを世刻が受け取った後、永峰が「そろそろ出発させるよ」と切り出した。

それを受けて、他の皆も次々とレチェレとロドヴィゴさんへと挨拶を交わし、ものべーに乗り込んでいく。

俺もそれに続き、ものべーに乗ろうとしたところで、レチェレたちの後ろ、町の人たちの中に、ユーラ達を見つけた。

レチェレ達の邪魔しないようにって感じなんだろうけど、あんなところに居ないで、前に出てきてくれればいいのに。

そう思いつつも、側にいたミゥ達を見ると、彼女等も気付いていたようで。

互いに苦笑を浮かべて、ユーラ達へ手を振ってものべーに乗り込んだのとほぼ同時に、ものべーは鳴き声を挙げて空へと飛び立った。

次の『魔法の世界』でも、新しい出会いと、厳しい戦いが待っているのだろう。……でも、この世界で学んだ事があれば、大丈夫。

上昇を続けるものべーから見える眼下には、日の光を浴びて輝く精霊の世界の大樹林が広がっていた。そこにはこの世界を脅かしていた物は、最早無い。

永遠神剣之章：３４．到着、魔法の世界。

『精霊の世界』を旅立ってから数日。もうすぐ目的地に到着する、との報せを受けて、皆と共に世刻達の教室へ行き、窓から外を眺める。

外は霧の様なものが立ち込めて視界が晴れず、逆に見えないせいか、皆のどんな世界なのかって言う期待感が高まっているようだ。

「でも、『魔法の世界』って言うからには、ボクの世界と同じようなところなんじゃないの？」

そう言うルプトナに対して、タリアが「ところが、そうでもないのよ」と否定する。

それに続いて斑鳩が、

「別に魔法って言葉が、ファンタジー世界のお約束ってわけでもないでしょう？」

そう補足した時、ものべーが一声鳴いた。どうやら何か見つけたらしい。

そして――。

「うお……」

「すげえ……」

「威風堂々とはこのことでしょうか……素晴らしいですね」

周囲から感嘆の声が上がる。

霧と雲海を抜けた先には、中心に巨塔がそびえる、円状に街並みが広がる白銀の都市が蒼空に悠然と浮いていた。

「あそこが、この『魔法の世界』の中心にして最大の都市、ザルツヴァイ。あの中心の塔は『支えの塔』って言うのよ」

「沙月先輩、あそこに行った事があるんですか？」

街の説明をした斑鳩に問いかけた世刻に、彼女は笑みで返す。

「そりゃあるわよ。……ようこそ、旅団の本拠地へ」

その間にもものべーは街へと近づき、それにともなって街の様子

も見て取れてくる。
　やはりと言うか当然と言うか、純粋な自然はまるで無く、人工物特有の硬質な雰囲気が強い。今の今まで、正反対な『精霊の世界』に居た分、特にそう思うのだろう。自然が無いことにはルプトナが難色を示していたが。
「……高度に発展した科学は魔法と変わらない、何てよく聴くが、この世界はまさにそれだな」
「この世界を『魔法の世界』と呼ぶ理由は正にそれよ。納得した？」
　そう訊いてくる斑鳩へ頷いて返すと、彼女は満足そうな笑みを浮かべた。
「あ、それじゃあ早苗先生、全校生徒へ上陸の準備を伝えてください」
「大丈夫なんですか？」
「ええ、問題ありませんよ」
　あちらではヤツィータと椿先生の、そんなやり取りが行われて、椿先生が放送のために教室を出て行った。
　そして、それと同時にこの教室にいた一般生徒達が、喜びの声を上げる。
　まあ無理も無いか、今まで、新しい世界に着いてすぐ外に出れるなんて無かったもんな。
「沙月先輩、あの突き出ている先端辺りに降りればいいんですか？」
「ええ、あそこがドックみたいなものだから、よろしくね」
「はい。ものべー、お願いね」
　永峰の言葉に応えて、ものべーがゆっくりとドックへと近づいていくにつれ、そこに人が四人立っているのが見えた。
「あっ……サレス様」
　その人達を見たタリアはバッと教室から駆け出て行った。
「……眼が輝いてたな」
「あそこに居るサレスと言う人に会えたのが、よほど嬉しかったのでしょうね」

「あはは……」
思わず漏れた俺の言葉にカティマが答え、斑鳩が苦笑する。その一方で、ソルラスカが、
「……けっ、そんなに嬉しいもんかね」
とくさしていたのが聴こえたが。
「……大変だな、ソル。がんばれ」
「何をだよっ。おら、さっさと行くぞ！」
「……はいはい」
いやはや。素直じゃないねぇ。

……
……
……

ものべーから出た途端、冷やりとした空気が肌を刺す。
各所から「寒い」と言う声が聴こえ、ヤツィータが「風邪を引かないように気をつけなさいよ」と注意を促すと、皆慌てたように制服を整えていた。
そんな中、不意に「ノゾム！　制服の前を開けるのだ！」と言う声が聴こえたのでそちらを見ると、世刻のレーメが、世刻の制服の首元を開けて、そこからすぽっと入り込む所だった。
そんな微笑ましい光景に思わず笑みが漏れ、他の皆もやはりそれを暖かな視線で見守っている。
「バカ野郎、早く出ろ」とか「嫌だ！」とかの小さな言い争いの様を見守っていると、ふと視線を感じた。何かとても直ぐ側から。
……はぁ。しょうがない。
制服の首元を少し大きめに開けてやる。……寒い。
「うむっ」

解っているな！　と言わんばかりに頷いたレーメが、俺の右肩からそこへ潜り込んだ。次いでナナシが、澄ました顔をしながらもレーメに続く。

そんな俺達を、フィアやミゥ達はくすくすと笑いながら見ており、その様子に気付いた斑鳩達もこちらを見て、あらあらと言っている。

……世刻と眼が合った。

――大変ですね。

――お前もな。

その瞬間間違いなく、視線だけでそんな意思疎通が出来たと確信して止まない。

そんな何とも混沌としてきた場を、

「はいはい、騒ぐのはその辺にして。折角迎えに来てくれた方たちが、待ちくたびれちゃうわよ？」

ヤツィータが治めるのとほぼ同時に、タリアが「先に行くわ」と駆け出し、ソルラスカが慌てて後を追っていった。

それに続いて、俺達も迎えに来ていた四人の方へと向かう。

そこに居たのは、二人の男性と二人の女性。

男女共に一人ずつ、頭から猫の様な耳が生えている。

女性の方は、「女の子」と言った方がしっくりと来る年齢で、後ろで二つにまとめられた藤色の髪を風に揺らしながら、その髪よりもさらに深い紫色の瞳に期待の色を篭めて、こちらの様子をじっと見つめている。

対する草色の髪の猫耳兄さんは、不機嫌そうな様子を隠すこと無く、睨みつけるようにこちらを見ている。……まぁ、こっちはとりあえず置いておこう。

猫耳少女が、『旅団』の一員のナーヤ＝トトカ・ナナフィだな。んで、猫耳兄さんの方が……なんだっけ、ニーヤァだったか。

自分の一族至上主義で、他を見下している様な人だった気がする。
　ってことはもう一人の、青みがかった緑色の髪を三つ編みにした、メイド服に身を包んだ人間の女性が、ナーヤの付き人のフィロメーラさんで、最後の一人――眼鏡をかけて、長い濃緑の髪をポニーテールにした、白いローブ……いや、どちらかというとマントか。それに身を包んだ背の高い男性が……『旅団』のリーダーである、サレス＝クォークス、か。
　そんな彼らの様子を見ていて、それにしても……、とふと思う。
「……緑色の髪の毛の比率高いのな」
「……着目するのはそこですか……？」
　フィアに突っ込まれた。だって気になったんだもの。
　そんな時だ。
「待っておったぞ、のぞむ！」
　ダッと駆け出した猫耳少女が世刻の懐へと突進して抱きついたのは。その瞬間、一気に剣呑な雰囲気になる彼の周囲の女性陣。
「のぞむのぞむのぞむのぞむーー！！」
「うわっ！　ちょ、離してくれ！」
「嫌じゃ！　わらわはずっと待っておったのじゃ、もう離さぬぞ！」
　そんな世刻とナーヤのやり取りが続くほどに、周囲の女性陣の視線は鋭さを増していっている。怖ぇよ、あそこ。
「……うわっ……今あそこに近づきたくねえ」
　思わずそんな言葉が口から出たら、近くに居た森に全面的に賛同された。
……
……
……

その後、俺達の所からはよく聞こえなかったが、世刻がナーヤとの会話の後、何を感じたのか彼女の頭を撫で、それを見た永峰と斑鳩とルプトナが大声を上げて止め、その声に驚いたナーヤが離れた隙に世刻と彼女の間に三人が割り込んで引き離すと言う怒涛の展開を経て、ナーヤに促されて俺達はサレス達の下へと向かう。

「やれやれ、やっと話ができるか。初めまして。待っていたよ、世刻望君」

彼らの元へ着くなり、そうサレスと思われる人に名を呼ばれた世刻は驚いた表情を見せる。

「？　どうして」

「俺の名前を知っている、か？　沙月から聴いていたからな」

世刻の言葉を遮る様に言うサレスに名を呼ばれ、斑鳩は彼の方へ歩み寄りながら破顔すると、

「久しぶりね、サレス。ずいぶんと待たせちゃったかな？」

「いいや、よくやってくれた。頑張ったな」

「あん、もう。いい年なんだから、頭なんて撫でないでよ」

そんな親しげなやり取りに、世刻が複雑そうな顔をしているのが見て取れた。

後ろの方から眺めている俺にも判ったのだ、斑鳩がそれに気付かないはずもない。

案の定、「あれ、望君。もしかして妬いちゃってるの？」何て嬉しそうに言いながら、世刻に詰め寄り、

「可愛いなぁ、望君。安心して、サレスは私の兄みたいなものだから」

そう言って彼の腕を抱き、それをみた永峰を始めとした女性陣がまた騒ぎ出していた。

この間に、ヤツィータがサレスの側へ近づき、何事か話している。

あれは……現状の報告だったか。

と、ふとそのサレスとヤツィータの視線が俺に向いた。……ふむ……この時点で彼の興味が俺に向く？　……無いな。まずは何をお

いても『ジルオル』だろう。
（……と言いますか、私が居るからじゃないですか？）
そんなとき、フィアからそんな念話が飛んで来て、思わず「あ」と声を上げそうになった。
……まぁ確かに、学園の連中には「謎のメイドさん」で定着した感のあるフィアだが、学園外の人から見れば、学生の集団の中にメイド服の人間が居れば注目するか。
とは言え、態々印象を悪くする理由もないので、軽くぺこりと頭を下げておく。……あ、返礼した。……まぁとりあえずはこれでいいだろう。
むしろ、後々『ログ領域』に入るのなら、彼の協力は有った方がいいのだから、無難なところか。
……おっと、どうやら先に進めるようだな。
「さて、そろそろ自己紹介をさせてもらおうか。名前ぐらいは確認しておきたいだろう？
まずはそこにいる彼から。彼はニーヤァ＝トトカ・ヴェラー。この街、ザルツヴァイの代表だ」
サレスがそう言って指したのは猫耳兄さん。
彼は尊大と言う言葉がぴたりと当てはまるだろう態度でこちらを見ると、鼻を鳴らす。
「ふんっ。まさか人間だとはな」
その明らかに『人間』を見下した言い方に、周囲の皆も色めき出すが……うん、自重してくれたようである。
「そして次に彼女。突然君に抱きついたのが……」
「ナーヤじゃ。ナーヤ＝トトカ・ナナフィじゃ。
わらわも“一応”この街の代表ではあるが、あくまで“一応”じゃ。この街の代表はあくまで兄上であるから、間違えるでないぞ？」
サレスの後を次いで、ナーヤが自ら名乗りを上げる。
何もそんなに“一応”を強調しなくても。……まぁ、これもきっと、こうまで言っておかないとナーヤが代表だと思われる事が多い

のだろうな。
　そんな事を考えている間に、サレスの紹介は続く。
「ナーヤの側に居るのが、彼女の世話役でもあるフィロメーラだ」
「初めまして。ナーヤ様の付き人をさせていただいております、フィロメーラと申します。以後、お見知りおきを」
　スカートをそっと摘みながら優雅に一礼する彼女。
　その洗練された様子に、生徒達……特に男子生徒から、感嘆の声が上がった。
「そして、私はサレス＝クォークスという。よろしく、望」
　最後にサレスが名乗り、紹介を終える。
　そして、ナーヤがフィロメーラさんを促し、彼女の案内で学生達を都市部へと導いていく。阿川はさっそく彼女や街の風景を写真に収めていたが……好きだね、ほんと。
　これでこの場に残ったのは、神剣使いとニーヤァのみ。そのニーヤァも、さっさとこの場を離れていったが。
「……すまないな、のぞむ。兄上の態度には不快な思いをさせてしまった」
「いや、いいんだけど。なんであんな風なんだ？」
「あーあれなぁ……いわゆる、差別主義なんだ」
　世刻の疑問にソルラスカが困った顔で答える。やはり色々と言われてるのだろうか。
「そうだな、いささかそういう部分はあるが、この国の世情を考えれば、仕方の無いことだ」
「兄上はそういう主義主張が強すぎてな。……さて、このままここで話し込んでいては、風邪を引いてしまう。わらわに着いてまいれ」
　サレスの言葉に頷いたナーヤに促され、俺達は『塔』の中へと向かった。
　……さて、俺はどう動くべきかな。

永遠神剣之章：３５．信用と、信頼。

「ここはわらわが主に政務に使う執務室じゃ。存分にくつろぐといい」

そう言うナーヤに通されたのは、大きな窓の前にデスクが置かれ、壁際に蔵書の詰まった本棚がいくつも並んだ部屋だった。

「はぁ……蔵書がたくさんあるお部屋なのですね」

「うう、頭痛が……」

カティマが感心した声を上げ、ソルラスカが不調を訴える。そして「大丈夫ですか？」と心配する永峰に、タリアが「単に本アレルギーなだけだから、心配なんてしなくていい」と教えていた。

「ほ、本アレルギーですか？」

「そ。いかにも難しそうな本を見ると、すぐに頭痛と微熱が出るのよ」

……ソル、ちょっと情けない。

そんな皆が思い思いの場所へと腰を降ろすと、ナーヤが窓際の執務机の所に座る。

「皆も都市部へ行きたかったとは思うが、とりあえず情報を整理した方がいいと思ってな。しばしの間、我慢してもらうぞ」

そう言ったナーヤは、俺達をぐるりと見渡したあと、ニコリと笑い、

「あらためて、ようこそザルツヴァイへ！　ここはこの『魔法の世界』の中心にして、唯一の都市じゃ。主にわらわ達、トトカ一族が統治しており、わらわと兄上の二人が代表じゃ」

……その辺が先程サレスが言っていた、ニーヤァが他の種族を見下している要因ってやつだろう。

「我が国は、そこにいるサレスの協力を得ていてな。もう随分と長い間、色々と助けてもらっておる。ちなみに、わらわの教育者でもあるぞ？」

「……そういえば、サレスって私よりナーヤの方を可愛がっていたわよね？」

「教え甲斐のある方を可愛がるのは、教育者として当然だろう？」

「あ～ら、私は教え甲斐の無い生徒だったのかしら？」

「そうだな。つまらないと言っては直ぐに逃げる。見つけたと思ったら教科書を隠す。まったく、手のかかる生徒だったよ」

彼等にとってこの『旅団』と言うのは、正に家族の様なものなのだろうと言うのが伝わってくるやり取りを、皆の一番後ろでぼんやりと聞いていると、

（……マスターは、これからどう行動するつもりですか？）

そんなナナシからの念話が飛んできた。

……正直、敵の侵攻が始まるまで俺に出来る事なんてのは、特に無いんだよな。

俺の覚えている限りでのこの先の展開は、いずれ来るであろう敵の侵攻に対して残って戦いたいと言う世刻へ、サレスとナーヤが、漠然とした「全部を守りたい」なんて考えは、只の傲慢でしかすぎない、と断って、世刻はそれを受けて、力を振るう事の意味を、戦う事に対する意識を見つめ直すはず。

サレス達の世刻への干渉に手を出すつもりは無い。サレスにとってはまあ……世刻の中の『ジルオルの力』って目的もあるだろうが、破壊神であるジルオル言う、強大な前世に不安定になりがちな世刻の事を考えている事も事実で。世刻に関しても、サレスとのやり取りから学べる事ってのは、決して小さくは無い。寧ろ必要なことだろうから。

この『魔法の世界』と『元々の世界』は、精霊回廊か何かで繋がっていて、この支えの塔が壊された時、俺達の世界にも間違いなく悪影響が出るそうで。……これはまぁ、『原作』云々の話ではなく、彼らと今まで行動を共にして実感していることだけど、学園の皆も、そんな状況を放っておいて帰りたいとは言わないだろう。

仮に世刻が戦いたいと思わなかったとしても、その時は俺がもの

ベーを降りればいいだけ。
皆と別れるのは辛いっちゃー辛いが、その場合は学園の皆は安全だろうし、俺が『夢の彼女』との約束を――ログ領域に入る事を果たすには、サレスの協力は必須だろうから、選択肢は無い。
（……ってわけで、当分は様子見。背景にでもなってるさ）
そんな結論が出たところで、意識を外へ向ける。
「……まぁ、『旅団』が本拠地として根を下ろしている世界でもあるのでな。皆とわらわは、長い付き合いでもあると言うことじゃ」
「ああ、その通りだ。それと、一応私が旅団の団長を務めている。先程は言いそびれてしまったがな」
サレスの言葉に、俺はともかく他の皆もそれは気付いていた様で、各々頷いて返す。
「それじゃあ、沙月先輩を私たちの世界に送ったのは……」
「私の指示だ。彼がある神の転生体である可能性が高かったのでね」
「転生体って……昔の記憶の事か？」
永峰の疑問に答えたサレスの言葉に、世刻がピクリと反応するのが見えた。
その世刻の疑問に、しっかりとした頷きで返すサレス。そんな彼へ、世刻はあからさまに不満そうな表情を浮かべていた。恐らくは、いつから知っていたのか、とか、どこまで知っているのか、とかの疑問が渦巻いてるんだろう。
そんな彼を宥めるように、
「ちなみに、わらわも転生体だったりするのじゃぞ」
と、ナーヤが口を開く。
「ここには、過去に因縁のある神が何人もおる。よくぞ集まったと言うべきか」
「そうだな。彼女がここにいることは、特にな」
そう言うサレスが向ける視線の先は、永峰。
「え、わ、わたしですか？」
「……どういう意味だ？」

「深い意味など無いさ。今は、な」
……まったく、態々意味深な言い方をする。案の定世刻が訝しげな視線を送るが、レーメに「会ったばかりの我々に全てを明かすはずがない」と諭されていた。
「何にせよ、ここに滞在する間は存分に羽を伸ばすとよい」
「え？　待ってくれ、俺達がここに来たのは……」
「解っておる。元の世界に戻るための座標が知るため、と言うのであろう？」
「だが、君達がここに来るまでにまた何度が時空震が起きてね。君達の世界の座標が元の位置より随分とずれたらしく、それを割り出すのに苦労している。もう少し待ってもらいたい」
ナーヤの後を継いで答えたサレスの言葉に、斑鳩が「そんなに何度も起きてるの？」と訊き、サレスがそれに頷くと、斑鳩は小さくため息を吐きつつ世刻へと向き直る。
「そう……望君、こうなると少し待たないといけないわ。いくら旅団の団長でも、瞬時に座標を割り出すなんてできないから」
そんな斑鳩の言葉に、世刻は今一納得できないような表情だったが、しぶしぶ、と言った雰囲気で頷いた。そしてナーヤの、「今はとりあえず観光でもしているといい」と言う言葉に、サレスとナーヤを除いた皆がものべーに戻ろうとした時だ。
「……ああそうだ、青道祐。君は残ってくれないか？　……何、少し話しがしたいだけだ。別にとって食おうと言うわけじゃないさ」
こちらを見て薄く笑う、その内心の見えない表情のサレスに、俺は「解った」と答えて部屋の中へと踵（きびす）を返した。
……
……
……

出ようとしたところから部屋の中へと引き返した俺は、サレスに促されて部屋の端にあった応接用のソファーへと腰を降ろす。
対面に並んだ大き目のソファー。その俺の正面にはサレス。サレスの左隣にナーヤ。そして俺の左隣にはフィアが、両肩にはナナシとレーメが座っている。
今の今まで懐に収まっていた二人が――特にレーメが――出た時は、恐らくは報告で聴いていたであろうがやはり眼を見張って居た。
……まぁ、つい先程まで世刻と共にいたレーメとそっくりなのが出てきたんだから、無理もないよな。
「それで、話と言うのは？」
「何、訊きたい事は一つだけだ。……君は何者だ？」
やはりそう来るか、と思いつつ、目の前に並ぶ二人の顔を見る。
「……斑鳩辺りから報告は受けてないんですか？」
「……受けてはいる。『この世界を観測できる世界の人間』を前世に持ち、ある理由で少々特殊な力を持ってこの世界に転生してきた、だったかな？　……更に言えば、生身ながら魔法を行使し、黎明の神獣とそっくりな使い魔を持ち、神出鬼没なメイドが側に控え、クリスト達を結晶体の外でも活動できるようにし、更には永遠神剣と契約する。……さて、君はそれを素直に信じられるとでも？」
改めてそう言われて、思わず苦笑する。何と言うか、非常識に過ぎるな、俺。
「思いませんね。逆の立場なら、俺でも信じられない」
「……ならば、私が何を言いたいかわかるな？」
「……信頼に足る証拠、ですか？」
俺の答えに納得したかのように頷くサレス。
「君が大局的に見て味方である、と言うのは、他の皆の報告や状況から判断して解っている。君が何のために戦っているのか、と言うのも、大まかに予想はつく。その結果、君が今後どのような行動に出るか、と言うのもな。だが、根底にある“君が何者か”と言う部

分において嘘偽りがあれば、完全に味方として信頼することは出来ない」

サレスの言葉に、ふむ、と考える。

俺が彼らにとって味方である、と考えてくれるのは良い。俺が戦う理由――学園の皆、カティマやルプトナ、タリアやソルラスカ。クリストの皆……この世界に今の“俺”と言う存在が覚醒してから出来た、守りたい人達を守ると言う事。それを理解してもらえているのも良い。俺が今後取る行動と言うのは……恐らく、仲間達を守る為に残って戦う、と思っているのだろう。まぁ、“ログ領域に入る”って目的を知らない以上は当然だろうが。だが、最後の部分。俺の事を信頼してもらえない、と言うのは、やはり困る。

では問題は――何を持って証拠とするか。

「今の状況で出来る事と言えば、本来であれば知りえない情報を開示する、と言うところでしょうか？」

フィアの言葉に、それぐらいしかないよなぁと独り言ちる。

サレス達の方を見ると、どのような情報を出してくるか、とこちらを見ている様で。

「……例えば、サレスさん、貴方が旅団を創った本当の目的とか」

「ふむ……『光をもたらす者』から分枝世界を守るため、だが？」

……確かにそれも目的の一つだろう。けど……。

「本当の敵は、その更に先にいるでしょう？」

「……さて？」

「……『管理神』……いや、今は『理想幹神』と言った方がいいですか？」

「――っ！」

俺の言葉に、サレスとナーヤの表情が一瞬固まる。

なぜナーヤまで？　と一瞬思ったが、すぐ思い至った。

「……ああそうか、ナーヤは、『ヒメオラ』の記憶を殆ど思い出してるんだっけ」

ぽつりと言った俺の言葉にナーヤが驚きの表情を浮かべた後、ふ

む、と一つ頷く。
「……サレスよ。わらわはこやつの言う事を信用しよう。言わずともわらわがかつての記憶を思い出していることや、わらわの前世の名は察せたとしても、それを“どれぐらいまで”と言うのは、わらわで無ければわからぬことじゃからな」
ナーヤの言葉に、サレスは「そうだな」と一言呟くと、
「いいだろう。私も君の事を信用しよう、祐。よろしく頼む」
……まあ、二人にしても今すぐにってことは無いだろう。“信用する”とは言っても、“信頼する”とは言って無いし。
……まぁ当然か。信頼なんてのは、時間を掛けて培うものなのだし。……とは言え、ある程度は俺の言う事を信用してもらえるのならば今は良いさ。
サレスにこちらこそ、と答えた後、それにしても、と思う。
「……俺が学園の皆と一緒に帰るとは、考えないんですね？」
「ふむ。……恐らく、君にとって戦う理由は“帰る”ではなく“守る”なのだろう？　……だとすれば、学園の者達は帰るのであればその安全は保障されているようなものだ。ならば君はこちらに残って、他の仲間の為に戦うのではないかと思ってね」
……何とも、会ったばかりだと言うのに良く解ってらっしゃる。
サレスの言葉に、他の皆と思わず顔を見合すと、苦笑して「ご名答」と答えておく。
……さて、とりあえず今話すべき事は大体終わりだろうか。――ログ領域の事なんかは、後でもいいだろう。
俺は一度ものべーに戻ると二人に言うと、部屋を後にした。

永遠神剣之章：３６．決意と、決断。

とりあえずのサレス達との話を終え、さて、この後の展開はどうだったかなと思いながらナーヤの執務室を出たところで、

「ユゥーーーー！！」

「ぐぼぁ！」

ズドムっと言う衝撃が腹に響いた。

痛む腹と何かがしがみついている感触に何かと思って下を見ると、明るい茶色のおかっぱ頭と、則頭部から生え、緩い弧を描いて前頭部へと伸びた二本の角。羊の角の様な形、と言えばわかるだろうか。そして肩口から羽織った黒いマントが見えた。

「……ん、ワゥか。痛えよ」

「ワゥちゃん、いきなり突進してきたら危ないですよー」

とりあえず眼下の頭を軽く撫でつけ、俺とフィアがそう言ってやると、ワゥは「えへへ」と照れ笑いを浮かべ、俺から離れる。

とそこで、クスクスと笑う声に気付いてそちらを見ると、いつの間に居たのか、俺達の様子を楽しそうに見るフィロメーラさんの姿が。

と、俺の視線に気付いたのか、ぺこりと頭を下げてきたので返すと、こちらに近寄ってくる。

「あの、青道祐様にフィア様、ですか？」

そう問われ、あれ、彼女には名乗って無いよな？　何て思いながらも「そうですよ」と返す。

そんな俺の表情から察したか、彼女はくすりと笑うと、

「お二人の事はミゥ様達から伺っております。皆様が戻って来て、外に出ては長く活動できないはずのミゥ様達が、生身で出てこられたれた時は驚きました」

なるほど……と呟く俺に対して、フィロメーラさんはニコリと笑い、

「ミゥ様達、クリストの皆様がこのザルツヴァイを生身で歩く姿を見ることが出来るとは思いませんでしたし……サレス様やナーヤ様も同様だったらしく、感謝しておりましたよ」

「……話した内容からして当然とは言え、先程の会談の場では一切そのようなそぶりは見せなかったがな」

フィロメーラさんにレーメが返した言葉に、まったくだ、と頷いた。

ミゥ達から聴いた話では、彼等が『煌玉の世界』に着いたのは、彼の世界が消滅した直後だったらしい。彼等に直接に……いや、間接的にすら責は無くとも、当の彼等にとって“間に合わなかった”って事実は、澱(おり)の如く心の底に残っているものなのかもしれない。

そう……やはりサレス達旅団関係者にとって、クリストの皆は頼りになる仲間であると同時に、心痛めるものでもあるんだろう。

……まぁ、何を言っても俺の想像に過ぎないし、だからといって、彼等にその心境を尋ねる事など、ありはしないのだけど。

……兎に角も、「それで今は？」と、彼女達がここに居る理由を訊いてみると、ワゥが「そうだった！」と言わんばかりにハッとして、

「えっとね、ユウ達をボクらが案内してあげようと思って迎えに来

たの」
「ボクらって……ワゥとフィロメーラさん？」
ワゥの言葉に二人を交互に見ながらそう訊くと、ワゥは頭をぶんぶんと横に振る。
「フィラはナーヤに呼ばれてるだけだよ」
「……となると、クリストの皆か」
フィアの顔を見ると、コクリと頷いて返してきたので、ワゥに「それじゃあよろしく頼むよ」とお願いする。
折角なのでザルツヴァイ観光でもしようじゃないか。
「じゃあ、フィロメーラさん。失礼します」
「はい。行ってらっしゃいませ」
ペコリと頭を下げて俺達を見送るフィロメーラさんへ手をふりつつ、ワゥに引っ張られてその場を後にした。
…
……
……
ワゥに連れられて向かった先でミゥ達と合流し、彼女達と共にザルツヴァイの街中を見て回っている時だった。
「こんにちは！　いい日和ですね！」

そんな快活な声が聴こえ、後ろを振り向いたそこにいた人物の姿に、俺達は皆その場に固まった。

その少女は、袖口や前垂れの辺りに黒いラインで模様の描かれた、白色の着物を紫色の帯で締め、髪の毛を後頭部で結わえて、大きなリボンのついた黒色のカチューシャをしている。

目の前の少女の雰囲気は……そう、正に“楽しそう”という表現以外が見つからないほどに楽しそうで。

それに対して俺達は、そのあまりの自体に誰もうかつには動けなく。出来たのは、目の前のそれの、一挙手一投足に注視することぐらいで。

そんな俺達の様子に、くすくすと笑みを漏らして、

「……貴方の名前を訊いておこうと思いまして。――約束通り、“また逢いました”ね」

その、大きな鈴の髪飾りを着けた少女は、その黒く深い瞳でひたと俺を見据え、そう言った。

「……一体何をしに来た、鈴鳴（すずなり）……いや、スールードッ！」

「鈴鳴、でいいですよ、この姿の時は。目的は……今言ったじゃないですか。そこの彼の名前を訊きに来た、と」

街中という事もあってか、剣を抜かずに――それでも、いつでも抜けるようにはしているだろうが――問いかけるルゥへ、その姿に合わせてか、以前とは口調すら変えて答えるスールード……いや、鈴鳴。本当に、彼女はあの時相対した『スールード』なのか、と思ってしまうほどに。

「うん、武器を構えないのは正解ですよ。剣を向けられたら――流石に私も、抵抗してしまいますから」

それは忠告。武器を抜けば、容赦はしない、と。剣を向ければ、周囲がどうなろうと力を振るうぞ、という。

――確信した。最後の一瞬で、明らかに雰囲気が激変したのを感じたから。

背中に冷や汗が流れるのを感じながら、勤めて平静を装い、問いかける。

「……何故俺の名前なんて？」

「……ただ一人。この人数がなにか解りますか？」

解るわけが無い、と、答えることの出来ない俺の様子に、彼女はふふっと、先程までの快活な笑みではない、艶然とした笑みを含ませながら言葉を続けた。

「永遠者ならぬ人間（ひと）の身で、この私に痛撃を与えた人間の数です。そう、貴方はその二人目。

最初の一人は――クリストの民の力を結集し、私の分体を滅ぼすに至りました。ですが貴方は、貴方のみの力をもって、この私をあわよくば滅ぼせるところだった。

……ふふっ。そうです。あの時のあの一撃。あれは私にとっても、かなり危険な一撃でした。そしてあの満身創痍の状態から、剣の爆発を抑え、かつ無事に脱出するに至るとは……実に、興味深い」

そう言って、彼女は俺にゆっくりと近づき、その両手をそっと、俺の顔を挟み込むように、頬へと当ててきた。俺の後ろで皆の息を呑む気配を感じつつも、俺はそれを、動く事もできずに受け入れる。

――蛇に睨まれた蛙、なんて言葉が頭を掠めた。

「そう、そんな貴方の名を知っておきたいと思った。ただ、それだけ」

その壊れ物を扱うかの様な丁寧な動きと、柔らかな感触が、ひどく、場違いに感じる程に、恐ろしい。

そう、恐ろしい。だから――一瞬だけ眼を閉じて、睨みつけるように、正面の『スールード』を見据える。たとえ、力では負けていたとしても、気持ちでは絶対に負けないように。

「俺の名前は、青道祐だっ！」

そんな俺に、彼女はただ、

「ふ……ふふふふ……あはははははは！」

本当に楽しそうに、声を上げる。

「私は今、貴方だけが感じる様に、只人では耐えられないであろう圧力を掛けているつもりなのですが……それでも、それに屈することなく、かつ挑むように睨み付けてくる、ですか。……本当に、興味深い人です、貴方は。

……青道祐、貴方の名、覚えておきましょう」

更に一歩踏み込んで、最早殆ど密着しているとも言える位置から俺を見上げる彼女は、静かに、けれど、よく通る声で言う。

「近々行われる、『光をもたらす者』のこの世界への侵攻。本来であれば興味など無かったのですが――私も参加する事にしました。

……出来得るならば、私に人間（ひと）の“面白さ”を見せてくれること

を、期待します」

その言葉を最後に俺から離れた『スールード』は、一度顔を伏せた後、再び上げたその顔にはつい今まで艶然とした笑みではなく、最初にこの場に現れた時の様な快活な笑みを浮かべており、

「それでは皆さん、また、逢いましょう」

そう言って『鈴鳴』は、悠然とこの場を後にした。

「――っはぁ……」

鈴鳴が去った直後、どっと押し寄せる疲労感。

思わずその場に座り込みそうになったところで、「大丈夫ですか？」とフィアに支えられる。

と、そこでようやく他の皆が心配そうに俺の事を見ている事に気付いた。正直、途中からもう周りの様子なんてさっぱり解らなかったよ。

「ああ、すまん、大丈夫。……ったく、これで次の戦い、絶対に退くわけには行かなくなったな」

「はい。それどころか、一層気を引き締めなければいけませんね」

ミゥの言葉に「まったくだ」と答え、今のやりとりを報告するために『支えの塔』に戻ることにした。

……

……

……

あの後『支えの塔』に戻った俺達は、サレスがものべーに向かったとフィロメーラさんに聴かされて、結局ものべーに戻った。
サレスはものべーでは……確か校長室だったはず。
ってわけで向かうと、丁度世刻が出てきた所で。……ああ、サレスに呼び出されて、何か色々言われたのか。正直二人の話しが『原作』でどんな内容だったかは正確に覚えてないのだけど、……落ち込んでるって感じだな。

「よう、どうした？　随分落ち込んでるな。サレスに色々言われたか？」
「っ！」

びくり、と肩を震わせる世刻。……随分と参ってるなー。
正直、こんな状態の奴にどんな言葉をかければいいのか、なんて解るほどに人生経験豊富でもないけれど……月並みな台詞でも、掛けないより良い、かな？
まぁ、多少なりとも人生の先輩だしな。そう思って、世刻の肩をぽんっと叩き、

「まぁ……余り一人で抱え込むなよ？　……正直、月並みな台詞しか言えなくて申し訳ないんだが……お前は“独り”じゃないんだから」
「――っ……そう、ですね。先輩、有難うございます」

そんな彼に「ああ」と返し、校長室へ行こうとしたところに、「あの」と声を掛けられる。

「ん？」

「『戦いたい』って気持ちと、『戦わなければならない』って気持ちの違いって解りますか？」
「そうだな……」
世刻の問いに少し考え、思い至った事を「俺の気持ち、なんだが」と前置きしてから答える。
「正直言えば、俺は『戦いたくない』」
「……え？」
「だってそうだろ？　痛いのとか嫌だし。けど、大切な人を、大切なものを守る為には『戦わなくちゃいけない』んだよな」
この世界に“産まれて”から出来た、仲間たち。共に過ごし、苦難……何て言ったら大げさかもしれないけど、乗り越えて、育んで来た皆との“絆”。
「確かに傷つくのは嫌だし、敵を殺すのも嫌だ。例えミニオンといえ、さ。けど、大切なものを失うのはもっと嫌だから。だから戦う。皆の……仲間たちの未来を守る為に、俺は武器を取る」
「……」
確か世刻はナーヤには、「全部を守りたいなんて思うのは傲慢だ」って言われたんだっけ。なんて思いながら、言葉を続ける。
「けど……俺は弱いからな。……『剣の世界』を戦い抜いて、『精霊の世界』を駆け抜けて、嫌と言う程思い知った。“全部を背負い込める程に、俺の背中は広く無い”ってな。だから今は守りたいはずの仲間達に、力を貸してもらってるんだけどな。……けどまぁ、俺はこれでいいと思ってる」
「……何故ですか？」

「戦ってるのは俺独りじゃないからさ。『剣の世界』でカティマがダラバと一騎打ちしてるとき、言っただろ？　“この戦争はこの世界の人間のもののってわけじゃない、もう俺達の戦争でもあるんだ”って。それと同じ事。

俺が皆を守りたいからって戦ってるのと同じように、皆にも戦う理由がある。だから俺は、共に戦う皆の背中を守るし、俺の背中は皆に守ってもらう。戦えない皆には、俺達の“帰る場所”を守ってもらうのさ」

って、長々と語ってからふと気付き、「あんまり質問の答えにはなってなくて悪いな」と苦笑が漏れた。

そんな俺に世刻は、「いえ……ありがとうございました」と返してくれて。

……あとはもう、彼の気持ち次第なんだよな。……俺に出来る事はないだろうし、世刻の相談に乗ってくれる人は沢山居るだろう。

「……まぁ、さっきも言ったが、余り抱え込まないようにな」

「はい。失礼します」

そう言って去る世刻の背中に「ああ、そうだ」と声を掛けると、その場で振り返ったので、

「俺って、戦いのときは何だかんだで別行動になるのが多かったけどさ。それでも――別行動の部隊にお前等が居るって思うとさ、安心して戦えるんだぜ？」

だからまぁ、自分の“力”を嫌ってやるなよ？

そんな想いを乗せて言葉をかけると、世刻は一瞬きょとんとしたあと驚いた表情を浮かべた。そして、もう一度「ありがとうございます」とだけ言うと、今度こそこの場を後にしていった。その雰囲

気は――うん、最初よりはいい、かな？
――さて、スールードの事を報告しないとな。
そう気を取り直して、俺は校長室の扉をノックした。

……
……
……

その夜、俺達は突如「全校集会をする」と、体育館に集められた。
集めたのは世刻。内容は――戦いの事。
帰る手段はもう解っているのだけど、この世界にもうじき、『光をもたらす者』の大部隊が攻めて来る事。
この世界が負けて滅ぼされたとき、俺達の世界にも大きな影響が――それがどんな影響かはわからないけど――出ると言うこと。

「――だから、俺は、この世界に残って戦いたい。戦って、勝って、後顧の憂いを除いて俺達の世界へ、堂々と帰りたいんだ。……でも、皆がもう帰りたいと言うのであれば、すぐにこの世界を出ようと思っている。……みんなに決めてもらいたい。戦うか、帰るのかを」

マイクを通じて響いていた世刻の声がそこで終わる。
場には騒然とした雰囲気が広がって、満ちて、そしてやがて静まって。
と、そこに斑鳩が壇上へと上がり、二、三世刻と言葉を交わしたあと、マイクのスイッチを入れた。

「さてみんな、戦うか、帰るか。採決をとるわ。声だけじゃわからないから、戦う事に賛成の人は挙手！！」

挙がらない手。
世刻は若干落胆した雰囲気の中に、それでも決意に満ちた顔で。
――あいつは、もし皆が帰る場合でも、残って戦うのだろう。
そんな時だ。一人の男子生徒が声を上げた。

「一つ質問なんだけど、答えてもらえるか？」
「あ、ああ。何でも聞いてくれ」
「……俺達には、会長やお前みたいな力は無い。それでも戦いの役に立てるのか？」

それはきっと、この場にいる一般生徒の想いそのものなのだろう。
皆、その答えを言うであろう世刻を、固唾を呑んで見守っている。
そして世刻は、しっかりと頷いて返した。

「もちろん。戦いの前なら避難誘導をしたり、戦いが終われば、復旧の手伝いができる。小さな事からでも、助けになる事はあるんだ。それを、今までの経験からみんなは学んでいるじゃないか」

その時ふと、世刻の視線が俺に向いた気がして、彼は言葉を続ける。

「それに……ある人に言われて改めて気付いたんだ。ここは――この物部学園は、俺にとって、俺達にとって『帰るべき場所』で、ここに皆が居てくれるから、俺達は前に出て戦える。ここを皆が守ってくれているから、皆を守る為に、俺は戦えるんだって」
「……そっか。なら俺は、戦う事に賛成だ」

……その男子生徒の声がきっかけになるように、周囲からも続々と、戦おう！　と言う声が上がっていく。

そんな学園の皆の雰囲気に、俺は「ああやっぱりな」なんて苦笑してしまっていた。

「それでは、我々物部学園有志一同は……この世界のみなら、今まで出会った全ての人を守り、栄光を胸に堂々と帰還するため！
この世界に押し寄せる脅威と戦いましょう！！」

そして、そんな斑鳩の宣誓と共にこの夜の全校集会は締められて。
壇上から降りた世刻の元へと集う皆を見る俺の脳裏には、サレスとの会話が浮かんでいた。

『――ふむ。……スールードの相手は、恐らく君とクリスト達にやってもらうことになるだろう』
『……でしょうね。奴の狙いは間違いなく俺。……俺が足掻き、立ち向かう姿を見たいのでしょうから』
『……すまないな。スールードが現れるタイミングが良ければいいのだが。……恐らくは、そちらに戦力を回す余裕はないだろう』
『……頑張りましょう、祐さん。皆を守る為に』
『ああ。大切な皆の、そしてこの世界の未来を守る為に――』

そして、その時は訪れる。

永遠神剣之章：３６．決意と、決断。（後書き）

＊

拍手コメは有り難く読ませていただいております。

有難うございます。

＊

永遠神剣之章：37．戦闘、戦闘。

それは、世刻による全校集会召集の翌日、彼がサレスに参戦の意を伝えに言った日から三日後。それを聴いたのは、丁度ナーヤの執務室に集まっている時だった。

ザルツヴァイ全土に響き渡る警報。

――『光をもたらす者』の襲撃だ。

「……ふむ、来たか」

「今度の敵の数は、お前たちが今まで戦って来たどれよりも上回る。逃げるなら今のうちだぞ？」

そんな挑発とも取れるサレスの言葉にも臆する者は誰もおらず、それどころか、逆に気合を入れていく仲間たち。……何とも、頼もしいものだ。

「では、行こうか」

世刻のレーメのそんな言葉を皮切りに、決意を篭めた眼差しで出て行く皆に続き、周りに居るクリスト達と頷きあってから、俺も執務室を後にした。

……

……

……

戦場となるのは、ザルツヴァイ上空。

『支えの塔』上層部を中心に、周囲を幾つかの『プラント』と呼ばれる浮島が取り囲み、構成されている。
敵は精霊回廊を通じて一気に奇襲してきたらしく、俺達が『ミレステ・プラント』に登った時には既に多くのプラントを占領された後だった。
一応事前にサレス達には、上空のプラントに対する警戒網を敷くことを伝えてはあったのだが……。

「どうやら、ベルバルザードが自ら先陣を切って攻めてきて、抑え切れなかったらしい。折角の忠告を無駄にしてしまってすまないな」

そう言われてしまっては返す言葉もない。……ま、獲られたのなら獲り返せばいいだけだ。
プラント間の移動はエーテルジャンプ装置によるジャンプ――要するに、空間転移のようなものだ――のみ。そのため、中々思うように進めない事が予想されるのが厄介な所だ。
とりあえずは次のジャンプ先である『リゼリア・プラント』を取り返し、次いでベルバルザードの待ち受ける『セレスタイン・プラント』へと向かうのである。

――一瞬の浮遊感。次いで、瞬転する視界。
世刻に次いでミレステからリゼリアへとジャンプした先には、当然の如くミニオンが居て、出迎えてくれるわけで。

「うおおおお!?」

転移直後を狙ったファイアボルトと思わしき火炎弾を、咄嗟に展開したオーラフォトンの力場で受け止める。

着弾。そして上がる炎と煙。
閉ざされた視界に嫌な予感がして、『観望』を通して周囲を探れば、案の定煙を眼くらましに襲い来る刃が『視え』た。

「次、来るぞ！」

隣を見れば、世刻も同じような状態だったために一声掛けて、半歩身体をずらし、展開している力場で剣を受け流す。と同時に長柄（ハルバード）斧状にした『観望』で、斬り付けてきたミニオンを横凪にし――遠心力を利用して、そのまま魔法を撃ってきた奴の方へと吹き飛ばす！

「『ボルカニックレイブ』！」

次の瞬間、そこを狙って放たれたレーメのアーツ。
敵の足元から膨れ上がる様に広がった灼熱の光は、瞬時に大爆発を起こし、固まっていた五人のミニオンを根こそぎ炎で包み込んだ。
その間に後ろに生まれる複数の気配。……残りの皆も転移してきたのだろう。
世刻の方は……丁度斬りかかって来ていた青ミニオンを倒したところか。さすがだなと思いつつ、体制を立て直そうとしている残りの五人のミニオンへ。
『観望』は刀に。思い描くは月の輪。早く、速く、疾く！

「――月輪」

一閃。同時に崩れ落ちたもう一人の青ミニオンを見届け、後ろに飛んでその場を離れる。

「『スパイラルフレア』」

耳元で聴こえたナナシの声。直後、残った連中に乱舞する様に降り注ぐ赤光。

幾条もの灼熱した光に打ち抜かれ、マナの霧と化して行くミニオン達を見送って、一息吐いた。これでこのプラントの入り口は確保、と。そのまま皆と共にプラントの中心部へと向かう。

そこにはこちらの約三倍程のミニオン達。

「よし、行くぞ」

「おう！」

サレスの言葉を合図に、再び戦端を開いた。

乱戦って言葉がピタリと当て嵌まる戦場。まるでミニオンと言う名の濁流に翻弄される小船の様に、気がつけば周囲をミニオンに囲まれ、一人引き離されてしまっていた。

別に突出したつもりは無いんだけど。

（こちらを各個撃破するつもりなのかも知れぬな）

（まったく、やってくれる。さっさと合流しないとな）

レーメの念話に内心頷きながら、突き込まれる槍を身体を半回転させてかわし、引き戻されるのに合わせて距離を詰める。

そのままの勢いで剣を振り抜くと、鈍い音を立てて、敵のブロックと『観望』が火花を散らした。

「っ！　『ブルーアセンション』！」

戦いの喧騒の中でもよく通るレーメの声に続き、背後で起こる爆

発音と、頬にかかる水しぶき。相対していた緑ミニオンを蹴り飛ばし、振り向き様に今ので弱った黒ミニオンを斬り捨てる。

「『エアロストーム』！」

次いでナナシによって生み出された中規模の竜巻は、俺を中心に渦を巻き、距離を詰めようとしていた敵との間に数瞬の壁を作った。

その間に『観望』を騎乗槍（ランス）へ変え、自身に移動力向上アーツ（シルフィリオン）を掛けて、体内にマナを巡らせる。

「一点突破する！」

アーツとマナによって高められた脚力による、突破力を高めた一撃は、エアロストームによって身動きの取れぬ敵を突き抜け、周囲を取り囲むミニオンの壁に穴を開ける。

後ろには一筋の道。

包囲を抜けられた事に焦ったのか、ミニオン達の気配が俺の背後に一気に集中するのが感じられた。

「レーメ！」

「うむ、任せろ！　『ラグナブラスト』！！」

振り下ろされるは轟雷の一撃。

俺を基点に、一直線に突き進むアーツの雷の奔流は、俺の背に迫っていたミニオン達を蹂躙し、薙ぎ払う。

俺はレーメによるアーツが放たれるのと同時に反転し、アーツの雷に続いて、再びミニオン達の只中へと飛び込み、槍状にした『観望』で二人のミニオンをまとめて刺し貫いた。

直後、満身創痍ながらも斬りかかってきた青ミニオンの斬撃を、円盾（バックラー）に変化させた『観望』を左腕に創り出して受け流し、そのまま

槍を剣へと変えてその青ミニオンの胴を薙ぎ払う。
そしてその後ろで魔法を唱えようとしていた赤ミニオンへと詰め寄った、その時だった。

「……痛いよ？　……クックッ『ダークインパクト』」

耳朶を叩くその声に続き、足元に広がる黒いマナ。次いで襲い来る悪寒、衝撃、浮遊感。
咄嗟に周囲を『観望』で観測すれば、自身の体が二メートル程上へ吹き飛ばされているのが解った。

「ぐっ……おおお！！」

遅れてきた、身体を駆け抜ける苦痛。黒マナ特有の、怨嗟を孕んだその一撃に思わず漏れ出そうになった苦鳴を飲み込み、斜め下へ盾を翳してマナを流し込み、力場（オーラフォトンバリア）を形成する。同時に迫る『ファイアーボール』であろう巨大な火球。
そして襲い来る爆裂音と衝撃。熱や炎は防げたものの、更に三メートル程吹き飛ばされた。
叩き付けられる衝撃に続いて地面と空が交互に映し出され、やがて地面のアップで動きを止める。
……ああくそっ、全身痛え。
警戒を怠ったつもりはないんだけどな……。きっと我ながらどこか油断していたんだろう。不用意に飛び込んだ結果がこれだよ。

（――マスター！！）

脳裏に響いた悲鳴に近いナナシの念話にとっさに横に転がり、地面に金属を打ち付ける様な音を聴きながら飛び起き、跳び退る。
見えたのは、先程まで自分が居たであろう場所に剣を突き立てて

いる黒ミニオンの姿……って、あぶねえ。よく身体が反応したもんだ。

（……助かった、ナナシ）
（いえ。それよりご無事ですか？）
（ああ、何とかな）

敵と少しと距離をとりつつ、剣を構え直して体制を立て直す。現在、俺と戦闘状態の敵の数はざっと見て十人。さぁもう一度。今度は慎重に行くか、と気合を入れた時だ。

ミニオン達の身体を緑色のマナが包み込むのが『視え』た。……全体回復魔法の『ハーベスト』かっ！

完全に回復されたやっかいだと、思わず一歩踏み出したその時、

「『アークプロミネンス』」

静かに、けれど強いレーメの声が響いた。

同時にミニオン達の頭上に舞う炎。集い、増幅し、それは小型の太陽もかくやと言わんばかりに白熱する。

そして――一瞬の閃光と共に撃ち降ろされ、極大の爆発を起こす！

――火系攻撃アーツの中でも最上位に位置する全体攻撃アーツ『アークプロミネンス』。静かだと思ったらこんなん準備してたのか。

……炎の治まったそこにあったのは、マナとなって消えて行ったのであろう、光の粒の残滓だけだった。

「マスター」
「ユウ」

戦闘の最中は俺の頭上に浮いていたナナシとレーメが、ふわりと降りて来る。

と、レーメは俺の右肩に降り立った途端に、頭に抱きつきながらバシッバシッと殴って来た。……地味に痛い。

「なに……」

「……あまり無茶をするな、このばか者」

なにするんだ、と言おうとした所に聴こえた、か細い声。……そんな事言われたら殴られても文句も言えねえだろうが、まったく。

だから、代わりに俺が言えたのは、

「ごめん。……それと、ありがとう」

そんな事だけだった。

……

……

……

その後無事に皆と合流し、このプラントの敵を殲滅させた事を確認した俺達は、傷を癒してから次の『セレスタイン・プラント』へとジャンプする。

今の『リゼリア・プラント』と同様に、ジャンプアウト地点にて待ち構えていた敵を倒した後、中心部へ向かった俺達を待ち受けていたのは、どことなく東方風な雰囲気の黒い鎧に身を包み、赤いマントをなびかせながら薙刀を構える巨漢の偉丈夫。

「……あれが……ベルバルザードか」

「青道君は初めて見るんだっけ。……そう、あいつがベルバルザー

ド。かなり強いから、気を引き締めてね」

俺の問いに答えた斑鳩の言葉に頷き、武器を構えながら近づく俺達に対し、その手に持った薙刀――永遠神剣『重圧』――を一振りし、突きつけてくるベルバルザード。鼻から下を覆うマスクでその表情は見えないが、眼光は鋭く、一瞬も逸らすことなく、ひたとこちらを見据えてくる。その視線の向かう先は――。

「待ちかねたぞ、ジルオル。いや、世刻望！　そして旅団よ！　あの時の借り、返させてもらおう！」

「……何と言うか、完全に眼を付けられてるな」

「……ははは……はぁ……」

苦笑してからため息を吐く世刻に「がんばれ」と声をかけつつ、戦闘態勢を整える俺達。それを合図にしたように、俺達を囲む様に現れるミニオンの群れと、ベルバルザードの直近にも、いつの間にか四小隊、十二名のミニオンが現れ、武器を構えていた。……実際に戦闘態勢を整えているのはベルバルザードの近くに居る連中のみの様で、その数が少ないのはやはり、少数精鋭ってやつなんだろう。

「よし、行くぞ！！」

「おうよ！　うおおおお！！！」

世刻の言葉にソルラスカが威勢よく応え、それを合図に俺達も各々敵へ向けて駆け出していく。

ベルバルザードの左側に布陣している六名のミニオン。俺とクリストの皆はそちらへ。

「『ゾディアック』！」

敵との距離を詰める間に発動されたナナシのアーツは、俺を中心に皆を包むように広がり、その力と身体に加護を与える。

「ミゥ！」
「はいっ！」

返事と共に放たれた光球は敵の眼前で炸裂し、閃光と衝撃を生み出して敵の視界を塞いだ。

それに合わせてルゥが青マナを集積、氷へと変質させて撃ち出し、ワゥが神剣魔法を追撃で放ち、その隙に敵へ突撃する、俺とゼゥ、ポゥの三人。

俺の前には青と白のミニオン。

『観望』を大剣（グレートソード）へと変化させ、二人まとめて斬り払う様に横薙ぎにすると、鈍い音を立てて、ミニオン達の神剣と『観望』が火花を散らした。

そのまま押し込もうと力を篭め、相手がそれを返そうとしてきたタイミングで『観望』を一瞬粒子状に還し、左右二対の双剣にして再構築。

押されまいと力を篭めた時にその力の掛け所を消され、たたらを踏んだ二人を左右の剣で斬りつける。

確かな手ごたえ、と同時に視界の端に移る鈍色の光。

一歩身体を引き、反撃のために降ろされた敵の刃をやり過ごし、お返しにと左の剣を青ミニオンへと突き出すが、横合いから差し出された白ミニオンの錫杖に阻まれた。

ならばと、白ミニオンの胴を狙って右の剣を横薙ぎにするも、敵が身体を退いた事によってかわされ、体勢の崩れた俺へと一歩踏み込む青ミニオン。その剣は強いマナが篭められ、淡く発光している。

「喰らえ、ヘブンズスォード！」
「させません！」

左の剣をガードに回そうとしたところで、俺と青ミニオンの間に飛び込んできた白の巫女。

俺に肉薄しようとしていた青ミニオンを、錫杖型神剣『皓白』を突き出して抑え、突き出された剣を回す様に打ち払った『皓白』で撥ね上げる。そのままがら空きになった胴を石突で突き、返す頭部で肩口から打ち払い、

「はぁっ！！」

更に敵の胴へと突き込んだ瞬間、気合と共に篭められたマナが炸裂する！

膨れ上がるように炸裂した白マナは、青ミニオンと共に、今の攻防の間にこちらにマナのエネルギー弾を放とうとしていた白ミニオンを吹き飛ばした。

一瞬ミゥと目配せして頷きあい、同時に青ミニオンへ向かって駆け出す。

先の衝撃をまともに喰らったせいだろう、ふら付きながらも立ち上がり、剣を構えようとしていた青ミニオンへ一気に肉薄し、その胴を長剣にした『観望』で刺し貫いた。

と同時に横合いから聞こえるマナとマナがぶつかり合い弾ける音。撃ち込まれた白ミニオンのマナ弾をミゥが防いでくれた音だろう。

俺は青ミニオンから剣を引き抜くと、

（任せた！）

（任された！）

レーメに念話を飛ばして白ミニオンへ。

「『ダークマター』！」

直後、まだ息があり、俺を攻撃しようとしたであろう青ミニオンの気配は掻き消えた。

その間に、挟み込むように白ミニオンへと接近した俺とミゥ。突き出した俺の剣を、身体を半回転させる形でかわしたミニオン。その背をミゥの『皓白』が打ちつけ、体勢が崩れたところを逆袈裟に『観望』で斬り上げる。

その一撃は違うことなく刃がその身を裂く嫌な感触を俺に残しつつ、白ミニオンをマナへと還した。

――さて、次だ。と思って周囲を見渡せばそこに既にミニオンの姿は無く、ベルバルザードと切り結ぶクリストを除く皆の姿。

ソルラスカが先陣を切り、世刻がその後に続いて猛攻を仕掛ける。物理系（マテリアル）の攻撃は永峰が、理力（フォース）系の攻撃はヤツィータが防ぎ、斑鳩とルプトナが恐るべき破壊力を秘めているであろう、敵の神剣魔法を打ち消していく。

サレスとナーヤ、タリア、カティマは周囲の警戒と危なくなった時の交代か、その様子を眼を逸らす事無く見つめている。

「見事なコンビネーション……と誉めるべきなのか、あれを一人で受けるベルバルザードが恐ろしいと見るべきなのか」

「……その両方……と言いたいが、悔しいが後者じゃろうな」

サレス達の元へ行きながら漏れ出た俺の呟きに、ナーヤが答える。参戦するのを余程堪えているのだろう、その手はきつく己の神剣『無垢』の柄を握っていた。

いや、ナーヤだけじゃない。他の皆もやはり表情は固い。……それだけ微塵の油断も出来ない相手だと言う事だろう。

「……祐、解っているとは思うが――」

「解ってますよ。……俺達はベルバルザードには手を出さない。出

すとしても、第二陣がピンチになったら、でしょう？」

俺の返事に満足したのか、「そうだ」と頷くサレス。

まあ実際、ここまで来るまでのミニオン戦でも充分消費してしまったのだ。未だ出てこない奴のことを考えると、今はこれ以上消耗するわけにはいかない。ベルバルザードを相手にしてくれている皆には悪いけど……な。

……大丈夫。あいつらなら、大丈夫さ。

皆と共に固唾を呑んで見守る中、ベルバルザードとの戦いは佳境を極めて行った。

……

……

……

横凪にされる『重圧』を、ソルラスカが跳んでその上を、世刻が姿勢を低くし、その下をくぐるようにかわし、ベルバルザードへ肉薄しようと踏み込む。が、次の瞬間、二人はまるで見えない手に押し付けられるかのように、地面に叩きつけられた。

ベルバルザードの神剣魔法、相手に加重を加えて攻撃する『グラビトン』だろう。そして続けて、動けない二人に飛び掛る様に接近し、大上段から『重圧』を振るう。

と、その前に永峰が飛び出し、『重圧』と彼女のマナによる防御壁（ブロック）が火花を散らした。そして反発する勢いに押されるように僅かに距離が開き、永峰がその隙に己の槍型の神剣――穂先の根元から横に刃の伸びた、槍……というより戟と言った方が近いだろうか――『清浄』を腰溜めに構える。

「ものべー、狙いはお願い！　ショットブレイカー！」

永峰がそう叫ぶと、『清浄』の穂先が真ん中から二つに割れ、その根元に埋まっていた宝玉へと急速にマナが収縮していく。そして――撃ち出される極光！

それはベルバルザードを撃ち抜き、その身体を十メートル程後退させる。そしてそこに、『グラビトン』の効果から逃れた世刻とソルラスカが踊りかかった。

体勢を立て直される前に一気に肉薄したソルラスカが、『荒神』での一撃の後、左手をベルバルザードの腹に当てる。

「攻めるが勝ちだぜ！　裂空衝破！」

その瞬間、ソルラスカによって打ち込まれ、膨れ上がった“気”が爆発するように炸裂した。

がら空きになった胴。そこに飛び込む世刻。交差する様に振りかぶられる黎明。

「いくぞ！　クロスディバイダー！！」

その一対の刃が打ち付けられた瞬間、互いの刃が共鳴し、凄まじい衝撃を生み出す！

それが収まった時、そこには膝を付くベルバルザードの姿があった。

「……ぬぅ、我に傷を付けるとは……侮っていたか！」

荒い息をつきながらそう言うベルバルザードではあったが、その眼光はいささかも衰えてはいない。

周囲にはまだまだミニオンも居るし、これからか……と思ったの

だが。

「……退くぞ」

ふらり、と立ち上がったベルバルザードはそう一言呟くと、一気に俺達から距離をとり、俺達を囲んでいたミニオン達と共に退いていった。

「……敵が退いていく……？　勝った、のか？」

実際ベルバルザードがこの場を退いたのは事実なのだが、その事実が信じられないと言う風に呟く世刻へ、「罠と言う可能性もある」と言いながらも一息つく皆。

そんな中、俺は頭を悩ませていた。……『原作』での細かい流れは覚えていない、と言うのはもう何度も自覚しているのだが、コレに関してもそうだ。だから、今このタイミングでベルバルザードが退く事の意味。それを、今実際に起こっていることを踏まえて、考えなければならない。出来得るなら、『原作』においての展開も思い出せると最高なんだけど。

俺が覚えているのは、結果的に『支えの塔』がエヴォリアに落とされる事。その方法――フィロメーラさんの姿に扮したエヴォリアが、ニーヤァを誘惑して『支えの塔』に侵入すること。

……それらを踏まえれば簡単じゃないか。そう、この撤退は布石だ。エヴォリアがそれを行うための時間を稼ぐための。

「……サレス！　ナーヤ！」

それに思い至った俺は、二人を呼ぶ。すぐに支えの塔に戻って防備を固めるぞ、と。

「やつらの狙いが『支えの塔』である事は間違いない。である以上、このアッサリとしたベルバルザードの撤退はその布石だと見ていいはずだ」

「……いかな手段を使うかは知れぬが、我等トトカ一族がいなければ入れぬ『支えの塔』への侵入を試みるはずだ、と？」

「そうだ。……有り得ない、と思うかもしれない。けど、事態は最悪を想定して動いた方がいい」

俺の言葉に二人は顔を見合わせ、二、三言葉を交わすと頷きあい、

「よかろう。市街などを放って置くことは出来ぬ以上、全員と言う訳にはいかんが……幾人かを連れて塔へ向かおう」

そうナーヤが言った、その時だった。

――膨れ上がる気配。沸き起こる悪寒。そして、濃密なマナ。

「……やはり、貴方は油断の出来ない人の様ですね」

しゃらん。

そんな鈴の音が聞こえた気がして、振り返った俺達の前には――

「こうして出てきてしまっては、貴方達の予想が正しいと言っている様なものですが……まぁ、通さなければ問題はないでしょう。――次は、私がお相手しましょう」

その背に鳳凰を思わせる翼を携えた少女が、立ち塞がっていた。

永遠神剣之章：３８．連戦、激戦。

咄嗟に動けた者と動けなかった者。その違いは、以前に彼女と出会った事が有るか無いか、だったのではないだろうか。

動けなかった者のうち、サレスとナーヤはこのタイミングで、と言わんばかりの苦い顔で。他の旅団メンバーはまさか、と言った驚きの表情で。そして残る世刻、永峰、カティマ、ルプトナは状況が掴めていない様子だった。

「はあああああ！！！」

「……――っ！」

そして動けた者のうち、ミゥが右側から裂帛の気合と共に、ゼゥが左側から音も無く斬り込んでいく。

対するスールードは、ミゥの攻撃を舞う様に、彼女の『皓白』の流れに逆らわず、その動きに合わせる様に身体を回してかわし、その間に右手に現した剣でゼゥの刀型永遠神剣『夜魄（やはく）』の一撃を受け止める。

「やあああ！！」

その一瞬の硬直の隙を突き、ポゥが槍型永遠神剣『嵐翠（らんすい）』を突き込んだ。

スールードはそれを数歩下がる事でかわし、お返しとばかりにポゥに斬り付けようとした所で、その刃の目的を飛来した炎弾――ワゥの神剣魔法『ファイアボルト』だ――を打ち払うことに変えた。

俺はルゥと一瞬目配せし、頷き合うと同時にスールードへ向けて駆け出す。

上がる爆炎。そして立ち込める煙。それを目くらましに、スール

ードへ肉薄するまでの間に『観望』の形を成し、オーラフォトンを巡らせる。

「せいっ！」

先に近づいたルゥが、その愛剣である『夢氷』を煙の向こうに居るスールードへ打ち込んだ。

ミニオンであれば、間違いなく真っ二つに断ち切っているであろう一撃。だが、煙が晴れたそこにあったのは、スールードの眼前に展開された障壁に阻まれ止る『夢氷』の姿。

「ちぃっ！」
「ルゥ！」
「――っ！」

掛ける声は一言。だがそれで充分。俺の声に反応し、ルゥがそのばに屈む様に姿勢を低くする。

そんな彼女の頭上を横切らせるように、俺は『観望』を一閃する！

「――神剣『フラガラッハ』！！」

本体がナノサイズである『観望』。それを活用して創りだした、刃先が単分子の厚さしか持たない、ひたすらに鋭さのみを追及して形成した片刃の剣だ。例え格上の存在の障壁と言えど、断てぬ道理はない！

巡らされたオーラフォトンと障壁が火花を散らし、その刀身を削り取り、撒き散らしながらも『観望』はスールードの障壁を切り裂き、その白い首へと迫る。だが、彼女はそれをスウェーする様にかわし、直後下から突き上げる様に突き込まれたルゥの剣を、大きく後ろに跳んでかわして距離を空けた。

と、その時スールードが何かに気が付き、手に持つ剣を頭上へ掲げる。

その視線の先には、今の攻防の間に支えの塔への転送装置に向かおうとしたのだろう、サレスとナーヤ、タリアの三人。

「っ！　サレス、下がれ！」

俺の叫びに反応したサレスとタリアが、ナーヤを抱えて後ろに跳んだのとほぼ同時に振り下ろされるスールードの剣。そしてその軌跡をなぞるようにして、一筋の烈光――光の刃が三人の眼前を横切るように走った。

「残念ですが、通す訳にはいきません」

そう言って悠然とたたずむスールードの姿に、思わず舌打ちしてしまう。

サレス達を支えの塔に向かわせるには、やはりこちらに彼女を引きとめておかねばならない。ならば……攻めきるのみ！

ナナシとレーメにはアーツをいつでも放てる様に準備してもらう事にし、俺は一人『観望』を構え再度スールードに向かって駆け出す。

振り下ろされる剣。そしてその軌跡に沿うように走る光。それを右にステップしてかわした直後、眼前に半身ほどもあるマナの弾丸が迫っていた。

「ちっ！」

『観望』を振るい、それを切り裂く。一度、二度、三度。その度に削られる『観望』の刀身。……やはり切れ味重視のためか、頑丈さにおいては一段劣るな。

再度、今度は横薙ぎに振るわれる剣。同時にやってくる閃光の斬撃を姿勢を低くしてかわす。そして案の定眼前に迫るマナ弾。それを再度打ち払おうとしたところで、横合いから撃ち込まれた紅蓮の炎に相殺された。感じるマナの残滓はワゥのものか。恐らくは炎を収束して打ち出す『スレッジハンマー』だろう。

ちらっと横を見ると、予想通り併走しつつニカっと笑ったワゥの姿。それに内心感謝しつつ一歩。再度撃ち込まれたマナ弾は、闇色の爪撃に打ち落とされる。今度はゼゥの『ランブリングフェザー』か、有り難い。と、さらに一歩。ようやくスールードの眼前へと迫る。

「ふっ！」

「おおおお！！」

右から斬り払い、袈裟懸けに斬り降ろし、逆袈裟に斬り上げ、唐竹に振り下ろす。その度に剣戟を鳴り響かせる互いの神剣。右肩から斬り込んだ俺の剣と、左下から斬り上げられたスールードの剣が、鈍い音を立てて交差した。

互いに押し合う鍔迫り合いの中、更に一歩力を篭めた瞬間――鈍い音を立てて『観望』が半ばから折れ、剣先は地に落ちる前に粒子へと還った。

その隙を突いて振るわれる剣。それを残った根元の部分で受け止めるも、やはりバランスが悪い……じわじわと押し込まれてくる。

「ふふ……さあ、どうしますか？」

「……こうする……さ！」

試す様に言うスールード。……剣を使い出して日の浅い俺の攻撃に的確に合わせて来た事といい、「俺がどう抵抗するのか」を楽しんでる節が垣間見えるのが悔しい。……その余裕を崩してやる！

奴の言葉に答えつつ、手に残る『観望』を通して、粒子状のまま周囲に漂わせている『観望』へとマナを流しながら一歩スールードから離れ、距離をとった。

そして次の瞬間、注ぎ込まれたオーラフォトンが唸り、弾け、雨の如く四方から降り注ぐ！

「オーラフォトンレイン……『バロールの魔眼』！」

「なっ……くっ！」

流石にこれは予想外だったのだろう、驚愕の声と共に周囲に張り巡らされた彼女の障壁（ブロック）に、『観望』から放たれた無数のオーラフォトンの光線が叩き込まれ、軋みをあげる。

簡単にブロックを抜けるなんて思っては居ない。だから、やる事は只一つ……ぶち抜けるまで叩き込むのみ！

マナを練りながら周囲の様子を伺うと、俺達の様子を見守るミゥ達の姿。目が合うと、コクリと頷く彼女達。

――今はお任せします。

彼女達の視線にそんな意思を感じた気がした俺は、仕上げは任せる、と想いを篭めて、頷き返す。伝わったかな？　……ま、伝わらなくても彼女達なら機を逃さずに動いてくれるだろう。

「まだまだあああ！！」

気合を入れ、マナを練り、オーラフォトンと化して『観望』へ注ぎ込み、注ぎ込み、注ぎ込む！

連続で打ち込まれる数多の閃光に耐えるスールードの表情は、ここにきてようやく多少の歪みを見せた。

「くぅっ……！　あああ！！」

もう少しか、と思ったその時、スールードが叫えた。
次の瞬間、瞬時に凝縮し、弾ける膨大なマナ。
ゴゥ、と言う音が聴こえそうなほどに渦巻くマナは、『観望』へとマナを練りこんでいた俺を、周囲に展開していた粒子状の『観望』ごと吹き飛ばした。
――まだだ。

「ナナシ！　レーメ！」
「イエス、マスター！」
「うむ、行くぞ！」

飛ばされながら指示を出す。俺の身を案じる様な気配が伝わって来るけれど、今は守るよりも攻める事だと解っているのだろう。力強く答えてくれる二人。いつも思うが、俺なんぞにはもったいない、出来た二人だ。
そして駆動する戦術オーブメント。結晶回路（クォーツ）から導力を引き出し、導力を現象へと変換し、現象を世界に現す。

「『テンペストフォール』！」

――ナナシとレーメの声が唱和したその瞬間、“空”が歪んだ。
歪みは光をも捻じ曲げ、世界を赤く染め、地に堕ち、膨れ上がり、弾け、驚異的な破壊力を持って空間を圧搾する。
それはまるで、“空が大地に落ちる”かのような光景。
“失われたアーツ”とも称される、数ある攻撃用導力魔法（オーバルアーツ）の中でも最高の威力を誇る、空属性全範囲攻撃アーツだ。幾らスールードとはいえ、無傷とはいかないだろう。

「ぐぁ！」
「……はっ、はぁ、はぁ」

十メートルほどだろうか、吹き飛ばされて、結果に気を取られて受身も取れずに地に叩き付けられ、痛む身体に顔をしかめつつ起き上がった俺の視界に入ったのは、荒い息を吐き、身にまとう服や鎧、その背に生えた荘厳な翼すら大きく傷ついたスールードと……既に動き出している彼女達。

周囲五方向から、クリストの皆がその手に神剣を構えてスールードへと迫る。

ワゥのバズソーのトリッキーな動きが翻弄し、ミゥの打突とポゥの刺突が着実にその動きを追い詰め、ゼゥとルゥの斬撃が少しずつ、けれど確実に当たり出す。

「すげ……」

……長年共に戦い続けている彼女達ならではの見事なコンビネーションに、思わず感嘆の声が漏れた。

そういえばサレス達は、と思い出し、周囲を見ると、いつの間にか支えの塔への転送装置へ続く道を塞ぐように現れた、ミニオン達と戦闘を始めていた。あちらはあちらで乱戦……すぐに突破ってわけには行かなさそうだ。特にあのミニオン達が、『精霊の世界』の“剣”の中で遭遇したようなミニオン達だったなら、尚更。

その時不意に、ざわり、とした感覚。

視線をミゥ達の方へ戻すと、その翼をはためかせて空に舞い上がったスールードの姿。そして彼女が剣を掲げた瞬間、

「光よ、降り注げ！」

天空から地上――俺達へ向けて、幾条ものレーザーの様な光線が

降り注いでくる。
それを見た瞬間、咄嗟にオーラフォトンバリアを張る。それとほぼ同時に猛烈な衝撃。それも、何度も、何度も、何度も、だ。……くそっ、さっきの『バロールの魔眼』の仕返しかよ。
ガンガンと叩き付けられる衝撃を堪えつつ、マナを練り続ける。

「『クレスト』！」
「『Ａ－クレスト』！」

ナナシとレーメの声が続けて聴こえたその次の瞬間、かかる圧力が少し和らいだ。……防御力向上アーツ……それも物理と魔法の両方か、ありがたい。

「ならばこれならどうですか？　……喰らいなさい。二つの刃が、全てを切り裂く！」

今度はスールードの声。直後訪れた、今まで以上の圧力と衝撃。あいつもしかして、標的を俺一人に絞ったのか！？
周りの皆の様子も解らず、まともに動くことすら儘ならずに耐えるのみの状態で、幾度目かの衝撃にオーラフォトンバリアを張りながらも膝が崩れ、地についてしまった。……このままじゃジリ貧だ。……けど、諦めるな。顔を上げろ。前を見ろ。敵は、そこに居る！
一瞬。そう、ほんの一瞬閃光が途切れた瞬間。見上げたそこに見えたのは、翼をはためかせ、閃光と共に俺に向かって一直線に急降下してくるスールードの姿。
くそっ！　『観望』を形成するには時間がない。受け止めるしか！

「うおおおお！！」
「はあああああ！！」

目一杯マナを練り、眼前に展開しているオーラフォトンバリアへと流し込む。その次の瞬間、落下による勢いを乗せたスールードの剣と俺の障壁がぶつかり合い、互いの精霊光が弾け、先程までの光の雨を受けて居た時に勝るとも劣らぬ衝撃が走った。

周囲からは剣戟。……ミニオンかっ！？　となると、他の皆も精一杯だろう。アーツは……もうＥＰがオーブメントに残っていないのが感じられる。……自力で何とかするしかない、か。

押し込もうとするスールードと、押し込まれんとする俺のせめぎ合いが続く中、不意に目の前のスールードの顔が緩んだ。

「ふふ……青道祐。以前対峙した時からまだ僅かしか経っていないにも関わらず、よくぞここまで成長しましたね。……まるで、こうして戦っている側からそれを血肉にし、成長しているよう。……何があっても足掻いて、足掻いて、諦めず、その命を燃やし、絶望にすら立ち向かう……ああ。私は、そんな貴方が愛おしい」

押し込まれる圧力は変わらず、俺はそれを堪えることに精一杯で、何も言い返す事が出来ない。そしてそれでも構わぬとばかりに、スールードの言葉は続く。……なんつーか、こっちが必至なのに向こうが余裕なのが悔しいんだよくそっ！

「愛していますよ、青道祐。だから、もっと、もっと、その愛おしい姿を私に示しなさい！」

さらに練りこまれるマナ。流し込まれるオーラフォトン。一際輝く精霊光。……徐々に押され始め、彼女も持つ刃が俺の障壁へ食い込み始め、何とか打開策を計ろうとした、その時だった。その声が聴こえたのは。

「――、――！」

その声は、“上”から聞こえた。
それは目の前の少女にも聞こえたようで、俺とスールードの意識が一瞬上に逸れる。
そして再び、今度は明確に聴こえた、声。……って言うか、近づいてきてる？

「――そのまま、動かないで！」
「くっ！」

次の瞬間、俺と、咄嗟に俺から跳び退ったスールードの間を断ち切る様に、降り立つ誰か。
俺の目に飛び込んできたのは、綺麗な蒼銀の髪と、白い羽の髪飾り。
澄んだ、けれども力強い、どこか――感じたことのある気配。……あぁそうか、あの“夢の少女”と似ているんだ。
目の前の少女はスールードに向かって戦装束をはためかせがら駆け、その手に持ったものを振りかぶる。その姿はまるで、多少幼さは残るものの、北欧神話に出てくるヴァルキリーの様で。
それは、長めの柄の先に、先端が二股に分かれた三角形のパーツがついたもので、そこから光で出来た大剣状の刃が伸びていた。
あの剣、あの姿、間違いない。彼女は――

「お願い、ゆーくん！　『プチニティリムーバー』！！」

一閃。
スールードを障壁ごと弾き飛ばし、その手に持った永遠神剣を構えながら、少女はこちらを見て、微笑む。

「――永遠神剣第三位、『悠久』が担い手、『悠久のユーフォリア』

！　故あって助太刀します！」

永遠神剣之章：３９．スールード戦、決着。

何故、彼女が今ここに居る？
それが最初に思った事だった。
彼女が現れるのは、この戦いが終わった後、暁絶（あかつきぜつ）が理想幹へ向けて放った『意念の光』が跳ね返され、それがこの世界の『支えの塔』へ迫った時だ。そして彼女はその意念の光を打ち消すのに全力を振り絞り、結果としてそのショックで記憶喪失になり、旅団に保護されてなし崩し的に行動を共にすることになる……“原作”では、だが。
それが今、戦闘の最中にここに現れた。当然“記憶を失う”様な事態にはなっていない。……まぁそれはいいさ。すでに『精霊の世界』において“原作”とは逸脱した状態になってるんだ。この程度のイレギュラーなんてのはどうと言う事は無い。
問題は、だ。彼女が何をもって俺達の側へ加勢すると言ったのか、だ。
思い出せ。彼女は何を命じられてこの『時間樹』に来た？
……そうだ、世刻。彼を『叢雲』へと導くことだ。それを命じたのは、ローガス……カオス・エターナルのリーダーにして永遠神剣第一位『運命』の担い手、『全ての運命を知る少年　ローガス』。
確かローガスは『ナルカナ』の事を気にかけていて、彼女の担い手になれる人物をずっと探していた……んだったっけか？　……となるとその過程で『旅団』の事を知っていても可笑しくは無い。事前にローガスに旅団に協力するように言われていたのだとしたら、ユーフォリアがこちらへ加勢しようとするのも解る、か。

「……えっと、あの！」
「え？」

「そうじっと見つめられると困っちゃうんですけど……あ、もしかして今手を出したのってご迷惑でしたか？」

どうやら考え込み過ぎてたようだ。

少々困ったように言うユーフォリアへ首を横に振って返す。

「……あ、いや、ごめん。ちょっと考え込んじゃってた。今は正直助かったよ。エターナルである君が手伝ってくれるのはこっちとしては願ったり叶ったりだけど……いいのかい？」

「はい！　えっと、細かい事は言えないんですけど、あたしを派遣したリーダーから『旅団』の方々に協力するように、と言われてますから」

ああ、やっぱりローガスの指示か。

俺が一人納得していると、ユーフォリアが「それと……」と口を開く。

「さっきあたしが降りてくる前に、神剣とは違う大きな力をこの世界から感じたんですけど……それってお兄さんですよね？」

「……一応心当たりはあるから多分そうだと思うけど、どうしてそう判断したんだ？」

「お兄さんの身体に、近い感じの力の残滓がありますから、そうなのかなって」

言われて気付いた。ああ、そういえばスールードの猛攻受けてる時に、『クレスト』と『Ａ－クレスト』かけてもらってたな、と。

恐らくあれの効果がまだ若干残ってて、それを感じたのか。

神剣とは違う大きな力ってのは、さっきの『テンペストフォール』のアーツだろう。

「……えっと、あたしが受けた指令の一つに、その力を使ったのがどんな人物で、何をするのか、それを見届けてくる様にって言うのがあるんです」

「つまり、その為にも俺達と行動を共にしたほうが都合がいい、と。……って言うか、そんな指令を受けてるって事、俺に言ってよかったのか？」

そう問うと、一瞬「あ」って顔をした後、誤魔化すように笑いながらこくりと頷くユーフォリア。……まぁ、深くは突っ込まないでおこう。うん。

……あれ、もしかして今このタイミングで彼女が現れたのって、あの時『テンペストフォール』が使われたのを感じたから？　……いや、それ以前に彼女が受けたって言う指令によるなら、俺と言う存在がこの世界にある事自体が原因になるのか。

溜息が出た。予想外な事態が起きたと思えば、蓋を開けてみれば自分が原因とは。……いやまあ、妥当なところなんだろうが……やれやれ。

「大体は把握した。細かい事はこの場を何とかしてからだな。……よろしく頼むよ」

「はいっ！　……来ましたっ」

ユーフォリアの返事に呼応するかのように、膨れ上がる濃密なマナ。

そちらの方をみやると、先程の一撃は随分と強烈だったらしく、結構遠くへ弾き飛ばされたスールードが、ゆっくりとした足取りでこちらへ近づいて来ている。

それに対してユーフォリアと共に武器を構え、相対する。さて、彼女とは上手く連携が取れるのだろうか。……いや間違いなく俺が足手まといになるのは目に見えてるんだが。

「いくよ、ゆーくん！」
「おう！」
「……え？」
「……ん？　……あ」

つい返事してしまってから、自分がユーフォリアに名乗っていないことを気付いた。
そういえば彼女は自分の神剣の事を『悠久』だから「ゆーくん」って呼んでるんだったか。

「えっと、うん、ごめん。俺の名前、祐って言うんだ。青道　祐。改めてよろしく」
「あ、はい。えっと、あたし、この子のこと『ゆーくん』って呼んでるんです。ごめんなさい」
「いや、謝る必要はないんだけど。何て言うかこっちこそごめん」

お互いにひとしきり謝りあってから、このままじゃキリが無さそうだと、ごほんと一つ咳払いをして仕切り直す。

「えーと、うん。……じゃあ行くか」
「あはは……はい」

なんだかさっきまでの緊張感が一気にぶっ飛んでしまった気がする。……いかんいかん。
片手剣にした『観望』を構え直し、いざ行かんとしたその時だった。

「祐、無事か？」
「青道君、大丈夫！？」

「祐さん、ご無事ですか!?」

周囲のミニオンを殲滅し終わった皆が集まってきて、異口同音に心配する言葉をかけてくれる。

それに頷き「援軍が来たからな」と言うと、ぺこりとお辞儀をするユーフォリア。

それにしてもさっきから出鼻を挫かれてばかりだな。

「援軍って……この娘がですか?」

「そうは言うがノゾム。この娘の神剣、おそらくこの場の誰のよりも高位の神剣だぞ?」

ユーフォリアの外見的に信じられないのだろう。世刻がそう言うと、彼のレーメがたしなめる様に口を開く。そのレーメの言葉に驚いたのは世刻だけではなく、他の皆もだったのだが。

そしてレーメの姿に「わぁ」と感嘆の声をもらしつつ、瞳を輝かせるユーフォリア。……ああ、何か場が混沌としてきた。

「っ!　来るぞっ!」

「えいっ!」

ゾクリとした殺気と、視界に走った閃光に声を上げると、それに反応してゴシック調のドレスを翻し、前に躍り出る永峰。張り巡らされる障壁(ブロック)は俺の物なんぞ比べ物にならないぐらい強固なもので、バキンッと何かが弾ける音を響かせながら、スールードの一撃を防ぎきる。

「っ、痛〜」

「大丈夫か?」

「あ、はい。ありがとうございます」

二度三度と振るわれる閃光を受け止めつつも、衝撃に押されて来た背中を支えてやり、そのまま意識をオーブメントへ向け、ＥＰが少し回復しているのを確認。

「ナナシ」
「はい……『ラ・クレスト』！」

俺の意図を汲んだナナシが放ったアーツは俺を基点に広がり、皆に大地の守護を与え、物理防御力を上昇させる。
……俺の肩に降りたナナシと一緒に出てきたレーメに、ユーフォリアが興味深げな視線を送りつつ、自身に掛けられた“力”の作用を理解したのだろう、それに続くようにマナを練りこんでいくのを感じる。

「収束する世界、極限の時よ、全てを見通せ！　『コンセントレーション』！！」
「よっしゃあ、行くぜ！」
「待て、ソル」

確か物理防御力を上げる神剣魔法だったか。彼女のマナが広がり、俺達を包み込むのを感じた。
そしてそれを受けて飛び出していこうとしたソルラスカを押し留めると、「なんで止めんだよ」と不満気な視線を向けてくるのだが、それに対して口を開いたのは俺ではなく、サレスだった。

「いや、祐の言う通りだ。ここは彼とクリスト達に任せて、我々は『支えの塔』へと向かう」
「そう言う事。そっちは頼んだぞ。……ナナシ、ナーヤに」
「む……どう言う事じゃ？」

俺に呼ばれたナナシが、ふわりとナーヤの肩に移動する。と、ナーヤは不思議そうな顔で問いかけてくる。いやまあ無理も無いが。
だが恐らく彼女はこの後、崩壊しようとする支えの塔のシステムを繋ぎ留める作業をやるはめになるはずなのだ。出来れば多少でも余裕を持ってそれに挑んでほしいので、ナナシならばナーヤをフォローする事もできるだろう。

「多分役に立つ。連れて行ってくれ」
「……ふむ、解った。ナナシ、頼むぞ」
「はい」
「よし……では、行くぞ！」

スールードの攻撃が止んだ一瞬。その瞬間に出されたサレスの指示で、俺達は二手に別れ一斉に動き出す。スールードへ向けては俺とクリストの皆、そしてユーフォリア。他の皆は『支えの塔』へと。
それを見てか、二方向へ振るわれる剣閃。しかしそれは、アーツと魔法によって強化されたポゥと永峰のブロックに阻まれていた。
そして再度肉薄する、俺とスールード。

「待たせたな」
「まったくです。ですがまあ良いでしょう。こうして足掻く貴方達の姿は、それだけで美しく、見る価値が有るのですから」
「……戯言をっ！」

会話の最中にも振るわれる俺やクリストの皆の攻撃を受け止めつつも、ユーフォリアの攻撃だけはいなす様に受け流している辺りは流石と言うべきか。
だが、やはりユーフォリアの存在が大きいのか。彼女へ意識の大半が割かれているのだろう、こちらの攻撃も着実に当たり出してい

た。

「はあああ！」

そして気合と共に繰り出されたルゥの幾度目かの攻撃が当たったその瞬間、スールードの障壁が音を立てて弾け、その身に浅く傷を創る。

「くっ……ふっ！」

それに少し顔をしかめたスールードが短く息を吐くと同時に、彼女を中心にマナが弾ける。それに俺達が一瞬怯んだのを逃さずに跳び退るスールード。その時だ。遠めに見える『支えの塔』が光を発した。

「あれは……」

「ふむ……どうやら事は成った、と言う所でしょうか」

ミゥの疑問に答える様に言われたスールードの言葉に、彼女と対峙する俺達の間に緊張が走る。

――事は成った……ってことは、あれはエヴォリアが『支えの塔』を暴走させ始めた証左か。

（……ナナシ、聴こえるか？）

（はい。……『支えの塔』の発光でしたらこちらでも確認しました。それと同時に塔を守るように現れたベルバルザードが率いる部隊と戦闘に入っています）

（そうか……気を付けてな）

（はい。マスターもお気を付けて）

そういえばどれ位の範囲まで念話が届くのか確かめて無かったな、なんて思いながら念話を送り、無事に向こうの様子が解った事に安堵しつつ、事態の悪さに嘆息した。

“原作”よりも動くのが早かったとは言え、クリストの皆がこちらに居る以上戦力的には下。ベルバルザードに部隊を展開されてしまっている以上、状況は悪い……か？

「さあ、この世界と、この世界に連なる世界の崩壊が間近に迫った今、貴方達はこの私に何を見せてくれるのですか！？」

「何を――！」

心底楽しみだと言わんばかりのスールードへ、激昂して飛びかかろうとしたゼゥの肩を押さえて止める。

対スールードで限っていえば、アイツに対して恨みや怒りの様な想いが少ない俺のほうが冷静になれる。だったら彼女達を抑えるのは俺の役目だろう。

事態が切迫して来た以上は、長引かせる訳にも行かない。だからと言って焦っても良い結果にはならない。

「祐？」

「……落ち着けゼゥ」

「……そうね、ごめんなさい」

ゼゥは静かに深呼吸し、その気を高め、居合いの如く『夜魄』を構える。他の皆も同じ。各々の武器を構え、再度臨戦態勢をとっている。

「……ユーフォリア、全力は出せそうか？」

「それなんですけど……どうもこの世界に降りて来てから、妙に身体が重いんです。何かご存知……なんですよね？」

「ああ。この戦いが終わったら説明するよ。とりあえず今は、出せる範囲の力で頼む」
「はいっ……マナよ、闘の声となり戦場を駆けよ！　『インスパイア』！」

ユーフォリアのマナが再び俺達を包み込む。今度はその力に加護のかかる感覚。これは攻撃力を上げる神剣魔法だったか。
そしてそれを合図としたように、同時に駆け出す俺達。
だが、そこに合わせる様にスールードが大量のマナの弾丸を放ってきた。一つ一つが俺の半身程度――クリストの皆にとっては身長ほどもある大きさ。全て防ぐのは難しいかと思ったその時、周囲の空間を更に大きなマナが満たしているのを感じる。
……この感じは、ミゥかと思った矢先、それを確認するまでもなく、ミゥの声が響き渡った。

「……『スカイピュリファー』！！」

そして同時に、爆発するように弾ける白いマナ。
それはスールードが放ったマナの弾丸の事如くを打ち消し、スールード本体にも強烈な一撃を加えつつも、俺達に対しては不思議と、安心するような暖かさで包み込んでくれる。
何と言うか、ミゥらしい大技だな
その直後に振るわれた閃光の斬撃はポゥが防ぎ、ワゥが神剣魔法や伸縮自在の『剣花』で牽制する。
その間にスールードの眼前に迫った、目にも留まらぬゼゥの剣閃が、ミゥの一撃で弱ったスールードの障壁を切り裂く。
そこに振り上げる様なルゥの一撃。それを防ごうとしたスールードの剣を両腕ごと跳ね上げ胴をさらけ出させ、俺はそこに、剣状の『観望』を構え、身体ごとぶつかる様に突っ込んだ。

「おおおおお！！」
「くぅっ！」

それを身体を捻るようにしてかわすスールードだったが、かわしきれずに俺の手に彼女の脇腹辺りを裂く手応えを残した。
けど、それで充分。

「最大の力を、最高の速度で……最善のタイミング！！」

一気に肉薄したユーフォリアが、下から掬い上げる様に『悠久』を振るい、そのままの勢いで跳躍、落下による加速を含めた振り下ろしの一撃へと繋ぐ。
それは再度張られたスールードの障壁（ブロック）を突き破り、深い一撃を与えていた。

「……どうやらこの身体はここまでのようですね」

スールードから一度距離をとり、神剣を構えつつ対峙する俺達をゆっくりと見渡し、スールードがそう言ったのをきっかけとするかのように、まるで砂が崩れるかの様に壊れていく、彼女の身体。

「私の役目は時間稼ぎでしたから、目的は達成……と言う所ですが。惜しむらくは、貴方達がこの危機にどう立ち向かうかが見れない事でしょうか。それにしても……あの状況をどのように切り抜けるのかと思えば、エターナルをも引き寄せ、私の分体の一つを滅ぼしてしまうとは……ほんとうに、貴方は面白い人です」

崩れ行く身体を気にも留めずに、これもまた一興とくつくつと笑

う彼女は、心底楽しそうで。ひとしきり笑った後、こちらをひたと見据え、

「……それでは、またいずれ……」

その言葉を最後に、スールードはマナの霧となって姿を消した。

最後まで余裕を崩さない、あっさりとした退場。

そう、あれは所詮彼女の分体の一つ。いつかまたどこかで遭う事になるのかも知れないけど……とりあえず、今勝てた事で良しとしとこう。

「……祐さん、行きましょう」

「……ああ」

まだ戦いは終わっていない。

ミゥに促され、俺達は『支えの塔』へと足を向けた。

永遠神剣之章：４０．支えの塔、内部にて。

「神名（オリハルコンネーム）ですか……つまり、それが植えつけられたせいで、力が制限されているって事なんですね」

『支えの塔』へ向かう道すがら、実力を出し切れない理由を説明すると、そう確認するように言うユーフォリア。彼女へ「ああ」と頷いて返すと、それを聴いていたミゥが口を挟んだ。

「あの、いいでしょうか……私が聴いた話では、『神名』は神の転生体の証にして、それに目覚めれば大きく力を増すブースターの様なものと言う事だったんですけど」

「それもまた一つの側面ってやつさ。本来『神名』ってのは、この『時間樹』を創り出した存在が、『時間樹』を維持管理するための存在を支配、制御するために創り出したもんだ。その『時間樹を維持管理するための存在』ってのが転生体達の前世、『神々』だな。で、『神名』ってのは、力の弱いものが持てばミゥが言った様に、“その神名が持つ力に即したものが出せる”って言うブースターに、力の強い者が持てばユーフォリアに起こっているように“その神名が持つ力までしか出せない”って言うリミッターになるのさ」

俺の説明に「なるほど」と頷く皆。そんな中、ルゥがほぅと一息吐き、それに気づいたポゥがきょとんとした顔を見せた。

「ルゥ姉さん、どうしました？」

「……いや、今の話の中で重大な事をサラッと言われた様な気がしてな」

その言葉に、今の自分の言葉を思い浮かべる。……あぁー……そ

う言われてみるとそうだな。なんて今更思っても遅いのだが。……まぁ、秘密にしないといけないって訳でもないだろう。たぶん。

「ははは。まぁ気にするな」

「……はぁ、そうしておこう。それにしても……沙月達の力を持ってしても『力の弱いもの』に分類されるとは……な」

そんなルゥの、ぽつりとした言葉に皆の視線がユーフォリアへ集まる。そしてそんな状況に「ふぇ、な、何ですか？」と慌てるユーフォリア。

「皆、君がどんだけ強いんだって思ってるんだよ」

「ええ！？　そんな、あたしなんてまだまだですよー！　パパやママの足元にも及びませんから……」

そんなユーフォリアの言葉に、苦笑いで返すしかない俺達だった。

……

……

……

（ナナシ、たった今『支えの塔』の発光が止んだ。そっちはどうだ？）

（現在『支えの塔』の管制室へ続く階段を登っているところです。そちらは？）

もう少しで『支えの塔』前へと続く転送装置へ着きそうだという所で、不意に発光していた『支えの塔』の光が止んだ。

ナナシに現状を聞いてみると、やもなくして返事が返ってきたので、「もう少しで塔への転送装置だ」と答える。

（流石に速いですね。それにしても発光が止んだ、と言う事は……）

（ああ、エヴォリアのやることが終わったって事だろう。済まないが急いでくれ）

（了解しました）

まあ、道中の敵は全て世刻達が殲滅してくれているので、俺達は真っ直ぐ塔へと向かうだけだから速いのは当然なんだが。

ナナシとの念話を終え、程なくして転送装置によって『支えの塔』へと到達する。

中に突入して少し行った所で、聴こえてきたのは戦闘音だった。皆と頷きあい、音の聴こえる方へ行くと、広場の様な所でミニオン達と戦う、斑鳩やサレス、タリア、ソルラスカ、ヤツィータの姿。声を掛けようとしたところで、斑鳩の背後にミニオンが迫るのが見えた。

走っては間に合わないと判断。レーメ、サポートよろしく！　呪文は省略――。

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……『闇の吹雪』！」

突き出された俺の手から放たれた氷雪を孕んだ闇色の魔力の奔流は、間に挟んだ幾人かのミニオンを巻き込み、吹き飛ばしながら、斑鳩の背後に迫ったミニオンを撃ち抜いた。最も彼女はすでに気付いて対処しようとしていたが。

それによって俺達の姿に気付いた斑鳩達が、敵を牽制しつつこちらへと一度集まってくる。

「ありがとう、青道君。助かったわ」
「いや、正直余計な手出しだったかなと思わなくも無いが。それより状況は？」
「望達には先に行っている。お前たちにも向こうへ行ってもらいたい」
俺の問いに答えたのはサレス。その言葉にこちらに残るメンバーを見て考える。
ミニオンの数は……まだ結構多いが、まぁ、このメンバーなら大丈夫か。いやでもなぁ、皆連戦で疲れてるだろうし……。
と、俺の表情から何かを察したのか、ミゥが「あの……」と声を掛けてきた。
「こちらには私とゼゥとワゥが残りますから、祐さん達は先に行ってください」
その言葉にコクリと頷くゼゥとワゥ。……よし、迷ってる時間も無いしな。
承諾の旨を伝えて、管制室へと向かう事にする。
「わかった。じゃあ先に行く。皆も気をつけ……」
そこまで言いかけた時だ。ズズンッとこの『支えの塔』それ自体が大きく揺れた。
サレスのを見ると、苦々しい顔をしていた。これは……塔の崩壊が近いか！？
「くっ……俺達が先の様子を見に行くから、皆は退路の確保を！」
「……解った、任せとけ！」
「そっちもしっかりね！」

銘々に言葉を交わし、途中立ち塞がったミニオンを斬り倒し、上へ続く階段へ向けて駆ける。
途中撃ちこまれそうになった敵の神剣魔法は、斑鳩とタリアが打ち消してくれる。

「オラアアア！！」

併走していたソルラスカが、道を塞いでいた一体を吹き飛ばし、開いた隙間を縫って上階へと向かった。

……
……
……

長い階段を登った先、管制室へ続く扉の前は激戦の跡だった。
どうやら下よりもこっちの方が敵は少なかったのか、殲滅し終わっているらしいな。
大きな扉の前に立つのは三人。永峰とカティマ、ルプトナ。そしてうつ伏せ倒れているニーヤァと思われる猫耳男。どうやらこちらに気がついたらしく、永峰が手を振ってきたので急いで駆け寄る。

「無事か！？　世刻達は？」
「あ、先輩。私達は大丈夫ですけど、望ちゃんたちは別の管制室へ向かいました」

今も尚崩壊へ向けて揺れる『支えの塔』。それを止めるためにはシステムへのアクセスが必要なのだが、どうやらこの先の管制室か

らはアクセスがロックされていたらしい。その為に世刻達は、ニーヤァの事を永峰達に任せて、別の、サブ管制室へ向かったと言う。

「コイツ、下半身丸出しだったんだよぉ……」

心底嫌そうに言うルプトナ。嫌なものを思い出したと言わんばかりの永峰とカティマ。……ご愁傷様と言わざるを得ない。

そんな彼女等の様子に、俺達が皆揃って苦笑いを浮かべた時だ。周囲に感じられる神剣反応――。

バッと振り向くと、半包囲するようにミニオン達が現れていた。まだ居た……というより、新たに出てきたのか？

と、丁度その時、ナナシから念話が入った。

（マスター、聴こえますか？）

（ああ、状況は永峰達から聴いた。そっちは？）

（これからナーヤと共に、システムへのアクセスに入ります。ナーヤは完全にシステムへ精神のダイブ。私も極度の集中状態に入りますので、こちらへは私の気配を辿って来て下さい。……可能ですか？）

ナナシの提案にふむ……と一考。目を閉じて集中すると、俺の肩の上と、少し離れた所に慣れ親しんだ気配を感じることが出来た。言わずもがな、レーメとナナシだ。

（可能みたいだ。直ぐに向かうよ）

（はい……お待ちしています）

念話を終え、向こうの様子を永峰達に説明すると、途端に心配そうな表情になる永峰。何と言うか、子犬の様な目で見るんじゃない。……ったく。

「この分だと、向こうにもミニオン達が現れているでしょうか……」
「……かもしれない。けどまあ安心しろ、世刻達の方へは俺達が向かう。永峰達はニーヤァを連れて脱出してくれ」
そう言うと驚いた顔をし、「そんな、危ないですよ!?」と言う永峰達。まぁ、塔が崩壊するかもしれない瀬戸際だしな。
「……大丈夫だよ。塔の崩壊は今ナーヤが食い止めようとしていて、それは成功するだろう。だったらそれまでの間、世刻と一緒にナーヤを守ればいいだけなんだしな」
「けど、食い止められるって確証は無いんですよね?」
そう言ってから、自分の言葉にはっとして。酷く不安そうな顔になる永峰。……ああ、そんな場所に世刻が居ると、改めて思ってしまったのか。
そんな永峰の肩を、大丈夫だ、と叩く。パンッと乾いた良い音がした。
「今言っただろ? 成功するって」
「でも、そんな……」
「ナーヤのサポートをナナシがしているから。失敗するわけがねーよ」
そんな俺の言葉に何かを感じてくれたのか、ようやく笑顔を見せて「信頼してるんですね」と言う永峰。そんな彼女に「当然だ」と返した。
周りのミニオンはじわりじわりとこちらへの距離を詰めて来ている。そろそろ行かないと互いにまずいだろう。

「ほら、お客さんも焦れてきたみたいだぜ」

俺の言葉に対して、ルゥとポゥが顔を見合わせ、周囲の様子と、俺達の状態を確認してから頷きあうのが見えた。

なんだろうと思っていると、不意に両腕をそれぞれに捕まれる。

どうした？　と言おうとして、二人の顔が泣きそうなぐらいに歪んでいる事に気付いた。

「祐……私とポゥは希美達の援護に回ろう。彼女達だけではそこのを連れて脱出するのはきついだろうしな……」

「……そう……ですね。だけど、約束してください……絶対、絶対に帰ってくるって！」

俺も他人の心の機微に聡いとは言えないけど、二人が抱いているだろう感情は、ひしひし感じる。二人の表情から、読み取ることが出来る。……不安と、恐怖。それほどまでに、二人はそれを顕にしていた。

彼女達の過去、それに何が起こったのかは知らない。……きっと、同じような状況で身近な人を失ったのだろうと察する事はできるけれど。

二人は本当は俺と一緒に奥に行きたいと思ってくれているのだろうか。……だとしたら、嬉しくて、哀しいことだと思う。そしてこんな想いをさせてしまう自分が情けなくも。

そんな二人から腕をそっと剥がし、頭を撫でてやる。安心しろ、と強く想いを籠めて。

「……解った。絶対に世刻達と無事に戻る。だから皆も気をつけて。……じゃあ、行こうか」

「はい！」

「あの、先輩！　望ちゃんをお願いします！　……きっと無理する

と思うんで……」

永峰の言葉に頷いて同意するカティマとルプトナ。

……まったく、自分たちも大変だろうに、最初から最後まで出るのは世刻達の心配とは……ほんと、幸せもんだね、アイツ。

永峰達に「任せろ」と告げると、ユーフォリアと顔を見合わせて頷き合い、迫るミニオン達へ向けて駆け出す。

先陣を切るのはユーフォリア。彼女の持つ『悠久』の、先端部のパーツが前後に伸び、光の刃ではなく『悠久』それ自体が大剣の形を取った。

……いや、どちらかと言うと刃状の一枚の大きな板と言った方が近いかもしれない。

そのまま彼女は『悠久』に飛び乗ると、瞬間的に加速、敵に向かって突っ込んでいく。

「このまま、次元ごと断ち切ってみせます！　『ルインドユニバース』！！」

敵集団をぶち抜いたユーフォリアは、そのままミニオンの壁の向こう側へ着地。俺は彼女が創った道を、ミニオンを斬りながら一気に駆け抜けて合流し、ナナシの気配へ向けてその足を向けた。

永遠神剣之章：４１．乱戦、終戦。

「――見つけた！」

通路にひしめくミニオン達。その只中から聞こえる剣戟と、気力を振り絞る声。間違い無い、世刻だ。

そこに見えたのは、群れの中心部へ向けて神剣を構えている大量の赤ミニオン達。世刻は……ちっ、気付いてないか？

――あれはまずい。そう判断し駆け出そうとしたところで、後ろから稟とした声が掛けられる。

「任せてください！」

「おう、任せた！」

赤ミニオンの対処はユーフォリアに任せ、『観望』を大剣状にして世刻の元へ駆け出す。

そんな俺達にミニオン達が気付き、後ろからはユーフォリアの明朗な声が聴こえてきた。

「塵は塵に、灰は灰に、声は事象の地平に消えて！　『ダストトゥダスト』！」

その直後、背後に膨れ上がる膨大なマナ。チラリと見てみれば、そこに顕現する青い巨体と白い巨体。……彼女の神獣たる二頭の竜『青の存在、光の求め』。

その二頭の口から、眩いばかりのブレスが放射された。それはマナを貯めていたミニオンのみならず世刻も、そして俺をも飲み込み、空間を満たす。その瞬間、一瞬がくりと力が抜ける。

「なっ……今のは！？」

そんな世刻の困惑した声が聴こえる。突如ミニオン毎自分達を襲った膨大な力と光。その割に無傷な事に戸惑っている様だ。

ミニオン達にいたっては、世刻へ向けて溜めていたマナが全て霧散したために狼狽しているのが手に取るようにわかる。

『ダストトゥダスト』。その効果は、“原作”では敵味方もろとも戦闘マナをゼロにする、だったか。そして副次効果として、ユーフォリアのステータスの大幅上昇――！

「ゆーくん、一気に行くよ！　全速前進、突っ切れーーーーー！！！」

『ダストトゥダスト』の影響で一瞬動きの鈍った俺の横を、先程のものに比肩……いや、それ以上のマナに包まれたユーフォリアが、『悠久』に乗って追い抜く。

戦闘ってことで『観望』を通して動体視力を強化していた俺ですらようやく解った程度。ミニオン達に至っては、一体何が起こったかわからないだろう程の一瞬。

そんな速度で駆け抜けたユーフォリアが通った跡は、ごっそりと、大量のミニオンが文字通り“消滅”し、世刻へ向けてぽっかりと道を作っていた。

そこを通り、困惑する世刻と、その横に着地したユーフォリアへ合流する。その間に空いたスペースは他のミニオン達が埋めて再び包囲されたが、その密度は外から見ていた先程よりかなり薄い。

「すごい威力だな……」

「はい！　ゆーくんの力を解放して次元の彼方から一直線に突撃する必殺技です！」

にぱっと言う効果音が聞こえそうな笑顔でとんでもない事を言うユーフォリア。でもちょっと辛そう……かな？

……多分、普段の力の感覚でやったはいいけど、神名（オリハルコンネーム）で力が制限されているのを失念してたとか、そんなところだろうか？

そんな彼女の頭を「無理するなよ」と、ぽんぽんとしてから、世刻の様子を見る。

「……うん、随分ボロボロだけど、生きてるようだな」

「ははっ……何とか。先輩、来てくれたんですね」

「当然だ。それに、ナーヤにはナナシが着いて行ってるしな。俺達が来ないなんて無えよ」

そう返しつつ、ここに来るまでにある程度エネルギーの回復したオーブメントで、世刻に上位回復（ティアラル）アーツを掛ける。

次いで、自身の内側へと意識を向ける。

先程の『ダストトゥダスト』の影響で、直ぐに戦闘用に練りこめるマナは多少心もとない。『魔法』は殆ど使っていないからか、魔力はある。……よし。

『魔力』を練り『マナ』に戻す。大丈夫、前は身体を構成するマナを魔力に変換できたんだ、魔力からマナへの逆変換も可能なはず。

……うん、いける。そしてそれを二人に流す様にイメージし、それと同時に頭に浮かんだ言葉をそのまま言い放つ。

「廻る命の流れよ、友へと捧ぐ力となれ……『マナリンク』！」

ずずっと自分の中の力が、側の二人へ流れて行く様な感覚。

……うん、初めてやってみた割には上手く行ったような気がする。

それにしても成程。同じ神剣魔法でも個々人によって詠唱が違うのはこういうことかと一人で納得。

要は使いたい魔法に即した言葉が、今のように頭に浮かんで、そ

れが魔法として魂に固着されるんだろう。浮かんでくる言葉は、きっと神剣によって変わるんだと思う。多分今後は特に詠唱しなくても使えるだろうと、感覚で何となく解る。まあ言葉に出した方が明確にイメージしやすいから良いんだろうけど。

「あ……ありがとうございます！」

「なんか、先輩の神剣魔法って初めて見た気がします」

世刻の言葉に苦笑で返す。

実際、まともに神剣魔法を使ったのなんて今のが初めてだからな。

「さて……それじゃあ行こうか」

「はい！」

言葉と同時に『観望』を構えて駆け出す。他の二人はそれぞれ別方向へ。

迎え撃つ青ミニオンの、振り下ろされる剣を右下に受け流し、空いた胴を一閃。返す刃で袈裟懸けに、青ミニオンとその横にいた緑ミニオンをまとめて斬り飛ばす。

直後撃ち込まれた炎弾を、地面に大剣を突き立てて盾にして防ぎ、横合いから突き込まれた槍を身体を回転させてかわす。ザァっと砂が崩れる様に、手を離した剣が粒子へ変わるのを横目に、引き戻される槍に合わせて前へ出る。背後で盾にしていた剣が消えたために、先程まで俺のいた場所に炎弾が着弾する音がした。

肉薄した緑ミニオンへ『観望』を刺突剣（エストック）にして突き立て、引き抜いてすぐバックステップ。目の前を青ミニオンの剣が通り過ぎた。

剣をやり過ごして、それを振り下ろした青ミニオンへ一突き。直ぐに『観望』を薙刀へ変え、横薙ぎにして寄って来ようとしていたミニオンを牽制し、次いで上から叩きつけるように振り下ろしの一撃。刃は白ミニオンを斬り払い、そのままの勢いで地を叩く。

その隙に寄って来ようとした緑ミニオンへ、刃先のみを槍の穂先へ変えて刺突。それは敵のブロックに阻まれるが、かまわず再び穂先を薙刀の刃先へ変えて横薙ぎの一閃。緑ミニオンを力ずくで弾き飛ばした。

その直後、首筋にチリっとした気配。次いでバリッという、帯電する様な音。

「ユウ、上だ！」

レーメの声に振り仰いだ俺の視界に映ったのは、赤く光り渦を巻く電撃――！

帯電する様などころか本当に帯電してやがる！

「……散れ。『ライトニングファイア』」

「くっ……おおあああ！！」

赤ミニオンの声が聴こえるのと、俺が咄嗟に障壁（オーラフォトンバリア）を張るのはほぼ同時だった。

耳朶を叩く轟音と身体を突き抜ける衝撃。

「がっ……はぁ！」

――効いた。

障壁が間に合わなかったらと思うとぞっとする。

「後ろっ！」

息つく間も無く掛けられたレーメの声に、振り向き様に張った障壁に、黒の刃が数度連続で斬りつけられた。

あっぶねえ！

レーメに内心礼をいいつつ、刀を振りぬいた直後の黒ミニオンを切り払う。

「――っ！」

黒ミニオンの障壁を抜いて『観望』で斬りつけたのと同時に、俺の身体の、敵に斬りつけたのと同じ箇所に、敵よりも小さいが似たような切り傷。

……カウンタータイプのブロックか！

黒ミニオンや赤ミニオンの張るマナの障壁（ブロック）には、『カウンター』と言う効果が付いたものがある。その名の通り、与えられたダメージをその攻撃者にも与え返すと言うものだ。俺が今受けた傷もそれだろう。

「チッ！」

ズキリと痛む傷に顔が歪む。落ち着け、大丈夫、所詮カウンターダメージ、致命傷には程遠い！

『観望』を片手半剣（バスタードソード）にして横薙ぎにし、向かって来ようとした青ミニオンを牽制、軽く後ろに跳んで一度距離を開けると、ドンと背中に誰かが当たる感触に咄嗟に振り向き、同時に一歩踏み出し剣を突き出す。

そこにあった見知った顔に剣の起動を逸らし、更に一歩踏み込みんで位置を入れ替え、その相手――世刻に向かって振り下ろされていたミニオンの剣を受け止めた。

それと同時に、背中越しに武器を交差しているのであろう音を聴きつつ、敵の剣を受け止めていた『観望』を斜めに逸らして受け流し、空いた胴へ両手持ち（ツーハンデッド）で叩き込んだ。

敵のブロックと『観望』が交差し、互いに籠められたマナが炸裂し、地面を擦る音を響かせながらミニオンを後方へ弾き飛ばす。そ

の直後、弾き飛ばしたミニオンと入れ替わる様に、ミニオン達の壁を抜けてユーフォリアが姿を現し、横に並び、次いで敵を倒したか、背中越しに感じていた、世刻が敵と戦う気配も一度止まった。
三人共に背中合わせになり、周囲を囲む敵を牽制しつつ息を整えていると、世刻の声が聴こえてきた。

「……先輩、気付いてますか？」

その問いにふむ、と頷き、周囲を見渡す。……感じた違和感に、もう一度見渡して確信する。

「敵の数……か？」
「そう言えば、全然減ってないですね……」

俺の問いに同意するように、ユーフォリアが漏らす。そう、先程から、三人合わせれば随分と敵を倒しているはずなのに、敵の密度が減っていないのだ。……いや、むしろユーフォリアがごっそり削った直後よりも増えているかもしれない。

「うむ。間違いなく送り込まれてきているな」
「……恐らくは『支えの塔』のどこかに、精霊回廊と通じている箇所があるのだろう」

そんなレーメ達の言葉に、記憶を掘り返す。
……確か“原作”では『支えの塔』の真下を精霊回廊が通っていたんだったか。この増援っぷりを見てると、それは変わらんだろうな。いや下手をすると、この段階においても増援が現れてくる辺り、事態は悪いのかもしれない。

「……まぁ何にせよ、今の俺達に出来るのは、増える以上の速度で

倒すって事だけか」
「……ですね」
「じゃあ、行きましょうか」

言葉を掛け合い、武器を構える。そう、結局の所、やれる事をやるしかないのだ。
その間に、形状変化に使用していない分の『観望』を空間へ漂わせる。

「神の威光、唯一無二の輝きよ！　あたしたちに力を！　『ホーリー』！」

ユーフォリアが言葉を紡ぎ、彼女のマナが俺達を包み込む。それと同時に、身体に力が満ちるのを感じた。
そしてそれを合図とするかのように、ミニオン達が前に出てくる。
そのミニオン達を迎え撃とうとした世刻とユーフォリアを手で制した俺は、一言だけ、レーメの名を呼ぶ。
それに対して応える言葉もまた、ただ一言。

「『コキュートス』」

俺達を中心に、周囲の空間を凍気が満たす。それは瞬時にミニオン達を包み込み、その足元から突出した幾本もの氷柱は、ミニオン達を貫き、あるいは包み込み、凍らせ、砕け散る！
アーツの影響が消えた空間に残ったのは、ダメージを受けたミニオン達。その総数の三分の一程は、氷像の如く凍りついている。
流石にそれ一撃で倒すことは出来ないが、それでも充分に手傷を負わせることは出来、ある程度で動くであろうが、三分の一はアーツの効果で動きを封じる事も出来た。
次いで俺は、追撃とばかりに『観望』に送り込んだオーラフォト

ンを炸裂させる。

「撃ちぬけ！」

俺の言葉に応え、ミニオン達の頭上に漂う『観望』から放たれるオーラフォトン。それは幾条もの光となって、ミニオン達に襲い掛かった。

「今だ、行くぞおお！！」

数を減らすなら、緑ミニオンに回復される前の今が好機。

それを感じ取った世刻達も同時に動き出していた気配を感じつつ、俺は武器を構えてミニオン達の中へと突っ込んだ。

斬り、突き、薙ぎ払い、打ち払う。

どれほどを斬っただろうか。袈裟懸けに切り裂いた幾人目かのミニオンがマナの霧となった時、不意に『支えの塔』の鳴動が止む。

そして、サブ管制室へ続く扉を開けて、中からナーヤと、ナナシが顔を出した。……どうやら上手く行ったみたいだな。

目の前のミニオンを牽制し、一度彼女達の元へ下がる。世刻とユーフォリアも、状況の確認の為かナーヤの所へ下がった様だ。

「マスター！」

合流して早々飛びついてきた心配顔のナナシを受け止め、「大丈夫」と返してやる。

「ナーヤ、状況は？」

世刻の問いに、ナーヤはうむ、と一度頷いた後、満面の笑みを浮かべた。

「完璧じゃ！　もう崩壊の危険はないぞ！」
「本当か！？」
「本当じゃ、のぞむ。こんな事で嘘を言ってどうする。それと祐。その者……ナナシを付けてくれて助かったぞ。正直わらわだけだと、こうまで上手く行ったかは解らん」

ナーヤの言葉に、俺も、世刻もユーフォリアもレーメも、揃って安堵の息を吐く。大丈夫だとは思っていても、やはり実際に結果を聴くまでは、我ながら不安があったのだろう。
張り詰めていた空気が若干揺らいだ。だからだろうか。

「……まさか、とは思ってギリギリまで待ってみたけど……本当に崩壊を止めてしまうなんてね」

背後に生まれたその気配と、掛けられた声に、反応が致命的に遅れてしまったのは。
腹部にドンッっと言う衝撃。遅れてくる激痛。

「スールードが執着しているって聞いた時はまさかと思ったけど……こんなことなら、貴方を先に始末しておくべきだったわ。もう遅いけれど……これはせめてもの私の抵抗。悪く思わないでね、私も必死なのよ、これでも」
「――～～～っ！！」

上げそうになる悲鳴を噛み殺して一歩前へ。振り向き様に『観望』を構えると、そこに炸裂するナニカ。
衝撃に吹っ飛ばされ、近くに居た誰かにぶつかって受け止められた様な感じ。

「きゃっ！　……だ、大丈夫ですか！？」
「マスターー！！　し、しっかりしてください！！　マスター！？」
「あ……」
「レーメ、レーメはやく！！」
「っ！！　ま、まってろユウ、いま！」
「……エ……ヴォリアアア！！」
「の、のぞむ、落ち着け！　くっ……ええい！！」

飛び交う悲鳴と怒号がいやに耳に残る。
どう……なってる？　状況が掴めない。く……そっ……まず、意識が……。

「く……あああああ！！」

身をよじり、走る激痛で無理やり意識を覚醒させる。
ダメージは……腹か……くそっ……でかい風穴空けてくれやがった……っ！

「マスター！？　無理をなさらないで下さい！！」
「この……バカ者！　無茶をするな！　……『ティアオル』！！」

レーメの声と共に身体が温かいものに包まれ、次いで傷が急速に塞り、痛みが退いていくのを感じる。
周囲を見回し、現状を把握しようと努めると、どうやら世刻がエヴォリアと戦闘、ナーヤがミニオンを牽制している……のか？
俺はというと……ユーフォリアに抱きかかえられる様に支えられているみたいだが……いまいち身体の感触が無い。
自力で立とうとして、がくりと膝が落ち、慌てた様子のユーフォリアに支えられた。

「動いちゃだめですよ。受けた傷が大きすぎたせいで、傷が塞がっても身体にマナが足りていないんです。……ゆーくん、お願い。『マナリンク』！」

彼女の言葉に続いて、柔らかなマナに包まれ、それが流れ込んでくる感覚。

マナが四肢に染み込んで行く。『マナリンク』それ自体によるマナの譲渡量は然程多くは無い。それでも何とか一人で立てる程度には……と思い、ユーフォリアに礼を言って離れたところで一瞬ふらりとした。

ああ、やっぱりそう上手くは行かんか。……けど、こうしていても埒が明かない。今必要なのはここでの戦いを終わらせることだ。その為にも、こちらの最大戦力であるユーフォリアを、俺に付きっ切りにしておくわけにもいかない。

そう思って、彼女へ世刻達の援護に向かう様頼もうとした時だった。殲滅速度が落ちた分、また若干増え気味になったミニオン達の壁の向こう側から聞こえる剣戟。

一体なんだと思う間も無く、ミニオン達の壁を越えて、黒い影が飛び出してきた。

「祐、生きてる!?」

開口一番そう言い放ったのは黒の巫女。

俺の前で急ブレーキをかけて立ち止まり、ふわりとその長いツインテールが揺れる。

「……ゼゥ？」

「私だけじゃないわよ」

ゼゥの言葉に同意するかのように、俺達の身体を新緑のマナが包

み込み、戦いで負った傷を癒していく。
魔法――ハーベスト――の効果に遅れて飛び出してきたのはポゥ……だけじゃなく、ミゥも、ルゥも、ワゥも居て。

「望ちゃん、無事!?」
「望、祐、大丈夫か!?」

そんな声に振り向けば、永峰とソルラスカ、その後ろにルプトナとカティマが続いてきているのが見て取れた。

「他の皆は?」
「俺達は先行だ。直ぐに来るぜ」

俺の問いに答えたソルラスカの言葉に、思わず安堵の息が漏れ、その拍子にがくりと力が抜ける。
まだ戦いは終わっていないのだから、しっかりしろと自分に言い聞かせるも、一度力の抜けた身体は言う事を聴いてくれない。どうやら自覚していないだけで、そうとう精神的にも肉体的にも来ていた様だ。
そんな事を考えると、ナナシに「下手をすれば死んでいたのですから、当然です」と窘(たしな)められた。うん、ごめん。せめて意識だけは保っておかないと。
そう思い、もう一度気を張ろうとした時だ。しゃらんという音が聴こえ、次いで世刻とやり合うエヴォリアから、こちらにむけて放たれる光弾。
先程自分の身を貫いたのと同じものだろうか。そんな考えが頭を過ぎり、一瞬、そう、ほんの一瞬だが身体が上手く動かず、『観望』を構えるのが遅れてしまった。
結果としてそれは俺に届く事は無かった。咄嗟に『観望』を構えようとした俺と、迫り来る光弾の間に、ミゥが立ち塞がって障壁(オーラフォトンバリア)で

防いでくれたからだ。

「ちっ……ここは退いてあげる！」

その様子に、流石にこちらに援軍も来て、潮時だと思ったのだろう。エヴォリアはそんな捨て台詞を吐いてミニオンを世刻にけしかけ、その隙に溶ける様に消えて行く。

『観望』の力を最大限に引き出し、気配を探る。……うん、流石にもう一度奇襲はなし、か……？

「先輩、大丈夫ですか！？」

「祐、生きておるか！？」

エヴォリアを撃退したからか、こちらの方へ駆け寄ってくる世刻とナーヤ。

心配かけて悪かったな……なんて返そうとした所で、一瞬目の前が真っ暗になる。……あ、やべ。気が抜けたら一気に来た……。

「……あーうん、皆のお陰でなんとか……生きてるよ。……けど、悪い……」

「構わぬよ。後は任せて休むがよい」

ナーヤの言葉に頷き、途端に押し寄せる疲労と脱力感。それに逆らわず、流されるように意識を手放す。

まだ周囲にミニオンは残っているのだけれど。それでも、俺がこの時感じていたのは不安ではなく安堵感だったのは、周りに皆が居てくれるからなんだろう。

『魔法の世界』における俺の戦いは、こうして幕を閉じた。

永遠神剣之章：４２．狭間、たゆたう者。

気が付くと、真っ暗な空間の中に居た。……ここは……覚えがある。またあの“夢”だ。

……ってことは、居る……んだろうな、“彼女”が。

そんな風に思った俺の考えを読んだかのように、声が響く。

「くふふっ……久しいの、『渡りし者』よ」

声のしたほうを向けば、まるで始めからそこに居たかのように佇む、ユーフォリアそっくりな少女。

違いはその身につける服や鎧、髪や瞳が漆黒であることであろうか。

「本当に……君は一体……」

「ふむ……言わずとも、察しはついているのであろ？」

思わず漏れ出た俺の言葉に、くすりと笑って目を細める少女。

その顔は「申してみよ」と言っているようで、俺は自分の考えを口にしていた。

「……君は……高位の永遠神剣。恐らくは……第一位……」

「ほぅ……何故そう思う？」

「君は以前、俺に対して『担い手たりえる者』って呼んだ。……である以上、君が永遠神剣であるってのは間違いないだろう？」

おれの問いに、くつくつと笑いながら「まあそうじゃな」と言う少女。

「では……なぜ妾（わらわ）が第一位である、と？」
「……俺の知っている限り、今の君の様に姿を変え、担い手も無しに自ら動いたのは二人……第一位の『叢雲』と『聖威』だけ。そして第二位の『虚空』とトークォが契約を結んだ理由……トークォは姉であるミューギィを捜すために力を欲した。対して『虚空』は担い手が居なければ動けないために、パートナーを欲した……」
「第二位である『虚空』が写し身を顕現できず、第一位である『叢雲』と『聖威』が顕現できる以上、妾もまた第一位である……かの？」

彼女がまとめた言葉に「そうだ」と頷くと、彼女はこちらをじっと見つめた後、楽しそうに再びくつくつと笑う。

「……ふむ。コレは所詮は夢。現実では無い世界。故に妾がこの様な姿を取っている、と言う可能性は？」
「それは……」
「……くふっくふふふっ。まあよい、正解じゃ、『渡りし者』よ。褒美に妾の事を少し教えてやろう」

そういった少女は、手を胸の所へとやり、見惚れそうな笑みを浮かべて、自らを誇るかのように悠然と言い放つ。

「……妾の名は『調和』。永遠神剣第一位にして、数多ある永遠神剣の中で、唯一『鞘』から生まれた永遠神剣。それが、妾じゃ」
「……『鞘』……から？」

……予想していたとはいえ……いや、予想していた以上の事に驚いた。
永遠神剣の最高位にして、“コズミックバランサー”とも呼ばれる原初たる神剣は三本。『天位・永劫』、『地位・刹那』、そして

『鞘・調律』。

『天位』と『地位』は対立関係にあり、『鞘』はその両者の力を抑えるためにあるという。

この世界に存在する永遠神剣は『天位』と『地位』から生まれ、天位属性の神剣と地位属性の神剣もまた対立しているのだとか。

……まあ、天位属性の『運命』を持つローガスが、地位属性の『叢雲』の化身であるナルカナを気にかけていたり、『叢雲』を封印するために最初に動いたのが、同じ地位属性の『聖威』であったり、天位属性の神剣を持つエターナル同士で、ロウとカオスに分かれて争いあったりとか、一概には言えないのだけど。

ともかく、そんな原初神剣のうち、『天位』と『地位』の力を抑える神剣より生まれた唯一の神剣にして、原初神剣を除けば永遠神剣達の最上位に位置する第一位の神剣とは……果たして、どれほどの力を持っているというのか。

けれど、なるほどとも思う。

エターナルである『聖賢者ユート』と『永遠のアセリア』との間に生まれた、生まれながらのエターナルであるユーフォリア。彼女と『悠久』は力の衰えた『調律』が、その力を取り戻すために転生した姿だったはず。

目の前の彼女が今の姿で現れた時に言っていた言葉……『この姿は妾にとっても馴染む』ってのは、こう言う事だったのか。

「でも……そんな君が何故『世界の狭間』なんて所に？」

「なに、母たる『調律』が力を失って転生した折、妾の事を目障りに思うた他の神剣達に封印されただけじゃよ」

「目障り？」

「左様。あ奴らにとっては、あ奴ら自身ではない第三者に、パワーバランスを取られる事が気に入らなかったのであろう」

彼女の言葉に「なるほど」と頷き、この際なので、疑問に思って

いた事を訊いてみることにする。

「……君が『ログ領域』で俺に“世界を繋ぐ扉”を開かせようとしているのは……そこから出るため、なんだろ？」

俺の問いに彼女は「うむ」と頷くと、「それがどうかしたかの？」と訊ね返してくる。

「出た後は……閉じ込めた連中に復讐でもするのか？」

次いで訊ねた問いに対しては、ふるふると頭（かぶり）を振った。

「……確かにあ奴ら……特に妾をここに閉じ込める中心となった『虚空』や『運命』、『聖威』は腹立たしくはあるがの。……正直、今はあ奴らはどうでもよい」

「じゃあ、出たら何を？」

「うむ。……妾は、ぬしの旅に同道したいと思うておる」

「……別に俺が、必ずしも君の担い手になる、ってわけじゃないぞ？」

「わかっておる。現状ではぬしは、妾の担い手になりたいとは思うておらぬことも、な。妾としても、妾の担い手になる、と言う事を軽々しく考えては欲しくはないので其れで良い」

彼女はそこまで言うと一度言葉を区切り、今度は先程までの様な楽しげな笑みではなく、静かで、優しげな微笑を浮かべ――その、先程までの彼女とも、ユーフォリアの雰囲気とも違う微笑みに、不覚にも少しドキリとした。

「そしてそれでも、じゃ。……ここに永く居ると、時折“世界を隔てる壁”が揺らぐのか、“壁”の向こう側の世界が垣間見える時が

あっての。それは妾達の属する永遠神剣の世界であったり、全く別の世界であったりする。……この何も無い場所に永らく閉じ込められ、時折そのような世界を見させられておるとな……『探求』でなくともそれらの世界を見聞きしてみたい、と思うのよ」

「だから、ぬしと共に様々な世界を旅してみたい」と、今度はまた楽しげにくふふと笑う彼女は、本心からそう言っているようで…気が付けば俺は、「解ったよ」と、強く頷いていた。

「……ありがとう、『渡りし者』よ。……ん？　……ふむ、どうやらそろそろ目覚めねばならぬ時間のようじゃな」

彼女のその言葉を切欠とするかのように、周囲の暗闇の空間がゆらりと揺れる。

「……最後に、妾からぬしへ宿題じゃ」

「宿題……？」

「うむ。次に逢うまでに、妾の“この姿”の時の名を考えておくがよい」

その予想外すぎる『宿題』に、思わず「は？」と間抜けな声が出ていた。

そんな俺の様子に、彼女は満足げに、楽しげに笑う。

「くふふっくふふふっ。良き名を期待しておるぞ……祐？」

「っておい、そんな勝手な！」

「ほれ、早う目覚めねば……“間に合わなくなる”ぞ？　では、また逢おう」

…

……

……

“眼を覚ます”。

いや、どちらかと言うと飛んでた精神が肉体に戻ってきた、とでも言うのか……夢とは思えない鮮明な夢と、寝ていたとは思えない疲れた気分に嘆息しながら身体を起こす。

「あら、眼が覚めたのね？」

掛けられた声の方をみると、白衣を押し上げる豊かな双丘。

……。

「ああ、ヤツィータか」

「その判断の仕方はどうかと思うんですが……」

「うむ」

「まったくです」

ぽつりと呟いた言葉に帰ってきた反応に、ヤツィータとは反対の方を向けば——ちなみにヤツィータは苦笑していた——若干呆れ顔のフィアと、彼女の両肩に座るナナシとレーメ。

いやまあだって仕方ないじゃないか。眼に入ったんだもの。

……ここは……保健室か。

「それで……まあその様子だと精神的には大丈夫そうだけど、身体の方はどう？　まだあれから一日しか経っていないから、なんだったらもっと休んでいてもいいのよ？」

ヤツィータの言葉に、俺の動きと思考が止まる。
この世界での戦いは終わった。それは確か。けど、その後は？
まだ重大な事項が一つ、残っているじゃないか！

『早う目覚めねば“間に合わなくなる”ぞ？』

『調和』の最後に聴こえた言葉が思い出される。あれは、そう、本当にそのままの意味なんだろう。
それに思い至った以上、ぐずぐずしていられない。すぐに支えの塔へ行かないと……。
だが、ベッドから起き出したところでくらりとした。……くそっ……まだ本調子じゃないか？

「ちょっと祐君。まだ無理しちゃ……」
「悪いヤツィータ、そうも言ってらんないんだわ。フィア、ナナシ、レーメ。悪いが手分けしてユーフォリアとミゥを捜してきてくれ」

俺の様子にナナシとレーメが事態に気付いたのか、ハッとした様子で、フィアは……説明していないのに、ただ一言「わかりました」とだけ言ってくれて、保健室を駆け出て行く。
そんな俺達の様子に、ヤツィータははぁと小さく溜息を吐いた。

「解ったわ。何かあるのね？　……まだ本調子じゃないでしょうから、無理だけはしないようにね？」
「……止めるか聴くかしないんだ？」
「あら、聴いたら教えてくれるの？」
「……あー……すまん。教えるのは吝かじゃないんだが、正直時間が無い」

思わず口ごもった俺に、ヤツィータは「仕方ないなぁ」と言った

感じで苦笑する。
そんな彼女に「悪いな」と言って、まだ若干ふら付きそうになる身体を叱咤しながら、保健室を後にした。
……暁絶（あかつきぜつ）が理想幹に向けて放つ“滅び”の意思を乗せた意念の光は跳ね返されて、この世界の『支えの塔』へと向かう。それが塔へ当たれば、間違いなく塔は崩壊。連鎖的に世界が壊れ、今回『光をもたらす者』を撃退した意味がなくなってしまう。
恐らくもう、意念の光を放つこと自体を止めるのは間に合わないだろう。
……ならば、なんとしても……この世界に跳ね返ってくる意念の光を、防がなければならないんだ。

永遠神剣之章：４３．滅びの意思、意念の光。

保健室を出て、すぐに『支えの塔』へと向かえる様校門へ行きながら、三人へ念話でその旨を伝える。
校門へ着いて待つことしばし、途中で合流したのか、フィアとナナシ、レーメと共に、ミゥとユーフォリア、そしてナーヤが来た。

「……ってナーヤも連れて来たのか」
「うむ。事情はナナシ達から聴いた。塔へ行くのならば、わらわも居た方が良いじゃろう」
「……解った。じゃあ早速だけど、塔までの最短距離で先導を頼む」
「任せておけ！」

もしもの時には、すぐにものべーを出して避難してもらわなければならない為、フィアには残ってサレスに事情を説明しに行ってもらい、残る俺達はナーヤの先導で塔へ向かう。
道中、ナーヤが「それにしても」と口を開いた。

「ほんとうに、その暁とやらは、『意念の光』を理想幹へ向けて放って、それが跳ね返ってこの世界に来るのか？」
「絶対、とは言えないけどな。十中八九は間違いないと思う。それに仮に何も無かったとしても、今は起こると想定して動いた方がいい」
「……常に最悪の事態を想定して動け、ですね」

ユーフォリアの言葉に「そういうこと」と頷く。
今の俺達にとっての“最悪”は、跳ね返って来た意念の光の迎撃にすら間に合わず、それが塔へと激突すること。そうなればもう助かる術は無い。だから最低でも、跳ね返ってきた意念の光を迎撃す

るところまで間に合わせなければならない。
　ユーフォリアが既にここに居る以上、『原作』の様な、奇跡的な幸運などに僅かでも期待するわけには行かない。……いやむしろ、このタイミングで“夢”を見て、『調和』に「間に合わなくなるぞ」と忠告をしてもらったこと事態が、既に奇跡的な幸運と言っていいだろう。
　贅沢を言えば、意念の光それ自体を放たせないと言うのが一番なのだが……それはまず無理だろうから。
　……やはりここで生まれ育っただけあってか、俺達の思いも寄らぬルートを通り、転移装置を駆使してザルツヴァイを駆け抜けることしばし、ようやく――それでも思っていた以上に早く――塔の側へと着いた俺達を待っていたのは、起動してそのシステムを稼動させている塔の姿だった。

「ええい、何故塔が起動しておる！　修理が終わるまでは休止させておくはずだと言うのに！」
「暁だよ！　やっぱやる気だ、あの野郎！」

　想定どおりと言えばそうなのだが、状況としては決して良くない状況に、ナーヤと共に悪態を吐き合ってから塔へと駆け入る。目指すは中枢。システムに介入して意念の光を放つには、そこしかないからだ。
　だが……駆けども駆けども駆けども辿りつかねええ！！
　どうなってやがる！！

「……恐らくは、強力な結界で隠蔽されているのであろう」

　レーメの推測に、そういえば暁の神獣の『ナナシ』はそう言うのが得意だったか、と思い至る。
　……いいだろう、だったらこっちは『視つけて』やる！

「『観望』、力を貸せ！」
＜……承知＞

脳裏に響く『観望』の言葉と共に、俺の前に神獣のノーマが現れる。そしてノーマが一度唸り声を上げたのと同時に、俺の右目の視界が変わった。これは……ノーマが『視て』いる視界か？

それを証明するように、俺が首を右に動かせば、ノーマも追従するように顔を動かし、それと同時に右目に移る視界が動く。

そしてもう一度ノーマが唸り声を上げると、右目の視界は更に変化した。

いつもよりも濃密に。今までよりも鮮明に。

俺の右目の視界をマナの動きが、密度が、質が、色が、埋めていく。そしてそれは、直ぐに気付いた。目の前にある、半透明の壁。

「……これが結界か……！」

突破するための“綻び”を捜す。

どんな小さなものでもいい。切欠さえ掴めれば。突破する糸口さえあれば。間に合わせるために。捜せ捜せ捜せ捜せ！

「……見つけた！！」

それは小さな小さな綻び。堅牢な結界に入った僅かなズレ。

だがその時、大きく塔が揺れ、次いでどこかでナニカが爆発するように破砕する音が響いた。

「なっ……！　何じゃ今のは！？」
「まさか今のが！？」
「……外にもの凄い“力”を感じました。多分、意念の光だと思い

ます」

ナーヤとミゥの疑問に、ユーフォリアが答える声が聴こえた。

「くそっ！」

綻びから結界を壊すために『観望』を現す。堅牢な結界をも切り裂けるよう、ただ鋭く。

「……神剣『フラガラッハ』！」

刀身自体が発光するほどに込められたオーラフォトンと綻びが接触したその瞬間――バリィンッと、まるでガラスが割れる様な音を立て、結界が崩れ去り、俺達の前にあった支えの塔内の風景は一変し、先程まで幾ら進んでも辿り着かなかった、中枢へ向かう道がそこにあった。

「よし、行こう！」

「はい！」

中枢――メイン制御室へ向けて駆けながら、これから各自が行う事を説明する。

中枢に着いたらナーヤは真っ先に『支えの塔』が暴走しないように調整を、そして跳ね返ってくるだろう意念に対しては、俺が最初に相殺を狙う。ミゥにはその時に、俺にマナリンクでマナの供給をしてもらう。

だが、俺の今の状態……いや、例え完調であったとしても、俺の一撃では相殺は不可能だろう。なので、ユーフォリアにはその相殺し切れなかった分を打ち消してもらう。

それを説明し終えたのと丁度同じくして、メイン制御室の扉へと

辿り着き、蹴破るように開け放って雪崩れ込んだ。

「なっ！？　……先輩？　それにナーヤ？」

「む……お前達か？　ナナシの張った結界を越えた者というのは？」

部屋の中へ最初に入った俺とナーヤの姿に、世刻と暁がそう声を掛けてきた。けどとりあえず今は放っておく！

「ナーヤは塔の制御を！　ナナシ、レーメ、ミゥ、やるぞ！」

「うむ、塔は任せよ！　……ええい、それにしても、制御室の壁に大穴を空けおって！」

「イエス、マスター！」

「うむ！　ユウ、マナの供給があっても現状の調子では組み込める限度は百柱ずつだぞ！？」

「はい！　祐さん、行きます！　『マナリンク』！！」

各々の返事を聞き、ミゥにマナの供給を受けながら、それと己のマナと魔力を引っ張り出して“力”を創る。

「……イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……」

唱えるは、己が内へと呼びかけ、起動させる始まりの鍵。

途中、暁が世刻に「何故俺とお前の神獣がもう一人ずつ居る？」と訊いていたのを流しつつ、術式を組み上げていく。

『光』と『闇』を百柱ずつ、顕現させ、混ぜ合わせ、包み込み、繋ぎとめる。

そして、俺の手の中に、赤黒く輝く長大な槍が顕現するのと、跳ね返って来た意念の光がこの世界に現れたのは、ほぼ同時だった。

「……まったく、あれもそうじゃがお主のソレも何という力じゃ」

「ナーヤ……塔は？」
「問題ない。システムは抑えたのでもう暴走の危険はない」
やるべき事を終えたナーヤの言葉に、ほっと息を吐く。あとはあれを何とかするだけと、制御室の壁に空いた大穴から見た空は、意念の光の影響か極彩色に染まり、禍々しさすら放っていた。
迫り来るは、圧倒的な“滅び”の気配。
「あれだけの力を鏡面反射するなんて……いえ、それよりも……まるでそれを知っていたかの様に動く貴方達は、何者なのですか？」
「それは後だ。……つっても、お前達が俺達の話を聴く気があるなら、だけどな」
そう俺達に語り掛けて来たのは、暁の神獣である『ナナシ』。それに俺は首を横に振って答え――己が手の内にある、俺の持てる最大の“力”を、迫り来る“滅びの意念”へと解き放つ！
「――神槍『スピア・ザ・グングニル』！！」
衝突は一瞬。次いで訪れる、無音の衝撃と閃光。
“滅び”の意思の込められた意念の光と、“破壊と消滅”の属性を持つスピア・ザ・グングニルがぶつかり合い、無音にして激烈な衝撃と閃光を撒き散らし、その余波が離れたここにも届いた。
「くっ……どうなってる！？」
世刻の言葉に促されるように、光の治まった外を見ると――変わらぬ極彩色の空と、先程よりは小さくなりながらも、こちらに迫る意念の光。

「駄目だった！？」
「まだだ！　ユーフォリア！」
「はい！　任せてください！」

返事と共にユーフォリアは壁の穴の付近まで近づくと、意念の光に向けて神剣を構える。
そしてその背後に現れる、二頭の竜。

「ゆーくん、一緒に頑張ろうね……　全力全開、ゆーくんアタックー！！」

そんなユーフォリアの声と共に、彼女の神獣から放たれた青と白の光の奔流は、意念の光をも飲み込み、その威力をさらに削る。

「っミゥ！　世刻！　彼女にマナを！」
「……っ！　はい！　『マナリンク』！！」
「わ、解った！　……天界の煌きが力を増幅する……『セレスティアリー』！」

俺の声に反応したミゥと、戸惑いながらも世刻が、ユーフォリアへとマナを送る。二人が今の『ダストトゥダスト』の範囲外に居てくれて良かった。
そしてそれを受けたユーフォリアが、

「行きます！　……原初より終焉まで！　悠久の時の全てを貫きます！」

形状を変えた『悠久』に飛び乗り、

「『ドゥームジャッジメント』！！」

膨大なマナに包まれて突貫する！
次の瞬間、俺の時よりも、先程の『ダストトゥダスト』の時よりも大きな衝撃と閃光が辺りを満たした。

「くっうううぅぅんむむむ！！！　てえええい！！」

ユーフォリアの気合の声に、閃光のために伏せていた眼を向けると、意念の光と真正面からぶつかり合い、拮抗するユーフォリアの姿。

……『原作』では威力の落ちていない意念の光を防ぎきったユーフォリアが、それより劣る今の意念の光と拮抗しているのは、やはり『神名』のせいだろうか。

つまり、『原作』ではこの世界に来たばかりで『神名』の事を知らなかったために、『神名』に制限されていても本来の全力に近い力を出した――結果として記憶を失ってしまったが――のだが、今のユーフォリアはすでに『神名』の事を知って時間が経っているために、全力は全力でも、“『神名』に制限された中で出せるだけの全力”になってしまっているのだろう。

――このままじゃ、下手をすれば押し負けてしまう。

「ナナシ！　レーメ！」
「はい！　レーメ、行きますよ！」
「解っておる！　ナナシ、合わせよ！」

俺が促す前に既に準備していた二人。
精神を集中させ、研ぎ澄ませていくに従い、俺の腰につけた戦術オーブメントが唸りを上げ、事象を想像し、現象を創造する。

「『テンペストフォール』！！」

声と同時に歪む空は光を捻じ曲げ、極彩色の空を赤く染め上げ、ユーフォリアと拮抗する意念の光の、その流星のごとき尾に、天墜の一撃を振り下ろす！

炸裂した歪みは大気を、空間を、世界を蹂躙して、意念の光に込められた力を抉り取っていく。

そしてそこに追い討ちをかけるように――二条の閃光が突き刺さり、爆炎をあげた。

「クロウランス、もう一度じゃ！」

ナーヤの声に反応し、いつの間にか彼女の背後に顕現していた赤色の巨体、彼女の神獣である、魔法機械のゴーレム『クロウランス』が、その肩口に付けられた二門の砲門から、レーザーにも似た灼熱の閃光を意念の光に向かって撃ち放った。

それを視ていた俺を、二度マナが包み込むのを感じ、首を巡らすと世刻とミゥが頷いて。

俺はそれに頷き返すと、今だ若干ふら付きそうになる身体を、壁の穴のところまで進めた。

本来なら、ここからだとユーフォリアに届く距離じゃないだろう。けど、大気に散らした『観望』を導火線の役割にすれば……！

今しがた受け取ったマナと、己の残り少ないマナを搾り出し、練り上げ、流し、声を張り上げる。

「……届けっ……ユーフィー、行けえええ！！」

上手く届いただろうか？　……うん、きっと届いただろう。　一瞬、彼女がこちらを見て笑った気がしたから。

「っ！！　……いくよ、ゆーくん！　突っ切れえええええええ！！！」

そして彼女の裂帛の気合と共に、包むマナが強く輝いて――。

永遠神剣之章：４４．世刻望、暁絶。

マナと意念の光がぶつかり合う閃光が収まったそこには、すでに極彩色の空は無く、晴れ晴れとした青空が広がっていた。

「……助かった……のか？」

「……どうやらその様だな」

後ろから聞こえた、そんな世刻と暁の声に振り向くと同時に、今しがた意念の光を打ち破ったユーフォリアが俺の隣に降り立ち、逆側にミゥが並び、俺の身体を支えてくれた。……正直有り難い。

さて、と。

「……さて、暁絶（あかつきぜつ）、選択肢をやろう」

「……先輩？」

「……何？」

俺の言葉に困惑気味な世刻と、怪訝な顔をする暁。まあ当然だろうな、と思いつつ、俺は言葉を続ける。

「簡単な事さ。俺達と共に戦い“奴ら”に勝つか、俺達と袂を分かち負けるか」

「……お前、何を知っている？」

「っ！　絶！」

「……まぁ世刻、とりあえず俺に話させてくれないか？」

スラリ、と剣を抜き、突きつけてくる暁に声を荒げる世刻を宥め、俺はミゥから身体を離し、その眼光を真正面から受け止める。

……やれやれ、正直自力で立ってるのもきつい様な状態なんだけ

どな。

「色々、さ。『枯れた世界』。『理想幹神』。お前の目的。お前の取ろうとしている方法……『滅びの神名』」

「……っ！」

「何故それを!?　……マスター、あの者は危険です……！」

「……確かに、知りすぎだな。……俺の邪魔をするならば……斬る」

そう言いつつ、腰溜めに神剣を構える暁。それに対して皆も警戒しようとしたが、それに俺は苦笑しつつ、頭（かぶり）を振って止める。

「言っただろう。『俺達と共に戦い“奴ら”に勝つか、俺達と袂を分かち負けるか』って。お前のやり方じゃ、上手くいかない」

「何だと!?　何を根拠に！」

「いや、そもそも……上手く行ったとしても、お前が死んでしまっては意味が無いだろう」

「し――死ぬ、って、どう言うことですか、先輩？　……どう言うことなんだよ、絶!?」

「……」

そう言った俺の言葉に反応したのは、暁でも彼の神獣たるナナシでもなく――世刻だった。

まあ、無理も無い、と思う。親友が、その目的を果たしたら死ぬ――なんて事を聴かされたら。そしてそれを、当人が否定しなかったら。

そんな世刻へ「落ち着け」と声を掛け、

「『滅びの神名』だよ」

「滅びの……神名？」

呆然と、鸚鵡返しに問いかけてくる世刻に「ああ」と頷いて返す。

「その名の通り、『滅び』と言う概念を内包した神名さ。そしてそれは、その力を使えば使うほどに暁自身も蝕み、やがては死に至る」

「……その通りだ。最早俺には時間が無い……だからこそ！　俺はやらねばならないんだ！」

「その『滅びの神名』、それ自体を何とかする方法がある、としても？」

俺の言葉に、世刻も暁も、暁のナナシも、揃って動きを止めた。

そして次の瞬間――

「そ――そんな方法が有ると言うのですか！？」

誰よりも早く、暁のナナシが文字通り飛ぶ様に詰め寄ってくる。

その余りの勢いに、思わず一歩退きそうになってしまった。世刻も暁も言葉を発する機会を逸したのか、俺の言葉を固唾を呑んで待っている。

「あ、ああ。三つほどな」

「そん……なに？」

「尤も、その内一つは根本的な解決にならないし、一つは時間的に無理……だろうけどな。まぁ、説明だけはしておくと……一つは、この『時間樹』そのものから脱出すること」

そう言うと、それまで黙って事の成り行きを見守っていたユーフォリアが、そっか、と声を上げ、当然と言うか、皆の視線が彼女に集まる。

多分、前に俺がした説明を覚えていて、思わず声に出たのだろう。

「えっと、神名はこの時間樹限定のルール。だとすれば、ここから出ればその『滅びの神名』も効力を失って、身体に影響を及ぼす事はない……ですよね？」
「神名が……この世界樹限定？　どう言う事だ、それは？」

そんな疑問の声を上げる暁に、「……ま、“そう言う物”なのさ。神名ってのは、な」とだけ言っておく。
……今はまだ、詳しく話さなくてもいいだろう。この世界の仕組みなんてのは。

「ちなみにこの方法は根本的な解決にならないし、今すぐ実行する事も出来ない。その理由は……」
「……目的を果たすためにまたここに戻ってきた場合、『滅びの神名』の効力が復活する……ですね？　……いえ、それ以前に、時間樹そのものから出る手段を探すところからでしょうか」

俺の言葉の先を継ぐ様に言ってきた、暁のナナシへと頷いて返す。

「正確に言うなら、出る手段自体には当てが有るんだよ」
「……それは？」
「……当てってのは、永峰の神獣、ものべーだ」
「……成程、学園か」

俺の言った『ものべー』と言う名前に、今すぐそれを実行できない理由を悟る暁。
そう、ものべーの背に物部学園が乗っており、一般の生徒達が居る以上、ものべーを使って時間樹の外に出る、なんて方法は取るわけにはいかない。

「じゃ、じゃあ、一度『元々の世界』に戻って、学園を降ろしてし

まえば？」

「無理じゃ。どこかの馬鹿が『意念の光』なんぞを放つから、支えの塔に深刻なダメージが出たわ。……まぁ、暴走やら自動停止やらする前に制御できた分、多少はマシじゃろうが……それでもやはり、今すぐに『元々の世界』の座標を割り出す事はできん」

これならどうかと訊いてくる世刻に対しては、ナーヤが首を横に振り、その言葉に暁と彼のナナシが苦い顔をした。まぁ、知らなかったとは言え、自業自得といえばそうなんだが。

「まあ、塔が直るのを待っても良いんだけど……暁、お前の身体があとどれぐらい持つのか判らない以上、あまり悠長に考えられないだろ？

……って訳で二つ目。これは時間の関係上無理な方法だが……暁自身が『滅びの神名』の力よりも強くなること」

「……その言い方だと……今の力では到底無理の様だな」

「そんな……今手を合わせたから解る。今でも絶は凄く強いのに、それでも到底足りないって言うんですか？」

確認するように訊いてくる暁へ頷いて返すと、続いて世刻が声を上げ、それにもう一度頷く。

確かに世刻や俺から見れば、暁は充分に強いんだろうから、そう訊きたくなるのは解るけどな。

「少なくとも、神名から力を貰っている間はだめだろうな。……そう、せめて、“神名に力を抑えられる”レベルまで、地の力を上げないと」

「……力を抑えられる……？」

意味が解らない、と言った風に呟くナーヤに苦笑し、前にミゥ達

やユーフォリアに説明した、ブースターとリミッターの話をしてやると、凄く驚いた顔をするナーヤ達。

ちなみに、ユーフォリアがその“力を抑えられる”存在である事は言ってはいない。

まあ、彼等なら問題は無いと思うが、余りに強すぎる力が側にあると、ついそれに頼りがちになってしまうからな。……とは言え、さっきの意念の光との攻防を見れば、ある程度は察すると思うけど。

「……二つが現状無理だという事は解りました。では、最後の方法は？」

「浄戒（じょうかい）」

俺の言葉に一瞬ビクリとする暁とナナシ。……まあそうだろう、『浄戒』は、次に彼等が俺達に示唆しようとしていたものでもあるのだから。

「……祐さん、『浄戒』って何ですか？」

「『浄戒』の神名。かつて『ジルオル』がこれを使い、神々を皆殺しにした、神殺しの神名さ」

『ジルオル』の言葉にビクリとする世刻と、目を見開くナーヤ。

そんな彼らを横目に見ながら、言葉を続ける。

「浄戒が神殺しと呼ばれる所以……それは、浄戒には相手の神名そのものを削り取ってしまう力があるからだ。だからこそ、その力を上手く使えば、暁の『滅びの神名』のみを削り取る事が出来る」

そこで言葉を一度切り、世刻の顔――眼を見る。

……どうやら、俺の言いたい事は察しているようで、彼は一度こくりと頷いた。

「もう解っているようだけど……この方法を行うには、世刻。お前の協力が何より不可欠だ。そして俺が示せるのはここまで。浄戒を使うのならば……その力を得るのも、使うのも、世刻、お前自身だからな。

……さて、どうする世刻？　今も言ったが、浄戒はお前の前世が振るった力。それを受け入れる事が、お前自身に何をもたらすのかは俺には解らない。無責任のようだけど、な」

「俺は……俺は、それで絶が救えるのなら、その方法を取りたい。俺の手で、親友を助けられるのなら……俺は前世の力だって使ってやる！」

世刻の強い意思の篭った言葉に「そうか」と頷き、今度は暁の顔を見る。

彼は……世刻の言葉に、嬉しそうな、哀しそうな顔をしていた。

「そして、どうする暁？　世刻はこう言っているが、それでも尚お前は世刻の命を狙い、その力と命と己の命をもって、復讐を目指すか？　それとも、俺達と共に来て、未来を取り戻すか？」

「……『奴ら』に復讐をするのは、俺だけの意思じゃない。俺の世界全ての意思だ」

「勘違いするな、暁」

俺の言葉に、何を、と訝しげな顔をする暁。

どうにも彼は、俺が復讐を諦めろと言っている様に感じている様で。

「別に俺は復讐するな、なんて言ってないぜ？　むしろ、『連中』は倒すべきだと思っている。俺がお前に言いたいのは、やり方を変えたらどうだ？　って事さ」

「やり方を……？」
「そうだ。第一今お前が取ろうとしている方法だと、やつ等を倒すための力を放った瞬間お前は死ぬ。……それで果たして復讐が成ったと言えるのか？」

そう言うと、怪訝そうな顔をする暁。まあそうだろうな。自分の命を掛けた復讐の方法が間違ってるって言われたら。
まあ、彼の方法を否定するのは、実際そう思っているのもあるが、半分は仲間を……世刻を殺させたく無いって言う俺の我侭でもあるんだけど。

「だってそうだろう？　お前が死んだら、誰がその攻撃で奴等を倒せたか確認するんだ？　それで倒せてなかったらどうする？　それでもお前は己の命を使った事を納得して消えていけるのか？」
「そんな事は……！」

歯噛みしつつ、悔しそうな顔をする暁。……彼も、自分が取ろうとしている方法が最善じゃない事ぐらい、解っているんだろう。それでも尚、それしか取る方法が見つからなかった、か。

「……ああ、お前がその方法を取らなかったのは、『滅びの神名』があるせいだろう？　だからこそ、俺達と来ないかと言ってるのさ。戦いにおいては……生きていれば負けじゃない。生きていれば、強くなって奴等を正面から打ち倒す力を得ることも出来るだろう。奴等を完全に打ち倒せたと確認する復讐の方法も見つけられるだろうさ」
「……」
「……マスター……」

深く考え込む暁を心配するナナシの声が響く。

そんな中、世刻が暁の前に進み出て、彼をひたと見つめて、言う。

「絶、俺達と一緒に行こう。お前の『滅びの神名』は俺が絶対に何とかするし、お前の目的……聞く限りじゃ、復讐なんだろ？　それも手伝ったって構わない。……お前には関係ない、なんて言うなよ？　だって、俺達は親友だろ！」

「望……」

「……ってことさ、暁。世刻は覚悟を決めた。お前のために力をつけ、力を振るう覚悟を。お前はどうする？」

数瞬の沈黙。場を支配する静寂。それを破ったのは、暁の「ふぅ」と言う息を吐く小さな音だった。

「……確かに、現状それがベストな選択の様だな」

「っ！　それじゃあ！」

「ああ、よろしく頼む、望。……それと、すまなかった」

暁の言葉に破顔する世刻。そんな様子に、自然と俺達の表情も和らいでいた。……うん、良かった良かった。

……さて、念のためもう一度訊いておかないと、な。

しつこいぐらいだけど、彼の意思を訊いて、固めておかなければ。自分で狙ったこととは言え、こうなった以上、別の要因はともかく、世刻が暁との戦いを通じて前世の力に更に目覚める事は無いだろうから。

「世刻、本当に良いんだな？」

「はい！」

力をつけること、力を振るうこと。前世の記憶に向き合わなければならないこと。それらを含めた問いに、彼は一言答え、強く頷い

た。

「そうか……だったら、一つだけアドバイスだ。……『前世』を否定するな。拒絶するな。……勿論、何もかも受け入れろ何て事は言わないさ。それで“お前自身”が無くなってしまっては意味が無いからな。……けど、暁を救う為には、その“前世の力”を振るう必要がある事を認め、前世は前世として認めろ」

そこで言葉を切って、世刻の目をじっと見る。……うん、大丈夫、意思の強さは失われていない……と思う。

……まあ、あとは彼と、彼のレーメが考える事か。

「……とは言え、前世の意識に身体を明け渡せって訳じゃない。だから、自分を強く持て。お前は『世刻望』なんだって。きっと皆に言われているだろうけど、前世は前世、お前はお前なんだしな。あとは……お前自身、納得いくまでよく考えてみろよ」

俺の言葉を吟味し、反芻してか、深く頷く世刻。……願わくば、俺の言葉が少しでも彼の助けになればいいのだけど。

丁度その時、俺達の会話が終わるのを待っていたかのように、部屋の外――階下から、俺達の名を呼ぶ声が聞こえてきた。どうやら、皆が来てくれた様だ。

やれやれ……とりあえずは何とか良い方に転んだってところだろうか。

抜けるような青空を見上げながら、俺は一人、小さく安堵の息を吐いた。

永遠神剣之章：４５．進むか、残るか。

あの後――駆けつけてくれた皆に、暁が俺達に敵対するのを止めてくれた事を説明し、とりあえず場所を移そう、と言う事でナーヤの執務室へと移動した。

そこで斑鳩による、世刻と暁への説教が繰り広げられているはずだ。

……はず、と言うのもまぁ、俺は別室の――恐らく来客が滞在するためのゲストルームだろう――ベッドの上に居るからであるのだが。

暁への説得が終わり、皆の声が聞こえたあの瞬間、気が抜けたのか身体が一切動かなくなってしまったのだ。お前はすぐダウンするな、とはソルラスカの弁だ。放っとけ。俺だってそう思ってるよ。

先の戦いでの消耗が完全に回復する前に、意念の光の迎撃で無理しすぎたのが原因だろうことは明白なわけで。……『スピア・ザ・グングニル』。あれの使い勝手は少々考えないといけないかも知れない。……けどなぁ……威力を抑えて使えばいいじゃない、って意見もあるだろうが、あれを使う時は得てして“一撃の重さ”を重視する時。『精霊の世界』然り、今回然り。その時に威力を抑えて撃ってどうするんだ？　って感じだよなぁ。第一威力を抑えたら、それはもう『神槍「スピア・ザ・グングニル」』じゃなく『必殺「ハートブレイク」』だ。いやそれはまあいいんだが。

と、そこで思い至る。スールードと言い意念の光と言い、“一撃の重さ”を重視した割にはあまり効果が無かったよな。……いやほら！　スールードもあれには焦ったって言ってたし！　意念の光もあれで減衰したからユーフォリアも限界以上に力を振り絞る事も無かったんだし！

……なんか言い訳を並べている様で哀しくなってきた。やめよう。

まあそれはともかく。少し今後の事でも考えてみようか。

とりあえず暁の説得に成功し、次に向かうのは『浄戒』のある未来の世界に確定だ。問題は……『浄戒』をどこで使うか、だな。

『浄戒』を使えば間違いなく『相克』が発現し、奴等……『理想幹神』のエトルとエデガが来るだろう。となれば、下手な場所では……少なくともものべー内で使うわけには行かない。一歩間違えれば一般生徒に被害が出てしまう。

……となるとやはり、『枯れた世界』に行くのが妥当か？　暁には悪いが……彼の境遇を世刻に知ってもらった方が、上手く『浄戒』の力を引き出せるかもしれない。まぁ、それは暁自身のためにもなるだろうし、協力してもらおう。

あとは十全な準備を整えてくるだろう奴等に、その場でどこまで対抗できるか、か。神名の影響があるとは言え、ユーフォリアが記憶や力を失っていない以上は、“原作”よりは好転するだろうけど……。やって来て速攻で永峰を連れて行かれたらどうしようも無いからな……。彼女にも一言言っておく必要がある……か？

どちらにしろ、『ログ領域』に入る必要のある俺としては、サレスには協力を頼んでおかないとな。理想幹には行ったけど、ログ領域には入れませんでした、じゃ『調和』に申し訳が立たん。

……あとは……学園の皆、か。

今までも充分危険では有ったけど、これから先危険度は跳ね上がるだろう。できれば皆にはこの世界に残って、『支えの塔』の修理が終わり次第『元々の世界』に帰ってもらいたい所ではあるんだけど……。

……いや、これも皆の意思しだい、か。危険だからといって無理やりに置き去りにする事はしたくない。まぁ、一度元の世界に帰れる事が示唆された以上、着いて来たいってヤツの方が少ないだろうけど。

となると、残る皆のフォローか。……これもサレスとナーヤに頼まないとなぁ。……はぁ。

何だかんだ考える事は山ほど有るな、と思わず溜息を吐いたとこ

ろで、くすくすと笑う声が耳に入り、その声のした方へと顔を向ける。と、こちらを見ていたらしいフィロメーラさんと眼が合った。

「えっと……どうかしました？」

「ご主人様が一人で百面相しているのが面白かったんですよ」

俺の問いに答えたのは、フィロメーラさんの横に並んで座っていたフィア。

っていうか、そんなに表情変わってた、俺？

どうやらこれも顔に出ていたらしく、それはもう、とフィアやフィロメーラさんのみならず、寝ている俺の胸の上にいたナナシとレーメにも頷かれた。

くっ……ちょっと考えている事が顔に出ただけで、別に考えている事を口から駄々漏れにしたわけじゃないからいいじゃないか。

「……ああ、そうだ。フィロメーラさん」

「はい」

「申し訳ないんですが、サレスとナーヤ、それと斑鳩を呼んで来てもらえませんか？」

少々頼みたい事がありまして、と続けると、彼女は頷いて部屋を後にした。

……

……

……

あの後、フィロメーラさんに言われてやってきた斑鳩に、全校集

会を開く旨を伝え、その理由を説明し、サレスとナーヤに頼みごとをした後、「今日はこのまま休んでいくが良い」と言うナーヤの言葉に甘えて、スプリングの効いたベッドを堪能させてもらった。お陰で何とか動けるぐらいには回復したが。

そして翌日。突如告げられた全校集会の通達に、体育館に集められた皆は、一体何の用件だろうと言う雰囲気で、集会が始まるのを待っていた。

ちなみに当然ながら、神剣組の皆と椿先生には、この集会の意図は説明してある。

そんな中、サレスとナーヤ、暁を伴い壇上に上がった俺に視線が集まるのを感じる。……ダメだ。この雰囲気は慣れない。さっさと終わらせよう。

改めて、この雰囲気をいつも感じている斑鳩すげーなと思いながら、眼下の学園の皆へと声を上げた。

「今回皆に集まってもらったのは、皆に選んでもらいたい事があるからなんだ。俺の隣にいるこいつ……暁も、俺や斑鳩会長、世刻達と同じ、『永遠神剣』ってやつの使い手なんだが……こいつは少し特殊で、使い手の命を削って強い力を放つってものだった」

隣に立つ暁を指しながら言った“命を削る”という言葉に、ザワザワとざわめく皆。

その様子をひとしきりながめ、少し落ち着くのを待ってから言葉を続ける。

「暁の姿を、皆は今まで見たことが無かったと思う。というのも、暁は今まで、今言ったその神剣の問題点を何とかするために、別行動していた。……まぁ、ここに居るのを見て察している人も居るだろうけど、その方法が見つかってね」

その方法で確実に上手く行くって保障があるわけじゃないけど、と続け、皆の様子を見ると、真剣にこちらの話を聴いてくれているのが解る。

暁自身は、俺が暁が居なかった理由――まぁ出任せなんだが――を言った時には、まさかそんな理由をでっち上げるとは思っていなかったか、驚いていた様子だったが。俺が馬鹿正直に、こいつは世刻の命を狙っていて――なんて言うと思ったのかね？

まあ暁にしてみれば俺はまだ得たいの知れない人間なんだろうが。ナナシの事とか何も説明してないしな。……まぁ、この集会の後にでも一度ちゃんと話をするべきだろうが。

「そして俺達、神剣を使う者達は、その方法を手に入れて、こいつを助けに行こうと思っている。ただ、恐らく行った先ではまた戦いになるだろうし、その後も何事も無くここに戻ってこれるかは解らない。もしかしたら何かトラブルが起きて、簡単に帰るわけにはいかなくなるかもしれない。

だから、皆には選んで欲しいんだ。この世界に残って『支えの塔』の修理が終わるのを待つか、俺達と共に来るか」

皆が動揺する気配が広がる中、俺の前に居た男子生徒が「一ついいか？」と手を上げた。

「どうぞ」

「じゃあ、質問。この学園も多分、お前達と一緒に行っちまうんだろ？　仮にこの世界に残ったとして、衣食住やその『塔』とやらが直った時に、帰るための方法とかはどうなるんだ？」

「それに関しては手配はしてある。……サレス、ナーヤ」

後ろに控えていたサレス達に声を掛け、一歩下がる。と、入れ替わる様に二人が前に出た。

「ここ、ザルツヴァイで大統領をしておる、ナーヤ＝トトカ・ナナフィじゃ。此度は祐からの要望を受けて、この世界に残る者達が居るならば、『元の世界』へ戻るまでの間の衣食住を保障する事を約束しておる。これはザルツヴァイ大統領としての言葉であり、決して違える事の無い確約である事を誓おう」

「……旅団のリーダーをさせてもらっている、サレス＝クォークスだ。小型だが、我々の所有する世界を移動できる船が有る。先の戦闘で破損した為に現在修理中だが、あと一週間程で直し終わるだろう。人数によっては一度に、とは言えないだろうが、『塔』の修理が終わり、諸君の世界の座標が解り次第、その船で送り届ける事を約束する」

二人はそう言い終ると、俺に一度頷いて再び下がり、俺はそれと入れ替わる様に前に出る。

サレスとナーヤは、至極あっさりと俺の頼みに了承の意を返してくれた。それに、改めて面と向かって話す中で、この世界に来て最初に対した時の様な雰囲気の固さは無く、一連の戦いなんかを通して、どうやら俺の事は信頼に足ると思ってもらえた様で、内心ほっとしていたのは言うまでも無い。

「……って訳で、事実上この世界のトップと言える二人に協力は確約してもらっているから、残った場合も心配する必要は無い。ソレを踏まえて、考えて欲しい。……とは言え、今すぐ決断しろっても無理だろうから、明日、同じ時間にもう一度集会を開いて、その時に答えを聴こうと思う」

そう締めて一度頷くと、椿先生が皆に解散を促した。それを受けて、ザワザワと、思い思いに話しながら、思案しながら体育館を後にする皆。

その背を見送りながら、やれやれと一息吐いた俺の肩を、斑鳩が叩く。

「……皆はどんな答えを出してくるかしらね？」

「さてね。どんな結果にしろ、俺達に出来るのは共に来る皆を全力で守るだけさ」

「……そうね。本当に、そうだわ」

…

……

……

明けて翌日。再び体育館へと集まった学園の皆は、壇上に上った斑鳩へと注目している。

斑鳩は皆の姿をひとしきり見やり、声を張り上げた。

「それでは、皆の答えを聴かせてもらいたいと思います！

昨日、青道君が示唆していた様に、次に私達が行おうとする事も、恐らく一筋縄ではいかないでしょう。それでも尚、私たちと共に来るという人は、挙手をお願いします！」

響き渡る斑鳩の声がシンとした空間へと溶け込んだその次の瞬間、俺は正直言って、自分の目で見た光景が信じられなかった。

俺としては、せいぜい世刻のクラスの連中あたりが手を上げるぐらいだろうと思っていた。

けど、蓋を開けてみれば、……一人も、居なかったのだ。

手を上げていない者は。——それは偏に、全員が共に来ると言っていると言う事で。

その光景に、俺だけじゃない、他の皆も、壇上の斑鳩も驚いた顔をしていて。

「ちょ、ちょっと待って、皆！　見たところ残る人が誰も居ないみたいだけど、本当にいいの？　今まで他の世界に行っていたのは“帰るため”だったけど、次に行くのはそうじゃないのよ！？」

そんな斑鳩の言葉に、生徒の誰かが声を発した。「けど、学園の仲間を助けるためなんですよね？」って。

それに続くように、続々と皆が言葉を紡いでいく。

「何ができるって訳じゃないだろうけど、仲間を助けたいのは俺達だって一緒です！」

「帰るときは全員で！　じゃないんですか、会長！？」

「危険かもしれないし、守って貰うだけかもしれない。けど、最後まで見届けたいっす、会長！」

「この学園はもう家みたいなものだから、帰るときは学園も一緒がいい！」

……改めて、この学園の皆の逞しさを垣間見た気がする。

中にはもしかしたら、他の皆が手を上げているから自分も上げたって人もいるかもしれない。けど現状、皆が共に来る意思を示しているのは事実なわけで。

そんな声に、世刻や永峰は嬉しげな顔で、暁は驚いた後に、小さく笑みを浮かべていたのが視界に映った。

斑鳩に視線を戻すと、彼女は数瞬瞠目したあと、次いでしばし目を閉じてから、生徒達へ視線を一巡させて、深く頷いた。その顔に、満足げな笑みを浮かべて。

「……皆さんの意思は確かに受け取りました。

改めて、ここに誓います！　必ず“全員”で、元の世界に帰りましょう！」

斑鳩がそう言った次の瞬間――『わあああああああ！！！！』と、歓声が爆発的に響き渡った。

いやはや……何と言うかまぁ。

「……強いな、皆」

「うむ。まったくだ」

「はい。この姿勢は見習いたいものですね」

ナナシとレーメと顔を見合わせ、苦笑する。

この光景をみていると改めて思う。うん。この学園の皆となら、何があっても進んでいけるさ。

永遠神剣之章：４５．進むか、残るか。（後書き）

気がつけば、ユニークが１０万アクセス行ってしまいました。
改めまして、読んでくださっている皆様に心からの感謝を述べさせていただきます。
本当に有難うございます。

永遠神剣之章：４６．出立、前日。

集会の後すぐに出発の為の準備を始め――尤も今回主に動いてくれているのは、ナーヤとサレスの部下の人達なんだが。いやはや、全くもってありがたい――明日にも出立できる目処が立った。

それとは別に、集会の後集まった俺達の元に来た、森と阿川が持って来たある案件の為に、今学園内は全体的に騒然とした雰囲気を出している。先の二人が持ってきた案件、それは、学園祭開催の要望書だった。

というのも、ものべーがこの学園を背負って飛び立った時にこれだけの生徒が巻き込まれた理由が、そもそも学園祭の準備の為に放課後に学園に残っている生徒達が多かったからなワケで。

うやむやのうちに放置されていたその準備中の物を仕上げ、学園祭を開催しよう、というのが二人が持ってきた案だった。これには、生徒達のストレス発散や気分転換の他、俺達の様な前線に出て戦っている者達の息抜きなんかも目的としているそうだ。

この折角の好意、斑鳩は二つ返事でＯＫし、その案を持ってきた二人を実行委員へ任命した。そしてそれを受け、学園の生徒皆が準備の為に動いているため、この騒然とした雰囲気になっている。ちなみに神剣組の皆も、思い思いに準備を手伝ったりしているはずだ。

そんな中、俺はひとり校内をうろつきながらある人物を捜していた。

確かに、放っておいても、恐らく“原作”のように結局は『浄戒』を使うことになっただろうとは思う。でもだからと言って、今現在“俺が”世刻に『浄戒』を使うことを薦めた、と言うのは変わらない訳で。

である以上、その事によって受ける影響が一番大きいであろう彼女に、話をしておいた方がいいだろう。言った所で何がどうできる、と言うわけでもないのだけれど。

けど、早めに教えることによって、少しでも彼女に考える時間を与えて、少しでも心の安寧を守る事ができるなら――

ザラリ、と脳裏にかつての『虐殺の町（アズライール）』の光景が浮かび上がる。

……バカか、俺は。取り繕うな。……自分を誤魔化すな。

結局の所、これは俺の自己満足に過ぎないんだ。“知っている”以上、“何か”行動を起こした方が良いのではないか、って言う、俺の身勝手。

“知っている”のに何もしなかった。何も出来なかったって、そんな想いをしたくないって言う、俺の、身勝手。

「――ハハっ」

「……こら」

……思わず自嘲的な笑みを浮かべてしまった所で、頭を叩かれた。

耳元で聴こえたその声――レーメ――へと意識を向けると、彼女は宙に浮き、すいっと俺の目の前へと出て、視線を合わせて来た。

そして、ナナシもまた。

「余り自分を卑下するな、まったく。身勝手で良いではないか。例え根底にあるものが何であろうと、その行動が“仲間の事を考えたもの”である以上、恥じ入る必要はどこにもない」

「レーメの言う通りです、マスター。……それで何かを間違ってしまったのであれば、大いに悔やんで悩めば良いんです。この旅の中で、幾度も思い至ったはず。――それでも、一歩ずつ進んで行くしかないのだと。私たちは、万能ではないのですから」

――不覚にも泣きそうになった。本当に、心から頼りになる相棒達だよ。

そう、そうだな。例えなんであれ、俺に出来るのは俺が良いと思える事を、一つずつやっていくって事しかないんだ。

「……悪い。どうもネガティブに走ってた」

「まあ、戦いの連続であったからな。無理も無い。折角だから、この機会にユウも存分に羽を伸ばすがよかろう」

レーメの言葉に頷きながら、それにしてもと思った疑問を口にする。

「……何と言うか、俺の思考は相変わらずお前達にはだだ漏れなのな？」

「……それこそ、今更でしょう」

少々目を逸らしながら言うナナシに、それもこれも繋がりの深さゆえか、と苦笑する。……ま、それも別に悪い気分じゃないから、本当に今更、だな。

二人と話すだけで軽くなった心を自覚しつつ、俺は、見つけた背中に声を掛けた。

「……永峰、少し話がある――」

レーメの言う通り、せめて、俺の身勝手を受ける相手が、それで少しでも救われますようにと願いながら。

……

……

……

その、以前見たことがある様な気がする、長すぎる行列を見つけたのは、永峰との話を終えて校舎に戻った時だった。
並ぶのはほぼ男子生徒。たまに女子生徒。
――ああ、ユーフォリア効果か。
行列を辿りながら着いた部屋の名を示すプレートを見てそう思い、厄介な事にならないうちに退散しようと回れ右しようとした所で、ガラリと戸が開いた。

「あ、ゆー……さん？」

俺の名前を若干言いづらそうに呼ぶユーフォリア。まあ、ニュアンスが彼女の相棒と似たような感じだしなぁ。正直俺も、隣で『ゆーくん』って呼ばれたら、最初の様に返事をしてしまいそうになる事がある。
そしてその瞬間にかかる、周囲からの無言の圧力。……そういや彼女、学園に来て僅か数日ながら、既に『妹にしたいランキングＮｏ．１』に輝いているんだったっけか。

「ああ、ユーフォリアか。ここでヤツィータの手伝いか？　……って言うか、制服、似合ってるな」

確かにまあ、制服が似合っていると言われてはにかみながら笑う姿を見てると、その気持ちも解らなくは無いが。

「あ、そう言えば、あたしの事はユーフィーでいいですよ？　パパやママもそう呼んでますし、ゆーさんもあの意念の光との激突の時、最後にそう呼んでましたよね？」

ああ、あれ、届いてたんだと思いつつ、解ったよと首肯する。そ

してふと、先程の俺の名前を言いづらそうにしている彼女と、『妹にしたいランキング』の事が頭をよぎり――

「よし、じゃあ俺の事は『お兄ちゃん』と呼ぶがいい」

何というか、周囲の空気が微妙な感じに成り下がった。うん、言わなきゃよかった。出来心だったんだ。周囲の無言の圧力も、「ばかなやつめ」と言うか「やっちまったな」的な生温かい視線とでも言う雰囲気になってるし。

だが、事態は予想の斜め上を行く。

「えっと、お兄ちゃん？　……えへ、ゆーくん以外にも兄弟ができました！」

名前も「ゆう」繋がりですしね、と笑うユーフォリア。

そして一転する雰囲気。視線で人が殺せるなら、なんて表現を聴くことがあるが、今がそう言う状況なのだろう。無論、殺される対象は俺だ。

直ぐに「冗談です、ごめんなさい」と謝ったのは言うまでもない。

「えー……あ、じゃあ、祐兄さんで！」

何だその「言ってみたけど恥ずかしくなっちゃったのか。仕方ないなぁ」見たいな妥協の仕方は。

……結局「祐兄さん」で固着した。

直後に保健室から出てきた、制服姿のゼゥとナーヤが含み笑いをしながら、

「あら、こんなところで立ち話なんてしてないで、入ったらどう？
『お兄ちゃん』」
「うむ、並んでおる怪我人の手当てはヤツィータに任せて、中に入るが良い『お兄ちゃん』」

なんてのたまったせいで訪れた、俺と周囲の大混乱のどさくさに紛れる形で。
ちくしょー！　とか叫びながら蜘蛛の子を散らす様に散っていく“行列を作っていた男ども”を見やりながら、とりあえず、「青道のロリコン野郎ーー！！」とか叫んでたやつは後で殴ると固く心に誓った。絶対殴る。

「自業自得ですね」
「うむ」

……ちくしょう。

永遠神剣之章：４６．出立、前日。（後書き）

１２／３０　微修正

永遠神剣之章：47．旅立ち、次なる世界へ。

出立の準備を終え、ザルツヴァイのドックに泊まっているものべーの前に集まった俺達は、フィロメーラさんの見送りを受けていた。すでに一般生徒達はものべーに乗り込んでおり、今外に出ているのは神剣組みの皆のみだ。

「皆様、本当有難うございました」

そう言って恭しく礼をするフィロメーラさん。そんな彼女はついっと、世刻の隣に立つナーヤへと視線を一度向ける。

「それと、ナーヤ様をよろしくお願い致します。……ナーヤ様も、くれぐれも無理をなさらないように」

「わかっておる。まったく……フィラは心配性じゃの」

そう、ナーヤも結局俺達と共に来ることになっていた。

何でも、俺達が出立するまでの間に『支えの塔』の修理の、ナーヤにしか出来ない部分を終わらせられたら一緒に行く、と言う約束をサレスとしていたらしい。

その話を昨日保健室で会った時に聴き――その時にはほぼ完了していたと言うのだから、いやはやなんとも――こうして見事、今朝までに修理と、以後の業務の引継ぎなどを終わらせて来た、と言うことだ。

『あの時、祐と一緒に支えの塔に行って、最悪の状況になる前に停止させられなければ、ここまで早く終わることはなかったであろうからな、感謝するぞ』

とは彼女の談。
どちらにしろ、ナーヤなら間に合っただろうから、感謝なんてしなくていいんだけどな。まあいいや。

「それにしても……一国のってか、この世界の大統領がそうほいほい着いてきて良いもんなのかね？」
「……それは……私の口からはなんとも答えづらいのですが……」
「……へ？　あー、うん、ごめん」

ふと思ったことを何となく隣に居る人に訊いてみたら、そこに居たのはカティマだった。
苦笑交じりに答える彼女もまあ、ナーヤと似たようなもんだしなぁ。

「先輩、そろそろ……」
「そうね。ナーヤ、そろそろ出発するわよ？」
「うむ。……ではフィラ、後は頼むぞ？」

そんな中、永峰が斑鳩に近づいて声を掛け、それを受けて斑鳩がナーヤに促した。

「……ナーヤ、フィロメーラさんは残るんだよな？」

と、そこで何となく思った事を口に出した所、ナーヤがふむ、と唸った後、ふふんと口角を上げる。

「そうじゃが……なんじゃ、祐はフィラも一緒がいいのか？　……ふむ、残念じゃが、今回は諦めよ。それにしても……『お兄ちゃん』の好みはもっと下だと思っておったが、守備範囲は広いのじゃな」
「いや、そうじゃなく。何となく大丈夫なのかなって思っただけだ

よ。ナーヤの兄さんの事とか。……いや大丈夫なんだろうけどな。それと『お兄ちゃん』の事は忘れてくれ。あと俺は別にロリコンじゃねえ。フィロメーラさんはストライクだ」

「ああ……まあ、兄上がフィラをそのような目で見ていた事はアレじゃが……大丈夫じゃろ。こう言っては何じゃが、あれだけの失敗を犯した後であるからな。何より兄上はプライドが高い。それとフィラはやらん」

「ふむ……少なくとも当分は何かやらかすような真似はしないで、真面目に政務に精を出すってことか。あと、別にくれとは言わねーよ」

俺の答えに、ナーヤは「まあそう言う事じゃ」と頷き、次いでフィロメーラさんがぺこりと頭を下げる。

「……あの、青道様。ご心配下さって有難うございます。正直、私はあの場で何があったのかは覚えていないのですけど……ナーヤ様の言う通り、大丈夫だと思います」

「いや、俺も何となく思ったこと言っただけですから」

どうやら俺とナーヤの発言の後ろの方はスルーする事にした様だ。うん、それが良い。

「……なんか、青道君もナーヤも、やり取りの中に不穏当なものが混ざっていた気がするけど。……それとね、青道君。ニーヤァは性格はああだけど、やる事はきっちりやるから大丈夫よ。さて、そろそろ本当に行きましょうか」

どうやらスルー仕切れなかったらしい斑鳩の言葉に、苦笑しつつも首肯した俺を見て、ナーヤたちもよしよし、と言う様に頷く。

「うむ。では、行って来るぞ」
「はい。……皆様、お気をつけて行ってらっしゃいませ」

恭しく礼をするフィロメーラさんに見送られ、残った俺達ものべーに乗り込み、そして――ものべーは静かに、その身を空へと浮かべ、飛び立った。

……
……
……

暁によると、『魔法の世界』から、『浄戒』のある『未来の世界』までは約一週間かかるらしい。
ちなみに既に『未来の世界』の座標はものべーに入力済みだ。……残念ながら、暁のナナシが直接ものべーに入力したため、永峰の“三回目”は無しである。
次の世界でも恐らく戦いになるであろう。そうなればいつ出来るか解らない、と言う事で、『第六十六回物部学園祭』は、次の世界に到着する前、六日後に行われる事となり、現在学園内のあちこちでは急ピッチで作業が進められている。
学園祭案が持ち込まれてから開催まで時間が無いように思われるが、もともとものべーが離陸したのが準備途中の出来事であったことと、人数が本来の全校生徒よりも少ないため、規模自体も縮小して行われることから、間に合うであろうとの判断だ。
もっとも、俺や斑鳩が属するクラスは、残っていた人数が少なすぎる――十人に満たないんだよ――為に、他クラスへの応援に回っているのだが。
かく言う俺も、フィアと一緒に校内を回りながら手の足りない所

を手伝っている。そんな時、体育館の前を通りがかった所、開け放たれていた扉から中の様子が伺えた。

そこにあった光景は、バスケに興じる斑鳩と永峰、ルプトナと世刻。そして審判でもさせられているのだろう、苦笑しながらその様子を見ている暁。

「あの光景を見ていると……彼を今の段階で仲間にできて、良かったって思いますね……」

「確かにな。……正直言うと、最初は本当に良かったのかって思わなくも無かったんだけど……フィアの言う通りだな。……出来るなら、あの光景がずっと続けば良いと思うよ」

そう、例えそれが難しい事だと、解っていたとしても。

……

……

……

体育館での様子を見送ってしばし、手の足りなさそうな所を手伝いながら歩いていると、廊下の窓から外を見ているカティマとナーヤの姿があった。

「何見てるんだ、二人とも？」

「あ、祐。あの水の張ってある所は何ですか？」

そう言ってカティマが指差したのは――ああ、プールか。と思ったところで思い至る。これは――二人の水着イベントを見れるという事っ！

（……マスター）
（……はぁ、まったく）
（俺も男だ。嬉しいもんは嬉しい）

やれやれと呆れ気味なナナシとレーメの念話に反論しつつ、カティマとナーヤには「あれはプール。水泳の授業とかをするところだよ」と説明する。

と、途端にナーヤは顔を青くしてしまった。どうやら彼女は泳げないらしい。

「む、むぅ。ここは泳ぎの訓練もカリキュラムに入っておるのか！？」
「……ふむ、ナーヤは泳げないのですね？　……そうですね、祐。すぐに私たちの水着を準備して下さい。ナーヤの特訓をしましょう！」
「な、なんじゃと！？　いや、いらぬ！　泳げなくとも別に死ぬ事は無い！」
「何を言っているのですか！　もし次の世界が『海の世界』とかだったらどうするのですか！？」
「……にゃ……そんな極端な……」

そんな二人のやり取りをバックグラウンドに、まずは水泳部かなーと思いながら歩き出そうとした時だった。

ダダダダっと走ってくる足音。

気付いた時には――。

「ユウーーーーーーーー！！」
「ぐふぅ……」

ワゥの頭が俺のみぞおちにめり込んでいた。
この後、ワゥの「何処に行くの？」と言う質問に対し、ワゥと一緒に行動していたクリストの皆へ、外のプールを指差しながら「これからナーヤの泳ぎの特訓に行くんだよ」と説明すると、当然の如く――

「ボク達も行きたい！」

となるワケで。

「ほ、ほれ、祐。全員分の水着を用意するのは難しいじゃろ？　今回は諦めよ！」
「あ、クリストの皆さんの分なら有りますよ？」
「なんじゃと！？」
「本当か、フィア？」
「はい。以前『箱舟』に来た時に」
「……ってわけでナーヤ。諦めろ。主に俺の目の保養のために」
「おぬしはロリコンでは無いのじゃろうが！？」
「それはそれ。これはこれ」
「意味が解らーーーん！！」
「それにほら、カティマやフィアも居るし」
「……あの、祐。流石にそうストレートに言われると恥ずかしいのですが……」
「まあまあ。じゃ、カティマ達の分、探しにいこうか」
「い、いやじゃー！　水はいやなのじゃー！」

……とりあえず、とても良い目の保養になったとだけ言っておこう。うん。

永遠神剣之章：４８．一日だけの、学園祭。

何かに熱中する楽しい時間、と言うものは早く過ぎるものだ。それはどこの世界、どんな状況においても変わりは無いもので。
戦いも、この後に待ち受けるであろう未来も、何もかもを忘れて、学園祭の準備にいそしむ日々は瞬く間に過ぎ去っていった。
この間、特に大きな事はなかったが、騒がしくも楽しい時間であった事は間違い無い。
そして、その日が来た。

「……以上で連絡事項は終わりです。と言うわけで、皆で学園祭を楽しみましょう！」

斑鳩による注意事項と開始の言葉を合図に、皆が三々五々散っていく。
俺もまた、いつもの様にフィアとナナシ、レーメと共に校内へ散り――……好事魔多し、とでも言えばいいのだろうか。然程経っていないにも関わらず、喧嘩やら何やらのトラブルに遭遇。
そのお陰で、しばらくの間校内と生徒会室の往復状態になってしまった。……報告等で、何だかんだである程度手伝いに入ってしまったのだ。斑鳩の。
とりあえず午前中一杯で解放されたが。

「おかえりなさいませ、ごしゅじんさまー」

ユーフィーが働くと言っていた、喫茶『悠久』へ入った俺達と、店の前で会った世刻、暁を迎えたのは、そんな台詞だった。

そりあえず一瞬固まった後、改めてその台詞をのたまったユーフィーを見やると……ワンピース部分が赤色のエプロンドレスに、頭の上にはホワイトブリム。所謂メイドさんと言うやつだ。

とは言え、フィアやフィロメーラさんの様なヴィクトリアンタイプではなく、俗に言うフレンチタイプの、だが。いやまあこれはこれで。うん。

「む、よく来たな、祐。とは言えこの姿を見られるのは少々恥ずかしいのだが……」

若干頬を赤くしながらそう言うのは、ユーフィーと同じデザインで、ワンピース部分が空色のエプロンドレスに身を包んだルゥ。

じゃあ何でまたここの仕事を？　と訊くと、何でも手伝ったら好きなものを一品タダでくれるそうで。

……食べ物に釣られたのか。

「お、のぞむに暁も来たか。席に着いてゆっくりせい」

「……げ、本当に来た……」

そんな彼女達に並ぶように、濃紺のエプロンドレスのナーヤと、グリーンのエプロンドレスのタリアも俺達の所へやって来る。

ナーヤの首元には青と白のストライプのリボンが、タリアはホワイトブリムではなく、黒地に白のラインが入ったリボンのついたトーク帽を乗せている。ちなみにタリアのコルセットの部分も、帽子のリボンと同じ、黒と白のストライプだ。

とりあえずそんな彼女達の様子をひとしきり眺め――

「うむ、好き哉（よきかな）」

「バカな事言ってないで座りなさいよっ」

うんうんと頷いていると、タリアに手に持ったトレイでスパンと叩かれた。痛え。

「くっ……んな事するならソルも連れてくるぞ」

「お願いそれだけは絶対にやめて」

これで頬でも赤くしながら言うのなら、照れてるんだろうなって所だが、本気で嫌そうに言うあたり……ソル、南無。……いや、タリアの場合それも一種の照れ隠しって事も有りうる……いや無いか。

まあいつまでも立っていても仕方が無いので席に着く。

とりあえず注文を頼んだ所で、世刻がぽつりと漏らした。

「……って言うか、何でメイド服？」

「うむ。本来は制服の上にエプロンで、と言う話だったのだが、一部の学生達の強い要望で、このようなメイド服で接客する形式になったのじゃ。

究極の癒しを追求しておるというその学生達によれば、メイドの自己犠牲的献身的な姿勢こそが、現代における安息の絶対的な実在であるらしく……うんまあ、その後も紆余曲折あって、こうして喫茶店『悠久』が誕生した、と言うことじゃ」

「……それで行き着いたのがメイド喫茶かよ。……所でその制服は一体どこから？」

「企画に賛同してくれた生徒さんが居まして、その人が一人で全部用意してくれたんですよー。とってもやさしい人なんですね、きっと」

嫌味ではなく、純粋にそう思っているであろうユーフィーの言に、世刻は若干呆れ気味に、

「ユーフォリア、それは多分やさしい人じゃなくて、やらしい人だ」

と訂正している。暁は……静観することに徹したか。どことなく落ち着かなさそうな雰囲気だが。まああいつの性格的に、こういう場は慣れないんだろうけどな。

「……望、ここに来ている時点で、あんた達もやらしい人の仲間だから！　……まったく、こう言うのだって知ってたら、手伝いになんて来なかったわよ」

「……ふむ、俺は望に着いて来ただけなんだが……」

「あ、絶！　汚いぞ！」

とは言え楽しそうだな、こいつら。

賑やかなやり取りをぼんやりと眺めていると、そんな俺にルゥが気付いた。

「祐はこの店やこの服はどう思う？」

「ん？　……うん、普段の雰囲気とは違って、これはこれで良いと思うぞ。

……それにしてもその生徒、よく一人でこれだけの種類と数を揃えられたもんだな」

「そいつ、今朝私たちにコレ渡した後、倒れるように眠っちゃったわ。眼の下にすっごい隈作ってたもの」

タリアの言葉には、俺のみならず世刻も暁も苦笑いだ。

折角彼女達のために用意したのに、その姿を見ることなく力尽きたか。

「……えっと、祐兄さん、これ、似合ってますか？」

俺のルゥに対する返事に何かを思ったのか、その場でくるりと回

りながら訊いてくるユーフィー。
そんな仕草が彼女の服装や雰囲気にマッチしていて、何とも可愛らしい。

「うん、もちろん。可愛いよ」
「……ふむ。私はどうだ？　こういった服は普段着ないのだが……」

と、スカートを軽くつまみながら訊いてくるのはルゥで。

「そうだな。普段着ないからこそ、新鮮で良いと思う。もちろん似合ってるしな」

そんな返答に満足したのか、二人ともにこりと、良い笑顔で返してくれた。
うむ、癒されるな、ここ。

「……先輩、なんか開き直ってますね」
「いやまあ、折角の学園祭だしな」

そう、楽しまないと損ってもんさ。
……と言うわけで。

「……ところでユーフィー、後で時間出来たら、一緒に見て周るか？」
「良いんですか？　じゃあ、お願いします！　……あ、良かったらルゥちゃんもどうですか？」

ユーフィーに問われたルゥは、「いいのか？」と言うような顔で俺を見る。
無論、「当然」と言うように頷いて返す。

「ふむ。ではご一緒させてもらおう」
「はい！」

ルゥが返事してユーフィーが笑ったところで、周囲からものすごい圧力が――怨嗟の、と言う枕詞をつけた方がいいだろうか――掛かった気がする。……気にしない事にしておこう。

……
……
……

ルゥとユーフィーと一緒に、学園中を歩き回った。
彼女達の仕事の後、と言う事で、然程多くの時間が有った訳ではないのだけど、それでも出来る限り、多くの場所を見て周った。途中、ミゥ達とも合流出来たのは幸いか。
食べ物を出しているクラスは、状況が状況なだけに――特に材料の問題、だ――少なかったが。
時間と部員が足りないという理由で劇の上演を諦めた演劇部の、代わりにと出されていたお化け屋敷は、彼等が言っていた様に渾身の出来だった。
天文部による手製のプラネタリウムは、郷愁の念を抱かせてしまったか、泣いてしまう人が出たらしい。学園の皆も納得してここに――次の世界に行く事を選択したとは言え、だからと言って何も感じるな、なんて言う方が無理なのだから仕方ないだろう。
そういった人たちの為にも、少しでも早く、帰れるようにしてあげたい所だけれど……そうも行かないところが、もどかしくもある。
そして、旅団を始めとした、神剣組の皆――。

グラウンドに張り出されていた、運動部有志による体力測定場の結果には、各部門の一位に燦然と輝くカティマの名前。……『今日は保健室に詰めてるから～』なんて言っていたヤツィータの名前が、二位に入っていたのは何故だろうか。

同じくグラウンドで行われていたらしい、学生プロレス。そこの一角ではソルラスカとルプトナが、アームレスリングで張り合っていたようだ。

ホワイトボードに書かれていた『俺達に勝ったら貰えるぜ！　生徒会長の膝枕券！！』やら『十カティマ』やら『十ナーヤ』やら『十永峰』やら、それらがぐしゃぐしゃと消されている辺りにカオスを感じる。

斑鳩は、少しは顔を出せていたようだが、結局午後からの雑務や運営の大半を彼女に任せてしまったのは、悪い事したな。

そして体育館で行われた、永峰のライブ。

多くの人に注目される中、最後までしっかりと歌い上げた彼女は……うん、格好良かった。

そんな彼等も、皆一様に楽しんでくれているみたいで、良かったと思う。

今日と言う日は、きっと明日からの活力に繋がってくれるはず。

そう心から思える内容だったと思う。

「希美ちゃん達、凄かったですね」

煌煌とキャンプファイヤーが焚かれ、後夜祭に賑わうグラウンドを眺めながら、ユーフィーがぽつりと言った。

それに続いて、アレが楽しかった、コレが良かったと、思い出話に花が咲いて。

状況や心境的なものも有るんだろうが……たった一日の学園祭ではあったけど、例年以上に良かったとすら思えてしまう。

――祭りの後。満足気ながらも、寂しくもある。そんな瞬間。

「ユーフィー。今日は楽しかったか？」

「……はい」

余韻に浸るように頷くユーフィーの頭に手を置き、そっと撫でる。

「……祐兄さんは……」

「ん？」

「知ってるん……ですよね？　……エターナルの……“渡り”の事」

……知っているさ。だからこそ、彼女には今日と言う日を楽しんで欲しかったんだから。

この、準備から本番までの短くも永い一週間。

普段の生活以上に、学園の皆と共に過ごし、創り上げた大切な時間は、彼女にとってかけがえの無い想い出になったと、なっていて欲しいと、思う。

そんな想いが通じたのか、彼女は小さく、けれどはっきりと聴こえる声で「ありがとうございます」と呟いた。

そう、例え――“共に過ごした”と言う事実が、皆にとって“無かった事”になるのだとしても……彼女の中には、それは変わる事の無い真実として残るのだから。

永遠神剣之章：４９．廻り、巡る。

「くおおおぉぉぉぉぉぉん」

次なる世界に到着した合図である、ものべーの鳴き声が響き渡る。

ものべーは自分の力で自分の周囲に太陽と月を――昼と夜を作り出せる神獣だ。とは言えそれは世界外……時間樹を移動している時の、昼も夜も無い空間を移動する時の事。

今見える空は暗く、だが星は見えず、月だけが輝く星空。――そう、俺達のよく知る、人工の光に星の光がかき消された夜空だ。……暁には触り程度の話――『俺達の世界』から、そのまま発展した様な雰囲気の世界だと――しか聴いて居なかったので、『浄戒』があるのが“原作”と同じ『未来の世界』であるのかどうか不安な部分もあったが……きっと、間違いは無いだろう。

……となると待ち受けるのはショウとスバル、そしてセントラルか。

そんな事を考えながら、召集された校長室へ入ると、他の皆はもう既に集まっていて、どうやら俺が最後の様だった。

「悪い、待たせた」

「いや。さて、祐も来た事だし、降りる前にこの世界の事を聴いておきたい。少なくとも我々旅団は、この世界の事を何も知らないからな」

俺から視線を外し、サレスはそう暁に問いかける。『浄戒』を使うことを提案したのは俺だが、この世界の座標を伝えて導いたのは暁だからだ。

それを聴いて、ふと考える。さて、問題はどうやって『浄戒』を手に入れるか、だな。

『浄戒』がどう使われているのかは解っている。三分割されて、スバルとショウの力のブースターに二つ、世界の維持に一つだ。

だからと言って、「くれ」と言ってくれる訳も無し……下手をすれば、敵対し、倒して奪わなければならなくなる。そう、ショウのみならず、スバルもだ。

やはり必要となるのはスバルの説得。出来れば、ショウとも戦わずに済めば重畳なんだが……流石にそこまで上手くは行かないだろうなぁ……。

そう考えた所で、不意に、思い至ってしまった。

――そうか、『浄戒』が世界の維持に使われているって事は。

「……そうだな。始めに言っておくと、この世界は既に滅んでいる。……いや、正確に言うならば、滅んだ世界を滅ぶ直前へと巻き戻し、その一日で止まっている、と言うべきか」

「滅んで……って……どう言う事だ……？」

「そのままの意味さ。世界に満ちるマナを使い果たし、滅ぶ直前の世界。その一日を……一日に満たぬ時間を、『浄戒』の力により延々と繰り返し続ける事によって、滅びを回避している、歪んだ世界さ」

その暁の言葉で気付いたのだろう。愕然とした表情の世刻が、ぽつりと呟く。

「……じゃあ……『浄戒』を手に入れるって事は……」

「この世界に、止めを刺すって事だ」

世刻の言葉に続ける様に言うと、皆の視線がこちらに向く。皆の視線が、突き刺さると感じるのは、俺の心境によるものか。

……俺は、随分と辛い事を、彼に科そうとしているのだな。

「……先輩は、このことを……？」
「ああ、知っていた。知っていて、俺はこの方法を示した」
「……そう、ですか」

だとすれば、受け止めねばならない。彼に何をどう思われようと。世界一つに止めを刺す、と言う行為による負担を、俺を恨む事で少しでも和らげられると言うのなら。

シンとした沈黙。

一瞬の間を置いて、「まあ兎に角」と、暁のナナシがそれを破る。

「色々と言いたい事もあるでしょうが、そうですね……一週間、とは言いません。せいぜい、四、五日程度でしょうか。この世界を肌で感じてみてください。恐らくそれで……マスターが“歪んだ世界”と言った意味が解るでしょう」

言いたいことがあるならば、その時に、と締めたナナシの言葉を受け、サレスが降りるメンバーを考え、

「……そうだな。では、まずは望に行って貰うとして……」
「望君が行くのなら、私達も」

そう声を上げたのは斑鳩と永峰。それに続いてルプトナやカティマ、ナーヤも行こうとしている雰囲気が感じられたが、その前に声を上げたのは、ミゥだった。

「……では、今回は私も行かせて貰います」
「ミゥ姉様が行くのでしたら、私も」

ミゥに続いてゼゥが名乗り出た。彼女達の視線が、ひたと俺を射抜いているのを感じる。……やはり彼女達にとって、さっきの俺の

「滅びそうな世界に止めを刺す」って言葉は、捨て置く事は出来なかったか。

……目的を達するにはそれしかなかろうがどうだろうが、『浄戒』を奪う事によって、この世界に止めを刺す事には変わりはない。否、世刻に止めを刺させる、と言う事には……か。

……正直に言えば、俺はこの世界が……既に滅んだ世界を、ただひたすらに一日を繰り返し続け、無理矢理に維持させているこの世界が、正しいかどうかなんて解らない。

……いや、正しいとも、間違っているとも、俺が言っていいことじゃないのだろう。この世界に住んでいるわけじゃない。滅びを目にした訳でも無い。……己の世界を、滅ぼされた事がある訳でも無い俺が。

だけど、少なくとも考えるべきだったんだろう。それを行う世刻が、どんな気持ちになるか。……他者によって世界を滅ぼされた経験を持つ彼女達が、どんな気持ちになるか、なんて。

――けど、他に暁の『滅びの神名』をどうにかする方法なんて無いんだ。……この期に及んでそう言いたくなる自分に、嫌気が差す。

……本当に、何をやっているんだろうな、俺は。

サレスはもう一度「ふむ」と考え出す。と、不意に俺の方へと顔を向けてきた。その表情は、「どうする？」と言っている様だが……今回は止めておく、と、首を横に振って返した。

「……では、後はソルラスカ、お前と……」

「あ、あたしも行きます！」

「解った、ユーフォリア……以上のメンバーで頼む。他は警戒しながら待機だ。それと望、なるべく『浄戒』の名は出さない様に」

「……解った」

ユーフィーも行くのか……と少し驚く。と同時に、ふと、そういえばこの世界にも“アレ”が居ただろうかと思った。

……もし居るのであれば――居て、それが彼女と面識があるのであれば、ユーフィーには行ってもらうわけにはいかない。下手をすれば――降りたその先で、エターナル同士の戦いになりかねない。そう、例え相手が神名から逃れるための“欠片”であったとしても、その能力――マナを、全てを喰らうと言う能力は馬鹿に出来ない。

「ユーフィー、ちょっといいか？」
「？　はい」

小首をかしげながらこちらに近づいてくる彼女。

「……単刀直入に訊くけど、ユーフィーは、『最後の聖母』には会った事が？」
「ふぇ？」

きょとんとした顔で声を漏らした後、「えーと、まさか」と、恐る恐る訊いて来るユーフィーに、「うん、そのまさか」と返す。

「『精霊の世界』で“欠片”を見た」
「……欠片……ですか？」
「ああ。『神名』から逃れるために、『神名』に影響されないレベルまで細分化してこの時間樹に侵入した様で、かなり多くの世界に散らばってるみたいだ。多分……だけど、この世界にも居ると思う」

細分化しすぎて、侵入した世界に馴染んでしまった固体も居るみたいだけどな、と続けると、彼女はんーと考え込み、

「話しに聴いた事はありますけど、会った事は無いです。……はぁ……でもそれなら、できるだけ早めにトキミさんに連絡取れればいいんだけどなぁ……」

「……まあ、今はなるべく神剣や……ましてやエターナルである事は出さない方がいいだろうな」
「はい、気をつけますね」

そう返事をした後、他の皆が待っているのに気がつき「それじゃ、いってきます！」と笑う彼女に、「いってらっしゃい」と手を振って見送った。
そして、ユーフィーと入れ替わる様に近づいて来たのはルゥで。

「祐、少しいいだろうか？」
「……ああ」

彼女と共に、校長室を後にした。

……
……
……

彼女について歩く道中も、彼女と共に出た屋上においても、俺達は互いに無言だった。
何も話す事が無い、と言う訳じゃなく、何を話して良いか解らない、と言う訳でもなく、どう話せば良いのか解らない、と言った感じだろうか。

「……星、見えないのだな」

どれぐらいそうしていただろうか、並んで壁にもたれて座り、空を見上げていたルゥがぽつりと言った。

それに対し、「人工の光が強すぎるからな」と答えると、彼女は「そうか……」とだけ答える。

「……他に、方法は無いのか？」

「そうだな。……暁の神名にせよ、『浄戒』を得る手段にせよ、俺には他に思いつかなかった」

「……だろうな。他に方法があるのなら……きっと君なら、それを選ぶ」

彼女はそう言うと立ち上がり、俺の前に回って覗き込む様に、見つめてくる。

そして何かを言おうとしたとき――突如、ものべーが動いた。

一瞬、バランスを崩すルゥ。

咄嗟に手を伸ばし――。

「……祐、少し、痛い」

耳元で聴こえた言葉に、咄嗟に抱き止め――否、抱き締めていた腕から、少し力を抜く。

そのまま、きゅっと、抱きつく様に首に腕を回された。

頬に触れる彼女の髪が、心地よく。

暖かな彼女の体が、心地よく。

甘い彼女の匂いが、心地よく。

「――本当は、少し怖い」

ぽつりと言われたその声が、哀しい。

「――君が、いざとなれば、滅びようとしている世界を、簡単に切り捨てられる人間だ」

どう思われているのか、が、哀しいわけじゃなく。

「――そんな風に」

そんな風に。

「――思ってしまう自分が、怖い」

思わせてしまう事が、哀しい。

「だから、私は、私達は、自分達の目で見て、判断しよう。暁と、彼のナナシが言った、“歪んだ世界”と言う意味を。この世界の在り様を」

だから、少しの間嫌な思いをさせてしまうかもしれない。そう言って、そっと離れる彼女の背中に、俺はただ、気にするな、としか言う事が出来なかった。

永遠神剣之章：４９．廻り、巡る。（後書き）

２／９修正　「トキミお姉ちゃん」→「トキミさん」

永遠神剣之章：５０．幕間、クリスト会議。

クリスト族は、同族間において“同調”と呼ばれる行為を行う事により、記憶や経験等をある程度共有する事が出来、互いに心の繋がりが深い程に、その効果は高まる。
それは旅団に属するクリストの巫女達においても然りであり、姉妹同然に育った彼女達にとって、心の繋がりの深さは言うまでもないだろう。

これは、『未来の世界』に着いた初日の夜の事である。

ものべーの上に鎮座する物部学園、その中の一室は、クリスト達が過ごすのに必要な特殊な波長のマナで満たされた、通称『クリスト部屋』と呼ばれるものになっている。
尤も今は、彼女達は祐に贈られたチョーカーの効果によって、クリスト部屋でなくとも生身で過ごす事は可能であるのだが。それはともかく。
そのクリスト部屋に、巫女達全員が戻ってきていた。あとは定例の会議を行い、就寝するのみである。
集まった皆をぐるりと見渡した後、長女であるミゥが口を開いた。

「第３６７５回、夜のクリスト会議ー。……今回の議題は、『この世界について』です」

そう言って、再び皆の顔を見渡すと、承知している、と言うように各々がこくりと頷くと、それを見て、ミゥは言葉を続ける。

「それじゃあまずは、私とゼゥが見てきた地上の事だけど……ん～……ここは素直に、同調して共有してもらった方がいいかな？」

「……そうですね。言葉にしてしまうと『いい人たちだった』で終わってしまうし」

ミゥの提案にゼゥが同意し、それを受けて皆が座っていた椅子から立ち上がり、円になるように集まり、それぞれが隣に居る者と手を繋ぐ。

クリスト達が同調するためには、互いに触れていなければいけない為だ。

「それじゃ、行くわよ」

そのミゥの宣言に合わせて皆が目を瞑ると、彼女達の脳裏にキンッと、『ミゥが地上にて経験した出来事』が流れ込んでいく。

……

……

……

望と希美、沙月、ユーフォリア、ソルラスカ、そしてゼゥとミゥがものべーから街に降りると、そこは整備された道路や、高層の建物が立ち並ぶ都市であった。

望は言う、「絶の言った通り、まるで俺達の世界が発展したみたいだ」と。

それを聴いてミゥが思ったのは、『祐さんの世界って、こんな感じなのか』だったのだが。

その場にて少し雑談を交わす皆であったが、不意に強烈な気配を感じる。

そして現れたのは――巨大なドラゴンの様な生物。

それを見たユーフォリアの「……『守護者』……？　ううん、似てるけど違う……」と言う呟きが聴こえたところで、神剣を構えようとしたのを遮るように現れる、第三者の気配。

「あんたらそんな所で何やってるんだ！　早くこっちへ！！」

そう叫ぶ男の声に頷きあい、駆け出す望達。だが、ドラゴンが追うように迫り――それを遮り更に現れる、二人の男。

あまりこの世界の雰囲気には似つかわしくない、濃紫の胴当に手甲や袖、足を守る佩楯（はいたて）……望の世界で言うならば、当世具足の様な鎧を来た、黒髪をオールバックにして後ろで一つに縛った、他者を寄せ付けない雰囲気の、目つきの鋭い男。

もう一人は。腹部に梵字の様な模様の描かれた白い鎧と、黒い胸当てに身を包んだ、赤いバンダナを巻いている、柔らかな雰囲気の青年。

二人とも武器は弓を構えており、そのどちらも、強い力を放っていた。

――ショウ＝エピルマとスバル＝セラフカである。

「ここは僕たちに任せて、皆さんは先に逃げてください！」

そう言ってドラゴンへ挑むスバルと、それに続くショウ。

繰り出される攻撃は、凡そ弓から出るとは思えぬ程に重く、強く、激しく。逃げながらもそれを見やる望達にとって、驚愕に値するものであった。

「あの壁を越えれば安全です！」

先導する男のその声に続いて壁を越えていく望達。そして希美が慌ててものべーをそちらのほうへと動かし――その後、スバルたち

からこの世界の事を有る程度聴いた望達は、ものべーに戻ってきたのである。
話をする中で、スバルが望達がこの世界の“外”から来たと聴いて、凄く羨ましがっていたのが印象的であったろうか。

……

……

……

「……ふむ、“あの時”ものべーが突然動いたのはこれか」

同調によってその時の状況を知ったルゥが思わず呟いた言葉は……しっかりと、皆に聴こえてしまった様である。
あっと思ったルゥが繋いでいた手を離そうとした――次の瞬間、がしっと、逃がさないとばかりに両手を掴む、ミゥとポゥ。

「……そう言えばルゥ姉さん、ミゥ姉さん達が行ったあと、祐さんを呼び出してましたよね？」

そんなポゥの一言に、ミゥがにっこりと微笑む。

「じゃあ、次はルゥの番ね。祐さんに、私達の気持ちとか、伝えといてくれたのでしょう？」
「う、うむ。それはそうなのだが……」
「それじゃあ、同調開始～♪」

――結論。姉妹の間で隠し事は出来ませんでした。

「……ルゥってば……祐さんといい雰囲気……」
「……さっきのドラゴンの時よりも、どきどきしました……」
「むぅ～……」
「私は、別に、そんな……ふんっ」
「あはは……はぁ」

永遠神剣之章：５１．不安、予感。

あれから二日が経ち、この世界に着いて三日目に入っている。今も何人かのメンバーが街に降りている所だろう。

世刻とミゥは一昨日、昨日に続き今日も行っているはずで、昨日の時点で既にその表情は優れなかった。――いや、表情が優れないのは世刻やミゥだけじゃなく、殆ど全員……それこそ、一般生徒も含めて、なのだが。

“同じ一日を、否、一日に満たぬ時間を繰り返す”

暁のこの言葉にどうやらピンと来ていなかったようで。

昨日、すなわち二日目に実情を目にし、そこでようやく――俺もまた、ではあるが――実感を伴って理解したようだ。この世界の“歪み”を。

連続で地上に降りた世刻とミゥにとっては、その歪みは恐ろしく明白だった様だ。なにしろ、昨日知り合ったばかりの人間が、自分たちの事を『知らない』と言うのだから。

昨日彼らと一緒に街に降りたタリアに聞いたが、世刻とミゥは随分と混乱していたらしい。まあ、俺も暁も細かくは説明していなかったから、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

この世界の住人は、ある一定の時間になると元の常態に“リセット”される。つまり、ある定められた時間の状態へ記憶や立ち居地が戻されるのだ。

そして、俺達の様な“外”からの介入者が無い限り、全く同じ行動を延々と、ただ只管（ひたすら）に繰り返し続けるだけ。

一日前に会ったばかりの世刻達の事を『知らない』と言うのも、そのためだ。

繰り返す、というのは、正にそう言う、文字通りの意味。

そしてそれは、人のみに非ず、世界全てがそう。そしてそれによって、街に降りていない一般生徒達も、この世界の“歪み”を実感した。

この世界が繰り返すのは、“一日に満たない一定の時間”。そう、この世界は――夜が、明けない。

……

……

……

校内の時計は昼日中を指しているにも関わらず、見える景色は夜空な辺り、その内調子を狂わす生徒も出てきそうな所が不安ではある。

そんな夜空を、校舎の裏手にある芝生に横になって見上げながら考える。“何か”を忘れているような気がするのだ。……そしてこう言った時には、大抵大事な事を忘れているのがお約束なわけで。

思い出せれば以降は忘れたりしない……と言うのが解っているだけに、その“何か”を思い出せないのがもどかしい。まあ、現状において思い出せなくてもどかしいって時点で、所謂“今後の展開”において忘れている部分なんだろうが。

「そう言う時は、順を追って考えてみると良いかと」

と、お腹の上のナナシ。うん、それもそうだな。

枕にしているノーマの腹の感触を感じながら、自信の思考の中へ埋没するために眼を閉じる。ちなみにノーマを枕にしようと呼び出した時に、フィアが「言って下さればそれぐらい良いんですよー？」と言いながら、座って自分の太ももをぽんぽんと叩いた時は……と

てもすごく迷った。まぁ、せっかく呼び出したんだしと、当初の予定通りノーマに枕になってもらっているが。

それはともかく。

“原作”において、最終的にこの世界では、旅団とこの世界のショウを筆頭とした防衛機構と戦闘になっている。じゃあ、この世界と戦闘に入るに至る理由は、何だった？　原因としては何がある？

「この世界の有り様から考えるとするなら、挙げられるのは『禁句とされているであろう、キーワードを言った』、『敵対的行動を見せた』、あとは……『神剣の力』ぐらいであろうな」

レーメの言う三点のうち、“原作”において当て嵌まるとするなら……神剣、だろう。

暁は「自分を追って来い」とは言っても、『浄戒』の事は言っていないはず。『浄戒』の名が出たのは、この世界で『旅団』にナナシが合流した時――既にショウ達と戦闘に入っていたはず――だった様な気がする。そして旅団の性質からすれば、敵対的行動を見せる……つまり、この世界の住人に暴力を振るう等と言った事はしないだろう。自衛以外では、だが。

とするならば、三つ目、神剣の力を見せた……。では、なぜ神剣を抜いた？

「『光をもたらす者』しかないですよね」

……だよなぁ。この世界の『シティ』と呼ばれる部分を守るガーディアンを相手取った、と言う可能性もあるが、確かなるべくシティには近づかないようにしていたはず。となると、フィアの言うように『光をもたらす者』の干渉だったか。

……そうだ、確か、突如ミニオンがこの世界に降りて来て、それを相手取るために剣を抜いた、だったか。そしてその神剣の力

に『セントラル』が反応した。
けど確か、『光をもたらす者』のこの世界への干渉は、それで終わりだったはず。後は戦闘が終わったあと……ああこれも頭の痛い問題だな。ショウの身体を回収される、はずだ。ダラバの様に。
俺達が歩んだ歴史においては、ダラバの身体の奪取は阻止する事が出来た。けど……ショウは無理だろうなぁ。
……まあいい。それは今考えても仕方の無い事だ。とにかく、『光をもたらす者』が最初にちょっかいを掛けてきたのって……様は遅々として進まない展開を進ませるための切欠、だよな。
……じゃあ、なぜ展開を進ませる必要があった？

「旅団をこの世界から出させるため、ですね」

そう。ものべーはこの世界に来てから、『浄戒』の力によって押さえつけられ、満足に動く事ができなくなってしまった。確か、無理をすれば動けない事はない、って感じだったか。そしてそれを何とかするためにも、『セントラル』から『浄戒』を奪わなければならない。
それは今現在……俺達においてもものべーが上手く動けない様なので間違いは無い。
じゃあ何故、『光をもたらす者』がそれを促す必要があるのか？
……ああそうだ、思い出した。
確か、エヴォリア達は暁の居場所を知らない。けど暁は世刻達に自分の居場所への行き方を示した。
エヴォリア達は旅団もそうだが、暁の事も始末したいと思っていた。彼の力は強い。その上、いつ自分たちの敵に回るか解らない奴だから。けど、居場所が解らない。……となれば、話は簡単だ。

「旅団に水先案内をさせる……ですね」

そう。だから奴等は、次の『枯れた世界』において、『旅団』を待ちうけ、決戦を行う事が出来たんだ。

それを踏まえて……今の俺達の状況ではどうだ？　まだこの世界に来たばかりだからかもしれないが、今現在、『光をもたらす者』は何も干渉してきていない。

もしその理由が、暁が俺達と共に行動している事を知らないから、としたら？

もしこれで、暁が俺達と共に居る事を知ったとしたら？

この世界において、“決戦”を挑んでくる可能性がある――。

「あ、祐兄さん」

そんな結論に至ったのと同時に、ユーフィーの声と、近づいて来て、頭の横の辺りに立つ気配がした。

目を開ければ、俺を覗き込むように見下ろすユーフィーが。

彼女の長い髪が俺の鼻先をくすぐり、少しくすぐったい。

……それにしても、年中夜の世界だから良いものの、昼間だったら丸見えだ。何が、とは言わないが。……なんて事を考えてしまったせいだろうか。無意識のうちに『観望』の力を通して『視て』しまった。暗視するように。

咄嗟に目を背けて、ぶんぶんと頭を振る。ノーマがちょっと唸った。ごめん。落ち着け俺。眼を閉じる。暗視オフ。眼を開ける。暗くて見え辛い。よし。見え辛いだけで見えない訳じゃないけど、これはこれで……いやいや。

「……えーっと、ユーフィー？」

「はい？」

「明るい時は、あまりそう無防備に近づかないように」

「……あぅ」

と言ったら、何を意味している言葉なのか気付いた様で。ぺたんと座って、むぅ、兄さんのエッチ、と睨んでくる。

いやいや、そう言われても。……にしても仕草がいちいち可愛いなあ。なんて思いつつ、身体を起こして、頭を撫でた。髪の毛柔らかくて撫で心地が良い。ナナシやレーメといい、ユーフィーといい……何と言うか、癒される。こう言うの。

「……マスター、和んでいる所申し訳ないのですが」

「……はっ」

ナナシに声を掛けられて、悠長にしている場合じゃない事を思い出した。危ねぇ。とりえあず暁に、ものべーの外に出ないように言っておかないと。

「ユーフィー、暁は中に居たか？」

「……あ……えっと、絶さんですか？　確か……今日は望さん達と、街に降りてるはずです」

……マジかよチクショウ。

頭から手を離された事にか、名残惜しそうな顔をしながらも答えてくれたユーフィーの言葉に、はぁ、と思わず大きく溜息を吐いてしまった。

そんな俺に、「絶さんがどうかしたんですか？」と訊いて来たユーフィーへ、どこまで説明したもんかと考える。

「えーっとな……暁のやつが俺達と一緒に居る事を『光をもたらす者』に知られたら、連中は間違いなく、タイミングを見計らって――それこそ、例えばこの世界の人たちとの戦闘中とかに――攻撃をしかけてくるだろうから、暁にはものべーから出ない様に言おうと

思ったんだが……思い至った時には既に遅しだった、ってわけだ」

……参った。けど、もしかしたら気付かれてない可能性もあるしな。戻ってきたら話を通しておこうか。……そうでも思わんとやってられん。

いやまあ、暁が悪いって訳じゃないってのは解ってるんだけどさ。

……まあいいさ。と、ふとユーフィーの顔を見て気付いた。

「……ユーフィーは俺に何か用だったか？」

そう言えば、わざわざこんな校舎の裏手にまで来てくれたので、何かあったかと訊いてみると、彼女は「あ、別に何か有ったわけじゃ無いんですけど」と前置きした後、

「お昼、一緒にどうかなって思って」

にっこり笑って言うその言葉に、時計を見れば短針は真上をさしていて。

……まぁ、こうなったらもう、あとはなる様になれ、だ。とは言え、何でも行き当たりばったりって訳には行かないけれど。取りあえず、今は考えるのは止めておこう。

「喜んで」

そうユーフィーに答えて、皆で連れ立って、校舎の中へと向かった。

「あ、祐兄さん」

「ん？」
「……後でまた、頭撫でてくださいね」
「……喜んで」

永遠神剣之章：52．避けられぬ、戦い。

『光をもたらす者』との戦い――次の戦いは、彼等との“決戦”になるだろう。“原作”に習うとするなら、だが――がこの世界であるかもしれないと言う結論に至ったとき、一つ思い出した事がある。エヴォリアの事だ。

“原作”で彼女が旅団に敗れた後、その身体を南天神の、亡霊と言って差し支えない精神体に乗っ取られたのだ。

かつて、神代の時代に起きた、南天神と北天神の戦い――南北天戦争。その実はジルオルによる両陣営の虐殺とも言える殲滅作業ではあったのだが。その時に、彼の『浄戒』によって、神として力を世界に及ぼすに至る為の神名を削り取られて殺され、転生する事も叶わず、亡霊の様な存在としてこの世にいる、南天神。その内の一人が、エヴォリアに張り付いているはずだ。……彼女の妹がいる故郷の世界を人質にとって、彼女に言う事を聞かせるために。

南天神の目的は、北天神とジルオルへの復讐、そして時間樹の覇権を握る事、だったか？

とすれば、南天神を何とかすれば、エヴォリアと態々戦う必要は無くなるんだよな。……無くなるんだけど。と、思ったところで、無意識に腹に持っていった手を見やる。ここを彼女にぶちぬかれたのはまだ記憶に新しい。

そう、エヴォリアは、明確な殺意を持って俺を殺そうとした。そんな相手を、助けなければいけないのか？　……そんな考えも頭を過ぎる。

……どーしたもんかなぁ……。

「まあ、ユウの好きにするが良かろう。ただ、助ける、助けないのどちらを選ぶにしろ、後悔はせぬようにな。……吾としては、汝を殺そうとした相手なぞ放っておけと言いたいところだが」

「私もレーメと同意見ではありますが……それだともう結論は決まっているようなものなのが困りものですね」

ナナシの言に「まったくだな」と頷くレーメ。そんな二人に、「どうして？」と訊くと、

「……助けなければ、マスターは間違いなく、大なり小なり後悔しますから」

苦笑しながらそんな事を言われた。……そう、なのかなぁ。……多分、そうなんだろうなぁ。まあ、あの時は背後からの一撃で、半分意識もぶっ飛んでた様な状況だから、「エヴォリアにやられた」って事を理解はしても余り実感できていないだけかもしれないけど。はぁ。……ま、やるだけやってみてダメなら諦めるって事でいいか。

そうと決まれば、とりあえずその為の方法でも練りますかね。何しろ相手は実態の無い亡霊の様な相手。普通に斬った所で倒せる訳でもないだろうしな。

……

……

……

「この世界に居ると……まるで何度も何度も“渡り”を繰り返している様な気がして、少し……怖いです」

そうユーフィーがぽつりと言ったのは、この世界に来てから四日目、彼女と一緒にスラム――ものべーが滞在している、この世界に

おいてまともに自由に行動できる地区だ――に行った時だった。
そこで会った人と軽く話していると、不意にソレは起こった。
まるで瞳から光が消えるように、突如虚ろな表情となったその目の前の男性は、俺達に何も告げるでもなく、突如ふらりふらりと歩き出す。
そう、“リセット”だ。
一瞬戸惑ったものの、ああ、これがそうかと思いながらその男性の後を追い、彼の動きが止まった所で再び話しかけた。
返って来た言葉は――『おや、見ない顔ですね』。

解っていは居た。解っていて尚話しかけた……はずなのに。
その時、その瞬間、俺はものすごく、キモチワルクテ。
そう、解ってるんだ。この世界のこの現象は、誰に対しても平等に突きつけられるものなのだと言う事は。
それでもやはり、ソレに酷似した現象を知っている身として。それをこうして実際にまざまざと見せ付けられるというのは、とても、すごく――。
自分すらも予想だにしなかったナニカが、腹の底から込み上げてきそうなキモチワルサを感じて。

咄嗟に見た、隣。

その横顔。

抑えて、抑えて、抑えて抑えて、それでもにじみ出てしまった様な、そんな身につまされた様な“哀しさ”を浮かべた表情。

それを見た瞬間。己の内に浮かんだモノなど、何もかも飲み込んだ。
そこに至ってようやく気付いた自分が情けない。

――そうだろう。この世界の、この現象を目の前で見て、一番辛い想いをするのは誰であろう彼女――今現在エターナルである、ユーフィー、なのだから。

……彼女は俺達、旅団や学園との関わりが深い。

その関わりが深くなればなるほどに、繋がりが強くなればなるほどに、別れと言うものは辛くなるだろう。

それでも、その『別れ』が普通のものであれば、いつかまた再会する期待もあろう。

だけど、エターナルは……“渡り”は、その“再会”の芽すら摘んでしまう。そう、ユーフィーが学園や旅団の皆と別れ、そして再び皆と会った時――それは再会ではないのだ。

まるで、今目の前にいる男性の様に。『久しぶり』ではなく、『初めまして』になるのだから。

目の前の男性に別れを告げ、二人並んで歩きながら、ユーフィーの頭に軽く手を乗せ、さらりとした髪を撫で付ける様に梳いてやる。

多分それで、俺が何に気付いたのか解ったのだろう。ぽつり、と漏らす様に、ユーフィーは言う。

「この世界に居ると……まるで何度も何度も“渡り”を繰り返している様な気がして、少し……怖いです。

こうして一歩歩く毎に、誰かの記憶から消えていって……いつか、学園の皆さんや、旅団の皆さんや……祐兄さんにも、突然忘れられるんじゃないか……そんな風に思ってしまうんです。……皆さんとお別れしないといけない日は必ず来て、その時には、あたしが居た事自体が“無くなって”しまう事は覚悟しているんです。けど……この世界にいると、その“いつか”が直ぐ側に潜んで居る様な気がして……」

足を止める事なく訥々と語る彼女の、その言葉は何よりも重くて。
くしゃり、と、撫でる手を強くする。

「……俺は、忘れないよ」

言わずにはいられなかったその一言。これを口に出すと言う事は、きっと、俺の“未来”を一歩確定に近づけるだろう一言。それでも……彼女をこのまま、沈んだ表情にさせて置くぐらいなら、と思ってしまったから。

「……忘れちゃいます。そういうもの、なんですから」
「それでも、忘れない」

まるで駄々をこねるように——自分でもそう思うような言い方をする、そんな俺に、彼女はきょとんとした顔を向けてから、「仕様がないなぁ」と言う様に、くすりと微笑んだ。

「……それでも、忘れちゃったら？」
「その時は……」
「……その時は？」

それはきっと、“忘れる側”からの勝手な言い分で、それは間違いなく、“忘れられる”方にしたら、辛い事だろう。
だけど。それでもなお側に居たいと思える人だったとしたら？

「もう一度、出逢えばいい」

俺の言葉が予想外だったのだろうか。「え……？」と、呟いて、俺の顔を見てくる。

そんな彼女へ言葉を続ける。

全て忘れ去られて、無かった事にされて。でも、それでもなお、離れたくないと思う人が居たらどうするのか。楽しい日々を共に過ごしたいと思ってしまったら、どうすればいいのかと、考えていた事。

こう思えるのは、きっと俺が“まだ”忘れる側の存在だから、なんだろうけれど。

“渡る”存在になる、と言う事――『調和』と夢の中で出逢ってから、ずっと考えていたこと。

「……もう一度出逢って、もう一度話をして、もう一度、沢山思い出を作ろう」

ああ、認めよう。曖昧に考えて、自分を誤魔化すのはもうよそう。それは、確信に限りなく近い想像。確定に限りなく近い予想。

きっとこのまま『調和』の願いを蹴って、『ログ領域』で『世界を渡る扉』を開かなければ、その未来は外れるだろう。けど、俺はもう彼女をあそこから出したいと思ってしまっている。助けたいと考えてしまっている。俺の旅に同道し、『世界』を見たいというその願いを、叶えたいと思ってしまっている。

前に何となく考えた事。

俺が、“この世界”に転生したのは、彼女や『観望』が強く願ったから。……そんな、運命を越えた『縁』の力を、信じてしまっているから。

別にそれが、おいそれと、簡単に考えて良いものだなんて思っていないし、軽く考えているわけでもない。けど。

……どうにもユーフィーの事を気に掛けてしまうのは、彼女と暗闇に独り浮かぶ『調和』を重ねてしまうからなのか。それとも……『調和』と『悠久』を通じて、ユーフィーと『縁』が繋がっているのを、感じてしまうからなのか。

「……もしも、それでも不安なら、強く願え、忘れないでと。強く想え、思い出して、と。……知ってるかい？　強い願いは、想いは、時に“世界”を超えるんだ」
「……想いの力は、世界を……」
「そう。だから、ユーフィー。君が願うのなら。想うのなら。……例え忘れてしまっていたとしても、俺は世界の理を超えて、軛（くびき）を打ち破って、君の事を思い出そう」

そう、いつか、でも確実に、俺は――エターナルになる。

「だから俺は、君を忘れない」
「……約束……ですよ？」
「ああ……約束だ」
「……はいっ！」

先程までとは違う、どこか吹っ切れた様な雰囲気の返事を聴き、もう一度、くしゃりと彼女の頭を撫でた。

……
……
……

この世界に来て五日が経った日の夜、神剣使い全員に召集が掛けられた。用件は言うまでもないだろう。改めて、「この世界の事について」だ。

校長室に入ると、前回と同じように俺が最後だったらしく、全員が揃ったのを見たサレスが、苦い顔で口を開く。

「……さて、皆も充分にこの世界を“堪能”したと思う。私にしても、正直予想以上だった。……改めて訊くぞ、絶。この世界は“何”だ？」

「俺が言えるのは前と変わらない。この世界は既に滅びを迎え、『浄戒』の力をもって時間を巻き戻し、押しとどめ、繰り返し、その滅びを回避する術を探している。……言っただろう？　『歪んだ世界』だと」

問われた暁は静かに首を振り、答えた。

「一日に満たぬ時間を繰り返す、夜の明けない世界。時が来れば記憶がリセットされ、虚ろな顔で“立ち位置”を戻し、変わらぬ“今日”を繰り返す人々。……お前達もこの世界の歪（いびつ）さは肌で感じたはずだ」

暁の言葉に、俺も内心「全くだ」と返していた。

昨日目の前で起こった、今しがた暁が言ったのと、全く同じ現象が思い出されて辟易する。

……実際に自ら体験してみて、強く思う。俺は、この世界が――嫌いだ。

「けど、絶。滅びを回避する手段を探しているって言っても、この世界の人たちはただ毎日を繰り返すだけで、そんな事をしては居なかったぞ？」

「ああ。この世界の住人は、この世界を維持する為に“生かされている”に過ぎない。滅びを回避する手段を探しているのは『セントラル』と呼ばれる存在だ」

「……『セントラル』……。確か、『シティ』の最奥にある、この世界の中枢を担う場所だって、スバルが言ってたな」
「スバル殿が言っていたのと意味合いは違うでしょうが、正しくこの世界の『中枢』を担っているのですね」
スバルとの会話を思い出しているのだろうか、考え込みながら言う世刻に、カティマが「なるほど」と頷いた。
「じゃあ、『浄戒』もそこに？」
「だろうな。だが間違いなく、『浄戒』を手に入れようとするなら、戦いになるだろうな。それも、この世界の全ての人間と、だ」
「……確かに、彼等にしたら、俺達は“侵略者”ですもんね」
後を継ぐ様に言った俺の言葉に答えた、世刻の言葉に皆の表情もまた暗くなる。
それもある。けど……残念ながら、俺の言いたいのはそうじゃないんだよ。
「それもあるが……」
「それもって事は……他にも理由が？」
問う世刻へ頷いて返し、俺が告げるのはこの世界の真実。
「……この世界の人間は、『セントラル』に逆らえないのさ。スラムの人間だろうがなんだろうが、『セントラル』の命令があれば、彼等は俺達の敵になる」
「……どう言う事？」
「この世界の人間は、皆身体の大半を機械に置き換えた、言うなればサイボーグ……いや、アンドロイドの様な存在なのさ。だから『セントラル』からの命令があると、それに従う。コンピュータが入

力されたコマンドを実行するように、な」

愕然とした空気。

皆が皆、俺の言葉に呆然とした表情を浮かべている。

想像だにしなかったのだろう。この世界の人々が、須らく機械の身体を有しているなどと。それゆえに、いざとなれば自らの意思に関わらず、この世界を守るための『兵』となることを。

「最低限の有機体を残し、生命維持に必要な機能を機械へと移し変えた、滅びた世界を存続させる事を夢見る『セントラル』と言う世界の残滓が見る夢の住人たる人形達……」

ぽつりといった暁のナナシの言葉に、再び部屋の空気は静寂に包まれる。

そんな中、俺の前に進み出た黒の巫女は、ひたと俺の目を見据えてくる。

「ねえ、祐……。この世界の人たちって、本当に“生きてる”って言えるの？」

ゼゥのその問いは、「そんな機械の身体で」と言う意味ではないのだろう。

緩やかに滅びへ向かいながらも、命を掛けて、賢明に戦い続けたクリストの巫女達。

真実がつまびらかになり、その大きすぎる敵が立ち塞がっても、最後の最後まで足掻き続けた人々。

彼女達にとって、この世界は……世界を維持するために。その為だけに存在し、『セントラル』の管理の下に同じ日々を繰り返すだけの人たちは、やはり、良い感じはしないのだろうか。

ここで『否』と答えたら、皆の心は、幾許かは楽になるのだろう

か。
そう思った、けど。

「そう……だな。生きていると思うよ。例え同じ時間を繰り返させられるだけだとしても。それでも……この世界で、彼等は生きている」

いくら時間を巻き戻されて、何度も同じ時間を過ごしているのだとしても。記憶がリセットされて忘れてしまうのだとしても……それでも、心の……いや、魂のどこかには、過ごした分の記憶ってのは刻まれるんだろう。だから、生きている。
例え身体が機械だとしても。本質の部分を『セントラル』に握られているのだとしても。

「この世界が滅びたのは、ゼゥ達の世界や、暁の世界のように他者に滅ぼされたわけじゃなく、純粋に世界の寿命なはずで。そんな滅びた世界を生かし続ける……それが良いことなのか悪い事なのか。正しい事なのか間違っているのかなんてのは、俺には判らない。けど、それでも……俺は、彼等から『浄戒』を奪う。死に行く仲間を生かすために」
「……それでも私は……この世界はあまり好きになれない」

俯きながらぽつりと漏らすゼゥの言葉に、苦笑が漏れる。何というか、気持ちは解るんだよな。

「ああ、俺もだよ。とは言えまぁ……話し合いで解決できるなら、それが一番なんだろうけどな。例えば、この世界の人たちを別の安全な世界に移住させて、『浄戒』の力を譲ってもらうとか」
「そうねぇ……けど、話を聴く限り、『セントラル』にとっては『この世界』を存続させる事が重要なように感じるし……この世界そ

のものを見捨てる、と言う行為は取らないんじゃないかしら？」
「それと祐。そこは『俺』ではなく『俺達』と言うべきだな。少なくとも吾とナナシ、それにフィアは何があろうと汝と共にあるのだから」
ヤツィータの言葉に頷きつつ、レーメに「ありがとう」と言った所で、俺の前に居たゼゥの隣に、ミゥ達、他のクリストの皆も集まってきて、ミゥが口を開いた。
「……祐さん。この世界の有り様が正しいのかどうかなんて、私達にだって解りません。この数日を実際にこの世界で過ごしても、です。けど、きっと自分達の世界が失われるのを守りたいって思うのは、少なくとも間違った事ではないんだと思います。けどそれは、私達にとっても同じ事で……だから私達も、譲れないもののために戦おうと思います」
「だが正直いって私達は、暁のためにとは割り切れない。なにしろ、つい最近まで敵だったのだからな」
ルゥの言葉には、まあそうだろうと思う。世刻や永峰達の様に、前の世界で友人だったのならともかく、彼女達にとっては接点が何も無かったんだから。
けど、じゃあ彼女達がこの世界と戦う事の理由は？
そう思ったところで、ルゥが言う。
「だから、我々は、祐。君のために戦おう。暁を救いたいと思う、君のために」
暁には悪いと思ったが……俺のため、なんて言ってくれたことが、すごく嬉しかった。
だから、彼女達へ「ありがとう」と返して、けど、その前にやは

り一度この世界の者……『セントラル』、ひいてはショウと話し合いはした方がいいだろうと――やはり避けられる戦いは、避けた方がいいだろうから――、サレスに言おうとした、その時、その瞬間――それを感じた。

今まで幾度も幾度も味わった感覚。

「これはっ！　神剣反応……この感覚、ミニオンかっ！！」

皆の考えを代弁するサレスの声が響く。

よりにもよってこのタイミングで、と思わざるを得ない。放っておけばものべーも敵に襲われよう。それは断じて避けなければならない以上、迎撃にでねばならないだろう。だが、それはすなわち、この世界で神剣の力を振るうと言う事で……。

そうそれは、この世界での戦いの始まりを意味していた。

永遠神剣之章：５３．開戦、未来の世界。

皆が集まっての会議中に現れた、ミニオンと思わしき神剣反応。
「光をもたらすもの」であろうそれを迎撃するためにものべーから飛び出した俺達の目に映ったのは、予想に違わぬ、何処からともなく現れたミニオン達と、それと交戦するスバルとショウの二人の姿だった。
思ったよりもミニオンの数は多い。スバルとショウの二人に任せるって訳には、やはりいかなさそうだ。

「俺達も行くぞ！」
「応よ！！」
「任せて！　行っくぞおお！！」

ミニオンへ向けて駆ける世刻と、それに応えて世刻に並び、追い抜く様に突っ込むソルラスカとルプトナ。
ってかあいつ等、勢い良く突っ込み過ぎだ。これでスバルやショウだけで片付く程度の敵の数だったらどうするつもりだったんだ…
…ったく。
ちなみにヤツィータとポゥ、暁はものべーに居残りである。
ものべーの護衛ってのもあるが、暁の場合はその存在が「光をもたらすもの」にバレているのかが明確ではないためってのが一番の理由だな。
……さて、仕方ない、覚悟を決めるか。俺も他の皆と共に世刻達の後に続いてミニオンへと向かいながら、スバル達の様子を見やる。

「くそっ！　何なんだよ、こいつらは！」

そんな言葉と共に放たれた、ショウの弓型永遠神剣の一撃は、お

よそ弓から放たれたとは思えない様な規模のマナの弾丸と化し、三人程のミニオンを纏めて吹き飛ばす。

「解らないけど、兎に角やるしかないよ！」

そう言いつつ放たれたスバルの弓形永遠神剣の一撃もまた、ショウと変わらぬ威力を持ってミニオンを蹂躙していく。

……二人とも『浄戒』の力を分け与えられて強化されてるのは解ってたが……コレほどとは。

「このあとアレを凌がないといけないのか……」

向かってくる青ミニオンを斬り捨てながら、思わず口をついたそんな愚痴に対し、ナナシが「それなのですが……」と声を掛けてきた。

「どうした？」

「はい。確か、ショウはともかくスバルがこちらに敵対的行動を取るのは、『セントラル』からの干渉のせいでしたよね？」

確認するようなその問いに頷いて返す。と、彼女は予想だにしなかった提案をしてきた。すなわち――。

「その干渉、私が妨害（ジャミング）してはどうでしょうか？」

「出来るのか？」なんて愚問はしない。彼女がやるというからには出来るのだから。……いや、そもセントラルにしろスバルの身体にしろ、ソレが機械である以上、ナナシに干渉出来ない道理はない。

……ならば、俺がすべき返事は只一つ。

「……うん、頼む」
「イエス、マスター」

ならば俺に出来る事は、さっさとこの敵を倒すことかと、次のミニオンへと向かう。と、その前に永峰がこちらに駆け寄って来るのが見えたので足を止める。彼女には、事前にものべーに何かあったら教えてくれるよう頼んである。

「あ、先輩」
「何かあったか？」
「えっと、ものべーが近くにミニオンが来たけど、暁君達が倒したって教えてくれました」

……この段階の「光をもたらすもの」の攻撃は、あくまでこの世界と俺達の戦いを促すための呼び水である、はず。……その段階でものべーにちょっかいを出してきた……？　……となると、これは……。

「恐らく、ゼツの事はばれていて、それの最終的な確認、であろうな」

レーメの推測に、「だよなぁ」と同意する。
……となれば、「光をもたらすもの」のことも注意を払わないといけない、か。
兎角今は目の前のミニオンだ。永峰に礼を言って、次の敵へと向かった。
……まったく、物事そう上手くは行かないもんだな。
……

……
……

ミニオンの最後の一体をスバルの弓が射抜いた。そして次の瞬間――ひしひしと、今度は俺達に対して打ちつけられる、殺気。

「……おい、どうなってやがる？」
「この殺気……これは一体？」

ソルラスカとカティマの疑問に答える様に、スバル顔から表情が、瞳から光彩が消え――弓を引き絞り、マナを集め出した。

「え、ちょっと！？」
「どうしたんだよ、スバル！」

斑鳩と世刻の叫びにもスバルはその弓を降ろす事は無く、ただ静かに、ポツリと、ソレで居て通る声で呟いた。

「……上位の神剣反応を確認。異世界よりの『敵』と認識。セントラルは厳戒態勢に移行……スバル、ショウ、両ユニットは、敵を排除します」

やはり皆、どこか半信半疑な部分はあったのだろう。けど、目の前の彼はそう、確かに、機械の様で。

その様子に、全員が息を呑んだ。その隙を、今のスバルが逃すはずもなく、放たれる濃密なマナの一撃。

俺はその前に皆から一歩先へ出て、『観望』は剣に。マナを巡らせ、漲らせ――放たれたスバルの一撃に合わせ、ぶつけるように、思い切り振り抜く！

ゴゥッと、ぶつかり合ったマナが奔流となって吹き荒れ、呆けていた全員の意識を戻す。

「……敵を、排除します」

そして続けざまに放たれた第二射は――、

「このおおお！！」

俺と同じ様にして振るわれた世刻の一撃で防がれた。

ぶつかり合った力の余波は、嵐のように吹き荒び、その直近に居た俺達やスバルを打ちつけた。

いや何て言うか、こっちの渾身の一撃と同じ規模の攻撃乱発できるとかねーよ。

そして次いで近くで起こる炸裂音にそちらを向けば、ショウの攻撃を防いでいるユーフィー。

彼女は……うん、流石に俺達より遥かに余裕があるな。

目が合ったユーフィーはニコリと微笑むと、逆に攻め込む様に前に出る。

無理をするなよ、と想いを込めて彼女の顔を見ると、解ってますと言う様な感じに見返して来た……気がする。まあユーフィーなら大丈夫か。

それにしてもセントラルめ、交渉の余地無く問答無用かよ。

「スバル！　おい、スバル！！　……くそ、やっぱり駄目なのか……？」

こちらではスバルに対して世刻が呼びかけていて。

……ああそうか、さっきの世刻との力のぶつかり合い、それで一時的にセントラルからの干渉が途切れるんだったか……？　だった

ら。

「世刻、スバルに呼びかけ続けろ」

「けど……」

「……記憶ってのは、表面的なのは結構簡単に忘れたりするもんだけどな。印象に残ってる様な事ってのは、案外覚えてるもんだ。……例えリセットされてループしていたとしても。どこかに消えきらずに……そう、例えば魂に、記憶は残る」

「……解りました。俺も、諦めません」

俺の言葉にしかと頷いた世刻は、スバルに向けて言葉を続けた。

「……何で俺達が戦う必要があるんだよ、スバル！　今まで俺達を助けてくれて、この世界を出てみたいとか、色々話してくれた事も全部本当に忘れちまったって言うのかよ!?」

世刻が叫ぶ様に訴える。その叫び対して、スバルは顔を押さえ――苦しそうに。

「……この世界を、出る……？」

「そうだよ！　異世界から来たって言う俺達の話を聞いて！　それも覚えて無いのか!?」

「……異世界からの、旅人……そうだ……望君、貴方は……」

一瞬、スバルが正気を取り戻そうとした、その時だった。

「ちっ！　スバル、そいつらは敵だ！　セントラルの指令を思い出せ!!」

ユーフィーと交戦しているショウの張り上げた声に、

「……脅威レベル、最大と確認。セントラルの指令に従い、全力で排除します」

再びその武器――永遠神剣『蒼穹』だったか――を構える。

その上げた顔、頬は、先程の世刻との攻撃のぶつかり合いで出来たのだろう、皮膚がはがれるように裂け、そこから赤褐色の中身が見えていて。

「……あれは……」

「ふむ。この世界の住人が機械の身体と言うのは、これで確定のようじゃな」

ナーヤの言葉に、ピリピリと、皆の緊張が高まるのを感じる。俺の言った「セントラルの命令があれば、世界の住人すべてが敵に回る」と言うのが、今実際に確定し……いや、もう既にその状況になっているのだから。

「……状況を整理する必要がある、か。ここは一旦退くのが賢明だな。全員、ものべーまで走れ！」

「了解っ」

「望、お前も早く行け！」

「……無茶言うなよ！」

サレスの言葉に皆がものべーに向かう、そんな中、スバルに神剣を向けられた世刻は動けずにいた。

確かに先程、スバルは世刻に対し「脅威レベル最大」と言った。そんな対象の世刻が動けば、恐らく即座に攻撃をしかけてくるだろう。

……だったら、動ける状況にするだけだ。

「ナナシ！」
「はい！」

瞳を閉じ、集中したナナシの全身が、キンッと淡い光を放つ。
その瞬間――。

「あ……ああ……ああああああ！！！」
「スバル！！」

頭を押さえ、苦しむ様に声を上げるスバルは……確かに、その瞳に理性の色を取り戻していて。

「……望……君……行ってくれ……！」
「あ、ああ……けど……」
「世刻。……申し訳ありませんが、そう長くは彼を今の状態にしていられません」
「……解った」

ナナシに促されて、その場に背を向ける世刻とサレス。
ショウを抑えてくれていたユーフィーは……うん、大丈夫そうだ。
ショウの攻撃を打ち返して、怯ませてからものべーに向かったようだ。
それを見て、俺もその場を後にしようと――。

「……クソッタレが！　させるかよ！」

あ、やば。
苦し紛れに放ったであろう、ショウの一撃がこっちに――。
かわせるか、と思ったその時、

「ショウ、駄目だ！」

その一撃は、俺と攻撃の間に飛び出したスバルにぶつかり、盛大な爆発と濛々たる粉塵を上げていた。

……俺の気のせい、かも知れないけど、一瞬、ちらりとスバルの苦しそうだけれど、それでも笑顔が見えた気がして。

俺は急ぎ、その場を後にした。

永遠神剣之章：５４．撤退、そして。

スバル達から離れ少し行った所で、待っていたらしい皆と合流し、先程あった――ナナシの力で一瞬正気を戻したスバルが、ショウからの攻撃を庇って撃たれた――事を説明して、恐らくショウはスバルの治療に退くだろうとの予想にサレスは、俺達に対する追っ手が無い事からそれを肯定する。

そして永峰が何とか場所を移動させた――現在ものべーは『浄戒』の力で押さえつけられ、上手く動く事が出来ない――ものべーへと帰還し、今後の行動を決める事となった。

生徒会室へ集まった面々。この世界に来てからの毎度の如くか、俺と暁による補足から始まる。

つまり、スバルとショウの異常な強さについて、だ。

すなわち、彼等二人が『浄戒』の力を宿している、と言う事なのだが。

「じゃあ、『浄戒』を得るには彼らを倒すか、説得するのは必須ってことか……」

そう結論付けた世刻に頷いて返す。

恐らく、セントラルの支配から抜けさえすれば、スバルは説得に応じてくれるだろう。問題はやはりショウ、だな。

もとよりセントラルに支配されている訳でないからなぁ……。

「では、それを踏まえて状況を整理するぞ。

まず、我々の最終目的である『浄戒』は現在三つに分けられ、それぞれ世界の維持、スバルとショウの力の源に使われている事。この世界の維持管理は『セントラル』が行っている事。この世界の住

人全てが『セントラル』の支配下であるアンドロイドであるため、住人達の中に味方は居ないという事、か」

淡々と現状を述べていたサレスがそこで言葉を区切る。

「何というか、最悪一歩手前って感じよね」とはヤツィータの言。それには皆も同意せざるを得ない様であるが。

「後は作戦ね。どうしたものかしらね……」

「それなのですが……一つ、良いでしょうか？」

そう声を上げたのは、暁のナナシ。

彼女は「作戦と呼べるようなものでもないのですが」と前置きし、

「こちらの持てる全戦力をもって、『セントラル』への一点突破。これが最善かと思われます」

「ちょ、ちょっと待って！　全戦力って……ここが襲われたらどうするのよ!?」

「……落ち着け、斑鳩。ナナシ、もちろんそう提案する理由があるんだろ？」

思わずと言った風に声を荒げた斑鳩を抑え、ナナシにそう問いかけると、彼女は「はい」と頷く。

「まず、この世界の他の住人は、世界に掛かる『浄戒』の力と、セントラルによって外されたリミッターによって強敵ではあるでしょうが、その中に、スバルやショウ程の力を持つものは居ない事が挙げられます。そして、向こうの守りの要になるであろう、スバルやショウ、ガーディアンと呼ばれた龍、そして居るのであれば、ミニオンの様な存在。それらは私達の迎撃に向かわざるを得ないでしょう」

「……成るほど。神剣に対抗できるのは神剣のみ、ですか」

ぽつりと言われたカティマの言葉に、「その通りです」と頷くナナシ。

……それにしても、『剣の世界』でそれに散々苦労しただけあって、流石に今のカティマの台詞には実感が篭っていたな。

……と思っていたら、顔にでも出ていたか、ふと目が合ったカティマに苦笑された。

「……そのような訳で、現状ものべーが素早い立ち回りが出来ないのを考えると、今回に限っては我々と共に来ない方が安全と言えるでしょう」

無論、その為にも我々が出来るだけ派手に、敵の目を引き付ける必要はありますが、と加えて言葉を締めたナナシに、斑鳩は納得した様で。

そんな中、世刻が永峰に話しかける声が聴こえた。

「……意外だな。希美は反対するかと思ってたんだけど。『皆が危険になる』って」

その台詞に、他の皆も同意する様にうんうんと頷いて、そんな皆の様子に永峰は苦笑を浮かべる。

「ん……そう言う気持ちは勿論あるよ。けど……」

「けど？」

「……この世界に来る前に、青道先輩が集会を開いて、学園の皆は危険があるかもしれない事を承知で一緒に来たでしょ？　『剣の世界』で戦うことを選んだ時も、『魔法の世界』で戦う事を選んだ時もそうだけど……そうやって、“自分で”選んだ時の学園の皆なら、

大丈夫だって思うから」

それを受け、サレスはひとしりきり考えると、

「ふむ……確かに、今のナナシの案が最善か。……もし他に何も無いのであれば、今の案で行こう。どうだ？」

そう皆に向かって問いかけた。

――さて、どうだろうか。……いや、まず十中八九は今の案で問題は無いんだろうが……気になるのはやはり、『光をもたらすもの』だろう。

とは言え、動くかどうかすら定かではない連中だからなぁ。警戒しないわけには行かないが、それに警戒しすぎて目の前の敵に遅れをとっては、それこそ本末転倒だ。かと言え、動くかもしれない、と言う恐れが有る以上、何も備えずに居て手痛いダメージを受けるってのも愚の骨頂って感じだし。……どーしたもんか。

……いやまあ、どうするもこうするも、間をとって『警戒しすぎずに警戒する』しかないのだろうが。

一応それは言っておいた方がいいだろう、と思った所で、皆の視線が俺に集まっている事に気付いた。

「……えっと……？」

「いえ、何か考え込んでいらっしゃったので、何かあるのかな……と」

ああ、そう言う事か、と、ミゥの言葉で納得する。

そして今しがた思い至った、『光をもたらすもの』の事を告げる。

――もしかしたら連中が動くかも知れない、と。

「……ふむ。今回の開戦の切欠になった、ミニオンの襲撃、か。私

が予想するに、アレはこの世界の者達と我々を戦わせる為に行われた事だろう？　……その上で、さらに『光をもたらすもの』が攻撃を仕掛けてくる……か」

「ああ。さっきの戦闘中、ものべーにミニオンの小隊が接近して、暁たちが迎撃しただろ？」

ルゥの言葉に頷き、先の戦闘中に気になった事を問うと、それを知らせてくれた永峰と、実際に撃退した暁とポゥ、ヤツィータが頷く。

「俺の予想では、アレは恐らく威力偵察。暁絶が俺達と共に行動しているかどうかの、最終確認ってところだろうな」

「……成程。『光をもたらすもの』にとって、今現在障害と成り得るのは、我々旅団と絶ぐらいだった。その両者が行動を共にしているのであれば……この世界において、我々がこの世界と戦闘に入る時というのは、奴等にとって攻撃の絶好の機会と言う事になる、か」

「そう言う事。まぁ、恐らくものべーを人質に取る様な事はしないとは思いたいけどな」

「けど……かといって戦力を残す訳にはいかないと思うけど。……エヴォリア達を撃退できる戦力を残すのならともかく、下手に少数を残すのは、ものべーに攻め込む理由を与えるだけで、ピンチを招く結果になってしまうでしょう？」

ヤツィータの意見に頷く。……そう、そこが考えどころなんだよな。

結局の所、戦力を残すのならしっかりと。残さないのなら思い切って……ってするしかないんだろう。あと出来る事は、有事の際に直ぐに駆けつけられる体勢を整える、ぐらいだろうか。

「そうだろうなぁ……ってわけで、ものべーには……そうだな、俺

のノーマと斑鳩のケイロン、ソルの黒き牙を残して、何か有ったら時間稼ぎと俺達への即時連絡をしてもらうってのはどうだ？」

俺の言葉にふむ、と考え込むサレス。

そして、「その三体を選んだ理由は？」と問いかけてきた。もちろん、理由はある。

「ケイロンと黒き牙は、まずその主以外に対しても話す事ができるだろ？　何か有った時に、生徒達の避難誘導なんかもしてもらえるし、どちらも脚が速いから、少数でも広範囲をカバーできるだろう。そしてノーマなんだが……ノーマは俺と視界の共有ができる。つまり、ノーマが見ている光景を俺も見る事ができるんだ。てわけで、何か有ったらそれで状況の把握ができるから……だな。この三体を選んだのは」

「……ふむ。良いだろう。沙月もソルもそれで良いな？」

「ええ」

「ああ、俺もいいぜ。……にしても祐、よくクロが喋れるって知っていたな？」

……ソルラスカの言葉に、確か黒き牙は喋れないと思っている相手に話しかけて、驚かせるのが好きなんだったか、と思い出した。

恐らく『光をもたらすもの』……エヴォリアにしろベルバルザードにしろ、俺達を直接狙ってくるだろうから、無駄な備えになるんだろうが……まあ、何もやらないよりは良いだろうさ。

『精霊の世界』で町を捜した時や、地上で物資調達をした時の様に、『観望』を粒子状にしてものべーの周囲に貼り付けておくのも考えたんだが……それだと下手をすると、「神剣反応がするところに敵が来たら、ものべーが居た」なんて事になりかねないからなぁ。

「それじゃあ、早苗さんに報告してくるわね。流石に何も知らせな

い訳にはいかないでしょう」
「頼む。各自はそれぞれ休憩に入れ。説明が終わり次第集発するぞ」
そして、サレスのその言葉を合図にして、その場は解散となった。

「いいか、これより我々はシティを攻略し、『セントラル』へと向かう。但し、一切の隠密行動はするな。あくまでも我々に敵を引き付けなければ、それだけものべーが危険に晒されると思え」

三十分程後、グラウンドに集まった俺達は、サレスのその言葉に各々頷き合う。
軽く目を瞑り、息を深く吸い、吐く。
これから行われるのは、“守るため”の戦い。俺達にとってはものべーに残る学園の皆を。そして、『浄戒』を手に入れて暁を助けるため。
ショウやセントラルにとっては、この世界や、“今まで”を守るための戦い。
セントラルの指令やショウの様子からすると……話し合いの目は無いのかもしれないな。
そんな考えが浮かんで……頭を振って否定する。
そうだ、少なくとも、正気にさえ戻ればスバルとは理性的な話しができる。そうなれば……ショウだって、説得されるとは言わなくても、話し合いのテーブルにつくぐらいはしてくれるかもしれない。
だから、諦めるな。

「……よし、行くぞ！」
「応！」

――願わくば――誰もが笑って終えられる結末を迎えられる様に。

永遠神剣之章：５５．未来の世界、初戦。

ものべーから離れてしばし、スラムの中をシティへ向けて進軍する俺達。そんな俺達を迎撃するために、ミニオンの様な姿の兵士達……確か『ガードナー』だったか？　が立ち塞がる。
そして、それに混ざる様に時折襲い掛かってくる、スラムの住人達。

「……」

気合の声を上げるでも、怒号や雄叫びを上げるでもなく、ただ淡々と襲いかかってきた住人の、振るわれた武器をミゥは『皓白』で受け止める。
その顔は苦しそうで――否、事実苦しいのだろう。無論……肉体的にではなく、精神――心、が。
実際、ミゥを始めとしてクリストの皆の動きには、いつもと違い精彩が欠けているように見える。無理も無い、とは思うが。
「数の暴力」なんて言葉があるが、実際集団と言うのは脅威だ。それは、互いの実力の差が小さくなればなるほどにそうなのは、言うまでも無いだろう。
つまりは――

「ミゥっ！！」

住人の攻撃を受け止めた際に、一瞬動きを止めてしまったミゥの隙を突き、背後から青のガードナーが接近するのが見えた。
咄嗟に駆け出して彼女と敵の間に割り込み、その振るわれた剣を剣状の『観望』で受け止め、そのまま剣を逸らし、空いた胴に斬り付け、蹴り飛ばす。

その間に住人を無力化したらしいミゥと、背中合わせに立ったところで、彼女から声が掛かった。

「あ……ありがとうございます、祐さん」

「礼はいいよ。それよりミゥ……いや、ミゥだけじゃない、皆も」

そう声を掛けると、周囲で戦っていたルゥ達が、敵を牽制しながらこちらに注意を向けた。

恐らく――俺の予想に過ぎないけれど彼女達は、俺達に対して襲い掛かってくるこの世界の住人達に、自分達の姿を重ねてしまっているのだろう。

思えば、彼女達が「戦う」と言ったときの理由も……暁のためではなく、俺のためにと言ってくれた事も、言い換えれば、より親しいもののため、としなければ、戦う決心がつかないから、とも言えるんじゃないだろうか。

「……戦えないんなら……無理はするな。下がっていてくれていい」

戦うと言ってくれた彼女達にかける言葉ではないのは解っている。侮辱された、と思うだろうか。けど……それでも、彼女達が不必要な“傷”を負うよりはずっといい。

けれど彼女達は、怒るでも、ましてや頷くでもなく。

ただ一度、目を閉じ、小さく深呼吸をして。

「……ありがとうございます。もう、大丈夫です」

「ああ……すまなかった、祐。……君の為に戦う、などと言って、君に心配をかけたのでは意味が無いな。……全く、我が事ながら不甲斐ない」

ミゥに続いて言ったルゥの言葉に、「気にするな」と返しておく。

何というか、こちらの意を汲んでくれた事が嬉しい。
……俺としては、どちらにしろ彼女達に負担をかけさせたくないのは変わらないのだけれど。この世界はやはり……彼女達にとって、重すぎる。なら、俺に出来る事は？　……簡単だ、その負担を、少しでも軽くしてやればいい。

（……ナナシ、レーメ、行けるか？）
（……問題ありません、が……はぁ。まあ、もう何も言いません）
（まったくだ。とは言え、せめて後の事は考えて、余力は残しておくようにな）

呆れつつもしっかりと応えてくれる二人に感謝だな。
念話で「ありがとう」と言いつつ、周囲をぐるりと見渡し、ポイントを見定め――でかい目印を見つけた。……ガードナーの壁の向こう。優にこちらの身長の三倍はあるであろう巨体。……青きドラゴンの様な、その姿――守護者（ガーディアン）だ。
この世界に来た時に、スバル達からああいったドラゴンは、シティに住む『シチズン』を守るために存在していると言う説明を受ける。
実際はこうやって、侵入者を排除するための機構であるのだが……恐らく、『シチズン』を守るため、と言うのも事実なのだろう。
つまりは、前者はこの世界が滅びを向かえる前の。後者は今のこの世界の、と言う事だ。

……ああ、だめだ。あまり考えるな。……でなければ、俺はこの世界がますます嫌いになる。
だってそうだろう？　この世界が今の状況になっているのは、この世界から『マナ』が枯渇したからだ。
だと言うのに……あのドラゴンも、周りのガードナーも、須らく

『マナ存在』なのだから。
以前『精霊の世界』で、ロドヴィゴさん達に説明したように、マナとは『命』が産まれるための、根源的なエネルギーだ。
だというのに、これだけの……いや、これ以上の量のマナ存在を創ってなんているから……。

「……祐？」

俺の雰囲気から何かを察したか、声を掛けてきたルゥの頭をぽんと撫で……高さ的に丁度良いんだよな、彼女達の頭って。

「まぁ、ここは任せろ」

そう言うと、ミゥもルゥも、やり取りの間に近くに集まっていた他の三人もまた、一瞬きょとんとした顔で。
その間に、俺は守護者（でかいの）に向けて駆け出した。
クリスト達――否、他の皆よりも先へ。その間に一通りの補助アーツを掛け終え、敵の只中へ。激情の赴くままに、前へ前へ。

「なっ！　おい、祐！」
「青道君！？」

通り過ぎ様に、ソルラスカと斑鳩の声が聴こえた。悪いな、ここは好きにやらせてもらうさ。
突如飛び出した俺に反応し、ガードナー達が群がってくる。……となると、あたり一面敵だらけで。
本当に……よくもまあコレだけの量を創ったもんだよ、まったく！

「……こんなんだから、マナが枯渇するんだろうが！！」

振り下ろされる剣を、突き込まれる槍を注ぎ込まれる炎。四方八方から叩き込まれる攻撃の中、アーツによって拡大された思考力と、『観望』を駆使した『見切り』でわずかな穴へ飛び込み、いなし、かわし、防ぎながら斬り付ける。

“点”で見るな、“面”で見ろ。思考を、動きを止めるな。

ただ前へ前へ前へ！

そして――

「グルアアアアアアアアアア！！！」

轟く雷鳴の様な咆哮と共に、動き出す青き巨体。

「マスター、範囲に捕らえました！」

ソレを受け、待っていたナナシの合図に、

「やれ、レーメ！」

力ある言葉は、紡がれる。

◇◆◇

それはまるで、“舞い”の様で。

決しれ流麗ではない。けれども惹きつけられる、剣の舞。

沙月は、彼が突如敵に単機で突貫した事に驚きはしたが、それ以

上に、彼の動きに驚き、故に後に続く機を逃した。否、それは沙月のみならず、他の皆も、であったが。

「……いつの間に、ここまで……」

そんな言葉が、敵の只中で、縦横無尽に振るわれる攻撃を、只の一撃も喰らうことなく捌きいなし続ける祐の姿に漏れる。

「……本当に、相変わらず恐ろしいまでの成長速度ですね」

そんな声に振り向くと、そこには同じく、その“舞い”を見るカティマの姿。

その言葉に「まったくね」と頷きながら、沙月は軽く頬を叩き、前を見据え、己が神剣『光輝』を構える。

この戦いが始まってから、彼がクリストの皆を気にしていたのは解る。そして先程の叫び。彼がこの世界に激昂している、と言う事も。

とはいえ、それとこれとは話が別、と、沙月は小さく溜息を吐いた。

「けど、一人で突っ込むなんて無茶しすぎよ。……行きましょうか」

「はい」

同じく、神剣『心神』を構えたカティマが頷き返した、その時。

「グルアアアアアアアアア！！！」

「っ！　まずい、急ぐわよ！」

「待て、沙月！」

「ちょっ！　ソル、何よ！？」

遠方にいるにも関わらず、鼓膜を震わせる咆哮と共に、青き龍がその巨体に似合わぬ速度で祐へと迫るのが見え、援護に向かおうとした彼女達を、ソルラスカが制止した。

――それは言うなれば“野生の勘”とでも言えば良いだろうか。

そう、まるで大災害が起こる前に、野生動物が逃げ出すような、そんな感覚。

彼と同じ“感覚”を覚えたのは、ルプトナとワゥ。彼女達もまた、彼と同じ様に援護に向かおうとしたサレス達を留めていた。

そしてそれを裏付ける様に、次の瞬間、それは放たれた。

「『タイタニッククロア』」

祐のレーメの声が響き、一瞬の空白を経て――彼を中心に、世界が震撼した。

◇◆◇

まるで見えない境界線が引かれているかの様に、俺の周囲――斑鳩達の立つ位置より先の大地“のみ”が激震を起こす。

そしてその衝撃は揺れのみに留まらず、大地を破砕し、飛礫を巻き起こし、ガードナー達をこの世界の住人達を蹂躙した。

空を見やる。

そこには、タイタニッククロアの影響から逃れるように、その巨大な翼をはためかせる守護者の姿。

――けど、まだだ。

アーツの効果が切れる前に、オーブメントに填められたクォーツ

を交換する。無理矢理な使用法だが、仕方ない。
本来ならばクォーツに合わせた調整が必要なその行為は、ナナシの力によって瞬時に填められたクォーツに合わせたセッティングへ調整され、次なるアーツを撃ち放った。

「『グランストリーム』！！」

俺の発した声に続いて、巻き起こる暴風。
大気を切り裂く風の刃。巨大な気流の檻は、タイタニックロアによって巻き起こされた瓦礫を巻き込み、その暴風の檻へ囚われた者達を容赦なく打ち付け、空へ逃れていた守護者をも、大地に叩き落した
そして三度紡がれる、大規模攻撃アーツ。

「『コキュートス』」

ナナシによって放たれたそれは、周囲の温度を瞬時に奪い取り、大地を凍らせ、幾本もの氷柱を突き上げ、地に叩き落した守護者を縫いとめる。
……すべてのアーツの効果が晴れた時、そこにあったのは、立ち上るマナの霧と、その機械の身体を大破させられた住人達と、満身創痍の守護者の姿。
その守護者へ止めを刺そうと、一歩踏み出した時だった。

「ゴァァァアアアア！！」

苦悶の声にも似た咆哮と共に、その口を大きく開けた青き龍は、その姿に恥じぬものを吐き出す。
――ブレス！

「まずっ！」

咄嗟に張った障壁。と、その時俺の左右へ躍り出る影。

「って……ルゥに、ユーフィー？」

そして重ねられる、マナのブロック。それは守護者のブレスを防ぎきり――それを張った二人は、ふっと笑い合うと、守護者との距離を一気に詰め、次の瞬間には斬り伏せていた。

……何か最後の美味しいところを持っていかれた気分だが……まあいいか。

……っつーか、あのアーツの中を抜けてきたのかよ。

そう言うと、何を当たり前な事を、と笑うルゥ。

「……第一、君の魔法が我々を傷つける訳が無いだろう？」

いやまあ、確かにそうかもしれないけど……絶対にそうだ、とは言えないんだけどな。

ガリガリと頭を掻きつつ、……まったく、敵わんなぁと、小さく溜息を吐いた俺の元へ、他の皆も集まってくる。

……とりあえず前哨戦は終わりか。……まだまだ先は長い。頑張らないと、な。

……ちなみに、「一人で突っ込むなんて何考えてるのよ！」と、斑鳩に殴られたのは言うまでもない。

永遠神剣之章：５６．次戦、白と赤。

この世界を守護するガーディアンたる龍。その姿は、エターナルである『知識の呑竜「ルシィマ」』が、様々な世界へ送り込んでいる眷属の姿を模して創られている。

その姿は、よくあるファンタジーに登場する様な「ドラゴン」とは少々異なる。無論、ドラゴンと形容する様に、蝙蝠の様な翼に、太く長い尾を持ち、顔も爬虫類のソレであるのだが、その身体は滑らかで、それでいて硬質な鱗――否、皮膚に包まれ、筋骨隆々にして腕は長く、脚もまた然りである。

つまりその胴体は人のそれに近く、言うなれば……“人と竜のハイブリッド”。そう言えばしっくりくるであろうか。

その守護者達のうち、赤と白。

その二体が強襲してきたのは、青の守護者とガードナー達を退け、しばらく進んだ時の事だった。

出会い頭に、不意打ち気味に放たれた白の守護者のブレスを、咄嗟に張った俺と世刻の精霊光の障壁（オーラフォトンバリア）が受け流す。

と、それを撃ち終えると同時に、白龍はその翼をはためかせ、地面すれすれを滑空する様に一気に距離を詰めてくる。

「ゴァァァアアアア！！」

「甘いわ！」

大気を震わす咆哮と共に振るわれた、その白き豪腕を掻い潜り、ゼゥの『夜魄』が閃いた。――不見之剣（ミエズノケン）。彼女の剣術の一。正にその名に違わぬ、神速の抜刀術からの目にも留まらぬ速度の連撃は、着実に白き巨龍の肉体を削る。

そしてそれに合わせる様に、白の守護者の背後に忍び寄る影。

「我が刃の塵と消えろ……会者(えじゃ)、定離(じょうり)！」

振るわれた一閃は、白の守護者の背に深々とした傷を残し、前と後ろから挟み込む様に浴びせられた攻撃に、白龍はたまらずその場から飛び退る。

それに対し、追撃を掛けようとしたゼゥと暁だったが、その二人を抑える様に、白の守護者の背後に控えていた、赤の守護者がブレスを放つのが視界に入る。

放たれたブレスは大気を焦がし、世界を紅蓮に染め上げながら迫り来る。

「下がって！　『イミニティー』！」

それの前に飛び出したのは、ヤツィータだった。

彼女の張ったマナの障壁は、理力へ重点を置かれた赤の守護者のブレスを受け止める。

ドンッっと言う爆発音にも似た音を立て、拮抗する障壁と炎熱。

「くぅっ！」

一瞬苦しそうに顔をゆがめた彼女だったが、その表情は一瞬にして柔らかなものへを変わる。彼女の横に、小さな赤い影が並んだからだ。

「手伝うよ！」

「ありがと、ワゥちゃん！」

二重に張られた理力の結界は、赤の守護者のブレスを防ぎきった。

そんな様子を後ろから見ながら機会を伺っていた俺は、その衝突

の余波が消える前に、ブレスを放ち終えたばかりの赤の守護者へ駆け出す。

「『シルファリオン』！」

直後響いたレーメの声と共に俺の周囲を風が取り巻き、その加護を俺へと与えてくれ、アーツによって上昇した脚力は、赤の守護者がその体勢を整える前に、俺をその懐へ肉迫させる。

『観望』は大剣（グレートソード）へ変え――思い描き、なぞる動きは、黒の剣姫の、その太刀筋。

「剣神の一撃。その一太刀、借り受ける！」

掬い上げる様に、振り上げる！

それに対し赤の守護者は、懐に潜り込んだ俺を叩き潰さんとその腕を無理な体勢ながらに振り上げて。

次の瞬間、ズガンッと、凡そ剣と拳のぶつかった音とは思えない音を立てた互いの一撃は、俺をその衝撃によって数歩後ろへ下がらせ、対する守護者は振り下ろした腕を後方へとはじき返され、それに流されるように、その上半身の姿勢を僅かに崩す。

その瞬間、響くはナナシの一声。

「『ゲイルランサー』！」

アーツによって生み出された指向性を持った激風は、下から抉る様に、体勢を崩した赤の守護者の上半身へと叩き込まれ、その身を大きく仰け反らせた。

それは赤の守護者にとって、致命的とも言える隙である。そう、例え俺自身がその隙を突けないのだとしても、充分な。

次の瞬間、俺の脇を駆け抜けたユーフィーが、守護者の懐へと潜

り込んだ。

「氷晶の青、輝閃の白！　その完全なる調律よ！」

彼女は、マナを光の刃へと変換し、顕現させた大剣状の『悠久』を、袈裟懸けに一閃。続けて掬い上げる様に斬り上げながら跳躍し――

「『パーフェクトハーモニック』！！」

巨体を誇る守護者の更に高高度より、一気に撃ち降ろす！

腹を斬られた事によってその姿勢を僅かに前傾に戻した赤の守護者の、その後頭部へと炸裂した一撃は、先程の俺と守護者の攻撃の相殺時よりも派手な音を立て、巨龍の巨体を地に叩き伏せた。

流石に不利を悟ったのだろう、起き上がりつつ飛び立とうとしたか、大きくその翼を広げ――

「逃がしません！　『イミネントウォーヘッド』！！」

僅かに身体を浮かせたところで、その背にまるでミサイルの様な、幾本もの岩石の群れが突き刺さり、それらはその直後、連続した爆発を起こして再び守護者を地に叩き付けた。

そしてその瞬間、一気に距離を詰めるミゥとルゥ。

「これで――」

倒れながらにブレスを吐こうと、大きく口を開けた赤龍のその顔を、閃光と衝撃が包みこんだ。

更にミゥは、彼女の神剣『皓白』を――先端にマナが収束し、巨大な光のハンマーの様に変化したソレを、下から掬い上げるように

振るい――

「終わりだ！」

完全に浮き上がったその首を、ルゥの『夢氷』が叩き落した。

ザァっと、崩れるようにマナの霧へ変わっていく赤の守護者。

それを見やりながら振り返ると、どうやら白い方も片付いた様で、向こうと戦っていた皆がやってくる。

「こっちも終わったか。大きな怪我をした物は無いな？」

サレスの問に各々頷いて返したところで、隣に居た斑鳩が苦笑を漏らした。

「ないけど……流石にちょっと疲れたわね」

「全くだな。こうデカイのばかり来られるとな。一撃一撃が重過ぎるから、ガードナーを相手にするより精神的にキツイ」

「うんうん、そんな感じ」

と、そんな俺達の会話が耳に入ったか、サレスはふむ、と一つ頷き、

「……そうだな。ここで一度休息するか。とは言え、然程時間を取れるわけではないが」

その言葉に了承の意を返し、やはり皆も結構きていたんだろう、小さく安堵の息を吐く声がいくつか聴こえた。

…
……
……
「……なあ、祐。この戦いが終わったら俺と勝負しろよ！」
何事かを考えていたソルラスカがそんな事をのたまったのは、休息に入ってから十分程経った後の事だった。
「嫌だ」
「即答かよ！？」
ああすまん。今殆ど無意識に言葉が口を吐いていた。
けどまぁ、そりゃそうだろう。第一、俺がお前に勝てる訳がない。
そして何より面倒くさい。
そう言ったところ、上がった声はソルラスカのものではなく。
「待て、祐。やる前から諦めてどうする。……私の見たところ、君は決してソルラスカに負けては居ないぞ？」
「ルゥ姉さんの言う通りです。祐さんは、ソルラスカさんなんかに負けません！」
「そうそう。ソルラスカごときに負けるわけないんだから、この勝負、受けなさい」
「……なんか……ごとき……」
待て、ルゥはともかくポゥにゼゥ。そう言ってくれるのは嬉しいが、ソルのダメージが甚大だ。

「えっと、その、ごめんなさい、ソルラスカさん！　あの娘達も決してソルラスカさんが弱いと言っているわけではなくてですね……」
「……ソル……アンタあいつより彼女達と付き合い長いはずなのに……無様ね」

……うわぁ……せっかくミゥがフォローしたのに、問答無用で斬り捨てるタリア……ひでぇ。
何て声をかけたものかと思っていると、がっくりと俯いていたソルラスカが顔を挙げ、睨んできた。

「くそぉ！　絶対勝負しろよこの野郎！　ちくしょー！」

……いや、俺に当たるなよ。
結局その後、しっかりと勝負の約束をさせられてしまったが。はぁ。
……と、残りの休息の間、ソルラスカとの勝負のシミュレートをしている自分に気付いて苦笑が漏れた。いやはや、俺も何だかんだ言って俺も負けず嫌いだな。

「何を言う。やるからには勝つ。当然であろう」
「大丈夫です、マスター。マスターならば必ず勝てますから」

はは、ありがとう。まぁ、レーメの言う通り、やるからには勝つつもりでやってやるさ。
……その為にも、この世界での戦い、しっかりと終わらせないとな。

永遠神剣之章：57．襲来、混戦。

赤と白の守護者を退けた俺達は、散発的に立ち塞がるガードナーを倒しながら、ハイウェイを駆け抜け、遠めにシティへ続く壁を見る位置まで辿り着いた。

「見えたぞ！　シティへ通じる門だ！」

ようやくここまで来た、と言う感じの世刻の言葉に、そこへ向かう速度を上げ、一気に駆け抜けようとした、その時。

ゾクリとしたその気配を感じ、それを発するものの位置を探る。

――上か！

顔を振り上げたそこにあったのは、翼をはためかせ、眼下に居る俺達へ向けて大きく口を開けた、黒き守護者の姿――。

「っ！　――敵襲！　散開！」

叫びながらその場から飛び退る俺に続き、他の皆も咄嗟にその場から離れるのが見えた、その直後だった。

上空から降りそそぐ、黒きブレス。

そしてそれに続くように、それまで俺達が居た場所のど真ん中に地響きを立て、大地に落ちる様に着地する黒の守護者。

「グルァァァアアア！！！」

守護者は大気を震わす咆哮を上げ、それに呼応するように、黒の守護者の更に向こうから、同じような咆哮が聞こえ、その直後に爆音や剣戟の音が響いて来る。

もう一体……ってことは、残る緑の守護者、それに音からするに、

ガードナー達も多数居るらしく、向こう側に退避した誰かと戦闘に入った様だ。
ってことは、こっちも……。
そんな考えに応える様に、俺の背後に現れるガードナー達。そしてその壁に阻まれてか、見える範囲には仲間は居ない。
参ったな……けど、やるしかないか。何とか切り抜けて、せめて誰かと合流しないと。
そう思った時だった。

――しゃん。

そんな、どこかで聴いた鈴の音の様な音。
その音が何かなんて、記憶を探るまでもなく出た結論に、俺は『観望』を片手剣にし、振り向き様に斬りつける！
そこに有ったのは――。

「あら、いきなり斬りつけてくるなんて、酷いじゃない」
「はっ、いきなり背後から撃ち抜こうとするやつに言われたくないぜ。……久しぶりだな、エヴォリア！」

俺の一撃を展開した障壁で受け止める、アラビア圏の踊り子風の衣装に身を包む、緑髪の少女だった。

「お前が居るってことは……この周りに居るのは、この世界のガードナーじゃなく、お前達のミニオンか？」
「さて、どうかしらね？」

俺の問にはぐらかす様に答えるエヴォリア。だが、恐らく間違っていないだろう。
守護者の襲撃に合わせて来るとは……予想通りと言えば予想通り

だが、まったく、やってくれる。
とりあえず、以前エヴォリアを助けられそうならば助ける、としたのだが……それを今正面切って言うわけには行かない。肝心の南天神の亡霊が何処にいるか、まだ確認したわけではないからだ。恐らくは近くにいるだろう、とは思うが。
そんな訳で、今は彼女と戦闘する他ないだろう。
そう結論付けたところで、背筋にゾワリとした気配。
直感に従い、エヴォリアを押しのけつつ後方へ跳ぶ。と、直前まで俺達が……正確に言えば、俺が居た場所に叩き込まれる、黒龍の拳。
……あのヤロウ、エヴォリアは無視かよ。

（……まあ、ミニオンもガードナーも同じ様な存在ですし、それと行動を共にしているエヴォリアがとりあえず放って置かれるのも、無理はないでしょう）
（それに、吾等は先程から明確に敵対しているからな。こちらを優先して狙うのは道理であろう）

そんなナナシとレーメの念話に、だよなあと頷く。
どちらにしろ、やるしかないんだが。……同時ってのは厄介すぎるぜ。
とりあえず『観望』を構え直し――と、折角距離を空けたのだから、確認だけはしておくか。

（『観望』、頼む）
＜……承知＞

その返事と共に、周囲の大気に粒子状の『観望』が広がるのを感じる。

＜……居たぞ＞

その言葉に、『観望』が示す場所を、視線だけを向けて“視”る。

……見つけた。

エヴォリアの上空十メートル程の辺りに、正しく亡霊の様な姿のマナの塊が一体。そこから更に二十メートル程離れた所に三体。……間違いない、南天神だ。

好都合な事に、この場に全員揃っている様だな。

となると、この後の行動を考えるに……やはり邪魔になるのは、この守護者、か。

さて、どうしたもんかなと思った所で、ドンッと、ミニオン達の壁を破り、二人の人物が飛び出してきた。

二人は切り結びながら、対峙する俺とエヴォリア、守護者の丁度中間辺りで一度強くぶつかり合うと、互いに飛び退り、一人はエヴォリアの隣へ、もう一人は俺の隣へ着地する。

俺の隣へ来たのは双剣の神剣『黎明』を構えた世刻。

そしてエヴォリアの隣へ降り立ったのは、重厚な鎧に身を包む、重圧の武者――。

「……ここでよりによってベルバルザードの合流かよ……」

俺のぼやきに世刻が何かを返そうとしたその時、二人の登場を切欠としたか、それとも単にじれただけか。黒の守護者がその翼を大きく広げる。

そして一気に彼我の距離を詰め――

「ガアアアアアアアアア！！！」

「くっ……世刻！」

「はいっ！」

振るわれる豪腕。その鉤爪を潜り抜け、世刻と共に黒龍の懐へ距離を詰める事で回避する。

右と左。

丁度守護者を挟み込む様な形に分かれた俺と世刻は、互いに視線を交わした後、武器を構える。

俺は『観望』を双剣にし、交差するように振りかぶり、世刻もまた『黎明』を同じように振りかぶる。

「クロス――」

「――ディバイダーーー！！」

バチリ、と剣に巡らされたオーラフォトンが弾ける音と共に、ほぼ同時にその両刃を振り抜く！

左右の剣が、黒龍の皮膚を切り裂きながら交差した瞬間、巡らされたオーラフォトンが反応し、斬撃と共に爆発にもにた衝撃を叩き込んだ。

そしてふと視線を向けた先。守護者の向こうに見えたのは、俺とタイミングを同じくして攻撃を終えた世刻へ、その攻撃後の隙を突き、一撃を食らわせんとするベルバルザードの姿。

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ！　来れ氷精、爆ぜよ風精　氷爆！」

咄嗟に唱えた呪文はその効力を現し、ベルバルザードの直近の大気は瞬時に凍結し、爆発と凍気を撒き散らす。

「グゥッ！」

「っ！　『グラスプ』！！」

俺の魔法に一瞬ベルバルザードが怯んだのを見て、世刻はオーラ

フォトンでベルバルザードを拘束し、その隙に距離をとった。
「不意打ちとは、らしくない事やってくれるじゃないか！」
「ぬかせ。元々貴様の相手は我であろう！」
そんな会話が聞こえ、ちらりと世刻がこちらを伺うのが解った。
俺は彼に頷いて返し、
「世刻！　ベルバルザードは任せる！」
再び俺に対してその腕を振り上げた黒の守護者の、その振るわれた鉤爪を避けながら叫んだ。
それに対し、「解りました！」と言う答えに続き聞こえて来た剣戟の音に、あっちは任せる事にして、目の前の守護者へと視線を向けた。
と、しゃん、と俺の耳を打つ音。
咄嗟に張った障壁を打ち付ける、二つの光弾に、それが飛んで来た方へと視線を向ける。
「まったく、私を無視するなんていい度胸ね」
そう言いながら腕輪型神剣『雷火』にマナを漲らせるエヴォリア。
次いで感じた悪寒に周囲を探ると、こちらに向けて神剣を構えるミニオン達の姿。
咄嗟に後ろに下がる。と、それまで俺が居た場所へ、十数発の『ファイアーボール』やら『ファイアボルト』やらの神剣魔法が着弾した。
……危ねえ。
（マスター、右です！）

ナナシの警告に『観望』を向ける、と、ギャリンと金属の擦れる音を立て、『観望』と切りかかってきていた青ミニオンの神剣が火花を散らす。

そこに再度襲い来る、黒の守護者の拳。

――避けられねえ！

喰らうのを覚悟するしかない、と、せめて障壁を張り、襲い来る衝撃へ身構えたその時、視界の端に誰かの影が映った。

それは跳躍し、盾を構えた俺を薙ぎ払おうとする守護者の腕へと迫り――。

「ルプトナキーーーーーーーーーーック！！！」

横合いからぶち込まれたルプトナの蹴りは、守護者の拳の軌道を逸らし、それは俺の側を掠めて地面を抉るに終わった。

良いタイミングで来てくれる！

「助かった！」

「良いってこと！」

「そいつ任せていいか！？」

「おっけー！　任されたぁ！！」

守護者の攻撃が逸れた事に安堵する暇もなく襲い来る、ミニオン達と切り結びながらルプトナに声を掛けると、ノリの良い返事が返って来た。

本当に有り難い。これでミニオンが居るとはいえ、エヴォリアに集中できる。

エヴォリアの“説得”が上手くいけば、ミニオンやベルバルザードも一緒に引かせられる公算が高いからな。

……さて、頑張りますか！

永遠神剣之章：５８．救うもの、救われるもの。

ベルバルザードを世刻に、黒の守護者をルプトナに任せた俺は、未だ周囲を取り囲むミニオンと切り結びながら、エヴォリアの位置を確かめる。

肝心なのは彼女を倒す事ではなく、上空から地上の様子を観戦している南天神の亡霊たちを倒す事だ。無論、出来るならばそれを実際に行う前に、エヴォリアと話をつけねばならないだろうが。

そんな事を考えながら、突き込まれた緑ミニオンの槍を回避し、エヴォリアへと詰め寄ろうとした時、その彼女が両手に填めた『雷火』を打ち鳴らす。

この戦いが始まってから既に幾度も聴いた、シャンッという鈴の音の様な音が鳴り響き、次いで収束するマナ。

「貴方に避けられるかしら？　『オーラショット』！！」

ミニオンの間を縫う様に撃ち込まれる光弾。それを咄嗟に屈んでかわし、次いで上から突き降ろされた緑ミニオンの槍を、起き上がり様に振り上げた『観望』で打ち払う。

返す刃は薄く、鋭く！

「邪魔だ、どけ！　神剣『フラガラッハ』！！」

緑ミニオンの張った、圧縮された竜巻と緑マナで構成された障壁『デボテッドブロック』を切り裂き、その身へ刃を突き立て、再び撃ちこまれた『オーラショット』を切り払う。

「やるじゃない……これならどう？　『ギムス』よ、聖なる光により浄化を！　『ライトブリンガー』！！」

再度打ち鳴らされる『雷火』。収束したマナは光となって上空へと打ち上げられ、そして幾条もの光の槍となって降り注いで来る。
それを後ろに跳んでかわし――

「『ソウルブラー』！」
「『アセンション』！」

その先に居たミニオンを、ナナシとレーメのアーツが打ち据えた直後、振り向き様に斬り倒す。
と、そこを狙うように、炎に包まれながら飛んで来た、赤ミニオンの神剣である、柄を中心に両端に刃のついた双刃剣（ダブルセイバー）を、咄嗟に盾に変えた『観望』で受け止めた。
撒き散らされる炎熱と、重く響く衝撃。

「……『ディクリーズ』」
「今度こそ喰らいなさい、『ライトブリンガー』！」

受け止めたはいいが、その衝撃に大きく後ろに下がらせられ、動きを止められた一瞬。そこを突いて、白ミニオンとエヴォリアの攻撃が襲い来る。
確かディクリーズは、標的の上空から雷撃を加える攻撃だったはず。
何にせよ、この一撃は仕方ないか。

「くっ……おおおおおお！！！」

喰らう覚悟を決めると、上空に向けて障壁（オーラフォトンバリア）を展開する。
直後、『ディクリーズ』による電撃の一撃に続き、『ライトブリンガー』の衝撃が連続で俺を叩く。

……あー……なんか『魔法の世界』でのスールード戦を思い出すわ。とは言え、あの時はミニオンは居なかったけどな。

その時、背筋にゾワリとした悪寒。何とか障壁を展開しながら周囲を伺えば、こちらに向かって神剣魔法を放とうとしている赤ミニオン達の姿が。

……流石に数の暴力はキツイ。ちっとヤバイかな。

そして放たれる複数の神剣魔法……だったが、それらが俺に届く事は無かった。

エヴォリアと白ミニオンの攻撃を凌ぎ、来るであろう神剣魔法に備えようとした時、

「ルゥちゃん！　今です！」

そんな言葉と共に、数体のミニオンを切り倒し、俺の側へ飛び込んで来たユーフィー。

彼女に続いて、ユーフィーが斬り開いた道を駆け抜け、ルゥがその身に溜めたマナを解き放った。

「任せろ！　『メガバニッシャー』！！」

爆発的に広がったルゥのマナは、ミニオンの神剣魔法を打ち消し（バニッシュ）つつ、大気を、大地を、世界を凍らせる。

「そう言うわけで、露払いはまかせるがよい。何か考えがあるのじゃろう？」

そう言ったのは、ユーフィーやルゥと共に来ていたのだろう、いつの間にか横にいたナーヤ。

……って言うか、良く解ったな？　俺が何かしようとしてるって。

そう言うと、彼女はうむ。と頷き、

「中々近づけないまでも、様子は解ったからのう。ベルバルザードをのぞむに、守護者をルプトナに完全に任せ、お主はエヴォリアに集中したい様子であったからな」

そう言いつつ、彼女の神剣である、モーニングスター型の神剣『無垢』を構えるナーヤ。

そう言う事なら、と、俺も『観望』を長剣に変え、構える。

見据えるは一点。他の雑事は、全て皆に任せよう。

「……行くぞ！　『シルファリオン』！」

踏み出しつつ放たれたアーツ。俺の身体を風が取り巻き、駆ける速度を押し上げる。

「簡単に近づけると思わないでね！　『オーラレイン』！！」

そんな俺達の様子を見つつ、力を溜めていたエヴォリアが、そのマナを天空へ撃ち放つ。と、先程の『ライトブリンガー』を遥かに超える量の光の槍が、正に雨の如く降り注いでくる。

どうするって？　……決まっている、進むのみ！

「ナナシ、レーメ、しっかり捕まってろよ！　行くぞ、『観望』！」

＜承知！＞

俺に併走して飛んでいたナナシとレーメが、俺の肩に捕まるのを感じる。

そして俺の声に応えた『観望』の力をもって、俺は降り注ぐ『オーラレイン』の、光の槍の一条、否、それを構成するマナの一つ一つの動きを“視”る。

軌道を“視”切り、避け、逸らし、隙間に飛び込み、構成の薄い部分を打ち破り、ただ前へ！

「なん……ですって！？　……けど、これなら！！」

流石に今の『オーラレイン』の只中を、ほぼ無傷で抜けられるとは思わなかったのだろう。焦った様なエヴォリアの声。

いやまあ俺もここまで上手く抜けられるとは思わなかったんだが。正直。

彼我の距離は約五メートル。神剣使いである俺達にっとは、零に等しい距離。

零に等しい距離を零にすべく、踏み出した俺に対してエヴォリアが行うは、彼女にとって最大にして最強の一撃だろう。

「『ギムス』よ、凍てつく輝きにより敵を薙ぎ払え」

彼女の言葉と共に、彼女の背後に顕現する白銀の巨体。……エヴォリアの神獣『ゴーレム：ギムス』。

その全身にある砲門が開き、急速にマナがチャージされていく。

避けるには近すぎる距離。だけど、大丈夫。そんな確信が有った。

……後ろに、頼りになる気配を感じたから。だから俺がする事は、只信じて進むのみ！

「……遊びは終わり。これで最後よ！　『アイスクラスター』！！」

「面白い、力比べといこうか！　『クロウランス』よ、おぬしの力を見せてやるのじゃ！　『フレイムレーザー』！！！」

エヴォリアに応えるは、ナーヤの声。、

直後、俺の背後に、目の前の『ギムス』に匹敵する存在感のナニカが出現したのを感じる。

……振り向いて確かめるまでも無い。ナーヤの神獣『クロウランス』だ。

そして『ギムス』より放たれる、全てを凍らす白き極光。それに対し、俺の頭上を掠めて灼熱の閃光がその白き極光へと飛ぶのが見えた。

赤と白、炎と氷。相反する二つの閃光は、轟音を上げてぶつかり合い、物理的な威力を伴った衝撃波を撒き散らす。

その間に、俺はエヴォリアへ。とは言え、先に行うのは“確かめる”事だ。そう、亡霊共が俺の攻撃に対して、どんな反応を示すか。

「魔法の射手！！連弾・光の十矢！」

姿勢を低く、密着するように肉薄した俺は、近づきつつ唱えてあった魔法を、下から打ち上げる様に放つ！

エヴォリアは後ろに下がりつつ、身体を逸らし、俺の狙い通り避けられた光の矢は、上空に居た南天神の亡霊へと飛んで行く。

流石に神剣魔法ともまた違う、奴等にとっては得体の知れない魔法に撃ち抜かれるのは嫌だったか、慌てた様にそれを避ける南天神の様子を、『観望』によって拡大された感覚で“視”つつ、エヴォリアを逃がさない様に再び距離を詰める。

見たい反応は見れた。後はエヴォリアを何とかするのみ。

シャン、と、『雷火』が打ち鳴らされ、エヴォリアの手から『オーラショット』が放たれた。

それを彼女の右側へ回り込む様にかわし、その勢いのままに、エヴォリアの張った障壁を斬り付ける。

二度、三度と、オーラフォトンを巡らせた刃を叩き付け、大振りになった一瞬。

反撃しようとしたのだろう、エヴォリアが『雷火』にマナを集めた、防御から攻撃へと、意識が移った、今！

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ　氷結・武装解除！！」
「しまっ……くぅ！」

俺の言葉と共に放たれた冷気は、エヴォリアの手から『雷火』を弾き飛ばし、それに籠められたマナを霧散させる。
俺はそのまま身体ごとぶつかる様に、一瞬“やられた”と言う顔で動きの止まったエヴォリアを押し倒し、抜け出ようと暴れるエヴォリアを抑えつつ、彼女の顔の横へ『観望』を突きたてた。
悔しげに歪むエヴォリアの顔は近く、視線が絡む。これなら流石に、俺達の会話は上空の南天神には聞こえないだろう。

「……一度ならず二度までも裸にした挙句、今度はそのまま押し倒すなんて、最低ね」
「まあ、俺もそう思わなくは無いがそう言うなよ。……提案だ、エヴォリア。お前の憂いを除いてやる」

俺の言葉に「何を？」と言った表情のエヴォリア。
そんな彼女へ一言「南天神の亡霊たち」と言ってやると、ビクリと身体を震わせた。

「……仮に……それが出来るとして、貴方に何のメリットがあるのかしら？」

そう言って、じっと、ただ只管に真っ直ぐに、俺の瞳を見つめてくる。
その視線は口調とは裏腹に、俺の言葉の真意を探ったり、真偽を確かめると言うよりも、まるで、一縷の望みに縋る視線の様だと感じてしまったのは、俺の気のせいだろうか。
……まあ、気のせいでもいいさ。俺が助けたいから助ける。ただ

それだけ。

「そうだな。……せいぜいが、この先余計な戦いをしなくて良いってだけで、別に大きなメリットなんか無いさ」

「じゃあ……何故、こんなことを……？」

「強いて言うなら自分のためさ。大まかにでも事情を知っていながらこのまま放置すれば、俺はきっと後悔する。ただ、それが嫌なだけ。それだけだ」

そう、エヴォリアのためなんかじゃない。俺が、後味が悪く無い様に、自分のためにやるってだけの、これもただの俺の身勝手なんだから。

「……っつーわけで悪いな、エヴォリア。さっきは提案だなんて言ったが、こうやって詰みな段階（チェックメイト）で、お前に選択権は無いわ。だからまあ――」

大人しく、救われとけ。

エヴォリアから離れ、彼女を解放して、再び対峙する。

エヴォリアは直ぐに起き上がると、弾き飛ばされた『雷火』を呼び戻し、服をマナによって再構築して身に纏うと、キッと睨みつけてきた。

「……いいわ、やれるものならやってみなさい！」

「――くっ」

あくまで強気なその態度に、思わず苦笑が漏れる。

まあ、ああやって“敵対している”と言う態度を貫いてくれた方が、仮に失敗したとしても、彼女が被害を受ける可能性が減るからいいだろう。

……って、失敗する事を考えていたらいかんな。……大丈夫。上手く行くさ。

「祐、何をする気じゃ？　折角チャンスであったろうに」

そう訊いてきたのはナーヤだ。

まぁ、折角拘束して無力化したエヴォリアを解放したからな。疑問に思っても仕方ない。

「なに、只の“人助け”さ」

「あれは……」

答えながら、上空を示す。前世が同じ南天神のナーヤなら、亡霊共の姿も見えるだろうか。

そんな事を考えつつも、呪文を紡ぐ。

「やるぞ、レーメ！　ナナシ！」

「うむ、任せよ！」

「イエス、マスター！」

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……光の精霊二〇二柱！！　集い来たりて敵を射て　魔法の射手　連弾・光の二〇二矢！！」

紡がれた“力ある言葉”に呼応し、顕現される二〇二条の光弾。

無論、これの狙いはエヴォリアではなく、上空の亡霊共！

『ネギま』に登場する魔法の中で、『魔法の射手』は尤も基本的な攻撃魔法だ。

そして基本的であるが故にその汎用性は高く、魔法の軌道すら、ある程度のコントロールが可能である。

ましてや俺にはレーメが居る。だから――

「レーメ！　狙い通り、上手くやれよ！」
「解っておる！　ユウこそしくじるではないぞ！」

撃ちだされた光の矢は、レーメの意思を受け、遠くに居る三体の南天神の亡霊達――ウル、ゴルトゥン、ロコだったか――の動きを阻害する様な軌道を取り、俺の意思を受けた光の矢は、エヴォリアの上空に居る亡霊――イスベル――を遠くの三体の方へと追い立てる軌道で飛んでいく。

そして全ての矢を撃ち終えた後には、四体の亡霊達は、狙い通りほぼ一塊になっていて。

「ナナシ！」
「はい！　喰らいなさい、『ダークマター改』！！」

ナナシが準備していたアーツを解き放つ。

『ダークマター』は、圧縮された空間が、指定した一体の対象を締め付け、押し潰すアーツだ。それに対して今使われた『改』は、その名の通り、『ダークマター』の上位版。

対象指定から範囲アーツへ。そして最大の特徴、それは、範囲に巻き込んだ相手を、その圧縮される空間の中心へと引き寄せる！

『くっ……あああぁぁあああああおおおおあ！！』

『魔法の射手』に続き、『ダークマター改』による攻撃にその存在の隠蔽すら解けたか、苦悶の声を上げながら、アーツの中心――地上へと引きずり降ろされる南天神達。

そこを狙って放たれるは、レーメのアーツ。

「いくぞ！　『シルバーソーン』！！」

それと共に、南天神達を取り囲む様に、十の白銀の刃が円を描いて突き立つ。そしてその先端についた宝玉が赤い閃光を発した、その瞬間――

『ぎゃあああああぁぁあああぁぁあああ！！！』

正に怨念のごとき叫び声が響いた。

『シルバーソーン』。幻属性に位置する攻撃アーツで、その最大の特徴は九十パーセントの確率で混乱の状態異常をもたらす事。

この高い混乱の効果と、『幻』と言う属性、その攻撃が地面に突き立つ刃ではなく、突き立った後に発せられる赤い光によるものである事から、俺達は『シルバーソーン』が肉体ではく精神に作用するアーツであり、肉体を持たない怨念――精神体の様な存在――である南天神の亡霊達には効くんじゃないかと判断した。蓋を開けてみれば……正に“こうかはばつぐんだ”ってやつだ。

「マスター、今です！」

「応！　……これで終わりだ！　『テンペストフォール』！！」

『空の軌跡　ｔｈｅ３ｒｄ』において、主人公であるケビン＝グラハムの使う技の中に、『魔槍ロア』と『聖槍ウル』と言うものがある。

『魔槍ロア』は時属性、『聖槍ウル』は空属性であり、そのうち『聖槍ウル』は、作中に登場した“悪魔”と言われる存在に、絶大な効果を上げた。

つまり空属性は悪魔や怨霊の様な存在に対して特攻を持つと言う事で、先に使われた『ダークマター改』、そしてこの『テンペストフォール』もまた空属性のアーツであり、要するに、これもまたこいつらには良く効くだろうって事――！

『――――！　――――――――！！！」

俺がその名を発すると共に、戦術オーブメントの駆動は臨界へと達し、現象を現実へと及ぼす。

世界は赤く染まり、歪み、圧搾され、南天神の声すら飲み込み、天空（そら）は大地へ堕ち、撒き散らされるは破壊の衝撃。

吹き荒れる破壊の中、『観望』の力を最大限に高め、南天神の行方を見逃さぬように“視”続ける。

押し潰され、削り取られ、霧散するように消滅していく怨念達。

そして、それが全て収まった時、そこに有ったのは、破壊の跡たるクレーターと、“かつて南天神であった”マナの残滓だけだった。

永遠神剣之章：59．それぞれの戦い、一。

◇◆◇

黒の守護者（ガーディアン）の強襲。それに逸早く気付いた祐の警告により退避した皆の中で、ヤツィータは今窮地に立たされていた。

別段、彼女が逃げ遅れたと言う訳ではない。言うなれば、逃げた先が悪かった、と言うところだろうか。

「よりにもよって二匹目とはね……」

彼女の眼前に広がるは緑色の壁。そう、彼女の前には、緑の守護者が立ち塞がっていた。

「ゴァァアアアアアアアアア！！！」

後方から聞こえて来た黒の守護者のものだろうと思う咆哮に応える様に、目の前の緑の守護者が吼える。

その視線の向く先は――

「はぁ……やっぱり私よね。それにしても緑って事は、物理特化かしら？　まったく、お互い相性最悪よね！」

そう言いつつ、ランタン型永遠神剣・第六位『癒合』を構えるヤツィータ。そんな彼女に向かって振るわれた緑の守護者の腕を避けると、『癒合』の炎の一部を切り離し、外部へと顕現させると、守護者に向けて解き放つ。

「コラコラ、せっかちなのは女性に嫌われるわよ！　『フレアカラドリウス』！」

その炎は鳥の形を取り、猛烈な勢いで守護者へと突き進み、ぶつかると共に炸裂し、爆発する。

「ついでにコレはどうかしら!?　『ファイアボール』！」

次いで放たれる神剣魔法。それに対して緑の守護者は、それを喰らいながらもヤツィータへとその鉤爪を振るう。

それを何とかかわしながら、このままではジリ貧だと歯噛みした彼女は、背筋にゾクリとしたものを感じて、咄嗟に地面に身を投げ出すように転がり、その場から無理矢理距離をとる。

次の瞬間、それまで顔所が居た場所を襲う赤き雷撃。赤属性の神剣魔法、『ライトニングファイア』だ。

どういうこと、と周囲を見たヤツィータは、いつの間にか緑の守護者のみならず、ガードナーに――その実はエヴォリアが連れてきたミニオンなのだが――囲まれている事に気付いた。

「……まずったわね」

ちっと舌打ちしたその時、周囲にその意識を向けてしまったために疎かになった、尤も注意しなければいけない存在からの攻撃が彼女を襲う。

はっと気付いたときには、猛烈な風切り音とともに、眼前にその巨大な腕が迫って――

「ヤツィータさん！」

ミニオンの壁を割って飛び出した少女が、その身を盾に緑の守護

者の一撃から彼女の身を守っていた。
その少女――ポゥの張った障壁（ディバインブロック）は、その猛烈な勢いに押されはしたが、強固な壁となって守護者の一撃を防ぎ切る。

「ヤツィータさん、大丈夫ですか？」
「ええ、ありがと、ポゥちゃん」

ポゥへ礼を言ったヤツィータは、鉤爪を防がれ、一端距離を開けた守護者がその顎（あぎと）を大きく開けたのを見て、咄嗟に神剣魔法を撃ち放った。
放たれるは巨大な火球。それは狙い違わず守護者の顔面へと直撃し、爆発を起こす。そしてその爆発のダメージと衝撃によって、直後放たれた緑龍の息吹（ネイチャーブレス）は、ヤツィータとポゥを逸れてミニオンを薙ぎ払うに終わった。
ほっとするのも束の間、ブレスによって薙ぎ払われたミニオン達の一角から、ヤツィータに向けて緑ミニオンが迫る。
緑の守護者のブレスであるネイチャーブレスは、その属性に違わず完全な物理（マテリアル）属性の攻撃だ。故に、防御が物理特化になっている緑ミニオンには効きが弱かったのであろう。
緑ミニオンは多少の傷を負っているものの、その動きに些かの翳りも無く、

「雷光の一撃……当たって……」
「やばっ」

バチリ、と、ミニオンがその手にした槍に籠められたマナが紫電を発し、ヤツィータがそれを喰らう事を覚悟した、その瞬間。何処からともなく飛来した、炎に包まれた円盤状のバズソーが、その一撃を振るわんとした緑ミニオンに激突し、弾き飛ばした。
そしてバズソーの後を追うように、ヤツィータの背後から駆け抜

け、ミニオンに接近する影。

「ヤツィータ、油断しすぎよ！」

緑ミニオンに斬撃を加えながらそう声を掛けたのは、ネイチャーブレスによって出来た穴を抜け、ミニオンを斬り伏せながら駆けつけた沙月だった。

そんな沙月へ「まったくよね」と苦笑しつつ返しながら、沙月の前に自らの窮地を救ってくれたバズソー――永遠神剣『剣花』――の担い手であり、沙月に続いて自分達の下へ追いついてきたワゥへと、「ワゥちゃんも、ありがとね」と声を掛ける。

そして、ポゥが守護者からの攻撃を受け止める中、『癒合』の力を高めていくヤツィータ。

その間、沙月は己の神剣『光輝』を光の槍として飛ばし、時に神剣魔法をバニッシュし、ワゥは敵陣の中を縦横無尽に駆け抜けながら、両手の『剣花』を巧みに操り、ミニオンを攻撃していく。

そして、二人が幾人かのミニオンを倒した時、『融合』の力が臨界に達した。

「二人とも、下がって！　どかーんと、派手にいきましょうか！」

解放される『癒合』のマナ。それによって顕現するは、守護者に匹敵する巨体。その姿は雄々しき赤き火竜。

「バラスターダ……焼き尽くしちゃって！」」

ヤツィータの神獣、『レッドドラゴン・バラスターダ』。その身より繰り出される炎熱の咆哮たる『アークフレア』。それは守護者諸共、その周囲に居るミニオン達をも飲み込み、マナの塵へと変えていく。

そしてそこに、追撃とばかりにワゥがその己が内に秘められたマナを解き放つ。

「行っくよーー！　『メテオフレア』！！」

次の瞬間、守護者の真下から巨大な火柱が上がり、次いで天空より隕石にも似た多量の炎弾が、守護者に、そしてミニオン達に降り注いでいく。

『アークフレア』と『メテオフレア』。単発においても必殺に近い、二重の炎熱の乱舞は世界を焼く。

そしてそれが収まった時、そこにあったのは満身創痍の守護者の姿だった。

「沙月、今よ！」

「オッケー！　……これで止め、喰らいなさい！　『エアリアルアサルト』！！」

『光輝』は定型の形を持たない神剣だ。故にその形は、所有者である沙月の意を受けて様々に変化する。

そしてその『光輝』が、今はその形を光の翼へ変え、そして沙月の全身を包み込んだ。

ふわりと、神剣の力場に支えられて彼女の身体が宙へ浮く。零からトップスピードへ、一瞬にして加速した沙月は、その『光輝』に包まれた身を弾丸とし、守護者へ向けて突撃した。

沙月と守護者が交差した瞬間、『光輝』が反応し、轟音を立てて炸裂する。

そして守護者は、小さなうめき声を残してその身体をマナの塵へと変えていった。

「……ふぅ。これでここらは片付いたわね。……さて、それじゃあ

他の皆の援護に行きましょうか」
「はい」
「うんっ」

それを見送り、発したヤツィータの言葉に、ポゥとワゥが応え、彼女達は沙月の元へと駆けて行った。

◇◆◇

「一発でおわりになんかしてやらないっ！　ランサーーーー！！」

靴型永遠神剣『揺籃』の力を解放したルプトナが、瞬時にその間合いを詰め、黒の守護者の胴へと三連の蹴りを叩き込む。
その直後、彼女目掛けて振り下ろされる拳。それを後方へ跳んでかわすと、

「あーもう！　鬱陶しいなあ！！」

そう悪態づきつつ、己を目掛けて飛んで来たミニオンの神剣魔法をバニッシュする。
守護者と戦う間に目に入った、ベルバルザードと戦う望の姿。その姿に、援護に行きたいと思いつつも、祐にこの守護者を任された以上、放っておくことも出来ないために、彼女の心には若干ながらも焦りが生まれていた。
戦場において、焦りは窮地を招く。特に現在の様な、一対多の乱戦では。

「命を削る、閃き……じわじわくるでしょ……」

ルプトナが神剣魔法をバニッシュした隙を突き、黒ミニオンが瞬時にその距離を詰める。
そして神剣を居合いの様に振りぬこうと、さらに速度を上げてルプトナと交差しようとした、その時。

「お見通しだっての！　ジョルト！！」

カウンターの様にルプトナの蹴りが叩き込まれた。
三連の蹴りを、まるで一撃と見紛う程の速度で叩き込む技、『グラシアルジョルト』。
それは黒ミニオンを吹き飛ばし、吹き飛ばされたミニオンは、更に二、三体のミニオンを巻き添えにしてようやく止まった。

「へっへーん、どんなもん……あ」

そのミニオンの様子に、得意げにニヤリと笑った時だ。黒の守護者が一度距離を取り、その顎を大きく開いているのに気がついた。
そして放たれる、黒龍（ダークブレス）の吐息。
ルプトナは咄嗟に冷気を青マナによって練り上げ、周囲に空気の断層を形成する。

「くぅぅぅぅ……っ！」

自らを飲み込む黒の奔流の中を必至に堪える。
それが止んだ瞬間、目を見開いた彼女が見たのは、追撃とばかりに迫る黒の守護者の姿。
ブレスに呑まれて痛む身体を叱咤し、それを避けようとしたところで、一瞬ふらりと足がもつれた。
――流石にまずい……けどっ。

そう内心焦りながらも、それでも黒の守護者の動きを見逃さぬように見据えるルプトナの耳に、その声は届いた。

「マナよ。慈愛持つ神々の息吹となれ。『アースプライヤー』！」

その声と共に、ルプトナを柔らかな生命の光が包み込み、その傷を癒していく。

その直後、彼女の眼前に迫る黒の守護者。対してルプトナは、己が傷を癒してくれた人物――サレス――に「ありがと！」と声をかけつつ振るわれた鉤爪を跳躍してかわし、そのまま空中で反転、大気を凍らせ、『揺籃』の力で足先から鋭利な氷塊で包み、抉りこむ様に蹴りを放つ。

そしてその反対側、守護者の背後から迫るは、サレスと共にミニオンを倒しながら駆けつけてくれた、タリアとソルラスカ。

「行くよじっちゃん！　はぁぁぁあああ！！　ルプトナキーーーックー！！」

「マナの飛沫になりなさい！　これで、終わり！」

「隙間無く、くれてやる！　耐えてみろ！　獣牙断！！」

三人によってほぼ同時に叩き込まれた連撃。

それは着実に黒の守護者の防御を抜き、傷を負わせ、その命の炎を削っていく。

「これで止め！　てりゃあああ！！！」

そしてルプトナが、再び氷刃の一撃を蹴り込んだのを最後に、黒の守護者は断末魔の咆哮を残し、その身をマナへと変えて散った。

それを見送り、ふぅ、と一息吐いたルプトナ達は、少し離れた空に大量の光の矢が飛ぶのを見る。

「あれは……」
「ありゃ、祐の『魔法』みたいだな」
ぽつりと呟いたサレスにソルラスカが答える。と、ルプトナがそれに「うん。今の守護者は、あっちから引き離してきたからね」と続けた。
「……にしても、何であんなに空に打ち上げてんだ？」
「アイツの事だから何か理由はあるんでしょうけど。サレス様、どうしますか？」
「……恐らく他の皆も、今のであそこに集まるだろう。我々も向かうぞ」
サレスの言葉に首肯する三人。
そこでふと、周囲にミニオン達の姿が無い事に気付き、多少の疑問を抱きつつも、サレス達はその場を後にした。
◇◆◇

永遠神剣之章：60．それぞれの戦い、二。

◇◆◇

「我が力、侮るな……えぇい！」

ベルバルザードが手にする薙刀型永遠神剣『重圧』へとマナが集い、燐光を発し、暴風の如く振るわれる。望はそれを時に受け流しながら避けつつ、『黎明』を振るい反撃に転じる。

「くっ……いくぞ、『デュアルエッジ』！」

双剣である『黎明』。その左右の剣を連続で振るう連撃。

ベルバルザードはそれを『重圧』と、闘気によって物理（マテリアル）の防御能力を高める『アイアンスキン』で受け止めると、お返しとばかりに『重圧』を横薙ぎに振るい、咄嗟に『黎明』を交差させて受けた望を、そのまま力任せに吹き飛ばした。

そしてそのまま、追撃とばかりにマナを集め、解放する。

「マナよ……万物を従わせる力に変われ。……全身の骨を砕いてくれるわっ！」

その直後、吹き飛ばされ、起き上がろうとしていた望を襲う重圧。重力を操り、膨大な圧力を掛けて敵を押し潰す、ベルバルザードの魔法『グラビトン』だ。

大地に押さえつけられ、動きを封じられた望へと踏み出すベルバルザード。だが、望の後ろにある路地から、二つの神剣反応が近づいているのを感じ、一歩踏み出したところで足を止めた。

その直後、ベルバルザードの予想通り路地から飛び出す人影が二つ。

その内一つ――希美は、這い蹲る望を見、彼が置かれている状況を瞬時に判断すると、急制動をかけて止まりながらその神剣――槍型神剣『清浄』の切っ先をベルバルザードへと向けた。

一方で、希美と共に路地から飛び出したもう一人――絶――は、そのまま駆け抜け、望の直前で、彼を飛び越す様に高く跳躍。

そして望の上空に達した所で『グラビトン』の圏内に捕まり、地上へ向けて加速する様に落下する。前方への慣性は生きたまま。そう、ベルバルザードへと向けて。

「ものべー、力をかして……貫け！　『ペネトレート』！」

「避ける事は不可能……受けきってみせろ！　くらえっっ！！」

砲撃の如く撃ち込まれる希美の緑マナと、閃光の如き絶の連撃。しかしベルバルザードは先に二人の出現を予測していただけあり、その連撃を『アイアンスキン』によって受けきった。とはいえ、その衝撃はベルバルザードを大きく後退させ、『グラビトン』を解除させる事には成功したのだが。

『グラビトン』から解放された望は、希美と、一端下がった絶に合流すると、ふぅ、と一度大きく息を吐いた。

「助かった。有難う、希美、絶」

「ううん、望ちゃんが無事で良かったよ」

「ああ、気にするな」

声を掛け合い、それぞれ油断無く、武器を構え直してベルバルザードへと向き直る三人。

それに対して、ベルバルザードはその手にした『重圧』を大きく一振りすると、

「面白い……よかろう、貴様等纏めて相手をしてやる。掛かってくるが良い！！」

その覆面に隠された口角を上げた。

◇◆◇

黒の守護者の強襲に咄嗟に飛び込んだ路地を、その後現れたミニオン達を倒しながら駆けるカティマは、行く手に見えた左へ曲がる道から、神剣反応を感じ取った。

恐らくは待ち伏せか、と、己が神剣である『心神』を持つ手に力を籠め、更に一段、駆ける速度を上げる。

神剣により強化された脚力が生み出す速度は、飛ぶように周囲の光景を流しながら曲がり角へと迫り、先手必勝とばかりに『心神』の峰を肩に乗せるように構える。

行うは振り下ろしの斬撃。

重量のある大剣である『心神』が、もっとも威力を発揮する一撃。

そのまま速度を落とす事無く、曲がり角の反対の壁へと跳躍。三角飛びの要領で壁を蹴り、振り下ろしの斬撃にさらに速度と落下の威力を加え――

「っ！？　くっ！！」

その曲がり角の先に居た相手に斬撃を当てないように、身体を捻り、『心神』を逸らす。

対して曲がり角の先にいた人物もまた、飛び出してきた相手を斬ろうとした武器を押し留め、踏み出していた足に急制動を掛け――

ごすっと、鈍い音が二人の頭に鳴り響いた。

「～～～～……っ」

「い……ったぁ……」

「……えっと……何かすごい音がしたけど、大丈夫？　ゼゥ、それにカティマさんも」

互いに相手に武器を当てない様にと身体を逸らし、それが丁度同じ方向だったために見事にぶつけ合った頭を、両手で抱える様に抑える二人――カティマとゼゥ――へと、ミゥが苦笑しながら声を掛けた。

「は、はい、姉様。カティマもごめんなさい。敵かと思い込んでしまってたわ」

「いえ、私も少々焦っていた様です。……ミゥ殿とゼゥ殿も、ご無事なようで何よりです」

そう言って、互いに苦笑を交わす二人。

そんなカティマへ、ミゥは「ところで」と話を切り出した。

「他の人たちとは会いませんでしたか？」

「……いえ。ガードナーとは随分と戦ったのですが、他のメンバーとは会えませんでした。どうやら随分と入り組んだ路地に入ってしまったようですね」

「……みたいね。とりあえず、あっちに……」

今現在、彼女達が居るのは、T字路の交差部分。

その内、両者が来た方ではない、残った方へ行こうかとゼゥが提案しようとした、その時だった。

「見つけたぞ、異分子どもめ！！」

最悪の声が響いたのは。

◇◆◇

『重圧』を構えたベルバルザードへ、望と絶が同時に駆ける。

望は双剣の内の片方、陽剣に値する一振りへとオーラフォトンを籠め、それと同時に加速し、弾丸の如くベルバルザードへと突貫する。

「まっすぐに……貫く！　たぁぁぁぁ！！」

本来左右に別けて籠められるマナを片方に集中させ、“斬る”ではなく“突く”事によって、相手の防御を貫く威力を得る、『オーバードライブ』。

それに追随する様に絶が駆け、肉薄すると同時にその刃を振るう。

「俺の刃を、避けられるか？　雲散、霧消！」

望と絶の連撃は、ベルバルザードの防御を貫き、その身に確かな傷を与える。

それに一瞬顔をしかめたベルバルザードだが、傷も、痛みも、受けたものを全て意識の外に排し、その刃を望と絶の二人へ振るう。

攻撃動作後は、大なり小なりの隙が出来る。それは人の形をしている以上、神剣使いであろうと変わる事は無い。そこを突き、避けられぬ一撃を見舞わんとした、その瞬間。

「この一撃は、雷光の力！　『ライトニングフューリー』！！」

二人への攻撃に意識を割いていたベルバルザードを、衝撃が襲う。
槍のリーチの長さを生かした、高速の刺突。マナを爆発させる様に弾けさせ、推進剤として突貫する雷光の一撃。
希美の放ったそれは、望と絶を襲わんとしたベルバルザードの巨体すら弾き飛ばし、大きく後退させる。
その間に二人は体勢を整え、再びベルバルザードへと相対していた。
中々やってくれる。
フン、と、忌々しげに、それで居て楽しげに嗤うベルバルザード。
そしておもむろにその腕にマナを集めると、地面に叩きつける様に解放した。

「眼前に在る者全て……断つ！　滅びろ！！」
「ぐぅっ！」
「きゃあ！」
「くっ……！」

ベルバルザードによって放たれた赤マナは波動となり、望達には衝撃を、対して術者たるベルバルザードには、その身に活力を与え、力を増させる。
『バーサークチャリオット』。その技の名にふさわしき、狂戦士（バーサーカー）の如き猛々しき力。
ベルバルザードは、湧き上がる力のままに、『重圧』へとマナを溜める。
そしてそのまま、波動によって一瞬動きの鈍った望達三人へと一気に距離を詰め、

「抵抗など無意味……思い知るがいい！！」

マナを爆発させると共に、下方から一気に斬り上げる！
迫り来る『重圧』の刃――ベルバルザードにとっての最大の一撃たる、『ライアットスタンピード』――に対し、望と希美は咄嗟にそれぞれオーラフォトンバリアとディバインブロックによって、三人を包み込んだ。
襲い来る衝撃は、先程の『バーサークチャリオット』の比ではなく、二重のブロックの上から三人へ無数の傷を与え、体力を著しく削る。
そこに追撃とばかりに行われるは、暴君の一撃。

「マナよ、灼熱の炎に変わり敵を薙ぎ払え。……苦しみにのた打ち回り、死ね！」

ベルバルザードによって放たれた赤マナに触発され、顕現するは彼の神獣たる赤き暴君『レッドドラゴン・ガリオパルサ』。その身より放たれる、灼熱の咆哮『ハイドラ』。
だが、それが着弾するより早く、望達の身体をマナが包んだ。

「神剣の主が命じる。マナよ、癒しの風となれ。『ハーベスト』！」
「好き勝手やられてたまるか！」
「防げ！」

希美が放った緑のマナは、優しげな風で三人を包み、その身に受けた傷を一気に癒す。
そして望と、それに応えたレーメが練り上げた白きマナは、『レジスト』の神剣魔法となって三人の理力に対する抵抗力を上昇させる。

「ナナシ、マインドブレイク発動！」

「闇の帳、展開します！」

そこにさらに、ベルバルザードとガリオパルサへと放たれる神剣魔法。

絶の練り上げた黒マナは、ナナシの導きのままに対象へと降り注ぎ、理力を激減させ、魔法による攻撃力を大幅に減らす。

そして着弾する『ハイドラ』。

だが、絶によりその威力を下げられ、望により上げられた抵抗力によって、その威力は十全足るものを発揮する事はなく、希美によって癒された望達は、即座にベルバルザードへと反撃に転じる。

「ナナシ、離れろ。一気に喰らわせてやる。……生者、必滅！」

「ものべー、狙いはお願い！　ショットブレイカーー！！」

「同時に行くぞ、レーメ！」

「クロスディバイダーーー！！」

ほぼ同時に放たれた三連撃。それはベルバルザードの防御を貫き、さしものベルバルザードもその場に膝を突き、荒い息を吐いた。

「ぐぅ……やってくれる……！」

その時だ、やや離れた場所の空に、光の矢が乱舞したのは。

それから僅かの時を置き、その空が赤く染まり、歪み、その歪みが大地に落ちて望達の場所まで轟音を響かせる。

そして彼等は気付く。ミニオン達がその動きを止めて居る事に。

ベルバルザードは悟る。エヴォリアに何かがあったのだ、と。

「仕方が無い、か。ここは勝ちを譲っておこう」

ベルバルザードはその場に立ち上がると、遠方の空に一瞬気を割

いていた望達から離れ、距離を取った。
そして望達を振り切り、一気にその場を離脱する。自分も少々手痛いダメージを受けた。それに確かめねばならぬ。エヴォリアに何があったのか、と。
だが彼は、その実気付いていたのかもしれない。エヴォリアに起こったのは、決して悪い事ではないと。
なぜなら――南天神の転生体であり、その存在を知っている彼には見えていたから。光の矢に翻弄されるように追い立てられる、『奴等』の姿が。

◇◆◇

走る走る走る。
ミゥとゼゥがマナを弾丸として撃ちながらも、そのことごとくを強烈な一撃で吹き散らされる中、三人は路地を駆けていた。
何とか隙を突き、反撃しなければ。
そう思いつつも敵の力は強大で、中々反撃の糸口が掴めない。
それに歯噛みしつつも、チャンスを求めて彼女等は駆ける。

「しぶとい奴等め、死ね！！」

そして再び放たれる『疑氷』の一撃。
それを何とかかわしたが、その一撃は近くの建物を跡形も無く破壊した。
何という威力か、と、カティマは思う。この威力はあまりにも異常だ。そう、前回会った時よりも明らかに強すぎる。と。
その内に彼女達は、少々開けた場所に出て――

「……あっ」

しまった、と言う風な、ミゥの声。

彼女達の視線の先――そこには、集まった仲間たちの姿。……何故かエヴォリアが居るのだが。

そして彼等の姿を認めたのは、ミゥ達だけではなく。

「見つけたぞ……！」

そんな、憎しみの篭った声。

それを発した人物――ミゥ達を、散々追い回していた、ショウ――は、目の前のミゥ達を無視して飛び出す。

その視線の向かう先は――。

◇◆◇

「祐さん！！」

「祐！」

そんな、悲鳴にも似た声が聴こえた。

「見つけたぞ！　貴様のせいで、スバルは！！」

そしてそれに続いて、聞き覚えのある、憎しみの篭った声。

そちらの方を向けば、こちらに弓を――弓形永遠神剣『疑氷』を――構える、ショウの姿。その弓には既に多量のマナが集まっていて――。

油断した。
エヴォリアの件が何とかなったと、僅かでも気を抜いてしまった。

迫り来る閃光の如きマナ。
範囲よりも威力を重視したかのような、濃縮に凝縮された、弾丸の様なマナ。
かわせない、と、防げるかも解らないが障壁を張ろうとした、その時。

とん、と、軽い衝撃。

何故か、微笑んでいるエヴォリア。

そして閃光は、彼女を――。

永遠神剣之章：６０．それぞれの戦い、二。（後書き）

※４／１２微修正

永遠神剣之章：６１．想い、受けて。

物事、上手く行っていると思う時に限って落とし穴があるものだ。
……いや、これも所詮、俺の油断と慢心だったのだろう。

南天神の亡霊達を退け、エヴォリアに対し、「これで俺達に敵対する理由はなくなったな？」と言ってやると、彼女は「ふんっ」とそっぽを向きつつ、小さく「そうね」と呟いていた。
いつの間にか戦闘行動を止めていたミニオン達――恐らくはエヴォリアが止めたのだろう――に疑問を抱きつつも、俺の元へ集まってきたルゥとユーフィー、ナーヤ。そして道の向こうに見えたサレス達が来るのを待って、俺の行った事と、許可を得て、エヴォリアの事情を軽く説明した。
この場にあと居ないのは、世刻と永峰、暁。そしてカティマとミゥとゼゥか。
ぐるりと見回してそう思った所で、その声が、後ろから聴こえた。

「祐さん！」
「祐！」

どこか悲鳴にも似た、その声。
そして、少し離れて俺の正面に立つエヴォリアの、驚いて、すぐに険しく変わった表情。
何だ、と、振り向いた俺の目に飛び込んできた、その姿と声。

「見つけたぞ！　貴様のせいで、スバルは！」

引き絞られている『疑氷』。収束されているマナ。
そして、打ち出される閃光。

とん、と、押される感触と共に、押しのけられる身体。

何故か微笑んでいる、エヴォリア。

『疑氷』の一撃が、彼女の腹部を貫いていく光景が、まるでスローモーションの様に――。

今の段階で、ショウが来るとは思っていなかった、俺の油断と慢心。

それでも思わずにはいられない。

異分子（イレギュラー）によって救われた命は、予想外（イレギュラー）な出来事によって奪われると言うのか。

これで、辻褄を合わせようとでも言うのか、世界よ。

――ふざけるな。

倒れてくるエヴォリアを受け止め、地面に静かに横たえる。

射抜かれたのは腹部だというのに、彼女の全身から静かにマナが立ち上り、大気に消えていく。

……拙い。

「『アセラス』！」

「『ティア・オル』！」

俺が何か言うよりも早く、ナナシとレーメの声が響いた。

発動されたアーツ――上位蘇生アーツの『アセラス』と最上位単体回復アーツの『ティア・オル』――は、その効果を直ぐに現し、エヴォリアの傷を癒す。それでも――彼女の身体から立ち上るマナ

は止まらない。

「……無駄よ。何か……大事なモノを持っていかれたみたい……だから。流石……は、腐っても『浄戒』……って、ところかしら」

瞬時に塞がれた腹の傷に驚きつつもそう言って、「でもこれで、綺麗な身体で逝けるわね」なんて事をいいやがる。

……第一、なんで本来の持ち主でもないショウが、そんな、『浄戒』が曲がりなりにも『浄戒』たる力を発揮させるほどの威力を出せる……？　……まさか！？

「ショウめ、スバルの『浄戒』を！？」

俺と同じ考えに至ったのだろう、サレスがそんな声を上げ、それに対してそのショウの声が答えた。

「そうとも！　スバルは今治療中で当分動けんからな、ならば俺が使ってやろうと思ったんだが……くくっ……ははははは！！！！　分かたれていた二つを併せた今、俺は最強だ！！！　素晴らしいぞ、この力は！？　貴様等全員を殺すには充分すぎる……ははっははは！　ははははははははは！！！！」

……完全に力に呑まれている。けど、分かたれていた二つって認識してるって事は……セントラルが、世界の維持に本体を使ってるって事は知らないのか。

そう思いサレスを見ると、やはりサレスもその結論に達したか、頷いて返してきた。

……いや、今はいい。あんなのの事など、どうでもいい。

そんな俺の思考でも伝わったか、ショウの激昂する声が響く。

「貴様等、俺を、無視してんじゃねえええーーーー！！！！！」

膨れあがるマナ。けど、膨れ上がったマナは、ショウのものだけではなかった。

「ならば……貴様の相手は我がしてくれよう！」

そんな声と共に、ショウの背後に現れた気配は、その手にした武器を振り下ろす。

ズンッ！　と、地響きを立て、小さなクレーターが出来るほどの威力で。

「ちっ！　どいつもこいつも俺の邪魔をしやがって！！　いいだろう、まとめて殺してやる！！！！」

その攻撃から咄嗟に飛びすさっていたショウは、その弓を、今自分に攻撃してきた相手へと――ベルバルザードへと――向けた。

それと共に聴こえて来た、翼のはためく音。

まさか、と思い顔を向ければ、地面を舐める様に飛んできて、ショウの背後へと地響きを立てて着地した、白と黒の巨龍。

あのヤロウ、ガーディアンまで連れてきやがったのか！？

それに対してベルバルザードは、こちらを一瞥し、庇う様な位置を取った。その背中は、まるでエヴォリアを頼むと言っているようで。……そんな意志を感じたのは、気のせいじゃないだろう。

……ああ、任せろ。

「まぁ……故郷と妹を助けてもら……った、代金としては……充分、でしょう？」

けれどエヴォリアは俺へ、そんな事を言ってきやがって……カッ

と、頭が熱くなるのを感じた。

「……ふざけるな……！　こんな結果にするために、お前を助けたわけじゃない！　認めねえぞ……絶対に……助けてやる！」

言葉が口をつく。

そうだ、認めてなるものか。諦めてなるものか。

いくら『浄戒』の一撃とは言え、所詮はショウが意識もせずに放ったものだ。ならばその効果とて不完全のはず。

ミニオン達が致命傷を受けて消える時と違って、エヴォリアの身体から立ち上るマナがある程度緩やかで、直ぐにその身体が消えなかったのがその証左になるだろう。

では何故立ち上るマナが止まらない？　……恐らくは消耗し、消えていく状態ではその傷ついた『神名』の修復へ、マナを回す余裕が無いからではないか？

だから、外部から不足分のマナを流し込んで、彼女の『神名』……否、魂を修復する分のマナを確保してやれば……。

（うむ、吾も同意見だ。……極論を言えば、それが合っているかどうかなど確かめる術は無いからな。そうだと信じてやるしかあるまい）

俺の考えに同意するレーメの念話に、レーメもそう思うかと、少しだけ安堵する。

どちらにしろ、俺にはもうこれしか方法が思いつかない。……だったら、この方法に全力をかけてやる！

――頼む、『観望』、力を貸してくれ。

俺の願いに応えて、『観望』から力が流れ込んでくるのを感じた。

それをもって、エヴォリアの全身を“視”る。最もマナの流出し

ている場所を“視”つけるんだ。
……“視”えた。当然と言えばそうではあるのだが、やはり先程一撃を受けた腹部の様だ。
その箇所へ、正確に手を当て――マナリンクの要領で、俺のマナを、流し込む！

「っ！？　くぅ……あぁっ！　……ふぅっ……あ……！！」

朦朧としているところに突然マナを流し込まれて驚いたか、ビクンと、エヴォリアの身体が跳ねた。
辛いだろうが我慢してくれ。こっちだって必至なんだ。
大気のマナを取り込み、己のものへ。それと共に魔力をマナへと逆変換し、マナリンクへと回す。
……まだだ、まだ、足りない。まだ、供給量が消費量に追いついていない。
焦りながらも、瞳を閉じ、マナを練り上げる事に集中していると、

「……本当に、助ける必要があるの？」

そんな言葉が聴こえた。
眼を開けると、タリアが憮然とした顔でこちらを――否、エヴォリアをねめつけていて。

「……そうね。確かに、どんな事情があれ、彼女がしてきた事を、私達は『仕方ない』で済ます事はできないわね」

タリアに答えたのは、ヤツィータ。
酷い、なんて事は言えない。旅団の皆にしてみれば、ずっと戦って――殺し合いをしてきた相手なのだから。

「確かに、タリアやヤツィータの言う事が尤もだぜ。俺達にしてみれば、エヴォリアの奴を助けるなんてのは馬鹿な行為だ」

続くソルラスカの声。

そして、その手に填められた神剣『荒神』を構え、一歩踏み出すのが視界に入った。

「けどな。必至になってる仲間（ヤツ）が居るのに見捨てるのは……馬鹿ですらねえ。それなら俺は、馬鹿になってやるよ！」

そんな言葉を残して、ソルラスカは、ショウへ向かって駆けて行った。

そして、苦笑しながら顔を見合わせ、それに続くタリアとヤツィータ。それと入れ違う様に、カティマ達と、今しがた着いたのだろう、世刻達がやってきて、サレスに現状の説明を受けていた。

「……ねえ青道君。貴方はどうして、そこまでして彼女を助けようとするの？」

それを待って、と言うわけではないのだろうが、そんな問を斑鳩が発して来て、全員の視線が、俺と斑鳩に集まるのを感じる。

「……別に理由なんてないさ。強いて言うなら、自分のため、だ」

「え？」

「事情を知りながら何もしなければ、俺は絶対に後悔した。だから助けた。そしてその助けた命が、こんな理不尽に奪われようとしている。……そんなのは、認められない。認めたくない。……それだけだよ。全部俺が、俺自身が後悔しないために、自分の行動を誇れるためにやってるだけさ」

その俺の言葉に、斑鳩は「そっか」とだけ言葉を紡ぎ。
それを聴いていた世刻と永峰、暁、そしてルプトナは頷き合うと、白の守護者へ、斑鳩とカティマ、ナーヤ、そしてサレスは黒の守護者へとその足を向けて。

「まさかわらわ達が、エヴォリアを助けるために敵に挑むとはな。……まったく、わからぬものじゃ」
「それはきっと、皆が思っていることだろうさ。だが……こんなのもまあ、たまには悪くない」
「それじゃ、俺達も後悔しないために、行ってきます」

ナーヤと暁のやり取りと、それを受けた世刻の言葉を合図に、駆けて行く皆。
本当に、有り難い。
皆が皆、俺のわがままに付き合ってくれて……助けて、くれて。
だから、それに応えないといけない。何が何でも。
そう改めて決意して、エヴォリアへと意識を向けた、その時。彼女へ触れさせている左手に、誰かの手が重ねられた。
顔を上げると、真剣な眼差しで俺を見るユーフィーと、眼が合った。

「祐兄さん、あたしの力、使ってください」

そんな言葉と共に、俺の手を通して、ユーフィーのマナが流れていくのを感じる。

「あたしはその人がどんな人かとか、全然知りません。解るのは、あの時祐兄さんに酷い事した人だって事だけですけど……それでも、祐兄さんが助けたいって言うんなら、あたしも手伝います」

だから、頑張りましょう！
そう言ってニコリと笑うユーフィー。
そんな彼女へ「ああ」と頷いて返した時、次いで俺の右手を握る誰か。
そちらを向けば、ミゥが両手で俺の手を握っていた。まるで、祈る様に。

「祐さん。正直言えば、私は上手く割り切れません。これでも旅団に所属してきた身ですから。……ですが、貴方を信じる事はできます。だから私は、彼女を助けたいと言う、貴方を信じます」

そして、流し込まれる暖かなマナ。

「……ありがとう」

それしか俺に言う事はできないけれど。
俺はミゥから受け取ったマナを、そのままエヴォリアへと流し込む。
けれど。
ミゥとユーフィーに手伝ってもらって。
他の皆も、俺達に邪魔が入らないようにしてくれて。
それでも、事態は好転しない。
エヴォリアの身体から立ち上る、マナが消えない。
……焦るな、諦めるな。
けど、俺のマナももう限界に近い。焦りたくなくても、焦燥が募る。

「……祐さん」

そんな時、ミゥに名を呼ばれ、彼女の方を見ると、ミゥは一瞬逡

巡し、直ぐに決意したような顔になって。

「ミゥ？」

そんなミゥに声を掛けると、彼女は静かに俺の手を離し、距離を詰め、俺の頬に手をそっと添えて――おもむろに、彼女の唇が、俺のそれと重ねられた。

「！？」

「……ん……ふ……」

突然の出来事に思考が停止して、その間にミゥの顔が離れる。頬が赤い。可愛いな。俺もきっと赤い。他のクリストの皆は俺の後ろに居て様子は見えないけど、見えなくて良いのかもしれない。何かプレッシャー凄いもの。と、重ねられたままのユーフィーの手に、キュっと力が入るのを感じたところで、

「その、突然申し訳ありません」

そう言ってきたミゥに、俺は「ああ、いや、まあ、別にいい」としか言えなかった。しっかりしろ俺。

次いでミゥは、俺の空いた右手を、再び握る。

そして彼女は、静かに、囁く様に、言葉を紡ぐ。

「晴天みたす輝きよ、大いなる白き乙女よ照覧あれ。

我ら果て無き虚空にたゆたう光。

独り生じ独り消える定めならば。

対なる光を灯火として無明の空をゆく翼と為す。

我と汝は、あざなえる光。
我は汝と共に輝き、汝は我と共に消えゆく。
名付けて曰く、命」

キンッと、彼女と俺の間に、薄っすらとだが、“何か”が繋がったのを感じて、ミゥがほっとした気配。
その直後、ミゥは再び、マナリンクを行って俺にマナを通す。

「これ……は」

先程までと、違う。今繋がった“何か”のお陰だろうか、先程までよりもミゥから流れてくるマナの量が多い……いや、ロスが少ない、と言った方がいいだろうか。

「どう言う事だ？」

そう訊ねる俺に対し、ミゥがマナを流しながら説明してくれた。
何でも、クリスト族には同族間で『同調』という現象を起こせるそうだ。同調した相手の能力を使ったり、経験を追体験したり、と色々出来るらしいが。
そしてクリスト族ではない者がクリスト族と同調する方法。それが、クリスト族と契る――つまり身体を重ねる――事だと言うのだが、今ここでそんなことは出来ない。なので、唇を重ねる事によってそれの代わりとし、簡易にでも俺とミゥの間にパスを繋いだ、と言うことらしい。
彼女の説明が終わったところで、ミゥが俺と繋いでいる手と、逆の手を他のクリストの皆が取っていた。
彼女達は皆瞳を瞑り、意識を集中させているようで――直後、大量のマナが、ミゥを通じて俺に流れ込んできた。
冷厳なる氷晶の、大いなる深遠の、優しき深緑の、猛き炎熱の――

―ルゥ達の、マナが。
その受け取ったマナを流した、その時。それまでは依然として消費量の方が多かったのか止まらなかった、彼女の身体から立ち上っていたマナ――が、消えた。
とは言えまだわからないので、気力を振り絞ってもう暫くマナを流し続ける。
そして――。

「……崩壊が、止まった」

エヴォリアの身体から手を離し、マナを流すのを止めて尚、彼女の身体に変化が起こる兆しは無く――俺達はようやく、大きく安堵の息を吐いた。

永遠神剣之章：６２．決着へ、向けて。

どうやら容態の安定したらしいエヴォリアの様子に、一度深く息を吐いた。

正直身体がだるい……マナも魔力も足りない。オーブメントに残ってる導力（EP）は『機構２』のクォーツで徐々に回復するとは言え、こちらも現状ほぼ空だ。せいぜい残ってるのは気力と体力ぐらいか。……何とも無い無い尽くしだな。とは言え、これは覚悟の上のこと。

この世界がマナの枯渇によって滅びたのだとしても、今日一日の僅かの間に、数多くのガードナーや守護者、そしてミニオンがマナに還った。

大半は斬った神剣に吸収されるとは言え、それでもある程度は世界に吸収され、そのうちに僅かなれど世界の維持の為に使われるだろう。けど今ならば、それらはまだ大気に溶けた段階で漂っているはず。

精神を集中し、それら大気のマナを体内に取り込み、取り込んだマナを身体に染み渡らせる様に循環させる。

……よし。まだいける。

ユーフィーとミゥが、「マナリンク、しますか？」と言ってきたが、連戦続きで彼女達とて消耗してる上、この先まだ――シティ内部に入ってからも――戦闘が有るだろう事を考えると、温存してもらった方が良いだろう。

「……って訳で、ユーフィーとミゥはここでエヴォリアを見ててくれ。流石に放置して置く訳には行かないしな」

エヴォリアはどうやら気を失っている様で、ここに独りには出来ないし、ついでにミゥとユーフィーには、この後に備えて身体を休めてもらおう。

そう言うと、ユーフィーはショウの方を見ながら「大丈夫ですか？」と訊いてくる。

……確かに『浄戒』の力を、スバルの分まで取り込んだのは脅威だけど。

「まあ大丈夫だろう。見るからに先程より力が落ちている。……身の丈に合わない力を持つとどうなるか、と言う良い見本だな」

俺と同じ様に、ショウの様子を見ていて気付いたらしいルゥが言う。

ルゥの言う様に、どうやらショウは『浄戒』を扱いきれないらしい。……当然か。あれは元よりジルオル……世刻の力。寧ろ今の今まで、ここまで使いこなしていられた事の方が驚きだ。執念と言うべきか……やはり、人の“意志の力”は侮れない。

「それじゃ、ルゥとゼゥは黒、ポゥとワゥは白に行ってくれ。俺はショウに向かう」

「祐。確かに奴の力が落ちているとは言え、脅威な事には違いないのだから、油断はしないようにな」

「……マナよ、その身を守る力となれ……『ウィンドウィスパー』。……祐さん、気をつけてください」

皆にそう声を掛け、返って来たルゥの言葉に片手を上げ、神剣魔法で風の護りを掛けてくれたポゥに「ありがとう」と応え、俺はショウへと駆け出した。

とは言え、ショウ自身も己の力が抜けていっている事を自覚しているようで。近づくにつれその困惑した表情が見て取れた。

「どうやってやがる!?　力、力が……くそっ……くっそおおおおおお!!!」

「はっ！　今の内に一気に畳みかけてやる！！　いくっぜえええ！！」

ショウの言葉にソルラスカが吼える。

対するショウは、その言葉で我に返った様にソルラスカ達を睨みつけ、『疑氷』を構えた。

「舐めるなよ！　それでも貴様等を相手にするには充分なんだよ！！」

その言葉と共に、雨霰の如く放たれる魔弾。地面を抉り、クレーターを創り、壁を、大地を、建物を消し飛ばす。

俺はそれを遠めに見ながら、僅かに回復したマナの一部を魔力へと練りこみ『魔法の射手』を一発だけ生成。準発動段階まで持っていったところで、レーメにそのまま留めていてもらう。、

次いで残りのマナをオーラフォトンへと変え、全身……は無理なので脚と右腕を中心に巡らせ、身体能力を向上。それと同時にナナシがクォーツの効果で回復した導力を使い、俺に移動力向上（シルファリオン）アーツを掛ける。

ショウへ向けて一歩。

『観望』は右手を覆う手甲（ガントレット）へと形状を変化させて。

その間にも、一歩、二歩と踏み出すごとに、景色は流れる。

ショウから放たれる魔弾の雨は、その殆どはソルラスカ達へと放たれたもの。とは言え流れ弾がこちらに来る事もあるのだが、それらはポゥがかけてくれた『ウィンドウィスパー』による大気の壁が、流す様に後ろにそらしてくれた。

そんな中、アーツとオーラフォトンにより強化された脚力により、俺の身体は正に飛ぶ様にショウへと迫り、奴が気付く時には既に間近まで接近していて――。

とりあえず、一発、ぶん殴る！

振りぬいた拳はショウの顔面へ吸い込まれ、それと同時に準発動段階になっていた『魔法の射手』を解放。ドゴンッ！　と言う、凡そ拳で殴ったとは思えない音を立て、その身体を吹き飛ばした。まるで弾丸の如く。

そしてそのまま建物へと轟音を立てて激突し、砂塵を巻き上げた。

「……悪い、遅くなった」

思った以上にぶっ飛んだなぁ何て思いつつ、突然の俺の強襲に驚いたか、硬直していたソルラスカ達へと声を掛ける。と、それで我に返ったらしいソルラスカが「お、おお」と返事をし、「……で、あっちはどうなの？」とヤツィータが問いかけて来た。そのヤツィータの問いに、少し離れた所にいるベルバルザードがピクリと反応するのが見て取れた。

「ああ、何とか肉体の崩壊は止められた。意識はまだ戻ってないけど、恐らく大丈夫だと思うよ」

そんな俺の言葉に反応したのは、やはりというかベルバルザード。彼は静かに近づいてくると、

「……事情は聴いた。エヴォリアの“想い”と“命”を救ってくれた事、感謝する」

彼に「俺が勝手にやった事だから、気にするな」と返したところで、ショウがぶっ飛んでった辺りから瓦礫が崩れる音がした。

直後、爆発するように瓦礫が弾け、崩れ落ちる。そして、ショウが再び、その姿を現した。

ほぼ不意打ちだったからか、ブロックが間に合わなかったのだろう、その顔は表面の皮膚組織が大きく裂け、内部の金属が見えてい

る。要するに、以前スバルが、世刻との力のぶつかり合いの末になった様な状態で。

「何なんだ……何なんだよ貴様等は！！　貴様等さえ来なければ！！　俺達は日々を続けられたと言うのに！！　……死ね。死ね！死ね！！　俺の、邪魔を、するんじゃねえええええ！！！」

叫びながら放ってきた一撃。怒気と殺気を多分に孕んだその一撃は、しかして先程までよりも格段に威力が落ちていて、タリアが――それでも渾身の一撃でなければいけなかったが――迎撃した。

それによって、己の力が随分落ちてしまった事に気付いたのだろう、ショウがその顔に苦々しい表情を浮かべる。

その時、俺達から少し離れた場所で戦っている姿の見えていた、黒と白の守護者が、その体躯をマナへと変えていくのが見て取れた。

まぁ、ルゥ達が参戦したのだから、早々に片付いても当然かと思いながらショウを見ると、彼はその表情を更に歪め、

「ちっ……役立たず共がっ！　一度退いて傷を直さねえと……くそったれ！　おい、『セントラル』！　結界を張って時間を稼げ！！　……？　……おい、聞こえないのか！　『セントラル』！！」

流石に現状では不利を悟ったか、退く事にしたらしいショウだが、どうも様子がおかしい。

なんだか知らないが、今の内に畳み掛けられるだけ畳み掛けておこう、と、ソルラスカ達と一瞬顔を見合わせ、頷き合う。が、一歩踏み出したところでこちらの動きに気付いたらしいショウが、悪態をつきながらも弾幕を張ってきたために、足を止めて防戦に入らざるを得なくなる。

そして、その弾幕を凌ぎきった後には、既にそこにショウの姿は無かった。

「……どうなってやがる？」

そんなソルラスカの疑問は、余りにもアッサリとした引き際によるものだろう。

それに対して「何か様子がおかしかったわね」と言うヤツィータ。

と、両肩に何かが乗る感触。今の弾幕から逃れるために、俺の後ろに退避していたナナシとレーメが座ったか。そう思ったところで、予想通りと言うか、耳元で「それなのですが」とナナシの声が聴こえた。

「少々感覚を広げて探ってみたのですが、どうやら『セントラル』との通信が途絶えたようですね」

「ってことは、『セントラル』に何かがあって連絡が取れなくなったから、慌てて戻ったってこと？」

「確信はできませんが、状況から察するに十中八九は間違いないかと」

そんなナナシとタリアのやり取りを聴きつつ、俺は小さく溜息を吐いた。……一体どうなってやがるんだか。まあ、それを確かめるにはセントラルタワーに行くしかないんだけどな。

案の定と言うか――他に選択肢は無いのだが――合流したサレスにショウの様子を伝えると、どちらにしろ進むしかない。とは言え向こうに“何か”があったのなら、この機を逃すわけには行かないという結論に達し、少々強行軍だが直ぐに先に進む事となった。

ちなみに、エヴォリアは未だ気を失ったままだったので、ベルバルザードに後は任せた。……気になる事は確かだが、流石に誰も側に付かずに、彼等だけをものベーに乗せるわけには行かないからな。

……予感は、する。この世界での戦いは、もうじき終わる。

果たして……戦いと共に終わるのは、俺達か。それとも、この世

界か。

◇◆◇

入り乱れるはマナの奔流。漂うは戦場の気配。ぶつかり合うはエゴとエゴ。

その濃密なる混沌は、『ソレ』を呼び覚ました。

「ふ……ふふ」

『ソレ』は忘れていた『己』を思い出し。くつくつと笑う。

「ふふ、うふふふ、ふふふふふ」

笑う。嗤う。哂う。微笑う。

戦場を見て、世界を視て、人々を看て。戦う者達を、観て。

「……あぁ……なんて――」

囁く様に、慈愛に満ちた、甘く、柔らかな、楽しそうで、嬉しそうな声で、言う。

――罪深い人たち。（おいしそうな）

永遠神剣之章：６３．スバル、その決断。

ショウを追ってスラムを駆け抜ける事しばし、俺達はスラムとシティを隔てる壁、そこに作られた門へと辿り着いていた。
ここまでの間に『セントラル』からの妨害行為は無し。それどころか、永峰が「ものべーが動きやすくなったって言ってます」と報告してきた。
その一方で、先程から細かに地面が振動しているのが、気に掛かるところであるのだが。……“この感覚”に、嫌な予感がぬぐえない。
それに加え思い出したが、“原作”ではここで、俺達の周囲の時間をピンポイントで巻き戻し、先へ進めないようにするトラップがあったはずなのだが、それも無かった。……と言う事はやはり、『セントラル』自体に何かがあったと考えるべきなのだろう。
そのまま門を駆け抜け、シティへと突入する。
そこには流石にショウが置いていったか、幾許かのガードナーと赤と青の守護者（ガーディアン）。
こちらの消耗は激しい。とはいえ、流石にショウも余裕は無さそうだったし、恐らくはコレが向こうにとっても残存兵力の全てだろうってのが救いか。……まあ、断定はできないのだけど。
先手は敵、ガードナーの神剣魔法だった。
雨霰と降り注ぐ炎弾をかわし、赤のガードナーへ接近したところで、再び練りこまれる赤マナと、次いで放たれる神剣魔法

「燃え尽きろ……『ファイアーボール』」
「させるかっ！　『アイスバニッシャー』！！」

俺の至近距離から放たれんとした敵の神剣魔法は、咄嗟に紡がれたルゥのアイスバニッシャーで打ち消された。その瞬間に『観望』

を一閃。その一撃はブロックに弾かれるも、ガードナーの体勢を大きく崩す。そしてその隙を突いて繰り出されたゼゥの斬撃が、赤のガードナーを塵に還した。

そこで背後と左に気配を感じ、振り返りつつ『観望』を構える。視界に入ったのは、背後から俺に斬りかからんとしていた青のガードナー。そしてそいつと俺の間に割って入り、敵の剣を受け止めているユーフィー。そのまま敵の剣を押し返し、体勢が崩れたところをワゥの『剣花』が切り裂く。

一方で左から来ていた黒のガードナーは、ミゥがその巧みに『皓白』を操り、杖術で攻撃を捌いている間に、ポゥの『嵐翠』が刺し貫いていた。

その時点で一度体勢を立て直し、敵を見据える。と、青の守護者と対峙する斑鳩に槍を投げようとしていた緑のガードナーが居たので、振りかぶったところで接近、大剣状にした『観望』をフルスイングして叩き込む。

流石にロクにマナの込められていない攻撃じゃ、物理特化の防御を誇る緑のガードナーへは効果は薄い。が、それでも体勢を崩し、斑鳩への攻撃をカットする事はできたので上々だろう。

どうやら音でこちらに気付いたらしい斑鳩へ軽く頷き、ガードナーへ追撃……しようとした時には、既にルゥの一撃が敵を沈めていた後だった。

仕方が無いので周囲を見回し、次の敵を……と思ったのだが、どうやら俺の周囲に居たガードナーは今のが最後だったらしい。……となると守護者かな。なんて思った所で、くいっと袖を引かれたのに気付く。

そちらを見ると、俺をじっと見つめるポゥが。

「駄目です」

「祐、あなた今かなり消耗してるでしょう？　ガードナーならともかく、アレはやめておきなさい」

どうやら顔に出ていたらしい。
きっぱりと一言で言い切ったポゥの言葉に続いたゼゥの言葉に、思わず苦笑する。いや何というか、こう気に掛けて貰えられるってのは、幸せなことなんだろう。
まぁ、今の状態じゃ加勢しても大して役に立てないってのは確かなんだけれど。
そんな俺の背中をぽんっと叩いたのはワゥで。

「ってわけで、ここはボク達に任せてよ！」

にぱっと、太陽の様な、と言う表現が良く似合う笑みを浮かべて言ってくれる。
わかったよ、と言いながら頭を撫でてやると、えへへ、と、小さくはにかんだ。

「何というか……敵(かな)わないな」
「……ですが確かに、マスターは少々独りで無茶をしすぎますから」
「まぁ、お言葉に甘えて、今の内に少しでも回復に努めるのがよかろう」

守護者に向かっていく彼女達を見やりながら、つい口をついた言葉に、両肩に座ったナナシとレーメが苦笑するのが解った。やれやれ。

……
……
……

ガードナーと守護者を下し、シティを駆け抜けることしばし、俺達の目の前に一際威容を誇る建物が現れる。……この世界の中枢、セントラルタワーだ。

そして、タワーへと辿り着いた俺達の耳に、激しい爆発音が響く。

一体何が起こっている？

顔を見合わせた俺達は、そのままセントラルタワー内へと突入した。

……内部は酷い有様だった。

崩れ落ちた壁や天井。その有様は、小規模な爆発が連続して起きたかのような……否、入る前に聴こえた爆発音、アレから察するに、事実その通りなのだろう。

周囲の様子を見ながら慎重に進むことしばし。

幾つかの階層を上がったそこに、彼は居た。

壁にもたれる様に座り込んだ、白い鎧を着込んだ青年……スバルだ。

「スバル！」

「待て、望」

思わず、と言った雰囲気で声を挙げ、駆け寄ろうとした世刻をサレスが止める。……まあ、状況によっては戦闘になり得るのだから、不用意な行動は控えるべきだろう。

一方でスバルは、今の世刻の声でこちらに気が付いたか、臥せていた顔を上げ、こちらを見る。

その瞳には、以前『セントラル』によって支配されていた時の様な様子は見られず、確かに理性の光がある……様にみえる。

「……やあ、望君、皆さん……よく来てくれましたね」

そして予想に違わず、しっかりと“意志”の篭った声を掛けてきた。とは言え、その口調には明らかな疲労が見えるのだが。

そんなスバルへ、今度こそ世刻は駆け寄っていき、「何があった？」と声を掛けている。

それに対して、スバルはこう答えた。「この世界が、あるべき姿に戻るだけですよ」と。

スバルは、あの時……俺達との最初の対峙の際に正気を――ナナシの力によって――取り戻し、俺に向かった放たれたショウの一撃を庇って重症を負い、ずっとここ、セントラルタワーにて修復を受けていたらしい。

そして大まかに修理を終え、再び気が付いた時、『セントラル』に問われたのだと言う。「貴方は、どうしたいですか？」と。

スバルは言う。「恐らくセントラルは……僕が、祐君、貴方を庇ったのを見て、気付いたんだと思います。本当に大切なものは何なのか、って」

「本当に……大切なもの？」

ぽつりと聴こえた誰かの声。スバルはそれにコクリと頷くと、言葉を続ける。

「はい。……この世界は一度滅びました。それは変えようの無い事実なんです。それを……他者を殺して、心を殺して、自分自身すらをも殺して。そこまでして事実を捻じ曲げ、続けることに意味はあるのでしょうか。それは最早、この世界も、僕達も、“生きている”とは言えないんじゃないでしょうか。

だから、僕はセントラルに答えました。『ショウを止めたい』と。ショウを止めて、この世界をあるべき世界に戻すと。

そしてセントラルは、それに答えてくれました。……そう、僕はこのセントラルの機能を止めたんです。この世界を、終わらせるた

めに」

スバルのその言葉に驚愕する俺達。

セントラルの機能を止めた。そしてショウを追っている時からずっと続いている、この細かな振動……それが示すのは――。

「……そうか、“原因”が見えないから結びつかなかったけど、この“振動”と“予感”が何なのか、やっと解ったよ」

つい漏らした俺の言葉に、先を促す様に見てくる斑鳩達。表情から察するに、彼女達も解ってるんだろう。少なくとも、『精霊の世界』での戦いを経験した者達は。

「似ているんだよ。暴走しかけた“剣”が……『空隙』が引き起こしていた振動と。これは、世界が崩壊する予兆だ」

俺の言葉に息を呑む皆。

そして、頷くスバル。

「その通りです。とは言え、直ぐに崩壊するって訳じゃありません。今はショウが、『浄戒』の力を使って崩壊を食い止めている様ですから」

「ショウが？　……どう言う事だ？」

「実は、セントラルの機能を止めた時に、セントラルからこの世界の維持に使っていた『浄戒』の本体を受け取ったんです。ですが……申し訳ありません。ショウにそれを奪われてしまいまして」

スバルの説明に、なるほどなと納得する。

ショウにとって、この世界は全てだ。この世界を維持し、復活させて、変わらぬ日々を、在りし日の想いを実現する事こそが彼の願

い。
だとすれば、この世界が崩壊するのを防ぐのに力を割くのも当然なのだろう。

「……望君、君は言っていなかったけれど、恐らく『浄戒』は本来君の力ですよね？」
「解るのか？」
「ええ。『浄戒』が自分の中にあるとき、君が側に来ると『浄戒』が活性化するのが感じられたんです。……多分、貴方達がこの世界に来たのは、『浄戒』の力を取り戻すため。……違いますか？」

問と言うよりも、確認するかの様に訊いて来るスバルへ頷いて返す世刻。
まあそこまで解っている以上、最早隠す様な事でもない。

「本当は、こんな戦いしたくなかった。出来れば話し合いで解決したかったんだけどな」

そう言う世刻へ、スバルは「全くですね」と苦笑を返し、

「……あつかましいお願いだと言うのは解っているのですが……けど、僕にはもう選択肢は無い。だから、頼みます。……ショウを止めたい。力を貸して下さい。……あいつは……もう、力に呑み込まれてしまっている……」

そう頭を下げるスバルへ、世刻達は「勿論だ」と頷いて、スバルはそれに「ありがとう」と返す。
そんな中、ミゥ達、クリストの皆は、複雑な表情で彼らを見ていた。
……彼女達がいまどのような心境なのか。それを推し量る事など

できはしなく、掛けられる言葉もまたある訳じゃないけれど、ただその表情を見ている事も出来なくて。つい、彼女達の頭を順番に、軽く撫でていた。

子どもじゃないんだから、なんてゼゥの呟きが聴こえたが、まあたまには良いだろう。

不安とも、辛い……ともまた違うだろうが、そんな気持ちの時に、多少なりともそれを解ってくれる第三者が居るというのは、思っているよりも随分と心が救われるものだと思う。

「状況が違う、と言うのは解っているのだが……中々に複雑なものだな。この世界に住む者が、この世界の存続を諦めるのを見る、と言うのは」

苦笑交じりのそんなルゥの言葉に次いで、彼女達の頭から離した手を握られる。

どうした？　と顔を向けると、ルゥは握った手を、両手で包み込む様にして、そのまましばし瞠目した後、

「……祐、ありがとう」

そう、思わず見惚れ双な微笑みを浮かべて、言った。

次いで、今度は腰の辺りにしがみつく誰か。視界の端に移るのは、赤い髪と特徴的な角。そしてこちらからも聴こえて来る、「ありがと」と言う言葉。

そんな彼女へ、空いていた左手で頭を撫でてやりながら、「どういたしまして」と返した。

俺が彼女達の気持ちを、十全に解っているなんて事は思っては居ないけれど……それでも少しでも力に慣れたら。そんな想いを込めて。

永遠神剣之章：６４．スバルと、ショウ。

結局俺は、この世界に対して何もする事が出来なかった。
自分が世界の流れを変える……そんなおこがましい考えを持っている訳ではないけれど。だけど、もっとやりようがあったのではないか。そんな風に思ってしまう。……思ったところで、どうしようもないと言うのに。
だから、最後まで見届けよう。この世界の行く末を。眼を逸らす事無く。

スバルの先導で、セントラルタワーの中心を目指す。恐らく、そこにショウが居るだろうとの予想の元に。
道中に最早妨害は無く、程なくして俺達は、セントラルタワーの中枢へと辿り着いた。
破壊され、すでに只の穴と化した扉をくぐる。
そこには、大きく崩れ、夜空を除かせる壁を背に、泰然と立つショウが待ち受けていた。

「……来たか、異分子ども！」

開口一番にそう言い放ったショウは、ぐるりと俺達を見回し――そこにスバルの姿を認め、驚きに眼を見開いていた。

「スバル！　スバル、そんなところで何をやってるんだ？　こっちへ来い。安心しろよ、直ぐにこいつ等を片付けて、またいつもの日々に戻るからな」

そんなショウの言葉に、スバルはその場から数歩進み出、そんな

彼へショウは破顔した後、その表情を驚愕のものへと変える。……スバルが、その手にした、弓型永遠神剣第六位『蒼穹(そうきゅう)』を引き絞り、力を溜めだしたからだ。……ショウへ向かって。

「スバル……おい、何の冗談だよ。何で俺に向かって武器を構えるんだ、スバルッ！」

「……ショウ、もういいよ。もう終わりにしよう。……この世界を、あるべき姿に戻すんだ」

「何を言ってるんだよ、スバル！　約束しただろう!?　スラムとシティの壁を取り払い、俺達の手で一つにするって!!　……それが、それこそがこの世界のあるべき姿だ!!

……ああ、そうか、そうなのか。貴様等だな？　貴様等がスバルに吹き込んだんだろう!?　貴様等さえ居なければ!!!」

「……ショウ……君は……」

話しながら、激昂していくショウ。その瞳には憎しみの色。毒々しいまでの殺気を撒き散らすショウへ、スバルは深い悲しみの色を湛えた顔を向けた。

「皆さん、僕が負けた時は……あいつを、お願いします。……行くよ、ショウ！」

「くっ……スバルッ!!」

力を溜めながらショウへと駆け出したスバルに対し、ショウもまた覚悟を決めた様に、その表情を険しくし、己が神剣『疑氷』へと力を籠める。

既に傷つき、十全たる力を出せないスバルと、その力の大半を世界の維持に傾けているショウ。

互いに賭けるは、一撃必殺か。

両者共に、相手の射線を定めさせない様に動きまわり、牽制の一

撃々々は壁を抉り、大気を乱し、相殺してマナを撒き散らしながら、同時に、深く静かに真なる一撃の溜めに、その力を溜めていく。

予兆はじわりと。切欠は唐突に。。

『浄戒』の力のバランスが、攻撃へとシフトしていっていたせいだろう、ショウがその神剣へと力を溜めるにつれ、世界を襲う振動は徐々に大きく成っていった。

そして、傍から見ても互いの神剣に掛かる力が臨界に達したと見て取れた、その瞬間、一際大きな揺れがセントラルタワーを襲う。

「しまっ……！」

それによってスバルがバランスを崩した。

致命的な隙。

俺達の誰もが、スバルがやられると身構えた、その瞬間。

「うおおおおおおおおおおおおお！！！」

「っ！　あああああああ！！」

ショウの裂帛の声に反応し、咄嗟に撃ち出したのだろうスバルに対し――ショウはただ、その力を放つ事無く――静かに微笑み、その一撃に、腹部を大きく撃ち貫かれていた。

「……え？

「……ショ……ウ？」

余りにも、意外すぎる結末。

誰かが漏らした驚愕の声に、スバルの愕然とした声が重なる。

「ショウ……ショウ！」

「……スバル……行け、よ……この鳥篭を出て……遥か世界、

へ」
「……ショウ……君は……」
「はは……まったく……やって、らん……ねぇ、ぜ……」
――それが、俺達が聴いたショウの最後の言葉だった。
スバルは言う。
「幾百、幾千の言葉を交わす以上のものを、あの戦いでショウから感じ、受け取った。だから、大丈夫です」
と。
ぽぅ、と、倒れ伏したショウの身体から、光の塊が浮かび上がり、中空で制止した。
恐らくは、あれが……。
「……望君」
スバルが世刻を促し、複雑そうな表情をしていた世刻がそれに頷いて返す。
恐らく、スバルとショウの二人に、自分と暁の姿を重ねてしまったか。……もしかしたら、これが自分達の辿る未来だったのかもしれない、と。
その予想が正しかったか、ちらりとこちらを見た世刻が、小さく頭を下げたのが解った。
そして、光に向かって手をかざす。と、その手を伝い、光の塊は世刻の身体へと溶ける様に消えていった。
ふと気になって、世刻に声を掛けた。「『支えの塔』での俺の言葉、覚えているか？」と。
それに対してしっかりと頷く世刻。……うん、大丈夫そうだな。
「ならいいんだ」と言うと、「いえ、ありがとうございます」と返

って来た。
そして、光――『浄戒』――が世刻の中へと消えると同時に、大きくなる振動。
……あぁ、さっさとこの世界を出ないとな。……反省も、何もかも後回しだ。

「……すぐに脱出するぞ。希美、ものべーをこちらへ回せ」
「あ、はい。……あの、この世界の他の人たちは……？」

永峰が気に掛けた事に、スバルが小さく首を横に振って答えた。

「……彼等の存在は『セントラル』に依存していましたから。多分もう、皆その機能を停止しているはずです」
「……はい」

スバルの言葉に永峰が頷いたのを受けて、俺達はものべーへと向かった。

◇◆◇

大きな振動に眼を覚ます。……どうやら、ある程度の自己修復で機能が復活してしまったようだ、と、目覚めたショウは自己分析した。
まったく、世界の終わりをその眼に焼きつけながら死ね。そういうことか、と、独り哂う。
まぁそれも、自分の末路には相応しい。そう思った時だ。

「こんにちは。ひどい揺れね？」

そんな場違いな声が聞こえたのは。
動かない身体を無理矢理に動かし、顔だけをその声が聴こえた方へと向け――何だ、こいつは。それ以外の感想が出なかった。
女だった。
前の開いた純白のローブに身を包み、白いフードと、流れる様な赤髪によって顔の右半分が隠されているが、それでも尚解る美貌。除く瞳は鮮血の赤。そこまではいい。
だが、そのローブの下に覗くのは、陰部のみを辛うじて隠したのみで、後は全裸だった。
――何て格好してやがる。
そう思ったショウだったが、次にその女から発せられた言葉に、頭の中が真っ白になった。

「この世界の人たちは、どうにも美味しくなかったわ。……ああでも、緑色の大きなトカゲだけは食べ応えもあって美味しかったけれど。……ふふっ。貴方は――どうかしらね？」

コイツは今何て言った？　この世界の人達を――スラムの皆を、そして緑の守護者を……喰った？
自分の聞き違いか、と、己の耳を疑った、その時。
あーんと口を開けた女が、その口を閉じた、その瞬間。

ショウの下半身が消滅した。

ぼりん、と、固いものを噛み砕く様な音が響く。

「ん～……貴方もやっぱり食べ辛いわね。あ、でも、貴方は中々罪深いわね」

理解が追いつかなかった。
何を言っている、こいつは？　何を喰っている、こいつは!?
ショウの困惑と怯えを感じ取ったか、女は小さく、そして柔らかく微笑む。

「ふふふっ。そんなに怯えないで。大丈夫よ」

――さあ、私と一つになりましょう？

それが、ショウが聴いた最後の言葉だった。

永遠神剣之章：６５．帰還、新しい仲間。

セントラルタワーを脱し、シティ部を駆けることしばし、この付近まで迎えに来ていたものべーへと乗り込む。

ものべーに入った瞬間に、それまで身体を襲っていた振動は感じられなくなる。

学校施設をそのまま背に乗せてしまっている事から解るように、ものべーは広い。

その広い背のほぼ中心あたりに居る俺達には、世界の様子は見えず、眼に入るのは夜空のみ。

そこだけをみれば、とてもこの世界が崩壊しかけているんだなんて思えなくて。……けれど、これで良いのだろう。そう、壊れ行く世界の様子など、見えないほうが良いのだ。少なくとも、彼女達には。

ちらりと眼を向けると、やはり複雑そうな表情をしていたミゥ達と目が合った。

なんと声を掛けたものか。そう思ったところで、

「うおおおっ！　戻ってきたぜーー！！」

ソルラスカの大声が響き、目を合わせたまま互いに苦笑した。

まあ、今は皆が無事であったことを喜ぶべき、か。ソルに感謝だな。

そう思いながら、突然大声を出したためにタリアにじと眼で文句を言われているソルラスカに続いて、声を張り上げてみる。

「ものべーよ！　私は帰ってきた！」

「……先輩、ものべーに核でも撃ち込む気ですか？」

「……先輩の二つ名は『ものべーの悪夢』ですね」

「ごめんなさい」

「あんたまで何やってんのよ」と言うようなタリアの視線をうけつつ、世刻と永峰と、そんな馬鹿な事を言って早々、ものべーが一声、大きく鳴いた。

「くぉぉぉぉぉおおおおおん」

「……っと、出発か」

「まあ、最善、とは言えないが、皆無事で良かったよ」

その声を聴いてポツリと漏らした世刻に、永峰が頷くのを見つつ発した俺の言葉に、世刻が同意する。

「全くですね。それに新しい仲間も増えましたし」

そう言って世刻が斜め前に視線を移すと、そこに居た新しい仲間――スバルと、その横にいたヤツィータが小さく笑みを浮かべ、

「そうよねぇ。スバル君、よろしくね？」

「あ、はい。皆さん、よろしくお願いします！」

皆を見回してペコリと頭を下げるスバルに、ソルラスカが「おう、よろしくな！」と答え、それに続いた皆も返事を返していった。

「それにしても、良いんでしょうか？　皆さんの敵だったのに……」

そんなスバルの疑問に苦笑が漏れる。

何というか、生真面目と言うか。……いや、普通に考えれば、こう思うのが当たり前なのか。

……何だかんだ言っても、結局は“人が良い”んだよな。旅団の

皆は。

「まあ実際のところ、セントラルに操られていた様なものだし、気にする事無いわよ」

そう思っている矢先に、案の定というか、斑鳩がそう告げていた。それに続いて、斑鳩の言葉に同意する旨を、他の皆もスバルに告げていった。

「あ、サレス、とりあえず休憩でいいわよね。すぐに会議とかしないでしょ？」

「ああ。沙月達は学園の皆と話もあるだろう。私も椿君に状況を説明せねばならんしな」

「ん、わかったわ」

一通りスバルに声を掛け終えた所で出た、斑鳩の問にサレスが答えたところで、ふと何かに気付いた様にカティマが「そういえば……」と声を漏らした。

「ん？」

「エヴォリア達はどうなったんでしょうか？」

上がったのはそんな疑問。確かに、シティに突入する前に別れたきりだしな。とは言え……。

「ん～……まあ、ベルバルザードに任せたから大丈夫だと思うけど」

「確かに、その辺は律儀そうだものね。武人って感じだし」

そう予想を述べると、、横で聞いていた斑鳩も同意の声を上げる。武人だから何なんだと思わなくも無いが、言いたい事は解る。うん。

カティマも「……そうですね」と一つ頷きいところで、それを肯定するように、俺の後ろから声が聴こえた。

「ええ、お陰様でね」

「ほらな？」

うん、やはりあの場はベルバルザードに任せて正解だったようだな。まぁ、他に選択肢も無かったと言えばそうなんだけど。

「みたいね。……さて、それじゃあシャワーでも浴びて、皆のところに顔でも……え？」

「あ、沙月先輩、私も……あれ？」

「……」

「……」

ふと疑問が頭をもたげる。斑鳩と永峰、それに周りの皆も同じ様に。

後ろを向く。

そこに居たのは、旅団のメンバーの誰かではなく。

「ってエヴォリア！？」

「いつの間に居るのよ！？」

「いつの間にって……『私は帰ってきた！』の辺りかしら？」

「……最初からじゃねえか。全っ然気付かなかった……まあいいか」

「いいのかよ！？」

「いいんじゃね？　……今更敵対するつもりも無いんだろ？」

俺の問に、当然とばかりに頷くエヴォリア。

「そうね。少なくとも貴方が居る以上は、そのつもりは無いわ。と

ころで青道祐」

彼女はそう言うと、居住まいを正して、ひたと俺の顔を見据えて来た。

どうでもいいんだが、フルネームで呼ぶの止めてくれないかな。

「……改めて、礼を言わせて貰うわ。ありがとう」

そして出てきたのは、そんな言葉。

……別に、礼を言われたくてやった訳ではない。あれは俺が後悔しないためにやっただけだから。

だからまあ、俺が返す言葉は決まっているんだけれど。

「ん……まあ俺が勝手にやった事だしな。気にするな」

そう、所詮は俺自身の自己満足の為に手を出した事。……とは言え、やはりそれでも、感謝してもらえるのは嬉しいもんだ。

だけど、一抹の不安もある。このタイミングで南天神の亡霊達を倒してしまった事によって、より悪い方向へ流れてしまうのではないか、なんて不安。

そう思った所で、左肩に座るレーメの手に力が入るのが感じられた。

（……ユウ。その不安は、普通に生きていく上では当然のもの。である以上、それは当然として受け止めて、そのままでいけば救われなかった者が救われた、と言う事を誇るべきだぞ）

（マスターは少々、悪い方向へ考えるきらいがありますから。……慎重である事は大事ですが、時にはレーメの様に、何も考えずに突っ走るのも良いのではないでしょうか？）

（そうそう……ってなんだとー！？）

そんな二人のやり取りに思わず噴出しそうになり、慌てて居住まいを正しながら、念話でありがとう、と告げておく。

「そう言うわけにもいかないわよ。故郷の妹のみならず、私の命まで救ってもらったのだもの。……とりあえず、裸に剥いて押し倒した事は水に流してあげる」

「……祐」

「……祐さん」

「……あんた、なにやってんのよ？」

そんなエヴォリアの……具体的に言うならば後半の台詞に、周囲の体感温度が若干下がった気がする。

けどまあ、あの場はああするのがお約束だったんだ、とも思うわけですよ。いや、何のお約束よって言われても困るんだが。

「いやほら、エヴォリアに話を聴いてもらう為に必要な事だったんだよ。無力化しないといけなかったしな」

エヴォリアの武器が腕輪型である事から、弾いて手放させるって訳にもいかなかったしな。まさか腕を切り落とすわけにもいくまい。

そう続けると、実際にその場で見ていたナーヤがなるほど、と頷き、

「……ふむふむ。で、実際の所はどうなのじゃ？」

「そりゃあ、楽しみ半分？」

「……はぁ、おぬしと言う奴は……」

そんなやりとりをナーヤとしていると、「あ、それと」といいつつ、エヴォリアが俺の正面に回ってきた。

油断していた。
それは正に、一種の隙を突いた強襲。
「ん？　何……んむぅ！？」
視界いっぱいに広がるエヴォリアの顔。唇に柔らかな感触。甘い匂い。
その的確な口撃（こうげき）は確実に俺の動きを封じ、かといってそれを無理矢理引き剥がす様なそんな勿体無い事ができるはずがないじゃないか。
「あー！？」
「……んぅ……ちゅ……ん……」
「なっ……なななななな何してるのよ！」
「……ぷはっ……何って……お礼？　これじゃあ足りないって言うのなら……ふふっ、まぁ、これ以上も吝（やぶさ）かではないけれど、今はお預けかしら。それじゃ、また逢いましょう」
ゼゥの言葉にクスリと妖艶な笑みを浮かべて、空間に溶ける様に消えていくエヴォリア……ってちょっと待てえ！
「って、おまっ、ちょ！　さり気にすげえ爆弾置いていくんじゃねえ！」
「……マスター……」
「むぅ……」
その申し出はすごく嬉しいんだけど。なんて思ってしまった為に、ナナシとレーメにじとっとした声が耳元で響く。俺も男だもの。仕方ないじゃない。

「……うわぁ……」
「……すごいのみちゃいました」

ってユーフィー。さっきまで眠そうだったのに、そんな興味津々！　って眼で見るんじゃありません。
いやまあ周囲の若干冷たい視線よりも良いっちゃ良いんだが。……いや良くない。どっちも。

「……青道君、そう言うのは皆の目の無いところでやってほしいわ」
「いや、そう言うけど、別に今の俺悪くなくねえ？」
「まあ確かにねぇ。……で、実際のところどうだった？」
「すっげえ気持ちよかった……ってヤツィータ！」
「あらあら」
「……よし、祐。とりあえず一発殴らせろ」
「お断りだ！」

何だろう。何かもうグダグダだ。お前のせいだって？　勘弁してくれ。

永遠神剣之章：６６．会議して、勝負して。（前書き）

※本作に「Ｒ－１５」タグをつけました。詳しくは活動報告にて※

永遠神剣之章：６６．会議して、勝負して。

戻ってきて早々、校舎内に入る以前から、何だか色々と疲れる出来事があったけれど、とりあえずその辺は全部うっちゃって、明くる日の朝、今後についての会議が行われた。

今後――すなわち、『浄戒』をいつ、どこで使用するか、と言うことである。

「いっそもうここでいいんじゃない？」何て意見も有るが、『浄戒』を使用することによって起こるであろう出来事が解っている身としては、そう言う訳にも行かないと言う物で。

それでもまあ、エヴォリア達が敵対しない以上、戦闘は起こらないだろうし。と言う事で、前々からの考え通りに、皆……と言うよりも、暁へと提案した。「『暁の故郷の世界』で行わないか？」と。

この提案に関しては、皆揃って疑問の表情を浮かべていたが。

「なぜわざわざマスターの世界で、と訊いてもいいでしょうか？」

案の定と言うか、暁のナナシが理由を問うてきたので、俺の考えを説明する。とは言え、まさか「『浄戒』を使ったら理想幹神が攻めてくるから」なんて事はいえないので、表向きの理由ではあるが。すなわち、「暁の世界を見せて、彼の境遇を話してやったほうが、世刻もよりやる気になるだろう」と言うことである。

表向き、とは言え、これ自体も必要な事だとも思っている。

“原作”とは違い、現状、暁が早くに和解し、世刻とぶつかり合う事が無くなっている。……まあコレは俺の仕業なんだけれども。

それが意味するのは、“原作”に有る「暁と対立する事による世刻の成長」と言うものが望めないと言う事で。

まあ要するに、その分を少しでも補えたら、と言う事だ。……とは言え、現状は現状で、“原作”には無い「暁と共に在る事による

成長」があったと俺は信じているのだけれど。

『浄戒』を手に入れた時、『支えの塔』で世刻に言った事を覚えているか？　と言う問に、彼はしっかりと頷いてくれていた。それは偏に、『前世』の事についてもしっかりと考えていると言うことだ……と思う。まあ少なくとも、“原作”の現時点での世刻よりは、しっかりと考えているんじゃないだろうか。

それも踏まえてと言うわけではないけれど、暁の過去と現在を知る事が、少しでも世刻のためになれば、と思う次第なわけですよ。

そんなこんなで説明してみた所、どうやら皆も納得してくれたようで、次に向かうのは『枯れた世界』に決定となった。

一般学生の皆には……もうしばし、一緒に頑張ってもらおう。

出来るなら、ここで一度『魔法の世界』辺りに戻って、学生達は降ろして行ければ一番なんだろうが……それはきっと、当事者たる彼等が納得しないだろうし――実際に戻れば、中には降りたい、と言う者が出るとは思うが――正直、『未来の世界』での戦闘を経て、暁の『滅びの神名』の影響がどこまで進行しているか判らないから、なるべく寄り道はしたくないと言うのが正直なところである。

兎にも角にも、次はいよいよ理想幹神との邂逅。理想を言ってしまえば、その場で奴等をぶちのめして、しかる後に悠々と理想幹に乗り込んで、ログ領域に入るのがベストなんだろうなぁ。無理だとは思うけど。

……

……

……

見上げれば、燦々（さんさん）と差す日の光。次の『枯れた世界』までは、後三日は掛かるそうなので、無論この日の光はものべーが生み出した

ものだ。
とは言え、『未来の世界』に居る間はずっと夜間であったために、久しぶりとなる日光はやはり心地良い。
その暖かな日の光に照らされる中、俺はグラウンドの真ん中に佇んでいた。
正面には同じように立ち、ニヤリと獰猛な笑みを浮かべるソルラスカ。
離れた場所に思い思いに座り込んでいるのは、神剣組の皆と、何事かと聞きつけて来た一般生徒達。
こんな状況になっている原因は、会議を終えて今後の予定を立て終えた後に発せられた、ソルラスカの一言だった。

「よし、祐！　約束通り勝負だ！」

俺としては「お断りだ！」と逃げたい処ではあったのだが、曲がりなりにも約束していた以上は仕方が無い。
そんな訳で、俺は現在神剣組の皆と一般生徒――多くは男子生徒だな――が見守る中、ソルラスカと対峙しているわけだ。
ルールは単純。相手に参ったと言わせるか、気絶させれば勝ち。
当然ながら、周囲の一般生徒に被害が及ぶような攻撃は禁止である。
勝負開始まであと十分。さて、どう攻めたものかと考えた処で、見学者の中から「兄貴ー！！」と言う声が聴こえた。
今の声は聞き覚えがある。世刻のクラスメイトの森の声だ。そしてその声の方へと拳を挙げているソルラスカと、響くシャッター音。写真を撮っているのは当然の如く阿川だ。
相変わらず男子生徒に人気あるなー。なんて思っていると、別の一角から声が聴こえてきた。

「祐兄さーん！　頑張ってくださーい！」
「祐ー！　負けるんじゃないわよー！」

その声の方を見ると、フィアが広げたシートの上に、ユーフィーとクリスト達が座りながら手を振っていた。

昨夜は「ソルラスカに殴られて、延びきった鼻の下縮めてもらえばいいのよ！」なんて言っていたゼゥだけど、応援してくれるって事は機嫌もある程度直ったのだろうか。

ちなみにシートの上では、ナナシが待ち時間を利用して、戦術オーブメント（オーバーホール）の簡単な動作確認を行っていたりもする。後ほど分解整備する為だ。そんな訳で、今回はアーツは無し。避けられると周囲に危険が及びそうな魔法も無し。無論、武装解除なんて以ての外だ。周囲への被害云々以前に、ソルの裸なんぞ見たくない。

まあ、今回の勝負は、俺の自力が何処まで付いているかの良い確認になるだろう。

――そんな事を考えながら、俺がユーフィー達へと手を振り返した、その瞬間。ざわり、と、見学者の一部から不穏な空気が漏れた気がした。

「……兄貴ぃぃぃぃぃ！！　俺の分まで殴ってくれえええ！！」

「ちくしょおおお！！兄貴やっちまえええ！！！」

「青道死ねー！　ロリコーン！！」

「ユーフォリアちゃあああん！　お兄ちゃんと呼んでくれえ！！」

……酷い言われようだ。一部変なのが混ざってるし。っていうか、俺に対する野次の理由はそれか？

ヤツィータ辺りからは、「二人とも、無様な勝負しないようにねー」なんて発破がかけられたりしているが、正直、俺のやる気は絶賛下降中である。

と、そうこうしているうちに時間になったか、斑鳩が進み出て、俺とソルラスカの間に立った。

「そろそろ時間ね。準備はいい？」

俺とソルの顔を見て問いかけてくる斑鳩へ頷きいて返し、『観望』を長剣に変えて腰溜めに構える。

それを受け、斑鳩は右手を静かに上げ、

「それじゃ……始め！」

彼女がその手を振り下ろしたのと同時、ソルへと駆け出そうとした俺の眼前に現れる、当のソルラスカの姿。……って、速え！

「先手は貰うぜ！」

『観望』によって強化された動体視力は、俺の腹に向かって振り抜かれんとするソルの拳をしっかりと見る事が出来ているのだが、如何せん身体が追いつかん。

この一撃は喰らう事を覚悟して、せめてダメージを和らげようと、拳が当たる直前に『観望』を胴当ての様に形成する事に成功した。

ドンッと、腹に響く衝撃。

それになるべく逆らわない様に、威力に押されるままに吹き飛ばされる。

ザリザリと、靴底が地を削る音と感触。

止まると同時に大地を踏みしめ、前へ。追撃の為に向かってきていたソルラスカへ『観望』を振りぬくと、『観望』とソルの左拳の『荒神』が鈍い音を立て、火花を散らした。

続けて右から左へ、横薙ぎに振るった『観望』と、フック気味に放たれたソルの右拳に填められた『荒神』がぶつかり合い、反発するように弾かれる。

武器に流されるように僅かに空いた胴へ、一気に身体をねじ込んで来るソルラスカ。

「オオォォォオオラァ！！」

ソルラスカの声が耳朶を打つ。

次の瞬間、最初の一撃にも増した衝撃を受け、同時に吹き飛ばされた。

痛む胴を押さえながら見れば、右肩を下げ気味に背を向ける、独特の構え……って、鉄山靠かよ。

「速すぎるんだよ畜生……！」

思わずそんなボヤキが出るのも仕方ないだろう。何て言うか、こっちが一動く間に無効は十動いてる様な感じとでも言おうか。流石にこのままじゃ、接近戦じゃ勝ち目無いな。判っていた事だが。

『観望』を粒子状のまま大気へ散らし、次いで手の中にも『観望』を槍状に形成し、武器と身体にオーラフォトンを巡らせつつ、口の中で始まりの鍵たる呪を紡ぐ。

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……『戦いの歌』！」

術者の身体へ魔力を巡らせ、身体能力を向上させる魔法であるそれは、知識の通りに俺の身体の中に純粋な力となった魔力を巡らせた。

こちらの様子を伺いつつ、待ち受けるソルラスカへ向かう一歩は――恐らくは、オーラフォトンによる身体強化との相乗効果だろう――俺の予想以上に強く、速く。

『観望』に籠めたオーラフォトンが、バチリと紫電を放つ音を置き去りに、只一撃を、突き穿つ！

「喰らえ、雷光の一閃！　『ライトニングフューリー』！」

突き込んだ槍の穂先は、両腕をクロスする様にガードするソルラスカのブロックとぶつかり合い、拮抗しつつも、そのブロックごとソルの身体を大きく後退させる。

「あああああ！！」

「ちっ……くおおぉぉぉぉぉおおお！！！」

互いに口を吐くは、裂帛の気合。

そのまま押し合いになりそうな処で、ソルはクロスさせた両手を跳ね上げる様にかち上げ、『観望』の穂先を上へと逸らす。

その瞬間、俺は手中の『観望』を通じてソルの上空に展開している粒子状の『観望』へとオーラフォトンを注ぎ込み、撃ち放つ！

「『バロールの魔眼』！」

「っ！　甘え！　うおおぉぉぉぉぉおお！！　ぶっ飛べえええ！！」

さながら豪雨の如く降り注ぐオーラフォトンに対し、ソルラスカは『観望』を逸らすために跳ね上げていた両手に“気”を溜め、大地に叩きつけた。

叩き付けられ、吹き上がるように爆裂する“気”は、猛烈な衝撃を生み出し、降り注ぐオーラフォトンを文字通り吹き散らす。

俺自身は咄嗟に後ろに跳び退って難を逃れた訳だが……お陰でその光景を確り見ることが出来た。うん、冗談じゃねえぞおい。

思わず愕然としてしまった俺の懐へ飛び込んでくる影。

「隙ありだぜ！　喰らえ、裂空衝破！！」

「しまっ……！」

鳩尾の辺りに添えられた手。そこに収束する“気”は、身構える間も無く一気に炸裂し――。

…

……

……

さらさらと、髪を梳かれる感覚に眼を覚ます。
頭の後ろに感じる柔らかな感触が心地良く、薄っすらと眼を開けると、微笑みながら俺を見下ろすユーフィーと眼が合った。
その構図と頭に感じる感触から、自分の状態に当たりを付ける。
……うん、どうやら俺は、ユーフィーに膝枕をされている様だ。

「あー……負けたのか」
「うん。流石に接近戦のみ、は無理があったな」
「祐さんの場合は、接近戦を主体にしても、それはあくまで、他の攻撃方法と絡めた連携の一環。対してソルラスカさんは、殆ど接近戦一本ですからね」

ポツリと漏れた俺の声に答えたのは、ユーフィーの横に座ってこちらを覗き込んでいるルゥとミゥ。
彼女達の言葉に「だよなぁ」と苦笑しつつ、身体を起こそうとして――ズキリと痛み、そのまま再びユーフィーの膝に倒れこんだ。
くそ……思いっきり入れてくれやがって。

「ごめん、もうちょっといいかな？」

そう訊いた俺に、はにかみながら「いいですよ」と言ってくれるユーフィー。うん、もう少し甘えてしまおう。周囲から怨嗟の声とか、それの発信源達を散らす斑鳩の声とかなんて聞こえない。聞こえないよ。

鳩尾の辺りに手を添えて、「大丈夫ですか？」と言いながら大地（アース）の癒し（プライヤー）を掛けてくれるポゥに「ありがとう」と返しつつ、その暖かさに誘われるままに目を閉じた。

次はせめて一矢報いてやる、チクショウ。

永遠神剣之章：６７．忍び寄る悪意、迫り来る絶望。

――『枯れた世界』。乾いた大地と赤茶けた空が広がる世界。
暁絶の故郷たるその世界に着いたものべーは、目的地たる『遺跡』がある地から、しばし離れた所の、小高い大地へとその巨体を静かに着陸させる。
だが、ここで一つ問題、と言うか、トラブル、と言うかが浮上した。
さて、いざ向かわんとした所で、生徒の一部からある声が上がったのだ。一人か二人でいいから、誰か残ってくれないか、と言う。
……確かに、一般生徒からそう言った声が上がるのは無理は無いと思う。
危険が有る事を承知した上で共に来た、とは言え、やはり先の『未来の世界』は相当堪えただろうし、続くこの世界もまた見た目が見た目だ。……すなわち、見渡す限りの不毛の大地、と言う。
だから、その要望に是と答えるのもまた当然の帰結と言えるだろう。
次に上がる問題は、では誰が残るか？　と言うことか。
これから起こる流れは、世刻が『浄戒』を使う事によって、永峰の中の『相克』が発動し、それに伴って理想幹神達がやって来て、永峰が連れて行かれる、と言ったものだ。
正直に言えば、理想幹神はここで倒してしまえるのがベストだ。けど俺は、これから起こるだろう出来事は、結局誰にも告げなかった。世刻の耳に入れば……自らが振るう一撃によって、幼馴染がその身に変調をきたす。親友を救うための力が、幼馴染に危機を招く。そんな板ばさみの様な状態では、下手をすれば『浄戒』の行使に影響を及ぼすと思ったから。
とは言え、当事者の一人である永峰とは、学園祭前にある程度の話はしているが。……彼女は、自分の状態を自覚しているから。

だからきっと、俺が行かなければ、突如現れる理想幹神に対処するのは難しいかもしれない。
だけど。
俺は皆と行こう。そう考えれば考えるほどに湧き上がる焦燥感。
『光をもたらすもの』はもう居ないのだから、ここは大丈夫だ。
そう思えば思うほどに、心の中を得体の知れない不安が襲う。
この感覚は知っている。
初めてミニオンと遭遇する前に感じた、嫌な予感。それよりも遥かに強く、深く、重い。
――ここで残らなければ、必ず後悔する。そんな確信にも似た予感がしてならなくて。

「……俺が残る」

それを自覚した瞬間、俺は声を発していた。
皆の視線が俺に集まる。
ふと、永峰と眼が合った。彼女はグッと、小さく拳を握ると、こくりと頷いてみせる。「自分は大丈夫だ」そう言ってくれてるのだろう。良い娘だ。頑張って世刻を落として、幸せになって欲しいものである。

「では、私も残ろう」
「うー……じゃあ、あたしも残ります！」

そんな中、俺の言葉に続く様にルゥとユーフィーの声が同時に響いて、それに数瞬遅れて同じように声を上げかけ、少し考えた後、口を閉ざすミゥ達の姿が眼に入った。
それを受け、サレスは「ふむ」と一つ唸ると、

「……では、祐にルゥ、ユーフォリア。済まないがここは任せる」

そう言ってこの場を締め、俺達三人を除く皆は、『枯れた世界』へと足を踏み出して行った。

……

……

……

皆が出て行ってから、二時間程が経った頃だろうか。

先に感じていた“嫌な予感”に後押しされる様に、周辺の様子を探っていた俺に、その報せが届いたのは。

「祐、敵だ！　済まない、捕捉された！」

そう言って来たのは、生徒会室にある遠見の姿見で辺りを見ていたルゥ。

何でも、ここから東にある洞窟の様な場所から出てきた人物を見つけたのだが、こちらが『見て』いる事に気付いたらしく、明らかに敵意を持った視線を寄越してきたらしい。

「私が不用意に周囲を見ていたせいで、要らない危険を招いてしまった。……済まない」

そう酷く落ち込んだ様子で言うルゥへ、気にするなと応え、相手の様子を探りに行く事にする。もし戦闘を回避できるのなら、その方が良いだろうから。

ならば責任を持って自分も、と言うルゥへ苦笑しつつも頷き、ユーフィーには念のため、ここに残っていてもらい、彼女とフィアの

「気を付けて」と言う声を背に、ものべーを飛び出した。
向かうは東。
内から突き上げる、変わらぬ“嫌な予感”。そしてそれに応じる様にルゥが見つけた『敵』。
思えば、俺は相当焦っていたのだろう。そう――なぜ、この時先に敵の“姿”を確認しておかなかったのか。

◇◆◇

ものべーから見えていた遺跡。そこに辿り着いた望達は、絶が語る言葉を静かに聴いていた。
語られるは、この世界の歩んだ道程。『暁絶』の半生。

「……かつて、この世界は豊富なマナに満たされた、豊かな大地だった。だがある時、『神』を名乗る者達に滅びを宣告され、世界からマナが失われた。
知ってるだろうが、マナとは“命”そのものだ。それが失われた世界においては、全ての生き物は、次代の命を育むことは無くなった。俺は……そんな世界において、最後に産まれた子どもだった。
……大事にされたよ。宝物のように、な。
静かに滅びへ向かう世界。この世界に住む人々は穏やかで、それがこの世界の運命ならばとそれを受け入れ、緩やかにその時を待ち構えていた。
だがどこの世界にも諦めの悪い奴ってのは居るもんでな。この世界においては、それが俺の両親と、仲間たちだったのさ。
俺の両親達はある時、この『支えの塔』の遺跡を発見した。
ああ、そうだ。この『支えの塔』は、魔法の世界にある『支えの塔』の複製さ。分子世界には、幾つかこういったのがあるらしいな。

そして彼等は、この塔を調べるうちに、この世界にもたらされた滅びの真実を知ったのさ。

……この時間樹は、理想幹神と呼ばれる奴等に支配され、管理されている。そう――この世界は、管理神達の気まぐれで滅ぼされる、と言うこと。

それは最早、世界の辿るべき運命でもなんでもない。奴等の一方的な都合による、只の虐殺だ。それを知ったこの世界の人々は、絶望した。……人間ってのは、堕ちる時はあっという間だな。それからは、それまでの穏やかな日常は一変し、悲惨と呼べる日々に様変わりした。略奪、殺人なんてのは当たり前。人々は、残された富を巡って争い、奪い合った。……それまで確かに合ったはずの、良心を完全に捨てたのさ。

……俺の両親は、真っ先に殺されたよ。暴かなくていい真実を暴いた、愚か者として、な。

その光景を見た、その瞬間……俺はこの神剣、『暁天』に目覚めた。そしてこの力を見た人々は、復讐を望んだ。ああ、そうだ。復讐だよ。

世界を管理する者。無慈悲な滅びを齎す人形遣い。世界の裏に隠れ、全てを操り、支配しようとする傲慢なる者共への復讐。

――『暁天』を得ると共に発現した、命を喰らって力と成す『滅びの神名』。この世界の人々は、それに命を投げ出した。

……自分達の意志の代行者として、自ら俺に命を差し出し、復讐を託して死んでいったんだ。

そして俺は――人々に乞われるがままに斬り殺した。俺を可愛がってくれたおばさんも、親しくしてくれたおじさんも、誰彼構わず、な。そうさ。その全員が、復讐を望んだんだ。

そしてその力を――皆の命を使って、世界から世界へ移動した。……その内に俺は力の使い方と、過去を思い出した。産まれる前の記憶……かつて『ルツルジ』と呼ばれていた、前世の記憶を。

その頃には、俺に残された時間は少ない事は判っていた。故に、

俺に取れる手段もまた限られていた事も。

望、『魔法の世界』の支えの塔で聴いただろう？　俺の『滅びの神名』は諸刃の剣だと。ああ。世界を渡り、力を使う内に、悟ってしまったんだよ。この命の灯火が消えるのは近い……ってな。

だから俺は、お前に近づいた。前世の記憶と共に思い出した、破壊神の力を利用するために。……そうだよ、望。俺がお前に近づいたのは、お前を俺の復讐の道具にするためだったんだ」

長い長い語りの末に、彼は静かに問いかける。己を“親友”を、呼んでくれた者に。

こいつは、俺の話を聴いて尚、まだそう呼んでくれるのだろうか？　……まだ、俺を助けると言ってくれるのだろうか。そんな一抹の不安を抱きながら。

「……お前を利用とした俺を恨むか、望？」

果たして、世刻望はただ静かに頭（かぶり）を振った。恨むはずがない、と。強く強く、親友を見据えて彼は言う。

「……例えそこに、打算や計算があったとしても、あの日々を過ごした俺達の間には、確かな繋がりがあるって俺は思っている。俺達が築き上げた物が、夢や幻なんかじゃないって、俺は信じてる。

なあ、絶。青道先輩の言う通りだったよ。この世界を見て、お前の話を聴いて、俺は今まで以上にお前を助けたいって思ってる。……ううん、必ず助ける。絶対にだ！」

「……望……」

強く言い切った望むは、静かに目を閉じると、己が内へとその意識を埋没させる。呼びかける相手は、己の中に。

（……ジルオル……）

呼びかけながら、彼は『未来の世界』で戦いを終えた日の夜を思い出していた。

その日、『浄戒』を手に入れた影響だろう。夢の中で望むは、己の前世たる者に逢った。

暗闇の中、自分に対して静かに近づいてくる“自分”。言い知れない恐怖が彼を襲う中、思わず叫び声をあげかけたところで、不意に思い出した言葉があった。

――世刻。『支えの塔』での俺の言葉、覚えているか？

それを切欠にする様に、思い出される、“彼”の言葉。

――『前世』を否定するな。拒絶するな。

――暁を救う為には、その“前世の力”を振るう必要がある事を認め、前世は前世として認めろ。

――自分を強く持て。お前は『世刻望』なんだって。前世は前世、お前はお前なんだしな。

まるで、自分がこうなる事を見越していたかのような言葉だな。

そんな風に苦笑しながらも、彼は、いつの間にか自分が落ち着いている事に気が付いた。

だから、目の前の“自分”を確りと見て、問いかける。お前は、『ジルオル』か？　と。

その問に、目の前の“自分”もまた自分を見つめてきながら、こう言った。

「……そうか、我を我として、認める、か」

（ジルオル……力を貸してくれ。俺は、絶を……親友を、助けたい！）

その強い想いに答える様に、ドクン心臓が跳ねる。

そして不意に頭に浮かぶ“記憶”。

自分に剣を突きつける絶に似た男。

――この世界に残った神は、もう俺とファイム、それにお前とナルカナだけだな……。

――我も汝も、互いに因果な宿命を背負ったものだな。少し汝に同情する。

――決着の時だ、ジルオル。……次の時代で巡り会うことがあれば……友となるのも良いかも知れぬな。

それに対して、『俺』が答える。

――ああ。我も汝と、もっと長く話したいと思ったところだ。

ああそうか、これは、神代の、ジルオルの記憶か。そう自覚した時、望の脳裏に声が響いた。

『……汝が望みは、かつての我の望みでもある……ルツルジの背に浮かぶ影を見るがいい』

その声に導かれる様に眼を開けた世刻には、絶の背に黒い影が蠢いて居るのが見えた。

『汝は汝の友を斬る必要は無い。汝の敵はあの影のみ。……他の何

者をも意識せず、ただ汝の敵だけを見据えて剣を振るえ。さすれば、
“我等の”望みは必ず叶う』

（……ありがとう、ジルオル）

望は、そんな感謝の言葉が自然と出てきた事に、少し驚いた。
前世の存在を恐れていたはずなのに、と苦笑が漏れる。
黎明を抜き、構える。

「望君？！」

突如剣を抜いて構えた望に、後ろから沙月の驚いた声が聞こえた。
だが望は、ひたと絶を見つめる視線を外す事は無く。

「……絶。俺を信じてくれるか？」

それに対する絶の答えは、ただ一言だけだった。

「……当然だ」

その答えに笑みを浮かべながら、望は再びその眼を閉じる。
絶の背後にある影。その存在を感覚で感じながら、神剣へと力を
篭め――。

「『浄戒』よ、俺達の想いに応えろーー！！」

振りぬかれる『黎明』。
その刃は、絶の身体を通り抜け――。

「マスターー！！」

ナナシの焦る声が響く中、どさりと、絶の身体が崩れ落ちた。

◇◆◇

「あら……貴方達の方から来てくれたのね？　ありがとう」

その場所へ辿り着いた俺とルゥを迎えたのは、そんな声だった。
それを発した人物の姿。それを認めた俺は、愕然とその場に立ち竦む。
紋様の様なものを描かれた裸体を、白いローブに包んだ。赤い髪の女性。
その存在に気付いた瞬間に、カタリと自分の身体が震えるのを自覚する。
――『最後の聖母』。永遠神剣第二位『赦し』の担い手、『赦しのイャガ』。なぜ、こいつがここに居る？

「……祐？」

俺の様子に気付いたルゥが声を掛けてくるが、俺は視線をイャガから外せずに居た。
そんな俺達に対し、イャガはくすくすと哂う。

「貴方達には感謝してるの。だって、貴方達の戦いに……マナの奔流に刺激されたお陰で、私はこうして私を取り戻す事ができたのだから」

その言葉に、やっとこのイャガが何者か、理解できた。

こいつは、『未来の世界』に居た欠片か。
あの滅びに瀕した『未来の世界』に囚われる程に弱体化していた欠片。そう考えると、俺とルゥだけでも抗しようがあるか？　……いや、楽観視はだめだ。現にこいつはこうして、『未来の世界』からここまで俺達を追って来たのだから。
……事実、こうやって向かい合っているだけでも、そのプレッシャーに押し潰されそうになる。身体が、震える。
そんな俺の考えを他所に、イャガは「だから……」と言葉を続けた。
ゾワリと、背筋に走る悪寒。
ヤバイ。
何かが解らないけれど、絶対にヤバイ。
気が付けば、隣のルゥもまた、小刻みに震えているのが感じられる。

「貴方達も、私と一つになりましょう？」

その瞬間、『観望』で強化された俺の視界でようやく視える、マナで構成された大きな顎（あぎと）。

「私が、全部赦してあげる」

それの向かう先は、俺の、隣――。

「う……わぁぁあああああ！！！！！」

衝動のままに、左腕でルゥを突き飛ばし――突然の俺の行動に、突き飛ばされ、倒れながら、呆然と、こちらをみる、ルゥが居て。
音も無く、ナニカが吹き出るわけでもなく、ただストンと。
俺の左腕の、肘から先が消滅した。

永遠神剣之章：６８．うたかたの、少女。

絶はどうやら気を失っているだけのようで、命に別状は無いらしい。ホッとするのも束の間、崩れ落ちた絶を前に、望はその場にガクリと膝を着いた。

脈打つ鼓動、襲い来る衝動。それは正しく、『浄戒』を……破壊神の力を使用した影響に他ならない。

だが望は、自身を襲うこの衝動がまだ“マシ”な方だと、本能的に感じていた。そう、この衝動の原因たる己が前世、『ジルオル』。彼は今、何かに迷っている。そんな風に感じてならない。だからまだ、この身を襲う衝動はマシなのだと。

そう思いながら、望はその衝動に飲み込まれない様に己を強く持つ。

「ノゾム……ノゾム、大丈夫か？」

心配し、声を掛けてくるレーメに頷いて、頭を撫でてやりながら立ち上がる望。その彼の視線は、自分の近くに居る希美へと向けられた。

どこかぼうっとした様子の希美。そんな彼女が、ポツリと何かを呟いた。

「……ジル……オル」

その声はかすかに望に届き、彼は訝しげな表情を浮かべる。

何故希美がジルオルの名を呼ぶのか？　どこか様子がおかしいのはどう言う事だ？　まさか、『浄戒』に彼女の何かが反応した？

そんな疑問を浮かべながら、希美の様子を見ようと一歩、彼女に近づいたその時だ。

「駄目！」

強い否定の言葉。

それに進み出した望の……否、望のみならず、同じように希美の様子がおかしいと感じていた者達全ての足が止まった。

「……希美？」

「あ……ごめ、ん」

少しばつの悪そうに言う希美。その時、気を失っていた絶がうめき声を上げた。

「う……くっ、俺、は……」

「絶！」

「マスター！」

希美の事は気になるけれども、まずは絶の確認かと、彼の元へ集まる皆。折角ここまで来たのだ、失敗したではやりきれない。

望は絶に手を差し出し、起き上がらせる。

そんな絶の様子を見ていたナナシは、「あっ」と驚きの声を上げた。

「どうした、ナナシ？」

「マスター、神名が……『滅びの神名』が欠損して……滅び、の、因子が……消失、して、ます」

何かを堪えているかの様な、途切れ途切れな声。

彼女はそのまま、ぽすっと絶の胸に飛び込むと、声も無く、その肩を震わせた。

『暁絶』と言う存在は、彼女にとっては正しく全てだ。彼女は彼のためだけに存在し、彼のためだけに生きるモノ。彼の苦悩を、絶望を、憎悪を……そして、優しさを常に見続けていた存在。『暁天』に目覚めなければ、『滅びの神名』に苦しめられる事も無かっただろう。そんな悔恨の情に苛まれる事もあった。

「ナナシ……有難う」

絶の言葉に、彼の胸に顔を押し付けながらフルフルと横に振るナナシ。

そんな様子を周囲の皆は微笑ましげに見守っていた。

「絶……」

「望、お前はまだ世刻望……か？」

絶の言葉の意味は、望には何となく理解が出来た。だから彼は、絶を安心させるように強く頷く。

それを見て、絶は小さく、そう、それこそ側に居たナナシがようやく気付くぐらいに小さく、息を吐いた。

「そうか……お前にも礼を言うよ。……有難う。……これで、俺にも先が出来た。後は……必ず、皆に託された想いを叶えるのみだ」

絶がそう言った時だった。

絶の言葉に答えようとした望が、一人ぽつんと離れて立っている希美に気付いた。

そして次の瞬間――。

「っ！」

「何だ！？」

周囲を明らかに異常な空気が包み込み、周囲の空間が、景色が、まるでレンズ越しに見ているかの様に歪む。
皆がその現象に戸惑いを浮かべる中、何かに気付いたサレスがふと上空へと顔を向け――。

「っ！　全員離れろ！」

その声に反応し、その場から飛び退る皆。
その直後、今まで皆が集まっていた場所へと光線が突き刺さり、濛々たる砂塵を上げる。

「何なんだよ、一体！」

ソルラスカが悪態をつき、砂塵が晴れたそこには――今まで居なかったはずの、二人の人物。
赤黒い力場を纏う丸い珠……否、目玉の様なものを持った、黒い法衣の上に、白い肩当の付いた外套を着た老人と、黒と緑を基調とした服に、角の様な飾りの付いた兜を被った壮年の男性。
老人はぐるりと望達を見回すと、

「ふむ……ジルオルとルツルジが共闘しておる等は少々予定とは違うが……誤差の範囲であろう」
「そうだな。とは言え、目的のモノを手に入れるのには何の支障もない」

望、絶と視線を向ける。
老人の、甲高く、耳障りとも言える声と、壮年の男の、低く、粘つく様な声が酷く耳に残り、望達は知らず顔を顰めた。
そんな中、その二人を見て明らかに表情を強張らせているのは、

絶とサレス、そしてナーヤ。

「……理想幹の支配者……管理神、エトル、エデガ……」

「誰なんだよあいつ等……絶の知ってる奴なのか？」

呟く様に言う絶の声に、望が疑問の声を上げ、それに答える前に口を開いたのは、エトルと呼ばれた老人だった。

「ほっ……ルツルジにサルバル、ヒメオラか」

「ルツルジよ……貴様には感謝するぞ。よくぞジルオルに『浄戒』を使わせた」

「何を……っ」

壮年の男――エデガの言葉に声を上げる絶だったが、エトル達はそれに答えることなく、視線を動かし――ピタリと、一人離れて立っていた希美へと向けた。

「さて……ファイム＝ナルスよ。目覚めの時間だ」

エデガに声を掛けられ、「いや……」と呟きながら、押される様に一歩後ずさる希美。

「お前等、何を言ってる！　希美が何だって言うんだ！」

「聞こえなかったか？　我等が手勢であるファイム＝ナルスに目覚めよと言ったのだ。……さあ、ファイムよ！」

「いやぁ！！」

激昂する望に答え、更に希美へと強く呼びかけたエデガの声に、希美はナニカを堪えるかの様に身体をかき抱き、絶叫する。そう、その姿は、まるで内から溢れ出て来そうなモノを抑えるかの様に。

その姿は、望には覚えが有った。“前世”と言うものに、自分自身が喰われて行くかのような感覚に怯える、その姿。
だから望は、せめて希美の側にいてやろうと、彼女へ駆け出そうとした。
だが、その前に絶が立ち塞がる。

「望！　永峰に近づくんじゃない！」
「何でだよ、絶！　どいてくれ！」
「駄目だ。永峰にお前を殺させるわけには行かない！」

理解が出来なかった。
希美が、俺を、殺す？
絶に言われた言葉が、ぐるぐると望の頭の中を巡る。
その時、望むの脳裏にザラリと映像が流し込まれる。
静謐なる神域。
希美にそっくりなダレカ。
感情を移さないその表情は、ただじっと己を見つめ。
そして——希美が持つ、神剣と、同じ、『清浄』の、一撃が——
自分自身を貫く、その、光景。
それは、記憶。
絶の言葉によって思い出され、強い感情のうねりによって、望にフィードバックされた、ジルオルの記憶。

「……そん、な……」

呆然と。
その余りにも余りなその光景に、呆然と立ちすくむ望の様子に、絶は悟った。

「解ったか、望。永峰の……いや、ファイムの狙いは、お前だ。だ

から……」
「それでも！」

だから、近づくな。そう続けようとした絶の言葉を遮り、望は叫ぶ。己の内を。否定する。認めてはいけないものを。
歩を進める。苦しむ希美へと。

「それでも、俺が希美の側に行けない理由にはならないよ、絶」
「殺されるぞ、望！」
「希美は希美だ、ファイムじゃない！」

前世と自分。その関係性にずっと苦しんでいた。だけど。
前世は前世。お前はお前だ――。
そう言ってくれた人が居る。その言葉で、全てではなくとも、確かに救われた自分が居る。
そんな自分だから、「永峰希美がファイムだから、自分の命が危ない」などと言う事を認めるわけには行かないのだ、と。
だから望は、希美の元へと行く。一歩一歩を踏みしめる様に。だけど、決して躊躇わない様に。
そんな望の言葉に、想いに、絶も、他の誰も、何も言う事など出来るはずもなく。

「望……ちゃん」
「……希美、ごめんな」

望は希美の前に辿り着き、二人は静かに見つめあう。
二人の視界は、互いに濡れて、揺れて、小さく歪む。
もう、望には解っていた。先程感じた予感。エデガの言葉。前世の記憶――。そう、自身が『浄戒』を使ったから、希美が今苦しんでいる、と言う事に。

そんな望に、希美は小さく頭(かぶり)を振った。

「ううん、望ちゃんは悪くないよ。だから気にしないで。……それに、解っていたの。こうなるってことは」

解っていた。そんな希美の言葉に困惑の表情を浮かべる望に、希美は小さく笑みを浮かべる。

「先輩にね、言われてたの。『世刻が『浄戒』を手に入れて、それを振るったとき、お前の中の『相克』が眼を覚ます』って」

「……先輩に……？　それに、『相克』？」

困惑気味の望に「うん」と頷いて返す。苦しげに、顔を歪めながら。

「先輩を恨まないで上げてね？　私と先輩とで話し合って、私以外に誰にも話さないって決めたの。だってそんな事知ったら、望ちゃん、絶対肝心な所でポカやらかすに決まってるんだから。

それに、ね。私も、望ちゃんと同じで、青道先輩と話して、気持ちが少し、楽になった、から」

「……そっか」

「うん。……んっ……くっ……お願い、まだ、出てこないで……ファイム……力を貸して……」

呟く様に紡がれる言葉は、望の耳にすら届く事は無く。それでもなお、希美は言葉を続けていく。

「私の身体を蝕むのは、前世の『ファイム』じゃなくて、『相克』の神名なんだって。

『相克』は、『浄戒』に対する唯一のカウンター。『浄戒』の保

持者を滅するためだけにあるって。……だから、望ちゃん。暁君の言う事は別に間違ってないの」

「だけど、俺は！」

「うん、解ってる。望ちゃんの事だもん。私には全部解ってるよ。でも、ごめんね？　私の意識は『相克』に呑み込まれる。呑み込まれて、深く深く沈んじゃう。浮かび上がれないぐらいに。……だから、私はここで終わり、なの」

離れたくなんてない。ずっと、側に居ると思っていた。ずっと、側に居たいって、思っていた。でも。

伝えたい言葉が、溢れる想いが、浮かんで、消える。泡の様に。

頬を伝う雫は、止め処なく。

身体が、心が、震えて、止まらない。それでも希美は、望の姿を見つめていた。決して逸らす事無く。絶対に、忘れないように。

そして望は、そんな希美の姿が、自身の意識が別のモノに乗っ取られる。そんな恐怖に苛まれながらも、望に不安を与えない様に、気丈に振舞おうとする希美の姿が、とても眩しく。……気が付けば、望はしっかりと、希美を抱き締めていた。強く強く。自分の身体に彼女の全てを焼き付ける様に。

「……希美……絶対に……絶対に助けるから」

涙に濡れた、小さな声。それでも、しっかりと聴こえる声。

そんな望の言葉が嬉しくて。だから。

「うん、待ってる」

震えを押し殺して、囁く様に答えながら、それでも彼女は微笑んだ。

そして少しだけ、抱き締められた身体を離して、もう一度、望の

顔を見つめる。

「消える事は無い……って、思いたいけど、やっぱり、怖いね。だから、お願い、望ちゃん。最後に……」

――ゆうきを、ください。

静かに、そっと、重なる唇。

それを合図にする様に――希美はその意識を失って、望に預けた身体は、崩れ落ちた。

「……ぁ……ぁぁあああああ！！！！！」

慟哭が、響く。

永遠神剣之章：６９．奪われた、絆。

「思ったよりも持ったのぅ……エデガよ」
「そうだな。我等の予測した時間以上に持ちこたえおった。……この素体は拾い物やもしれぬ」

意識を失った希美の身体を抱きかかえる望の耳に、そんな言葉が飛び込んできた。
顔を上げ、その声の方を睨みつける様に見る望に、先の台詞を発した二人――管理神、エトルとエデガ――は、ふんっと嘲笑を浮かべた。

「さて、ファイムを連れて行くとするか。……退け、小僧」

そんな言葉と共に、エトルから放たれる衝撃波。望は左手に希美を抱きかかえたまま、咄嗟に『黎明』を構え、オーラフォトンの障壁をもってその衝撃波を受け止める。
その様子に、衝撃波を放った老人はその目を見開いた。

「ほぅ……こやつ、想定以上にジルオルの力を使いこなしておる」
「だが、所詮は誤差の範囲よ」
「当然よな。さて、小僧。我等の邪魔をするでない！」

エトルがそう言い放つと、彼の持つ目玉の浮かび上がった水晶の様な魔道具――否、永遠神剣第四位『栄耀』が浮かび上がり、赤く輝いた直後に『栄耀』から一本の黒い腕が生える。
『栄耀』は瞬時に望むの側へと移動すると、その豪腕を振り抜き、望を殴り飛ばすと同時に希美の身体を掴み上げ、エトル達の元へと運んで行く。

「ぐぅっ！　っく、希美ぃ！」

吹き飛ばされながらも何とか体勢を整え、砂塵を巻き上げながら着地した直後にエトル達へ向かい、大地を蹴る望。

肉薄すると共に、二刀である『黎明』を重ね合わせる様に一本へと纏め上げる。

まるで、元より一本の剣であったかのような、大剣の姿へと変わった『黎明』を、渾身の力を持って振りぬく、が、それはエデガの持つ錫杖型永遠神剣第四位『伝承』によって張られた障壁に遮られた。

「くっ……うぉおおおおおおお！！！」

「ぬうううううっ！！」

だが、受け止められても尚、望が持つ『黎明』の刃は、じわりじわりとエデガの張る障壁に食い込み、切り裂かんと進み行く。

そしてその隙を突き、エデガとエトルの背後から忍び寄る影。

「背中が……がら空きだ！」

望の突進に合わせて動いた絶の一太刀。振るわれる白刃は、大気を切り裂きながら正確にエデガの首筋を狙う。

そしてその二人に続いて、カティマとソルラスカ、ゼゥ、そしてルプトナの、速さに長けた者達が管理神達へ迫り、絶に僅かに遅れつつ、ほぼ同時にその手にした神剣を振るう。

だが。

「何っ！？」

絶妙であったはずのタイミング。決して躱す事など叶わぬであろうそれは、まるでその一連の攻撃が来るタイミングが解っていたかの様に、エトルとエデガが振り向きすらせずに張った障壁に止められていた。

「ふんっ、貴様等がそのような行動に出る事は解っていた事」
「まったく、予測どおりの行動過ぎて、逆に怖くなってくるわ。……さあ、散るがよい！」

エトルとエデガを中心に吹き荒れる衝撃波。
それは、彼等の間近に居た者達のみならず、カティマ達に続いて攻撃をかけようとしていた者達をもまとめて吹き飛ばし、大地に平伏せさせていた。ただ一人を除いて。

「何だと！？」

上げられた驚愕の声は、衝撃波を放ったエデガの物。
彼の視線は己の目の前、その手にした神剣を、再び二刀に分かたれた『黎明』を振りかぶっていた望へと向けられていた。
そう、望は、誰よりもエトル達の近くに居たにも関わらず、今の衝撃に耐えて見せたのだ。
それは正に予測の外。
エトル達は今の一撃で、自分たちに敵対する者達を須らく打ち倒せると予測……否、確信していたのだ。それ故に、それを耐えた望に致命的な隙を晒していた。
振りかぶられた『黎明』は、望のオーラフォトンを受け、白く輝く。

「はあああああ！！」

裂帛の気合を発し、『黎明』が振るわれる。
それは、必殺の一撃。
地に倒れ伏しながらも何とかその様子を見ていた皆にも、やったと確信できる程の、望外の攻撃であったそれは。
振り上げられた『黎明』が振り下ろされるまでの刹那の瞬間に、望とエトル達の間に、空間からにじみ出る様に現れた少女に受け止められていた。

「……どうやら、間に合ったようですね」

そう言いつつ少女が頭(かぶり)を振ると、カランと小さく鈴の音が鳴る。

「……え？」

ダレカの、呆然とした声が響く。

「お久しぶりですね、旅団の皆さん。そして――クリストの、巫女達よ」
「おぬしは……確か一時期、エヴォリア達と共に居たものか」
「ふん、とりあえずは礼を言っておこうか」

少女の言葉に答えたのは、彼女が庇った背後の二人。
その傲慢とも言える物言いに、少女の表情は険しく歪む。

「……それには及びません。それに、私としても『法皇』のたっての頼みでなければ、手助けする心算などありませんでしたから」
「……『法皇』とやらが何者かは知らぬが、まあ良かろう。では、我等はここで退かせてもらうとしよう」

そういったエデガの言葉に「そうだな」と同調したエトルは、つ

いっと、その視線をサレスとナーヤへと向けた。

「時にサルバル、そしてヒメオラよ。再び我等と共に来る気はないか？」

そんな、誰しもが想像し得ない言葉を掛けられたサレスは、普段から感情を表さない顔を更に無表情に、そしてナーヤは、途端に不愉快そうな顔をして、エトルを睨みつけ、異口同音に即答した。

「断る」
「お断りじゃ」

だが、そう答えることも解っていたのだろう。エトルはそんな二人に特に執着するでもなく、

「ならば、我等の悲願が達成されるを、指を咥えて見ておるがよいわ！」

緩やかに、空間に溶ける様に消えてゆく。

「待て！　希美を返せ！」

激昂の声を上げつつも、目の前に立ち塞がる少女の為に動く事が出来ない望を他所に、エトルとエデガはこの場から完全に姿を消した。

ぎりっと、歯を食いしばる音が聞こえそうな程に、悔しさに顔を歪める望は、己の邪魔をした少女を睨みつける。

「よくも……っ」
「……悪く思うな、とは言いません。私としても不本意なところで

はあるのです。……ですから、ここで貴方達と争うのは避けさせていただきましょう」

少女はそう言うと、すっと、その場から空へと浮かび上がる。
ふぁさりと、彼女の背に広がるは、鳳凰の翼。

「ま、待ちなさい、スールードッ！！」

先程のエデガ達の一撃の影響が抜けきっていないのだろう、それでも、ふら付きながらも立ち上がり、空に浮かぶ少女を睨みつけるは、クリストの巫女達。
そんな彼女達を一瞥し――その口元に、小さな、そう、本当に小さな笑みを浮かべながら、少女は飛び去る。

「さあ、再び私に、人間の美しさを見せてください――」

誰にも聞こえぬ、小さな言葉を残して。

「……希美……くそっ……うわあああああ！！！」

世刻望の、激情の声を背に受けながら。

永遠神剣之章：６９．奪われた、絆。（後書き）

６／１５修正
法王→法皇　何というミス……

永遠神剣之章：７０．赦すモノ、最後の聖母。

肘から先が無くなった左腕を押さえる俺と、そんな俺に寄り添うルゥ。そんな俺達の前に立つ、エターナルである『赦しのイャガ』の“欠片”は、俺達の様子を見ながら頤（おとがい）に手を当て、「んー……」と、何事かを考えるそぶりを見せる。

そして俺達に向き直り、その口を大きく開け――。

迫り来るぼんやりとしたナニカ。

右腕だけで何とかルゥを抱きかかえ、地面を転がる様にそれから逃れる。

そんな俺の様子に、イャガはくすくすと哂い、

「……貴方、見えているのね？」

それに答えるでもなく睨みつける俺に、面白い、と言わんばかりに笑みを浮かべるイャガ。

そんな彼女の動向を注視しつつ、俺は腕の中のルゥへと声を掛けた。

「……ルゥ。俺がアイツの相手をするから、君はユーフィーを呼んで来てくれ」

「なっ……！」

俺の言葉に、言葉を詰まらせながらも驚愕の声を上げるルゥ。

彼女の言いたい事は解っている。「無茶だ」と、そう言いたいのだろう。

けれど。

無茶でも何でも、やるしかないのだ。さもなくば、誰も生き残る事は出来ない。そう思わせるだけのプレッシャーを、目の前のイャ

ガから感じるのだから。
それはルゥも解っているのだろう。そして、目の前の敵に抗し得るのは、ユーフィーぐらいだと言う事も。

「……彼女なら勝てるか？」
「……正直解らん。けど、一番可能性が高いのはユーフィーだよ」

それでもそう訊いて来るのは、目の前の存在が圧倒的に過ぎるからなのだろう。
正直俺も、不安が過ぎる。
そして、疑問すらも。本当にコレは“欠片”なのか？　と。そう思わざるを得ない程に、恐ろしい。

「頼む、ルゥ」
「……わかった」
「ありがとう。……『最後の聖母』と、そう伝えれば解ってくれるはずだから」

そう伝えてルゥを腕の中から離し後ろに庇う様に立つ。
そんな俺達の様子を見ていたイャガは、小首を傾げて静かに口を開いた。

「相談は終わったかしら？　……それじゃ、いただくわね」

その言葉を合図に、背後のルゥが駆けだす気配。そしてイャガから放たれ、迫り来る強烈なマナの気配。
避けるわけには行かない。避ければコレはきっとルゥに追いつき、彼女を喰らう。
だから――。
全力で、マナを練りこめ！

決して何者も通さないと想いを篭め、堅固な障壁を生み出せ！
バリっと、練りこまれたオーラフォトンが紫電を発し、視認できる程の精霊光の結界を生み出し――イャガの一撃を受け、砕け散ると共に俺の身体を吹き飛ばす。
一撃でこれかよ。……けど、防ぎきった。背後の気配を探っても、既にルゥの気配はない。

「……あら、やるわね。ますます貴方を赦（たべ）したくなってきちゃったわ。さあ――私の胎内（ナカ）へ、いらっしゃい？」

……
……
……

戦いは、悪化の一途を辿る。
相手の攻撃はその全てが一撃必殺の威力を秘め、その堅固な障壁は、こちらの攻撃の殆どを防ぎきる。
全力でマナを篭めた一撃ならば、恐らくは通じただろう。
全霊を篭めた一撃ならば、仕留めることも可能だったかもしれない。
けど。
受けた初撃が悪すぎた。
大きすぎるダメージによってマナは激減し、上手く練りこむことも出来ない。
腕を失った事によってバランスが崩れ、イャガの攻撃を躱（かわ）す事すら難しくなってきた。
ナナシとレーメは、姿を隠しながらアーツで支援してくれているけど、それももう何時まで持つか、怪しい状況になっている。

……ここまで、か？
そんな考えが、思わず頭をもたげ――……っ諦めるな！
そうだ、ここで俺が倒れれば、次に狙われるのはものべーだ。……諦めるわけには、いかない。
『観望』を片刃の剣へ形成し、マナを張り巡らせる。
空気を切り裂く音を立てて振るわれた、短刀型の永遠神剣……『赦し』を屈んで躱し、思い切って距離を詰め、懐に飛び込みつつ剣を振るう。

「――神剣『フラガラッハ』！」

単分子単位にまで圧された鋭利な刃は、しかしてイャガの障壁を浅く切り裂くに終わった。
くそっ……剣の形成もマナの練りこみも甘いか！

「悩まなくていいの……。私に身を任せて？　そして、消えなさい」

そこに振るわれる『赦し』。
それを飛び退り、転がる様に避け、距離を開ける。
起き上がり、再びイャガと対峙し、その一挙手一投足を見極めんとした、その時だ。

「っ！」

ズキリと、不意に襲う強い頭痛。
原因は――何となく、理解した。『観望』による視力の強化。それを最大限に行い続けていた反動。
余りの痛みに、思わず顔をしかめ――。

「悲しみも苦しみも、もう味わわなくていいの。だから――おやす

みなさい」

はっと、気付いたその瞬間には、掲げられた『赦し』はその姿を消しており、次の瞬間頭上に現れる、恐ろしいまでの殺気とマナ。

咄嗟にオーラフォトンを展開しながら、更にその場から飛び退る俺の視界に入ったのは、大地に突き立ち、マナの奔流によって粉塵と大地の崩落を巻き起こす、巨大な『赦し』の姿。

起こされた衝撃は、俺のみならずそれを放ったイャガすらも巻き込み、世界を震撼させる。

咄嗟に、姿を消しているナナシとレーメを、気配を頼りに抱きかかえる様に庇う。

「ぐっ、あああぁあああ！！」

全身に走る痛みと、激しい衝撃と共に走る激痛。

吹き飛ばされ、打ちつけられ、地面を転がり、ようやく止まった俺は、既に動く事すら叶わず。

ズキリと特に痛むのは、左の肩口と脇腹。

一瞬、俺の全身を柔らかな感覚が包んだと思ったのだけれど、俺が認識できたのはそこまでだった。

◇◆◇

砂塵に霞む大地を駆ける。

駆ける駆ける駆ける。

飛ぶように、速く、迅く。

事が終われば、足が動かなくなっても構わない。潰れても、失っても、どうなってもいい。

だから今は、風よりも、音よりも、光よりも迅く、行かなければ。
そう思いながら、ルゥはただ只管（ひたすら）にその脚を動かし続ける。
時間を掛ければ掛ける程に、祐は危険に晒されるのだから。
彼女の脳裏には、先程の光景が思い出される。
いきなり、突き飛ばされ、その直後、自分を突き飛ばした彼の腕が、文字通り消え失せた。訳が解らなく、何が行われたのかすら解らない。ただ感じるのは、「恐ろしい」と言う事だけだった。
ぎしりと、歯を食いしばる。
悔しさも、哀しさも、恨みも、辛さも。負の感情は胸の内を渦巻いている。
だけど――今はその何もかもを飲み込んで、押し隠して、ただ、駆ける。
そして。
走り続けたその先に、目的地たるものベーの姿が見え、恐らく、神剣の気配を察して来たのだろう、ものベーから人影――ユーフォリアだろう――が駆けてくるのが眼に入った。
互いに駆け寄り、ルゥにもユーフォリアにも、その互いの姿がはっきりと視認できるに至って、ルゥは声を張り上げる。

「ユーフィー！　一緒に来て、祐を！　祐を助けて！」

必至の叫びに、ユーフォリアは迷う事無く頷くと、その速度を更に上げる。
そしてそれを見て、ルゥはその場で急制動を掛けて反転。ユーフォリアを先導するように、来た道を引き返し出した。

……
……
……

祐の元へとひた走る中、ルゥの口から『最後の聖母』の名を聴いたユーフォリアは、その表情を険しくする。

以前父である『聖賢者ユート』から、第二位の神剣の中でも上位に位置する、要注意人物だと聞いた事がある相手。祐に前に聴いた話から察するに、恐らくは無数に別れた“欠片”ではあろうけれど、決して油断は出来ない。

そう思い、更に気を引き締めたユーフォリアの目に、その光景が映った。

倒れ伏す祐。

その側で、短刀を握った右手を振り上げる女。

まずい。

そう思った瞬間、ユーフォリアの意志を受け、彼女の神剣が長大な板状に変化し、

「ルゥちゃん！　捕まって！」

『悠久』に飛び乗ったユーフォリアに、咄嗟の事にも関わらず、瞬時に反応してルゥが捕まった次の瞬間、猛烈な勢いで加速する、ユーフォリアとルゥを乗せた『悠久』。

見る見る内に女――イャガ――に接近し、そのまま止まる事無く、問答無用でぶち当たった。

ズガン！　と言う派手な音と共に、『悠久』とイャガが張った障壁がぶつかりあい、弾き飛ばし、互いにその彼我の距離を大きく開けさせる。

その結果にホッと息を吐いたルゥとユーフォリアは、次いで祐の安否を確かめようと彼の姿を見て――互いに、息を呑んだ。

ルゥが最後に見て、そしてユーフォリアに説明したところでは、祐は左腕を肘から失った、と言う事だった。

だが、今はどうだ。
その左腕は肘から先どころか、肩口から既に無く、左の脇腹の辺りも――大分塞がってはいたが――大きな傷を負っていた。
今生きている事が不思議な程の満身創痍。
とその時、もぞりと、うつぶせに倒れ伏す祐の懐の辺りから、ナナシとレーメが這い出してきた。

「二人とも、無事か？　祐は！？」

勢い込んで訊いてくるルゥへ、ナナシは「落ち着いてください」と声を掛け、

「正直好ましく無い状況ではありますが、マスターは何とか生きています。とは言え、応急処置で精一杯でしたので、出来るだけ早くものべーに帰したいところでは有りますが」

そう言うナナシの声もまた、大きく震えていた。
恐怖と不安。
敵に、ではない。祐を失うかもしれなかった。否、未だその危険は高いという事に対する。

「フィアが、出入りするからと言って、『箱舟』を部屋に置いてきてるのが……悔やまれるな。……すまない、二人とも。ユウを助ける為に、力を貸してくれ」

零れそうな涙をを堪えながら言う、レーメの懇願に、勿論だと頷いて返す二人。
そしてユーフォリアは、『悠久』をイャガに向かって構え、その身にマナを巡らせる。
濃密で、それでいて純粋で、力強く、優しいマナが周囲を満たし

ていく。

「『最後の聖母イャガ』！　貴女には、もう好き勝手させません！」

「……強い力……貴女は？」

「永遠神剣第三位『悠久』が担い手、『悠久のユーフォリア』！

さあ、今度はあたしが相手です！！」

永遠神剣之章：71．託された、力。

『渡りし者。青道祐。我が担い手よ――』

気が付けば――と言う表現は可笑しい気もするが――俺は、右も左も解らない、真っ黒な空間の中に在った。

ここは……知っている。初めて、『観望』と接触した、俺の意識の奥深く。

「『観望』か？」

語りかけてきていた声へそう問いかけると、『然り』と言う声が返って来た。

今は戦闘中なのは確実だろう。と言うか、イャガにでかい一撃を喰らったのを最後に記憶が途切れているから……俺は気を失ったのか？

一体どうなっているのか。そんな思考を読んだのだろう、『観望』の声が響く。

『汝が命は、いずれ尽きる』

そっか。思ったのはそれだけだった。

別に死にたいわけじゃないし、死んでも構わないと思っているわけじゃないけれど。だけど、思わず納得してしまう一言。

最後に喰らった一撃。あれはそれだけの威力を持っていたのだろう。……さすがは、“欠片”とは言え、第二位のエターナルか。

『傷そのものは、汝が従者によって癒された。なれど――』

「……あまりにも、マナを消費しすぎた、か」

『観望』の言葉を継ぐ様に呟いた俺の声に、『観望』は沈黙を持って答えた。

人であれば、恐らくは鎮痛な面持ちで頷いているだろう。そんな雰囲気があったが。

『我もまた……先の一撃により、核（コア）たる部分に大きな損傷を負った。恐らくは――こうして汝に語りかけているのが最期となろう』

続けられた言葉に愕然とした。

……それと同時に、悟った。こいつは何も言わないけれど、さっきのイャガの一撃。あれで俺がまだ生きているのは、『観望』が守ってくれたからなのだろうと。

けれど、続く言葉に俺は更なる衝撃を受ける。

『――故に、我の力を汝に託す』

――こいつは。

『我が意志は尽きようとも――我が力は汝となり、我は汝と共に在ろう』

――最後の力を振り絞って、俺を生かそうとしてくれるのか。

『我が力と我が母を頼む』

それに答える言葉は……一つしか、ないよな。

「任せろ」

そんな俺の言葉に――状況は未だ絶望的であろうに――酷く安堵した空気が流れて。

そうか、こいつは、俺を信頼してくれているのか。

『汝と共に在れた事を――我は、誇りに思う。さらばだ――我が――主よ――』

その言葉を最後に、俺は、己の内に強い力が流れ込むのを感じて――。

◇◆◇

ユーフォリアとイャガの攻防は、一進一退の様相を呈す。

第二位の中でも上位に位置すると言うイャガであるが、今ユーフォリアに相対しているのは、無数に分かれた“欠片”の一つ。その中でも、滅び行く『未来の世界』に取り込まれるほどに細分化したものであった。

本来であれば、負けるはずの無い相手。やもすれば、苦戦すらするはずの無い相手であったのだが。

この“欠片”もまた、己のその状態は察しており、故に、かの世界において出逢うもの悉くを喰らい、己の力とした。

そして、ここ、『枯れた世界』でもまた。

彼女がルゥに発見された時に出てきた洞窟。

その中には、緑の龍『守護者プロリムタ』が居たのだ。『未来の世界』に居た紛い物ではない、永遠神剣第二位『探求』が担い手、『知識の呑竜ルシィマ』が送り込んだ、本物の守護者が。

そう――イャガはそれをも喰らい、己が力と成したのだ。

それ故に、このイャガの“欠片”は、ユーフォリアと拮抗する力

を得、今の戦況に陥っている。
そんな均衡が崩れたのは、ユーフォリアとイャガが幾度目かのぶつかり合いの後、鍔迫り合いなった時だった。
イャガは不意に力を抜き、ユーフォリアの攻撃をいなす様に動くと、ユーフォリアの体勢が崩れた隙を逃さずにその位置を入れ替える。
次いで至近距離からユーフォリアに対しマナを炸裂させて吹き飛ばすと、ユーフォリアと位置を入れ替えたために自分の背後にいた、ルゥ達へと踊りかかったのだ。
そう。ユーフォリアと力が拮抗していると悟ったイャガ。彼女はその狙いをルゥ達へと定めていた。
如何に下位神剣とは言え、その担い手ごと神剣を喰らえば、イャガの力は大きく増す。
そうすれば、自分と相対しているエターナルを倒すことも出来よう。そう判断した上の行動。
その突然の行動に、咄嗟に動けた者は居なかった。
吹き飛ばされたユーフォリアも。襲われたルゥも。
ルゥは咄嗟に『夢氷』でマナの障壁を張るが、イャガの神剣『赦し』は容易くそれを侵食する。
ビキッと『夢氷』が嫌な音を発し、障壁が大きく軋み、歪む。
再度振るわれる一撃。
やられる――。
ルゥがそう覚悟し、せめて祐だけでもと、彼に覆いかぶさろうとした、その時だった。
今まで気を失っていた祐が飛び起きると、ルゥを背後に庇いつつ、イャガに向かって手を伸ばす。
「ゆ、祐！？」
「祐兄さん！？」

庇われたルゥも、ルゥ達へと慌てて向かってきていたユーフォリアも、驚いた声を発する。
それも無理はあるまい。今の今まで、そう、誰の目から見ても祐は起き上がれる様な状態ではなかったのだから。
だと言うのに、祐はルゥの危機に目覚め、そしてイャガへと立ち向かったのだから。
そして彼は、振るわれたイャガの『赦し』を、受け止める。
鈍色に輝く、左腕で。

「――――!!」

声にならない叫び。
イャガ越しに彼の顔を見ることが出来たユーフォリアには解った。
その瞳が、混濁している事を。
そう、彼は、無意識の中で、動いたのだ。
そして恐らくあの腕は――。

「神……剣……の、腕？」

呆然と、ルゥが呟く。
そうだろう。誰が想像できようか。失った左腕を、神剣で創り上げるなどと。
バチリッと、腕に篭められたオーラフォトンが弾け、それ以上『赦し』の侵攻を食い止める。
第五位の神剣が“欠片”とは言え、第二位の神剣と拮抗する。
はっきり言えば、異常な光景であった。
それを可能とした理由は、偏に彼と『観望』の今の関係性だろう。
つまりは、『観望』はその核たる部分を失い、自我と呼べるものは消滅し、祐の中へと、その力を溶け込ませる様に同化している事。
つまり祐は、現在『永遠神剣』と言う人知を超える存在の力を、

ほぼ百パーセント引き出しているのだ。
これは、本来であれば人の身では不可能……とは言えなくとも、限りなく危険な事。
なぜならばその様な事をすれば、神剣に自分の全てを喰われてしまう事になりかねないのだから。
これを祐が可能としているのは――神剣の自意識の有無と言うよりも、『観望』の最後の想い。『主の力と為る』と言う物が大きいのかもしれない。
そしてその“力”は、その想いに――神剣と、その担い手の想いに応え、彼等の仲間を守る“力”となった。
その存在を喰らわんとする『赦し』と、防がんとする『観望』。
そこにユーフォリアが追いつき、イャガの背後から横薙ぎに『悠久』を振るい、それと同時にルゥも『悠久』の一撃と重ねる様に『夢氷』をイャガへと叩きこみ、その身を大きく吹き飛ばす。
――護りきった。
そう判断したのだろうか、祐の身体がぐらりと揺れ、その場に崩れ落ちた。

「っ！　祐！」

咄嗟に抱きかかえるルゥ。
彼女は祐を抱えながら、その耳元で小さく「ありがとう」と囁く。
と、それでようやく安堵したのだろうか、ざらりと、砂が崩れるように、彼の左腕となっていた神剣が崩れて無くなった。
ルゥは祐をその場に静かに寝かせると、神剣を構え、ユーフォリアと並ぶ様にイャガと相対す。
――覚悟は決めた。
コイツは、ここで倒さねば。何としてでも。

「私が何としてでも隙を作る。だから――」

後は頼んだ、と。ユーフォリアへ声を掛けたルゥは、その返事を聞かずにイャガへと駆ける。
小さく己の神剣に、「済まない」と呟いて。
そして、吹き飛ばされて体勢の崩れていたイャガに肉薄したルゥは、渾身の力を持って『夢氷』を振るう。
全身全霊を篭めた一撃。
それは咄嗟に張られたイャガのマナ障壁に大きな負荷を掛け、それを押し留めんとするイャガの意識を、完全にルゥへと向けさせる。
再び、バキリ、と言う嫌な音。
それと共に――彼女の持つ『夢氷』が、割れて、砕けた。
ルゥには、こうなる事が解っていた。
先のイャガの一撃を受けた、その時から。
それでも尚。イャガを倒し、祐を助けるためならばと。
そのルゥの想いに、後を託されたユーフォリアは、全力を持って応える。

「いくよ、ゆーくん!!　『ドゥームジャッジメント』!!!」

完全に、イャガの不意を突いた一撃。
だがイャガは、ルゥの攻撃を受け止める為に張っていた障壁を、そのままユーフォリアへと向けて、彼女の一撃に抵抗する。
ぶつかり合うマナとマナ。
その衝撃は爆発の如く吹き荒れ、身構えていたにも関わらず、ルゥはそれに吹き飛ばされてしまう。
そしてユーフォリアは――。

「ルゥちゃん!?」

彼女の優しい性格が災いした。

自分達のぶつかり合いに巻き込まれたルゥに、一瞬。そう、ほんの一瞬なれど、気を取られてしまったのだ。
だが、イャガにとってその一瞬で充分であった。
障壁に注ぎ込まれるマナ。
より強固に。その障壁はユーフォリアの攻撃を受け止め、耐える。

「くっんん……やぁぁぁぁあああああ！！」

対するユーフォリアもこの一撃にマナを注ぎ込み、イャガの障壁を突破せんとす。
障壁に負荷がかかり、亀裂が走り、砕けると共に更なる衝撃と共にマナが弾け――。

永遠神剣之章：72．想いの力、心の強さ。

鼓膜を震わせる轟音。
ぶつかり合うマナとマナ。弾け、爆発する様に炸裂したマナの奔流は、多大な衝撃となってユーフォリアとイャガの中心で巻き起こった。
そんな中で、ユーフォリアは見た。イャガの張ったマナの障壁が、今の自分の一撃に耐え切れず、打ち砕かれるのを。
――けれど、そこまで。
渾身のドゥームジャッジメントは、イャガの障壁を砕くに終わった。終わってしまった。
激突した勢いに比例する様に、反発し、互いに弾かれて空いた距離。障壁を張り直す前に追撃するには、遠すぎる距離にユーフォリアは歯噛みする。
倒れ伏す二人が視界に入った。
左腕を失いながらも、自分が来るまでイャガをここに留めていてくれた祐。
半身ともいえる神剣を砕いてまで、イャガへ渾身の一撃を加える隙を与えてくれたルゥ。
そんな二人に託された想いを、無為にしてしまう。……そんなのは、嫌だ。
強く想う。

あきらめない……あきらめたくなんて、ない！

その強い想いは、今の彼女にとっては奇跡に等しい現象を引き起こした。
パンッと、何かが弾け、消える。そんな感覚。
大事なものではない。むしろ、自分を押さえ込んでいた、邪魔な

何か。

……それは、枷。すなわち、『神名』。

そう、この世界に降り立った時に植えつけられた『神名』を、ユーフォリアはその強い意志の力で、例え僅かであったとしても、打ち破ったのだ。

抑えられていた力の一端の解放。それは僅かとは言え、それまで抑えられていた反動とばかりに、ユーフォリアの身体の奥底から再び戦う力を湧き上がらせる。

これなら……いや、まだ足りない。

――知ってるかい？　強い想いは、時に世界だって越えるんだ。

ふと、未来の世界で聴いた、祐の言葉を思い出した。

だから想う。強く、強く。

世界の軛（くびき）をも打ち破るのが想いの力であるのならば、己の限界程度、超えて見せようと。

――力を！　もっと、お願い、守りたい人を守れるだけの、力を！！！

そしてその時、その想いに呼応するかの様に、砕けた『夢氷』のかけらが、強く光を放ち、『悠久』へと溶ける様に吸い込まれる。

＜これ……は……＞

「ゆーくん！？」

突然の事に驚愕の声を漏らした『悠久』に、心配げな声を上げたユーフォリアだったが、続く『悠久』の言葉に、『悠久』がそんな声を上げた理由を知った。

＜心配ないよ、ユーフィー。突然だったからびっくりしただけ。今のは……パーマネントウィル、だよ＞

「モノに篭められた想いの結晶。朽ちる事無き魂（パーマネントウィル）……そっか。『夢氷』も力を貸してくれるんだね」

パーマネントウィルは、神剣の化身たる神獣に食べさせる事により、新たな力をその担い手に与える事が出来るモノ。

ルゥの神剣たる、永遠神剣第八位『夢氷』から生まれたパーマネントウィル『氷精の夢』。それによって齎（もたら）される新たな力。それは、ユーフォリアの、そして主たるルゥの想いに応えた、『夢氷』の最後の贈り物。

そしてそれは、今のユーフォリアにとって、最高の贈り物だった。

「行くよ、ゆーくん！　……悠久の時の彼方より来たれ、大いなる意志よ！　永久なる想いよ！　あたし達に力を！！　『エターナル』！！！」

強い光が、彼女の全身を包んだ。

それは彼女の中から、戦う力を湧き上がらせる。ユーフォリアと言う存在の全てを、強く強く、引き上げる。

……けれど、悟る。あと一押し。そう、たった一押しが足りない、と。

その時だった。

ふわり、と、彼女の全身をマナが包んだ。

それは優しくて、暖かくて、そして力強くて。染み込む様に己の身の内に入ってくるそのマナには、覚えがあった。

この時間樹に来てから、幾度となく受け取ったマナ。ずっと、隣に感じていたもの。

――ユーフィー、がんばれ。

そんな声が、聴こえた気がして。……トクン、と一つ、鼓動（こころ）が跳ねた。

不快ではない。緊張でも、不安でもない。とてもとても、心地の良い鼓動に、こんな時だと言うのに、ユーフォリアは自然と笑みを浮かべていた。

大丈夫、今なら、やれる！

＜いける、ユーフィー？＞

そんな『悠久』の問に、当然、と、力強く頷いて返す。

「原初より終焉まで！　悠久の時の全てを貫きます！」

湧き上がる力は、マナをエネルギーへと変え、ユーフォリアを、『悠久』を、強く導く。

永劫を刹那に変え、時間を踏破し、次元の彼方まで。

その瞬間、イャガが先にも増して強い障壁を張るのが感じられた。

けど、大丈夫。

そんな確信が、ある。

だって、その為の想（ちから）いはもらったから。

「『ドゥームジャッジメント』！！」

――だから、この一撃（おもい）は――

「全速前進、突っ切れぇーーーーーーーーーーー！！！」

――世界をも撃ち抜く！！！

祐を、ルゥを、ナナシを、レーメを、そしてものべーに居る皆を。
この時間樹に来てから出逢った大切な人たち。皆を護りたいと言うユーフォリアの強い想いによって放たれた『ドゥームジャッジメント』は、先の一撃の折に相殺するだけでも精一杯だったイャガの障壁、それよりも強く張られたそれすらも軽々と打ち破る。
その一撃は先のものよりも遥かに強く、重く。
イャガの“欠片”は、光の中へと呑まれ――マナの霧となって消滅した。

……
……
……

『悠久』から降り立ったユーフォリアは、倒れて伏しているルゥを祐の元へと何とか連れて行き、自身もまたその場に倒れるように座り込む。
彼女もまた、限界だった。
その後、気が付いたルゥと共に、気を失ったままの祐を抱え、ものべーへと歩を進める。
どれほど歩いただろうか。
恐らくは、ものべーまで後半分と言った所か。
その時眼を覚ました祐が、「グッ……」と苦しそうにうめくと、心配するルゥとユーフォリアを突き飛ばす様に離れる。

「祐？」
「祐兄さん？」

その突然の行動に、疑問の声を上げる二人。

「駄目です！」
「近づくな！」

心配し、祐へと駆け寄ろうとした二人を止めたのは、彼の状態を尤も身近に感じる事のできる、ナナシとレーメだった。
二人が言うには、祐は意志を失った『観望』の力をその身に取り込んだ。残るのは、「マナを求める」と言う神剣の本能。だが、それは人の身で抑えるには、余りにも強すぎる衝動であったようで。

「くっ……アアアあああぁあ！！！」

右腕で、己の身体を掻き抱く様にうずくまる祐。
今の弱っている二人では、祐に近づくのは危険極まる。下手に刺激を与えれば、神剣の本能に祐の意志は飲み込まれ、近くに居る二人から、貪る様にマナを奪い取るであろう。
だからと言って、見捨てるなんて出来ない。そう、例え――彼に何をされたとしても。マナを求める本能に苛まれていると言うのであれば、マナを与えれば正気に戻ってくれるはずなのだから。
そう言って、覚悟を決めたルゥとユーフォリアが、祐へと駆け寄ろうとした、その時。
彼女達の元へと駆け込んでくる人物が、二人。
その内の一人を見て、ナナシとレーメは歓喜と安堵の表情を浮かべた。

「フィア！」
「ユウが！」
「解ってます！」

ナナシとレーメに短く返事をすると、苦しむ祐へと躊躇う事無く

駆け寄り、抱き締めるフィア。
彼女の身体が淡く光、それが祐へと吸い込まれる様に移動した瞬間、祐の表情は若干平静を取り戻していった。

「フィアさん!?」
「フィア、何を?」
「『マナリンク』の真似事、と言えば良いでしょうか。私のマナを、ご主人様へと譲渡したんです」

『マナリンクの真似事』を続けながら説明するフィア。そんな彼女へ「はぁ〜」と感嘆の声を上げるユーフォリアは、次いでフィアと共に来たもう一人の人物へと顔を向ける。
そして、ユーフォリアにつられてその人物へと顔を向けたルゥは——ピシリと、その動きを止めた。

「……どうやら、間に合ったようですね……」

ほっとした。
そんな表情を浮かべて言うその人物には、見覚えがありすぎたから。
その人物は、ルゥとユーフォリアの方へと向き直ると、言った。

「……今は事を構えるつもりは無いので、身構えないでくださいね?」

カランと。その髪につけた、大きな鈴の髪飾りを鳴らしながら。

「……スールード……」
「違いますよ、ルゥさん。この姿の時は『鈴鳴』と呼んでください、ね」

にこりと、華の様な笑みを浮かべながら。

永遠神剣之章：72．想いの力、心の強さ。（後書き）

※ユーフォリアがスキル『エターナル』を使えるようになるのは、当作のオリジナル設定です。

尚、サポートスキル『エターナル』は、『聖なるかな』の前作である『永遠のアセリア』において、主人公にしてユーフォリアの父親である、高嶺悠人がエターナル『聖賢者ユート』になった後に覚えるスキルです。

永遠神剣之章：７３．鈴鳴、その意図。

気が付けば――柔らかな何かに包まれていて、甘い匂いが鼻をついた。
その瞬間、ズクリと疼くナニカ。
身体の内から沸き起こるソレは、暴力的な衝動を、俺の意識に浮かび上がらせる。そう。
脳裏に過ぎる思いは重く。

ただ。

ただ、ひたすらに。

俺を今包んでいるモノから。

側に在るモノから。

この手に触れる柔らかなモノから。

そう。

全て。

そこに在るモノから。

全テ。

奪エ。

犯セ。

喰ラエ。

貪レ。

何モカモヲ。

モトメヨ。

マナヲ。

マナヲ。

マナヲ。

マナヲ。マナヲ。マナヲ。

……。

……。

……。

暖かな、何かが、俺の、身体を、満たす。

浮上する意識。

取り戻した自我を手放さないように、朦朧とする意識を繋ぎとめる。

ゆっくりと瞳を開けると、眼に飛び込んで来たのはひび割れた大地だった。……身体の感覚からすると、どうやら俺は、蹲(うずくま)っているらしい。

ぎしりと軋む身体を、ゆっくりと起こす。と、次に眼に入ったのは、見慣れたメイド服。

「……フィ……ア？」

発した声が掠れているのに、若干の不快感を感じつつ、どうしてここにと問いかけ様と、周囲を見渡してみて。

フィアの両肩にナナシとレーメ。俺の直ぐ横に、ユーフィーとルゥ。そしてその後ろに――鈴の髪飾りを付けた、少女。……え？

「すー……ず、なり？」

スールード、と言おうとしたところで、彼女の服装が、いつかザルツヴァイの街中で会った時のものである事に気付いて、言い換える。と、鈴鳴はにこりと笑って、「はい」と頷いた。

「この姿では一度しか逢って居ないんですが……覚えていてくれて

嬉しいですね」
「あー……ああ」

そう続ける彼女へ、何と答えていいものかわからず、曖昧な返事を返す。いやまあ俺としては忘れろと言う方が難しいのだけれども。
どうなってんの？　と他の皆を見てみれば、ルゥは憮然と、ユーフィーとナナシ、レーメは困惑気味に首を横に振る。
そして残ったフィアが、意外な答えを口にした。

「えっと、彼女がご主人様が危ないと教えてくれまして」

どういうことだと鈴鳴を見ると、彼女は「実はですね」と前置きし――。

ズクリと、再び、胸が疼く。

「ぐっ……く、は……」

マナを寄越せと、自分の中の“力”が叫ぶ。
マナが欲しいと、心が、身体が、軋みを上げる。
身体をかき抱き、その衝動を何とか抑えたところで、「あぁっと、そうでした！」と、鈴鳴の声。

「さてルゥさん。『夢氷』の欠片は残っていますか？」
「……何？　有るが、それがどうした？」

突然話しかけられ、困惑気味ではあるが、しっかりと答えるルゥ。
そんな彼女へ、鈴鳴は手を差し出して、

「それ、貸してください」

それに対して、ルゥは訝しげな表情を返す。と、説明不足であったことに気付いたか、「えーっとですね……」と言葉を続ける鈴鳴。

……それにしても、本当に『スールード』とは全然違う雰囲気なのが恐ろしい。まるで別人だ。

「祐さんの状態が、神剣の力が暴走し掛けている状態である、と言うのはいいですか？」

それに「ああ」と返すルゥへ、うんうんと頷く鈴鳴。その度に、彼女の髪飾りがカランと、涼しげな音を立てる。

と言うか、彼女が俺の状態を把握しているのは……イャガとの戦いを見ていたのは確実だろうが、それから推測したのか。

「そこで、ルゥさんの持つ『夢氷』の欠片を、新たな“核”として祐さんの中へ埋め込み、神剣の力を安定させようと言うわけです」

「……そんな事が可能なのか？」

「はい。神剣とは、本来砕ければマナへと還り、消滅するものです。が、稀にその欠片が残る事があるんです。パーマネントウィル、として。パーマネントウィルは、言うなれば想いの結晶。そういった代物である以上、意志を失った神剣の力の新たな核とするにはうってつけ、と言うわけです」

「少々強引な方法ですけどね」と苦笑しながら言い終えた鈴鳴は、再びルゥへと手を差し出す。

「そう言うわけでして、『夢氷』の欠片を貸していただけますか？」

「……一つだけ、聴かせてもらいたい」

「はい？」

「何故、貴様がそこまで祐に肩入れする？」

そのルゥの問いは、恐らく皆が思っている事だろう。無論、俺もまた。

俺と鈴鳴……スールードは、『精霊の世界』で邂逅し、世界の存続を掛けて戦い合い、『魔法の世界』では『光をもたらすもの』と手を結んで攻めてきた彼女と、『魔法の世界』と、それに連なる分枝世界を掛けて戦った。そして俺達は彼女の分体を滅ぼすに至り、更に言うなら、俺の側にはスールードが滅ぼした『煌玉の世界』の生き残りであるクリストの皆が居る。言うなれば……俺達は戦い、敵対するのが当然と言える間柄なのだから。

「……そうですね……」

頤（おとがい）に手を当て、小首を傾げながらしばし唸った彼女は、その答えを待つ俺達の顔を順に眺め、最後に、座り込んでいる俺の顔で視線を止めると、くすりと――『スールード』が浮かべる様な、艶やかな微笑みを浮かべた。

「強いて言うならば……“礼”でしょうか？」

一体何に対する礼だと、そんな考えが顔に出ていたか、俺の顔を見てくすくすと笑いながら、彼女は続ける。

「私は、常々思っていました。決して叶わぬ絶望的な状況、無理だと思っていても尚足掻く。それが人間（ひと）が尤も輝く瞬間だと。そして貴方は、貴方達が『精霊の世界』と呼ぶ世界においても、『魔法の世界』と呼ぶ世界においても、そして、この世界においても……それを証明するかのように、強く、眩しく輝く様を見せてくれた……」

そう言って言葉を切ると、すっと、座り込んでいる俺の前に膝を突き、視線を合わせて来る鈴鳴……いや、スールード。

そして右手を伸ばし、そっと、壊れ物を扱うように、優しく、俺の頬を撫でる。

その間俺は、あの時、ザルツヴァイで出逢った時の様に、動く事も、視線を逸らす事も出来なく。

「他者の介入が有ったとはいえ、生き残る事すら困難と思える状況においてなお、決して諦める事無く足掻き続け、そして生き残る。……本当に、貴方は素晴らしく、愛おしい。今の私にとっての一番の楽しみは、貴方と言う存在の行く末を見届ける事と言っても過言ではありません。だから……その貴方を、この様な所で失うわけには行かないのです」

片手は両手に。贈られる視線は、甘くも強く、優しくも激しく、そして艶やかで。

「だから私は、貴方を助けましょう。だから私に、もっと、貴方を魅せて下さい、青道祐。貴方の全てを――」

近づく彼我の距離。思わずゴクリと、己の喉が鳴った音が聞こえた、その瞬間――。

「……うぅ～……」

割って入ったユーフィーに、遮られた。

助かった。あのままいったらどうなっていたのだろうかと思わなくも無いが、うん。

「その、聴いた話だと祐兄さんの余裕も余りなさそうなので、早めにお願いします！」

視線が外れた事によってか、動くようになった身体を動かして立ち上がり、背を向けているため表情が見えないけれど、きっと憮然とした顔をしているだろうユーフィーの頭に手をやり、「ありがとう」と想い篭めて、ぽんぽんと軽く撫でる。

一方で、ユーフィーに促された鈴鳴は、改めてルゥへと向き直ると、

「それで、納得してもらえましたか？　私は私で、彼を助けたいと思った次第でして」

そう言って、三度手を差し出した。

それに対してルゥは、一瞬瞠目した後、

「……お前の事は信用ならない……けど、祐のためなら、仕方ない……か」

小さく溜息を吐くと、差し出された鈴鳴の手に、掌大の欠片を乗せる。

その視線は、「下手な真似はするなよ」と物語っていて。……まあ彼女の立場としては、こうして正面から普通に接しているだけでも、凄いことなんだと思うが。

『夢氷』の欠片を受け取った鈴鳴は、ユーフィーに場所を空けてもらって再度俺の前に立ち、『夢氷』の欠片を持った手を俺の胸の高さに掲げる。

「……神剣『夢氷』の凍結片よ。想いに、願いに、求めに応え、織り成す力の礎となれ……」

囁く様に唱えられた言葉。

それに応える様に、『夢氷』の欠片は淡く光を発し、俺の胸の中

へと、溶ける様に、吸い込まれて行く。
……。
……。
幾許かの間が空いて。
ルゥの想いが篭った『夢氷』の欠片なのだから、大丈夫。
そう思いながらも、我ながらやはり不安はあるのだろうか。ドクドクと、鼓動の音が、煩い。
そんな緊張に誘発されたか、ズクリと、再び、疼きそうな――。
そのときトクンと、胸の奥でナニカが跳ねた。
暖かく、優しい、冷厳なるモノ。
それは俺の身体の、心の、魂の中で渦巻いていた、暴力的な衝動を、淡く、緩やかに、収めていく。

「――あ……」
「完全に、ではないですが、これでひとまずは安心でしょう」

ほっとした。
鈴鳴の言葉を聞いた瞬間、一気に緊張の糸が切れるを感じて。
衝動を抑えるために張っていた気が緩んだその瞬間、どっと押し寄せてくる疲労。
思わず気が抜けた、そのせいか、ぐらりと身体が傾いだ感覚が――。

「よかった――」
「……無理をしないで――」

遠くにそんな声を聴きながら、抵抗する気力もなく、ストンと、そこで意識が落ちた。

永遠神剣之章：７４．現状と、これから。

「っ！　こんな時に何処に行ってるんだよ！」

ものべーに帰還した望達。

生徒会室に集った皆の中で、望はものべー内に祐達が居ない事を知り、すぐに希美を助ける為に出立出来ない事に苛立たしげな声を上げていた。

窓から見える空は既に薄暗く、もう幾許もしないうちに夜になるだろう。

「望君、落ち着きなさい！　もしもの為に残った彼等がここに居ないって事は、“何か”が有ったってことじゃない？」

「何かってなんです？　……こっちにも理想幹神が現れたとでも？」

学生達が平常にしている以上、こっちに……少なくとももものべーに何かがあったなんて考えられない。そう続ける望は、やはり焦っているようで。

普段であれば、望とてこのような言い方などしないだろう。だが、希美が攫われた事、希美の状態を祐だけが把握していた事、そしてその祐がこの場に居ない事。それらの事柄が重なり、彼の精神を圧迫していた。

「おい望、落ち着けよ。沙月に当たったって仕方ないだろう？」

「ッ……そう、だな。……沙月先輩、すみません……」

そんな望の様子に、ソルラスカが宥める様に声を掛け、それで望も多少の落ち着きを取り戻したか、小さく息を吐く。

そんな折、入り口の扉が開け放たれた。

全員の視線が向くその先、そこに有ったのは、主要メンバーの中でこの場に居なかった者の内、ルゥとユーフォリアの二人だった。

「ん……皆、戻っていたのか」
「あ、お帰りなさい、皆さん」

二人はそれぞれに、生徒会室に居た皆へとそう声を掛ける。

「ルゥ、何処に行ってたの？　こっちは……」
「先輩は？」
「ああ、済まない。祐なら今保健室で寝ている……っと」
「望君！？」

ルゥへと声を掛けたミゥの言葉を遮る様に、その場に居ない人物の事を望が尋ねる。

周囲に漂う雰囲気に不穏なものを感じ、首をかしげながらもルゥが望の問いに答えると、望は咄嗟に駆け出し、生徒会室から飛び出して行った。

それに慌てて続く他の皆。

残ったのは、サレスとタリア、ミゥを始めとしたクリストの巫女達。そしてルゥとユーフォリア。

「……それで、何があった？」

やれやれ、と溜息を吐きながらもそう問いかけるサレスであったが、ルゥに「どうせすぐに望達は戻ってくるから」と言われ、それまで待つ事とした。

ルゥやユーフォリアにしても、そう何度も説明したい出来事でも無いから、出来るならば皆に纏めて説明したいと思ったからだ。

とは言えそれはサレス達に限った話。言葉で語る必要の無いミゥ

達クリストの皆は、この待ち時間を利用してルゥと“同調”をし、先に何が有ったかを知る事とした。

先にミゥ達の方で何が有ったかを“同調”によって知ったルゥは、「はぁ……」と重い溜息を吐く。

「成程、希美が攫われて……それで先程の望の態度、か」

先程生徒会室に入ったときに感じた、不穏な空気の理由を知ったルゥは、「あちらもこちらも、全くもって難儀な事態だな」と呟いた後、再びミゥ達と“同調”し、今度は自信が経験した事態を彼女等へと伝えて行く。

しかしてミゥ達は、彼女等にしてみれば俄かには信じられない様な出来事を知る事となる。

そう――よもや、自分達が“理想幹神”と言う強大な敵に出遭っていたその頃、それよりも余程恐ろしい敵が現れていた、などと。

そしてサレスとタリアの二人は、ミゥ達の様子を見ていた、ただそれだけで、祐達に起きた出来事の重大さの一端を知る。

なぜならば――震えていた、からだ。

ミゥも、ポゥも、ゼゥも、ワゥも。そう、傍から見ても解る程の、“負の感情”によって。彼女達が追体験するそれは、ルゥが感じた感情の一端。それは恐怖であり、絶望。憤怒であり悲哀。そして何よりも強い――“無力感”であった。

◇◆◇

パーマネントウィルである『神剣『夢氷』の凍結片』を、その身に宿した永遠神剣『観望』の力の核として埋め込まれ、一応の安定を取り戻した祐では有ったが、その身に未だマナが不足しているの

は確実であり、そのままであれば、いくら力を制御する為の核があろうとも、マナを求める衝動に苛まれる事は確実であろう。

ものべーに入る前に、「私は少々皆さんのお仲間と顔を合わせ辛い立場なので、ここで失礼しますね」と言う、ルゥ達にしてみれば謎の言葉を残して別れた鈴鳴からそう聴かされていたフィアは、保健室へ祐を運び込んだ後もずっとその右手を握って、刺激しすぎぬ様に、緩やかにマナを送り込み続けていた。

そんな折、ガラッと、勢い良く保健室の入り口である引き戸が開けられ、望が飛び込んで来る。

「先輩！　一体希美に何……！」

バタバタと騒がしく入り込んできた彼等へ、ベッドに寝かされた祐の側に付き添っていたフィアとナナシ、レーメは、不快気に眉をしかめながら、そっと片手の人差し指を立てて唇に当て、しーっと、静かにする様注意を促した。

そんな彼女達の様子に一瞬毒気を抜かれた望は、次のその視線をベッドに寝ている祐へと向け――発する言葉を失った。

ベッドに寝かされた祐には布団が掛けられていたとは言え、それはフィアがその手を握るために胸の辺りからであり、すなわち、彼の肩口から上は露出していたからだ。

そう、制服の上着は脱がされ、半袖のシャツのみとなっているためによく解る……解ってしまう、その不自然な、左肩が。

「望君、どうしたの？　急に入り口で止まらないでよ」

入ってすぐの所でその足を止めた望にそう文句を言いつつ、彼の脇をすりぬける様に部屋の中へ入った沙月と、それに続いて入ってきた他の皆もまた、望と同じ様な反応を示した。

「ちょ、ちょっと！　青道君、何でそんな！？」

思わず声を荒げる沙月に対し、フィアはもう一度静かにする様に言うと、

「少々強すぎる敵が来た、としか。詳しくはルゥさんとユーフィーちゃんが説明してくれるはずです」

祐の顔を見て、起こしては居ないようだとほっとしながら言うフィア。その様子に、この場で騒ぎ立てた所で迷惑にしかならない事ははっきりしているのだし、と、望達は渋々ながらも保健室を後にした。

校長室に戻るまでの間、ついぞ誰も口を開く事は無く。

…

……

……

「――……と言うわけで、何とか倒す事はできたんです」

先の戦いの様子をルゥとユーフォリアに説明された――ちなみにルゥがユーフォリアに助けを求めに行っている間の事は、その間祐と共に戦っていたナナシとレーメに聴いていた――望達は、皆一様に言葉を発する事が出来なかった。ソレほどまでに、彼女達の言う事は衝撃的だったからだ。

そもそものところ、『エターナル』と言う存在自体を知らない望達の中で、かの『最後の聖母』の脅威を正確に把握できているものは、ルゥと経験を共有したミゥ達のみであろう。

それでも尚、祐達の身に起きた事と、この状況において『旅団』に与えられた痛手は、望達の精神を打ち据えた。

希美を助けに行くに当たり、希美を攫っていった理想幹神が居る『理想幹』の場所は、絶のナナシが知っていた。そしてものべー自体もまた、その命令権を――恐らくはあのキスの折に――望に譲渡されており、世界間移動自体に支障は無い。

そして『理想幹』は、かつて絶が放った『意念の光』を跳ね返した強力な障壁で覆われているのだが、サレスが言うには現在は理想幹神がこの『枯れた世界』に出てくる為に解除されており、あれほどの大規模なものである以上、直ぐに張りなおす訳にも行かないらしく、今であれば乗り込むのに支障は無い。

否――言うなれば、『理想幹』に乗り込むのならば、今しかないと言う状況なのだ。

だと言うのに、望達に突きつけられたのは、祐とルゥの戦線離脱、と言う厳しいものであった。

とは言え――

「どちらにしろ、乗り込むのは今しかない以上、行かないわけにもいくまい」

そのサレスの結論が全てなのだが。

それに各々首肯していく中で、「それはそれとして、その前に確認しておきたい事がある」と、望がサレスを見やりながら口を開いた。

「サレス……希美を連れ去った二人、絶が管理神のエトルとエデガって呼んでたあいつ等、アンタとナーヤの事を知ってるみたいだったよな？」

「そういえばそうだね。何か、仲間に誘ったりしてたし」

望と、彼に続いたルプトナのその言葉に、あの時の状況を思い出したか、他の皆もまたサレスとナーヤへ視線を向けた。
だが、それに対するサレスの返答は、瞠目し、何事かを考えているのか、沈黙であった。

「……サレスッ！」
「……あいつ等に関しては、俺が説明しよう」

そんなサレスへ望が思わず声を荒げてしまった時、それを遮る様に絶が声を上げると、今度はそんな絶へと、皆の視線が集まる。

「……奴等はこの時間樹を管理する神。三人居る管理神の内の二人だ。……かつて、俺の世界へ『滅び』を宣告したのもこの二人さ」
「三人のうち二人って……じゃあ、もう一人は？」

そうルプトナに問われ、絶が視線を向ける先。それは――。

「……そう。もう一人は私だ。彼等が呼んだ『サルバル』と言う名は、管理神であった頃の私の名前だよ」

小さく溜息を吐き、仕方が無い、と言う雰囲気で言うサレス。
それに「ヒメオラ、と言うのはわらわじゃな」とナーヤが続いた所で、

「うそ……じゃあ、サレス達はあいつ等の仲間だったの？」

沙月が驚きに眼を見開き、声を上げる。
それに対してサレスは再度息を吐いた。

「かつて、はな。それも最早神代の頃の話だ。私と彼等は歩む道を

違え、ナーヤの前世たる『ヒメオラ』もまた、私よりも以前に彼等と袂を分かった。奴等は『光をもたらすもの』を操り、数多の分枝世界を滅ぼし、ミニオンの生産プラントに変えてきた。この旅団は、そんな奴等から分枝世界を守る為に創った組織だ」

サレスの説明に、生徒会室に沈黙が降りた。

「……『光をもたらすもの』の背後に、そんな黒幕が居たのですね……」

しばしの後、ぽつりとカティマの呟く声が響く。

それを聴いたソルラスカが、「そういえば」と口をついた。

「ちょ、ちょっと待てよ？　だったら『未来の世界』で祐のやつが倒した、『南天神の亡霊』ってのはどうなるんだよ？」

その疑問も尤もだろう。祐と、そしてエヴォリア自身が確かに、『亡霊共がエヴォリアの故郷の世界と妹を人質にしていた』と語ったのだから。

それに対する返答を口にしたのは、腕を組み、しばし考えた後に口を開いたナーヤ。

「亡霊共は理想幹神とは別に……恐らくは隠れて、エヴォリア達に接触していたのじゃろう」

実際のところは、エヴォリア自身に訊かねば解るまいが。そう続けつつも、ナーヤは自分の答えが恐らく正解であろうと思ってはいたが。

対するソルラスカも、ナーヤの答えに納得したのか、「なるほどな」と頷いていた。

「……サレス、あんたが今語った事は、本当なんだよな？」
「ああ。今こうして私が『旅団』を率い、奴等と戦っているのが証左だろう？」
サレスの返答に、望は「なら、いい」とだけ答える。
そう、今現在敵でないのならば、と。

「それじゃあサレス、今まで隠れて行動していた奴等が、今頃になって表に出てきた理由は解る？」
そしてヤツィータから呈された疑問には、首を横に振る。
「さすがに解らんよ」と言いつつも、恐らくは実行部隊たる『光をもたらすもの』が壊滅したこと。そして自分達が自ら動いたとしても、計画に支障がない算段がついたのだろうと言うこと、と言う予測を、絶と共に出してはいたが。

「……さて、現状の確認はこのあたりでいいだろう？」
「ああ。それじゃあ、理想幹へ向けて出発しよう。……必ず、希美を取り戻すんだ」
決意にも似た望の言葉に、強く頷く皆。
絶を助ける直前まで目の前に有った、在りし日の日常への回帰。
それを今度こそ取り戻すために。

永遠神剣之章：７４．現状と、これから。（後書き）

「それじゃあナナシ、レーメに『理想幹』の座標を教えてやってくれ」
「了解しました、マスター。……では世刻、レーメをこちらへ貸していただけますか？」
「ああ、よし、レーメ、イッテコイ」
「む？　え？　ちょ、ちょっと待てノゾム！　何か嫌な予感がするぞ！」
「大人しく諦めなさい、レーメ。さて……ん、ちゅぅ」
「やっぱりかー！　……っあぅ」

永遠神剣之章：７５．誇り、想う。

眼を覚ます。
最初に眼に入ったのは、何度かこういった状況で眼にした覚えのある、所々に木の根の様なものが飛び出した、白い天井。
……学園の保健室、か。
そこに思い至った時、右手が温かいものに包まれている事に気付いた。
顔をそちらへ向けると、俺の手を握りながら、ベッドに突っ伏してすやすやと寝息を立てているユーフィー。
その光景に頬が緩み、頭でも撫でてやろうとした所で、左腕の感覚が無い事に気付く。
視線を送り――ああ、そうかと、その理由に思い至った。
はぁ、と、つい溜息が口を吐く。
別に、後悔しているわけじゃない。むしろこの程度の被害で済んで御の字ってところだろう。それでも……。

「――ぁ」

その時、そんな声が聞こえた。
その声がした方――俺の胸の方を、首だけ起こして見る、と、驚いた表情で俺の顔を見る、ナナシとレーメの姿が。

「……マスターっ！」
「ユウ！！」
「ぅわっぷ」

がばっと、飛び込んで来る二人。右手が塞がっている為に受け止める事ができず、顔面に思い切りダイブされた。

起こしていた頭が再び枕に押し付けられたところで、今のやり取りで眼が醒めたのだろうか、今度は右手の方から声がする。

「ん……ふぇ？　……あ……祐兄さん……！」

「あぁ……ってうぉっと！」

眼を覚まし、俺が起きている事に気付いた途端、抱きついてくるユーフィー。

離された右手をそのまま彼女を受け止めるのに使い、ぎゅっと押し付けてくる頭を、ぽんぽんと撫でてやる。

「よかった……よかったです……」

肩口に濡れた感触。触れる息遣いがくすぐったくて。

そのまましばし髪を梳く様に撫で付けていると、落ち着いたのか、小さく身動ぎした後押し付けていた顔を上げるユーフィー。

肩口にあった顔をその場で上げたため、至近距離で彼女と眼が合った。

互いの息遣いすら感じられそうな距離に、内心すこしドキリとしたのは――仕方ないだろう、うん。

そのまましばらく見つめていると、照れた様にはにかみながら、えへ、と笑う。

そんな仕草が可愛く、彼女が顔を上げた為に止まっていた、撫でる手を再び動かしてやると、

「あ、あの……もうちょっと、このままでも……いいですか？」

顔を赤くしながら、上目遣いでそんな事を言ってこられました。

いや何と言うか……断れる訳が無い。

「もちろん、喜んで」

そう答えてやると、嬉しそうに微笑んで、先程の様に顔を押し付けて来るユーフィー。

さらさらとした、艶やかな髪を梳く。

抱き着かれて居るためか、仄かに感じる甘い香りと、柔らかさと、暖かさ。

心地よく感じるそれらに誘われる様に、眼を閉じる。

もう少し、このままで――。

……

……

……

再び眼を覚まし、最初に眼に飛び込んできたのは、むぅっと拗ねた表情のナナシとレーメの姿だった。

その後ろには、申し訳なさそうな顔のユーフィーと、苦笑しているフィアとクリストの皆。

「えーと……ごめんなさい」

謝って、「はぁ……仕方がないので、今回は許してあげます」とナナシに言われた所で――レーメはもうちょっとかかりそうだ。いやまあ俺が悪いんだが――、今度は、ミゥ達に押された風にルゥが横に来て、覗き込む様に見つめてきた。

と、後ろから聞こえて来た「まったく……ナナシはユウに甘すぎるぞ」と言う言葉に、ルゥと二人で思わず苦笑をし――、

「祐……本当に、無事で良かった」

そう言って、柔らかく微笑むルゥ。

本当に、心からほっとした。そんな雰囲気が伝わってくる微笑。

――何て言えばいいのだろうか。

本当に。ありがたいと、心から思う。

ルゥだけじゃない。ナナシもレーメも、ユーフィーも、フィアや、ミゥ達も。

心配してくれて、そして俺が今こうして生きている事を喜んでくれる事がありがたくて、そして同時に、申し訳なくもある。

迷惑や、心配を掛けてしまった。やりようによっては、きっともっと上手く出来たのだろうから。

だけど、謝りはしない。俺は俺の行動を、誇らねばならない。

だから、俺が言う言葉は、これなのだ。

「ああ……ありがとう。……皆のお陰で、俺は戦えた。皆のお陰で、生き残る事が出来た」

って言っても、俺は途中で気を失ってリタイアしたんだけどな。

そう苦笑しながら続けると、ルゥは静かに頭(かぶり)を振る。

「そんなことはない。気を失っていて尚、きみは私を助けてくれた。私が今こうしてここにいるのは、紛れも無くきみの……きみと、『観望』のお陰だよ、祐」

全然覚えて無いために、「そんなことが？」と上げた疑問に、ユーフィーが首肯して答えた。

「はい。それにあたしも……祐兄さんには、助けてもらいましたから」

そう言って、にこっと、太陽の様な笑みを浮かべるユーフィー。
そうか、と、思わず安堵の息が漏れた。
俺は、俺達は――皆を、中間達を護るための、一助を成せたのか、と。

……

……

……

その後、あの戦いの折、俺が気を失っている間の状況を聞いた。
……まさかルゥが、神剣を失っていただなんて。いや……あの時の鈴鳴の言葉。『夢氷』の欠片。『神剣『夢氷』の凍結片』。あれで気付くべきだった。
そんな考えが顔に出ていたか、ルゥに「『夢氷』を失ったのは別にきみのせいではない。気にしないで欲しい」と言われてしまった。
……だめだな。こんなんじゃ。それに――。
軽く頭を振り、側にあったルゥの手を取る、と、きゅっと握り返してくる感触。

「……『夢氷』が俺の中で、俺を助けてくれているのは解ってる。だから……うん、ありがとう、ルゥ、『夢氷』」

そう言うと、にこりと笑って、「どういたしまして」と、答えてくれた。
そして、今。現在はどんな状況なのか。
そう訊いた俺に答えたのはミゥ。

「えっと……今は『枯れた世界』を旅立ってから二日ほど経ってます。もう半日程で、『理想幹』に着きますよ」

その言葉には流石に驚く。俺はそんなに眠っていたのか……。

って言うか、こんなところでのんびりしている場合じゃないか。

『理想幹』に着く前に、一度皆と顔を合わせておきたい。

そう告げると、「じゃあ、そろそろブリーフィングがあるはずですから、生徒会室に行きましょうか」との言葉。

それに頷き、ベッドから起き出して、生徒会室へ向かう事となった。

ああその前に、この腕、何とかしないとなぁ……。

永遠神剣之章：７６．交わされた、約束。

『理想幹』突入の前に一度ブリーフィングがあるとのことらしく、生徒会室に向かう事となった。
すぐに向かおうかとも思ったけれど、良く考えれば俺自身起き抜けであり、一度身支度を整えるために、皆には先に行ってもらうこととした。
そして、皆に遅れる事しばし後、恐らくもう全員集まっているのだろう、多くの人の気配のする生徒会室に入る。
それと同時に、

「あ、青道君、もう大丈夫なの？」

と斑鳩に声を掛けられたので、頷いて返した。
そしてそれと共に感じる、皆の視線。
その視線の向かう先は……制服の袖から覗く、包帯の巻かれた俺の『左腕』。

「それって……」

訊いていいものか。そんな雰囲気で言いよどんだ斑鳩に苦笑しつつ、包帯の先を少し解き、“それ”を見せる。
そこに有るのは、鈍色（にびいろ）に輝く指先。そう、『観望』で形成した『左腕』だ。
それを見て一瞬驚きつつも、直ぐになるほど、と言った風に頷く皆。
と、不意にルゥが「ふむ」といいつつ寄ってきて、ぺたぺたと触り出した。

「……その、この『腕』は、触られた感触とかはあるのか？」

どうしたのかと思っているところに掛けられた声に、なるほど、それが気になったのかと納得しつつ、首を横に振る。

「流石にそれは無いよ。まぁ、仕方ない事だけどな」

苦笑しつつ言ったその言葉に、ルゥは「そうか……」と申し訳なさそうに呟く。

……まったく、気にしなくていいのに。

まぁ無理もないかと思いつつ、その『左腕』でルゥの頭をぽんぽんと撫でる。

確かに不便ではあるけれど、『観望』の意思が介在しないためか、こうして俺の思う通りに動かすことは出来るのだ。これ以上は高望みと言うものだろう。

と、ルゥはそんな俺の手を取り、少しだけ何かを考えたあと、小さく「ありがとう」と言った。

俺はそれに「どういたしまして」と答え、視線を俺の前に居る斑鳩へと向ける。

「で、今はどんなことを？」

「『理想幹』に降りた後のことについて、ね。それで、青道君に質問だけど……戦闘は？」

問われて思う。現在俺に同化している『観望』の、意志を失った為に押さえの利かなくなった神剣としての本能――マナを集め、いつか只ヒトツの神剣となること――は、俺の中に埋め込まれた『夢氷』の欠片が核となることによって抑えられている。

『夢氷』の欠片が俺の中で抑えとなってくれているのは、偏にソレが『パーマネントウィル』となる時に篭められた想いに――皆と、

そしてルゥから聞いた話しから察するに、皆を護り、力となりたいという想いに――よるもの。

とは言え、もともと『夢氷』は第八位。対して『観望』は第五位の神剣。永遠神剣というものは、位階が一つ違えばその潜在能力も大きく変わる。その上――それを鈴鳴によって、“神剣の本能を制御する”と言う方向性を与えられているとしても――俺の中にある『夢氷』のはあくまで“欠片”であるのだ。

つまり、こうして普通にしている分には問題なくとも、戦闘行動を取ることができるのかは……正直、疑問だ。

「まあ、実際に試してみればいいんじゃない？　土壇場になって「だめでしたー」じゃシャレにならないわけだし」

考え込んでいると、そんな言葉がヤツィータから出た。

それもそうかと思い、「まあそうだな」と言いながら、マナを練り込み、全身に行き渡らせる。

次の瞬間――ドクリと、全身の細胞が跳ねた、その瞬間――ストンと落ちる様に、視界は暗闇に包まれた。

――全く、無茶をする。練りこんだマナを外に出すならまだしも……。

不意に聴こえた“声”。

姿は無く……いや、そもそも自身の姿すら無い。……そうか、ここは、あの――。

それにしても、今の声は……『調和』……か？

そう思ったところで、その疑問に答えるかの如く、再び声がする。

――如何にも。それにしても、ぬしの精神をココへ呼び込むのが一歩遅ければ、“喰われて”おるところであったわ。

そっか……助けてくれたのか。

彼女の説明に、自分が随分と危ない事をしたらしいと知り、「ありがとう」と伝わる様に念じてみる。

それにしても……『調和』は俺の状態を把握してるんだな。いつの間にというか何と言うか……。

――……くっふふふふ。妾を甘く見るでないわ。……とは言え、僅かに空間の境が揺らいだ時に、ぬしの中の『観望』から読み取ったに過ぎぬのじゃがな。まぁ、それもこれも、ぬしが『理想幹』に……妾の近くに来てくれたから、とも言えるが。

そんな言葉の後に、再び「くふふ」と、愉しげな笑い声が響く。

――とは言え、こうして無理矢理ぬしの精神を呼び込むのも、少々無理をしたのでな。今回は特別と思うように。そのような訳で、早う妾を迎えに来るがよい。ぬしのためにも、な。

「俺のため」なんて台詞に、どう言う事だと疑問が頭をもたげる。が、その次の瞬間、目の前の空間がざらりと歪む――。

――なに、妾ならば『観望』の力を完璧に制御することができるというだけじゃ。……ふむ、無理矢理な邂逅なだけに、ぬしの精神をここに留めるのもこれが限界、と言うところか。

『調和』のそんな言葉を境に感じる、一瞬の酩酊。

ああ。必ず、君に逢いに行く。そう強く念じて。

――くふっふふふふっ……うむ、待っている。ぬしと直接見(まみ)える刻を、愉しみにしておるぞ、祐?

愉しそうに、嬉しそうに言う彼女の声が最後に届いた気がした。
……朦朧した思考。不鮮明な、ぼやけた視界。
数度頭を振り、どうにもぼやけている視界が定まるのと同時に眼に飛び込んで来たのは、心配そうに俺を見ているゼゥの顔。その距離は随分と近い。

「どう……なってる……？」

発した声は妙に掠れて。感じる感覚と、『調和』の言葉から察するに、全身に同化している『観望』にマナをごっそり“喰われた”のか。
神剣の本能の強さ。それを解っているつもりで解ってなかったってこと……だな。

「アナタが急に力が抜けたみたいに、倒れそうになったから支えてあげたのよ。……まったく、気がついたなら自分で立ちなさいよ……」

一見悪態をつく様に言ってくるゼゥだけど、そういいつつもしっかり支えてくれてる辺り、良い娘なんだよな。
そんな考えがつい顔に出ていたのだろう、「何笑ってるのよっ」と言ってくるゼゥ。

「いや……ありがと」

ゼゥにそう返しつつ、自力で立とうと彼女から離れ――がくりと膝から力が抜け、再びゼゥに支えられる。

「まったく……ほら、座らせるから、そこ場所空けて」

そのまま彼女に誘導されて、ストンと椅子に腰をかけ、ようやく一息ついた。

あー……きつい。けど、神剣の本能に乗っ取られて皆に襲い掛からなかっただけマシか。……『調和』には感謝だな。

「……そんな訳だから、戦闘は無理だわ」

「……みたいね」

椅子の背もたれに背中を預けて言う俺に、苦笑しつつ答える斑鳩。彼女は視線をサレスへ向けると、サレスは嘆息しながら一つ頷く。

「では、『理想幹』到着後は、ミゥとポゥをものべーの護りに、残る全員で攻めるぞ」

どうやら俺が来る前に粗方方針は決まっていたらしい。

確かにエトルとエデガがどのような行動を取ってくるか解らず、かつここに一般生徒が残っている以上、護る人員は必要だろう。ものべーを人質にする恐れも無いとは言えないのだから。

……あー……この状況で言い出すのは言い辛いなぁ。

「……えーと、サレス、一つ頼みがあるんだけど」

そういった俺に全員の視線が集まり、サレスは「言ってみろ」と促してくる。

俺自身がこんな状況じゃなければ、サレスだけに頼めば良かったんだよなぁ。とは言え現状では、皆に迷惑をかける事は必須なのだし。

そう思いながら、俺は口を開いた。

「『ログ領域』に入りたい。そこに行けば、恐らく俺の現状は何とかなると思う」

俺の言葉に、眼を見開いて驚くサレス。……彼のそんな表情は珍しいな。

と、そこに世刻から「ログ領域って何だ？」と疑問の声があがり、サレスは簡単にではあるが、説明を行っていく。

「『ログ領域』とは、その名の通り、時間樹において起こったあらゆる事象の“ログ”が記録されている領域だ。本来ログ領域は、時間樹内のどこにでもあって、どこにも無いもの。すなわち、位相のずれた空間にあるのだが……そこに直接行くとなると、この時間樹の中枢……そう、それこそ『理想幹』の中枢から行くしかあるまい」

そう説明した後、「なるほど、だからこのタイミングで、か」と呟き、こちらに眼を向けてくるサレス。

なぜログ領域に入る必要があるのか、と言ったところか。

まあ、説明しないわけには行かないだろうな。

「……そこに行けば、『観望』を生んだ神剣に逢えるんだよ。ミゥ達は覚えてるかな？　『精霊の世界』の“剣”の中で話しかけてきた存在」

俺の言葉に、彼女等はあの時聞こえて来た“声”を思い出したのだろう。ああ、と言った顔をする。

「あれが『彼女』だよ。……力の強い神剣だけど、今は自力で動けない場所にいる。で。この時間樹の中で尤も空間の不安定な『ログ領域』からなら、『彼女』をその場所から連れ出す事ができるみたいでね。俺は何度か『彼女』に呼び込まれて、精神だけで逢った事

があって、その彼女が言うには、自分が側にいれば、俺の中の『観望』の力を完全に制御できるそうだ」

説明を終え、皆の顔をみると、「なるほど」と言う顔をしつつも、やはり良くは思っていないようで。

まあ仕方無いか。何と言ってもいけるのは『理想幹の中枢』からだ。戦う力が無い俺が行くには無理がある。

とはいえ、俺としては行かないわけにもいかないんだよね。

「……ちなみに、『魔法の世界』で暁が『意念の光』を撃とうとしていることを教えてくれたのも、彼女だ」

彼女が教えてくれたから、迎撃に間に合ったんだよな。そう続けると、皆……特にナーヤは、大きく嘆息し、

「……まったく、そう言う事であれば、わらわは反対出来ぬではないか。それに、今までの口ぶりからするに、その『彼女』とやらを助けだすのは、祐にしかできんのじゃろう？」

それに頷いて返すと、「ならば是非もない」と言葉を締めるナーヤ。

そんな中で、世刻がこちらを見ているのに気付き、視線を向ける。

「……とは言え、第一優先は希美ですよ、先輩？」

憮然とした表情の彼へ、「勿論だ」と返すと、「ならいいです」と戻ってきた。

どちらにしろ、永峰が居るのも中枢、エトルとエデガの側だろう。だから俺が『ログ領域』に入るのは、永峰を助けだすついでででいいんだ。

そう続けると、世刻は「なぜ解るんだ？」と疑問をぶつけてくる。

「……そうだな、世刻、お前は永峰がどんな状態か、聞いたか？」

「確か……『相克』とやらに乗っ取られてる状態」

「じゃあ、『相克』が何かは？」

「……『浄戒』に対する唯一のカウンター、と」

俺の問に、恐らく永峰に聴いたのだろう、思いだしながら答える世刻に頷き、更に質問を重ねる。

「……じゃあ、『理想幹神』たちが最も恐れるものは？」

その問に「なるほど」と、世刻の後ろ――暁の声がした。

「奴等にとって最も恐ろしいのは、『浄戒』によって『神名』を削りとられ、転生すらできなくなって死ぬことか」

「だから、『相克』の発現した希美を側においておく、か……じゃあ、希美は今のところ無事、なんですよね？」

「恐らくな。『理想幹神』にとって『相克』は切り札。どんな形であれ、それを易々と傷つける訳はないさ。何と言っても、奴等の恐れる『浄戒』は健在なんだから」

確率は高くても、絶対ではない。……とは言え、俺自身、これに関しては間違いなく大丈夫だと思ってはいるのだが。

そう言うと、ようやく世刻はほっとした表情を浮かべた。

「そんな訳だから、俺は皆の後をこっそり付けていくよ」

「……仕方あるまい。止めても無駄、だろうな」

そう言って嘆息するサレスに「悪いな」と声を掛けたところで、

『理想幹』到着を知らせる、ものべーの鳴き声が響き渡った。
自然と引き締まる皆の表情に、自身の喉が鳴るのが解る。
……さすがに、俺も緊張してるか。
そこで、右手を握られる感触。
そちらを向けば、心配そうなユーフィーと、ミゥ達。

「あの……あたしが一緒に居られればいいんですけど……その、ごめんなさい……だから、えっと……気をつけて、ください」
「まあ、アーツなら体内の『観望』に影響を与えずに行使できるだろうから、いざとなったら全力で逃げるさ」

心配そうにしてくれる彼女達へ、なるべくそれを和らげられるように、「絶対に無理はしないよ」と約束をして。
さあ――いざ、『理想幹』へ。

永遠神剣之章：７７．襲撃、離脱。

時間樹の“幹”たる『理想幹』。ここは、エトル達が居る中心島の周囲を六つの浮島が取り囲んだ構造をしている。

浮島と言っても、浮いているのは空なのだが。

ここの他には突入時に上空から見た限り、南西に“緑の島”、北西に“赤の島”、北に“枯れた島”、北東に“青の島”、東に“黒の島”、南東に“白の島”があった。ものべーが着陸したのは、その浮島のうち、南西にある“緑の島”だ。

各島間はエーテルジャンプ装置によって結ばれている……のだが、現在は南東への道は塞がれているようだ。

とは言え、サレスの案内によれば、ここから北西の“赤の島”と“枯れた島”を経由すれば、中心島へと行けるそうなので問題はないそうだが。

その説明を聴き終え、世刻達は進軍を開始する。

俺はそれを見送った後、しばしの時間を置き、彼等の後を追う様に『理想幹』へと足を踏み出そうとした、その時だ。

「――っ！　神剣反応！　祐さん！」

ミゥの警告の声に続き、ものべーから外へ出ていた俺と、周辺の警戒と俺を見送るために出てきていたミゥとポゥ、そしてルゥを取り囲むように現れるミニオン達。

ミゥとポゥは直ぐに迎撃体勢を整え、俺はルゥの側へ。

ミゥ達と同じ様に神剣を構えようとし、そして失っていた事を思い出したか、歯噛みするルゥの姿が眼に入る。

ものべーに入るには……ミニオンが邪魔か。

ものべーではなくこちらを狙って来ているのは、不幸中の幸いだろうか。とは言え、まずい事には変わりないのだが。

何はともあれ、今俺達にできるのは、ミゥとポゥの邪魔にならないこと。

（ナナシ、レーメ、頼む）

念話を飛ばしてすぐに、俺とルゥへ掛けられる身体強化のアーツ。
そしてそれを合図とするかのように――戦闘が始まった。

……
……
……

どれほどの時間が経っただろうか。いや、きっと然程経ってはいないのだろうが。それでも数十分にも、やもすれば、数時間にすら感じられる時が経った。
その間俺とルゥは、アーツによって強化された身体能力のみで、何とか生き延びていた。
それもこれも、ミゥとポゥが俺達を守ってくれながら戦っているからなのだけれど。
けれど……このままじゃジリ貧か。
神剣の恩恵を受けられないルゥと、神剣の力を使う訳にいかない俺。今まで以上に死と隣り合わせの戦闘に、俺とルゥの気力と体力はいずれ尽きるだろう。
戦況は乱戦の様相を呈し始めており、このままいけば、今まで以上に俺とルゥの存在が、ミゥ達にとってネックになるに違いなく。
かといってものべーに戻ろうにも、包囲は厚い。
包囲の薄い、抜けれそうな場所は……前、しかないか？

（イエス、マスター。最も敵の包囲が薄く、かつ抜けられそうな箇所は、マスターから見て左前方です）
（……そっか、ありがとう。そのまま状況を見ててくれ）
（了解しました）

そう思った所で、上空から敵の様子を見てくれていたナナシから念話が入り、その内容から、やはりこれしかないかと結論付ける。
その時、手を握られる感触と同時に、俺の中の『夢氷』を通して、『解ってる、大丈夫』と言う、ルゥの想いが伝わってきた気がして。

「……ミゥ、ポゥ」

声をかけると、彼女達は敵を牽制しながらこちらへ一瞬視線を向け、やはり同じ結論に達していたか、頷いて返して来た。

「祐さん、場所は？」
「左前方」
「解りました。……ルゥをお願いします」

敵から眼を逸らさずに言葉を紡ぐミゥへ、「ああ」と頷き、「ミゥとポゥも気をつけて」と返す。
ポゥがマナを練り込んでいくのを感じると共に、緊張が高まる。
そして――。

「風よ、守りを！　『ウィンドウィスパー』！！」
「行くぞ！！」

紡がれた魔法が俺とルゥを包みこみ、この身に風の守りが掛けられると共に、ルゥと頷き合い、同時に駆け出す。
目指すは左前方、敵の包囲の薄い部分。そこを一点突破する――！

「『ラグナブラスト』！！」
「『ゲイルランサー』！！」

レーメと共に放った、指向性を持つアーツが敵陣を駆け抜け、それによって空けられた“穴”を突きぬけようと、掛ける速度を上げる為に足へ力を踏みしめた、その瞬間を見計らっていた様に、ミニオン達がそれまで薄かった場所を埋める様に動くのが見えた。

「駄目です、マスター！　罠です！！」

悲鳴にも似た、ナナシの制止の声が聴こえ、この状況はまずいと、焦燥が心を埋める。
突破するには敵が厚い。とは言え、ここで脚を止めれば、間違いなくやられる。
俺とルゥに対し、敵が神剣を構えるのが見えた、その時だった。
俺達の向かう先、その空間が割ける様に“穴”が開き、そこから現れる人物。
彼女は、その手を振り上げると共に、練りこまれたマナを解放する。

「一気に駆け抜けなさい！　『オーラレイン』！！」

そんな声が響き、打ち鳴らされた『腕輪』が、シャンッと涼やかな音を奏でると共に、俺達の向かう先にいたミニオン達へ降り注ぐ、オーラフォトンの雨。
それが止むのを待たず、さらに追い討ちを掛ける様に、顕現し、にミニオン達を蹂躙する、白銀の機械兵（ゴーレム）――！

「ギムス！　貴方の力、見せてあげなさい！　『アイスクラスター』

！！」

そして放たれる白き極光。
それは俺とルゥの前に道を作る様に、ミニオン達を薙ぎ払った。
俺達はその道を駆け抜け、敵の包囲を突破して少し行った所で脚を止めた。
そして俺達に着いて来た彼女へ、声を掛ける。

「エヴォリア、助かったよ。けど、何でここに？」

彼女は驚きを隠せない俺達へクスリと微笑むと、

「あら、『また逢いましょう』って言ったじゃない。それを果たしただけよ？　……なんてね。貴方達の“現状”を教えてくれた人が居るのよ。だからもしかして、と思って来てみただけ」

そういったあと、ほっと一息つき、「でも来て良かったわ」と続けた後、「それで、これからどうするのかしら？」と問いかけて来る。

……これから、か。正直、彼女が居てくれるのは心強い。……けど。

「エヴォリア、頼みがある」
「……大体予想はつくけど、何かしら？」
「ミゥ達の方を助けてやってくれないか？　あれだけのミニオンを二人で相手するのは辛いだろうし、何より彼女達、俺達をかばいながら戦っていたから、消耗が激しいんだ」

俺の言った言葉に、「やっぱりね」と苦笑しながら言う彼女は、

「まあ良いわ。他ならぬ貴方の頼みだもの、引き受けてあげる。……これなら、ベルバにも来てもらえばよかったわね」
「エヴォリア、恩に着る。……ありがとう」

それでも小さく笑みを浮かべて、頷いてくれた後、ものべーに向かって歩き出した。
そんな彼女の背中へ、ルゥが声を掛けると、エヴォリアは一度振り返り、「気にしなくて良いわ」と首を振った。
そして再び歩き出そうとした彼女へ、最後に気になった事を訊いておこうと思い、

「ところでその、俺達の状況を教えてくれた人物、と言うのは？」
「貴方も知ってる人物。スールードよ」
「……は？　……えーと、何でまた」
「知らないわ。本人は『ただの気まぐれです』って言ってたけれど」

思いもかけない答えが返って来た。
ミゥ達によれば、スールードは理想幹神が永峰を連れて行くのを手助けしたらしい。かと思えばこうしてこちらの助力をする。……何を考えてるんだ、一体？
聴いた話では、理想幹神の手助けをした時は、“渋々”と言った雰囲気だったらしい。“法皇”に頼まれた、と言う言葉が聴こえたとも言うし……当然と言うか、皆はその“法皇”が示す言葉が何かは解らなかった様だが、俺とユーフィーだけは、それを聴いた瞬間に思わず固まってしまったものだ。……だとしたら、理想幹神の手助けをしたのは“ロウ”側の狙いってことになる。
ならばこちらに対しての助力はどうなんだ？　……解らん。あのスールードである以上、“純粋な好意”とは思えない辺りが何とも。
……っと、今はこんな事考えている場合じゃないな。
とりあえず浮かんだ疑問は頭の隅に追いやり、エヴォリアへ顔を

向ける。

「それじゃあ、悪いけど向こうは頼むよ」

「ええ、任せておきなさい。それより貴方達も、気をつけて」

そしてそんな言葉を交わし、俺達はそれぞれの方向へ駆け出した。

……こうなったら、出来るだけ早く『ログ領域』へ向かわないと。

永遠神剣之章：７８．管理神と、戸惑いと。

その光景は、正に圧巻であった。
エターナルである彼女――ユーフォリアは、もともとこの“旅団”と言う組織内において、群を抜いた実力を有していた。
だがそれは『神名』によって押さえ込まれていたが故に、他の皆にとってもまだ着いて行ける程度のもの。だが、今はもう違う。
先の『枯れた世界』での戦いを経て、彼女はその真の力の一端を取り戻し、更に言えば、一回りも二回りも成長すらしていた。
ここ『理想幹』に配置されているミニオン達は、他の世界に居るミニオンとは一線を画している。『ハイミニオン』と称されるそれは、その基礎能力値からして他の一般のミニオンよりも高く、事実、望達は今まで以上に、明らかに苦戦していた。
だというのに。
ユーフォリアは、当たる側から一刀の元に斬り捨てていく。
戦場を縦横無尽に駆け巡り、誰も逃さずと言わんばかりに切り伏せる。
……否、事実ユーフォリアは、ハイミニオン達を一体たりとも逃す心算は無かった。さもありなん、自分達の後には、現在戦う力を殆ど持たない祐が通るのだ。ユーフォリアにとって、敵を取り逃がす訳にはいかなかった。
祐は、彼女にとって“兄”の様な存在……だった。だがそれは、『枯れた世界』を経て、僅かに。でも確かに、何かが変わった。
あの時、あの瞬間。彼のマナを感じ、想いを受け取り、力を貰って、心が跳ねた、あの瞬間。そう、確かに変わったのだ。
今はまだ、明確にではないけれど。
けれど、その“想い”に突き動かされる様に、蒼白の烈風は、更に加速する――。

一方、実力は確かに及ばないまでも、気概は決してユーフォリアに負けない者も居た。
ゼゥとワゥである。
彼女達クリストの巫女達にとって、『青道祐』と言う存在は“特別”である。
彼はかつて『剣の世界』においては、ルゥとゼゥを助けるために神剣と契約し、彼が側に――“世界”が変わる程に離れてはだめだろうが――居る限りにおいて、彼女達が結晶体の外に出て行動出来る様にもしてくれた。
『精霊の世界』においては、彼女達にとって忌々しい物の筆頭である、“大剣”を、その世界に痛打を与える事無く破壊せしめた。
そして『魔法の世界』においては、仇敵ともいえるスールードの分体を倒し、一矢を報いる中心となった。
そして、一つ前の『枯れた世界』。
そこでの起きた出来事を、祐と共に行動していたルゥとの“同調”によって知った時、彼女が抱いた感情をもダイレクトに受け取ったのだ。
彼女の代わりに敵の攻撃を受けた彼を見た時の、驚愕と悲哀を。
負傷した彼を残して助けを求めに行っている時の、焦燥と、己への憤怒を。
彼の元へ戻り、倒れ伏した彼を見た時の絶望と、それでも生きていてくれた事への歓喜を。
そして、何としてでも彼を護りたいという強い願い。
神剣の力に呑まれたとしても、必ず受け止める。そんな覚悟と想い。
それらを共有したその瞬間、クリストの巫女達の中の、『青道祐』と言う存在は――無論、それまで積み重ねてきた物があればこそ、だが――“特別”になった。
『剣の世界』で初めて共に行動してから今まで、とても深く、長

く側に居た人物。それが彼女達の心を占める割合は、他の旅団メンバーと――例え、それがより古くからの付き合いがある者としても――比べ、遥かに大きい。そう、かつて彼女達の世界である『煌玉の世界』を守る為に戦い、そして散っていった、クリストファー＝タングラム――クリフォードと比べても、遜色がない程に。

故に、ゼゥもワゥも、ユーフォリアに負けじと、前に出る。

普段であれば、口喧嘩になる事も多い二人であるが、こと此処に置いては、互いに互いをフォローし、戦場を駆け抜け、敵を切り伏せていく。

その二人が叩き出した敵の撃破率は、ユーフォリアを除けば随一であった。

赤き炎熱の巫女と黒き深遠の巫女が織り成す剣舞は、鮮烈さを極めて行く――。

ユーフォリアと、そしてゼゥとワゥ。彼女達に触発されるように、他のメンバー達の勢いもまた、苛烈さを増して行き、彼等は正に駆け抜ける様に、それでいて敵を一人として後ろに逃す事無く、『赤の島』を、そして『枯れた島』踏破した。

そして舞台は、『理想幹』の中枢へと移り、しかして彼等の進軍は、そこでその歩を止める事になる。

◇
◆
◇

皆が敵を排除してくれている、とは言え、ここは敵の本拠地。いつどこで、新たなミニオンが湧いて出てくるかなんて、解ったものではない。

故に迅速、かつ、慎重に。

歩を進める俺とルゥが皆に追いついたのは、赤の島、次いで枯れた島を無事に抜け、中心島に入り込んだ時だった。

この中心島は、中央に大きな穴が開いたドーナツ状の形をしており、その穴を、遥か下に広がる雲海よりも更に下から、『幹』の様な物が貫き、さらに天へと伸びて言っている。

その『幹』こそがここ『理想幹』の中枢であり、そこに至るには今居る位置からぐるりと回りこまねばならない。

俺達が皆に追いつくのは、それこそその中枢に至った頃かとも思っていたのだが、その実は、ここに入った直後だった。

何故か？

その理由は、皆の前に立ち塞がった一人の少女にあった。

花咲き乱れる美しき光景。エトルやエデガの本拠地でなければ、一等の庭園と言われても納得できてしまいそうな、彩られた箱庭。

そこで目にした光景は、旅団の皆の前に立ち塞がる様に向かい合う、エトルとエデガ。そしてその二人の前に、彼等を護る様に立ち、神剣を構える少女。

見慣れた姿。

黒のゴシック調のドレスに身を包み、ハルバード状の神剣を構える——永峰の姿がそこに有った。

……予想してしかるべき事だ。彼女の精神は今、『相克』の神名に支配されているのだから。

『相克』はエトル達が作り出した神名。それ故に彼等は、『相克』に支配された永峰を操り、自分達の手駒とする事が出来ている。だからこそこの状況だ。そしてそれは、こと世刻達にとっては、限りなく効果的な戦法だった。

「うおおおおお！！！」

管理神達に切りかかる世刻。だが、それを永峰が受け止め、弾き飛ばす。

『相克』によってその身体能力の枷を外され、効果的に動く事のできる今の永峰は、世刻を凌駕する動きを見せる。

「良くやった、ファイムよ」
「くっ……希美ぃ！」
「希美ちゃん！！」

世刻や斑鳩の呼び声にも眉一つ動かす事のない永峰。
エトル達はそんな世刻達の様子に、無駄な事を、と言わんばかりにその顔に嘲笑を浮かべる。
だが――。

「希美ちゃん、しっかりしてください！！」
「希美！」
「そんな奴等に負けるなぁ！」

ユーフィーと、ゼゥ、そしてワゥの声にだけは、ぴくりと、その表情を曇らせる。

「ぬぅ……やはりイレギュラーに対する精神防壁は甘いか」
「うむ。早々に回収して調整をせねばなるまいて」

時間樹外から来たユーフィーと、転生体ではないゼゥとワゥ。
そう、理想幹神達の計画に含まれていない、イレギュラーたる存在。
だから。
永峰に向かって手をかざし、彼女と共に空間を転移しようとするエトルとエデガ。
皆の後ろから、彼等の前へ飛び出し、

「先輩！？」
「祐、いつの間にここに！？」

突然後ろから来た俺に驚く皆を尻目に、俺は声を張り上げた。
俺もまた、イレギュラーなれば。

「ファイム！　永峰に力を貸してくれ！！」

きっと誰にも予想だにしていない言葉。
理想幹神たちは、『相克』による意志の支配を、絶対視している節がある。確かに『相克』の力は強いだろう。だが、彼等は失念している。今『相克』に抗っているのは、『ファイム』だけでも『永峰希美』だけでもない。その二人なのだと言う事を。
事実――俺が声を上げた、その瞬間、虚ろだった永峰の眼に、光が灯る。
恐らく、エトル達にとってより予想の付かない様な言葉の方が届くかと思ったのだが……どうやら上手く行ったようだ。
弾かれた様に前に出て、エトル達の手から逃れる永峰。必至に『相克』に抗っているのだろう、その表情は苦しそうなれど、確かに彼女の意志を持って、エトル達に相対する。

「なんだと！？」
「馬鹿な！！」

驚愕の声を上げるエトルとエデガ。その隙を逃さず、構えた『清浄』を突きこむ永峰。
それを必至に、エトルと共に障壁を張りつつ、身体を捩って避けるエデガ。永峰はそこで力尽きたか、糸の切れた人形の様に崩れ落ちる。
他の皆は、余りの急展開に咄嗟に反応できずに居た。

そんな中、先んじて飛び出したのはやはりユーフィー。
彼女は光の刃を出した『悠久』を構え、エトル達へと迫る。
それに対し、色とりどりのマナで出来た剣を打ち出し、迎撃するエデガだが、ユーフィーはそれをことごとく撃ち落とす。
そしてさらに肉薄すると、その剣を振りかざし――

「っ！」

咄嗟に飛び退る。
ユーフィーが『悠久』を振り下ろす刹那、彼女とエトル達との間に、天空から一条の光が降り注ぎ、遮ったからだ。
空を見上げると、そこには――鳳凰の翼をその背に羽ばたかせ、悠然と浮くスールードの姿があった。

◇◆◇

「……申し訳ありませんが、“まだ”彼らを討たせる訳にはいかないのです」

ぽつりと、誰にも届かぬ言葉を紡ぐスールード。
彼女は眼下を見据えながら、その手を振り上げる。

「理想幹神達よ。追い詰められた貴方達がする事は……ひとつしか、ないでしょう？」

そして振り下ろすと共に打ち出される閃光。
それは真っ直ぐに、“エトルとエデガへ向けて”降り注いだ。

「さあ、出しなさい、“切り札”を」

◇◆◇

撃ち込まれた閃光は、俺達の目の前で、予想だにしなかった軌跡を描く。

それは真っ直ぐに、俺達の前。相対する二人へと降り注いだ。そう、エトルとエデガへと。

「ぐぁぁあああああ！！」

「ぬうううううう！！！」

苦悶の声を上げるエトル達。

「おのれ、裏切ったかスールード！！」

その声から感じる驚愕と憤怒は、決して演技とは思えず。

そして俺達は——今度は俺も——余りに予想外の展開に、呆然とその光景を見つめていた。

そして、降り注いでいた光が止んだ時、そこには——既に二人の姿は無かった。

「希美は？　希美はどこだ！？」

「……空間転移で逃げたな。希美も連れ去られたか……」

ぽつりと呟かれたサレスの言葉。

はっとして再び空を見上げれば——そこにはスールードの姿も無く。

「どうなってやがんだよ、一体……」
「こっちが知りたいわよ……」
ぽつりと呟かれたソルの言葉に、答えられる者など誰も居なかった。

永遠神剣之章：７９．中枢にて、出逢うもの。

走る走る走る。中枢へと向けて。
予想外に皆と早く合流してしまったため、ここで別れるのは逆に危ない。と言うことで、俺とルゥも共に進む事になった。
とは言え、最後尾でゼゥとワゥに護られているけれど。
俺とルゥと言う護る対象が出来たためか、進軍速度は落ちている様で、申し訳ないなぁと思いつつも、やはり周囲に皆が居るというのは心強い。
恐らくルゥもそう思っているのだろう、眼が合って、互いに苦笑を交わした。

（……とは言え、油断はしないようにな）

レーメからのそんな念話に、解ってるよと返す。
当然だな。皆が共に居る、と言うことは、最前線であると言うことなのだから。
先程の永峰の状態を――恐らく、『ファイム』の意識が協力して、『永峰』と『ファイム』の二人で『相克』の意志をねじ伏せ、正気を取り戻したのだろうと説明したところ、サレスはしばし考え込んだあと、小さく「なるほど」と呟いていた。
……まぁ、後は彼に任せておけば、何とかしてくれるだろう。そのためにも、今は永峰を助け出さないと。
それにしても、今一番の疑問はやはりスールードだろうか。
一体何を考えているのか、さっぱり意図が読めない。
『枯れた世界』では管理神が永峰を連れ去る手助けをした、と思えば、神剣の本能に苛まれる俺を助けた。
そしてここでは、エヴォリアに俺達の状況を伝えて、助けに来るように仕向けたかと思えば、ユーフィーが管理神を倒すのを邪魔し、

その直後自らが攻撃を加えた。
……本当に、その目的が見えない。
恐らくは『枯れた世界』で彼女が言ったという、「『法皇』に頼まれた」という言葉。これが関係しているのだろうとは思うけれど。

「祐……あいつは何を考えていると思う？」

恐らく同じ様に、スールードの事を考えていたのだろう、ゼゥがそう訊いて来た。が、自分でも考えていたように、流石に解らん。
さっぱりだ、と伝えると、むぅと頬を膨らませながら、

「アナタが解らなかったら誰が解るのよ」

何て理不尽な事を言われた。そう言われても困る。
そんなやり取りをしているうちに、俺達の視界の先に中枢たる『幹』へ至る道が見える。
そしてそこに見えたのは、横たえられた永峰と、その前に立ち、彼女に手をかざしているエトルとエデガの姿。
エトル達は俺達の姿を認めると、手を止め、こちらへ身体を向けた。

「……くっ……もう来たか……ファイムの調整は間に合わぬな」
「うむ……致し方あるまい。かくなる上は我等自らが相手をせねばなるまいて」

そう言って、錫杖型神剣をこちらへ向けるエデガ。
彼等はやはりイレギュラーにして最も脅威度の高いだろう、ユーフィーを警戒しているのか、その視線はほぼ彼女に向けたままだ。

「希美は返してもらうっ！！」

「少しはやるようだが……それではどうにもならんぞ」

開口一番、世刻がエデガへと斬り込む。

が、真っ先に彼がそう出る事は読んでいたのだろう、エデガの手前で張られたマナ障壁に世刻の攻撃は遮られ、届かない。

「このまま……次元ごと断ち切ってみせます！　『ルインドユニバース』！！」

「ぬぅっ！！」

そこにユーフィーが、板状の飛行形態に変形した『悠久』に乗って突っ込んだ。

砕け散るマナ障壁。

その隙に永峰へ向かう世刻と、世刻に続き、一気に飛び出したソルラスカと暁だったが、彼等に向けてエデガがマナを解放する。

「理解しろなどとは言わん……邪魔をするな。ここから、去れ！」

解放されたマナは色取り取りのマナで出来た“剣”となり、光の帯を軌跡に残し、世刻達に降り注ぐ。

咄嗟に防御する世刻達だったが、彼等の足は止められ、永峰に近づく事が出来ない。

その剣群を抜けてエデガへ迫るユーフィーと、世刻達を追い越す様にそれに続くカティマ。

「てやぁ！！」

「ハァ！！」

裂帛の気合と共に繰り出されるユーフィーとカティマの攻撃。しかし、エデガは大きく、やもすれば大げさにとも取れる程の動きで

後ろに跳び、避ける。
それによって世刻達への攻撃は止められたが、その間にエトルは永峰の側へ、張り付く様に立ち塞がっていた。
……見ているだけしか出来ない事が、すごく歯がゆい。
これではうかつに攻める事が出来ない、と、睨みあいによって出来た一瞬の間。
その次の瞬間、エトルとエデガ、そして永峰の身体は淡い光に包まれた。

「さて……我々はここで失礼させてもらうとしよう」
「追いたければ追ってくるがよい。……出来るものならな」
「何っ……!?　この期に及んで……どこに逃げる気だ！」

エトル達の言葉に激昂する暁が咄嗟に切りかかるが、その一太刀は、やはりまるで事前に用意されていたとすら思えるタイミングで現れた強固な障壁に防がれる。
こちらの攻撃に対して迎撃するのがエデガだけだと思ったら……エトルは逃げる準備をしてやがったのか！
確か、やつらがここで逃げ込む場所は……。

「まずい、『ログ領域』に逃げる気だ！」
「ほぅ！？　良く解ったな？　まあ、解ったところで貴様等はここで終わりなのだが」
「その通り、最早容赦はせぬ。イレギュラーは須らく排除してくれるわ！　では、さらばだ」
「っ！　待ちなさい！」

エトル達を包み込んだ光は輝きを増し、そのまま背後にある『幹』へと吸い込まれていく。
俺の叫びに反応して、そこに今度はユーフィーが斬りかかるも、

その刃は虚空を薙ぐに終わってしまった。
そして、連中が『幹』の中へと消えると同時に、俺達を取り囲むように現れる、大量のハイミニオン達。
そんな中、斑鳩はサレスへと詰め寄り、言った。

「サレスっ！　私を『ログ領域』へ入れて！　貴方ならできるんでしょ！？」

斑鳩のその言葉に、はっとしてサレスの顔を見る皆。
そんな皆の視線を受けながら、サレスは小さく溜息を吐いた。

「……『ログ領域』は言うなれば“情報”が寄り集まった場所。そこに入るには、ここにある装置で肉体はや精神をデータ化せねばならない。だが、『ログ領域』に集められたデータは膨大だ。……あそこでは常に強く己を意識していなければ、簡単に情報の海の圧力に飲まれ、消滅するぞ」
「なっ……ちょ、ちょっと待ってくれ！　じゃあ希美は？　希美もあの中に居るんだぞ！？」

サレスの言葉に世刻が慌てた声を上げるも、それに返されるのは沈痛な無言。そこから、永峰も危ない状況だというのを悟ったのだろう、世刻もまたサレスに詰め寄る。

「サレス！　俺も先輩と一緒に中に入る。それなら良いだろう！？」
「望君！？　危険なのよ！？」
「そんな事は解ってる！　けど、俺は希美に約束したんだ、絶対に助けるって！！」

世刻のその魂からの叫びは、深く重く、心に響く。
サレスは――「わかった」と、ただ一言呟いた。

「時間が無い、手早く行くぞ」

そう言いつつ、『幹』の側の端末と思わしきものを操作するサレス。

すると、斑鳩と世刻の身体が、先のエトル達と同じように、淡い光に包まれ、『幹』の前に空間の裂け目――ゲート――が現れる。

「望、沙月、希美を頼むよ！」

「必ず助け出しなさい！」

皆からの声を受け、それに世刻達が頷くのが見えると同時、彼等の身体はゲートへと吸い込まれていった。

……って、見送ってる場合じゃねえや。

「サレス」

声を掛けると、解っているとばかりに頷いて返すサレス。

これで駄目だとか言われたら洒落にならん。俺がここまで来たのはこのためなんだから。

それに、入った付近で待っていれば、世刻達が戻った時に彼等の脱出の手伝いが出来る。そうすれば……斑鳩が『ログ領域』に置き去りになる事も防げるだろう。

そんな事を考えながら、サレスによる転送を待っていると、不意にパチリと、まるで火花の弾けるような音が耳に届いた。

それと同時に耳朶を叩く、ワゥの声。

「ユウ！」

どんっと、突き飛ばされる感覚と、その直後に、それまで俺が立

っていた所の地面から炎が吹き上がり、爆発を起こす。
今のは……イグニッションか！
慌てて周囲を見回せば、先程まではまだ遠くから包囲していたミニオン達が、いつの間にか随分と近くまでその包囲を狭めていて。
……どうやら、今は俺がターゲットにされて……って、

「ワゥ！？　無事か！？」
「うん、ボクは平気。ユウは大丈夫？」

爆発のあった地点に声を掛けると、魔法防御の高い障壁で防いだのだろう、無傷のワゥ居た。
彼女に、ワゥのお陰で大丈夫だったと答えると、えへへ、嬉しそうに笑うワゥ。
その間に他の皆は、ミニオンの迎撃に移っていた。

「祐、すまないが先にミニオン共を片付ける。ルゥと一緒に『幹』の方へ下がっていろ」

一度俺の元へ来たサレスにそう言われ、仕方が無いと、ルゥと共に後ろに下がる。そんな俺達の側では、ユーフィーが護る様に敵に睨みを効かせていた。
ここで無理言って皆の邪魔をするわけには行かない……とは言え、ここまで来てコレとは、まったく……。
そう考えたところで、思い至る。この先って、まともに『ログ領域』に留まる時間があっただろうか、と。
まずいかもしれない。
そんな考えが頭を過ぎったところで、

「くそっ！　何でこんなに多いんだよ、こいつら！！」

そんなソルラスカの声で、思考を中断させられた。
その声に周囲を見れば、確かにミニオン達の数は異様に多い。
皆も奮戦しているが、じわじわとその包囲を狭められている。このままじゃ、まずい？　何故？
そう考えた思い出される、先のエトルの言葉。

――イレギュラーは須らく排除してくれるわ！――

っ！　そうか、ここに至るまでに、奴等に対して、奴等の想定外の事が有り過ぎたからか！
話に聞いた『枯れた世界』でのこと。暁が既にこちらに組していた事、世刻が思っていた以上にジルオルの力を使いこなしていた事。それに、『理想幹』においても永峰の抵抗、スールードの介入と突然の攻撃、恐らくものベーの方にエヴォリアが来た事も知っているだろう。それにユーフィーやクリストの皆、そして、俺、か。
一つ一つは大した誤差じゃないかもしれない。けど、積み重なれば思っていた以上に大きな誤差。
“予測”と“予定調和”にこだわる奴等にしてみれば、看過できないものだった、か。

「ユーフィー。私達のことはいい、皆のところへ」

戦況から、このままではまずいとルゥも踏んだのだろう。俺達の側に居たユーフィーへ掛ける声が聴こえた。
対してユーフィーは、不安げな表情で俺とルゥの顔を見る。
そんな彼女に、皆を頼む、と言うと、彼女は一瞬瞠目し、

「……解りました。けど、危なくなったら呼んで下さい！　すぐに来ますから！」

そう言って、敵に向けて駆けて行く。
これであちらは大丈夫か？
そう思った時、『ログ領域』とこちらを結ぶゲートから大気が揺らぐのを感じ、

「くっ……エトル達め、ログ領域に何か干渉をしたな！」

戦いながらも『幹』にある端末を通して、『ログ領域』の中をモニターしていたサレスがそんな声を上げた。
中の様子を調べるサレスの表情は硬く、中の状況は余り良くない様に思われる。

「……皆、私はこれから中に入り、三人を連れ戻す！　ここは頼めるか！？」

そんなサレスの言葉は、やはり予想通り……否、予想以上に、『ログ領域』の中がまずい状況になっていると感じられて。

「応よ！」
「お任せください、サレス様！」
「心得ました！！」

だから、当然とばかりに皆がソレに応えていく。
それに満足げに頷き、サレスが中に入ろうとした、その瞬間。
そこに生まれる一瞬の隙。
それを突き、こちらの防衛を突破してくる一人の黒ミニオン。
サレスの表情が、しまったと、失態を悔やむ様に歪む。
ミニオンの矛先は真っ直ぐに、この場において、最も力の無い者――ルゥへ。
彼女もそれを察して、身を躱そうとしているけれど、だめだ、こ

のままじゃ――。

浮かぶイメージは、その刃が、彼女の身体を、貫く、最悪な――。

「さ、せ、るかあああああああああ！！！！」

マナを練り上げ、ルゥとミニオンの間へ割って入る。

ズグリと、俺の中の“神剣の本能”が、蠢く。

突き出される刃を、左腕で下からかち上げ、空いた胴へ身体をねじ込ませ――ズンッと、突き出された“神剣の腕”の手刀は、ミニオンの腹を貫く。

うめき声を上げながらマナへと還るミニオンの、そのマナを、吸い。喰らい。味わい。

満ちていく。

満たされる。

ああ。これを。もっと。もっと。もっと。

マナを、マナを、マナを、マナを、マナをマナをマナをマナをマナをマ

「あああああああ！！！　“本能（おまえ）”は、黙っ……て、ろ！！！！」

湧き上がる“神剣の本能”を、無理矢理押さえ込む。今は、これに、構っている暇はねえ！

呑まれるな、己を強く持て！　力を、絞り出せ！！

「ゆ……う……？」

「マスター！？」

「ユウ、無理をするな！」

「だい、じょうぶ……だ」

ぽつりと、絶句したようにルゥに呼ばれ、ナナシの、レーメの、声が聴こえて。それに答える声が上手く発せられなくもどかしい。

だから、心配そうな表情の彼女の頭を、いつものように撫でてやる。
ぎしりと、腕が、自分のものでないように、重い気がするけれど。
大丈夫。まだ、いける。俺はまだ、俺でいるから。

「サレス！　さっさと、あいつ等を……迎えにいけぇ！！」

俺の叫びに、はっとしたように止まっていた身体を動かし、『ログ領域』の中へと入っていくサレス。

「済まない」

その口がそんな風に動いた気がした。
馬鹿野郎。そんなことはどうでもいいから、さっさと、三人を連れて来いってんだ。
脳裏では、マナを、求める声が、響く。
サレスが抜けた穴は、既に防衛網を狭めた他の仲間が塞いでいる。
ユーフィーも奮戦してるし、きっと、もう、だいじょうぶ。
疼く。
ズクズクと。
全身の、『観望』が、欲っする。
マナを。
マナを喰らえと。
動けと。
喰らうために。
周囲にある。おいしそうな。まなを。
……呑ま……れる、な。
身体をかき抱き、高ぶる“本能”を押さえつける。
押し潰されそうになる“自分”を、保て。
その時――ふわりと、身体がナニカに包まれたのを感じて。

顔を、上げると、蒼銀の糸。
頬の側には、いつもの、二つのぬくもり。
……ああ、皆が、側に居てくれているのか。
けど、駄目だよ、ルゥ。
離れないと。
俺が呑み込まれたら、きっと、“俺”は、君を――。

「大丈夫」

耳元で、囁く様に聴こえる声。

「きみは、いつも私を護ってくれる。だから……今度は、私が、私たちが、きみを護るから」

ルゥの言葉が、嬉しくて。
だけど、そんな彼女を。皆を。傷つけたくなんて、ないから。
四肢に力を篭める。
心を、強く持て。
大丈夫。
大丈夫だよ。
俺はまだ、俺で、いられるから。
だから――俺に、力を――。

――よう頑張ったな、祐。

“声”が、聴こえた。

「ちょう……わ？　どうして……」

聞き覚えのある声。

一瞬幻聴かと思ったそれに、思わず口を突いて出た言葉に答え、再び“声”が響く。

――『ログ領域』で起こった事によって、今あそこと“ゲート”が繋がっているそこも、非常に空間が不安定になっておるゆえに、な。さあ、祐よ。『扉』を開き、妾（わらわ）の名を呼ぶがよい。

……名前？

――然り。以前に言うておいたであろ？　次に逢う時までに、妾のこの姿の時の名を考えておけ、と。……名を付ける、と言う行為は一種の契約じゃ。其れは、妾とぬしとの繋がりを強くする。妾はそれを手繰り、ぬしの元へと馳せ参じよう。ゆえに、さあ、祐よ――。

「わかっ……た！　ナナシ！　レーメ！」
「はいっ！」
「うむ！」

『調和』の言葉に頷き、軋む心を繋ぎ止めながら、ナナシとレーメを促すと、もう俺に余裕が殆ど無い事が解っている二人は直ぐに、行動へ移す。

繋がれるナナシの右手と、レーメの左手。空いた手はそれぞれ前に伸ばされ、二人は朗々と、詠唱を、口にする。

其れは、まだ見ぬ世界と、世界を繋ぐ、『逢い言葉（コトバ）』。

「我等開（ワレラヒラ）くは夢幻（ムゲン）の開闢（カイビャク）
我等歩（ワレラアユ）むは無限（ムゲン）の回廊（カイロウ）

久遠（クオン）なる刻（トキ）を流（ナガ）れうつろい
有限（ユウゲン）にして幽玄（ユウゲン）なる世界（セカイ）を渡（ワタ）る
織（オ）り成（ナ）すは魂振（タマフ）りの祭祀（サイシ）
齎（モタラ）すは稀人（マレビト）の鎮魂（タマシズメ）
其（ソ）は全（スベ）て　永久（トワ）なるかな」

――直後。

延ばされたナナシの左手と、レーメの右手の間の空間に、黒く、細い、『線』が走る。
それは一瞬にして、人が一人通れる程の、黒い大きな穴と化し。

「なに……あれ……？」

そんな中、ダレカの声がした。
周囲では、収束に向かっているとは言え、未だミニオンとの戦いは続いている。
それでも尚、俺の起こした行動は、皆が思わず眼を向けてしまうような事だったようで。
けど、今の俺には、其れを気にする余裕も無く。
だから、手を伸ばし、叫ぶ。
決めていた、その『名』を。
“縁”よ、繋がれと。願いを篭めて。

「来いっ！！　『アネリス』！！！」

その直後、延ばした手の先――世界（ワールドゲート）を繋ぐ扉に波紋が生まれ、本来こちらから向こうへの一方通行であるはずのそれの“向こう”から、ゆっくりと、にじみ出る様に、現れる――。

「え……あたし……？」

気がつけば、いつの間にか直ぐ側に来ていたユーフィーが、驚愕の声を漏らす。

そう。現れた“彼女”は、いつもの『夢』で見ていたままの姿で、俺の眼前に――。

「く……ふふ、ふふふふ……永い……永い刻であった」

感慨深げに呟く『調和』は、一歩、俺に向けて足を踏み出したところで、それを止める。

俺と『調和』の間――然程離れていない、その隙間――に、ユーフィーが立ち、警戒するように『調和』を睨みつけたから。

「ふむ……案ずるでない、『悠久』の娘よ。妾は味方じゃ。祐から聞いておらぬか？　この地の先において逢わねばならぬものがおる、と。それが妾じゃ」

「き、聴いています、けど……」

目の前の、自分そっくり――違うのは、髪と瞳と服の色だけ――な少女が『神剣』といわれても、俄かには信じられないのだろう。

俺は後ろから、戸惑うユーフィーの頭をぽんぽんと撫でてやり、

「ユーフィー……大丈夫。彼女は、味方だから」

そう言って、『調和』前に、歩み出る。

「『アネリス』。それが妾の名、じゃな？」

皆の視線が集まる中、俺をひたと見つめる『調和』は、そっと、俺の手を取り、柔らかに、微笑んで。

「良かろう。妾の事はこれより『アネリス』と呼ぶように。……ぬしからの贈り物、確と受け取った。後は妾に任せて、今は休むがよい」

そっと延ばされた手。それは優しく、俺の視界を覆うと、今の今まで俺の心を喰わんと、響いていた“声”が。

マナを求める。全てを喰らえと、苛む声が。ぴたりと止んだ。嘘のように。

それと同時に、がくりと、全身から力が抜けて。

もう大丈夫だと。本当の意味で、大丈夫なのだと思ってしまったが故に。

急速にブラックアウトする視界。

「祐兄さん！？」

「祐！」

皆の声を耳に残し――俺が覚えているのは、そこまでだった。

永遠神剣之章：８０．力の、片鱗。

「理想幹の中枢からログ領域に行けば、『観望』を生み出した神剣に逢える」

ここ、『理想幹』へと突入する前のブリーフィングにて、祐が言っていた言葉だ。そしてそれを覚えていたが故に、その光景を見ていた者達は皆、混乱した。

そう、彼は確かに言ったのだ。逢う相手は『神剣』である、と。

にも関わらず、彼が開いた空間の裂け目。そこから出てきたのは――髪と瞳、服の色が違うが――ユーフォリアと瓜二つの少女であったからだ

祐にアネリスと呼ばれた――否、名付けられた少女は、祐と二、三言葉を交わした後、彼に手をかざす。するとがくりと、祐の身体は糸の切れた人形の様に崩れ落ちた。

「祐！」

「祐兄さん！」

近くに居たルゥとユーフォリアが、慌ててその身体を支える。どうやら単に気を失っている様で、ほっと安堵の息を漏らす二人。

そして気付いた。今の今まで、活性化した『神剣の本能』に呑まれかけ、苦しんでいたその表情が、安らいだものとなっている事に。

思い当たる原因は一つ。アネリスが祐へと手をかざした事。祐の側に居たルゥとユーフォリアは、彼女が言った言葉を聴いていた。彼女は確かに、祐に向かって「後は任せて、今は休め」そう言っていたから、間違いないだろう。

そして、祐の身体が崩れ落ちるのを切欠に、その様子を半ば呆然と見ていた皆は、慌てたように戦闘を再開する。アネリスが登場し、

警戒してか様子を伺っていたミニオン達が再び動き出したからだ。
ミニオン達を随分と倒したとは言え、もともとの数が多かったために、殲滅するまでにはまだ時間がかかるであろう。
だが、そうそうのんびりもしていられない。なぜならば、もう幾許かもしないうちに望達が帰還するであろうからだ。
『ログ領域』で何が起こっているかは解らないし、そこに行った彼らに何が起きているかも定かでは無い。そのため、『ログ領域』から出てきたばかりの者達を、続けてミニオンとの戦闘に狩り出すわけにも行かない。
そんな中、気を失った祐をルゥとユーフォリアに任せ、アネリスがふらりと前に出て来た。

「なっ……！　ちょ、ちょっと貴方！　待ちなさい、危ないわよ！」

慌てて制止するタリアであったが、アネリスは構わず、最前線――誰よりも前へと進み出た。
当然の如く、ミニオン達のターゲットは彼女へ移る。

「燃え尽きろ。……『ファイアボルト』」

余りに無造作に進み出た彼女へ打ち込まれる、炎熱のマナ。
――直撃した。
誰もがそう思った、その次の瞬間。それを見た者達の顔は、驚愕に染まる。そう、ミニオンすらも。

「……え？」

誰が漏らした呟きであろうか、呆然とした声が響く。
それも無理はなかろうか。アネリスは、全く持って無傷であったからだ。

とは言え、ただ無傷だっただけでは別に驚くに値はしないだろう。
ナーヤやヤツィータ、ワゥであれば、魔法に対する抵抗力に重点を置いたブロックにより、ミニオンのファイアボルト程度であれば、無傷で済ませる事も出来る。タリアやルプトナであれば、アイスバニッシャー等のバニッシュスキルによって、敵の魔法を打ち消して無傷で居ることも出来よう。
だが。
アネリスは、何もしなかったのだ。
『ファイアボルト』が撃ち込まれても、そのまま受け入れるかのごとく、無造作に喰らった……はずであった。
だが、彼女に直撃したと思われた次の瞬間、ファイアボルトの魔法は文字通り消え失せた。火の粉の残滓すら残す事無く。
最も困惑したのは、それを放ったミニオンであろうか。
『ファイアボルト』、『ファイアボール』、『イグニッション』、『ライトニングファイア』、『インシネレート』……と、その次の瞬間には、まるでムキになったと言われても納得してしまいそうな程んに、正に雲霞の如く、次々と魔法が打ち込まれる。
だが……やはりどれも、アネリスに当たる側から消えていく。

「……炎よ、降り注げ……『フレイムシャワー』」

そして、ならばとばかりに放たれる範囲魔法。
アネリスを中心に、炎が雨の如く降り注いだ。だが――。

「くっ……ふふふ。もう、終わりかえ？」

『フレイムシャワー』によって焼け焦げ、炎の集中した一部の箇所においては、地面がガラス状に変質するほどの灼熱の大地の中、悠然とした態度を崩す事無く、ミニオンたちを睥睨するアネリス。
皆は見て、そして理解した。彼女の立つ地面、そして周囲の大地。

その中において、彼女の陰になっていた部分の大地のみが、魔法の影響を受けていなかったのだ。つまりは――。

「魔法無効化能力……」

ぽつりと、ナーヤが呟く。

その声はアネリスにも届き――ちらりと、彼女はナーヤを一瞥すると、小さく笑みを浮かべながら、ゆっくりと頭（かぶり）を振った。

「ふむ……惜しい。五十点、と言ったところじゃな」

アネリスがそう答え、違うのかと、誰もが疑問に思った時、

「……これならどう……？　『ダークインパクト』」

黒ミニオンがそう言い放ち、マナを解放すると共に、アネリスの足元の地面が、黒く染まる。

次いで爆発する様に湧き上がる、怨恨のマナ。

アネリスの能力を魔法の無効化と、ミニオンも判断したのだろう。

『アイスバニッシャー』や『エーテルシンク』と言った、相手の魔法を打ち消すバニッシュスキルが効かない、アンチバニッシュ能力を持った魔法だ。

だが。

「うそ……あれもなの？」

驚くヤツィータの言葉の通り、アンチバニッシュ能力を持った魔法――『ダークインパクト』すらも、アネリスに当たると同時に消え失せた。

驚いたのはミニオンも同じであろう。とは言え元より感情の薄い

ミニオン達であるが故に、次の行動に移るのは早い。
魔法が効かないのであれば、直接攻撃にて倒せばよい。
そう判断したのだろう、包囲網の中から踊りでる、青ミニオンと黒ミニオン。
二体のミニオンが一気に肉薄し、その剣が振るわれる刹那、すっと伸ばされたアネリスの手。そこから放たれた『炎弾』が極至近距離から二体のミニオンに直撃し、爆発すると共に吹き飛ばす。
ナーヤを始めとした赤マナを扱う者は、それが何であるか、瞬時に理解した。そう――。

「今のは……『ファイアボルト』？」
「ふむ。正解じゃ」

まさか、と言った風なヤツィータの言葉に、アネリスが答える。
そしてそれに対し、次に浮かぶ表情はやはり驚愕であった。
無理も無い。それが本当だとするならば、アネリスは、詠唱も、マナを練るそぶりすら見せずに『ファイアボルト』を放ったということなのだから。

「くふっふふふふっ……さて……返すぞ？　確りと受け取るがよい」

そう言い放ち、右手を空へと掲げるアネリス。
すると、その掲げられた手の先の上空に、小さな炎の珠が生まれた。
次の瞬間、それは瞬時に、猛烈に膨らみ、直径にして五メートル程にまでなった。そこに篭められたマナは濃密にして、小型の太陽もかくやとばかりに炎が渦巻き、紅炎すら立ち上る。
その巨大すぎる炎の塊。そして先程のアネリスの言葉。
その二つが結びついたか、はっとした顔でアネリスを見るナーヤ

は、信じられないといった表情で、己の予想を口にした。つまりは――。

「その炎も、先程の『ファイアボルト』も……その前に撃ち込まれた『魔法』達か！」

その言葉に、愉しそうに笑みを浮かべるアネリスは、深く頷く。

「正解じゃ。妾は『鞘』ゆえに、な。そして……鞘に納められた刃は、再び抜かれるものであろう？」

離している間にも、彼女が掲げる炎熱の塊を打ち消し、妨害しようと、アイスバニッシャーや弱体化魔法が放たれるが、それらは全てアネリスに当たる側から消えていく。

『鞘』に向けられる刃は、その内に納められるが道理と言う様に。

同時に直接斬り捨てんと殺到するミニオン達であったが、その攻撃の悉く（ことごと）は、アネリスの展開したマナのブロックに阻まれていた。

「くふふふっ……さあ、炎熱の中に消え失せよ……『ファイアボルト』」

そして、広げられていた手が握られ、振り下ろされると共に、火球は弾け、幾百……いや、それ以上の炎弾となって、包囲を展開しているミニオン達へと降り注いでいく。

『ファイアボルト』とアネリスは銘打って放った物であるが、それは既に『ファイアボルト』の範疇を超えていた。

青ミニオンは飛んでくる炎弾をバニッシュしようとするも、絶え間なく、そして大量に降り注ぐ炎を全てバニッシュする事など叶うはずもなく。そして赤ミニオンは、『イミニティー』や『ファイアクローク』と言った、魔法抵抗力の高いブロックを展開するも、余

りの量に物理的圧力すら伴った炎の雨に、そのマナのブロックすらも撃ち貫かれていく。

その光景に、炎熱の弾丸を幾状も撃ち放つと言うその形状は、確かに『ファイアボルト』であろう。だが、敵全体に向けて放たれる『ファイアボルト』が有るものか。威力で言えば、上位魔法の『アポカリプス』すらも超えているのではないか。そんな考えがナーヤやヤツィータの脳裏に浮かんだ程の物である。

そして――着弾による炎と粉塵が晴れた時、そこに立って動いているミニオンは、一人として存在していなかった。

それを生み出した人物であるアネリスは、余りの光景に呆然とする旅団メンバーへと向き直ると、

「さて、少々順番が前後してしまったが……妾の名は『アネリス』。永遠神剣第一位『調和』が化身にして……くふふっ……そうよな、青道祐と共に歩む者、と言っておこうか」

ぐるりと、全員の顔を見渡し、先程までとはうって変わって柔らかな笑みを浮かべ、言い放った。

永遠神剣之章：８１．苦渋の、撤退。

アネリスの手によってミニオン達が倒され、彼女がゆっくりと、ルゥとユーフォリアに抱えられた祐の元へと戻り、彼女に対して誰かが何かを問いかけようとした、その瞬間、それは起こった。

『理想幹』と『ログ領域』を結ぶゲート。

そこから靄（もや）の様な、黒い光がにじむ様に出てきたのだ。

「な、なんじゃこれは！　どうなっておる！？」

皆の気持ちを代弁するナーヤの叫びが響くと同時に、ゲートがじわりと、黒く染まってゆく。

そしてそれが、ゲート全体へと及ぼうかとした時、未だ無事であった部分から光が飛び出し、それはサレス達の姿を取っていく。

そこに駆け寄る皆。

「おお、無事だったか！」

サレス達が完全に姿を現し、その無事を喜ぶ皆であったが、それも束の間、絶が疑問の声を上げた。

「……ところで、望。斑鳩はどうした？」

出てきたのは、三人。サレスと望。そして、望に抱きかかえられた希美。……そう、沙月の姿だけが、この場に無かったのだ。

絶の問を受けて、望の表情が悔しげに歪む。

「先輩は……俺達を逃がすために……」

「沙月は……まだあの中に居る」

そして、答えるサレスもまた、同じように。
それを聴いた皆の表情は愕然としたものへと変わり、この場を沈黙が支配した。

「……俺がもう一度入って、先輩を連れ戻してくる。サレス、中に入れてくれ！」

沈黙を破り、サレスに詰め寄る望であったが、『ログ領域』の中に入るために使用した装置によって、中の様子を伺っていたサレスは静かに頭(かぶり)を振った。

「中は今、この黒いマナで酷い状態だ。今入ったら、何も出来ずに簡単に身体が消し飛ぶぞ」

サレスに説明され、今入る事は叶わないと思い知らされた望は、「ちくしょう……」と、悔しげに拳を握り締めた。
そんな望へ、サレスは淡々と語り掛ける。

「望、ここは脱出するぞ」
「なっ……先輩を見捨てるのか！？」

サレスとて、出来うるならば沙月を助けたい。だが、彼はこの『旅団』と言う組織のリーダーなのだ。である以上、彼は旅団員全体のことを考えねばならない。
激昂する望に対して、サレスはあくまで冷静に、言葉を紡ぐ。

「では、どうする？　ここに残っていては、この黒い光……マナに飲み込まれるぞ。そんな事になれば、それこそ沙月の行動の意味がなくなるだろう」

「っ……わかった……」
「よしっ……行くぞ、皆のもの。ものべーまで一気に走れ！」
望がサレスの言葉に頷くのを見て、ナーヤが皆へと声を掛ける。
それに前後し、気を失っていた祐の意識が覚醒した。

◇◆◇

「……っ……」
思い出されるのは、こちらに延ばされるアネリスの手と、彼女の言葉。……どうやら、気を失っていたのか。
身体を起こし、若干ぼうっとする頭を振ろうとしたところで、自分の身体が誰かに抱きかかえられているのに気付いて、目を開ける。
「……ルゥ、ユーフィー？」
「あっ……気付いたんですね」
「ん……身体は大丈夫か？」
問いかけてくる彼女達へ頷いて返すと、離してもらってその場に起き上がる。
周囲の様子を見れば、場所は未だ『理想幹』中枢。皆の中にサレスと世刻、世刻に抱きかかえられた永峰の姿も見て取れた。
そして、周囲を侵食するように漂う、靄の様な黒いマナ。
俺が立ち上がった事で、俺の意識が戻った事に気付いたか、駆け寄ってきたワゥが飛びついて来たので受け止めてやる。
「ユウ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ」

俺の身体の様子を問いかけてくるワゥへ頷いた所で、

「ほらワゥ、離れなさいよ。……まったく……余り無茶するんじゃないわよ。けど……その、ルゥ姉さまを助けてくれて、ありがと……」

ワゥに続いて来たゼゥが、ワゥを引き剥がしながらそんな事を言ってきたので、「どういたしまして」と返してやる。

そこに、側で俺達の様子を眺めていた、黒髪の少女が近付いて来た。

……改めて見ると、何と言うか、彼女がこうして実際に目の前に居るのは不思議な感じがするな。

「ふむ、祐。大事無いか？」

ぺたぺたと、俺の身体を触りながら訊いて来るアネリスへ、「全く問題ない」と返すと、彼女は小さく微笑む。

なんと言うか、彼女の笑みは不敵なものばかり見ていたから、新鮮だ。

「……それで、状況は？」

「はい。マスターが意識を失ったあと、アネリスがミニオンを殲滅。その後ゲートより『黒いマナ』が出現。後、サレス、世刻、永峰の三名が帰還。そしてこれより、ものべーへと急ぎ戻り、ここから脱出する段階です」

「そうか……斑鳩は？」

「サツキは『ログ領域』に取り残されたらしい。だが、“今は”助け出すのは不可能、と言うところだな」

現状を問いかけると、ナナシとレーメが説明してくれた。現状は概ね“原作”通りになっちまったか。

……斑鳩の事は、世刻達と一緒に『ログ領域』に入って、何とかしようと考えてたからなぁ……失敗したな。

とは言え、今更悔やんでもどうしようもない。斑鳩に関する事には、俺は何も介入していないから“原作”通りだとすれば、必ず助けるチャンスは来る。その時に、全力を尽くそう。

そうこうしているうちに、ナーヤの掛け声と共に、皆がものべーへと駆け出す。

「よし、行こうか」

皆へ声を掛け、ルゥと自分へ移動力向上（シルファリオン）アーツを掛け、俺達もナーヤ達に続いて中枢を後にした。

道中、サレスにアネリスの事を訊かれたので掻い摘んで説明すると、流石に驚かれた。

◇◆◇

『理想幹』中枢より脱出する彼等を見つめる者達が居る。

一人は、鈴の髪飾りを着け、その背に鳳凰の翼を湛えた少女――スールード。

彼女は中枢の様子を高空より見下ろしながら、隣に居る人物へ話しかけた。

「……さて、貴女達の『目的のモノ』は出てきましたが……いかがですか？」

その問に対して、問われた人物は静かに頭を振る。それに合わせ、その裸身を包む純白のローブがさらりと揺れ、風に吹かれてその内を一瞬さらけ出し、相変わらずの格好だ、とスールードは小さく溜息をついた。

「これじゃあダメね。直接食べるには……密度が薄いし、広がりすぎているもの。……かと言って、『抗体兵器』を持ち出す程の量でもないのよね」

酷く残念そうに言ったその女性――赦しのイャガは、それはそうと、とその視線を既に随分と小さくなった“彼等”へと向ける。

「ふふっ……ほんとうに美味しそう。あぁ……お腹が空いたわ……食べてしまいたい」

「ダメですよ」

熱に浮かされた様に喋り、今にも飛び出そうと言う雰囲気のイャガだったが、スールードにピシャリといい含められ、「解っているわ」と、しかし残念そうに頷く。

「……今回、あの管理神達が『アレ』をこの程度しか出して来なかった以上、彼等にはもう少し頑張って、管理神達を追い詰めてもらわねばならないのですから。幸いにも彼等には再びここを訪れる“理由”が出来たようですし」

『ログ領域』に入った者のうち、出てこなかった者の姿を思い出しながら言うスールードは、ちらりと眼下の、既に黒い影にしか見えない一人へ視線を向け、「それに……」と言葉を続ける。

「“彼”は私のモノです」

逢う度に人間（ヒト）の素晴らしさを見せてくれる“彼”の事を思い出し、くすくすと、愉しそうに笑う。

そんなスールードの様子を見ながら、イャガもまたその口角を小さく上げる。

「解っているわ。けど……貴女がそこまで執着する“彼”。きっととても美味しいのでしょうね」

そう言って、恍惚とした表情を浮かべたイャガだったが、次の瞬間にはその表情を元に戻す。

「それで、その“彼”が呼び出したと思われるアレ。アレは一体何なのかしら？」

イャガの脳裏に浮かぶのは、『悠久』のエターナルとそっくりな少女。だが、その戦い方はイャガから見ても『非常識』に尽きる。

しかしイャガの問に対して、スールードは頭を振って答える。

「解りません。少なくとも私は初めて見ました。どちらにしろ、相対する場合は油断はしない方が良いでしょう。貴女も、私も」

厳しい顔で言うスールードへ、イャガは「そうね」と返すと、眼前に己が神獣である、次元鯨の『パララルネクス』を呼び出した。

「どちらへ？」

「“食事”よ。だってお腹が空いたのですもの。……大丈夫、“彼等”にはまだ手を出さないから。それじゃあ、またね」

そんな言葉を残し、スールードが何か返す前にパララルネクスへ乗り、飛び去るイャガ。

それを見送ったスールードは、やれやれと溜息を吐く。

「それにしても……眼の上の瘤を取り除くためとは言え、『叢雲』の力を求めるなど……『法皇テムオリン』。随分と無茶をするものです」

そのためには彼女は確かに適任ですが、と独り言ちた彼女は、気持ちを切り替える様に小さく数度首を振り、再びその視線を、既に見えなくなった“彼”へと向けて、言葉を紡ぐ。

「さて、青道祐。貴方は一体、次は何を魅せてくれるのですか……？」

きっと彼等ならば、『最後の聖母』でも、『法皇』が相手であったとしても、決して諦めずに立ち向かう、人間（ひと）の愛おしさを魅せてくれるに違いない、と想いを馳せながら。

永遠神剣之章：８２．脱出、理想幹。

ものべーの元へ戻った俺達を出迎えたのは、激戦の跡だった。
サレス達に合流した後、ものべーの方にも敵が現れた事を伝えはしたのだが、ここまで激しいものになっていたとは思っていなかったのか、誰かがゴクリと喉を鳴らす音がした。
ものべー自身は無事である様なのだが……ミゥ達は無事だろうか。
そう思ってしまった途端、不安が心を覆っていく。
知らず駆ける脚が早くなっていったところで、ものべーから人影が三つ、こちらに向かって来るのが見えた。
互いの距離は直ぐに詰まり、それがミゥ達だと解ってホッとする。
やはりあの時、殆ど戦え無い俺達二人が別行動したからか、無事な姿に安心した様で。
……仕方なかったとは言え、心配かけたなぁ。

「祐さん！　ルゥ姉さん！」
「よかった、お二人とも無事でしたか……」

そう言って安堵の笑みを浮かべる二人に「そっちこそ無事でよかった」と返し、彼女達の後ろにいる人物へと視線を向ける。

「エヴォリア、改めて助けてくれてありがとう」

俺達が助かったのは何よりも君のお陰だと、そう告げると、彼女は「気にしないでいいわ」と返して来た。
次いで彼女達へ現状を説明し、『理想幹』より脱出する旨を伝えたところで、周囲にソルラスカの声が響いた。

「なっ……んだよ、あれ……」

その声にソルの方を見れば、彼は上空へとその視線を向けており……そちらへ目をやれば、そこにあったのは、空一面に広がる淡い光の膜。

「……さっきまであんなもの無かったのに……」

「……っ！　そうか、ここを護る為の『障壁』か！」

「どうやら、本格的に我々をここで滅する心算ですね」

タリアと暁、そして暁のナナシの声。

それを聴いて、ああそうかと“原作”での展開を思い出した。……とは言え、これはさすがに事前に思い出していたとしても、どうにもならなかっただろうが。

「ならば、打ち破るまでです！」

そういったのはカティマで、彼女は己が神剣である『心神』を抜き放つと、マナを集中させ、それを空に見える障壁へ向け、一気に解放する。

それに一泊遅れながらも、タリアやソル、ナーヤ……他の皆も一斉に神剣からマナを撃ち、障壁を攻撃する。

だが……。

「そんな……我々の攻撃ではかすり傷一つ付けられないと言うのですか……」

カティマの呆然とした呟き。

そう、その言葉通り、障壁は一瞬揺らいだだけで傷すらついた様子は無く、そこにあった。

「……無理もない。あれは『魔法の世界』で俺が放った『意念の光』も反射したんだ」

なまじ、意念の光を間近で見ていたせいだろうか、眼前に広がる事実に、諦観にもにた感情を乗せて呟く暁。

俺達の背後……中枢の方からは、黒いマナがじわりじわりと、『理想幹』を侵食しながら迫ってくる。

「諦めちゃダメです！」

そんな中、ユーフィーの凛とした声が響いた。

彼女は『悠久』を構え、そこにマナを集中させていく。

「あれを打ち破るしか手がないのなら、それを貫き通すまでです！……やあああ！！」

『枯れた世界』において、ユーフィーが神名よって封じられていた力を、僅かとは言え取り戻した。それは偏に、“原作”と比べてこの時点での彼女の力は、今の方が遥かに勝っていると言うことで。

ユーフィーが撃ち放ったマナの一撃は、障壁へと突き刺さると共に、閃光と轟音を上げる。

先の皆の攻撃を合わせたものよりも、遥かに大きな一撃。これならば、あの『意念の光』すら迎撃できるんじゃないか、なんて思う様な。

ああ、これはやったかなと思っていた俺は、そこに衝撃的なものを見る。

「そんな……」

呆然としたユーフィーの声。

そう、空にはまだ――健在な姿を見せる、障壁があった。
そんなばかなと、思った直後に思い至る。ああそうか、と。
皆が居なくなった後のものべーへの襲撃。ログ領域へ入った後に現れたミニオン達の数。それらを踏まえても、明白だった。管理神達が“原作”以上にこちらを警戒していることは。
……障壁を強化することだって、考えられて当然じゃないか。
背後から迫る黒いマナ。絶望に染まる皆の顔。ものべー。それでも尚、諦めないとユーフィーが剣を構えると、それに触発されて、皆も……そう、あの障壁の強固さを思い知らされて、一瞬でも絶望させられても。それでも尚諦めたくないと、剣を構える皆。
それらを順番に見回して。
ユーフィーが、皆が、もう一度全てを振り絞って撃ち放てば何とかなるかもしれない。けど、ダメかもしれない。そう、確実に上手く行く、なんて保障は無い。
選択肢は二つ。
一つは最後の手段、だけれども。……その前に、やるだけやってみますか。
そんなことを考えつつ、少し無茶をしようと決心した。

「アネリス、君が居れば『観望』は抑えられるんだよな？」
俺の問に「うむ」と答えるアネリス。
それを受けて、よし、と頷き、

「レーメ。今の俺なら最大で何柱いける？」
「……合わせて六百。それ以上はだめだぞ」

俺の考えなどお見通しなのだろう。しぶしぶながらもレーメが答えた。
六百か。精霊の世界の時の倍とは、我ながら成長したもんだ。

そこに、俺達の会話を聴いていたのだろう、ミゥが「手伝います」と、そっと俺の背に触れ、『マナリンク』を使ってマナを供給してくれ始めた。

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……」

ありがとう、と告げ、暖かいミゥのマナを感じながら、始動キーを唱える。

マナを練り、魔力と変え、それを糧に“世界”に呼びかける。

光と闇を三百柱ずつ。練り込み、混ぜ合わせ、己が右手に顕現するは一振りの槍。

相反する属性を混ぜ合わされて創り出されたそれは、『精霊の世界』と『魔法の世界』。かつて放った二度よりも、遥かに濃密な力を感じさせる。

というか、六百ってのは本当に今の俺の限界値なんだろう。正直手の中のコレを抑えているので精一杯だ。放ったら絶対倒れる。

この間、アネリスは俺の左手――『観望』を握り、それが暴走しないように抑えてくれているのが解った。アネリスが居て良かったよ、ほんと。

まあともかく。

さて――久しぶりに、全力でぶっ放しますか。

いつの間にかこちらの様子を伺っていた皆の顔を見回し、その中でも先陣を切るであろうユーフィーで視線を止める。

「ユーフィー、合わせろよ？」

「は、はい！」

発動を今か今かと待ちわびる様に、バチバチと、今にもあふれ出しそうな力を、振りかぶり、障壁へ目掛け――投擲する！

「――神槍『スピア・ザ・グングニル』！！！」
「行くよ、ゆーくん！！　てやあああああ！！！」

放たれると同時に対消滅を起こし、純然たる破壊と消滅のマナと化した俺の一撃は、障壁に突き刺さると同時に激しく鳴動する。
そこに間髪居れず打ち込まれるユーフィーの攻撃。
先にも増して巻き起こる閃光と轟音。
余りに強いそれに咄嗟に眼を伏せ、しばし後、ようやく収まったところで顔を上げ――。

「やった！　やりましたよ、祐兄さん！」

嬉しそうなユーフィーの声。
そう、今度こそ、障壁には確かな“穴”が開いていた。

「っ！　今じゃ、皆、あそこに向けて一斉に攻撃するのじゃ！」

けど、ものべーが通るにはまだ小さい。
それを見て取ったナーヤが、そう号令を下す。
それを受けて、皆がほぼ同時にマナを撃ち出して攻撃を加えていく。
そして――『理想幹』を囲む堅固な障壁には、ものべーが通れるだけの穴が開いた。

「よし、塞がれる前に脱出するぞ！」

再びのナーヤの言葉に、俺達はものべーへと駆け出した。
その途中、サレスに向かって、周囲に聞かれない様に問いかける。

「サレス、一人で大丈夫か？」

それに対して一瞬驚いた顔をしつつも、すぐに頷くサレス。

「ああ。その代わり『二回目』の時は“そちら”は波状攻撃にしろ」

それだけ言って口を閉ざした彼に苦笑しつつ、わかったと答え、俺はものべーへと足を向けた。

……ちなみに全力を出しすぎた俺がものべーに入ってから、保健室に直行したのは言うまでもない。

永遠神剣之章：８３．懐かしき、風景。

『これよりものべーを発進させます。揺れることが予想されるので、皆、何かに捕まっていてください――』

ものべーに乗り込んでしばし――まあ俺の場合は、力を使い果たして動けないから、保健室に放り込まれたんだけれど――カティマの声で放送がかかり、ズズッと小さな振動に続き、丁度、俺の寝かされたベッドから見える窓の外、空が動き始めたのが解った。

俺の隣のベッドには、気を失ったままの永峰が寝かされ、世刻が寄り添う中、ヤツィータが容態を見ている。

ちなみに俺のベッドの横では、フィアがゆっくりと俺にマナを流し込んでくれている。

丁度俺がベッドに突っ込まれた時に来て、俺の様子を見るなり苦笑を浮かべられた。……言いたい事はすぐ解った。うん、すまない。

「また」なんだ。

……いやほんと、面目ない。

そこに、生徒会室の方の様子を見てきてもらっていたミゥ達が戻ってきた。

話を聴くに、やはりサレスは乗らなかったらしい。

「サレスが……？」

と、隣に居た為に話が聞こえたか、世刻がぽつりと漏らし、それに対してミゥはこくりと頷くと、

「はい。あれは乗り遅れたと言うよりも、あえて乗らなかったと言う感じでしょうか。……タリアは随分と取り乱していましたが……サレスの事ですから、何か考えがあるかと思います」

その言葉には、皆「ああ確かに」と納得したのだが。
とりあえず当分のところは、ナーヤが臨時でリーダーとして行動する事になる様だ。
……そういや旅団の副団長って、ヤツィータだよな。なんて思った所でちらりと彼女の顔を見ると、

「私は良いのよ。トップに立つより横から支える方が性に合ってるしねー」

俺の視線に気付いたのか苦笑を浮かべてそう言った。
ん。まあその辺の事は彼女等の中で既に話はついてる事だろうから、良いんだが。
そうこうしているうちに、段々と学園が……否、ものべー自体が、か。揺れ出した。窓の外から見える空は、既に分枝世界外のものへと移っている。これは……。

「ふむ。次元振動じゃな。恐らくは相当揺れるぞ。皆何かに捕まっておった方が良いじゃろう」

アネリスの言葉に、皆思い思いに近くの、出来るだけしっかりとしたものに捕まった様だ。
……まあ俺は寝てるからどうしようも無いんだが。
そう思った所で、不意にユーフィーが「えいっ」と、飛びつくように覆いかぶさってきて下さいまして。

「って、どうしたいきなり？」
「えっと、あたしがこうやって抑えておいてあげますっ」

えへーっと笑いながら言うユーフィーに、思わず笑みが漏れた…

…の、だが。
それを見たワゥの目がキランと一瞬輝いた様に見えた、次の瞬間である。

「ボクもー！」
「ちょっ……げふっ！」
「ワゥー！　祐さんは動けないんだから、そんな勢い良く飛びついたらダメー！」

ちょっと待てと言う言葉を発するより早く、てりゃーっと、ダイブする様なワゥの一撃が直撃した。鳩尾に。
そんな喧々囂々とした中、世刻が苦笑しながら立ち上がったのが見えて、

「ちょっと皆の様子を見て来るんで、希美をお願いします」

そう言って保健室を出て行った。
そのしばし後だ、それまでの比じゃない揺れが襲ったのは。

…
……
……

余りの揺れに、どうやら意識を失っていたらしい。
頭を振りつつ周囲の様子を見れば、辺りは物が散乱し、えらい有様になっていた。
……どうやら、他の皆も気を失っている様である。とはいえ、皆も今しがた意識を取り戻したらしい。酷い揺れだったから、身体の

どこかを打ちつけたか、所々から「うん……」と、呻き声が聴こえる。

……それにしても……いくら酷い揺れだったとは言え、全員が全員意識を失い、丁度タイミングよく眼を覚ます？　……余りにも出来すぎだろう。

「む、目覚めたか。くふふっ……良う眠っておったの」

そんな声にそちらを見れば、いつの間に着替えたか、学園の制服を着たアネリスの姿。

今の口ぶりからすると、彼女は気を失ってはいなかった様で。

「全く。我等を呼び寄せるために次元振動も利用するとは……相変わらず無茶苦茶をする」

ぽつりと呟いたアネリスの言葉が耳に入り、思い至る。ああそうか、ナルカナの干渉か。

確か今回ので、世刻は夢の中でナルカナに会ったんだったか。そんな事を思いながら、いつの間にかある程度動く様になっている身体を起こし、ヤツィータの、「皆大丈夫？」という言葉に頷きながら、窓の側へ行き、外を見る。

……やっぱり。

一階にある保健室からは然程良くは見えないが、それでも解る、見慣れた様な、そして懐かしい様な気持ちを感じさせる町並み。

“普通の”住宅があり、“普通の”ビルがあり、“普通に”車が走り、“普通に”人々が歩く。

そう、それは、俺達にとっての普通。

そう、まるで、『元々の世界』の様な。

だからだろうか。学校から飛び出して、ものべーの外へ出て行った生徒の一団が居た。

……流石に危険はない……だろうけど。

「気持ちは解りますが、もう少し慎重に動いて欲しいものです」

耳元で、肩に乗ったナナシの声が聴こえ、それに苦笑しつつ「仕方ないさ」と返したところで、これからの事を話したいから、とナーヤが呼びに着たため、未だ意識を失ったままの永峰と、彼女の様子を見ているヤツィータを残して、生徒会室へ向かう事となった。

……。

生徒会室に集まって、少ししてから世刻が来たのだが、会議自体は直ぐに終わった。

先程ものべーの外へ出て行った生徒の一団。彼等が戻るまではとりあえず待機し、その後この世界が『元々の世界』でないのならば、改めて神剣使いのみで探索しよう、と言う事だ。

とは言え皆には、ここが恐らく『元々の世界』では無い事は、ものべーをこの世界に呼び寄せる様に干渉してくる力を、アネリスが感じた、と理由付けて伝えたが。

その際に世刻が、「……ナルカナ？」と呟いていたのが聴こえた。やはり夢の中で彼女と逢ったらしいな。とは言え本人は、なぜナルカナの事が浮かんだのか、自分でも良く解らない、と言った顔をしていたが。

その後、とりあえずこの場は解散となり、皆と共に食堂へ向かおうとした所で、アネリスに「話がある」と呼び止められ、屋上へ向かった。

……

……

……

フィアとナナシ、レーメ、そしてアネリス。
そのアネリスに言われ、真実『身内だけ』を伴い、屋上へ上がる。
屋上からだと良く見える、現代日本の街並み。
今の“俺”が産まれた『元々の世界』ではないけれど、それでもやはり懐かしい。
ひとしきり景色を眺めた後、改めてアネリスに向き直った。

「それで、話ってのは？」
「うむ。まずはぬしの『腕』のことじゃ」

彼女の言葉に、包帯が巻かれた自分の『左腕』を見る。
改めて言うって事は、間違いなくこれのことだろう。

「祐よ、今現在でぬしが自由に動かせる『観望』は、その『腕』にしておる分のみであろう？」

アネリスの問に頷く。
そう。あの時のイャガとの戦いで、『観望』は俺の全身に同化するように散らばり、かつ、イャガの攻撃によって『観望』を構成していた群体の多くが『喰われた』ために、今俺が武器にしたり等、自由に形を変えられるのは、この『左腕』にしている分のみだ。
つまり、神剣を『武器』として使うためには、この腕の形態を解かねばならないのだが……。

「ふむ、祐よ。その『左腕』は、決してその形を崩すでないぞ？」

彼女の言葉に、俺も、側で話を聴いていたフィア達もまた、何故？　と疑問の表情を浮かべる。

しかし、次いでアネリスから発せられた言葉は、俺達の予想の斜め上だった。

「『理想幹』より脱出する際にぬしの腕に触れて解ったのじゃが、その『腕』。根元……肩口の辺りから、少しずつぬしの身体と同化していっておる。このままその状態を続ければ、そう遠くないうちにその『左腕』は、真実ぬしの左腕となるじゃろう」

その彼女の言葉に、思わず「は？」と間の抜けた声が漏れた。

そんな俺の様子に、アネリスはくつくつと笑いながら、言葉を続ける。

「それもこれも、ぬしが『マナ存在』であるが故、じゃな。とは言え、本来であれば、神剣への依存度の低い四位以下の神剣使いでは、四肢を失おうものであれば、そうそう元に戻すなどはできぬのじゃがな。其れも此れも、今現在の『観望』とぬしの関係……全身に『観望』が同化する様に散っていると言う状態が齎した奇跡とでも言うものか」

「……どう言う事だ？」

「ふむ。……そうよな……マナ存在とは、その身体をマナによって構成されているモノを言う。とは言え、ぬし等の様な神剣使いでは、失われた四肢をマナで構築する、などと言った修復の仕方は出来ぬのじゃ。……詳しい理由等は知らぬ。恐らくは、通常の肉体から変異したマナ存在である、と言うのが大きいのじゃとは思うが。これが、例えばミニオンの様な一からマナで創られた様な存在や、より神剣やマナと繋がりの深いエターナルならば話は別であるがの」

そこで一度言葉を区切り、「此処までは良いか？」と問いかけてくるアネリスへ頷くと、彼女は言葉を続ける。

「対して、現在のぬしの状態であるが……此処で鍵となるは、やはり『観望』じゃ。現在主の身体を……否、細胞を構成するマナの中には、それこそ全身に『観望』が、ほぼ同化する様な状態で入り混じっておる。そこに繋げられた、『観望』によって創られた左腕。……もう解るであろ？　そう、ぬしの身体が、全身に散らばる『観望』を己が一部と認識している様に、その『左腕』もまた、己が一部と認識し、それに伴ってぬしの『左腕』を構成する『観望』が、徐々に、じゃが確実に、ぬしの肉体を構成するマナへと変質していっておる」

「故に、その『左腕』は崩すなよ？」そう続けるアネリスへ「解った」と返し、想いを馳せる。

共に戦い、そして俺の命を救ってくれて。今も尚、共に在り、俺を助けてくれている相棒に、感謝を。

ふと気付くと、アネリスが凄く……何と言うか、優しげな微笑を浮かべていた。

「どうしたのか」と訊ねると、自分の生み出した『観望』が示した、その誇り有る意志が嬉しいのだと言う。

しばし後、アネリスは一瞬瞠目した後、真剣な面持ちで、俺の眼を見据えて来た。

「さて、祐。汝に問う。……妾と契約する意志は、在るか――？」

永遠神剣之章：８４．契ること、誓うこと。

「さて、祐。汝に問う。……妾と契約する意志は、在るか――？」

ひたと眼を見据えられて問われた言葉。

……解っているんだ。アネリスと契約しない限り、最早俺にはまともに戦う術は無い、ってことは。

アーツや魔法では決定力に欠ける。ミニオンが相手ならば良い。けど……そう、動向の見えないスールードや、まして……イャガが相手であれば、尚更。

いや、本来であれば、『理想幹』から脱出する際に契約して、もっと確実に『障壁』を打ち壊すべきだったんだろう。

だけど。

そう、只一つの懸念が、俺の心を縛る。

そんな俺の心境を見通したかの様に、不意にアネリスが、その表情をふっと和らげた。

「……ぬしが不安に思う事は、解っておる心算じゃ。其れ故に、此の場に其の者――フィアも呼んだのだからのぅ」

そう言って、アネリスはその視線をフィアへと向ける。

「では質問じゃ。フィアよ、ぬしとナナシ、そしてレーメ。ぬし等には“渡り”の影響は有ると思うか？」

アネリスの口から出た問い。

……そう、これが俺の“懸念”。訊かねばと思いつつも、訊けなかった問い。

フィアとナナシ、レーメの三人は、――今はそれにアネリスも加

わったけれど――俺がこの「永遠神剣の世界」を出て行く時にも、確実に着いて来てくれるメンバーであるが故に、そんな彼女達に忘れられたらと、それが気がかりだった。

けれど、フィアの口から出てきたのは、

「……いえ、私達は、恐らく影響を受ける事はないでしょう」

そんな否定の言葉だった。

フィアはにこりと微笑むと、言葉を続ける。

「……ナナシやレーメは、言うなればご主人様の“魂”と結びついた使い魔の様な存在ですし、私の場合は、そもそも最初からこの「永遠神剣の世界」の理（ことわり）の“外”にある存在ですから

もちろん絶対にとは言い切れませんけど。と続けて締めたフィアの言葉に、アネリスは安心半分、満足半分と言った様子で「うむ」と頷くと、再びその視線を俺に向ける。

さあどうすると、その視線が問いかけてくる。

……けど何と言うか、ここまでお膳立てされたら答えは一つしかないよなぁ。

正直言えば、エターナルであるユーフィーを除く他の皆から忘れられる事は、辛いし怖い。けどそれは、言ってしまえば“想定された”未来だから。最初から、そう言うものだと覚悟は出来ていた。

そう、俺は、いつかユーフィーと話をした時に、いずれエターナルになるであろう事は覚悟していたんだ。……にもかかわらず、土壇場になってフィア達の事が引っ掛かって躊躇ってしまったのは……甘え、なんだろうな。

けどそれも、背中を押されてしまった……否、押してもらった。

ならば俺は、それに応えねばならないだろう。

……うん。

だから、決めた。
確りと、アネリスの眼を見つめて、俺は俺の意志を、口にする。
「アネリス。俺は、君と、契約を望む。俺は君に、いつかの約束を果たし数多の“世界”を見せよう」
――だから俺に、力をくれ。護りたいものを護れるだけの、力を。
「……良かろう。此の契約を持ちて、妾はぬしが力と為り、ぬしは妾の半身と為る――」
その言葉と共にキンッと光を発し、アネリスの姿が光に包まれた。
眩さに一瞬目を閉じ、再び開いたそこに在るは――純白の地に、黒のラインで紋様が描かれた、美しい一振りの、鞘。
抜き放ち、振るう為の刃は無い。本来であれば、『刃』の納められていない『鞘』だけの存在など、頼りない所の話では無いだろう。
けれど、“これ”は違う。寧ろこのままで在るのが正しいものであるかのような、強烈な存在感。感じるマナは強く、優しく、そして気高く。
「これが――」
＜そう、これが、妾じゃ。さあ――妾を手に取るがよい――＞
“声”が響く。
それに導かれるように、俺は、目の前の“彼女”を手にする。
瞬間――力が――溢れるほどの力が、俺の中を満たし、“俺”と言う存在そのものを創り変えていく。
俺と言う存在を、全てを、何もかもを創り変え、“世界”から切り離し、そして俺は“俺”と言うたった一つの“全”となる。

＜解るか、ユウ？　わが主よ＞

『調和』の――アネリスの問いに、頷いて返す。良く理解（わか）る。これが、第一位神剣の力。これが、“生まれ変わった”俺――。

――永遠にも似た数瞬の後、知らず閉じていた眼を開いた。

＜今の妾は永き封印から解かれたばかり故に、大した力を振るう事はできぬ。とは言え、妾の“能力”とぬしの力を上手く使えば撃ち破れぬモノなど在りはせぬ。……さて、此れから幾久しく、宜しく頼むぞ。妾を上手く使ってみせるように、のう？　我が主様（あるじさま）。＞

「ああ。俺の方こそ頼りないだろうが、よろしく頼むよ」

そう返した所で、手の中の『調和』が再び光を発し、ふわりと浮き上がる様に俺の手の中から抜け出て、次いでその姿を再び「アネリス」へと変え、目の前に降り立った。

その時、屋上の出入り口の辺りに感じる気配。

振り向き、視線を送ったのと同じくして、扉が勢い良く開き、旅団の皆が駆け出てきた。

何かあったのかと思った所で、俺達の姿を眼に留めたナーヤが、声を上げる。

「ゆ、祐か！　今ここに強烈な神剣反応があったが、何があった！？」

その言葉で、皆が慌てて此処に来た理由が解った。

アネリスがその姿を現した時、その時に発した強烈な気配を皆も感じてここに来たのか。

そんな皆へ落ち着く様に宥め、

「アネリスと……『調和』と契約した。今の気配はその時のだよ」

そう告げると、驚きつつもなるほど、と納得する皆。
思ったよりもアッサリ納得したのは、『理想幹』突入前のブリーフィングで俺が言った、彼女が強い力を持つ神剣ってのを覚えていたのだろうか。

「へぇ……アネリスって、本当に神剣だったんだ」

ルプトナの漏らしたそんな感想が聴こえ、確かに見た目は黒ユーフィーだからな、と苦笑したところで、そのユーフィーの、「え……」と言う、どこか呆然とした様な声が、耳に入った。

「そ、そんな！　何でですか！　何でそんなこと……！」

声を荒げながら、ぶつかるように駆け寄って来たユーフィー。俺の顔を見上げる彼女の視線は、驚愕と、悲しみが篭められていて。
……旅団のメンバーの中では只一人、彼女だけが、俺が此の道を選ぶ事の意味を解っているから。
その視線の中に、俺のことを案じてくれている想いがひしひしと感じられて、済まなく思いながらも、嬉しく思ってしまう。
他の皆は、ユーフィーの態度の意味が解らず、驚いたように固まっていたので、此処は大丈夫だから戻ってて、と手振りで簡単にだがメッセージを送っておく。……エターナルと言う存在はともかく、その特性なんてのは、今はまだ知らなくて良いだろう。話せばきっと、大なり小なり彼等の心に負担をかけるだろうから。だってそうだろう？　『いずれ確実に忘れ去る相手』と、普通に接しなければいけないんだから。
平時ならばまだ良かったかもしれない。けど、今は斑鳩の事やサレスの事等、気にしなければいけない事が沢山在るから。
其れが通じたか雰囲気を察したか、ナーヤが皆を促して屋上を後

にしていくのを視界の端に捕らえつつ、ユーフィーへ声を掛ける。

「ユーフィー、有難う。けど、良いんだ。このまま何もせずに時間が経って、それで何かあったら、俺は絶対に後悔するから」

「でも！　……“こっち”に足を踏み入れるって事は、全部……全部断ち切るって事なんですよ！？」

「解ってる。けど……自分の力が無いばかりに、皆を傷つけるのは、嫌だからさ。それに……“全部”じゃないよ」

今にも、ナニカが零れ落ちそうな彼女の頭に手をやってそう言うと、え？　っと言う顔を浮かべる。

「俺の周りにはそれでも共に居てくれるヒトがいる。フィアが、ナナシが、レーメが、アネリスが。それに……ユーフィー、君だって、俺の事は覚えていてくれるだろう？」

「でも……でも！」

他は全部、なくなってしまう。

そう言いたげな彼女に思わず苦笑が漏れて、くしゃくしゃと、少し乱暴に撫でてやる。

「ユーフィー、いつか君に“思い出”を作った様に、俺も“ここ”で過ごした思い出がある。例え将来、全て無くなったとしてもさ。だから、大丈夫」

それに、それは別に今すぐに、じゃない。少なくとも、この『時間樹』での事が片付くまでは大丈夫だしな。

そう続けると、ユーフィーはもう何も言わずに、俯いて。ただ――彼女の真下の地面に、数滴の雫が落ちただけ。

「祐……全て無くなるとはどう言うことだ？」

聴こえた問いに、慌ててそちらを見れば、ルゥが、そしてミゥ達クリストの皆が、俺をじっと見つめていた。

……あー、戻ってなかったのか。

後ろを振り向くと、フィアとアネリス、それにフィアの両肩に移っていたナナシとレーメに、仕方ない、と頷かれた。……まあ確かに、ここまで聴かれて説明しないって訳にもいかんか。それに別に、絶対に秘密にしないといけないって訳でも……はぁ。

そして俺は、ルゥ達に説明していく。エターナルと言う存在の事を。

三位以上の神剣に認められ、契約した者は『永遠存在（エターナル）』と言う存在になること。

エターナルになった者は、その瞬間“世界”から切り離され、その名の通り寿命が無くなること。

世界から切り離されるから、“渡り”と言う行為によってその世界から外に出た瞬間、そのエターナルがその世界で行った事は、別の誰かや何かによって行われた事に置き換わり、その世界にとってその者の存在は「無かったこと」にされ、世界に存在する人たちの記憶の中からも、そのエターナルに関する事が消されること。

そして――ユーフィーがエターナルで、俺もまた先程、エターナルになったと言うこと。

……沈黙が落ちた。

ルゥ達は、正に『呆然』と……いや、『愕然』とした様子で。

「……え……？　そんな、嘘、よね？」

搾り出された様なゼゥの言葉を、俺は首を横に振って否定する。

「じゃ、じゃあ本当に……いつか、私達が……祐さん達の事を忘れてしまうって、言うんですか……？」

戸惑い気味に言われたポゥの言葉に首肯すると、「そんな……」と、呆然と、彼女は呟く。

如何程の時間が流れただろうか。

痛いほどの沈黙。一様に何かを考え込んでいるクリスト達。

そんな折、“何か”を決心した様な表情を浮かべて、ルゥが言葉を紡ぐ。

「祐……アネリス殿に……いや、第一位神剣たる『調和』に、頼みがある」

「ふむ。……申してみよ」

「……祐が使っていた『観望』を生み出したのは貴女だと聴いた。……頼む、私に、神剣を……戦う力をくれないだろうか」

一瞬の間。

「……ぬしが神剣を失った経緯は存じておる。故に良かろう、と言いたいが……“力”を得るには相応にして代価が要るものじゃ。ぬしは妾に何を差し出す？」

「私は、その力をもって、祐と共に在る事を誓う。例え何があったとしても。祐の為にその力を振るおう」

試す様に言うアネリスへ、ルゥは迷う事無く、それを口にした。

言われた俺自身、一瞬何を言われたのか解らなかったが。

だってそうだろう。さっき彼女達に説明した通り、俺と共に在るなど出来るわけが無い。そう、出来るわけが無いんだ。だって、“渡り”を行えば――。

けれど、俺が何か言う前に、ルゥが再び口を開く。

「……祐。きみがエターナルであるとか、きみの事を忘れてしまうだとか、そんな事はどうだっていい。私は――私達は、きみの事を忘れない。例え忘れてしまったとしても、絶対に思い出す。――私は、きみの側で、きみと共に戦いたい。私は、きみの側に在りたい――」

「けどっ……」

それでも、無理なものは無理だ、そう言おうとした俺の言葉を遮る様に、そっと右腕を掴まれて、そちらを向けば、ユーフィーが苦笑しながら小さく首を横に振った。

「ダメですよ、祐兄さん。今のルゥちゃんは、あの時――『未来の世界』でルゥさんと同じ事をあたしに言った、祐兄さんと同じ顔してますから」

そんなユーフィーの言葉に、俺が反論も出来なく口を噤んだその時、此の場にアネリスの愉しげな声が響いた。

「く……くふふふ……ふふふはははは！！　いや、形無しじゃな、我が主様よ。それにしても面白い。妾ではなく祐の為に、か。――良かろう。ルゥよ、ぬしに、妾からの贈り物じゃ」

その言葉と共に、アネリは俺へ向き直ると、そっと手を翳した。

「祐、動くなよ？　ぬしの中から『夢氷』を抜き出すゆえにな」

次いで俺の中から、暖かいモノが出て行く感覚と共に、光の珠がアネリスの手の中に現れる。

あれが――『夢氷』の欠片。

「今の妾に、一から神剣を生み出すほどの力は無い。永らく封印されていた故に、力が戻っておらぬ。故に、この『夢氷』の欠片を“核”にして神剣を構築する」

そう言いつつ、『夢氷』へとマナを篭めていくアネリス。

そして、『夢氷』の欠片が大きく光を放ち、その次の瞬間――アネリスの手の中には、『夢氷』に良く似た一振りの大剣が握られていた。

アネリスはそれをルゥへと差し出し、

「これは第五位の永遠神剣『凍土』。さあ、受け取るが良い、ルゥよ」

「……有難う。……『凍土』……これから、よろしく頼む」

ぽつりとその名を呟きながら、そっと、優しく刀身を撫でるルゥの表情は凄く優しげで。

そんなルゥを満足げに見ていたアネリスは、彼女に向かって言葉を掛ける。

「ルゥよ、覚えておくがよい。想いの強さは力を齎（もたら）し、願いの力は奇跡を齎す。もしもぬしが先の言葉を違う事無く貫くのであれば――何（いず）れ、凍れる大地にも華が咲こう」

「……それは……？」

「なに、何れ解る。言うた様に、ぬしがこれから先も祐の為に在るのであれば、な」

どう言う意味だと疑問を浮かべるルゥへ、アネリスはくふふと愉しそうに笑いながら告げる。

対して俺も、今のアネリスの言葉を考えていたところ、そのアネ

リスが不意に俺の背中を入り口に向けて軽く押してきた。

「祐よ、妾は少々ミゥ達に話が在る故に、先に下に戻っておるがよい」

一体なんだと言うより早く言われ、それに答える前に「まあまあご主人様」とフィアに右手を、「さ、行きましょう」とユーフィーに左手を引かれて連行される俺。何なんだおい。

「祐さん。……私達も、ルゥと同じです。貴方の事を忘れたくも、忘れるつもりも無いですから――」

屋上から出る直前――背中からそんな声が聴こえて。

……強いな、皆。

そう思う俺の顔を見たフィアに、くすりと笑われた。……何だよ?

「いえ。……嬉しそうな顔、してましたから」

……そうかい。

永遠神剣之章：８５．おかえり、ありがとう。

屋上を半ば追いやられる様に後にした俺の前には今、ナーヤとエヴォリアが居る。と言うのもまあ、屋上に続く階段を降りたところで、彼女達が待っていたからなんだが。
用件は……予想は付く。先程の屋上での件だろう。

「……って言うか、エヴォリア乗ってたんだな」
「ええ。だってあの状況から単独での脱出は流石に無理だもの。次元振動も酷かったしね。……とは言え、ベルバが居てくれているとは言っても妹が心配だから、明日にはお暇させてもらうけれどね」

なるほど。と思いつつ、聴けば先程も、皆の一番後ろから様子を覗いていたらしい。
いやまあこの際それはいい。それよりも、だ。

「……何故に制服？」

そう。エヴォリアは何故か学園の制服を着ているんだ。
俺の問いに、「何を言ってるのよ？」と小首を傾げる彼女。いやまあ別に問題は無いんだけれど。

「集団の中に居る以上、下手に目立たない様にするのは当然じゃない。それとも……似合ってないかしら？」
「あー、いや、思った以上に似合っていて正直驚いている」

スカートを軽く摘みながらそんな事を言うエヴォリアさん。これはレアな光景ではないだろうか。何気に順応してるなぁ
って言うか、その短いスカートでそう言う事をするんじゃない。

（……そう思うんでしたら、視線をそこから外してください）

そんなフィアの念話が飛んできた。

そうは言っても仕方が無いじゃないかって思った所で、

（ユウ、左を見てみろ）

そんなレーメからの念話。

それに応じてちらりと左を見てみれば……むぅっと、何処と無く不機嫌そうに、ぎゅっと、俺の腕を抱き締める、ユーフィー。

……とりあえず話題を変えたほうが良いような気がする。

「ごほんっ。……えーと……それで、二人がここに居るのは……屋上での事か？」

そう問うと、くくっと笑いを堪えながら、こくりと頷くナーヤ。

ふむ、と唸る俺に対し、彼女はちらりと、俺の右腕を掴むユーフィーへ視線を一瞬向け、

「……今は落ち着いておる様じゃが、先程のユーフォリアの様子は明らかにおかしかったのでな。……サレス不在の今、代わりに旅団を預かる身としては、出来れば事情を知っておきたいのじゃ」

……まいったな。そう言われてしまっては、無碍には出来ないじゃないか。……まぁ、仕方ないか。

で、エヴォリアは？　と視線を向けると、「気になったから」と言うお言葉。歯に衣着せぬ言い方に苦笑しつつ、まあ良いかと思いながら、二人へ先程ミゥ達にしたのと同じ説明をしていく。

案の定と言うかなんと言うか、話が進むうちに彼女達の表情は、

段々と険しくなっていくのがよく解った。

「……なるほど……確かに現状の余裕の無さを考えれば……伏せておいて正解、じゃな」

「まあ、絶対に秘密って訳じゃないから、ナーヤが必要だと思うんなら皆に話してくれて構わないけど」

そう言うと彼女は、「まったく……わらわに丸投げするでないわ」と苦笑いを浮かべつつ返してくる。

対してエヴォリアの表情は硬いままで、

「つまりは、私に関しての事も、貴方じゃなく“別の誰か”によって行われたって事になるのよね？　……冗談じゃないわ」

「そうは言っても、もうどうしようも無いのじゃろう？」

ナーヤの問いに首肯すると、エヴォリアは「気に入らないわね」と一言。

ナーヤはそれに苦笑しつつも「仕方が無かろう」と宥める。

「まあ良い、心に留めておこう」

「……悪いな、二人とも」

「うむ。それはそうと祐。先程街に出ていた学生達が戻ってきてな。やはり、この世界はおぬしらの世界では無い様じゃ」

話題を変える様に切り出してきたナーヤの言葉に、やっぱりかと頷く。

どうやら他の皆も、俺が事前に『元々の世界』ではないと言っておいたお陰か、動揺は少なかった様だが。

「それでな。のぞむが言うには、のぞむが“夢”の中で逢った『ナ

ルカナ』と言う人物が、この世界でのぞむを待っていて、その『ナルカナ』に逢えば事態が何がしか動くはず、と言うのじゃ。よって、明日より神剣使い達で、手分けしてこの世界の様子見と、件の『ナルカナ』を捜すことにした」

「そうか……うん、わかった」

ナーヤの言葉を聞いて、やっぱり、世刻はナルカナと逢っていたかと思いつつ頷いて返す。

それを受けて、ナーヤは「うむ、よろしく頼む」と言いながら、エヴォリアは「少し考えを整理してくるわ」とこの場を後にし、それと入れ替わる様に、屋上からアネリスが一人降りてきた。

「む……なんじゃ、まだ此処に居ったのか？」

「ん、ああ。ナーヤとエヴォリアが居てさ。少し話してたんだ」

その一言で大体察したか、「成程」と一言呟いて頷くアネリス。

そんな彼女のにミゥ達の事を訊くと、彼女達だけで話したいとの事で先に降りてきたらしい。

「まあ、とりあえず食事でもしてはどうかの？」

アネリスに促され、そうだな、と、遅めの昼食を取るために食堂へ向かう。

ちらりと、屋上へと向かう階段を振り返り……彼女達に掛けられた言葉が、その表情が、心に過ぎる。嬉しくもあり、哀しくもあって。

そう……俺が思って良い様な事では無いのかもしれないけれど……願わくば、彼女達が進む道が、辿り着く未来が、幸せなものでありますように。

……

……

……

昼食を取った後、俺達は久々に――アネリスとユーフィーは初めてだが――『箱舟』の中へ入っていた。二つ程確認しておきたい事が有ったからだ。

「ふむ……随分と澄んだマナが満ちておるの」

「本当に……あ、でもこのマナ、何処かで感じた事が……」

そう言うユーフィーへ「そりゃそうだ」と言うと、きょとんとした顔を向けて来たので、クリストの皆の事を教えてやり、ユーフィーが覚えがあるのは、彼女達の身体を取り巻くマナだな、と言うと「あぁ、そっか！」と声を上げた。

「それにしても……久しぶりに入ったな」

「仕方が無いかと。こういった集団生活の中で、そうそう頻繁に此処に入って姿を眩ますと言う訳にも行きませんから」

そんな会話をしつつ、入った直後に出る小さな小部屋から廊下を通り、洋館の前に広がる前庭へ出る。

「さてユウよ。確認したい事とは何かの？　まあ一つは、妾の“能力”であろうが」

向かい合って立った所でそう問いかけてくるアネリスに首肯する。

そう、一つはアネリスの……『調和』の所有者となった事によっ

て、俺が出来る事について。まあ要するに、今後の戦闘方法、だな。
今までの様に『観望』を使えない以上は、新たな戦い方を模索しなければいけないんだから、当然だろう。とは言えそれはまあ後で良い。今俺が一番確かめたいのは――。

「神獣……ノーマの事がどうなっちまったか確かめたい。『観望』がこんな事になってから、気が付いてすぐ理想幹に行ったりで、確認する時間が取れなかったからな。とは言え、『観望』本体に意志と呼べるものが無くなってしまったから……」

「ふむ。神獣事態が消えて無くなって居ればまだマシ。最悪神獣の方も本体のそれに準じて、呼び出したは良いが暴走して居る可能性が有る……と言う事じゃな？　それ故に、態々此処に――他人の居ない場所へ来た、と」

アネリスの言葉に、その通りと頷くと、彼女はふっと、柔らかな笑みを浮かべる。

「心得た。安心せよ。もしもの時は、確りと妾が制御してやるからの」

「ありがとう……それと、よろしく頼む」

俺の言葉に「気にするでない」と返してきたアネリスの声を聴きつつ、意識を己の内へと埋没させる。
初めてノーマを呼び出した時の様に、慎重に、ゆっくりと、精神を統一させていく。
その内――俺の前方、俺とアネリスの間の空間に、マナが集まって行くのが感じられ、そしてそれは、一つの形を成す。
そこに現れる、双尾の雪豹。

「ほぅ……これが『観望』の神獣、か」

ぽつりと漏らしたアネリスの言葉が耳に届く。
ノーマが無事にその姿を現してくれた事にほっとしつつ、その動向を見つめていると、ノーマはその場から動く事無く、じっと俺の顔を見つめている。
余りに動かない為に、一瞬――『観望』から意志が消えてしまったために、ノーマの中に暴走する様な“精神”それ自体が無くなってしまったのかと、そんな考えが頭を過ぎった、その時。

「……グル……」

小さく唸り声を上げたノーマは、ゆっくりと俺の元へと近づいてきて。
その様子に、アネリスが少し身構えるのが視界に入り、小さく首を横に振って、「まだ大丈夫」と制止する。
俺の直ぐ側まで来たノーマは、小さくその喉を鳴らし――そっと、俺の身体へ、その頭を擦り付けてきた。
その瞬間、トクリと、俺の全身に広がる『観望』が、静かに脈動したのを感じて。
ああそうかと――理解した。
『観望』は『観望』であり、『ノーマ』は『ノーマ』。されど、『ノーマ』もまた『観望』でもあるのだと。

――……我が意思は変わらず我が内に有り。……ふむ、どうやら我の意思と神獣との共存は出来たようだな。いや、その神獣もまた我であるのは変わりないのだが。……面白いものだ。

初めてノーマを呼び出したその時、『観望』が言っていた言葉が思い出され――。

「……そうか。『観望（おまえ）』はここに居たんだな……」

そんな言葉が、自然と口を突いて出た。

言ってしまえば、呆れる程にご都合主義な、そんな展開。……だけど……今はそれがひどく心地よい。

甘える様に摺り寄せてくるノーマの頭を撫でながら、俺はそんな想いに心を馳せた。

永遠神剣之章：８６．探索初日、思わぬ展開。

明けて翌日。
昨日はノーマの確認をした後、アネリスの……と言うか、アネリスの所持者となった俺の能力の確認を行った。
感想としてはまぁ……上手く俺に使いこなせるかなぁ……と言う感じか。いや、使いこなさないといけないんだよな。弱気になるな。……頑張ろう。
それはそれとして。
フィアとアネリスと共に食堂へ向かい、そこで朝食を取っていると、ユーフィーと、次いでミゥ達が俺の近くへ腰を降ろした。
「おはよう」とそれぞれに挨拶を交わした所で、「あの」と、ミゥとユーフィーに同時に声を掛けられた。

「あ……お先にどうぞ」
「いえ、そんな。ミゥちゃんから……」

そんな二人の様子を眺めていると、「一緒に外を見に行きませんか？」と、再び異口同音に声を掛けられた。
一瞬きょとんとした後、顔を見合わせてくすくすと笑い合うミゥ達。
――いずれ必ず、俺達の事は記憶から消え去る。そんな説明をした翌日とは思えない、和やかな雰囲気。
変わらず接してくれるミゥ達に内心感謝しつつ、そんな彼女達に是と返事を返した処で――ざわりと、周囲から感じる視線に殺気が混じる。

「くふふふ……いや何とも、人気者じゃな、主様」

それを感じたか、愉しげに笑いながらそう言いつつ、おもむろに、まるで周囲に見せ付ける様にしな垂れかかってくるアネリス。……マジで勘弁してくれ。

ああほら。案の定感じる殺気が膨れ上がった。

その視線に、昨日初めてアネリスを連れて食堂へ入った時の事がまざまざと思い出された。

……皆まで言わずとも解るだろ？　学内でフィアが俺の側に居るのは何時もの事で、まあユーフィーも、何だかんだで一緒に居る事が多く、彼女が俺を『兄さん』と呼んでくれてるのもまぁ……最近は大分慣れたんだ。“俺”じゃなく、“周囲”が。けど、そこにアネリス。

そう、未だ「妹にしたいランキングナンバー1」をキープしているユーフィーに瓜二つな彼女居たからさあ大変。

大いにざわつく食堂内。そんな中、一人の生徒――まあ俺の同級生なんだが――が、果敢にも質問してきた。来なくていいのに。

「お、おい青道、そのユーフォリアちゃんそっくりな子は誰なんだ？　ユーフォリアちゃんのお姉ちゃんか？」

まあ確かに、アネリスの醸し出す雰囲気から察すれば、ユーフィーの姉と見ても可笑しな事はないけれど。

そう言えば、アネリスがこの姿をしている事に対して、意外にもユーフィーは特に不満は無い様子で。

ユーフィーが言うには、「何となく、アネリスさんなら良いかなって思いまして。その……自分でも不思議なんですけど、余り違和感を感じないんですよ」との事。アネリスの母たる『調律』の転生体なだけに、アネリスとは相性が良いのかもしれないな。

ふとそんな事を思ってしまったばかりに、掛けられた問いに対して俺が答えるよりも早く、アネリスが自ら答えてしまった。答えなくていいのに。

「ふむ……妾の名はアネリスと言う。永らく閉じ込められて居た処を主様に助けて頂き、“主様のモノ”と成ったのじゃ。以後宜しくの」

くふふと笑いながらそう言って――あの時は左右にフィアとユーフィーが座っていたから――後ろから抱き着いてきやがりましたこの人。

“祐”じゃなく“主様”なんていいやがったり、顔の直ぐ横にある表情が何とも言いがたい位に愉しそうなものだったりする辺り確信犯だなこのヤロウ。そう思った矢先、アネリスの言葉を聞き、その行動を見た皆から上がったどよめき。

その後はもう言わずもがな、食堂……っていうか俺の周囲は阿鼻叫喚の坩堝と化した。……ああ、思い出したくない。

「……さん……祐さんっ！　えっと……大丈夫……ですか？」

「へ？　あ、ああ。大丈夫」

ミゥに掛けられた声で我に返り、軽く周囲を見回してみると、何故か皆苦笑いを浮かべていて。

どうしたんだ一体、って思ったところで、

「あー……うむ、少々調子に乗り過ぎた様じゃ。済まぬ」

アネリスに神妙な顔で謝られた。……何なんだ一体。

そんなやり取りをしていると、ふと世刻が後ろに永峰を連れて入ってくるのが見えた。

そうそう、永峰はちゃんと目を覚ました……のだけれど、常にぼんやりとした感じで、話しかけても録に返事もせず、じっとこちら

を見つめてきたり、そもそも反応が無かったりと、とてもすごく様子がおかしく、世刻達は当初は酷く混乱していた。

これはまあ、今現在彼女の身体を動かしているのが、『永峰希美』ではなく、前世の意識である『ファイム』だからなのだけれど。

どうもファイムは世刻……と言うか、ジルオルと言うかに懐いているのか、ずっと世刻の後ろをまるで子ガモの様に着いて歩いている。

話に聞くに、シャワーを浴びようとした世刻に着いて、脱衣室まで突入したと言う話だ。

ちなみに、今の永峰がファイムだって言う事は伝えていない。いやまあ別に態と伝えていない訳じゃなく、教えるのをすっかり忘れていただけなんだけれど。

そうこうしているうちに、食堂に入ってきた世刻は、真っ直ぐにこちら――旅団メンバーの固まっている一角へ来ると、懐から一通の手紙らしきものを取り出しつつ、口を開いた。

彼によると、どうやら昨夜も夢の中で『ナルカナ』に逢ったらしく、早く逢いに来いと急かされたそうだ。

そして眼が覚めた時、自室の机の上に、今手に持っている手紙――『永峰希美』からの手紙を見つけたという。

手紙には、自分の身体の主導権は今、ファイムが握っている事。とは言え、皆が話しかけてくれたこととか、ファイムが見聞きした事は全部永峰にも届いている事。この手紙は、深夜に少しだけ身体の主導権が戻った時に書いた事……それに、世刻の事を心配するような事が書かれていたそうだ。

それを聴いて、早くナルカナを見つけて、永峰を元にもどして、斑鳩とサレスを迎えにいこうと、皆のやる気も存分に上がった様である。

そんな様子を見ながら朝食を終えた後、外へ繰り出すために集まった校門前。世刻達は既に町へと向かっており、今此処にいるのは

俺とフィア、アネリス、ユーフィー、クリストの皆、そして――

「んで、何故エヴォリアも居る？」

そう、何故かエヴォリア。

俺の問いに、彼女はきょとんとした顔で見返して来て。

「帰る前に、故郷の妹に土産話でも、と思って……ダメかしら？」

そう言いつつ俺の前に移動すると、おもむろに俺の右手を両手で包み込む様に取って胸元へ持っていくエヴォリアさん。“ふわり”と言うか“ふかっ”と言うか、そんな感触が伝わってきて実に素晴らしい。とてもすごくやわらかいです。

「いやダメじゃないっていてててててっ」

不意に両耳を思い切り引っ張られた。

これから街に出るからって、姿を消していたナナシとレーメにやられたらしい。

仕方ないじゃないか。俺も男だ、嬉しいものは嬉しい。

「……むぅ」

「まったく……きみと言うやつは……はぁ……やはり大……良い……ろうか……？」

「いやぁ……うん、つい。ごめんなさい」

とは言え、ユーフィーに可愛らしく睨まれてた上にルゥにこう憮然とした様子で言われては、思わず謝ってしまうのも仕方ない……よな。

……後半はいまいち聞き取れなかったが……うん、訊き返さない方が良いだろう。そんな気がする。

「ところで、祐兄さんには何かアテがあるんですか？」

気を取り直して出発しようかと思った矢先、ユーフィーからそんな疑問が上がった。

それを聴いてあれ？　っと思った所で、そうか、知らないのかと思い至る。

だから、ユーフィーに向き直り、「もちろんあるぞ」と頷きつつ、きっと驚くだろうな、なんて思いながらソレを訊いてみた。

まあこれを聴けば、彼女も俺の「アテ」が何か思いつくだろうけど。

「なあユーフィー。『ハイペリア』って、知ってる？」

その瞬間、「え？」と固まり――

「えええええええ！？」

想像以上に盛大に驚いてくれて、思わず小さく噴出してしまった。

他の皆は意味がわからず、推移を見守っている。

「あの、あのあのっ！　それって、ここ……ここがそうなんですか！？」

息せき切って訊ねてくる彼女に苦笑しつつ、「ああ、そうだよ」と頷いてやると、ユーフィーの表情は、驚きと、嬉しさに満ちたものになって。

ダッと、直ぐ側の塀の上へ飛び乗り、『悠久』を顕現させると、

そう、まるで『悠久』に遠くが見える様に、高く掲げてみせる。……まあ、校舎に戻れば別だけど、今居る場所ではそこが一番高い場所だからな。とは言え、学園の制服でそう言う行動は……いやまあ俺達しか居ないから良い……のか？

そして、何故これほどまでにユーフィーが喜んでいるのか、誰もが良く解る言葉を嬉しそうに発した。

「ゆーくん、ほら！　ここがパパの産まれた世界なんだよ！！」

……

……

……

ものべーは今、町から少し離れた郊外の山林に隠されている。

そのものべーの直ぐ前。町に行こうと出た俺達の前に、一人の少女が立っていた。

腰の辺りまであろうか、流れる様なさらりとした銀髪の、巫女服姿の小柄な少女。

少女は俺達の姿を認めると、ちらりと一団を見渡した後、その視線を俺に向けて、ぺこりと深く頭を一度下げた。

まるで俺達が……否、俺が出てくるのを待っていたかのようにそこに居て――いや、先に世刻達が出たにも関わらず此処にいるって事は、俺を待っていた、と言うので間違いはなさそうな雰囲気だが――それを裏付けるかの様に頭を下げた少女の姿に、皆揃って俺の顔を見る。

その視線は……一言で現すならば、『誰？』だろうか。

本来なら、それは俺が知りたい……と言いたいところではあるが、残念ながら俺は彼女を『識って』いる。

そう――頭頂にその髪と同じ色の『犬耳』を生やし、腰元から、同じ毛並みの『尻尾』を生やした、銀髪の巫女。

カオス・エターナルの一員であり、ナルカナの部下である『出雲』の巫女たる、『倉橋時深（くらはしときみ）』に連なるもの。『叢雲』の欠片を持つ準エターナル。

――綺羅（きら）。

何故彼女がここにいる。今は確か、何かで怪我を負って『出雲』で療養中じゃなかったのか。いや、ここに居るって事は、それだけ回復してるって事なんだろうけど。

と言うか、そもそも――何故、俺を待っていたかの様なそぶりを見せる。

疑問が渦巻き、言葉を発する事が出来ない俺の視線を受け、綺羅はそっとその口を開いた。

「……お初にお眼に掛かります。私の名は『綺羅』。我が主、『倉橋時深』の命によりお待ちいたしておりました。宜しければご同行願います、若きエターナルよ――」

永遠神剣之章：８６．探索初日、思わぬ展開。（後書き）

７／２４　微修正

永遠神剣之章：87．綺羅と、時深。

綺羅に連れられて歩を進める俺達。
結局俺は、綺羅の申し出を受けて、倉橋時深――エターナル、時詠のトキミ――に会う事に決めた。
このタイミングで、世刻ではなく俺に接触してきた意図……恐らく、と言うか十中八九間違いなく、昨日のアネリスとの契約だろう。
あの時に漏れた、アネリスのマナ。荘厳にして威厳に満ちた、膨大なマナ。それを感知したのではないだろうか。
それにしても、とりあえずざっと名を告げる程度の自己紹介はしたが、それ以降会話も無く、周囲の空気が何となく重い。まあ無理もないかなとは思うけど。
俺としては何等問題は無い。ユーフィーも居る事だし、元々時深には会うつもりではいた。ユーフィーに言った「アテ」ってのもそれだし。
けど皆にとっては、久しぶりの新しい町にいざ行こうとした矢先、一部を除いて旅団の仲間にも言っていないのに俺をエターナルと呼ぶ、謎の犬耳巫女が現れ、会談を持ちかけてきたのだ。
ユーフィーは「倉橋時深」の名前に警戒を解いている様だが、他の皆にとっては、得体の知れない相手に出鼻を挫かれた様なもの。今現在のこの何とも形容しがたい重い雰囲気も仕方がないか。
……けどなあ。
……むぅ。
そんなことを考えながら、ぼんやりと、自分の少し前を歩く綺羅の姿をみていると、ふと、その腰元から生えた尻尾が眼に止まる。
ゆらゆら。ゆらゆら。
そんな感じでゆっくりと振られるそれ。ソレを見ていると、何と言うか、無性にある衝動に襲われる。
……いやいや、怒られるっていうか、流石にダメだろう。

……なんて思いつつも見ていると、やはりこううずうずと。時たま茂みから飛び出した木の枝やらに当たった時に、ぴくんと大きく揺れたりするんだよな。

「……えっと、綺羅さん」

「何でしょうか？」

視線だけをちらりと向けて答えてくる綺羅。

「……先に謝っておく。ごめん」

「え――？」

彼女が何か言うよりも早く、速く。俺は――

「……ていっ」

衝動に負けた。

そう、目の前で揺れる尻尾を根元の辺りから軽く掴み、そのまま先端の方へと手を滑らせながら、さわさわと。

何これすっげえ良い手触り。

さらっさらのふわっふわとでも言おうか。

「きゃぁっ！　……ん、くっ……ふぁぁあ！？」

……なんと言うか、こう何とも言えない素晴らしい声が上がった気がするが。

まあ当然と言うか、綺羅はばっと飛びのいて、俺の方を振り向きながら後ろ手に尻尾を押さえ、涙目でキッと俺を見据えてきて。

「な、何をなさるんですか！？」

「えーと、目の前で振られてたものでつい」
「つい、で人の尻尾を撫で擦らないでください！」
綺羅にそう言われ、ですよねーと思った直後、後頭部にゴンッと言う衝撃。
「ぐぉっ！　――……～～っつぅ……」
思わず前につんのめりそうになったのをたたらを踏んで堪え、頭を抑えつつ振り返ると、『悠久』を振り上げたユーフィーが。
「祐兄さん！　何やってるんですか！」
怒られた。
…
……
……
「祐さん……初対面の女の子に、あんな事したらだめですっ」
「何やってるのよ、バカじゃないの？」
「も～、ダメだよ、ユウってば！」
「祐……流石に同意も無しにあのような行為は感心しないな」
「マスター……流石にフォロー出来ません」
「まったくだ。第一あの理由は何だ、猫じゃあるまいし。バカもの」
上からポゥ、ゼゥ、ワゥ、ルゥ、ナナシ、レーメと。とまあその後、案の定と言うか、全員から怒られた訳で。ああ、エヴォリアは

そんな俺を見ながら笑ってたが。

「うちのご主人様が大変失礼致しました」
「ほら、もう……祐さんもちゃんと謝ってください」
「ごめんなさい」

フィアとミゥに促されて謝罪した俺に対して綺羅は、身長差があるために、上目遣いにむーっと睨んできたあと、散々怒られて居た光景を見ていたからか、ふとその表情を少しだけ緩め、

「……はぁ。仕方ありません。もうしないと言うのなら、特別に許してあげます」

そう言って鉾を収めてくれた。良い娘だ。
そんな彼女に「うん、もうしない」と約束すると、「解りました。……一応信じます」と返してくる。次いで、「コホン」と小さく咳払いをする綺羅。

「では行きましょう。もう直ぐそこですから」

そう言って再び歩き出した彼女に着いて行くと、隣に来たユーフィーが、おもむろに俺の右腕を抱きかかえる様に取ってくる。
いきなり何だと視線を向けると、にこりと笑みを返して来るユーフィー。

「祐兄さんがまた不届きな行動をしないように、抑えとこうと思いまして」

ユーフィーがそう言った直後、駆け寄ってきたルゥが、ユーフィーと同じように左腕を取る。

「では、私はこちらを。……ふふっ、まあ、大人しく捕まっていてくれ、祐」

そんな二人に、やれやれと溜息を吐きつつ「はいはい」と答えた所で、不意に脳裏にアネリスの声が響いた。

（くふふふっ人気者じゃな、主様）

（……どうした？）

（……流石と言えば流石じゃが、もう少しスマートに出来ぬ物かの？）

態々念話で言う事でも有るまいに、と思いつつ返した言葉に返って来たのは、そんな台詞。

やれやれ、と言った感じのアネリスへ、「さて何の事やら」と返してやる。いや、実際別に“何か”を狙った行動じゃなかったしな。うん。

（くっふふふっ……うむ、そう言う事にしておこう。まぁ……先程迄の重苦しい空気が“偶然”にも無くなったのは僥倖と言うものよな）

そう言って、もう一度愉しげに笑うアネリス。……いやほんと、いったい何のことやら、な。

……

……

……

それから歩く事しばし、綺羅に連れられて着いた場所。そこは木々の開けた、小さな広場の様な場所だった。
その広場の中央。そこには、人ひとりが通れる程度の、黒い“穴”が空間に開いていた。

「あれは……？」
「転移様の『門（ゲート）』ね」

ぽつりと漏らす様に発せられた、ルゥの疑問。それに答えた声は、エヴォリアのもの。
それに対して、綺羅はすっとその“穴”の横に並び立つと俺達に向き直り、

「はい。此れを通れば、時深様の待つ『神木神社』に行くことが出来ます」
「なるほど……ふむ。『理想幹』で祐が出した『扉』によく似ているな」

『門』の近くで観察する様に見るルゥ。そんな彼女の姿に、ミゥの「まったく、ルゥってば……」と呟きが聞こえ、視線を向けたところで眼が合って、互いに苦笑を浮かべる。

「さて、それじゃあ行きますか」

何時までもここに居ても仕方がない。そう皆に声を掛け、俺は『門』へ向けて足を踏み出した。
……さてはて、果たして鬼が出るか蛇が出るか。
――一瞬の浮遊感。
抜けた先には、開けた空間。

敷き詰められた玉砂利と、奥に見える拝殿へ続く参道。
俺に次いで出てきた皆も、ここの様子が珍しいのだろう、視線を彷徨わせている。
そしてそんな俺達の目の前に立つは、一人の巫女。
醸し出す空気は清楚にして可憐。けれどその中に、凛とした強さを併せ持つ、美しき少女。
どこかあどけなさの残る顔立ちに浮かべるは、柔らかく、優しげな微笑み。
だと言うのに、俺は背中に、冷や汗をかくのが解った。
イャガの時は、互いの実力差が“有り過ぎた”為に、完全に呑まれてある意味感覚が麻痺してしまっていたけれど――アネリスと契約した今ならば、良く解る。これが――歴戦の猛者たるエターナル。
……はてさて、その彼女が一体俺に何の用なのか。
その視線を正面から絡ませたところで彼女が口を開く。

「ようこそお越しくださいました。私の名は倉橋時深と申します。以後、お見知りおきを」

いざ、目の前にして感じる、圧倒的な存在感。
呑まれない様内心気合を入れて、静かに頭を下げる彼女へと向き直った。

「俺は、青道祐――」

永遠神剣之章：８８．混沌、迷走。

深々と下げていた頭を上げた時深が、俺の近くに居並ぶ皆を改めて見回し、きょとんとした顔でその動きを止める。その視線の先にあるのは、門（ゲート）を通った後に再び俺の右腕を抱きかかえたユーフィーと、その横に居るアネリス。

「……え……？　ユーフォリアが……二人？」

あー……やっぱりそうなるよなぁ……。

どうなってるの？　と言った表情の時深に気付いたか、ユーフィーが隣にいるアネリスへと一度視線を向け、

「あ、こちらはアネリスさんと言いまして……」

「……悠人さんったら、いつの間にもう一人……はっ！　もしかして隠し子……！？」

だが、そんなユーフィーの紹介も時深の耳には届いていないようだ。……って言うか、彼女の頭の中ではどんな事態になってるってんだろうか。いやまあ、聞こえた台詞から察するに、何だか面白い想像をしている様だが。

「あの、時深様？」

「それにしても、見れば見るほど瓜二つ……これは、実は双子だった？」

彼女の直ぐ側に駆け寄った綺羅が呼ぶが、それすら聞こえていない様子。いや何と言えば良いものか……。

「……でも最初にユーフォリアに会った時は確かに一人だったし……ええ、やはり一度問い正さねばなりませんね……！」
「あの、時深様！」
「は！　あ……あは、ゴホン、ええと、失礼しました」
更に強く綺羅に呼ばれて、漸く現実（こちら）に帰ってきてくれたらしい時深。なんだかなあ……と思わざるを得ない。
「……青道祐さん、でしたね？」
「え、あ、はい」
だが、気を取り直した様に名を呼ばれ、返事をした途端、再び高まる緊張感。
そこには、つい今しがたの緩んだ空気など既に無く。
ピリピリと――空間そのものが震える様に、肌を焼く。
「……ふむ……やはり視えません……か」
「時深様……？」
ぽつりと漏らしたその声に、隣に居た綺羅が疑問の声を上げるが、時深はそれに答える事無く、その鋭い眼差しを俺へと向けてくる。
「……青道祐。貴方は何者ですか？」
「……何者、とは？」
「……私にはある能力が備わっています。これから起こり得る出来事を視る力。……未来視。だと言うのに、貴方の未来を視る事が出来ない」
そんな事を言われても。と言うのが俺の感想に他ならない。
彼女が俺を前にして、俺の未来を見ることが出来ない理由など、

俺に判るはずも無く。
そう思った所で、

（……ふん、その様な事は考えるまでも無かろう）

脳裏に、そんなアネリスの憮然とした声が響いた。
それを聞いて悟る。なるほど、彼女か、と。

（つまりは、俺がアネリスと契約したから、時深の未来視の力が届かなくなったと？）
（うむ。如何に本来の力が出せぬとは言え、妾の歩むべく未来を視せる等……斯様な所業をそう易々とさせる訳がないじゃろうが）

「昨日感じられた膨大なマナ。それと貴方から感じられるマナが同じものである事は解っています」

時深の言葉に「はて？」と思う。
あの時のは、アネリスがその真の姿を現した為に発せられたものであるはず。それが俺から感じられるものと同じとは……。と言う事は、やはり契約によって俺とアネリス――『調和』が、深く結びついたから、だろうな。
……それにしても、この神社とものべーの間は結構な距離が開いているはず。だと言うのに個人のマナを識別できるほどだと言うのか。エターナル恐るべし。
そう思った所で、ふと時深の隣に居た綺羅と視線が合い、彼女は軽く小首を傾げる。

「……私は、鼻が利きますので」

成程。犬神故に微細なマナの“匂い”の違いを嗅ぎ別けたって事

か。

思わず「凄いな」と声に漏らしてしまい、綺羅がちょっと照れた様に頬を染める。

「ここから離れた場所だと言うのに強烈に感じた、深く、強く、激しくも優しいあの力。あれは少なくとも、ただの神剣使いが発せられる力では無い。そう……ともすれば私達の『主』にすら並ぶのではとも思わせる様な力など、です。それゆえに……その強い力を貴方がどう振るうのか。それを私は知りたい」

「……それは、俺が“ロウ”に付くか“カオス”に付くか、ってことですか？」

間違いなくそうだろう、とは思うけど。

今の神剣宇宙の大半のエターナル達にとって、“天位”と“地位”の戦いよりも、“ロウ”と“カオス”の戦いの方に主眼が置かれている。

それは恐らく、“天位”と“地位”の戦いは『神剣』そのものに拠るものであるのに対し、“ロウ”と“カオス”の戦いは、『担い手』に拠るものであると言う違いだろう。

けど。

アネリスに関しては、また違ってくる。

彼女は“鞘”に連なるもの。“鞘”の役目は“天位”と“地位”の両方の力を抑え、『神剣宇宙』の崩壊を防ぐ事であり、アネリスもまたその思想を継いでいる。いやまあ今の彼女は、俺と共にこの『神剣宇宙』を出る気満々なわけだが。

それを踏まえるに、もし“ロウ”と“カオス”の戦いがこの『神剣宇宙』全土を巻き込み、激化するものなのだとすれば、アネリスの――俺の役目は、どちらかに付くのではないのだろう。

「……そこまで知っているのならば話は早いですね」

「仮に――ロウに付く、と言ったら？」
「……未来の禍根は早いうちに摘むのが良いでしょうね」
――瞬間、まるで喉元に刃を突きつけられているかのような感覚に襲われる。
濃密な殺気。
誰かのごくりと喉が鳴る音が聞こえた気がする。
「――そんな、時深さん！」
「……ユーフォリア。こちらに来なさい」
こちらに鋭い視線を向ける時深に対して声を荒げたユーフィーへ、静かに、諭す様に話しかける時深。
けど、ユーフィーはぶんぶんと、大きく頭を振って、ぎゅっと、絶対に離さないと言わんばかりに俺の腕を抱き締める。
「……い、嫌です！　あたしは……祐兄さんと一緒に居るって、決めてますから！」
「……そうですか。致し方ありません」
ユーフィーの言葉はとてもとても嬉しく思う。心の奥深くが、温かいものに包まれる様な感覚で。
けど……そのためにユーフィーが、彼女が尊敬する相手と仲違いするのは不本意だよな。
「……はぁ。ユーフィーも、倉橋さんも。俺はロウに付く気はありませんよ。……とは言え、カオスに付く気もないですけど」
自分の考えを述べながら、だからまあ少し落ち着けと、空いてる左手でユーフィーの頭をぽんぽんと撫でてやる。……こっちだと感

触が感じられないんだよなぁ。
そんな俺達の様子に「やれやれ」と溜息を吐きつつも、気配を緩める事無くその視線を俺に戻す時深。
「さて――それをどこまで信用してよいやら、ですね」
「証拠を示せるでもなし。信じてくれと言うしか無いですね。俺には」
俺の言葉に対して、時深は「ふむ」と小さく頷く。
「……良いでしょう。剣を取りなさい、青道祐。貴方の力、存在、その在り様、私が見極めて差し上げます。さあ、遠慮は要りません。全力で掛かってきなさい！」
時深の声が響き渡り、彼女がその手に持つ神剣――両刃の短刀という形状から察するに、『時詠』か――を抜き放ち、こちらに向けた。
直後――。
「――くっ」
小さな含み笑いが、耳に届いた。
それは――俺の横に控える、アネリスの声で。
「くふっ……くふふっくふふふふふ」
不敵に、愉しそうに、けど若干どこか不機嫌そうに哂うアネリスは、一瞬の間を置いてその視線を――直接向けられていると言う訳でもないのに、思わずぶるりと身を震わせてしまいそうなほど鋭い視線を時深に向ける。

「見極めてやる……そう申したか、小娘？　……知らぬとは言え、此の妾に対してよう言うた。良かろう、望み通り全力を持って相手してくれるわ！」

激昂するアネリスに対して、困惑するのは時深だ。

まあ、俺に対して言った事なのに、当事者たる俺よりも遥かに速くアネリスが反応したからな。まるで自分の事の様に。いやまあ俺としては、契約者たる俺が言われた事に対して、自分の事の様に振舞ってくれるのは嬉しいけど。

それにしても、アネリスの言葉に困惑するって事は、彼女が俺と契約している神剣である、とは気付いていないのだろうな。

……まあ、今のアネリスは力を――発するマナも抑えているっぽいから仕方ないのか。

そう思った所で、時深の隣にいる綺羅がスンッと小さく鼻を鳴らし、「あ」と何かに気付いたかのように小さく口を開けるのが見えた。

そしてちらりとこちらに視線を向けてくる。

……ふむ。今の激昂時にアネリスの怒気と一緒に抑えていたマナでも漏れたか？

まあ、時深が驚く顔を見てみるのも一興かと、俺は綺羅に対して「黙ってて」とジェスチャーを送ってみる。

彼女はそれに対して――「何でもありません」とばかりに口を閉じ、すまし顔で時深とアネリスの様子に意識を向けたようだ。

「なぜ貴女がそこまで反応するんですか。……と言いますか、誰が小娘ですか誰が！」

そこに反応するんですか、時深さん。おばさん扱いされるよりも良いじゃないか。いや、そんなことは口が裂けても声には出せない

けど。
　そんな、本人に聞かれた消滅させられそうな事を考えているところに聞こえて来たアネリスの次の言葉は、
「ぬしに決まっておろうが。齢にせよ体型にせよ、どう見ても小娘じゃろうが」
「――っ！」
　時深の心のマナ障壁を抜いてクリティカルヒットしたらしい。
　正に絶句である。
「あ、貴女だって似たような大きさじゃないですか！」
「……あ、あたしはまだこれから大きくなるんです！」
　そして声を荒げた時深に対して、反応したのはアネリスではなく。
「今度はユーフォリアですか！？　貴女に言った訳じゃありません！」
「アネリスさんに言うって事は、あたしに言うって事と同じです！」
　いやまあ確かにな。とは言えそれを時深に言った所で彼女には解らないぞ、ユーフィー？
　案の定、「どう言う事ですか？」と疑問を浮かべた様子の時深。
　ソレに対して、まあそれぐらい言っても良いか、どうせすぐバレるだろうしと思い、アネリスの姿はユーフィーの姿を模したものだと説明しようと思った矢先である。
「そ、それに、その、えーと……あの、ゆ、祐兄さんは小さいのが好きだから問題無いんです！」
「ちょっと待てえええええ！！　誰だそんな事言ったのは！？」

「え……えっと……森さんとか、ソルラスカさんとか？」
「……あの野郎共……」
ユーフィーが告げた名を聞くと共に、爽やかな笑みを浮かべながらサムズアップする二人の顔が脳裏に浮かんだ。鬱陶しい。
「……」
鬱陶しい顔を振り払う様に頭を振ったところで、ユーフィーの言葉に何やら考え込んでいるらしいミゥが視界に入った。
そんな彼女に対して、「どうした、ミゥ？」とルゥが声をかけ、
「……その、小さいのが好き、と言うのは……“何が”小さい方がいいのかなって思っただけ」
「へ？」
一体ミゥは何を言っているんだ？　そんな疑問と共に我ながら間の抜けた声を上げた俺の耳に、レーメの「なるほど」と言う声が届いた。
いや、なるほどって、今ので解るのかよ？
「ふむ。つまり『胸』か『背』か『年齢』か、と言う事であろう？」
何だその三択は。
だが、そんな馬鹿な、と思った俺の考えを否定する様に、ミゥが「はい」と頷く。おいおい。
「ん……胸だったらちょっと不利かも……」
「ミゥ……その発言は敵を作る。気をつけた方が良い」

ぽつりと呟いたミゥの言葉に即座に反応したルゥの、若干ジトッとした声音に「あ……あはは……」と、少々乾いた笑いを浮かべるミゥ。

その時、そんなミゥの肩をエヴォリアがぽんっと叩いた。

「あら。それに関しては大丈夫よ？」

「……エヴォリアさん？」

「何が大丈夫？」と、きょとんとした表情でエヴォリアを見るミゥ。いや、ミゥのみならず他の者も、エヴォリアが何を言うのか固唾を呑んでみている……って何なんだこの状況は。

「彼は小さいの“が”好きなんじゃなくてぇ……小さいの“も”好きなのよ、ねぇ」

「……なるほど」

「オイコラ」

まて、納得するなルゥ。……いやまあ否定は出来ないけどさ。

……いやいや、俺だって健全な男だもの。むしろ否定した方が問題あるだろう。……とは言え、だ。

「もう勘弁してくれ……」

色々台無しである。

うん、どうしてこうなった。

永遠神剣之章：89．二度目の、初陣。

「えーと……」

さてどうしたものかと呟いたところで、はっと気が付いた時深が「ゴホンッ」と一つ咳払いをし、改めて俺に対して向き直る。

「と、とにかく、私と一度勝負をしましょう。それで全てが解る、とは言いませんが、刃を交えて見えてくるものもあるでしょう」

ただし、やるからには本気で来て下さい。と、今度は角が立たない様に言う時深さん。

だが、対するアネリスは「くふふっ」と不適な笑みを浮かべる。

……おい待て。

「……良いのか、娘？　こちらが本気になれば、ぬしが勝てる可能性は万に一つも無うなるぞ？」

「っ！　……いいでしょう。そこまで言うのでしたら、私が勝ったら貴女……アネリス、と言いましたか。貴女には先程からの暴言、誠心誠意を持って謝っていただきます！」

「ふむ……良かろう。では祐が勝ったら……ほれ、祐、何か望みは無いか？」

「……は？」

「は？　では無いわ、阿呆。あちらが勝った時の褒美を提示しておるのじゃ。此方も何か求めねば割りに合わぬであろうが」

えー……。

自分から喧嘩吹っかけてそれはどうなのよ？　……と思ったところで、ふと時深の横に居る綺羅と目が合った。

ふむ。

「よし、じゃあ、俺が勝ったら、俺の気が済むまで綺羅の尻尾をもふる」

「何ですかそれはっ！？」

「良いでしょう」

「良くありません！」

確か綺羅は、余り感情の発露が激しく無いタイプだったはず。にも関わらず、「何でそんな簡単に了承するのですか！」と勢い込んで時深に詰め寄る。それに対して時深は、「私が勝つから大丈夫ですよ」と受け流していた。

「それに、仮に万が一もしもの事が有ったとしても、そんな貴女の姿を見るのも面白いですし」

「うー……」

ちょっと可哀想かもしれない。

こちらに恨みがましい視線を向けてくる綺羅に、時深が「では、下がっていなさい」と声を掛けると、それと共に、神社の境内にピンと張り詰めた空気が満ちていく。

そして俺の前に佇む戦巫女は、その手に提げた剣を静かに構え、告げる。

「カオス・エターナルが一員にして『出雲』の戦巫女。『時詠のトキミ』……参ります」

ひたとこちらを見据えて来る彼女の視線は、さあ貴方も構えなさいと雄弁に語っていて。

やれやれ……余り気乗りはしないけれど、仕方ない、覚悟を決め

よう。

「……アネリス」

「うむ」

短い返事と共に俺の隣へ進み出るアネリス。

対して時深は、なぜ彼女が？　と一瞬訝しげな表情を浮かべ――キンッと、光と共にアネリスがその姿を真なるものへと変えた瞬間――その表情を驚きのものへと変えた。

背後からも、ざわざわとした気配。

フィア以外は、アネリスが神剣としての姿に変わるのを見たものは居ないから、きっと驚いているんだろう。そう、その正体が神剣だと知らされていたとしても、こうして実際に目にしなければ、中々実感できるような事ではないから。

俺の横に浮く、一振りの『鞘』。それをそっと掴み取り、腰に佩びる。

「……そうですか……彼女は、神剣の化身……」

「……だから先程、あの時と同じ質のマナが感じられたのですね……」

時深の言葉に続いて漏れた綺羅の声に、首肯して返す。

……さて。本気で来いとは言え、どこまで見せたものか。そう思った所で、直ぐ側に慣れ親しんだ気配が二つ。

「さて、マスター。参りましょうか」

「この際だ。出し惜しみなしで行こうではないか」

そんなナナシとレーメの言葉に続き、アネリスの“声”が脳裏に響く。

＜二人の言う通りじゃ。さあ、我が主様。我等の力、存分に魅せ付けてやろうではないか＞

やる気満々な三人の様子に、やれやれと苦笑が漏れた。

まあ、殺す殺されるって言う様な勝負でもなし、やれる事をやるしかない、か。

「よし。……ノーマ、来い」

「――グルァアアア！！」

言葉に続いて背後に顕現するは、双尾の雪豹。

発せられた咆哮が響き渡ると共に、ズグリと、俺の“中”の『観望』が鳴動し、俺の視界は微細なマナの動きを映し出すモノへと変わる。

「――待たせた」

「……いえ。では、貴方の本気――見せていただきましょう」

その言葉に答える代わりに、腰に佩びた『調和』へと左手を添え、構えたところで脳裏に響く、アネリスの声。

＜祐よ――。“肝心な事”を忘れておるぞ？＞

……何だ？　と思った所でふと、そういえば未だ自分が“名乗って”居ない事に気付いた。

やれ、気付いたか。と、少し咎める様な雰囲気のアネリスへ、ごめんと返し……いやはや、“俺達”の“初陣”だと言うのに、ダメだなこんなんじゃ。

「……改めて、名乗らせてもらおう」

『青道祐』ではない、もう一つの名を。そう――永遠存在（エターナル）としての、己が名を。

「俺の名は、『ユウ』……『鞘』の護り手たる永遠神剣第一位『調和』が担い手。“調律の守護者”。エターナル『調和のユウ』だ」

「……え？」

俺の名乗りに対して返って来たのは、そう、まるで、「信じられない事を聞いた」と言わんばかりの表情と、そんな声。

次いで、若干の間。

「な……何ですか、第一位って！　聞いてませんよ！？」

「いやまあ言ってないですから」

流石に『第一位』は聞き捨てならなかったらしい。

まあ、彼女の周りの第一位と言えば、“あの”ローガスやナルカナだからなぁ……。そんな彼女の反応も頷けるのだが。

とは言え、前述の二人の様な傍若無人な強さを見せれるか、と言われると困るが。

時深は一度小さく息を吐くと、次の瞬間にはその視線を、今まで以上に鋭いものに変えて、此方に向けてくる。

……動揺したのは最初だけ、か。流石だな。

やれやれと溜息を吐きたくなる気持ちを抑え、『調和』へと静かにオーラフォトンを流し込んでいく。

さて――。

「……行くぞ！」

永遠神剣之章：９０．神剣の、『鞘』。

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……『戦いの歌（カントゥスベラークス）』」

神剣を構え、ただ静かに此方を見据える時深に対し、一歩踏み出しながら、口中にて『力ある言葉』を紡ぎ、解き放つ。

瞬間、身体の隅々まで満ちゆく魔力（マナ）。そしてそれを感じた身体中へ散った『観望』が歓喜の声を上げ、喰らい、劇的な化学反応を起こすかの如く、爆発的な力を俺の身体へ与えてくれる。

「『セイント』！」

「『シルファリオン』！」

そしてそれに被せる様に、ナナシとレーメによって発動される強化アーツ。

踏み込む二歩目は疾風（かぜ）の如く。踏み抜く三歩目は、迅雷の如く！

彼我の距離を一息に零にし、その懐へ飛び込む。

右手は『調和』の鯉口へ。抜き放つは居合いの剣。脳裏に描くは『暁天』の一撃。『調和』に籠めたオーラフォトンを――解き放つ！

「生者、必滅！」

「迅（はや）い！　ですがっ！」

一気に懐に飛び込んだ俺の動きに驚きつつも、きっちり俺の攻撃に合わせて『時詠』を繰り出してくる時深。

その攻撃の軌道を“視”て取り、流石に無理かと判断。振り抜く右手の軌道を無理矢理変えて、時深のカウンターへと攻撃を合わせる。

互いの攻撃を互いの武器が受け止め、生まれるは一瞬の膠着。

「……なるほど、その形状の神剣からどのような攻撃を繰り出してくるかと思いましたが……オーラフォトンで出来た剣ですか」

自身の『時詠』の刃と鍔迫り合う俺の“剣”を見て、時深がそう漏らした。

それに答えることなく、俺は一度ぐっと押す様に力を籠め、それに抵抗して時深が押し返して来たのにタイミングを合わせ、今度は逆に力を抜きながら刃を傾け、受け流す。

そしてそのまま流れる様に時深の後ろへ回り込み――ズンっと、異常な感覚。そう、まるで、時間の流れが零に近くなったかのような。

「甘いですよ」

その声が聞こえたのは、俺の真後ろから。

瞬間移動……じゃない、時間を削り飛ばす『タイムリープ』か！

「これで――」

「『スパイラルフレア』！！」

まずいと思う束の間、一瞬の感覚の喪失に続き、時深の声に被せる様に発せられたのはレーメの声。

指定地点を中心に、白熱した炎熱の矢を乱舞させる範囲アーツであるそれは、定められた効果の通り、幾条もの炎の矢を時深に向かって降り注がせる。その近くに居る俺もろとも。

「っ！？」

咄嗟に飛び退る時深の気配に、振り向き様それを追う。

降り注ぐ『スパイラルフレア』のアーツは大地を穿つも、俺に当たった物だけは煙も残さずに掻き消えていく。
それに構わず時深に追いすがりながら、手に持ったオーラフォトンの剣を――。

「解放、『ライトバースト』！」
「この程度っ！」

炸裂させる！！
その瞬間生み出される、強烈な閃光と衝撃。それによって時深を怯ませて――なんて考えていたのに、彼女はそれに構わず、その手にする『時詠』を振るってくる。なんとまあ。
それを迎え撃つために、再度『調和』から“剣”を引き抜き、時深の攻撃を受け止め、再度、俺の手の中の“赤熱する剣”を、

「解放、『スパイラルフレア』！」

解き放つ！
瞬間、“炎剣”の消失と共に、超至近距離から時深に向かって放たれる数条の炎の矢。
だが、そこには既に時深の姿は無く。
確か、『タイムリープ』はそうそう使えないはず。それにさっき感じた異常な感覚は無かった……。となれば今時深が瞬時に移動したのは、彼女自身の時間を加速させる『タイムアクセラレイト』だろう。

（……アネリス。さっきの異常な感覚、あれは……）
くうむ。祐の考えている通りで合っている。くふふっ……流石は滅多に無い『時』を司る能力。まあ、妾の力が不完全なせいでも有るのじゃがな。御蔭で先程の『スパイラルフレア』を取り溢す処であ

ったわ＞

念話に答えるアネリスの言葉に、なるほどなと頷く。……とは言え、『スパイラルフレア』に関しては、アネリスと契約したせいか威力自体が上がってる様な気もするが。

それにしても流石は『時詠のトキミ』。強い強い。どうやって勝ちをもぎ取ったものか。

なるべく穏便に、かつ確実にとなると……やはりアレかなあ。そう思った所で、不意に観客に徹していたフィアから念話が飛んできた。

（……ご主人様……その、死にますよ？）

（……やっぱり？）

（うむ）

（はい）

＜まあ、そうじゃろうな＞

（ガウ）

レーメにナナシのみならず、アネリスに、更にはノーマにすら肯定されてしまった。いやまぁ解ってるんだ。ただまあ他に思いつかないしなあ。

そんなやり取りの最中、時深の口から「成程」と言う声が聞こえ、そちらに意識を向ける。

「……貴方の能力（ちから）、厄介ですね。流石は第一位と言うべきでしょうか」

今の口ぶりからすると、どうやら俺の……『調和』の保有する能力に関して、大体のアタリをつけたのだろう。

「……もう解ったんですか？　流石ですね」

そう言うと、「隠す気も無いくせに、よく言います」とじと目で返してくる時深。いやまあそうだけどさ。

「で、どんな能力だと？」

「そうですね。恐らくは……自身に向けて放たれた魔法を吸収し、その効果を付随させた剣と成す、でしょうか？」

そう言った後、最初のオーラフォトンブレードを思い出したか、「自分で意図的に籠め、生み出す事も出来るようですが」と付け加える時深。

ふむ。今の一連の攻防だけでそこまで把握する、か。流石だなあ……けど――。

「……惜しい。もう一息でしたね」

そう言って、“時深の背後に回り込もう”と駆け出しながら、『調和』の中に収められた時深のスキルである『タイムリープ』を解放する。

次の瞬間、俺の身体は最初に意図した通り既に時深の真後ろに有った。……なるほど、これが『時間を削り飛ばす』って感覚か。

そう、アネリスが……『調和』がその内に収められるのは、魔法に限った事ではない。

その力は――『調和』とその契約者たる俺に対して放たれた、「物理攻撃以外の特殊攻撃」をその内に収め、任意に解放、もしくはその属性や能力を持った“剣”を生成する事。そしてその“剣”を“解放”する事によっても、その効果をいつでも発現させることができる。それこそが――『鞘』の神剣たる存在の能力。

先程時深が『タイムリープ』を使った時に感じたあの異常な感覚。

あれは、『調和』の中に収め切れなかった『時間を削り飛ばす』と言う力の余波。故に、異常に時間の流れが、それこそ止まっているに等しく感じられたんだ。

その後の時深の攻撃にレーメのアーツが間に合ったのは、アネリスが咄嗟に、ほんの僅かだけ『タイムリープ』を解放したからだろう。

「なっ、まさか！？」

突如背後に俺が現れた事に――否、普段自分が使う力であるからこそ理解（わか）るのだろう。今俺が使ったのが『タイムリープ』で在る事に驚愕の声を上げる時深。

「吸収できるのは魔法のみに非ず、と言う事ですか……」

してやられたと臍を噛む時深へ、「そういうこと」と言いながらその背に軽く手を当てる。放つはこの戦いを一気に終わらせられるであろう魔法。……その後死んでも後悔はすまい。うむ。

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……」

「何だかとても凄く嫌な予感がします！？」

ちっ！　何だその超直感は！？

とは言え今は一気に勝負を決める！

「くぅっ！　『時詠』よ、お願い！　『タイムアクセラレイト』！！」

「『氷結　武装解除（フリーゲランスエクサルマティオー）！！』」

残念ながら、行動は時深の方が一歩早かったらしく。

俺の手から放たれた冷気の奔流は虚空を薙ぎ、対して俺から五メートル程離れた場所に移動した時深の巫女服は、それでも完全には躱しきれなかったか、右袖が全損。胴の所々にも小さな穴が空いている様だ。

そんな自分の姿に、ひくりと時深の頬が引きつるのが“視”て取れる。

「……掠っただけでこれですか」

おや？　……なるほど、時深は今の『武装解除』が、単に威力の高い攻撃だと認識しているのか。

そう判断した、その時だ。

「時深さん、と言ったかしら？」

俺から見て左手側、勝負の行方を見守っていた皆の中から、不意に時深に声が掛けられた。今のは、エヴォリアの声か。

それに対して時深は、こちらに注意を向けながらも「何でしょう？」と言葉を返す。

「一つ、忠告しておこうと思って」

「忠告……ですか？」

この勝負の最中に？　と、訝しげな声を上げる時深。そしてこちらに「良いんですか？」ちらりと視線を向けてきたので、首肯して返す。まあ、『武装解除』、『エヴォリア』、『忠告』とくれば、何を言うのか大体予想がついているもの。

「先程の祐の『魔法』。貴女の右袖を吹き飛ばしたアレ。アレは決して喰らわない事をお勧めするわ」

「……理由を聞いても？　態々『忠告』として言ってくるということは、単に威力が高い、と言う事ではないのですよね？」

問いかける時深へ、エヴォリアは真剣な面持ちで頷く。

それを見る他の皆は……まあ全員言いたい事を察しているのだろう、揃って苦笑いだ。

「……脱げるわよ？」

「……は？」

「つまり、アレを喰らうと、問答無用で裸にされるの。私の神剣は腕輪型だって言うのに弾き飛ばされるしね。文字通りの意味で丸裸、よ」

「なっ……何ですか、その、はしたない攻撃は！？」

「ちなみに私は二回やられたわ」と言うエヴォリアから目を切って、俺を睨みつける様に問い詰めてくる時深。

何ですか、と言われてもなあ……別に俺が考え出した訳でもなし。いやまあ使ってるのは俺だが。

「えっと……傷つける事無く相手を無力化出来る人道的な魔法？」

「問答無用で丸裸にされる時点で非人道的です！！」

まあそうとも言う。

だが俺は既に覚悟を決めた。使う事に躊躇わぬ。

と言うわけで、「とりあえずそれは止めて下さいお願いします」と言う時深を他所に、俺は再び呪(しゅ)を紡ぐ。

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……」

って言ってもなあ。流石にまともに撃っても当たってはくれない

だろう。
そう判断し、先程とは違った意味で頬を引きつらせる時深を見つつ、俺は『武装解除』を『調和』に籠めた。
＜くんっ……く、ふふ……妾が姿を戻した時に裸になっておったら如何(ど う)するかの？＞
からかう様に言ってくるアネリスへ、それはそれでとりあえず鑑賞する。と返してやりながら、武装解除を引き抜いた。
俺の手の中に顕現する、氷で出来た剣。
「うむ。斬った相手の装備を破壊する、『武装解除の剣(エンシス・エクサルマティオー)』ってところか」
そう言って軽く一振り素振りし、時深へ向けて剣を構える俺。俺と彼女の間は約五メートル。この程度の距離ならば、俺達にとっては零に等しい。ま、一撃必殺とは行かないだろうが、多少は当てる事はできるはず。
『タイムアクセラレイト』も二度は使っているはずだし、あれも早々何度も使えまい。
そんな俺と自分の服とを交互に見やり、時深はニコリと俺に微笑み掛けて来た。その頬は矢張り引きつってはいたが。
「えっと……あ、貴方の実力と人となりは充分解りましたし、ここで終わりにしません……か？」
ふむ、そう来たか。ならば、
「それは、俺の“勝ち”って事でいいんですか？」

そう問いかけたとたん、うっと詰まる時深。
そんな時深へ、綺羅が「時深様!?」と悲痛な声を掛ける。
時深はそんな綺羅と、自分の服と、俺……と言うか剣を見て、

「い、致し方ありません。了承しましょう……」
「時深様、酷いです!!」
「ゴメンナサイ、綺羅。頑張ってね?」

……そっと綺羅から、眼を逸らした。ぅわぁ。
とまれ、こうして俺の『トキミの試練』は終わったのであった。
とな。

「何と言うか……それまでの攻防が凄かった分、締まらない決着の付き方だな」

そんなルゥの感想に、一同揃って頷かれたが。ほっとけ。

永遠神剣之章：９１．戦い、終えて。

戦い終わって社務所の奥に通された俺達は、綺羅の淹れてくれたお茶を飲みつつ三十分。

身を清め、右袖を全損した巫女服を新しいものへと替えた時深が、静々と入って来て、俺達の前へと優雅に腰を降ろす。

……こうして見ると、正に清楚で可憐な女性（ひと）なんだけどなぁ……。

そして、時深の隣へ綺羅が腰を落ち着けたところで、

「まずはご無礼の段、お詫び申し上げます」

そう言いつつ、こちらに深々と頭を下げた。って、何故に。

「えっと……倉橋さん？　その、顔を上げてください」

突然の行為に戸惑いつつ声を掛けると、「有難うございます」と言いつつ顔を上げる時深と綺羅。

「一体いきなりどうしました？」との俺の問いに、小さくコホンと咳払い。

「青道さん。私の事は時深で結構ですよ。『倉橋』の名を持つ者は他にも居りますので」

そう前置きしつつ――それに対して「俺も祐で構いません」と返しといたが――、言葉を続ける時深の表情は柔らかく。

「……先程刃を交えて、貴方の強さと、その力の向かう先は解りましたから」

どう言う事だと思った矢先、くすりと笑みを漏らす時深。……顔に出ていただろうか。

「恐らくは、戦闘による“揺らぎ”のせいだとは思いますが……間接的に、貴方の『未来』が視えました。そう、貴方に関わる者の未来が」

その言葉になるほど、と納得する。俺に関わる者……誰かは解らないが、その視えた未来に俺の姿でもあったのだろう。それによって俺が彼女達の敵に回る事は無いとでも解ったんだろうか。

「誰の『未来』かは……聴かない方が良さそうですね」

「そうですね。……ただ……そう、『良い笑顔』でしたとだけ、申しておきましょう」

そう言う時深の表情は、とても柔らかく、優しげな微笑で。それだけで……きっと『良い未来』なんだろうと感じられて。だから思う。彼女にこんな表情をさせることが出来た『誰かの笑顔』。それを実現させられるように頑張ろうと。その『未来』どんな流れの先にあるのかは解らないけれど。全ての人が、なんて大それた……欲張りな事は言わない。けど、せめて、出来る事なら、俺の周りの人たちの幸せの先にある『笑顔』であれば良い。

そんな事を思った所で、時深が「それに……」と言葉を続ける。

「『本気を出せ』などと言っておきながら、随分と手加減された上にあっさりと負けてしまいましたね。そんな貴方とは、出来る事なら敵対はしたくありませんから」

そんな事をおっしゃった時深さんへ、思わず「え？」と声を漏らし、その俺の様子に、彼女もまた「え？」と訝しげな表情を浮かべ

た。

「えっと……何故俺が本気ではなかったと思うんですか？」

「当然でしょう。貴方が担うは第一位神剣。“あの程度”が本気の訳がありません」

時深のその回答に思い浮かぶのは、ローガスやミューギィに関する逸話。

曰く、『運命』を鞘から抜く事無く、時深以上の時間操作能力を持つと言う第二位『無限』のボー・ボーの半身を吹き飛ばし、空間操作能力を持つ第二位『虚空』のトークォに致命的な一撃を加え、大剣型神剣、第三位『無我』の一撃を片手で受け止めたと言うローガス。

曰く、所有者が“思った”ことを叶える力を持つ『宿命』。そのせいで世界そのものを滅ぼしてしまったと言うミューギィ。

……確かにそれを考えると、だけど。けどなぁ……。

「ん……別に俺は対して手加減したわけじゃ無いんですけどね。確かに、無闇に傷つけ合うよりはと思って、あんな方法を取りましたが」

そう、別に俺は時深と戦った時に、手加減なんかをした覚えは無い。そりゃまあまだ出せる手は有ったが、それでも放った攻撃を加減してはいない。

その俺の説明に、時深は「そんな馬鹿な」と言った顔をしたが、そんな顔されても俺が困る。

と思ったところで、俺の左隣に座っていたアネリスが口を挟んだ。

「くふふっ。いや、祐の言う通りじゃ。確かにアレが全てとは言わぬが……然程力を隠している訳ではないぞ？」

そんな神剣本人の言葉に、時深も綺羅も驚いた表情を浮かべた。
それに対してアネリスは、その表情に少しだけ曇ったものを浮かべつつ、「当然、相応の理由はあるのじゃが」と言葉を続ける。

「妾の封じられて居た『世界の狭間』は、文字通り“何も無い”場所。そう、マナすらのぅ。斯様な場所に措いて、妾は己と言う存在を維持する為に、自身の内に在るマナを消費するより他に無い状態であった。加えて封じられる直前に、『運命』と『聖威』に大きく力を削がれての。……今だからこそ言えるが、祐に彼の場所から出して貰えなければ、そう遠くない未来に、妾と言う存在は此の世から消え失せておったであろうな」
「……そっか、間に合って良かった」
「それじゃあ、今のアネリスさんの力は、全盛期よりかなり落ちてるって事ですか？」

安堵の息を漏らした俺に、アネリスは柔らかな笑みを向けて、くすりと小さく笑う。
そして、信じられない、と言った雰囲気で訊いてきたポゥにはこくりと頷き、

「狭間より出て、徐々に力は戻って来てはいるがな。そうよな……強いて言うならば、妾の今の力は、せいぜいが二位神剣程度、と言った処か」

情けない事では有るがな。と、小さく溜息を吐きながら言う。
二位神剣と聞くと、充分強い様な気がするが、それを「程度」と言ってしまえる辺り。そこは矢張り第一位と言うところか。
だが、今度は時深と綺羅が訝しげな表情を浮かべる。

「二位……ですか？　ですが、昨日感じた力は……」
「む？　それは当然じゃ。昨日は少々無理を押して力を出したからの」
ぽつりと発せられた綺羅の疑問に、何の事はないと答えるアネリス。
それに対して「何でまた？」と訊いた所、やれやれと溜息を吐きつつ、俺の顔に視線を向けてくる。
「阿呆。昨日は初めてぬしに……これから契約してもらおうと言う主様に、妾の真の姿を見せたのじゃぞ？　であるならば、多少無理をしても、妾の力の一端を見せずして如何するか」
「……ふむ。つまりは祐に良い所を見せたかった、と」
「む……」
くすくすと笑みを浮かべて言うルゥに、ふんっとそっぽを向くアネリス。
そんな二人の様子に、時深がくすりと小さく笑った。
「……仲が良いのですね、皆さんは」
「……訊いても良いでしょうか？」
感慨の篭った、小さな呟き。それに続いて発せられた綺羅の問に、頷いて返すと彼女は俺ではなく、ミゥ達の方へと視線を向ける。
「……皆様は、『エターナル』と言う存在について、どこまで……？」
それは恐らく、“渡り”の事か。
エターナルと、それ以外。いずれ消え去る、儚い関係。だが俺達

は、こうして今も共に在る。
きっと彼女がそんな疑問を持ったのは、その俺達の姿に、ミゥ達が“渡り”の事を知らないと思ったからか。
だがミゥは、綺羅の顔をひたと見据える。

「それは……“渡り”と言いましたか。全てが『無かった事』にされると言う現象について、でしょうか？」
「知って……いるのですか……」

それでも尚共に在るのかと、更に疑問を呈す綺羅に対し、当然だと言わんばかりに、思い思いに頷く皆。
それに対して、綺羅は小さくその目を見開いた。
そんな皆の様子を見ていた時深は、静かに微笑みを浮かべる。

「祐さん、ユーフォリア……良い仲間を持ちましたね」
「ええ、本当に」
「はいっ」

そう……きっと俺は、この世の中で一番幸せなエターナルだと、心から思うよ。

…
……
……

それからしばし後、鳥居の前に出てきた俺達は、時深と綺羅の見送りを受けていた。
と言うのも、当初の予定通りこの世界……と言うか、街を見て回

ろうと言うだけなのだが。
その際に、念のため『出雲』――時深が所属する組織にして、此の世界での本拠地でもあり、ナルカナの居る場所だ――の場所を聞いておこうとしたところで、時深の方から待ったが掛かる。
彼女曰く、ナルカナが会いたがっている世刻望のことも、一度見ておきたいから。だそうだが。
それならば世刻に任せようかと思い、さあ行こうとしたところで、ふと大事なことを伝えていない事に気付いた。

「……『最後の聖母』ですか？　彼女が時間樹（ここ）に？」
「ええ。目的は解りませんが、この時間樹を活動拠点にしているスールード、と言う存在が、『法皇』の名を漏らしていたらしいです。余り考えたくはありませんが、二人は繋がっている、と考えた方が良いでしょうね」

そんな俺の考えを言うと、なるほどと頷く時深。

「では、私の方も警戒を強めておきましょう。……ロウ・エターナルは以前も『出雲』にある第一位神剣である『叢雲』を狙ってきた事がありますから……」

そう言う時深に「お願いします」と返して、今度こそ、俺達は神社を後にした。
……世刻がここを訪れるのは、“原作”では……明日だったか？
流石にそこまで覚えていないが、少なくとも今日じゃないのは確かだったはず。まあ、それまでのんびりさせてもらいますか。

◇◆おまけ◆◇

時深が身支度を整えるのを待っている間、約束通りに綺羅の尻尾をもふり倒させてもらうことにした。
最初はまあ、勢いで言った事だから別にいいかなーとも思ったんだけど、どうせ勝ったんだから折角だし、と思って言ってみたんだ。

「と言うわけで、綺羅。約束を覚えているかい？」

そう言うと、一瞬ビクリとした後、コクリと頷く綺羅。
では早速と思った処で、慌てた様に顔を上げ

「あ、あの……せめて、誰も居ない所でお願いします……」

顔を真っ赤にしながら「恥ずかしいですから」と言う綺羅に、間髪いれずに頷いたのは言うまでも無い。破壊力抜群である。
彼女に案内されて席を外すときに、周囲の視線がとてもすごく痛かった上に、雰囲気が怖かったから……少しだけ後悔した。
だけどな。
さらっさらでふわっふわでもっふもっふで何時まで触っていても飽きないと言うか癖になる素晴らしさ。何と言う魔性の尻尾。そして触るほどに、律儀に文句も言わず、声を我慢してか、俺の胸に顔を押し付けながらふるふると震えてたまにビクッとなる綺羅が……こう、な。終いには目を潤ませながら荒い息遣いで上目遣いに「……もう、許して、くださぃ……」何て言われた日にはもう、うん、解ってくれ。
そんな姿に、こう何と言うか、感極まって思わず尻尾をキュっと握ってしまった瞬間、

「……〜〜〜っ！！　んっ……くっふぅぅうっ！」

綺羅が矢張り声を堪えようとしつつも、それでも堪えきれなかったらしい声にならない声を上げつつ、一際大きく痙攣した後ぐったりと脱力してもたれ掛って来た時には……ヤバかった。色々と。

……うん、済まない。流石にやりすぎな感が拭えない。でも夢中になりすぎてしまっても仕方が無いよな？　無いと言ってくれ。

ぐったりした綺羅を抱きかかえながら部屋に戻った時に、さっき以上に視線が痛かったりしたけれど。

「……どうでした？」と訊かれた時に、思わず「最高でした」と答えてしまった直後、思い切り脇腹を抓られたししたけれど。

うむ。後悔はしない。

永遠神剣之章：９２．いざ、『出雲』へ。

神社を後にし、街中へ向かうために住宅街を抜けている最中、一瞬小さな“気配”を感じ――。

「っ！？　……ん？」

隣を歩いているユーフィーも何かを感じたか、ぴくりとした後訝しげな表情を浮かべていて。

その直後、後ろから「うわっ」と言う声が聞こえたので振り返る。

そこに居たのは、二人組みの少女。

一人は青髪を後頭部でまとめた、活発そうな子。驚いた表情を浮かべているので、今の声はこの子か。

もう一人は肩口までの髪をツーサイドアップにした、大人しそうな雰囲気の子。

目に付いたのは、その首から下げられ、胸元に光る小さな石。それから感じるのは――

「……小さいけど……神剣反応……？　なんだろう……懐かしい人……？」

ぽつりと漏らされたユーフィーの声。それに「え？」と、他の皆が反応した処で、もしかしてと思い至る。

その間の大人しそうな子は「小鳥ってば……失礼だよ？」なんて、隣の活発そうな子を嗜める様に注意しているけど、あまり効果は無いようだ。

……てか、やっぱりこの二人は「夏小鳥」と「高嶺佳織」か。

先程感じた小さな“気配”。それは、佳織が首から提げた石――

彼女の兄たる高嶺悠人がかつて持っていた、永遠神剣第四位『求め』

が砕けた時に出来た欠片、その気配だろう。
……本来、永遠神剣が砕かれたなら、それはマナへと還っていく。
にもかかわらず残った『求めの欠片』。
……高嶺悠人がエターナル『聖賢者ユート』になった後も、消えずに残った絆の欠片。
それは紛う事無き『朽ちる事無き魂（パーマネントウィル）』。
だからこそ――聖賢者ユートの娘たるユーフィーがそれに気付いた。……今こうして俺達が出会うことが出来たのも、永遠神剣の――否、“絆”の導きか。
まあ、折角逢えたのだし、どうせならと思い、とりあえず驚いた声を上げた子――小鳥――の方に「どうかしましたか？」と声を掛けてみる。

「あっ！　その、ごめんなさい！　ちょっとびっくりしちゃって」

そう言う彼女の視線を追ってみる。
そこに居たのは――フィア？
うん、いつもどおりのフィアが……って、あ。

「？」

俺の視線を受け、きょとんとした風に小首を傾げるフィア。
そんな彼女に、小鳥がぽつりと一言。

「……メイドさんって初めて見た」
「あ」

その一言で自分の服装を思い出したのだろう。しまった、と言う顔をする。
その視線がこちらを向いて、目が合って互いに苦笑い。

「……余りにも慣れすぎて気付かなかったな」
「……はい。私も我が事ながら、もう何の違和感も感じてませんでした」

ははは と乾いた笑いを上げる俺達。一方でミゥ達やユーフィー、エヴォリアなんかは、「この世界」の常識がまだないために、どこか変なの？　と言った顔をしているが。

うむ。少なくともこの国では、特殊な場合を除いてメイド服など着ないのですよ。

とは言え今現在フィアがメイド服を着ている事に変わりないわけで。さて……何と言えば良いものか。

「あー……これは……」
「これは!?」

なんでメイドさんなんて連れてるの!?　と言わんばかりに聞き返してくる小鳥。そんな興味津々な顔をされても、気の利いた答えは返せないぞ。

「彼女の趣味？」
「よりによって出てくる理由がそれですか」

「むしろ趣味と言うならご主人様の趣味でしょう？」と、ちょっとむくれて言ってくるフィア。

元はと言えば彼女の師匠の趣味なんだが。って言うかおい、俺が言うのもなんだが、発言には気をつけてくれ。

「……きゃーっ！　ご主人様だって、ご主人様！　何かすっごいね、佳織!?」

「ちょ、ちょっと！　小鳥ってばっ！」

……ほら、言わんこっちゃ無い。

その後、何故だか興奮冷めやらぬといった雰囲気の小鳥を宥めるのに、しばしの時を要したのは言うまでも無い。

その間にユーフィーに、目の前の彼女――佳織が、ユーフィーのお父さんの妹だよ、と耳打ちしてやると、本当に?!　と驚いた表情を浮かべた後、嬉しそうに破顔する。

本当だよ、とは言っても、それを本人に確認するわけにはいかないのが辛いところだけどな。だって彼女は――『何も知らない』のだから。そう、自分に兄が居たと言う事も、無かった事になっているのだから。

それはユーフィーも解っているからだろう、今度は少し寂しそうな顔で、コクリと一つ頷いた。

その後、小鳥が落ち着くのを待って、互いに簡単に自己紹介。

どうやら彼女達は、俺達の格好を見て――フィアを除いて全員、物部学園の制服姿だ――どこかの学校の修学旅行だと思っているようで。

……うん、まあ、当たらずとも遠からずってところか。

佳織には、「それにしてもこんな何も無い街に来るなんて」と言われてしまったので、笑って誤魔化しておいたが。

…

……

……

結局、佳織と小鳥の二人にしてみれば、俺を除いて全員外人の女の子ばかりと言うこの集団に興味を持ったか、「良かったら暇なん

で案内しますよ？」と申し出てくれた小鳥に甘えて、ユーフィーも嬉しそうにしていたし、良いかなと、ご一緒させていただき、『探索』を終えた。

別れ際にはすっかり皆仲良く――特に小鳥とワゥ、佳織とユーフィーとポゥが――なっていたな。

『探索』と言っても、俺達にしてみればもう目的は達しているのだけど。

明くる翌日の朝、「いい加減帰るわね」と言い、前日に買い込んだ――無論、俺の奢りである――土産を抱えて『門』をくぐるエヴォリアを見送って、その日も探索と言う名の観光にいそしんだ。

去り際にエヴォリアが「今度は妹も一緒に遊びに来るわね」なんて、悪戯っぽく笑って言ってたのが印象的だったが。

……何と言うか、彼女なら本当に来そうだな。なんて思ったけど……でも、きっとその頃には――。

……いや、今はそんな先のことを考えている場合じゃない、か。

先ずは目の前の事案に集中しないとな。

そしてその日の夕方。

帰って来た世刻と永峰が持ってきた、『出雲』の情報を受け、流石に今日これからだと遅くなりすぎるだろうと、その更に翌日の朝に俺達はものべーを発進させた。

巡航速度で西北西に飛ぶこと一時間。

「ねえ、あそこじゃないかな！？」

ルプトナが指し示す窓から見える場所、山間の谷間が淡く光って見える。

恐らくあれは……『出雲』を一般人から隠す結界か。

その結界は、ものべーが近づくに連れて薄くなり、解除されていく。

それに連れて見えてくる、『出雲』に在する大社。

そこから伸びてきた光に沿って、ものべーは静かに降下していった。

「皆、何が起こるか解らん。戦闘の準備は怠らぬようにな」

注意を促すナーヤの声に応え、各々その身を戦装束へ包み込み、俺達は『出雲』へ足を踏み入れた。

さて――いよいよナルカナの登場、か。……何事も無く済めば良いんだろうけど……無理、だろうなあ。

永遠神剣之章：９３．神剣の座す地、『出雲』。

「皆様、ようこそ御出で下さいました。皆様をナルカナ様の下へ案内する様に仰せつかっております、綺羅と申します」

ものべーを降りた俺達を出迎えたそんな言葉。それを発した少女――綺羅は、ぺこりと頭を下げる。

世刻達は初対面なのだろう、彼女に対して自己紹介をしようとするが、既に教えられています、と止められた。

それに対して、自分を指差して「ボクのことも？」と問いかけるルプトナに、「はい」と頷く綺羅。

「ルプトナ様、ですね。皆様が精霊の世界と呼ぶ分枝世界で出会い、仲間になったと伺っております」

その答えに、名前や特徴だけじゃなく、結構細かい事情まで聞いてそうだな、と驚く俺達。

そんな俺達を一度ぐるりと見回し――目が合った。

「……ぁ」

小さく声を漏らした彼女の頬が若干赤くなり、誤魔化すように小さく頭を下げてくる綺羅。

その彼女の様子に、先日は少々調子に乗りすぎたかと反省。

「それでは此方へ。ご案内いたします」

そう言って、先導し歩き出した彼女に続いている最中、世刻達は綺羅の耳と尻尾が気になっている様で、ひそひそと話をしている。

ちらりと聞こえてくるのは、「ナーヤの親戚？」とかとか「犬っぽいのと一緒にするでないっ！」とか「似たようなものじゃない？」だったりするのだが。

一方で、俺の隣にすすっと寄ってきたヤツィータが、にやぁっとした笑みを向けてきた。

何だその目は。

「ねえ祐君。さっきの彼女、なんとも意味深な反応だったけど……どんな関係？」

「けふっ」

そんなヤツィータからの質問が飛んだ瞬間、戦闘を歩いていた綺羅がむせる様に咳をした。

……聞こえたのか。結構小声だったんだけどな。……と思ったが、彼女は狗神（いぬがみ）。きっと耳も良いのだろう。

事実、他の誰もこちらを気にする様子も無く、突然咳き込んだ綺羅の様子を伺っている。

カティマに「大丈夫ですか？」と問いかけられた綺羅は、少し慌てつつも、こくりと頷くに留まった。

「えーと……まあ、少し面識が」

ヤツィータにそう返事をしてから、ちらりとこちらを見た綺羅に苦笑を返しておく。

ヤツィータはそんな俺達の様子に何を思ったか、小さく「くくっ」と含み笑い。

「いやぁ……若いって良いわねぇ」

「ふむ……ヤツィータはオバサンっと……」

「何ですってぇ！？」

「自分から振っといてキレるなよ……」

そんなやりとりをしつつ、前方へと視線を向けると、丁度スバルが綺羅に「失礼ですが、その耳の事なんですけど」と訊ねたところだった。

「スバル君ってば、ストレートに訊くわね……」

苦笑気味に発せられたヤツィータの言葉に、まったくだなと頷いて返す。

まあ、綺羅は自分の姿――耳や尻尾――自体に忌避感は無いだろうから、大丈夫と言えば大丈夫なんだろうが。

とは言え、さっきの俺とヤツィータの会話が聞こえてたってことは、他の皆の話も聞こえてたってことだろうからなぁ……余りいい気はしないんじゃないだろうか。

（……出会って間もない時に、おもむろにその尻尾にちょっかいを掛けた者の言えることでは無いと思うぞ）

そんなレーメの念話が聞こえた気がするが、うん、気のせいだろう。

「これは狗神族の証です」

「わ、やっぱり犬なんだぁ」

「ふん。言うたじゃろ。わらわと一緒にするでないっ」

案の定と言うか、特に躊躇う事無く答える綺羅に対して、ルプトナが楽しそうに、ナーヤと見比べて声を上げる。

ってかナーヤ、自分が猫系だからって、そんな対抗意識燃やさなくてもいいじゃないか。

「……ついてきてください。遅れた者は置いて行きますので」

流石にむっと来たのだろう。スタスタと歩調を速める綺羅。

やれやれ、後で謝っておくかと内心溜息を吐きつつ、少し慌てて彼女の後に続く。

そして進むことしばし――。

「こちらへどうぞ」

そう言って綺羅に通された一室。そこには一人の女性が俺達を待っていた。

長い黒髪を後ろで一つに纏め、赤を基調とした服に身を包んだ、綺麗な女性。

彼女は静かにこちらに礼をすると、良く通る声で言葉を紡いだ。

「ようこそ御出で下さいました。私はここ、『出雲』を守護する倉橋一族の当主、環（たまき）と申します」

……

……

……

通された一室にて、環より説明を受ける俺達。

彼女達が俺達のことを知っているのは、ナルカナがずっと――元々の世界の時から――見ていたからであり、また、サレスとも直接の知り合いであること。

彼女達はナルカナにここを守護するよう命じられており、またそ

のナルカナの意志を遂行するために多数の世界へ渡るため、そのときにサレスとの協力関係が生まれたらしい。とは言え、彼女達の事は他の旅団メンバーには言っていなかったらしく……タリアがショック受けてたのは言うまでも無かろうか。

そして、「で、結局ナルカナって何なのさ」と言うルプトナの問いに、環が答える。

「ナルカナ様は神剣の化身。神獣の様に神剣の一部が分離しているのではなく、神剣そのものが人の形を取っているお方です」

その環の言葉に――バッと、一斉にアネリスの方を見る皆様。

そんな俺達の様子に、きょとんとした顔で「どうしました？」と疑問を浮かべる環……あれ？

「えっと……時深さんや綺羅からは何も？」

そう聞くと、彼女は「ああ」と言う顔をしたあと苦笑を浮かべ、

「時深からは……『直接会って、見て、感じた方が早い』と」

そんな俺達のやり取りに、「先輩、どう言うことですか？」と問いかけてくる世刻。

「ああ、世刻達が会う前日に、時深さんに会ってたんだよ。……悪いな、お前の人となりを見たいからって、口止めされてたんだ」

世刻にそう説明したところで、環がアネリスへ向き直り、

「では……貴女がアネリス様、でしょうか？」

環の問いに、「うむ」と鷹揚に頷くアネリス。そして一歩前に出ると、抑えていたその『気配』を、少しだけ解放した。

ごくりと、環の喉が鳴る音がした気がして。

「何、妾もまた『神剣の化身』であるに過ぎぬ。そう……ナルカナ……あ奴と“同じ”、のぅ」

「では、貴女様も……」

「くふっ」と小さく笑みを漏らすアネリスと、緊張に身を強張らせる環。

そんな彼女に、アネリスは「そう緊張するでない」と言いながら『気配』を抑えた。

「ああ、あ奴には妾の事は伏せておく様にの。何……その方がきっとあ奴も驚くじゃろう」

そのほうが面白い、と笑いながら言うアネリスへ、環は小さく一度息を吐き、「わかりました」と仕方なさそうに言うと、再び世刻達の方へと意識を向けた。

「……では、皆様にはナルカナ様と会うために、試練を受けていただきます」

説明された“試練”の内容は単純。この部屋の奥にある扉を出て、その先にある『奥の院』へ辿り着く事。ただし、道中には彼女達が『防衛人形（まもりひとがた）』と呼ぶ人形――ミニオンの様なもの――が配置されていると言う事。

「要するに、そいつら倒して抜けていけばいいんだろ？」

「でも何でそんな面倒なこと……」

ぽつりと漏らしたタリアの言葉に、「ナルカナ様は、生半可な実力の神剣使いには逢いたくないと申しております。……気難しい方でして」と言葉を濁す。

「それと、青道祐様、アネリス様。お二方は試練を受ける必要はありません。時深よりすでに腕試しは終わっていると言われておりますので」

「終わってるって……どう言う事でしょうか？」

そうカティマに聞かれて、先日会った時に戦わされたというと、

「そうなのですか……」と一言。

いや、結構大変だったんですよ？　本当に。

「それと、ユーフォリア様」

「ふぇ！？　あ、あたしですか？」

突如声を掛けられて驚いた声も上げるユーフィーに、環は優しく微笑み掛けながら、

「貴女様に、時深より言伝（ことづて）が。『もしも貴女が望むのでしたら、私が腕試しをしてあげましょう』……だそうですが、どうしますか？」

「え……時深さんが……えっと……」

突然の展開に「どうしましょう……」と困惑気味のユーフィー。

何で彼女だけに？　と言った感じの皆に、ユーフィーと彼女の両親が、時深と知り合いだと説明してやると、

「ふむ。そう言う事なら……ユーフォリアよ、行ってきてはどうじゃ？」

ナーヤがそう言って、皆にも「良いじゃろう?」と同意を求め、それに頷く世刻達。

ユーフィーが環に「それなら是非!」と、世刻達に「ありがとうございます!」と笑みを浮かべる。

「解りました。……それでは綺羅、ユーフォリア様、青道様、アネリス様を時深の元へ。皆様は私に着いて来て下さい。試練の場へご案内致します」

そう言って歩き出した環に着いて行く皆へ「頑張れよ」と声を掛ける。

クリストの皆には、一緒に行けないのを残念そうにされた。――ワゥはあからさまに不満そうだったけど――そう思ってくれるのはやはり嬉しいものだ。

「行ってきます!」と手を振るミゥ達へ、俺も手を振り返して見送った矢先、「祐兄さん、あたしたちも行きましょう!」とユーフィーに手を引かれ、綺羅に続いて部屋を後にした。

永遠神剣之章：９４．時深、受難。

振り下ろされる『悠久』の光の刃と、振り上げられる『時詠』がぶつかり合い、火花を散らす。
その反動に弾かれた様に距離を取った二人は、同時に前方に駆け出し、再びぶつかり合う。
二合、三合、五合、十合と剣舞を踊る二人の姿に、知らず感嘆の息が漏れた。
そして、幾度目かのぶつかり合いの後、再び離れる二人。
対峙する二人の中に籠められていくマナは濃密で。
高まる緊張に、ゴクリと己の喉が鳴ったのを感じた。
次の瞬間――。

「ゆーくん、力を貸して！　『プチニティリムーバー』！」

ダッと駆け出したユーフィーが、『悠久』一閃させ――その一撃は、空を切る。

「くっ！」

たんっと横に飛んだ、それまでユーフィーが居た場所を『時詠』が薙ぎ、時深はさらに追い討ちを掛ける様に連撃を重ねる。

「経験の差を甘く見ない事です。……そこっ！」

絶え間なく振るわれる『時詠』。美しさすら感じさせるその連撃は、正に舞の如し。
対するユーフィーは、何とかその攻撃を捌きながら、一瞬の隙を突いてマナを練り上げる。

「収束する世界、極限の時よ、全てを見通せ！　『コンセントレーション』！」

精霊光の加護はユーフィーの集中力を劇的に高め、時深の攻撃を見極めさせ、反撃の糸口を導き出す。

「最大の力を、最高の速度で……　最善のタイミング！！」

肉薄するように懐に飛び込んだユーフィーは、『悠久』を掬い上げるように振り上げつつ跳躍。そして重力を加えた振り下ろしの一撃を加える。

ズガンッとすさまじい音を立て、時深によって張られたマナ障壁と、と『悠久』に籠められたマナが火花を散らした、その時。

「そこっ！」

技後硬直を狙った時深が符を投げつけ、それがユーフィーに当たる同時に時深の分身体ユーフィーの背後に生み出す。

そしてその時には既に、時間を加速させた時深がユーフィーの目の前に現れていて――。

……

……

……

「ユーフォリア、以前会った時よりも随分と成長しましたね？」

地面に横になって荒い息を吐くユーフィーへ、にこりと微笑みながら言う時深に対し、まだ起き上がれないながらも、それでも声は元気良く、ユーフィーもまた笑みを返しながら「はいっ！」と頷く。

そしてこちらをちらっと見て、「えへへ」とはにかむユーフィー。

「……ふふっ。どうやら、この時間樹に来て、良い経験を沢山積んでいる様でなによりです」

そう言ってその場にしゃがみ込み、優しくユーフィーの頭を撫でる時深。

それに対して、気持ち良さそうに目を細め、くすぐったそうに笑うユーフィー。

……時深にとっても、彼女は娘みたいなものなんだろう。厳しくも優しく、大切に思っているのが良く解る。

そんな彼女達の様子を綺羅とアネリスと並んで見ていると、時深が撫でる手を止めて立ち上がり、おもむろに己の頬を軽く張り、何やら「よしっ」と気合を入れている。

何だ？　と思った矢先、つかつかと俺の前まで来ると、その真摯な視線を向けてくる。

むう、何か俺に言いたいことでもあるのだろうか。

それにしても……改めて見ると、時深って美人だよなぁ。見た目もそうだけど、何よりも内面――魂の力、とでも言えばいいのか……内からにじみ出る様な澄んだ気配。こうして目の前に居ると感じられるそれが、とても綺麗に思える。

「……さん……祐さんっ！　聴いていますか？」

何てことを考えていたら、どうやらぼーっとし過ぎていたようで。

「すみません」と言うと、はぁっと大きな溜息を吐かれてしまった。

いかんいかん。

「人が目の前で話しかけてるのに、何を考えこんでいたのですか？」

そう訊かれて、思わず俺の口から出たのは、先程の考えが集約したような一言だった。

「いや、時深さんって綺麗だなーと」

「っ！　な、何を言うんですかいきなり！」

ストレートに誉められるのは慣れてないのかなーなんて思える程に、ぼっと赤くなった時深の顔。こんな表情は中々見ないなーと思いつつ見ていると、慌てた様にぶんぶんと首を振る時深。

その間に、休んで回復したのだろう、その場に起き上がったユーフィーが、とととっとこちらに駆けて来て、おもむろに俺の腕を取った。

どうした？　と言おうとしたところで、むぅっと上目遣いに睨まれ、

「……祐兄さんは油断するとすぐそれなんですからっ」

ぷくっと頬を膨らませるユーフィー。

ごめん、全然怖く無い。

むしろ可愛らしいその様子に、くくっと思わず笑みが漏れたところで、

「もう！　じゃれてないで、もう一度言いますから、ちゃんと聴いて下さい！」

時深に怒られた。ごめんなさい。

彼女はコホンと一つ咳払いをし、

「ぅぅ……言い難いですね……えっとですね、私ともう一回戦っていただけないでしょうか？」
「えっと……前回の雪辱を晴らす機会をくれ、と？」
こんな事を言ってくるなんて、やはり前回の負け方は納得がいかなかったのだろうか。
そう思いつつ問い返したところ、はい、と頷き、
「出来れば、前回のあの……私の袖を凍らせて砕いた魔法、アレは無しだと嬉しいのですが」
そんな事を付け加えて来る辺り、やはり余り納得はしていないのだろう。あの負け方。……まあそうだろうなあ。……ふむ。
「良いですよ。……そうですね、どうせなら……罰ゲームでもつけましょうか。『負けた方は勝った方の言う事を一つ聞く』みたいな」
そう言ってみると、「うっ」と言葉に詰まる時深。と、その時、それまで黙って俺達のやり取りを聞いていたアネリスが口を挟んできた。イイ笑顔で。
「主様。そう余り無茶を言うでない。……そもそも“受けると解っている”罰ゲームを受けて立つ者が居る訳がないじゃろ？」
そう、チラリと時深の方を見ながら、わざわざ「受けると解っている」と言う部分を強調した挙句、口元を押さえて「くふっ」と哂って言う。
いやいやアネリスさん。幾らなんでもそんな見え透いた――なんて思った矢先、時深の表情は一瞬にしてムッとしたものに変わり、

「い、良いでしょう！　その条件、受けて立ちます！」

……何て言えばいいものか。時深にとってアネリスって、相性最悪なんじゃないだろうか。

…

……

……

向かい合い、互いに構えた俺と時深の間に、緊張が走る。

さて――きっと時深は怒るだろうなぁ。

（そう思うのでしたら自重してください）

（うむ。ナナシの言う通りだな）

そんなナナシとレーメの念話に苦笑しつつも自重はしない。口中にて紡ぐ言葉は始まりの鍵。

「イン・フェル　レイ・ウィル　インフィニティ……」

対する時深は、その手に『時詠』を構えつつ――

「……倉橋の戦巫女にして混沌の永遠者。『時詠のトキミ』、参りますっ！」

そう言い放つと共に俺に符を投げて来て、それと同時に弾ける様に大地を蹴る。

俺は先んじて飛んできた符を、アネリスから右手で引き抜いたオーラフォトンの刃で斬り払い、次いで接近してきた時深に、空いた左手を向ける。

「風花（フランス）――」

「……っ！」

時深は何かを感じたか、俺の直前にて『時詠』を振り抜く事無く、弾かれた様に後ろに跳び退る。

対して俺は、引き離されてたまるかと同じ方向へ踏み込み、己の内に篭めた魔力を解き放つ！

「――武装解除（エクサルマティオー）！！」

次の瞬間――眩しい程の青空に、白と赤の鮮やかな色が舞った。

「――……え？」

カラン、と、石畳と吹き飛ばされた『時詠』が、乾いた音を立てる。

「……ぇ？」

打ち込まれた魔法に堪える様に上げられた時深の手がゆっくりと降ろされ、そのまま視線も降ろされて。

「うむ。眼福」

一瞬の静寂。

「き……きゃあああああ！！！」

そして、悲鳴に次いで、パンッと乾いた小気味良い音が、俺の左頬から鳴り響いた。うむ、痛い。とは言えこれが対価と思えば安いものである。

一方で、悲鳴を上げながら右手を振り抜いた当の時深は、きゃーきゃー言いながらその場にしゃがみこみ、身体を抱え込む様にして……その裸体を隠す。

いやぁ、見事に決まったね。なんて思いながらその様子を見ていると、キッと見上げるように睨み付けてくる時深。

「あ、あれは使わないって言ったじゃないですか！」

そしてそんな事を言ってきたので、俺はうん、と頷いてから、言葉を返す。

「使って無いですよ？」

「……え？」

何言ってるのこの人？　みたいな表情を浮かべ――ふと、何かに気付いたかの様に、その表情を強張らせる。

そんな彼女の前に俺もしゃがみこんで視線を合わせ――一瞬びくっと、後ろに下がろうとして自分の状態を思いだしたか、その場に留まって涙目で見てくる時深へ、説明してやる。

「さっき時深さんが言ったのは、『あの時使った、私の袖を凍らせて砕いた魔法は使わないで』ですよね」

「ま、まさか……」

たらりと冷や汗を垂らす彼女へ、にこりと微笑み掛け、

「あの時使ったのは、相手の装備を凍らせて砕く『氷結・武装解除』。で、今使ったのは……」

俺の言葉を確認する様に、ギギッと、錆付いたおもちゃの様な動作で首を後ろに回す時深。そこに見えるのは――地面に落ちた『時詠』と……。

「相手の装備を風で吹き飛ばす、『風花・武装解除』なもので」

“あの時の”は使って無いですよ。

俺と時深と、勝負の行方を見守っていたユーフィーと綺羅。その視線の先には、地面に落ちた巫女服が鎮座していた。

「本当だったら、服は花びらになっちゃうんですけどね。魔力（マナ）を抑えて吹き飛ばすだけにしてみました。……さて？」

「何だその『服は残してやった、感謝しろ』みたいな言い草は！」と言いたげな視線を向けてくる時深の、その露わになっている両肩にぽんっと手を置いてやると、びくりと身を震わせる。

……何だろう、凄くいぢめている様な感じがして……うん、これはこれで。

しばしそのまま、何も言わずにじっと見つめていると、「うぅ……」と唸る彼女。そして搾り出す様に、その言葉を口にしたのだった。

「……ま、参りました……」

がくりとうなだれる時深に対し、俺は小さく「よしっ」とガッツポーズをとるのだった。

いやほら、やっぱりどんな形でも勝つのは嬉しいものですよ。はい。

「はぁ……もう、何だか祐さんと会ってからはペースを乱されまくりです。本当に……相性悪いのかしら。それに、ずるいですよ、服を脱がす魔法だ何て。有り得ません。悠人さんにしか見られた事無かったのに……第一、私の裸なんて見たところで大して良いものでも無いでしょう」

その後、背後で服を着る衣擦れの音をバックミュージックに、そんな愚痴を聞かされる。いや、仕方ないっちゃ仕方ないんだが。

とりあえず、憤懣やるかたない、と言った時深の最後の言葉だけは「そんな事はないですよ」と否定しておく。

「またそんな調子の良い事言って……だって、その、私の……小さい……胸を見たって、楽しく無いでしょう？　もうっ！　小さくて悪かったですね！」

「いやそんな、自分で言って自分でキレないでください。……って言うか、時深さん見たいな綺麗な人の裸だったら幾らでも見たいですよ。男なら」

「っ！　……もう、まったく、仕方の無い人ですね」

少々呆れ気味に言われて、「もういいですよ」との声に振り返る。……まあ、どこか嬉しそうに感じたのは……気のせいにしとくか。

さて、それでは本日のメインディッシュである。そう、勝負の前の約束事。『負けた方は勝った方の言う事を一つ聞く』である。

「じゃあ、時深さん」

「……解ってます。……うぅ、何を言われるのでしょうか……」

不安そうに言う彼女に、俺が口に出すのは――。

……

……

……

それから待つことしばし、俺の前には時深が居る。

「……いや何と言うか、トキミには同情するぞ」

「ですが……むぅ。マスターが望むのでしたら私も……っコホン」

耳元で聞こえる二人の会話に苦笑しつつ、時深の様子をじっと見ていると、彼女はおずおずと口を開いた。

「えっと……これで、宜しいのでしょうか……その……えっと……ご、ごしゅじんさま」

メイド服を着て。

いやぁ、巫女服以外の格好の時深さんってのは新鮮である。

あ、ちなみに俺が言ったのは、時深の格好で解るだろうか。『一日メイド』である。

『未来の世界』や『枯れた世界』の戦いを経て、『箱舟』は持ち歩いていた方が良いだろうと結論付けており、今現在もレーメが持ち歩いているため――無論、普段は何処にしまっているのか解らないのが謎過ぎるのだが――、その中に居るフィアからメイド服を借り受け、時深に着て貰った。

流石に余り過激な事は出来ないしな。これぐらいが罰ゲームとしては妥当だろう。……充分可哀想だって？　はは、まあ良いじゃな

いか。

「あの、時深様？」

なんともやるせない表情の時深に対して、綺羅がおずおずと声を掛ける。

そんな綺羅へ時深が「何ですか？」と返すと、

「その、似合ってます、よ？」

「嬉しくありません！」

一方でユーフィーは時深の様子を見ながら、ちらりと一度俺を見て、小さくぽつりと。

「……あたしも着てみようかな……」

いや、止めないが。着たいなら着てもいいぞ？　俺は嬉しい。ユーフィーなら似合いそうだなぁ。なんて思っていると、疲れた様子の時深に一連の流れから外に出ていたフィアが声を掛けていた。

「あの、時深さん？」

「……はい？」

「大丈夫です、そのうち慣れます！」

「慣れたくありません！！」

ですよねー。

ちなみにアネリスはさっきから笑いっぱなしである。酷いやつめ。

……まあ、俺も人の事は言えないだろうが。

さて、トドメを刺しますか。

「時深さん」

俺が声を掛けた途端、何を言われるのかと思ったのだろうか、ちょっとだけビクッとしてから「何でしょう？」と小首を傾げる時深。

……むぅ、何だか時深が可愛く見えるな。

だがだからこそ、いじめてしまいたくなるのですよ。

そんな訳で、時深にとっての死刑宣告を口にする俺。

「それじゃ、ナルカナのところに行きましょうか？」

瞬間、ぴしりと石化したように固まる時深。

「こ……この格好で？」

「はい」

「絶対に嫌です！！　ナルカナ様に三周期は笑われます！！」

「ははは。まあ良いじゃないですか」

「いやああ！　祐さんのバカぁ！　鬼ぃ！」

ずるずると、手を引かれて引きずられる時深の声が、抜ける様な青空に木霊したのだった。

永遠神剣之章：９４．時深、受難。（後書き）

指摘を受けて微妙に修正。

永遠神剣之章：９５．その名は、ナルカナ。

時深との一戦を終え、ユーフィーも負けはしたが、強くなったとお墨付きを貰った俺達は、皆と合流するために一度『出雲』へと戻ることとする。

転移門を抜けて出た俺達を出迎えたのは、『出雲』を守護する倉橋一族の当主、倉橋環。

「ただいま戻りました」と言う俺に対し、「お帰りなさいませ」と丁寧に返してくる環さん。

彼女は俺、ユーフィー、アネリス、綺羅と視線を動かした後、本来であればこの場に居ないはずであろう最後の一人でその視線を固定する。

「それで……貴女はそんな格好で何をしているのですか？」

その問いに「うっ」と一瞬唸った後、改めて今の服装の事を言われると恥ずかしいのだろう、俺の後ろに隠れる様に回りこむ時深。

「こ、これは仕方が無いんですっ！　祐さんが……」

「……祐さん？」

ちょっと意地悪かなーと思いつつも聞き返してみると、背後で「あぅ」と身を震わせる気配。

「ぅぅ……ご……ごしゅじんさま、が……」

「ご主人様っ！？」

うん、驚きますよねー。なんて思いながら、何だかんだ言いつつ約束――と言うか罰ゲーム――を守って言い直す辺り、時深さんも

律儀な人だなぁ。なんて考えに、思わず「くくっ」と笑ってしまうと、「笑わないで下さいっ」と、ぎゅっと脇腹辺りをつねられた。

「……何でしょう……時深様が可愛く見えます」

「うー……確かにそうなんですけど……なんだか凄く複雑な気分です……」

そんな綺羅とユーフィーの声に、何度目になるか解らない小さな溜息が聞こえ、次いでぽつりとこうなった理由を説明し出す時深。

「……先日祐さ……ご、ごしゅじんさまを腕試しした際に、私が負けた事は報告しましたよね？　それで、先程その……雪辱を晴らそうと再勝負をお願いしたのです。が……はぁ……その、勝負の前に祐……ご主人様が『負けた方は勝った方の言う事を一つきく』なんて条件を付けられまして。……うう……本当に、どうしてこうなったんでしょうか。そう、何もかもご主人様のアレが悪いんです。あんなのがあるからっ！　もう！　口で上手い事言って私の事を安心させた挙句にあんなことするんですから！」

「……一体どんな負け方をした……って言いますか、何をされたんですか、貴女は？」

「裸にされて迫られたんですっ！！　……はっ！　……ぁぅ」

話しているうちにヒートアップしていったか、勢い込んで負けた理由を暴露した時深。相変わらず俺の後ろにいるので見えないが、直後の恥ずかしそうな声から察するに、きっと顔は真っ赤になっているんだろう。

それはともかく環さんから感じる空気が冷たい。それはもう途轍もなく。

「えっと……時深さん？　その言い方だと俺が物凄く酷い事をした

様に聞こえるんだけど」
「は、裸にしたのは事実じゃないですか！」
環さんの視線の圧力に耐え切れず、振り向いて言った俺の言葉に、勢い込んで反論してきた時深。んー……いや、確かにそれはそうなんですけどね。
「……はぁ……まぁ良いです。これも時深さんの綺麗な裸を見た対価だと思っておきますよ」
「っ！　そ、そうやってすぐ上手い事言って誤魔化すんですから……もぅっ！」
時深が拗ねた様に、ぷぃっと横を向いて言った直後、背後からくすくすと笑い声が聞こえた。
何だと思って振り向くと、口元を押さえて楽しそうに笑う環さんの姿が。
彼女は俺達の視線に気付くと、「済みません」と小さく謝ってから、柔らかく微笑みを浮かべる。
「二人の様子を見てると……私の心配は杞憂の様で、何だか可笑しくなってしまいました。……青道様、時深をよろしくお願いします」
「……はい？」
「ふぇ……？　ゆ、祐兄さん！　それってどういう事ですか！？」
環さんの台詞に、何を言っているのか今一理解できなかった俺に、ぐいぐいと詰め寄るユーフィーってちょっと待て！
「ユーフィー、落ち着け！　俺にも解らん！」
そう返す一方で、環さんには時深が「ね、ねね姉さん！　何を言

ってるんですか！？」と声を荒げていた。
そんな俺達の様子に、環さんは「あら？」と首を傾げ、

「てっきり、時深が青道様の処へ行くのかと。その様な格好をしていますし」
「こ、これは今日一日だけですっ！」

どこか楽しそうに言う環さんに対する、時深の慌てた声が響いた。
いやはや……何と言うか、実際に会う前に抱いていた時深のイメージが崩れる崩れる。

（……どう考えてもマスターのせいですね）

……ごほんっ。
さて、いつまでもここでこうしている訳にもいくまいと、世刻達に合流しようと思った矢先だ。
部屋の外から、がやがやと、複数の人と神剣の気配。

「む……戻ってきてしまったようじゃの」

ぽつりと言ったアネリスの言葉に、びくりとする時深。
咄嗟に逃げ出そうとした彼女の腕を、思わず掴んで抑えてしまった。

「は、離して下さい！　お願いします！」

必至に懇願する時深。だが、無情にもその時は訪れた。

「環、居る？　入るわよ」

そう声を掛けて入ってきたのは、ルプトナに良く似た――いや、ルプトナが彼女を元にされているんだったな――黒髪の美少女。

第一位神剣たる『叢雲』の意思にして化身。他者を寄せ付けぬ圧倒的な力を持ち、『マナ』に相克する物質たる『ナル』を内包するが故に、同じ第一位神剣たる『聖威』と『運命』に、この『時間樹エト・カ・リファ』に封印された存在……ナルカナ。

そしてそのナルカナと、時深の視線が合て、数秒。

ナルカナは視線を切り、もう一度時深の顔を見て、今度はその服装を見て、

「ぶっ……あはははははっ！！　なに、なにその格好！？」

腹を抱えて大爆笑した。

時深がその場に崩れ落ちたのは言うまでもない。

……

……

……

環さんの部屋にて、ナルカナから永峰の状態が説明される。なるべく時深の方を見ないように、笑いを堪えながらだったと言うのはご愛嬌だが。

……ちなみに時深は、やはり俺の後ろに隠れる様に座っている。

……うん、何か段々可哀想になってきた。ごめんなさい。尚、ミゥ達には「あとでちゃんと事情を説明してくださいね？」とにこやかに言われた。怖い。

……永峰に関してだが、現在彼女を支配しているのは『相克』の意志であり、それが身体を自由にするのを防ぐために、『ファイム』

の意識を呼び覚ましていること。
『相克』の標的である『浄戒』である世刻が起きている間は『相克』の影響も強まるので、その間はファイムが前面に出てきて蓋をしている。そのため、世刻の意識が寝ている、『相克』の力の弱まる時に、永峰が出てきて手紙を書けたこと。
そして永峰を今の状況から何とかするためには――理想幹に行かなければいけないこと、何て事がナルカナの口から説明された。
とは言え最後の部分は大分怪しい言い回しで、皆からいろいろ突っ込まれていたが。
いや、理想幹に行かねばいけないのは事実なんだが、何せ言っている事がなぁ……。

「理想幹に行ってあれこれして、諸々すれば……」

とか、

「がーっと理想幹に行って、だーっとすれば希美は元通り。ナルカナ嘘吐かない」

とかだからな。散々皆にツッコミ入れられた挙句キレるし。
そんなナルカナの様子に――

「くふっ」

アネリスが小さく哂った。
その瞬間、一気に場の空気が重く冷え込む。

「……ちょっとアンタ、何笑ってんのよ？」
「いや何……『最強の神剣』とやらが、何やら随分と低レベルな言い争いをしておると思うて、の」

そんな二人の、正に一色触発と言った様子を、ハラハラと見守る皆。

その時、「なんですってぇ？」とナルカナがその場にすっくと立ち上がり、アネリスを睨みつける。

……何だろう、ナルカナが妙に好戦的な気がする。アネリスの言い分程度のものだったら、先程から皆にも言われてるんだけどな。

と思った所で、アネリスから念話が届いた。

（……まあ、あ奴にとって妾は相性最悪の相手じゃからな。妾の正体に気付いておらぬとも、本能的に嫌がっておるのやも知れぬな）

言われて、アネリスの能力とナルカナの攻撃方法を思い浮かべ――なるほど、と思い至る。

“原作”で見たナルカナの攻撃方法は、『剣で斬る』等と言ったものではなく、基本的にマナの性質を変質させて攻撃に使用する方法だった。

と言う事は――。

立ち上がったナルカナに対して、アネリスは何も言わずに挑発する様に小さく笑う。それに対してナルカナは、その腕を大きく振りかぶった。

「このあたしに対してその態度。いい度胸じゃない？　……手加減してあげるから、とりあえず吹っ飛びなさい！　『ストームブリンガー』！！」

渦巻くマナは風の奔流となり、座ってナルカナを見上げるアネリスへと襲い掛かる。

彼女の周囲に居た皆は、俺を除いてざざっとその場を飛び退いた。

うん、いい判断だ。

風の刃はアネリスと、その隣に居た俺を巻き込むように直撃し――。

「ナルカナ様！　何をしているんですか！！」
「だって、アイツなんかムカつくんだも……ん？」

突然のナルカナの所業に声を荒げた環さんと、それに対してむぅっと頬を膨らませるナルカナだったが、その表情は驚愕のものへと変わる。
そう。

「……ふむ。どうやら本当に加減したようじゃの」
「なんっ……っ！？」

まるで何も無かったといわんばかりに、変わらずその場に座ってナルカナに視線を向ける、アネリスの姿があったから。
そしてナルカナは訝しげに、探るようにアネリスを見つめ――ひくっとその頬が引きつるのが見て取れた。

「……その能力、その言動、このマナの気配……あ、あんたもしかして……」
「何じゃ、漸く解ったのか？　くふふふっ……久しいのぅ、『叢雲』」
「ち、『調和』！？　何であんたがこんなところに居るのよ！？」

化身ではなく、態々神剣の名前で呼ぶ辺りが何とも。
「“狭間”に封印されてたんじゃなかったの！？」と言うナルカナに対して、

「此の者に出してもろうての」

と、そっと俺の腕をとって言うアネリス。
ナルカナは俺の方へと視線を向け、「何よこいつ」と一言。そんな彼女へ、アネリスは不適に笑って言う。
「うむ。妾の担い手（パートナー）じゃ。ちなみに、『アネリス』と言う名も貰うておる」
「な……なんでずっと封印されてたアンタに担い手が居るのよ！」
「ふっ……日ごろの行いと言う物じゃな。……羨ましいか、『ナルカナ』？」
「う、羨ましくなんて無い！」
何と言うか、この僅かの間に『吼えるナルカナ、いなすアネリス』と言う構図が確定してしまっている気がする。
……ナルカナにとってアネリスとの相性が最悪なのって、能力も去ることながら性格もそうなんじゃなかろうか。いやはや。
その後、ナルカナの様子に「くふっ」と小さく笑いながら、「まあそう言う事にして置いてやるかの」と言うアネリスに対して、
「い、いいから、とにかく理想幹に行けばいいの！　ほら、竜田揚（ものべ）げに行くわよ！」
そう会話を切り上げて、部屋を出て行くナルカナだった。
「えー……っと？」
「どうなってんの？」と言いたげな、世刻の声がした。
そんな彼へ、「ナルカナも理想幹に一緒に行くってさ」と言ってやると、「そうなんですか？」と聞き返してくる。その直後、部屋の外から、

「何やってるの、望！　早く来なさい！」

と、ナルカナの声が。

それに対して「本当だ」と苦笑をしつつ、「今行く！」と返事を返し、立ち上がった世刻。

彼に続いて腰を上げ、環さんと綺羅の「ナルカナ様をよろしくお願いします」と言う声に――環さんは「考える事は我侭で、自己中心的ですが、戦闘になれば無類の強さを発揮します」。綺羅は「根はいい人なので」なんて言葉が続いたが――見送られて部屋を後に……する前に、くるりと振り向き、時深の正面に向き直る。

「どうしました？」と首を傾げる時深。

うん、どうせなら一日メイドを最後に味わっておこうと思いまして。

「行って来ます、時深さん」

じっと目を見ながら言ってみると、始めきょとんとした表情であった彼女の顔が、「まさか」と言った風に変わる。

ちなみに――俺の周囲には、未だ他の皆が居て、どうしたのかとこちらの様子を伺っている。

「……もぅ……本当に、意地悪なひとです。……はぁ……えっと……うぅ……その、い、行ってらっしゃいませ、ごしゅじんさま……」

俺の言いたい事を的確に察してくれた時深に、うむうむと頷き――「何をやっているんですか」とミゥに怒られた。ごめんなさい。

永遠神剣之章：９６．『理想幹』へ、向けて。

ナルカナ達に続いて環さんの部屋を後にし、ものべーに戻ろうとした、その時。ふと思い至った事があり、「少し用を思い出した」と断って踵を返す。

環さんに、時深、綺羅の三人は、突然戻ってきた俺に「どうしましたか？」と声を掛けてきて。

そんな彼女達に、とある「相談事」を持ちかけた。話すことしばし。……結果としては、「それならば、是非お手伝いさせていただきます」と色よい返事を頂いたのだが。

それに満足し、今度こそものべーに戻ろうと部屋を出た処で、どうやら待っていてくれたらしいアネリスにユーフィー、ミゥ達。

「先に戻ってて良かったのに」

「ん……我々が待ちたかっただけだから、祐は気にするな」

ルゥにそう言われ、まぁそう言う事なら、と歩き出す。

それから直ぐに、ミゥが「どんな話をしていたんですか？」と訊いてきたが……別に隠し立てするような事でもなし、話してしまってもいいんだけど。どうせ後から説明するしなぁ……と言う事で、

「ものべーに戻ったら、ナーヤ達にも説明するからその時にね」

そう言うと、「解りました」と言いつつもちょっと残念そうなミゥ。

それからものべーに戻るまでの間、ナルカナの試練がどんなものだったのかを聞いた。どうやら俺の把握している“原作”と同じような内容だった様だ。

「ユーフィーもユウも居ないから大変だったよぉ……」

とはワゥの談。お疲れ様、と、頭を強めに撫でてやると、ニパッと笑ってくれた。

そんな話をしているうちにものべーに着き、真っ直ぐに生徒会室へ向かった。

「遅いぞ、祐。何をしておった、まったく……」

「すまん。実は、『理想幹』に向かうにあって、皆に聞いて欲しいことがあるんだけど……」

そう切り出した俺に、皆が視線を向けて来たのを受け、先程思い至った事を口にする。

「椿先生や学生達……戦う力を持たない皆にはこの世界に残ってもらって、『理想幹』には俺達だけで向かいたい」

「それは……」

俺の発した言葉を受けて、世刻が複雑そうな表情を浮かべた。

……うん、言いたい事は解ってる。事ここに及んで、皆の……戦う力を持たなくとも、それでも固めた“決意”を踏みにじる様な事を言っているんだから。

「……一般生徒にはこの世界に残ってもらう、ですか。……その考えに至った理由を訊いてもよろしいですか？」

ぽつりと、話した俺の考えを反芻する様にカティマが言い、それに「ああ」と頷いて返す。

「前回の『理想幹』の戦いの折に、エトル達がものべーに直接兵を

向けてきたのは覚えているだろ？　次は先の時より、確実に激戦になるだろうからな。流石にものべーの守護のために、戦力を割くのは得策じゃない。いくら前回よりも大幅にこちらの戦力がアップしているとしてもな」

そこまで言った時に、タリアが不意に「ちょ、ちょっと待って！」と声を上げた。

「どうした？」

「えっと……サレス様と沙月が抜けた代わりに、希美とルゥが復帰。ここまではいいわ。で、戦力アップって言う事は、貴方の復帰と、ナルカナの加入がそれに当たるんだろうけど……そんな、“大幅”って言うほどのものなの？」

言いながら、タリアの視線の向かう先はナルカナとアネリス。その視線に対して、ナルカナは「ふんっ」不機嫌そうに鼻を鳴らし、アネリスは黙して語らずとも、やはりその表情は余り機嫌がよろしく無さそうで。……まぁ知らないんだから無理も無いんだが……はぁ、勘弁してくれ。

「えっとな、タリア……この時間樹じゃ『神名』によって制限されるからまだマシだけど、本来一位神剣とそれ以外じゃ、そもそも次元が違うよ」

「お、うんうん。流石は『調和』の担い手になるだけあって、アンタは解ってるわね！」

タリアにした説明に機嫌を直したナルカナへ「そりゃどーも」と返して。……やれやれ。

「とまあ、そんな訳で俺としては、戦う力の無い皆にはここに残っ

て欲しいと思うんだよ」

そう言った俺に、なるほどと頷くカティマ。

と、そこでくいっと袖を引かれたので振り向くと、ユーフィーが「もしかして」と問いかけてくる。

「その、さっき一度戻ったのって、それに関係したことですか？」

「ああ。環さんには、もし皆が残る場合『出雲』で保護してもらえるように頼んで、了承も得ているよ」

「……それに、精神的な事もあるか。『魔法の世界』を発ってからここまで、『未来の世界』、『枯れた世界』、『理想幹』と彼等にとっては過酷な状況の連続だった。そんな時に辿りついた、この『元々の世界』にそっくりな世界……維持し続けていた緊張感も途切れてしまっているだろうし、そんな状況で再び戦場に連れて行くのは、流石に危ない……か」

俺がユーフィーの問いに答えたのに続き、ルゥがそんな意見を述べて、それを受けてナーヤはこくりと頷いた。

「ふむ……状況が状況じゃからな、致し方あるまい。ではその方向で進める様にしよう」

…

……

……

その後開かれた全校集会により、俺の考えが学生達へと通達された。

正直なところ、大きな反論があるかと思っていたんだけど……思ったほど文句も出ず、了承してもらえたのは僥倖か。

どうやら前回の『理想幹』において、ものべーの中からミニオンが来るのを見ていたからの様で。

とは言えミニオンに臆した、と言うわけではない。いや、無論ミニオン達が怖かったのは確かだけど、とは言っていたが。

それよりもミゥとポゥ、そして駆けつけてくれたエヴォリアが、自分達を守る為に、圧倒的不利な、退く事の出来ない戦いに身を投じねばならなかった姿を見ていたからだと言われたのが予想外で。

……彼等は彼等で、戦う力の無い自分達が歯がゆかったのだろう。悔しそうに語る声が、酷く心に残った。

ミゥとポゥは、そんな風に思ってもらえるのが何より嬉しいと。そんな貴方達だからこそ、私達も護るために頑張れたんだ。そう答え……その言葉に、涙を浮かべる者も居て。

「……私達は、貴方達と共に戦えた事を、誇りに思います」

そう言うミゥとポゥの顔には、本当に、心からそう思っているのだろう、柔らかで、そして誇らしげな笑顔が浮かんでいた。それを受けて、更にうれし涙を流す者が居たのはご愛嬌か。

その後は、皆が降りるための準備と、『出雲』の方でも迎え入れる準備があるために、俺達の――神剣組の出発は三日後と定めて解散となった。

それから出発の日までの間には、色々と有った。

その一つが、世刻とナーヤがナルカナを通じて『ログ領域』にアクセスし、そこで斑鳩の存在を確認したこと。

とは言え明確に存在していたわけではなく、分解された『情報』として存在しているのを感じた、と言うことだそうだが。それでもナルカナが言うには、『ログ領域』に入りさえすれば、百パーセント確実に助けられる、と言う事で、皆のテンションも大きく上がっ

たのは言うまでも無い。
俺としても、“原作”から見て大丈夫だろうとは思っていても、やはり実際に確認が取れるまでは不安もあったので一安心だ。
そして、これも世刻が、エトル達のあの未来を見ているかの如き行動の原理を暴いた事だろうか。そう、『ログ領域』のログを参照しての未来予測である。
エトル達はログに残された俺達の過去の行動から、次にどのように動くかを予測し、あたかも未来を視ているかの如く行動していた、と言うものだ。
それに伴って作戦が決められた。と言ってもそう難しいものじゃなく、『ログ領域』に載っている情報の少ない、外部存在であるユーフィーが指揮を執る、と言うものだ。

「そ、それならアネリスさんの方が、もっと少ないじゃないですか？」

とは、任命されて驚いたユーフィーの言。確かにと皆が頷きかけたところで、アネリスがユーフィーへ声を掛ける。

「ユーフォリアよ。臨時とは言え部隊の長として指揮を執るのは、ぬしにとっても良い経験になる。失敗を恐れず、ここは引き受けて見るが良かろう」

対してユーフィーは、少し悩んだ後、決意に満ちた表情で「……わかりました。私でよければ、精一杯頑張りたいと思いますっ！」と宣言する。
そんな見た目そっくりな二人のやり取りが、やはり感じられる雰囲気の違いから、まるで双子の姉妹の様に思えて、ついつい頬が緩むのは仕方ないだろう。うん。

「頑張れよ。とは言え、余り肩に力を入れすぎないようにな」

そう言うと、「はいっ！」と満面の笑顔で返事が返って来た。なんと言うか、見ているだけで癒される娘だ。

それから、校長室を掃除していたヤツィータが見つけた、サレスの置手紙。そこには『理想幹』再突入に当たっての手順が書いてあった。

すなわち、再突入の際には一度『理想幹』を覆う障壁へ攻撃をぶつけ、それを合図にして六十秒後、内と外から同箇所へ同時に攻撃を加え、障壁を破壊する、と言うもの。それを聞いてナーヤが、ふむ、と唸る。

「なるほど、内と外の両方から圧力を加えるのか。……しかしサレスがそれを書いたのは、前回『理想幹』へ突入する前じゃろう？つまりは、あの障壁の予想外の硬さが考慮されておらぬ」

ナーヤのその言葉に、全員の表情が曇り――ああ、サレスからの伝言を伝えていなかったな。

「そういえば、サレスから伝言があった」

「何ですって!?」

言った瞬間にタリアに詰め寄られた。怖いよおい。

「落ち着かんか、タリア。……それで、サレスは何と？　と言うか、その伝言は何時受け取ったのじゃ」

「あ、ああ。ものべーで脱出する直前にな。サレスが言うには『二回目はそちらは波状攻撃にしろ』だそうだ」

そう言うと、タリアに「もっと早く言いなさいよ！」と怒られた。

ごめんなさい。

……ホント、サレスの事になると目の色が変わるなぁ……。

ともあれ、これでどうにか障壁を破る目処は立った様だ。

つまりは、内と外から衝撃と圧力を加えて障壁に大きな負荷を掛け、間髪居れずに大きな攻撃を加える事で、一気に打ち破るというもの。

これで上手く行くかどうかは……やってみなくちゃ解らないってところだが。

とは言え、止めになるであろう一撃を加えるのは、前回穴を空ける要因になった俺の「スピア・ザ・グングニル」で行う事になったので大丈夫だろうとは思うが。

あれにしても、アネリスと契約した事によって多少の無理は利きそうだしな。今までの様に、撃ったらダウンって事にはならないだろう。

そして最後に、出発の前日にあった、ある出来事。

これからの戦いには何の関係も無い、小さな、けれど、“彼女達”にとっては、とても、とても大きな出来事。

その“報せ”が届いたのは、ミゥ達クリストの皆と一緒に、街に買出しに出てから戻った、その時。

「おお、戻ったか」

街から戻り、校門をくぐったところで、そう声を掛けられた。声の方を向けば、ナーヤがぱたぱたと駆けて来て。

「どうした？」と問うと、ナーヤは「それがじゃな」と前置きし、その視線をミゥ達へ向けた。

「実は先ごろ、ようやく『魔法の世界』と連絡が取れてな。まあこれも、『出雲』で座標を確認する事が出来たからなのじゃが。……それでな、ミゥ達に言伝（ことづて）がある」

「私達に……ですか？」

不意に出た自分達、と言う言葉に、きょとんとした顔で問い返すミゥ。

そんな彼女にナーヤは「うむ」と頷くと、驚くべき内容を告げた。

「確かユーラと言ったか。言伝は彼女からじゃ」

「ユーラさんから？　……それで、何と？」

「うむ。……『クリフォードが見つかった。記憶喪失だけど、生きてる』だ、そうじゃ」

その言葉を聞いた瞬間、ミゥ達の動きが文字通り固まった。

それは余りに予想外の内容だったのだろう。「え……？」と、異口同音に、五人ともが呆然とした呟きを漏らしていた。

クリフォード、と言うのは、確か……ミゥ達の『煌玉の世界』を守る為に戦った人物だったか。

彼女達と共に戦い、当時のスールードの分体を滅ぼし、そして星の消滅に巻き込まれて散った……はずの人物。

……彼女達にとっての、本当の意味での『英雄』。そう、マガイモノなんかじゃない、本物の、主人公。

「ほん……とう、に？」

余りの内容に力が抜けたか、崩れる様にその場に座り込んだミゥの、搾り出すような声に、「このような事で嘘を吐く訳がないじゃろう」とナーヤが返す。

その瞬間――。

「……クリ、フォードさん……よかっ……よかった……」

ぽろぽろと――零れ落ちる、透明な雫。
純粋で、綺麗で、暖かな、喜びに満ちた涙。
肩を抱き合い、大声を上げるでもなく、只喜びをかみ締める様に肩を震わせる彼女達。
そんな彼女達の様子に、本当に――良かったなと、思うのに。思っている、はずなのに。
ちくりと。
胸の奥が、柔らかく痛む。
……俺は、彼女達にあんな表情をさせる“彼”に、嫉妬しているのか。
本当に、俺と言う奴は――何て度し難い。
何よりも……心の何処かで、安堵してしまっている自分が居る事が腹立たしくて。
そう。これで、彼女達の中から、“俺”と言う人物が居なくなったとしても――。
こんな考えは、それでも忘れないと、必ず思い出すと言ってくれた、彼女達の想いに対する侮辱にしかならないと、解っているのに。
……頭を振って、そんな思考を追い出そうとしても、脳裏にこびりつく様に残るのが不快で。
混乱する頭を鎮めたくて、俺はその場を、そっと後にした。

……

……

……

屋上から見える景色は、雄大なる『出雲』の地。
吹き渡る風は心地よく、俺の思考を醒ましてくれる。

「マスター、余り無理をなさらないように」
「ユウ、エターナルになったとはいえ、『ヒト』で在る事に変わりは無いのだからな」

ナナシとレーメにそんな言葉を掛けれて。二人に「ありがとう、大丈夫」と返すと同時に、心が落ち着いていくのを感じて。それと共に以前に願った事が、脳裏に浮かぶ。

……願わくば、彼女達が進む道が、辿り着く未来が、幸せなものでありますように。

そう、俺は確かに、そう思ったんだ。そしてその想いは、今も変わっては居ない。
先に思った事も、抱いた感情も、それらも全て俺の偽らざる想いだ。彼女達がより良き未来へ進んでくれることを願う気持ちも、また同じで。なら――いいじゃないか。全てひっくるめて俺の想いなのだから、と。
そう認めてしまえば、随分と気持ちが楽になった。
パンッと、両手で軽く頬を張る。
よしっ！
先ずはミゥ達に、「良かったな」と言いに行こう。
そう思って、屋上を後にしようとした、その時。
ドアが軋む音を立てて開いて――そこにいたのは、今会いに行こうとしていた、ミゥ達で。
慌てた様子で駆け寄ってきた彼女達に、「どうしたんだ？」と声を掛け――。

「どうしたんだ、じゃ無いわよ！　アナタの様子がおかしかったから……！」

ゼゥに怒られて、見られていたのかと恥ずかしくなり、「ごめん」と謝ったところで――皆に、そっと、抱き締められて。

「ユウ、ボク達にとってユウは、すっごく“特別”なんだよ？　すっごく、すっっごく、大きいんだよ？　だから――」

「私達にとって、確かにクリフォードさんは大切で、大好きな人です。けど、祐さん、貴方だって、凄く大切で、大好きな人なんです。だから――」

「クリフォードが生きていた事は嬉しいし、会いたいって思う。だからって、アナタの事がどうでもよくなるなんて事は、絶対にない。だから――」

「祐さん。私は思うんです。人は、誰かの“代わり”になんてなれないって。……貴方が私達と積み重ねてきた時間も、思い出も、何もかも、掛け替えの無いものなんです。だから――」

「祐。私は、以前に誓った想いは違えない。絶対に、それを忘れたりなんかもしない。私は、私達は――きみの側に在りたいと想う気持ちは、変わらない。だから――」

……自分じゃ解らないけれど、どうやらよほど解りやすい様で。

そんな自分が情けなくも、彼女達の言葉が、想いが、気持ちが、嬉しくて、けど、いつかそれすらも失う事が、哀しくて、怖くて。覚悟はしているはずなのに。納得も、しているはずなのに。何もかも、受け入れている、はずなのに。

落ち着いたはずの気持ちがさざめき立ち、けど、先程までのような不快なものは無いのだけれど。けど、何も言う事が出来なくて。

俺はただ、その場に立ち尽くす事しか出来なかった。

「だから――そんな泣きそうな顔をしないで」

永遠神剣之章：97．『理想幹』、再突入。

分枝の海を泳ぐものべー。その前に現れるは、この時間樹の中心たる地、理想幹。そしてそれを覆う強固な障壁であった。
それは怪しくも美しく七色に輝き、されど招かざる者を頑なに拒む。
障壁がよく見えるようにと屋上に集った者の中で、己が獲物を構えるは世刻とユーフィー。
俺は既に肘まで生身となった左腕をアネリスと繋ぎ、彼女を通して魔力を練り上げ、ただ“一撃”を創り上げていく。

「よし、行くぞ！」

先ずは合図になる一撃。
練り上げられ、撃ち放たれた世刻による『浄戒』の攻撃は、確かに障壁へと轟音を上げて突き刺さるも、障壁に変わった様子は無い。

「最初はただの合図とはいえ……今の一撃でもこうも何も変わらないと嫌になるな」

その光景を見ていた暁がぽつりと漏らし、それに同意するように「まったくですね」と頷くスバル。
そんな折、時間を計っていたナーヤが声を上げた。

「五十五、五十六……今じゃ！」
「はいっ！　祐兄さん、行きます！　てりゃあああああああ！！」
「ああ。続くぞ、アネリス！　……撃ち貫け！」

カウントに合わせて力を練り上げていたユーフィーは、そのマナ

を解放し、砲撃の如き一撃を撃ち放つ！
それにワンテンポ遅らせ、俺もまた創り上げた一撃を解き放った。
そして俺達の攻撃と時を同じくして、障壁の向こうにも光が膨れ上がり――。
ユーフィーとサレスが放ったであろう攻撃が、先に世刻が一撃を与えた場所へと寸分違わず突き刺さり、轟音と共に衝撃を生み出し、分枝の海が大きく揺れた。
それに続き、ユーフィーとサレスによって大きく負荷を掛けられた障壁に着弾する、俺の一撃。
“破壊と消滅”の性質を持つ魔力の塊となったそれは、まるで染み入る様に障壁へと消え――その直後、鮮烈な魔力光を発し、吹き荒れるマナの嵐。それが収まった時には、砕けるでも割れるでもなく、ぽっかりと、丸い“穴”が障壁に空いていた。
そして次の瞬間、その穴を基点とする様に放射状に皹が入り、まるでガラスが砕ける様に、障壁が崩れていく。
一連の現象が収まった頃には、理想幹を囲む強固な結界であったそれには、ものべーが悠々と通れる程の大穴が開いていた。
今回行った、今までの創り方ではなく、ナナシとレーメのサポートがあるのは当然だが、そこに更にアネリスを加えたやり方。ある種実験にも近かったが……この結果を見て確信する。これで恐らく……もう一段階上に行けると。

「よし、突入じゃ！」

そして放たれたナーヤの号令により、ものべーは障壁の穴へ飛び込み、俺達は再び『理想幹』の地を踏む事となる。

……
……

……

突入時にものべーの上から全体が見える間に、ノーマを呼び出して『観望』の力を活性化。強化した視界でマナの流れを視れば、各島間は繋がっているが、中心島が隔離されているのが解った。

そしてそれぞれの島に一つずつ、マナ溜まりの様な場所――恐らくは拠点であろう場所が在る事も。

そこまで視て漸く思い出した、“原作”における、ここでの作戦の記憶。確か、全ての島の拠点を占領しないと、中心島に飛ぶ事が出来ない様にされているんだったか。

視えたマナの流れと、恐らくそう言う仕掛けだと思う、と言う話をナーヤにすると、それを踏まえて作戦を立てた方がよかろうと、今回の臨時隊長であるユーフィーにアドバイスしていた。

とは言え、あまりそれにこだわってしまうと奴等の思う壺であろうから、あくまでユーフィーの感覚をメインにする様に、と付け加えていたが。

それはそれとして、やはり『観望』の能力は便利だなーと改めて思う。

いや、『観望』それ自体は俺の中に有るのだから、普段から何とか使えないかと思ったのだが――やはり“自我”と呼べる物が無いために無理だったんだ。だからこそ、ノーマさえ出していればノーマを介してその能力――『視る』と言う力を使う事が出来るんだけどな。

だったらずっと出しておけばいいじゃないかと思うだろうが……ノーマの図体は結構でかい。故に目に付きやすく、戦場に連れて行けばミニオンに狙われる可能性があるんだ。

いや、ノーマ自体もそこそこの戦闘力はある。その姿――双尾の雪豹――の通り、動きは俊敏だし、爪や牙の一撃は人であれば容易く戦闘不能に出来る。だが、ミニオン達が相手となると、やはり辛

いと言わざるを得ない。
一対一ならばいい。だが、ミニオンは大概集団で襲い掛かってくるからな。ノーマの長所である『速度』が生かせない場合もあるだろう。
つまり、乱戦で有れば有る程、ノーマを出すとノーマが危険。だが、『観望』の力の真価が発揮されるのはむしろその乱戦であると言う悪循環。
ではやはり戦闘時に『観望』の力を使うのは無理なのか。
そう思った矢先、俺は不意にその問題の解決策を思いついた。ヒントはものべーである。すなわち――。
……俺達が降り立ったのは、『理想幹』南東に浮かぶ白の島。
どうやらサレスはここには居ないようで、タリアが不安そうにして、ソルに励まされている。まぁ、大丈夫だろう。サレスだし。
ものべーから降り立った直後に会敵したミニオンの一部隊を一気に殲滅した俺達は、周囲を警戒しつつ集まり、これからの行動を話し合う事にする。
今居る場所は、サレスの手紙と共に残されていた彼の手書きの簡易マップによると、七つある『理想幹』の浮き島の中で南東に位置する、白の島『セネト・フロン』。辺り一面雪に覆われた、白銀の島だ。
そうなると当然気温は低く、じっとしていると結構寒い。敵と戦って動いている間は気にならないんだけどな。そうなるとだ、肩に座っていたナナシとレーメが、じっと訴える様に見てくる訳で。
……はぁ。
仕方ないなぁと苦笑しつつ、懐に入れてやる。まぁ、これはこれで俺も暖かいから良いんだけどな。
と、その時、俺の胸ポケットに入っていた先客が、ナナシ達が懐にもぐりこんだせいで居心地が悪くなったのだろう、文句を言う様に「みぃ」と鳴いたので、我慢しろ、とポケットから出した頭をぽんぽんと撫でてやる。

その俺達の様子を、カティマが恍惚とした表情で視ているのは…
…ちょっと怖い。

「……はぁ……ちびノーマ……可愛い」

――そう。先に挙げた解決策。それがこれ、魂（ウィル）の分離である。
ものべーが魂の分離により、ちびものべーを産み出して永峰と一緒に居るように、ノーマもまた魂を分離させて常に顕現させておけばいいんじゃないかと思った訳だ。
その結果出てきたのが、仔猫状態のノーマ。カティマ命名ちびノーマである。そのまんまだな。
試しにその状態で『観望』の力を使ってみれば、流石に本体ほど強力ではないが、ある程度の『視』力の強化が可能だった。
「ある程度」とは言え、それはあくまで精度や強さの問題であり、その種類は変わらず、マナの流れを見極める視界から、純粋な視力や動体視力の強化等多岐に渡る。となれば、これは使わない手は無いだろう。
そんな訳で、それこそ全力を出す時には本体を顕現させるが、それ以外のときは分離体を俺の側に置いておこうと言う事になったのである。
……それはさておき。
周囲の敵を殲滅した俺達は、自然とユーフィーを中心に一箇所に集っていく。
全員が揃った直後、

「さて、これからどうするよ？　一日隊長さん」

ソルがそうユーフィーへ声を掛けると、彼女は「んー……」としばし唸る。
皆が固唾を呑んでユーフィーの言葉を待つことしばし、やおらぽ

んっと手を打って、「よしっ、決めました！」と言い放つユーフィー。

「それで、どうするのじゃ？」

問いかけたナーヤに対し、ユーフィーは「えっとですね」と前置きし、

「部隊を二つに別けて、時計回りと半時計回りに同時に進軍します！」

「うんうん、それで？」

それからどうするの？　とワクワクしながら問いかけるルプトナ。そんな彼女に、ユーフィーは一瞬「ふぇ？」と戸惑って、

「えーと、その、あの、そ、それぞれ全軍突撃です！」

「――っはは」

その余りに豪快な作戦に、思わず噴出しそうになって、それに気付いたユーフィーが「もう、笑わないでくださいよぉ」とむくれてしまった。

「じゃあ、祐兄さんならどうしますか？」

「俺？　……そうだな……」

問われて考える。二手に別れるなら、戦力は均衡していたほうが良いだろう。となると……。

「まず、時計回りはユーフィーとナルカナが、半時計回りは俺とアネリスが先行して、敵を引き付けつつ混乱させ、その隙に『全軍突

撃！』だな」

最後の部分をユーフィーの真似っぽく言ってやると、「もうっ」といいつつ笑みを浮かべるユーフィー。

「ん……祐兄さんと一緒に行けないのは残念ですが……よしっ。じゃあ、その作戦で行きましょう！」

「おいこら」

「うぅ……だって良い作戦だなって思ったんですもん。良いじゃないですか。ね？」

ユーフィーがそう言うと、周囲の皆も同意しやがった。

……いや、別に良いけどさ。

その後、残りのメンバーがどっち回りに行くかを決めて、俺達は行動を起こす。

時計回りで行くのは、世刻と永峰、暁、ルプトナ、カティマ、ナーヤ、スバル、ヤツィータ。反時計回りで行くのは、ミゥ、ルゥ、ゼゥ、ポゥ、ワゥ、タリア、ソルラスカ。

メンバーも決まった。さあ――いざ、『理想幹』攻略と行こうじゃないか。

永遠神剣之章：９８．進軍、開始。

二手に別れて進軍を開始した俺達の内、ユーフィーとナルカナ、俺とアネリスは、それぞれ現在居る『理想幹』南東に位置する白の島『セネト・フロン』のミニオンを後続の皆に任せて、先に転送装置へと向かう。

ユーフィー達はここから西、『理想幹』南西に位置する緑の島『セネア・エラシオ』へ、俺とアネリスはここから北、『理想幹』東に位置する黒の島『ミスルト・ネフィア』へ。順当に行けば、恐らく再会するのは北西にある枯れた島『ミスルテ・グリム』だろう。

ちなみにこの島にある拠点は、西に行くのと、この島のミニオンを殲滅するついでに、世刻達が占領する予定だ。

互いの無事と健闘を祈ってユーフィーと軽く拳を突き合わせる。

「頑張れよ……って言っても、無理しないようにな」

「はいっ！　祐兄さんも、気をつけてくださいね」

そんな折、俺達の様子を見ていたナルカナが、ぶぅっと頬を膨らませて、

「むぅ……望！　あたしに何か激励の言葉は無いの！？」

その矛先が世刻に向いた。

「えー……えっと……やり過ぎないようにな？」

「ひっどっ！？」

そんなやり取りにひとしきり笑った後、気を引き締めて、共に――とは言え、俺とアネリスは先行するのだが――行くメンバーの顔

をぐるりと見回す。

「……よし。じゃあ、行こうか。後ろは任せる！」

そう言い放ち、ルゥの「ああ、任された」と言う答えを背中に受け、それに片手を挙げて応えつつ、北へ向けて駆け出した。

進むことしばし、島の北にある転送装置へ向かう最中、道中に配されたミニオンを前方に見つけた。

「祐！」

併走するアネリスの声に「解ってる！」と応え、差し出された左手に右手を重ね、そこ――『鞘』――からオーラフォトンを剣として引き抜く。

その頃には向こうも既にこちらを補足しており、赤ミニオンが詠唱に入っているのが見えたが、俺達は速度を緩める事無く突っ込んでいく。

「赤きマナよ、牙を剥け……イグニッション」

放たれたのは、高速詠唱によって展開される、敵全体を爆発にて包み込む先制攻撃魔法の『イグニッション』か。

俺とアネリスに向かって解放された赤マナは、その理に従い俺達を爆発にて包み込む……はずであったが、何も起こらずただ消え去るのみ。

ミニオンが困惑するのが見て取れる。

だがそれに構わず、通り過ぎ様に一閃。赤ミニオンに致命傷を負わせ、緑ミニオンがその手に持つ槍を投擲する体勢に入っているのが視界に入ったが、そのままその部隊を置き去りに駆け抜ける。

別に無理に俺とアネリスで敵を殲滅する必要は無い。後ろには頼

りになる仲間たちが続いているのだから。

「……突き通す……その魂までっ……」

次の瞬間、背後から飛来する槍。

周囲に風を纏ったそれは、空気抵抗によって減速する事無く超高速で迫り――ノーマによって常時発動している『観望』の力によって射線を見切り、僅かに身体を捻って躱すと、そのまま敵を無視して転送装置へと向かう。

「よっしゃあ！　行っくぜえええええ！！」

その直後、背後から聞こえる声。

ちらりと振り返れば、俺達を追撃しようとしたミニオンの部隊が、そのさらに後ろからソルの強襲を受けたところだった。

そして前方に、次の黒の島への転送装置と、その前に陣取るミニオンの一部隊が見える。……あれは流石に倒さないと、次の島に飛ぶことも出来ないか。

この島に残っているミニオンの残党だろう、左方からは別に神剣反応が近づいているが、そちらはミゥ達に任せて良いだろう。

そう判断し、剣を構えて敵に向かって突っ込む寸前、轟音を立てそのミニオン達が三体まとめて爆発に包まれた。

先にその身に納めたイグニッションを解放したのだろうアネリスとちらりと視線を交わし、彼女にマナを流しつつ、爆炎に紛れて敵に肉薄する。

振りぬいた剣は眼前の青ミニオンを切り飛ばし、俺はそのままその後ろに居た黒ミニオンへ。そして俺の横では、アネリスがオーラフォトンで創られた、大剣状の『悠久』に似た形状の剣を持って、白ミニオンと対峙していた。

接近する俺に合わせて抜刀してくる黒ミニオンの刃の軌道を視切

り、紙一重で躱す。その際に黒ミニオンの背後へと回り込み、振り切った体勢のミニオンへ刃を突き立てるも、身を捻られて浅く入るに終わった。

「解放、『ライトバースト』！」

何とか躱した、とミニオンがほんの少しだけ油断したらしい気配を感じ、その瞬間にオーラフォトンブレードを解放し、炸裂させる。

極至近距離で産み出された閃光と衝撃は黒ミニオンを直撃し、体勢を整えて反撃に転じようとしていた青ミニオンを巻き込んで吹き飛ばす。

そのまま踏み出し、俺の生み出した閃光によって大きな隙の出来た白ミニオンを斬り捨てて居たアネリスの横を通り過ぎ、俺自身を通じてアネリスの『鞘』から再びオーラフォトンブレードを抜き放ち、体勢の崩れている青と黒のミニオンへ。

……んー……やっぱり、アネリスから直接引き出した方が、オーラフォトンの密度が濃い気がするな。

この分だと、納める場合も俺を通した場合はロスが多く出ていそうだ。……ま、アネリス個人が居る分戦力が増えているから問題ないんだが。

「黒の衝撃……耐えられる？　カオスインパクト……」

俺が懐に潜り込む直前、体勢が崩れたままに放たれた神剣魔法は、しかして俺を通じてアネリスの中へと納められ、その範囲から外れた僅かな部分のみが、怨恨のマナの衝撃波に包まれた。

驚いた顔のミニオン。それに構わず懐に飛び込み、切り伏せる。

その隙に青ミニオンは一端距離を開けようと飛び退り――。

「『ダークマター』！」

レーメの放った超重力の一撃によって押し潰され、マナの塵と消えた。

とりあえず一息。

アネリスを見ると、今しがた使っていたオーラフォトンブレードを己が内へと再び納めているところで。

「……それにしても、武器の形まで似せなくてもいいんじゃないのか？」

そう訊くと、「其れがのぅ」と少々困った様に答えるアネリス。

「如何やら姿に引き摺られておるのか、妾としても無意識に此の形になっておったわ」

まあ、使えるし問題は有るまい。そう続けたアネリスへ、「それもそうか」と返し、

「さ、次の島に行くぞ」

そう促して、転送装置へ足を踏み出した。

◇◆◇

ここ、『理想幹』への再突入を果たし、進軍する『旅団』を見やる二対の目がある。

その内の一人、スールードの冷厳な、それでいて鈴を転がすような声が、静かに響く。

「さて……期待通り彼等は再びこの地に足を踏み入れてくれましたね。あとは、首尾よくあの二人を追い詰めてくれると良いのですが……」

そしてその視線をちらりと隣に立つイャガへ向けると、彼女は「そうね」と小さく頷く。

「尤も、そうでなくてはこちらが困るのだけれど。……それにしも、まさか『叢雲』が出てくるとは思わなかったわ」

イャガは困ったような、それで居て楽しそうな口調で言う。「流石にまだアレは食べられないわよね」と。

そしてその視線をつと、たった今『黒の島』へ足を踏み入れた青年へと向けた。

「ところで――彼は一体“何”なのかしら、ね」

このイャガが彼を見たのは、以前彼等がこの『理想幹』から脱出する時のみ。だと言うのに、はっきりと解る。あの時とは全くの別人だ、と。

そう、あの時の彼から感じた気配、力……いや、“マナそのもの”とは、明らかに違っているのが解る。そう、彼から感じるマナの気配。それは、まるで、自分達の様な――。

「まったく……」

そこまで考えたところで、スールードのポツリとした声に思考を中断し、彼女の顔を見る。

そこでイャガは、予想外なモノを見た。

イャガが認識する限り、スールードは随分と彼に執着していたはず。

彼女の性格や好みを考えるならば、彼の状態が自分の想像通りであるならば、きっと激怒して居る事だろうと思ったのだが――そこにあったのは、

「貴方は……そう言う決断に及びましたか。……仕方ない、のでしょうね。あの時の貴方の状態を考えるならば」

少しだけ怒った様な、残念がっている様な、困った様な、寂しそうな。

「それにしても、貴方と言う人は……一体何処で“パートナー”を見つけたのやら。……ふふっ本当に、楽しい人です」

でもどこか嬉しそうな。そんな、複雑な表情をした『少女』の姿。

そんな彼女へ、つい「意外ね」と声を掛けてしまい、スールードはそれで自分の考えが口に出ていたのを悟ったのだろう、こほんっと小さく咳払いを一つ。

「何が意外、でしょうか？」

「くすくす……いえ、もっと激怒するかと思っていただけよ」

そのイャガの答えに、なるほどと頷くスールード。

「……確かに、私が『スールード』である以上、そう思って当たり前でしょうね。とは言え――」

――『鈴鳴』としては、これで良いとしか思えないのですが。

その呟きはイャガに届く事は無く。風に流れて、溶けて消えた。

永遠神剣之章：９９．進軍、合流。

黒の島『ミスルト・ネフィア』は縦に長く伸びた島であり、南端の転送装置から北端の転送装置まで、ほぼ一直線に道が伸びている。
拠点は道中にある為、敵を置いて進むのは難しく、避けられない戦いが増えるのは必定だった。
そうなると自然と進む速度は遅くなり、拠点を越え、転送装置に着く頃には後続の皆に追い着かれた。
転送装置を護るミニオンの部隊と戦闘になってしばし、予想以上にここを護るミニオン達が多かった――恐らく、余りに撹乱が上手く行き過ぎたのだろう。エトルの“予測”に基づく行動が不可能になったミニオン達が、防衛のために集中したらしく、少々手こずっていた時だ。
俺とアネリスを囲む様に向かってきていたミニオン達の、その包囲の外側から、追いついてきた皆がソルとゼゥを先頭に切り込んだ様で、一気に敵の陣形が瓦解した。
そうなれば最早この場は乱戦となるのは必至であり、ここまで来れば、俺とアネリスで先行するよりも、皆と合流して進んだほうがいい。
そう判断した俺達は、とりあえずここの敵を殲滅する方向で動く事にする。

「あら、追いついちゃったわね」

敵の壁を切り抜けて飛び込んできたゼゥが、クスリと笑いながら言う。そんな彼女へ「ああ、追いつかれちゃったな」と返しつつ、ここからは合流して動く旨を伝える。
ここに居たミニオンの数が多く、多勢に無勢とは言え、それは俺とアネリスだけの場合。合流してしまえばその差は一気に縮まる。

そうなれば、この世界のミニオンが如何に強い『ハイ・ミニオン』だとは言え、そうそう苦戦する事も無い。無論、油断は禁物だが。

「よし、じゃあ一気に行くぞ。ナナシ、強化を！」

「イエス、マスター！　……参ります、『ゾディアック』！！」

ナナシの放った広範囲強化アーツに後押しされ、敵の撃破速度をいや増した俺達は、案の定それから程なくして敵を殲滅する事に成功する。

特に活躍が目覚しかったのはルゥだろうか。

アネリスに与えられた神剣『凍土』を振るい、敵の魔法を的確に打ち消し、当たる側から切り伏せていく。とは言え決して苛烈と言うわけではない。深く、静かに、そしてまるで舞う様に。“剣舞”と言っても差し支え無いほどに、見事な戦い方だった。

そう伝えると、彼女ははにかみながら「ありがとう」と笑みを浮かべ、

「……ふふっ。きみにそうまで言われてしまっては、もっと頑張らねばいけないな」

「あー……っと、ルゥ、無茶はするなよ？」

「解ってる。……この『凍土』の核になった『夢氷』の欠片が、きみの中に在ったものだからだろうか。『凍土』を手に戦っていると、まるで祐が側に居るように感じられて、とても心強いんだ。だから……うん、私は大丈夫」

そんな事をおっしゃられまして。

……んな事を言われて、何と言うか、顔が熱くなったのは仕方ない事だろう、うん。……いやまぁ、嬉しい言葉だったのは確かなんだけどさ。

さて、敵を倒し終えたことだし、次の青の島『セネト・セファ』

へ飛ぶ前に体勢を整えておこうか。
そう皆に伝えて小休止を入れることにし、転送装置の陰に座り込んだところで、俺の周囲にミゥ達も腰を降ろした。

「祐さん、怪我は無いですか？」

問いかけてきたポゥへ、「大丈夫、有難う」と返すと、「よかったです」と小さく一言。
俺とアネリスの場合、基本的に敵の神剣魔法が効かないからな。余りこれを過信しすぎるのもマズイだろうが、少なくともミニオンクラスの魔法であれば問題は無い……はず。
いや、アネリスに聞かれれば「当然じゃ」と一喝されそうな気がするが、まだ然程慣れていない俺としては、たまに不安になるんだよ。まぁ、大丈夫だと思うけど。
そうなると気をつけるべきは、自然と物理攻撃に絞れる訳で……こうして改めて考えると、アネリスの……『調和』の能力は地味だけど反則だよなぁと思う。何と言っても、相手の魔法なんかを“納める”のに、特に意識を向けたりする必要がないのだから。

「俺より、ポゥ達は大丈夫か？」
「はい。大した怪我も無いです」

俺の問いに対してほわっとした笑みを浮かべて答えるポゥ。
それに「それなら良かった」と返したところで、その後ろに居たタリアがこちらを見ているのに気がついた。

「どうした？」
「……なんでも無い。あなた達は相変わらず仲良いわねって思っただけよ」

タリアのそんな言葉に、今度はソルが「そうだよなぁ」と言いつつも、首を傾げている。
そんな彼へ、タリアが訝しげな顔を向ける。

「何悩んでるのよ？」
「いやな、あいつらの雰囲気が、今までと何となく違うなって思ってよ。……お前等、何かあったか？」

ソルのその台詞には、思わず「何で解るんだよ」と言いそうになった。いやはや……野生の勘か？　何も無いとは言っといたが。
いや、実際何が有ったって言うわけでもなし。……そう、単に俺が醜態を晒しただけで……まったくもって、今思い出しても恥ずかしい。まぁ、色々とスッキリしたのは事実だが。
そんな所で、ふと正面に居たルゥと目が合って互いに苦笑を交わしたところで、ルゥの隣に座っていたミゥが「あの……」と声を掛けてきた。

「ところで祐さん。次の青の島は、本当に一緒に行動で良いんですか？」
「ああ。別に今回の作戦方針である『管理神』の思惑から外れた行動をするって事は崩してないからな」
「……つまり、合流して進軍するだけで、後はユーフィーの『全軍突撃！』っていう作戦通りにするってことね？」

ミゥの問いに答えた俺の言葉に、ゼゥが確認するように訊いてきたので首肯して返す。

「……何回聞いてもその『全軍突撃！』っての、作戦とは思えないわね」

そう言うのはタリア。そんな彼女へ、アネリスが「そうでもない」と返す。

「要は、時と場合と相手による、と言うことじゃ」

「……どういうこと？」

「つまり、今回の敵の様に、『ログ領域』の情報を利用して未来予知じみた事をし、一から十まで用意周到に準備してから行動を起こす様な輩の場合、相手のその周到に準備された策や罠に慎重に対応するのも良いが、時に力ずくで真正面から食い破る方が効果的な事もある、と言うことよ」

尤も、真正面から食い破るだけの力が有る、と言うのは大前提じゃがな。

そう続けて、「くふっ」と小さく笑ったアネリスへ、一応納得したのか、「なるほどね」と返すタリア。

「要するに、何事も画一的にならずに柔軟にってことだな」

うむうむ、と頷きながら言うレーメが何だか可笑しく、その頭を軽くぽんぽんっと撫でたあと、そろそろ行こうかと立ち上がる。

「ユウ、行くの？」

小首を傾げながら訊いて来るワゥへ「ああ」と返事をすると、それを受けて皆も俺に続いて立ち上がり、各々の武器を準備して臨戦態勢を整えていく。

そして俺達は、青の島へと続く転送装置に足を踏み入れた。

……

……
……

青の島『セネト・セファ』攻略は順調に行った。
合流した事によって多少の進軍速度の低下はあったが、それ自体は特に問題もなし。
そのまま勢いに任せて青の島を踏破し、拠点を占領した俺達は、続いてその西に有る枯れた島『ミスルテ・グリム』へ進軍。立ち塞がるミニオンを倒しながら半ばまで進み、丁度南にある赤の島『セネア・イーヴァ』へと続く道と、この島の拠点へと続くであろう道の分岐点に差し掛かった所で、南へ続く道の先に、ユーフィーとナルカナの姿を認めた。

「祐兄さん！　皆さん！」

こちらの姿を見るなり、駆けてくるユーフィーを迎え入れ、互いの無事を確かめ合ってから「世刻達は？」と、姿の見えないメンバーを尋ねると、ユーフィーに遅れてのんびり歩いてきたナルカナが「もう少ししたら来るんじゃない？」と教えてくれた。
ユーフィーが補足してくれたところによると、赤の島の拠点の辺りに敵が多く固まっており、世刻達はそれらの掃討に掛かっているのだとか。
で、ユーフィーとナルカナは先にこっちの露払いに来たとのこと。
とりあえず彼女達には、ここから東の敵は粗方倒した事を伝えておいた。

「それじゃあ、折角こうして無事に合流できましたし、望さん達が追い付くのを待ってから行きましょうか」
「ん。了解」

ユーフィーの意見に従って、待つこと約三十分って所だろうか。
そろそろナルカナが痺れを切らしそうだな、なんて思った正にその時、道の先に世刻達が見えた。
向こうもこちらを認識したのだろう、急いで駆け寄ってきた彼等に「お疲れ」と声を掛けたところで、

「おっそーい！　よし、じゃあさっさと行く！」
「ちょ、おい、引っ張るな！」

うん。正に絶妙なタイミングだったようだ。
ナルカナに強引に引き摺られていく世刻と、その後ろをぴったり着いて行く永峰……と言うかファイムと言うかの後に続いて、俺達は最後の拠点を目指した。
そして戦いの舞台は、ここ『理想幹』中心に位置する島『ゼファイアス』へと移る。

永遠神剣之章：１００．突入、ゼファイアス。

『理想幹』を貫く幹を囲む様に在する中心たる島、『ゼファイアス』。
色とりどりの花が咲き乱れる、美しき箱庭……そのはずだった。

「……嫌な空気だな。理由は解らんが不快に感じる」
「まったくです。見た目は美しい光景なのに、漂うのはこの瘴気…
…酷く歪な場所になっていますね」

皆の想いを代弁するように、暁がその言葉の通り不快気に表情を歪めて言い、カティマがそれに同意する言葉を発する。
二人が言うように、ここに足を踏み入れた途端、感じるのは重く、昏く、澱んだ空気。そう、カティマの言葉にあった“瘴気”と言う表現が最もしっくり来るだろうか。
ところどころに残る残滓は黒きマナ。そう、あの時『ログ領域』から溢れ出た『ナル化マナ』だ。
ナル化マナとは、その名の通り『ナル』になりつつあるマナ、だったか。そして『ナル』とは確か、マナと相克を成すもの。……相克とはいっても。その実ナルの方が優位であり、ナルに触れたマナは須らくナルへと変貌する。そして一度ナルに汚染されたマナは元に戻る事は出来なくなるんだったか。
それ故にナルはあらゆるマナ存在から忌避される。
ナルカナ……『叢雲』が、この時間樹に封印されたのもそれが理由。彼女は、その身にナルを内包しているから。
ナルを制御する事が出来れば、マナに比べて遥かに大きな力を得る事ができる……けど、ナルを制御できる存在なんてのは、それこそナルカナか、その契約者ぐらいだろう。まず大体は、ナルを制御できずに暴走するのがオチなはずだ。

だからだろうか。先に言う“瘴気”が、そのナル化マナのあたりから特に強く感じるのは。そう、俺達がマナ存在故に、ナルに対して本能的な忌避感があるのだろう。

「……ナル化が進んでる……ログ領域を滅茶苦茶にして、エト・カ・リファからあたしに切り替えたな……ちっくしょーあいつら、好き勝手やってくれてるわね」

周囲の様子を見回す皆の中で、ナルカナがぽつりとつぶやいた。その言葉の意味を理解している者は居ないだろう。実際タリアが「何言ってるのよ？」と訊いたが、ナルカナは解らないならいいとばかりに「別に何でもないわ」と流して終わらせ、その態度に文句を言おうとしたタリアを放っておいて、皆に注意を促した。

「皆、そこらに点在してるナル化マナの残滓……黒いマナには触らないようにね」

「ナル化マナ？　触ったらどうなるの？」

「……簡単に言えば『負』のマナよ。呑み込まれたら最後、元に戻れなくなるわ。そうなったら、後はもう理性を失って暴走して終わり」

何となく発したであろう疑問に、有り難くない答えを貰い「うへぇ……」と心底嫌そうな顔をするルプトナ

そんなルプトナへ「そうならないために今言ってやったんでしょーが」とじと目で言ったナルカナは、こちら――俺とアネリスへとちらりと視線を向け、

「……ま、あんた達には関係ないけどね」

ぼそりと言われたその言葉。

それの意味する事が一瞬解らず「どう言うことだ？」とアネリスへ問いかけると、「言葉の通りじゃ」と一言。

……ふむ……。

「……俺達はナル化マナに触れても影響はない？」

「うむ。妾が『鞘』故に、のぅ。……ナルとはマナに対して相克を成すもの。マナを『実』とすればナルは『虚』。『神剣』に対する『楯』の力。そして『楯の世界』を統べるは……『刹那』。ぬしならば、もう解るじゃろう？」

そのアネリスの言うところの意味を考え……なるほど、と頷き返す。

アネリス……『調和』は『鞘』の直系。そして『鞘』の役割は、『天位』と『地位』の力を封じて抑えること。『天位』とは『永劫』。『地位』とは『刹那』。

『ナル』が『楯の力』であるならば、天地の力を封ずる『鞘』の娘であるアネリスが抑えられない道理はない、ってことか。

そう結論付けた俺に対して、アネリスは「ただし」と前置きし、

「勘違いはせぬようにな、主様。妾に出来るのは、封じ、抑えることのみ。決して制御は出来ん。アレを制御できるのはナルカナ……『叢雲』のみよ」

アネリスの忠告に「肝に銘じておく」と返事を返したところで、俺達の話を聞いていたのだろう、ナルカナがうんうんと頷いて、

「流石に良く解ってるじゃない。まぁ、アレはあたしの一部でもあるから、あたしにしか制御できないのは当たり前なんだけどね」

そう言ってその話を終わらせたナルカナは俺に視線を向けてきて、

「それにしてもあんた、『調和』の担い手なのに何も知らないのね？」

呆れたような視線を向けてくるナルカナに「まあなあ」と返すと、アネリスがそれに続いて口を開いた。

「妾自身、永らく閉じ込められておった身。その妾の事を祐が知らずとも致し方あるまい。……それに、知らぬのならばこれから知って行けば良いだけじゃ」

アネリスの台詞にその表情を少し曇らせるナルカナ。

……何だ？　随分と突っかかって来るな。

ナルカナの様子にそう思った矢先、アネリスが小さく「くふっ」と笑う。

その顔をちらっと見ると、何とも楽しそうな笑顔で、こう、何と言うか、暖かい……と言うよりも生温かい視線をナルカナへ向けていて。

「妾が祐をフォローするのが気に食わんか？　なに、それこそ祐は妾の『主様』なのだから当然じゃろう？」

そう言って直ぐに、いかにもわざとらしく「あぁ、成程」とぽんっと手を打つアネリス。

「……気に喰わんと言うよりも……くふっくふふふふっ。……ナルカナよ、羨ましいのか？　己よりもより深く封印されておった妾に、先に担い手が居る事が」

「う、羨ましくなんかないわよ！」

「何じゃ、無理するでない。羨ましいなら羨ましいと……」

「あーもう煩い！　ほら、皆、さっさと行くわよさっさと！！」

アネリスとナルカナの、一見険悪そうでその実何処と無く楽しそうなやり取りに思わず笑いそうになりながら、遠めに見える祭壇――拠点へ向けてズンズンと歩き出したナルカナの後を追った。

……

……

……

ナルカナの忠告に従って、ナル化マナに気をつけながら進むことしばし、最初の拠点に近づいた俺達を敵が出迎える。

そこに現れたのは、何時ものミニオンと見慣れぬ相手。

ミニオン達に混じってその姿を見せたのは、光沢ある金属の様な物質で構成された人型の機械。

「あれは……マナゴーレム『ノル・マーター』！　管理神ども、あんなものまで持ち出してきおったか！」

「ったく！　あんな神代のガラクタ、どっから引っ張り出してきたのよ！」

その姿を認めたナーヤとナルカナがそれぞれ声を上げ、ナルカナが「気をつけなさい」と警告の言葉を続ける。

「あたしにとってはどっちも大して変わらないけど、少なくともアレはミニオンより強いから、あんた達は油断しないようにね」

……一応皆のことを気に掛けてはいるんだよな。言い方はアレだ

が。

「あれは“個”よりも“群”で動く。集団の集合意識が顕著に現れておってな、特にゴーレム故に完璧に統制された波状攻撃を得意としておる」

ナルカナを補足するようにナーヤが説明したところで、敵のうち色とりどりのノル・マーターがその砲身となっている腕をこちらに向けているのが視えた。

腕の先端に収束するマナ。

「っ！　来るぞ！！」

俺が発した警告の声に続くように、その腕から様々な『弾丸』が発射され、降り注ぐ。

襲い来るは物理（マテリアル）、理力（フォース）の両方の属性弾。それに対して世刻、ユーフィー、ミゥと言った、どちらにも対応できる防御スキルをもつ者が咄嗟に飛び出し、味方を囲む様に障壁を張った。

その直後着弾するマナの砲撃は、張られた障壁にぶつかり、反応し、衝撃と閃光、爆炎をまき散らし、それをブラインドに、カティマとソル、ゼゥ、暁の、速度に長けたメンバーが、黒き疾風となって敵の只中へと斬り込んで行く。

そしてそれを合図に、ここ『ゼファイアス』を巡る戦いの火蓋が切って落とされた。

永遠神剣之章：１０１．中央島、攻略。

「極光の剣は、惑いなくあんたを貫く！　『クラウ・ソラス』！」

ナルカナによって放たれた一撃は、拠点の付近に固まっていた敵を纏めて薙ぎ払い、

「天地転回、此へ降り来るは煉獄の火！　『フレイムシャワー』！」

追い討ちを掛ける様に放たれた神剣魔法によって、マナへと還っていく。

……あの後、最初の拠点を無事に占領することが出来た俺達は、ここ『ゼファイアス』に入るために施されていた仕掛けから鑑みて、中心の『幹』へと行くためには同じ様な事をしないといけないだろうと推測。

以前来た時に、この中央等には四つの拠点が在る事は確認してある。

つまり、エトルとエデガが居るであろう『幹』に行くためには、ゼファイアスにある四つの拠点を全て占領する必要があるだろう、と言う事だ。

そして現在、既に二つ目の拠点を抜いて三つ目を攻略しているところなのだが……。

「ふっふっふ、あたしは恋と情熱に生きるのよ。ナルカナ様の勢いはもう止まらない！」

ナルカナのそんな台詞とともに、周囲一体の赤マナが増え、影響が強まるのが“視え”た。

効果から察するに……今のは『ヒートフロア』か。

「生きる前に殺してあげる。じれったいのは嫌いなのよっ」

次いで紡がれる高速詠唱。そして爆裂する大地。……『イグニッション』か。

さらに続くナルカナの攻撃。

「侵略すること火の如く、美しきことナルカナの如し！　さぁ、その目に焼き付けてあげる！」

パチンッと弾かれる指の音と共にナルカナの前に球形の魔方陣が現れ、練りこまれたマナはその効果を世界に及ぼし、彼女の眼前の敵は炎熱に包まれた。

うむ。何とも派手な、魔法のオンパレードだ。

いやほんと、こうして見ると大概無茶苦茶な性能だよな、ナルカナって。

その余りに派手なナルカナの様子に、一瞬目を奪われたせいだろうか、切り結んでいた敵の向こうに居た赤ミニオンがマナを練りこむのに気付くのが遅れてしまった。

「地より湧き立て、焦熱の地獄……『インフェルノ』」

詠唱に次いで、俺を取り囲む赤マナ。

次の瞬間赤熱した大気が炎熱を巻き起こし――俺に触れると同時に掻き消える。

そのまま前方へ一歩踏み出し――前で戦っていたアネリスと一瞬視線を交わし、そのまま彼女の背に左手で軽く触れ、アネリスの中の“鞘”から炎の剣を抜き放つ。

「解放、『ライトバースト』！　ナナシ！」

「イエス、マスター！　『ダイヤモンドダスト』！」

次いで右手に持っていたオーラフォトンブレードを解放。

直近にいた緑のノル・マーターに閃光と衝撃を浴びせ、その間に俺の意図を汲んだナナシが、アネリスを基点として、小範囲の敵へ強烈な冷気を浴びせ、凍りつかせるアーツを発動。アネリスが自らオーラフォトンブレードにて切り結んでいたミニオン二体を凍りつかせた。

その隙にアネリスは、その凍った二体を一刀両断。次の敵へ向かう際に俺と交差する様に進路を取り、差し出された彼女の手から“鞘”に納められた『ダイヤモンドダスト』を抜き放つ。

と、その時、俺とアネリスの距離が近くなるのを狙っていたか、俺達の上空に白のマナが集う。

「切り刻め……オーラヴォルテクス」

次いで降り注ぐは白き雷撃。

荒れ狂う暴虐は俺とアネリスを打ち据え――そのまま“鞘”へと消えた。

チラリとアネリスと視線を交わし、まずは今の一撃を放ったミニオンをと互いに一歩踏み出した、次の瞬間。

「あたしの名に連なる力……王の聖剣！　『エクスカリバー』！」

そのミニオンは、ナルカナの一撃を受けて消し飛んだ。

「……はぁ……やれやれ。この調子じゃと、あ奴一人でお釣りが来るの」

そう言って苦笑を浮かべるアネリスに「全くだな」と同意を返し

たその瞬間にも、轟く爆音。
そしてさらに、ナルカナを中心に大規模な魔方陣が展開され、練りこまれるマナ。
そのマナが解き放たれると共に、敵の大部隊へと天空より炎が降り立ち、業炎が立ち上り、ハイミニオンもノル・マーターも纏めて丸々焼き尽くした。

「あんた等の命も、ここで終わりよ！　わはははは、これからはあたしが主役ー！」

…
……
……

「あー、ちょっとスッキリしたわ」

そう言って爽やかに笑うナルカナ。あれでちょっとかよって思ったのはきっと俺だけじゃないはずだ。
三つ目の拠点をほぼナルカナ一人で制圧した俺達は、最後の拠点へと歩を進める。

「……凄いですね、ナルカナさん」

その道すがら、先程の戦いを思い出したか、隣を歩くユーフィーが、前方で世刻となにやらやり取りをしているナルカナを見つつ、小さく言う。
するとそれがしっかりと耳に届いていたのか、振り向いたナルカナが顔を綻ばせ、歩調を落としてユーフィーの隣に並ぶと、彼女の

頭をわしわしと撫でる。

「うんうん。ユーフィーは素直で良い娘よねぇ。よしよし。同じ顔してる誰かさんにも見習って欲しいところだわ」

そう言うナルカナの視線の向かう先は、俺の直ぐ前……即ち、彼女の斜め前方を歩くアネリスの背中へ。

一方で言われたアネリスはついっとその視線をナルカナへ向けたあと、小さく肩をすくめ、

「やれやれ、妾はこれでも“素直で良い娘”だと思うのじゃがな。むしろユーフォリアを見習って素直になるべきは……くふっ、まあ皆まで言うまい」

「なっ……！」

アネリスよ、それはもう殆ど「お前が素直になれ」と言ってるようなもんだ。

案の定というか、それから次の拠点まで着くまで暫くの間、ユーフィーを挟んだ二人の賑やかな言い合いは続いたのだった。

ちなみに、最後の拠点を守っていた敵達は、ナルカナがこの言い合いで溜まったストレスを発散するかのごとく暴れ回り、蹴散らしたのは言うまでも無い。

その後最後の拠点を占領し、中枢への転送装置を起動。管理神達との戦いに決着を付けるため、中枢たる『幹』の元へと足を踏み入れた。

そして俺達の前にその姿を現す、管理神エトル・ガバナとエデガ・エンプル。

「よもや貴様等がここまでやるとはな……かくなる上は、我等自ら相手をしてやろうではないか」

「我等の崇高なる行いを理解しようともせぬ貴様等の愚行、死を持って贖うがよいわ」

そう言うエトルとエデガは俺達の姿をぐるりと見渡し――その視線が、ある一点で固まった。

二人の表情を強張らせたその人物は――ナルカナ。

「……これは想定外……まさかあなた様がそちらに付いたとは。静観し、中立を保っている筈であったと言うのに……。くっ……進軍速度が異常に早いかった理由はこれであったか……」

「はっ！　冗談じゃない。最初からあたしはあんた等の敵よ。……とは言え本来ならあんた等如きあたしが相手するまでも無いから、眼中に無かったんだけどね。……けど、ちょっと好き勝手やりすぎたわね？　あんた等は、手を出しちゃいけないモノに手を出したの。……安心しなさい。苦しむ間も無くマナに返してあげるから」

そう言うナルカナの視線が一瞬向いたのは、周囲に点在するナル化マナ。……やはり彼女の逆鱗に触れたのは、連中がアレを持ち出したからか。

対するエトル達は、その表情をさらに忌々しげに歪め、

「くっ……あなたと言いユーフォリア……イレギュラー存在といい、何故こうも我等の邪魔をするか。この時間樹を管理してきたのは我等に他ならぬと言うに」

「そのためならば、あなた達の都合で世界を斬り捨てても構わぬと？　エヴォリア達をあやつり、多くの世界を滅ぼしてきたのも大義の為だと言うのですか？」

カティマの問いにエデガはふんっと鼻で笑い、

「伸びた枝葉はやがて枯死する。それが分枝世界の運命であり、存続すべきはあらゆる可能性を、マナを内包する理想郷足りえる世界のみ。……そう、この『理想幹』が在ればよいのだ。故に我等は不要な世界を剪定し、この場所に回帰することによって本来の価値を取り戻させていたのだ」

だから、色々な世界を滅ぼしてきたことは、感謝されこそすれ、非難される謂れなどない、そう言ってエデガはその顔に酷薄な笑みを浮かべる。

……あいつらの最終的な目的が何であったか何てのはもう覚えていないけど、この『理想幹』だけが在ればそれで良い、そう言い切るエデガの姿がすべてを物語っているように感じる。本当に――

「……何と言う歪んだ連中だろうか。彼等は――この時間樹に、様々な世界に、かけがえの無い人の営みが……命の輝きが在る事を、何とも思って居ないのだな」

俺の気持ちを代弁するかのように、側にいたルゥの呟く声が聞こえた。

思い起こされるのは、今まで旅した世界で出逢った人たちの顔。……そうだ。彼等の命は、決して軽々しく失っていいものなんかじゃない。だから――。

「エトル、エデガ。お前等思想や行動が崇高かどうか何てのはどうでもいい。けど、お前達のソレはいつかきっと俺が、俺達が今まで出逢った人達の命すら脅かす。……俺はそんな事は認めない。自分が正しいなんて言わないさ。俺は俺のために、俺が失いたくないから――お前達を、この場で倒す」

そう宣言して、アネリスに真の姿に戻ってもらい、己が身に佩び

る。

「ふむ。確か貴様もイレギュラーであったな。……全くもって忌々しい。良かろう、古の神も！　イレギュラーも！　転生体共も！　我等に歯向かう貴様等を須らく排除してくれるわ！！」

そして高らかに吼えたエトルのその言葉と共に、俺達を取り囲む様に大量のハイミニオンが、ノル・マーターが現れ――この世界における最後の戦いの幕が開ける。

永遠神剣之章：１０２．理想幹、決戦。

「我等が計画のためにイレギュラーは排除する……消えろ！」

降り注ぐは魔弾の雨。刺し穿ち、あるいは灰燼に帰さんと幾重にも襲い来る濃密な攻撃。

エデガが放つ根源力（マナ）によって形成された“剣”の雨。それが途切れ、次を放つまでの僅かな隙を、ノル・マーターの砲撃が、ミニオンの神剣魔法が埋め潰す。

常であれば塵すら残らぬであろう猛攻。現にミニオンの中で直接的に攻撃して来る者は居ない。だが――。

「こ、の……化け物がああぁぁぁあーーーー！！」

俺の耳に届くはエデガの叫び。さもありなん。前述の彼等の攻撃は全て――俺に当たる側から“鞘”へと納められ、掻き消えているのだから。とは言え、アネリスが言うにはエデガが創るマナの剣が、神剣までとは言わずとも、もっと明確に物質化していたら納めるのは無理だったようだが。……それにしても、何と言うかなぁ。

＜やれやれ、ひとを捕まえて化け物呼ばわりとは……失礼な奴じゃな＞

憤然とした声音で文句を言って来たアネリスへ「まったくだ」と返しつつ、周囲にて戦う仲間の様子を伺う。

今現在敵――ノル・マーターとミニオン――の攻撃の多くは俺に集中している。と言うのも、戦闘開始直後は誰彼構わず満遍なく降り注いでいたのだ。だが、エデガの攻撃――マナを剣へと変えて射出する奴だ――が俺に当たるもまるで効果が無かったその瞬間から、

エデガの命によりミニオンやノル・マーターが攻撃を集中しだしたんだ。

恐らくは、先程……戦闘開始前に彼にしてみれば「不遜な」言葉を吐いた俺が、奴の攻撃を受けて尚平然としていたからプライドにでも触ったのだろう。その裏で恐らくは、「俺の能力」が厄介であると判断もしているであろうが。

だが残念ながら奴と対峙しているのは俺のみに在らず。

今現在、敵の攻撃の多くが俺に来ている間に、ミゥ達やカティマやヤツィータ達が着実にその数を減らして行っている。いくらミニオンやノル・マーターが精霊回廊などを媒介に量産できるとは言え、この戦闘中には無理であろうから、この猛攻が終わるのも近いと思われる。

ちなみに幾らアネリスが現在弱体化しており、かつ『神名』の影響もあるとは言え、ミニオン程度の攻撃であれば彼女の限界には程遠いので安心、だそうだ。

その上“鞘”に納める側から、ある程度の必要な分を残してマナに還元し、自身の力にしているというのだから、むしろ敵の攻撃が続けば続くほどにアネリスの力が増していくという堂々巡りである。

……さて、俺も何時までもこうしているわけにも行かないな。

（行くぞ、ナナシ、レーメ）

（イエス、マスター）

（うむ、心得た）

数日前に時深と戦った時の様に、自身に『戦いの歌』とアーツを重ねがけしながら、“鞘”に納められた数多の攻撃の中から緑マナのみを槍の形で抜き放ち、繰り出すは……突き貫く雷光の一撃！

「紫電一閃……『ライトニングフューリー』！！」

「ぬ、う、おおおお！！」

神速の踏み込みによる刺突は、避ける間も無くエデガを刺し貫く……はずであったが、エデガの眼前に展開された方形のマナ障壁に触れるや否や、突進の勢いも衝撃も何もかもを掻き消すようにゼロにされた。

その直後、俺に向けてエデガの周囲に居たミニオンが直接攻撃にて襲い掛かってくるのが視え、予想外の展開につい「ちっ」と舌打ちしつつ、後ろに跳んで再度エデガから距離を取る。

……やれやれ。それにしても、今のインパクトの瞬間、エデガの張った障壁が、一瞬青と緑に明滅した気がするんだが……。

確かめておくべきか、と、自身を覆う様にマナ障壁（オーラフォトンバリア）を展開すると共に、俺の背後にノーマの本体を顕現させる。

更に強化される俺の視界。

それはエデガの張ったマナ障壁を、それを構築するマナの色も、姿も俺のこの眼に映し出す。

案の定と言うべきか、それは先程の光景と同じ様に青と緑に明滅し、マナが循環しているのがわかる。それを先程の攻撃のと照らし合わせれば結論は明白……なるほど、特定色の攻撃を無効化する『プロテクション』効果を持った防御スキル、か。

そう判断し、背後のノーマを意識下へ戻し、手にしたマナの緑槍を『調和』の“鞘”へ戻してマナに還元したところで、それまで黙っていたアネリスが語りかけてきた。

＜……時に祐よ。ぬしは先程、何をした？＞

また曖昧な質問だな、と返すと、彼女は「ふむ」と呟いたあと、

＜……妾の力、其れは己が内に納めた攻撃を“剣”へと成すもの。だが、ぬしが先程抜き放ったモノはその形状を“槍”と成した。恐らくはより刺突の効果を上げるためでは有ろうが……＞

その言葉で成程、と合点が行った。それと同時に自分が如何に彼女にとって“非常識なこと”をしたのかも。

アネリスがそう、納めた力を“剣”と成す、と言い切るって事は、それは彼女の神剣としての本能に刻まれた在り方なのだろうから。けどなぁ……。

（……アネリスの言いたい事は解った。けど俺としては“いつも通り”やっただけなんだよ。ほら、マナって本来不定形だろ？　で、『観望』で武器を形状変化させていたからさ。ついその感覚で……）

＜……ふ……くふっくふふふ、はははははははっ！！＞

言い切る前に脳裏でアネリスの何とも楽しそうな声が響き渡る。流石に煩いぞ。そう文句を言ったら、「いや、済まぬ」と返って来た。

（一体何だよ、急に？）

＜……何、愉しく、嬉しいものじゃと思うての。そう、妾のしらぬ自分(わらわ)を引き出してくれる、担(ぬし)い手と言う存在が＞

優しげで、楽しげで、そして嬉しそうなアネリスの声音に「そっか」と思わず頬が綻びそうになった所で――。

「……試してみるか」

そんなエデガの声が聞こえ、割いていた意識を向けると、ピタリと遠距離攻撃が止んで奴の周囲に居た数人のミニオンが、その手にする神剣でもって直接斬りかかってきた。

……ようやく気付いたか。

そう思いつつ“鞘”から右手に蒼剣を、左手に炎剣を引き抜き、

襲い掛かってきたミニオン達を切り伏せる。それを見たエデガは我が意を得たりとばかりにニヤリと笑った。

「なるほど。貴様に行うべきは物理的な攻撃であったようだな……行けい！」

その号令と共に、エデガの周囲に居たミニオン達が一斉に俺に襲い掛かって来る。その数は十。ノル・マーターは基本的に遠距離攻撃しか持たないらしいのか、そのターゲットを俺以外に変えた様だが。

「我々に逆らった罪は万死に値する。楽に死ねるなどと思うな！」

そしてミニオンに遅れること少し。エデガの背後に顕現した奴の神獣――鉄の兜でその頭を覆った、四本腕を持つ赤銅色の肌の半裸の偉丈夫――が、そのそれぞれの腕に持った武器を振り上げながら向かってくる。

「全能のパーサーよ、そのイレギュラーを細切れにしてやれぃ！」

ああ、そんな名前だったな。

何てことを考えながら、先に俺に肉薄しようとしているミニオンへ向け、手の中の双剣を構え――その瞬間、横合いから飛び込んでくる赤い影。

それは両手に持った二本のバズソーを炎に包みながら、ミニオン達の隙間を駆け抜け、斬り捨てていく。

「ワゥ！　余り一人で突出し過ぎないの！」

そう言いながら次いで飛び込んできたミゥは、ワゥが一太刀入れ

た敵を『皓白』で打ち据えて確実に倒していき、その間にも周囲の様子を伺いながら、そのマナを高めていく。
そしてその高まりが最高潮に達したところで、ミゥはそれを解き放った。

「光よ！　『スカイピュリファー』！！」

広範囲に広く淡く広がった白きマナは、多数のミニオンやノル・マーターへ閃光と衝撃を与えると共に、それらと戦っている仲間達へは傷を癒し、回復させる癒しの光となって恩恵を与える。
……じゃあミニオン達はミゥとワゥに任せて、俺はパーサーに。
と思って目を向けた所で、その全能のパーサへ向かうルゥとゼゥ、ポゥの三人の姿が。

「征くぞ、ゼゥ！　ポゥ！」
「はい、ルゥ姉様！」
「了解です、ルゥ姉さん！」

一気に距離を詰めてくるルゥに対して、パーサーはその手に持った武器の一つを振り下ろす。
が、ルゥはそれを見切って躱し、次いで振り下ろされた剣を『凍土』でもって受け止める。
そこに襲い来る残る二本の腕。それはポゥが濃密な大気(アキュレイトブロック)の壁を持って受け止め、その隙に肉薄したゼゥが、本体よりも多少は劣っているとは言え、『観望』によって強化された俺の視力を持ってしても僅かしか見えない程の剣速でもって連撃を放つ。それは正に、受ける事すら叶わぬ不触之剣(フレズノケン)。
そしてそこに重ねるように、彼女のマナが爆発的に膨れあがり、炸裂する。

「闇に沈みなさい！　『シャドウストーカー』！！」

その瞬間、パーサーを、そしてその周囲にいたミニオンを、ノル・マーターを、闇の爪撃が切り裂く。そしてそれに耐えた者が、技を撃ち終えた後のゼゥに対して神剣魔法を繰り出そうとしているのが見え――ちっ！

ゼゥを庇おうと足を一歩踏み出したところで、パーサーと切り結んでいるルゥがチラリとこちらを向いて、小さく頭（かぶり）を振った。

放たれる神剣魔法。

だが、それに被せるように、ルゥがマナを解放した。

「凍てつけ！　『メガバニッシャー』！！」

ルゥから『凍土』を介してマナが爆発的に流れ、膨れ上がるのが視え、次の瞬間――この理想幹中枢そのものが凍結したと思えそうなほどに、広範囲に凍気の嵐が吹き荒れ、ゼゥに神剣魔法を放とうとしていた敵のみならず、少し離れた所に居た敵すらも凍りつかせ、魔法を打ち消して行く。

どうやらエデガは『プロテクション』によって耐えた様だが、ナルカナや世刻と対峙しているエトルはたまった物じゃないだろうな。

それにしても何と言うか……解ってたことだけどこうして改めてみると、頼もしすぎるよなぁ、五人とも。

何にせよこのままじゃ出番が無くなる。

と言うわけで俺はエデガに……と思った所でナナシが一言。

「マスター、売り切れです」

え？　と思って目を向ければ、いつの間にやらエデガと対峙するユーフィー。

ユーフィーなら大丈夫かな、とは思うが、エデガには『プロテク

ション』効果のあるブロックスキルがあるんだよな。
せめてそれを伝えないと、と思ったたところで、

「最大の力を、最高の速度で……　最善のタイミング！！」

斬り上げると共に跳躍し、次いで振り下ろされた『悠久』の一撃はエデガのブロックを軽々と貫き、

「ゆーくんを甘く見たら痛い目に遭いますよ。飛んでけーっ！」
「ぐおおおお！！」

放たれた『ライトバースト』によって閃光と衝撃を喰らったエデガの苦悶の声が響く。
どうやらユーフィーの攻撃はプロテクションし切れて居ないらしい。……と言うか、白属性のプロテクションは持っていない様だ。
エトルの方は……前述の通りナルカナと世刻、永峰が当たっており、その周囲の敵はヤツィータとナーヤが全体を指揮しながら掃討に掛かっていて。
怒り心頭のナルカナ相手に良くやっているとは思うけど……ありゃもう終わるな。

＜……ふむ。主様の出番は最初だけだったようじゃな＞

ポツリと言われたアネリスの台詞が心に突き刺さった。

永遠神剣之章：１０３．達せぬもの、達するもの。

「ゆーくん、力を貸して！　『プチニティリムーバー』！」

エデガのプロテクションの逆を突いたユーフィーの一撃がその障壁を打ち破り、エデガの身に強烈な一撃を喰らわせる。

そこに合わせる様に、全能のパーサーを倒したルゥが『凍土』を構え、背後より肉薄した。

「氷原の中に沈め！　『アイシクルブレード』！！」

「ぐぅっ！　おおおおおぉぉぉぉぉぉ!!!!　き……さ、まらあああぁぁあぁああ!!」

ルゥが振りかぶった『凍土』は、その瞬間に刀身を氷雪に包み、切りつけると共にその体を氷結させ、それが致命傷となったか、苦悶の声を上げながらエデガの体がマナへと還っていく。

そしてそれと時を同じくして、左前方から強烈なマナの気配と猛烈な炸裂音。それに続いてエトルの叫び声が聞こえた。

そちらを向けば、右腕を押さえ蹲るエトルと、少し離れた所に仁王立ちするナルカナ。

見れば、エトルの右腕は肘の辺りから消し飛んでおり、ナルカナがやったんだろうと想像が付く。

その時エトルがおもむろに立ち上がり、どこにそんな力を隠していたか、近くで神剣を構えていた永峰――ファイムを人質に取るように背後から羽交い絞めにした。

攻めあぐねる世刻とナルカナ。

だが、その瞬間だ。

「この……離れろ！」

それまで呆然としていた様子の永峰の瞳に光が戻り、裂帛の声を吐くと共に『清浄』の石突をエトルの腹へと打ち込むと、その腕の中から抜け出し、エトルから距離をとって奴に向けて『清浄』の穂先を向けた。

「の、希美!?」

「うん、私だよ、望ちゃん」

突然の展開に困惑の声を上げる世刻と、それに朗らかに答える永峰。

一体どうなってるんだ。そう他の皆が疑問の表情を浮かべた時、俺達の後ろから誰かが近づいてくる気配。

振り返ったそこに居たのは――

「ふぅ。何とか間に合ったようだな」

「サレス様!!」

タリアの歓喜の声が上がる。

そう、現れたのはサレス。それで誰もが、永峰が元に戻ったのが彼の仕業だと理解したのだろう。

ホント良いタイミングで出てくるよな、サレス。狙ってたんじゃないの？　なんて思わず無粋な考えが浮かび――。

……ふと感じた既視感。

思ったよりも抵抗したのだろうか、エトルは片腕を失うに留まり、エデガは滅んだ。

人質に取られる永峰。タイミングよく元に戻る永峰。現れるサレス。

この状態に何故既視感を感じる？

……決まっている、俺がそう感じるなんて“原作”以外に有るわ

けが無い。そう、まるで、無理矢理辻褄を合わせたかの様なタイミング。……クソッタレ、こんなところまで“原作”通りにならなくていいんだよ！

追い詰められたエトルが取る行動なんて、一つしかないじゃないか！

「ナルカナ！　エトルに猶予を与えるな！　一気に倒せ！！」

じゃないと、ナルを使われる。

そう続ける間も無く俺の言いたいことを察したか、ナルカナが頷いてエトルに対してその手を振りかぶり――

「って訳で悪いけど、あっさり死になさい！　『エクスカリバー』！！」

振り下ろした、その瞬間。

猛烈な破砕音を響かせながらエトルと俺達の間を塞ぐように巨大な“剣”が理想幹中枢の大地を貫いて突き立ち、ナルカナの攻撃はそれにぶち当たって“剣”を大きく震わせるに終わる。

見上げるそこに、悠然と浮かぶは白き衣を靡かせ、鳳凰の翼をはためかせる一人の少女。

彼女は俺の顔を一瞥すると、その顔に微苦笑を浮かべる。

「ごめんなさい、祐さん。まだこの人を斃（たお）させる訳にはいかないんです」

そう言った彼女は、その視線を“剣”の向こうへやり――静かに、言い放った。

「貴様。何を逃げようとしているのですか」

「ぐはあああああ！！」

その言葉と共に“巨剣”の向こうへ降り注ぐ光の砲撃。

そして響くエトルの声。

……エトルを攻撃した？

「くっ！　スールード、何を企んでいる！？」

「さあ、何でしょう？」

ルゥに問われ、彼女をちらりと見ながら答えをはぐらかすスールードは、その視線を再び向こうに向け、再び行われる攻撃。

「……私が逃げる隙など与えると思っていますか？　理想幹神エトル＝ガバナよ。エデガ＝エンプルを失い、ここまで追い詰められた貴方が行う事は……ひとつしか、ないでしょう？」

その言葉で漸く、合点が行った。彼女の狙いは――。

「ナルカナ！　協力してこの剣を壊すぞ！　彼女の狙いは『ナル』だ！！」

「っ！　そう言う事……！」

「祐兄さん、あたしも手伝います！」

「頼む、ユーフィー！！」

『精霊の世界』に突き立っていた物ほど巨大では無いけれど、それでも回りこんで向こうに行くにはでかすぎる。

……けど、今の俺達ならば……そう判断し、ナルカナに駆け寄りながら声を掛け、“剣”を破壊するための力を練って行く。

この『理想幹』に突入する際に行い、確信を得たもの。俺に繰り出せる最も強い一撃である『スピア・ザ・グングニル』を更に高め

ること。
　ぶっつけ本番になっちまうが、俺達なら大丈夫だと信じて。
　ナナシとレーメはその目を閉じ、精神を俺とリンクさせることによってアネリスの中で“魔法”を組み上げていく。
　合成される“光”と“闇”の魔法力は、“鞘”と言うフィルターを通す事によってその性質を“正”と“負”と言うさらに純化されたものへと変え、完全に相反する性質をもつものになったそれらをオーラフォトンと言う緩衝材で包み込み、圧縮させる。
　これで着弾の衝撃でオーラフォトンが弾ければ、正と負の魔力は互いに干渉し合い、対消滅を起こしながら破壊のエネルギーを生み出すはず。
　余り時間はかけられない。けど、失敗するわけにも行かない。だから、出来る限り速く、出来る限り強く、力を籠める。
　俺が力を練り上げている間に、ナルカナもまたその身に膨大なマナを練り上げるのを感じた直後、

「祐！　締めはあんたに任せてあげるから、思い切りやりなさい！」

　どうやらナルカナは後に続く俺とユーフィーが居る事から威力より速さを重視したのか――それでも濃密な程にマナが籠められているのが流石だが――、そう言ってその手を振りかぶる。
　そしてそれに合わせて朗々と響き渡る、ユーフィーの清らかな声。

「悠久の時の彼方より来たれ、大いなる意志よ！　永久なる想いよ！　あたし達に力を！！　『エターナル』！！！」

　それは俺とナルカナ、そしてユーフィー自身を包み込み、俺達へ大きな力を与えてくれる。
　そしてナルカナがその手を振り下ろし――

「我が刃は断ち切る！　連綿と続くその存在の全てを！　最前（いやさき）より来たれ！　始原の剣！」

ユーフィーが『悠久』と共に突貫し――

「原初より終焉まで！　悠久の時の全てを貫きます！　『ドゥームジャッジメント』！」

ナルカナとユーフィーの攻撃は“巨剣”の眼前に見える部分の半ばまでをも抉り取ったところで、留めを刺すべく俺もまたその段階まで練り上げ終えた“力”を解き放つ！

「深遠の闇に抱かれ、峻烈なる光に消えろ！　『エンドオブエデン』！！」

その攻撃は、半ばまで抉られて大きく傾いだ“巨剣”の、その上下を辛うじて繋ぐ残りの半分の部分へ流星の如く突き刺さり――そこを基点に巨大な穴を空け、半ばから完全に折れ砕け、ゆっくりと『幹』を掠めるように倒れ、遥か雲海へと消えゆく“剣”。

そして俺の放った一撃は“剣”を貫通し、遥か後方にある島――方向からして枯れた島へと着弾。

次の瞬間、ここからでも肉眼で確認できるほどの巨大なドーム状の爆炎を巻き起こし、その閃光と衝撃を俺達に叩きつける。

そしてそれが収まったところで、上空に飛んで着弾したであろう枯れた島の様子を見てきたナナシが降りてきて、若干呆れを含んだ声音で報告してきた。

「……えーと、マスター……。枯れた島の地表が吹き飛びました。やりすぎです」

「……は？」

誰かの、「理解できない」と言った声。いや、人間驚きすぎた時ってまともに声も出ないんだな。うん、正直俺も想定以上の破壊力に何て言っていいか解らん。

と思った直後、不意にぽんっと後ろから肩を叩かれたので、振り向けば何ともイイ笑顔のナーヤが。

「……祐。おぬし今何をした？」

何だかとても凄みのあるその笑顔に、思わず反射的に『エンドオブエデン』の構成を話したところ――おもむろに背伸びをしたナーヤに胸倉を捕まれっておいこら！

「ちょっ、ナーヤ、苦しいっ」

「この阿呆！　貫通したから良かったものの、こんな至近距離の標的に『反物質』なんぞぶちかます奴が何処におるか！　危うくその名の通りこの『理想幹』ごと終わるところじゃったじゃろうが！！」

ナーヤのその言葉で、自分が“何”をぶっ放したのか良く解った。よし、あれは封印しよう。必殺技と銘打って、敵諸共味方も必殺したら意味が無い。

「あー……うん、正直すまんかった。とりあえず今のは封印するわ。……あ、ほら、そ、それよりエトルを！」

何か周囲から「誤魔化した……」とか聞こえてくるけど、そんな事よりエトルを何とかするのが先なのは事実。

気を取り直してエトルの方へ向かおうとした俺達の前に、スールードがふわりと舞い降りた。

「お見事、と言っていいものなのでしょうか、今のは。ふふっ……いやはや、祐さん、貴方は本当に私を楽しませてくれます。……ですが……残念ながら、一歩遅かったですね」

そうスールードが俺達に対して言葉を発した直後、先程エデガが倒れた場所に周囲に漂う黒い光――ナル化マナが寄り集まって凝縮していく。

それは次第にエデガの形を成し、その身を復元しているのだが――さらに集り、凝縮する。

それを止めようとサレスが動こうとしたのだが、スールードが睨みを効かせたために動く事が出来ない。

「ぬぅ！　エトルよ、これ、以上は……やめ、やめろおおおおお！！」

そして――エデガが居た場所には、ただ巨大な黒い闇が出来上がった。

それはひたすらに周囲の瘴気を吸収し、どんどん大きくなっている。

これは流石にまずいか……そう思った時だ。ナルカナが世刻に対し、アレを滅ぼすために自分を使えと提案し、その身を本来の姿へと変えた。

今は残ったエトルやスールードより、目の前のアレが最も危険だ。そう説明され、『叢雲』を握る世刻。その時僅かの間、何事かやり取りをしていた様だが……あれか、握られたナルカナがアレな反応をしたのか。

そして世刻が『エデガだったもの』に向き直り――スールードが動いたのは、その時だった。

振り上げられた、スールードの手。

その直後、エデガの上空の空が割れ、現れる古代日本の土偶に似

た巨大な物体。
それはそのまま急降下し、『エデガだったもの』を押し潰す様に着地した。

「な、何だありゃ！？」

ソルラスカの驚愕の声。
皆もまた思い思いの驚愕の声を上げていて。

「……『抗体兵器』」
「おや、これも知っていますか。……流石は祐さんですね」

思わずポツリと声に出た俺の言葉に反応するスールード。

「……お前の目的は、ナルを回収することか？」
「いえ、少し違います。正確に言うと……これは私の目的と言うより、“彼女”の目的なんですよね」

そんな、ともすれば訳の解らないスールードの言葉。
その意味を確かめる間もない、次の瞬間――その抗体兵器が、まるで“何か”に食べられるかのように、頭からざく、ざく、と消えていく――。
これ、は。忘れもしない。……そうか、スールードの言う彼女は……。

「……『最後の聖母イャガ』」

抗体兵器が消えたそこに残っていたのは、残りかすの様な……元のエデガと変わらぬほどに小さくなったナル化マナと、白いローブで裸体を隠した赤髪の女性だった。

そこで俺は漸く理解した。そう、“彼女達”の目的は、ナル化マナを――第一位神剣たる『叢雲』の力の一部を、イャガがその身に取り込む事だったのだと。

◇◆◇

「時深様、準備できました。いつでも『理想幹』へ“門”を開く事ができます」

『写しの世界』にある神木神社。そこの境内にて時深に綺羅がそう報告する。

それに対して時深が「ご苦労様」とねぎらいの声をかけると、綺羅は小さく頭を振った後、あの、と小さく声を上げた。

「本当に、よろしいのでしょうか？」

「彼等の手助けをして、ですか？」

自身の言葉を続ける様に言った時深へ、綺羅ははい、と頷く。

そんな綺羅へ時深は優しく微笑みかけると、

「本来なら私は手を出すつもりは無かったのですが……イャガがこの時間樹に侵入している、と言う祐さんからの情報。それの裏取りが出来てしまいましたからね」

「……ロウが動くならカオスも動く、ですか？」

「そう言う事です。それに、本来ここで私達が守るべきナルカナ様が彼等に同行していますから、ある意味一石二鳥とも言えますし」

時深がそんな事を言った、その時だった。

周囲に、冷たくも静謐な空気が満ち溢れる。

――そうですか。『叢雲』はここを離れているのですね？　ふふっそれは重畳。

何処からとも無く響く声。それに続き、時深と綺羅の前方の空間が裂け、黒い“穴”が開く。

そしてそこから現れる――白いローブ姿の、小柄な人物。

「貴女は――！」

「お久しぶりですわね、時深さん？」

そう言ってその少女にも見えるローブの女性は、その外見に似合わぬ艶やかな笑みをその顔に浮かべた。

「……『法皇テムオリン』……」

「残念ですが、貴女にここを動いてもらうわけには行きませんの。折角イャガさんが順調に動いてくれているのですから、ね。だから――貴女の相手は私（わたくし）がいたしますわ」

永遠神剣之章：１０３．達せぬもの、達するもの。（後書き）

９／２０　指摘を受けて微修正。

永遠神剣之章：１０４．邂逅する、永遠者達。

スールード、そして『赦しのイャガ』を前にして、俺達――特にイャガの強さを目の当たりにしたことのある、俺とユーフィー、ルゥ、そしてルゥと『同調』したミゥ達――の間に緊張が走る。
スールードはそんな俺達の様子を見て取ったか、イャガと小声で二、三話した後、改めてこちらへ視線を向けてきた。
その瞬間、更に高まる緊張感。ゴクリ、と、誰かの喉が鳴った。
だが、彼女から発せられたのは、意外な言葉。

「ふむ……そう構えなくても良いですよ。我々はこの場は失礼させていただきますから」
「何――」

その言葉の真意を問いただす間も無く、彼女達の背後に黒い“穴”――世界を移動するための門が開く。

「それでは、また……そうですね、きっと直ぐに逢う事になると思いますが」
「ま、待ちなさい、スールード！」

ミゥの制止の声に一度ちらりと目をむけ、くすりと小さく笑った後、イャガと共に“門”へと消え行くスールード。
二転三転する展開に呆然とする俺達だったが、そんな時世刻がナルカナにでも話しかけられたのだろう、「あ、ああ」と一度頷き、エデガ“だったもの”に向き直ると、その手にする神剣を構えた。
左手に『黎明』、右手に『叢雲』……何と言うか、豪華な二刀流だな。

「行くぞ、ナルカナァ！　うおおおお！！」

裂帛の気合と共に、世刻はその手にする二本の神剣を一つにするように重ね合わせ――『黎明』はまるで最初から『叢雲』の一部であったかのようにピタリと嵌り、二つは一つの“剣”となる。そしてその刀身からマナが噴出すようにまとわり付き、長大な刃となった。

それにより繰り出される一撃は、エデガ“だったもの”を真っ二つに切り裂き、消滅させる。

その結果を見届け、「ふぅっ」と思わず張り詰めていた息を吐き――その時だ。

俺の直ぐ後ろにナニカの気配。

「祐、後ろだ！」

ルゥの声に慌てて振り向けば、そこにあったのはつい先程に見たばかりのものと同じ黒い“穴”。即ち……。

「“門”だって？　いったい、誰が……」

まさかスールードが戻ってきたのか。突如出現した“門”を見る他の皆もまた同じ事を考えたのだろう、各々その手にする神剣を“門”へと向け、警戒心を最大限に引き上げる。

そして、次の瞬間――“門”から転がる様に飛び出てきた人影。

それは直ぐ前に居た俺の姿に気付くと、わき目も振らず真っ直ぐに飛び込んで来て――。

「お、お願いします！　時深様を助けてください！」

「綺羅！？　どうしたんだ一体！？」

そう、俺の胸にすがり付いてきたのは、『写しの世界』で別れたはずの綺羅だった。

◇◆◇

「はぁっ……はぁっ……！　くっ……まだ、まだです！」

荒い息を付き、地に片膝を着きつつも屹然と目の前の敵達を睨みつける時深。その時深の視線を艶然とした笑みで悠然と受け流しながら、ともすれば少女に見える――否、それ以下にすら見える――体躯を白いローブに包んだ女性、『法皇テムオリン』は挑発するように言う。

「くすくすっ……ほら、時深さん？　頑張らなければこの世界が壊れてしまいますわよ？」

その言葉に続きすっと上げられた右手。それを合図に彼女の背後に控えていた二十名ほどのエターナルアバター――エターナルが産み出すミニオンの様な存在――が一歩踏み出した。

「フフッまあまあ、そう言うものじゃありませんよ。……何せ、僕たち三人を相手にこれだけ持ったんですから、誉めてあげるぐらいじゃないと」

「フシュルルルル……」

テムオリンを宥める様な事を言いつつ、その実時深に大して酷薄な笑みを浮かべて冷たい視線を向けるは、左右の手に一対の双剣を持った黒髪の青年――永遠神剣第三位『流転』を持つ、『水月の双

剣メダリオ』。
そしてそれに同意するように、テムオリンを挟んで反対側に居たもう一人――その頭頂に王冠を頂き、第三位『炎帝』を体内に擁する単眼のみの怪物、『業火のントゥシトラ』が人には解せぬ言葉を発した。

「とは言え、もういいでしょう、テムオリン？　……殺してしまっても」

そう言って時深に『流転』を突きつけるメダリオに対し、テムオリンはやれやれ、と小さく息を吐き、

「そうですわね。それではメダリオさんは止めを。ントゥシトラさんは、アバターを連れてこの世界をマナに還していただきましょうか。還る世界が無くなれば『叢雲』も無駄な抵抗を諦めるでしょう？　……それでは時深さん、御機嫌よう」

「……っ！　やらせる、ものですか！！」

振り上げられる『流転』から逃れ、街へと向かおうとするントゥシトラを止める為に、時深は咄嗟に時間を加速させる。
だが、それはメダリオの狙いの一つであり――。

「掛かりましたね？　喰らって、死んでください。……『流転』」

「しまっ――！」

相手のスキルに合わせて発動される、バニッシュ効果を持ったカウンターのスキル、『流転』。それは如何にエターナルと言えど、下手をすれば一撃で倒されてしまうほどの威力を持つ。
そのスキルはメダリオの代名詞とも言えるものであり、常であれば時深はそのスキルを最大限に警戒し、決して放たれぬ様に行動し

ていただろう。
だが今は……状況が悪すぎた。
メダリオの放った『流転』は、時深の『タイムアクセラレイト』が発動されるよりも速く展開され、彼女へ襲いかかり――それでも尚諦めないと、負けてたまるかと、余裕の表情を持って推移を見守るテムオリンを、冷酷な笑みを浮かべて時深を見下すメダリオを、今正にこの神社から出ていかんとするントゥシトラを睨みつける時深。
その彼女の足元に広がった蒼い魔法陣。そこに目掛けて四方八方から降り注ぐ蒼い閃光。
その瞬間――『流転』が時深に突き刺さらんとしたその時、その『流転』から時深を庇う様にそれが飛び込んで来た。

「なっ……なんだと!?」

響く声はメダリオの驚愕の声。
時深の目に映ったのは、広い、背中。
それは『流転』のことごとくを受けて尚、泰然と佇む。

「……ぁ」

何故ここに、と、呆然とした様子で呟く時深へ、目の前の“彼”は一度振り向いて優しく微笑みかけると、その視線をテムオリンとメダリオに向け――、

「グシュルルル！　アアァアア！！」

その直後、ントゥシトラが押し戻される様に吹き飛んで来て、駆け寄ってくる足音。
“彼女”もまた、“彼”に並ぶ様に立ち、テムオリンへと相対す。

「そこまでです！」

力強くそう言って、テムオリン達へとその手にする神剣を構えるは、『悠久のユーフォリア』。

そんな彼女の姿を見て、テムオリンは一瞬その眼を見開いた。

「貴女は……永遠の小娘……に良く似ていますわね？」

「……ママを知ってるんですか？」

「そう……貴女が……あの小娘と坊やの子ども、ですか」

ぽつりと呟いたテムオリンに対し、ユーフォリアは強い意志と決意を籠めた視線を向け、朗々と名乗りを上げる。

「あたしはユーフォリア。永遠神剣第三位『悠久』の担い手、『悠久のユーフォリア』です！　あなた達にはもう好き勝手させないんですから！！」

「あらあら、可愛らしく吼えてくれますわね？　……それで、貴方は……メダリオさんの『流転』を受けて尚平然としている貴方は、何者ですか？」

そんな彼女へ、テムオリンは一瞬微笑ましげな表情を浮かべた後、その視線をユーフォリアの隣に居る青年へと向けた。

それに対して、その内の“鞘”より蒼く輝く“流転の剣”を引き抜き、彼は言う。

「『鞘』の護り手たる永遠神剣第一位『調和』が担い手……『調和のユウ』。ここからは俺達が相手をしよう、『法皇テムオリン』」

永遠神剣之章：１０４．邂逅する、永遠者達。（後書き）

９／２９　微修正

永遠神剣之章：１０５．交戦、激戦。

「時深様、ご無事ですか！？」

背後に庇った時深の元へ綺羅が駆け寄る音がする。
それを背中に聞きながら、眼前に立ち並ぶ敵達を見やる。
ユーフィーに吹っ飛ばされて来た目玉の怪物、その姿から判断するに『業火のンントゥシトラ』だろうそれは、何を考えてるか解らないが雰囲気的には怒ってる様に感じられる。
そして双剣を持つ優男。メダリオと呼ばれていたので『水月の双剣メダリオ』で確定か。こいつは不快そうな表情を隠そうともせずに浮かべ、俺を睨んできている。
まぁ、先の会話から俺が受けたのが奴の持つ必殺の『流転』である事は解っているし、己の最強の技を受けて平然とされれば無理も無いだろうか。
そして最後の一人、白いローブの幼女、『法皇テムオリン』。彼女は俺の名乗りを受け、一瞬目を見開いて驚愕の表情を浮かべた後は無表情。何を考えているか良く解らん。
この時間樹にナルカナ……『叢雲』以外の一位神剣が居る事への驚きと疑念、と言ったところだろうか。
果たして、今の俺の名乗りは本当なのか、と言う。

「……祐、さん？　何故ここに……？」

信じられない、と言った雰囲気でポツリと問いかけてくる時深。
そんな彼女に「何馬鹿な事言ってるんですか？」と言ってやると、
「……え？」と一言返ってくる。
……まったく、訊くまでもないだろうに。

「助けに来たに決まっている」
「な……そんな、理想幹から、ここまで……？」

呆然とした様子の時深の言葉に思わず苦笑が漏れる。
だってその理想幹まで助けを求めに来られてしまったんだ、応えないわけにはいかないだろう。
あの時、「時深様を助けて」とすがり付いてきた綺羅を宥めて話を聞くと、イャガの侵入を確信できた時深が俺達の元へ助太刀に来ようと、理想幹に『門』を繋ぐ準備を整えたその時、テムオリン達の襲撃を受けたと言う。
戦いの最中、時深はせめて綺羅だけでも、と、その時直ぐに『門』を繋ぐことの出来た理想幹へ彼女を逃がし、だが綺羅はそこで目の前に俺が居る事に気付いて、俺ならばと助けを求めたそうだ。
それに対して俺達が否と言うはずもない。何より『写しの世界』には、学園の皆が居るのだし。
とは言え理想幹において俺達の目的が全て達せられていたわけでもなく、時深の援軍には俺とユーフィー、ミゥ達クリストの皆のみで行く事にし、世刻達には斑鳩の救出を頼んだ。
俺達は綺羅が通ってきた『門』が未だ繋がったままであったので、それを通って『写しの世界』へ。世刻達は斑鳩救出後、ものべーで帰って来ることに。そして今に至るということだ。
俺はテムオリン達に視線を向け、“剣”を構えたまま時深に言う。
「当たり前だ」と。

「綺羅に頼まれたからってのもあるけど……時深さんがピンチだって時に、助けに来ないわけがないでしょう？」
な？　と隣のユーフィーへと振ると、「当然ですっ！」と力強く頷くユーフィー。

「っ！　……ぅ、その……ありがとう、ございます……」

小さな声で、それでもはっきりと聞こえる声で礼を言う時深。

そんな俺達のやり取りを見ていたテムオリンが、「くくっ」と小さく笑みを漏らした。

「あらあら……こんな殊勝な時深さんが見られるとは思っても見ませんでしたわ」

「う、煩いですよ、テムオリン！」

「そう、それにしても……その犬のお嬢さんが連れてきた援軍ですか。ですが……私達にばかりかまけていて良いのですか？　ントゥシトラさんにはエターナルアバターも一緒に着いて行きました。ほら、ここでこうしている間にも、この世界が蹂躙されているかもしれませんわよ？」

一度俺の背後の綺羅へと目を向け、再びこちらを向いて言葉を吐くテムオリンの視線は、俺達がどんな反応をするのか探っている様に感じる。

確かにテムオリンの言う様に、エターナルアバターが街に出ていれば、今頃は大惨事となっているだろう。だが――

「何、それなら問題はない」

テムオリンに対する返事は、俺ではなく、その後ろ――時深と綺羅よりもさらに後ろから聞こえた。

「そちらは全て片付きました。後は貴女達だけです」

声と共に近づいてくる、複数の足音。

振り向いて確認するまでもない。信頼すべき俺の仲間――クリス

トの巫女達。
彼女達の姿に、自分の予想と違う結果が察せられたのだろう、苦々しげにテムオリンの表情が歪む。と、同時に半ば諦めの顔もまた。
「……あれだけのアバターをこの短時間で斃しきったのですか……まったく、予想外の戦力もあったものですね。……ふむ。とは言え、ここで素直に退くのも少々癪というもの」
そう言いつつ、俺に向けてその手にする杖型の永遠神剣『秩序』を向けてくるテムオリン。
「『第一位』を謳う貴方の実力……試させていただきますわ！」
そしてそれが振るわれると同時、俺の周囲の空間に、俺を取り囲む様に複数の“剣”がその切っ先をこちらに向けて現れた。
それらから感じるのは『神剣反応』。
「っ！　祐さん、気をつけて！　あれはテムオリンが所持する永遠神剣です！」
背後から聞こえる時深の声。
それで思い出した。確かテムオリンは、三位以下の神剣をコレクションしているんだったか。そしてこれは彼女の持つ『秩序』を媒介にしてそれらを呼び出し、対象にぶつける攻撃か。
その答えに思い至ると共に、背後に居る時深と綺羅、ミゥ達を覆う様に精霊光の障壁（オーラフォトンバリア）を展開。そして俺と同時に隣に居たユーフィーもまた、俺と重ねる様にオーラフォトンバリアを張るのを感じた。
直後、そこに突き刺さる神剣達。
それらは篭められたマナを急速に高め、着弾と同時に爆発。周囲に衝撃波を撒き散らすも、俺とユーフィーによって二重に張られた

障壁によって、爆発の影響は防ぎきる事が出来たようだ。

「……貴方は少々気に入らない。なので、死んでください」

安心するのも束の間、先の流転を喰らって無傷だった事が余程面白くなかったのか、そんなん知るかと言いたくなる台詞と共に、爆炎が晴れる間も無くメダリオが『流転』を構えて突っ込んでくる。

それに対して“剣”を構えて迎え撃とうとする俺だったが、それよりも速く俺の横を駆け抜けるルゥ。

彼女は俺に対して振るわれるメダリオの『流転』を迎撃するように、俺とメダリオの間に割り込むとその手にする神剣を振るう。

「はぁぁあああ！！」

「ちっ！」

裂帛の声と共に振るわれた大剣がメダリオの双剣とぶつかりあって火花を散らし、メダリオはその勢いを止められ、忌々しげに臍を噛む。

その一瞬の隙を突いて、いつの間に回りこんだか、メダリオの背後から迫るゼゥ。

静かに、されど鋭く振るわれるゼゥの『夜魄』にギリギリで気付いたメダリオは咄嗟に横に飛んでそれを躱した。

そこを追撃しようとポゥとワゥが動いたその時、俺達全員を囲む様現れる大量の“目玉”。

「グル、アァァァアアァァ！！」

「くっ、防御を！」

ントゥシトラの咆哮と共に赤熱する目玉。

動けない時深とその側に寄り添う綺羅を庇うように覆いかぶさり

ながらオーラフォトンバリアを張ると、俺に続いてユーフィーとミゥもオーラフォトンバリアを、ワゥが理力の盾（マインドシールド）を、ポゥが大気とマナの壁（ブロック）を展開するのを感じ、その直後、連鎖的に爆発を起こす周囲の目玉。

轟音を立てて爆炎が俺達を包み込み、腕の中の綺羅がビクリと身を震わせ、時深が小さく身じろぎするのが感じられて、少し腕に力を篭めて、二人に「大丈夫」と言うと、小さく「……はい」と返って来た。

『調和』の能力も有って俺は無傷だが、皆は多少の傷を負ったらしい。とは言え今の不意を突かれた爆発に対してそれで済んだのだから僥倖だろう。

俺は二人から離れ、爆発による煙が晴れる前に敵へ踏み込む。

「ノーマ」

呼びかけに「みぃ」と応えたノーマによって、瞬間的に強化された視界。それは煙すらも見通し、俺の視線の先に標的たる敵――メダリオの姿を映し出す。

それに向けて踏み込む一歩。

俺の気配に気付いたか、煙の向こうのメダリオが迎撃しようと両手の『流転』を構えるのが“視”えたが、構わず更に踏み込む。

足元で炸裂するオーラフォトンを推進剤に、一気に加速し、爆煙を駆け抜けてメダリオへ肉薄する。

それに合わせて、カウンター気味に振るわれる『流転』。俺の姿は見えていなかったろうに、腐ってもエターナル、か。だが！

「レーメ！」

「任せよ！　『ゲイルランサー』！」

振り下ろされる『流転』にぶつける形で放たれたレーメによるア

ーツ。
本来は指向性を持った激風を相手の体全体へとぶつけ、吹き飛ばすそれをただ一点、獲物を振り下ろそうとしていた右腕にぶつけられたメダリオは、一瞬堪えるもその腕を上方へと大きく弾かれ、致命的な隙を晒す。
その空いた胴へと“流転の剣”を横薙ぎに薙ぎ払う様に叩きこむ。
咄嗟に差し込まれたメダリオの左腕に握られた『流転』の片割れ。
それと俺の手にする“剣”がマナとマナがぶつかり合い、弾ける音を響かせながら鍔迫り合い、

「おおおッ！！」

思い切り振り抜いた俺の一撃は、体制の崩れていたメダリオへ浅く入りながら吹き飛ばす。
その先に回り込んでいたミゥの、その手にする『皓白』の先端にマナが光となって集り、彼女の胴体ほどもあろうかと言う巨大なハンマーへとその姿を変え――

「ハァッ！！」

吹き飛んできたメダリオへと叩きつけるミゥ。
ズバンッと何とも痛そうな音を響かせて、地面を転がる様に更に吹き飛ぶメダリオ。そしてそこに更に叩きこまれる石柱群。
その石柱はメダリオにぶつかると同時に爆裂音を響かせて炸裂し、メダリオへ衝撃と礫を叩きつける。

「ぐっ……はっ……」

俺の負わせた傷は浅い、とは言え俺が手にするのは奴自身の強力無比なる“流転”を剣にしたもの。その一撃は見た目以上に重いも

のとなっただろう上にミゥとポゥの追撃だ。流石にメダリオの表情が目に見えて歪んでいる。

その間視界の端に移るのは、ントゥシトラへと切りかかるユーフィーとルゥ、そして二人を援護するように動くゼゥとワゥ。

ントゥシトラが目玉を召喚して爆発させる中、それを華麗に掻い潜って連撃を浴びせるユーフィーとルゥ。

特に刀身が氷雪に包まれた『凍土』は、炎の力を内包し、操るントゥシトラにとっては戦いにくい相手だろう。

「フシュ、グシュルルウウウウ！！」

ントゥシトラが蠢き、ユーフィーとルゥの居る地点を中心に巨大な目玉を召喚する。

そこからあふれ出す業炎。そして巻き起こる爆発。

流石に今のはマズイだろう、そう……まともに喰らっていれば、だが。

「くっ、ワゥ、助かった！」

爆発の直後、そう言いつつ飛び出したルゥは無傷とは言えないが、致命傷には遠い様子で。

そう、目玉が召喚された瞬間、ワゥが飛び込んでマインドシールドを張り、ルゥを守ったのだ。

煙に巻かれて「けほっ」と少し咳き込みながらも「うんっ」と大きく頷くワゥ。

再度ントゥシトラへ肉薄したルゥが『凍土』を振りかぶり――それに備えて動いたントゥシトラだったが、突如足元に広がった“闇”が爆発を起こし、その巨体を傾がせる。

「ルゥ姉さま！　ユーフィー！　今！！」

『カオスインパクト』によって攻撃のチャンスを創ったゼゥの声に応えて、ルゥが刀身を氷に包んだ『凍土』を叩きこみ、ントゥシトラがその一撃に大きく怯んだ隙に飛び込むユーフィー。その身はルゥと同じく先の爆発による傷を負っては居たが、それでもその動きに精彩を欠く事は無く。

「氷晶の青、輝閃の白！　その完全なる調律よ！　『パーフェクトハーモニック』！！」

斬り下ろしから振り上げつつの跳躍、そして叩きつける斬撃。
『プチニティリムーバー』から『プチコネクティドウィル』への連携。
叩きつけられた強烈な一撃によって大地に伏せるントゥシトラ。
残るは……満身創痍のメダリオと無傷のテムオリンか。
そう思った時だ。

「……思っていた以上にやるではありませんか。そう、特にそこのお嬢さん方」

そう言って、ミゥ達クリストの巫女へと視線を向けるテムオリン。
そして彼女は、すっとその手にする『秩序』を掲げ、言葉を紡ぐ。

「ですが……ここまでです。わたくしからあなたがたへ贈るもの。絶対的な破壊だけですわ。……覚悟なさい！」

急速に練り上げられるマナ。そして振り下ろされる『秩序』に誘発され、炸裂する――この、タイミング！

「解放、『流転』！！」

俺は手にする“流転の剣”を解放し、その内に篭められた“流転”を撃ち放つ！

「なっ！　これ、は……っ！」

それは正しくその効果を発揮し、テムオリンの練り上げたマナを拡散させながら、蒼き閃光が彼女へと降り注ぐ。

「くぅぅぁあああ！！」

閃光に貫かれ、炸裂するマナに苦悶の声を上げるテムオリン。
だがそれでも、恐らく俺の放った“流転”が完全じゃなかったのだろう、辛うじて生きている辺りは流石といえるのか。
テムオリンはその身体を何とか起こし、その横で同じく起き上がったメダリオに支えられながら、忌々しげな表情を俺へ向けてくる。

「……やって、くれ、ますわね……。さすがにこれ以上は……無理、ですわ」

「キュル」と弱々しげな声を漏らして起き上がったントゥシトラがテムオリンの横へと戻る。
それを待ってテムオリンは自分達の背後に“門”を開き、

「……貴方のこと、覚え、ましたわ。……この借りは……いずれ」

そんな言葉を残し、テムオリン達はこの場を去っていった。
……やれやれ、俺としてはもう会いたくないものである。

永遠神剣之章：１０６．ジルオルと、セフィリカ。

祐達が『写しの世界』にてテムオリン達と戦っているその頃、『理想幹』に残ったメンバーのうち望は、ナル化マナに侵食されて異形と化したエデガを倒す再に本当の姿……『叢雲』の剣へと戻ったままのナルカナを携え、『ログ領域』へと入った。

かつての光の奔流に満ちた様相は一変し、黒く澱んだ光が満ち溢れる場所へと変わったログ領域。

禍々しくも神秘的なその光景は、望の心に言いようの無い不安を与える。

『ログ領域』を進むたびに、澱んだ空気がまとわり付き、ナルカナ……『叢雲』を携えていなければ、下手をすればそれに飲み込まれていたかもしれない。そんな想いを抱かせる世界。

そこで彼は一人の人物と対峙していた。

彼等が助け出さんとする人物、斑鳩沙月の肉体を乗っ取り、操るもの。彼女の前世、セフィリカ・イルンと。

ここを出ようとするセフィリカと、それを押し止め、沙月を取り戻そうとする望。

ならば押し通るまで。そう言い放ち、望へと剣を向けるセフィリカ。その時望は、彼女の中――その更に奥から、沙月の存在を感じた。

故に望もまた、剣を取る。沙月を取り戻すために。

激しくも気高く、哀しくも美しい二人の剣舞は、しかして望の勝利に終わる。

さもありなん。一方は所有者でもなく力を借りているだけとは言え一位神剣を携え、片やその身体を満足に掌握することすらできていないのだから。

だが。

望はセフィリカへと『叢雲』と共に握っていた『黎明』を突きつ

けたところで、動く事が出来なかった。
無論、彼女を殺す――その身体を傷つける事は出来ない。それは沙月の身体でもあるのだから。
だが、それが理由じゃない。彼は、そう、ただ、哀しかったのだ。剣を打ち合わせる度に、彼女の心に満ちた悲しみが、苦しみが、憎悪が、あらゆる感情が伝わってきた。
そして、己の内からも。
セフィリカの想いを感じる度に、ジルオルからの強い苦しみと、悲しみと、そして――慈愛に満ちた想いが、伝わってきたから。
“彼”の瞳から、一筋の雫が流れる。
それは果たして、どちらが流したものであるのか。
ジルオルの、そしてセフィリカの想いを感じ、望は知った。セフィリカがジルオルにとって、どれほどの恩人であるのかと言う事を。
かつてこの時間樹を創造するための根源的なエネルギーとされたジルオル。彼はその後、この時間樹の奥深くにて保管されていた。
徐々に弱りながら。
セフィリカはそんな彼のバックアップとして外部からこの時間樹に連れてこられた存在であり、弱り続けていくジルオルに寄り添い、語りかけ、献身的に力を与え続けていたものであった。
そして、それを見る“彼女”の瞳からも、また。
『ログ領域』は情報の世界だ。ここに入ったものはその肉体を、魂を、情報へと変換されて存在する事になる。
それゆえにセフィリカは気付かなかった。目の前に居る人物が、己が愛した者の生まれ変わりだと。それも仕方なかろうか。ここに入った時点で、“魂”だけのジルオルよりも“肉体と魂”を持つ望の方が前面に出てしまっていたから。だが、それも今までの事。彼女もまた、剣を合わせるうちに気付いてしまった。目の前の彼が、ジルオルの転生体であるということ。そして、その彼の中に、ジルオルが居るということに。

「そう……ジルオル……貴方だったのね……」

――……セフィリカ……。

――世刻望、我にして我に在らざる者よ。

望は、己が内より聞こえて来た声に一瞬驚き、すぐにその存在を認識する。

そしてそれに答える様に、己の精神を心の内へと向けると、再びジルオルの声が聞こえて来た。

――……望よ。汝に頼む。セフィリカを――殺して【救って】やってくれ。

それはきっと、かつての――望が彼の存在を自覚し始めた頃からすれば、考えられない言葉だっただろう。

これまでのジルオルであれば、恐らくは望の精神に働きかけて干渉し、己の思うように行動させようとしたのではないだろうか。だが、ここに来てジルオルは、望に対してはっきりと「頼んだ」。

我は汝で汝は我。望に対しそう言ってきたジルオルが、はっきりと、望を『望』として呼んだのだ。そう、まるで、以前望がジルオルを否定せず、『ジルオル』と言う個として肯定した時の様に。

だから……望は、しっかりと声に出し、答えた。

「ああ、任せろ」

そう言ってセフィリカへと向き直った望と視線を合わせたセフィリカは、穏やかな微笑みを浮かべた。

先程まで剣を交えていた相手と同一人物とは思えないほどの、柔らかな笑みを。

彼女は言う。憎しみに支配されて、全てが憎くて、悔しくて、恨めしかった。けど、もういい、と。

自分の苦しみを、辛さを、哀しさを、全ての人間に味わわせてやろうと思っていたけれど、もう、いいのだと。

――何故、急に？

そう問いかけた望へ、彼女は言う。もう逢えないと思っていた貴方に……ジルオルに逢えたから、と。

だから――。

「……ジルオル、貴方の手にかかるのなら、私はそれを受け入れる。貴方が送ってくれるのならば――」

解った。そう一言返して、望はその剣を振り上げ、静かに浄戒の力を高めていった。

◇◆◇

テムオリン達を撃退した翌日の夜。住宅街とは言え街中にある神社だ。星なんてのは然程見えるものでもないけれど、雲は無く、月が白々と輝いて、綺麗に見えていて。

何となく、そう、本当に何となく一人神社の境内に座り、夜空を眺めていた時だった。

じゃりっと言う、玉砂利を踏む音に視線を下げると、暗闇の中、誰かがこちらに歩いて来る。

「こんばんは。良い月夜ですね？」

掛けられたのは、そんな取り止めの無い挨拶。

透き通るような声音の中、カランと小さく、鈴の音がした。
幾度も聞いたその音。

「……鈴鳴」

俺の呼びかけに、月の光に照らされて、少女はふわりと微笑む。

「今夜はお誘いにあがりました」
「お誘い？」

不思議と警戒する気が起きなく、変わらず座ったまま一体何をと問い返す俺に対して、彼女はその笑みを絶やす事無く小さくこくりと頷いた。

「はい。……私と貴方で彩る、最後の戦いの舞台への」

俺と戦うのも次が最後と、そうはっきりと口にした鈴鳴は、その微笑みをどこか寂しそうなものへと変えて、言葉を続ける。

「貴方と戦ったのは二度。そのどちらも、『世界』を掛けての戦いでしたね。最初は『精霊の世界』を掛けて。その次は『魔法の世界』と、それに連なる世界を掛けて。ですから最後は……この『時間樹』を掛けましょうか。
この世界を基準にして今日より七日後、私達はこの時間樹の深奥……『根源』へと這入ります。そこで私はスールードの望みを果たすでしょう」

「わたし」と「わたし」。何となく感じる言葉のニュアンスに首を傾げつつ、「君の望みって？」と訊いて見る。

「スールード（わたし）の望み、ですか？　教えるのも吝かではないですが……やめておきましょうか。それを知りたかったらぜひ『根源』まで来てください。私に勝ったら教えてあげますよ」

そう言った彼女は、「ああそうだ」と何かを思い出したかのように呟くと、一歩こちらに踏み出した。

「くすくすっ。私としたことが、『根源』へ来いと招待したのにれに至る道を教えて差し上げていませんでしたね」

もう一歩。どう言う事だ？　と訊く間も無く、余りに無防備で、余りに自然なその動作に、気が付けばすぐ目の前に歩み寄ってきていて。

すっと伸ばされた両手が、俺の頬を包み込んだ。

「ふふっ……行きますよ？」

「何――むぐっ！？」

「ん、ちゅ」

夜の神社の風景を追い出して、俺の視界を鈴鳴の顔が占領して、唇に柔らかな感触と、口中に彼女の舌が這入ってくるのを感じて、一瞬自分の状況が理解できなく――次の瞬間、触れた唇と舌を通して、彼女から俺に『何か』が送り込まれるのが感じられて――。

……

……

……

「……少し夢中になっていまいました」

突然の行為を終えた俺から離れた鈴鳴が、そう言って微苦笑を浮かべた。

おいおいと思いつつも、されるがままだった俺が言えたことじゃないので黙っておく。

どうやら今のは『根源』の座標を教えてくれたらしく、脳裏にソレが在るのが解るのだが……それを認識していると、鈴鳴はちらりと俺を見て、「それにしても」と言葉を紡ぐ。

「私が言うのもなんですが、一切拒絶しないのはどうかと思いますよ？」

そんな事を少し呆れ気味に言われてしまった。

……そう言われてもなぁ。

「ん……本来敵であるお前に言うことじゃないんだろうけどさ」

そこで一端区切って彼女の顔を見ると、「何ですか？」と小首を傾げて続きを促してくる。

「あー……うん、何て言うかな。多分俺は、お前の事はそんなに嫌いでは無いんだと思う」

そう、時に敵対し、戦って、けど助けられて、何だかんだで長く関わってきた相手。

厳密に言えば敵なんだろうけど、憎みきれない相手。

「ミゥ達に聞かれたら怒られそうだけどな」と続けると、くすくすと笑う鈴鳴。そして一言、「ありがとうございます」と。

その直後、鈴鳴の後ろに夜の闇の中においても尚はっきりと解る

黒い“穴”……“門”が現れた。

「さて……名残惜しいですが、私はここでお暇させていただきますね」

そう言って少し寂しそうに微笑んだ鈴鳴は――おもむろに俺に近づくと、再び、今度は軽く触れる唇。

「なっ」

「また、逢いましょう」

不意打ちに俺が何かを言う間も無く、そんな言葉を残して“門”の中へ鈴鳴は消え――“門”もまた、溶ける様に消えていった。

はぁ、と息を吐く。

いやまいった。

……一度軽く頭を振って意識を切り替える。うん、だいじょうぶ。よし。

恐らくものべーがこの世界に戻ってくるのは、早くても明後日だろう。

戦う場が『根源』である以上、相手は鈴鳴……スールードとイャガだけってわけには行かないだろう。そう――この時間樹の創造神にして最高神たるエト・カ・リファ。そしてその手足たるエターナル『絶対なる戒め』と『激烈なる力』とも戦う事になるかもしれない。

後ろの二者はともかく、エト・カ・リファと関わる以上は……はぁ。ナルカナにもどうするか訊いておかないとだめだろうなぁ。

確か彼女とエト・カ・リファは、この時間樹にナルカナが封印されるまで親友だったはず。いやまぁ、この時間樹に閉じ込められているナルカナが今現在どう思っているかは解らないけど。

……いや、そんな理由が有ろうが無かろうが、一言も無しに置い

て行ったらきっと暴れるな。そうなると可哀想なのはとばっちりを受ける出雲の巫女さん達だし。

どちらにしろ、これが最後の戦いになるのは明白だろう。

……何とも、大変な展開になったもんだが……ま、最後まで頑張りますか。

永遠神剣之章：１０７．それから、これから。

鈴鳴が去った後、砂利を踏む足音と共に気配を感じてそちらに視線を向けると、そこにはナナシとレーメを肩に乗せたフィアと、その隣に並ぶアネリスの姿。

「見られちゃったか」
「見ちゃいました」

そんなやり取りの後に、ナナシとレーメがふわりと俺の両肩に移り、「失礼しますね」とフィアが俺の右、アネリスが左へ腰掛ける。
俺が座っていたのは神社の拝殿の裏手にあった小さな階段の一番上。流石に三人並ぶと手狭だな。とは言え、深夜に近かったために少々肌寒かったから、二人に触れる両肩のぬくもりが心地良くはあるのだけど。

「それにしても、良くここが解ったな？」

前述の通り、俺が居るのは拝殿の裏手。態々ぐるりと回りこまねば見つけられないような場所。俺自身ここに来たのは何の意味も無く、本当に何となくだっただけに感心する……と思ったら、

「私達が居ますから」

と、耳元にナナシの言葉を聞いて、なるほど、と納得する。

「して、祐。どうするかの？」

そのまましばしぼうっとしていると、不意にアネリスが訊ねてき

たので、「そうだな」と前置きしつつ、先程の自分の考えを話してみる。即ち、とりあえずエト・カ・リファの親友……であるはずのナルカナには話して――。

「……なるほど。ユウが悩んでいるのは、他の者には話すべきか否か、と言うことか」

レーメの言葉にこくりと頷いて返す。

今回鈴鳴に挑戦を叩きつけられたのは、あくまで俺。である以上、出来るなら俺一人で片を付けるのが一番なんだろう。

それに向かうのが『根源区域』である以上、敵は『根源区域』を護る『絶対なる戒め』、『激烈なる力』のエターナルと、エターナルアバター達。下手をすればエト・カ・リファ自身とも戦う事になるかもしれないし、スールードとイャガは確定だ。つまりはっきり言ってしまうと、エターナルアバターを除けばエターナルではない『旅団』の皆には少々荷が重い相手ばかりなのだ。俺とてアネリスと契約していなければ全力で遠慮したい。

「ですが、きっと……いえ、間違いなくユーフォリアやミゥ達は止めても着いて行くと思いますが」

……そうなのかなぁ……そうなんだろうなぁ……と、ナナシの言葉に小さく溜息が。

いや、別にそれが迷惑って訳ではない。むしろ有り難いことこの上もない。それじゃあ今の溜息は何だって？　決まっている。自分自身に対して、だ。

俺一人で片を付けるのが一番、なんて言っておきながら、心のどこかで誰かを頼りにしている、そんな自分。

そんな風に思ったのを見計らったように、「ご主人様」とフィアがそっと手を取って言葉を紡ぐ。

「幾らエターナルになったとはいえ、ご主人様一人で出来ることには限りがあるのは変わりません。一人で行うには難しい、そんな物事に対して“誰か”を頼るのは決して恥ずかしいことじゃないです。……むしろ、一人で出来ると意地を張って、結果失敗して“誰か”に迷惑をかけることの方が、余程恥ずかしいことだと思いますよ？」

諭すように言われて、ははっと、思わず笑みが漏れた。

うん、そうだな――誰かを頼りにして、そして出来る事なら誰かに頼られて。“俺”と言う人間はそれでいいのだろう。そう――

「全てを一人で背負う必要も、背負える道理もない、か」

「その通りじゃ、主様。もっと我等を、そして皆を頼るがよい」

にこりと、月明かりに映える笑みを浮かべたアネリスへ、「ああ、そうするよ」と自分のやるべき事を確りと定めて頷いた。

……

……

……

鈴鳴に会った夜の翌日、『出雲』にてその事をユーフィー達に話すと、何故その時直ぐに呼ばないのかとそれはもう怒られた。

ちなみに、最後の“座標の受け渡し”に際しての一連のやり取りについては言っていない。っていうか言えない。……どうせすぐにバレるんだからって？　言うな。無駄な抵抗なのは解ってるんだ。

それはともかく。

俺の話を聞いていたユーフィーとミゥ達へ、恐らく『根源区域』

にはスールードやイャガだけではなく、この『時間樹』の創造神が、そしてその配下たる存在が居るであろう。この戦いは今までで一番厳しいものになるのは確定して居る様なものだ。

そこまで言ったところで、「祐」と一言ルゥに呼ばれ、彼女はゆっくりと頭を振って、

「例え何が居ようと、何が有ろうと私たちはきみと一緒に行く」

はっきりと、強い意志の篭った声で言われて、それに続いてユーフィーやミゥ達には「当然ですっ」と力強く頷かれてしまった。

昨夜のナナシの予想の通りの返事。けれど、それが凄く嬉しくて。

「うん。頼りにしてる」

だからはっきりと、彼女達へ自分の想いを口にする。

話の流れから止められると思っていたのか、少し驚いた顔をしたユーフィーの頭を撫でると、「任せてください！」と花の様な笑顔を浮かべた。

「出来れば、私も一緒に行きたいのですけど……」

そんな折、俺達の様子を見ていた時深さんがぽつりと言った。

とは言え彼女の顔色は傍目に見て解る程にすこぶる悪い。……無理もないよな。何しろ俺達が来るまで、この世界を護るためにテムオリン達をたった一人で相手していたのだから。相当消耗が激しいのは誰が見ても明白だった。

実際、綺羅も時深の事を凄く心配そうな顔で見ている。

「時深さん、無理しないでください。あと数日で回復するような調子じゃないでしょう？」

そう言っても矢張り素直には頷けないのか、「……ですが……」となおも言い募る。……まったく。

幾ら何でも今の時深さんを戦いの場へ借り出すような真似をするわけが無いだろうに。

「……時深さん、確かに時深さんが一緒に来てくれたら、心強いし嬉しいです。けど、その為に無理をしてほしくないし、させたくも無いんです。だから……まぁ、頼りないとは思いますが、俺を……俺達を信じて、待っていてもらえませんか？」

そう言うと、俺の言葉を吟味するように、こちらをじっと見てくる時深さん。そしてふぅっと小さく息を吐いて、「……解りました」とこくりと頷いてくれた。

納得してくれてなにより。それから「その代わり、必ず皆さん無事で還ってきてくださいね？」と続けた彼女へ、それぞれがしっかりと頷いて答えた。

もしかすると、“全て”が“終わった”時点でこの時間樹から出る事になるかな、なんて思っていたけれど、これで一度はここに戻らなければいけなくなった様だ。

やれやれと息を吐いたところで、不意に時深さんが俺の手を包みこむように握ってきた。

いきなり何だと、ちょっとドキッとしながら「どうしました？」と声を掛けると、彼女はその頬を少し赤くして——何だこの展開は。

「あ、祐さん。私は……その、貴方のことを頼りないなんて思いませんよ？　そう、少なくともあの時——私を助けに来てくださった後の時の貴方の姿は、とても頼もしかったですから」

柔らかな笑みを浮かべて、そんな事を言ってくださる。何と言う

か、思わずドキリとしてしまったじゃないか。
横から環さんの「あらあら」何て楽しそうな声が聴こえてきて、時深さんが「あっ」と慌てた様子で俺の手を離したところで、時深さんの横にすっと進み出て、

「あの、祐様。……その、皆様の無事を、時深様と一緒に祈っております」

そう言ってペコリと頭を下げた綺羅。
そんな彼女の下げられた頭を「ありがとう」と言いつつ撫でてやる。少しくすぐったそうにしながらも、気持ち良さそうに目を細める綺羅。ふと彼女の尻尾がぱたぱたと小さく揺れているのが目に入った。
俺の視線に気が付いたのか、「だ、だめですよ?」と尻尾を隠すように抑えた彼女の姿がまた何とも可愛い。
そんな風に綺羅に癒されたところで――

「何このロリハーレム」
「うおお!?」

おもむろに後ろから声を掛けられて、思わず飛び上がりそうになった自分を抑えつつ振り替えると、呆れ顔のナルカナ以下世刻達が居た。
……お早いお帰りですね。

永遠神剣之章：１０８．決戦に、向けて。

不意を突いて背後から現れ――いやまぁ単に俺が出入り口の前に居たと言うだけなのだが――何やら聞き逃せない一言を発してくれやがったナルカナ。

一方でそのナルカナの言葉に反応したのは俺ではなく、先程まで俺の前に居た人物だった。すなわち――

「だ、誰がロリですか！」

時深さんである。

だがその時俺は見た。時深さんの言葉を受けたナルカナの顔がにんまりと、それはもう楽しそうな笑みに変わったのを。恐ろしい。恐らく俺の陰になっているから、時深さんからはナルカナの表情は見えないだろうが。

案の定と言うか、ずいっと俺を押しのける様に前に出て、時深さんと向き合うように仁王立ちしたナルカナ。

彼女の動きを追って振り返った俺の目に入ったのは、恐らくナルカナの表情から何かを察したのだろう「しまった」と言う表情の時深さん。

そしてやはり、何とも楽しそうな声音でナルカナが言葉を発した。

「ん～？　あたしは状況を指して言っただけで、別に“誰”とは言って無いけど？」

「う〃」

小さく唸った時深さんに、さらにずいっと詰め寄るナルカナ。その顔は俺からは見えないが、きっとイイ笑顔を浮かべているのだろう。そう、楽しい玩具を見つけた子どもの様な。

ふと横を見ると、「うわぁ」と言った表情を浮かべた世刻と目が合った。

「おい世刻、ナルカナを止めろよ」

「無理です」

ですよね。

その一方で、ナルカナによる口撃は続いているようで、

「第一あたしが言った時点で祐に可愛がられてたのは綺羅だったのに……どうして時深が反応しちゃったのかしらね？」

「そ、それは……」

「ん？　それは？　ふっふっふ……いや～あの時深がねぇ……うんうん。それにしてもやるわね、祐。この調子で望の周囲のも二、三人持っていってくれないかしら」

「って何ですかそれは！　私は別に、その……う、うぅ」

ちらりとこちらを見る時深さん。助けを求める様な視線を送ってくる……んだけど、はっきり言ってテムオリンより性質が悪い相手です。それになんと言えばいいか、俺が行ったら事態が余計悪化しそうな気がしてならない。

どうしたものかと思っていると、どうやら無事に救出されたのだろう、斑鳩が横に並ぶと同時に話しかけてきた。

「……こうして改めて見ると、青道君もすっかり望君の同類よね」

何とも失礼な物言いである。俺と世刻、どちらに失礼かはあえて言わないが。

……とても的を得た言葉だと思うぞ、なんてレーメの念話は聴こえない。

「同類って……どう言う意味ですかそれ」

そしてそんな斑鳩の言葉に対し、少々不満げに呟く世刻。

俺と斑鳩は一瞬視線を交わし――

「……お、斑鳩、久しぶり」

「あ、うん、久しぶりー」

とりあえず無かった事にした。戦場でも中々出来ない見事なアイコンタクトである。

「……って、死地から生還した私にかける言葉にしてはちょっと軽すぎない？」

「感動の再会は世刻達と散々やったろうしな、俺とお前ならこんなもんだろ。とは言え……まぁ、お帰り。無事で何よりだ」

そう言いつつ小さく手を挙げた俺に対して、「まったく」と苦笑を浮かべながらも、斑鳩は「ただいま」と言葉を返し、挙げた俺の手に自分のそれを打ち合わせ――パンッと、乾いたいい音が響いた。

「それで、俺達が先に戻ってから直ぐに助け出せたのか？　……いやまぁ、こうして斑鳩が居る以上、最終的に上手く事が運んだんだろうとは思うが」

世刻達を信じて任せてきたとは言え、あの後どうなったのかはやはり気になっていたので訊いてみると、世刻は一瞬渋い顔をし、

「俺と神剣の状態に戻ったナルカナは、先輩達が“門”をくぐった後直ぐに『ログ領域』に入りました。そこで多少ありましたけど、

無事に沙月先輩は助け出せたんですけど……」
「外で待ってた私達は、生き残ってたエトルと戦闘になっちゃいまして」

と、俺達の話が聞こえていたのだろう、永峰が言葉を挟んでくる。
……それにしてもエトル、ね。あの時点でアイツはナルカナにやられて満身創痍だったはず。

「何でまたエトルと？」
「……解りません。何かに怯えた様に駆けて来て、私達の間を強行突破しようとしたんです。……そう、まるでやってきた方に居る“ナニカ”よりも、私達全員を相手にする方がまだマシだって雰囲気でした」

永峰の説明に、一体何があったのかと考え込む……が、幾ら考えてもさっぱり解らん。まぁ、その場に居なかった俺にとっては、今聞いた話だけでは何とも判断できないのは当然か。

「……じゃあ、それ以外で何か変わったことは無かったか？」
「あ、あります。えっと、望ちゃんが沙月先輩を助け出して『ログ領域』から出てきた後、『ログ領域』からあの黒いマナ……ナル化マナでしたっけ、あれが一杯出てきたんです。それで、こっちの世界も心配だったし、巻き込まれないうちにさっさと逃げようって話して脱出したんですけど……ものべーで脱出する間際に空が割けて、そこからあの土偶みたいな奴が沢山現れました」
「……『抗体兵器』が……？」

斑鳩が『ログ領域』に取り残された時の状況から見て、あそこがエトル達の手によってナル化マナに汚染されきっていたのは想像に難くない。

再び『理想幹』と繋がった――ゲートと言う穴が開いたために、そこからナル化マナが溢れ出てきたって事からも合っているだろう。

そして恐らくはそれに反応して現れた沢山の抗体兵器。

果たして、目に見えない“裏側”でどんな事態が進行していたのか？　そんな疑問が頭を過ぎった、その時。

「はい。それでルプトナとソルが見たらしいんですが、その土偶……抗体兵器でしたっけ。大半は空の裂け目に戻っていったみたいなんですが、何体かはあの時みたいに“消滅”したらしいんです」

「何……ちっ、そう言う事か」

次いで発せられた世刻の言葉で、ようやく解った。

溢れ出したナル化マナに対して送り込まれてきた抗体兵器。それを“消滅”させた存在は間違いなくイャガだろう。……となると、エトルが怯えた様に逃げてきた“ナニカ”もまたイャガ――もしかするとスールードも居たのだろう――であり、状況から察するに、抗体兵器を送り込んで来たのは恐らくエト・カ・リファか。スールードが呼び出していたのだとすれば、イャガの腹の中に消えるのは「何体か」なんていわずに全部だろうし。

しかしだ。そうなるとエト・カ・リファは『理想幹』と『ログ領域』の現状――不用意にナル化マナを使用されて汚染された状態を把握しているって事になる。……まぁ、相手はこの時間樹を創り出した創造神。それぐらいは当たり前か。……何しろ、この『時間樹』はエト・カ・リファの神剣そのものなんだから。

（これは……想定する中で最悪の方向に進んでいますね）

周囲に配慮してか、ナナシが念話でそんな事を言って来た。それにまったくだな、と返事をしたところで、

「それで、青道君達は今は一体何の話を？」

恐らく俺達がここに集っていた事が引っ掛かっていたのだろう、現状を問いかけてくる斑鳩。

ナルカナも居るし丁度いいかと思い、昨夜の出来事を話すことにする。それを聞いてどうするかは、彼等が判断することだ。

「……そうだな、丁度いいからお前達にも話しておくか」

ナルカナも居るしな、と視線を向けた先には――

「んで、一体何があったの？　ほれほれ、言ってみなさい？」

「な、何もありませんってば！」

「もー……ナルカナさん、時深さんをいじめたらダメですっ」

「ん～……そうは言うけど、いいのユーフィー？　このままだと……時深と綺羅に祐を獲られちゃうかもしれないわよ？」

「っ！　……そ、それは……うぅ……でも、その、別に祐兄さんはあたしのだって訳じゃないし……」

時深さんへまとわり付いているナルカナと、それを止めようとして返り討ちにあっているユーフィーの姿が。一体何の話をしてるんだよおい。

……それにしても生き生きしてるなぁ、ナルカナ。と、半分当事者ながらも関心してしまう。

そしてナルカナはユーフィーに何事か耳打ちし……ちらりとユーフィーが俺に視線を向けた後、赤くなってあわあわしてる。

……っておい、ナルカナ、ユーフィーに何を吹き込んだっ！

一方で時深さんは何とも疲れた目でこちらを見てきて、丁度彼女等へと視線を向けていた俺と目が合った……ので、そっと逸らしてみる。あ、涙目になった。

そんな折に不意に右袖を誰かに引かれ、視線を向けると困った顔の綺羅が。

「あの……祐様、申し訳ありませんが、時深様を助けていただけ無いでしょうか。流石に可哀想です」

……アレを止めるのか……とは言え確かに何時までもアレを放っておいたら進む話も進まない。やれやれ、仕方ないか。

嵐の中に飛び込む覚悟を決め、「解ったよ」と綺羅の頭をぽんと撫で……きゅっと、今度は左袖を引かれる感触に顔を向けると、いつの間に来ていたのかユーフィーが俺の腕を抱き締めていらっしゃって。

「……えーっと……ユーフィー？」

「あ、う、ごめんなさい……」

声を掛けると寂しそうに腕を放すユーフィー。あーもー……はぁ……ナルカナが変な事吹き込んだからか、おい？

しょうがないなぁと思いつつも彼女の頭も撫でてやると、途端に花が咲くような笑顔を浮かべる。

一方でそんな俺の様子を見て、だろう。ナルカナが向こうで腹を抱えているんだが。アノヤロウ。

「アネリス、頼む」

「……はぁ、仕方ないの」

そう言いつつ、ツカツカと躊躇う事無くナルカナへ近づいていくアネリス。

「青道君、彼女が噂の神剣の化身？　……本当にユーフォリアにそ

っくりね」
「ああ、アネリスって言う。よろしくしてやってくれ」
動くに動け無い俺の様子に苦笑しつつも話しかけてきた斑鳩とそんな会話をしているうちに、アネリスはすっとナルカナの背後に立ち――
「いい加減にせい、この阿呆」
スパンッと何とも小気味の良い音が響いた。
…
……
……
「……この『時間樹』を賭けての勝負、か。一体何をする心算だろうな」
とりあえず全員が一度落ち着くのを待って、先程ユーフィー達に説明したのと同じ事を伝え、それを聞いたサレスが何とも疲れた様子でそう呟いた。
そんな表情になる気持ちも解るから何とも言えないが。一難去ってまた一難の繰り返しだからなぁ……。
「正直言って鈴鳴……スールードの最終的な目的は解らない。とは言え向こうにナルを取り込んだイャガが居る時点で、放っておいたら碌な事にならないのは目に見えてるんだけどな」

俺の言葉にサレスは「ふむ」と一つ頷くと、

「その口ぶりでは……祐、君は『根源区域』へ向かう心算の様だな？」

問いと言うよりは確認と言った風に聞いてきた。

それに対して俺が頷いた直後、ユーフィーとミゥ達がサレスの前に進み出る。

「サレスさん、祐兄さんだけじゃなくて、あたしと……」

「私達も、当然一緒に行きます」

彼女達の稟とした言葉にふっと小さな笑顔を浮かべ、サレスは一言「そうか」とだけ言った。

そんな折、ソルが「けどよ」と声を上げた。

「その『根源区域』とやらに居るのは、この時間樹を創ったっていう創造神なんだろ？　だとしたら、スールードやイャガが何をたくらんでいても、早々何とかなるって事は無いんじゃないか？」

確かにそう言いたくなるのは解る。俺とて、エト・カ・リファが勝てば何の問題も無いのならば、いっそエト・カ・リファ側に付いてしまいたいぐらいだから。けど、そうも行かないんだよなぁ……。

「どちらにしろ……スールード達が勝とうがエト・カ・リファが勝とうが、俺達にとって最悪な事態な事には変わりはないよ」

そう言うと「何でだよ？」と訊いて来るソル。

「そうだな……お前等が『理想幹』から脱出する時の状況を世刻達

から聞いたんだけど、それから察するにエト・カ・リファは理想幹やログ領域の状態を把握しているのは確実なんだよ。その場合彼女がどんな行動に出るか……ナルカナ、どう思う？」

先程アネリスに引っ叩かれてむすーっとしてたナルカナは、俺の問いに対して「それをあたしに訊くの？」と言いつつも答えを口にする。

「そうね……間違いなく、この『時間樹』そのものを“リセット”して、まっさらにするわね、あの子なら」

「なっ……何だと！？」

最も大きな声を上げたソルのみならず、世刻や斑鳩……サレスすらも、その答えは想像していなかったのだろう、各々に驚愕の声を漏らしていた。

「本当に？」と言うタリアの問いに、ナルカナは「エト・カ・リファにとって最も優先されるべき事は、あたし……『叢雲』を封印することだから」とだけ答え、口を噤む。

「どう言う事よ、それ？　あんたを封印しておくにしても、時間樹全部を“リセット”する必要なんてないじゃない」

それは最もな疑問なんだが、どうやらナルカナは説明するのはパスらしく、目で「後はあんたが説明しろ」と言ってくる。……やれやれ。

「エト・カ・リファにとっては必要なことなんだよ。何しろ、時間樹そのものをダメにしてしまう可能性のあるナル化マナを使う様な奴がいるんだからな。ならばいっそ……ってことさ」

「つまりは……全部あの理想幹神どものせいか」

俺の説明に対して、忌々しげに言うナーヤ。
そんな彼女へ「そういうことだ」と言うと、はぁ、と小さくない溜息を吐く。

「ならば……我等の取る道も一つしかあるまい」

そう言ったナーヤに斑鳩が「そうね」と答え、ぐるりと皆の顔を見渡し、全員が同じ気持ちであるのを確認した後、サレスに向き直った。

「サレス――私達も『根源区域』に向かいましょう。この時間樹を……この世界に住む、大切な人達を護るために」

永遠神剣之章：１０９．幕間、がんばれのぞみん。

「そういえば、『根源区域』に向かうのはいいとして、場所って解るんですか？」

とりあえず今後の方針が決定した後、出発を明後日に定めたので――この世界に急いで戻ってくるために無理をしてくれたらしい。通りで予想よりも遥かに早く帰ってきたわけだ。つまり、明日一日はものべーにたいする休養日である――一度解散しようかと言う時にふと永峰が疑問の声を上げた。

彼女がそれを疑問に思うのも当然だろう。向かう為の足となるものべーは彼女の神獣なのだから。

俺はと言うとその座標を知ってはいるのだが、流石にそれは言い出せなかった。理由は推して知るべし。

とはいえ結局誰も知りませんでした、じゃ洒落にならんので、他に誰も居なければ俺が名乗り出ねばならないだろうが。……そういや“原作”だとどうだったんだっけか。

なんて思った矢先だ、世刻が一瞬頭を抑え、それを見て取った彼のレーメが「どうした、ノゾム？」と心配げな声を掛けたところで、顔を上げた世刻が言った。

「……ん、ずっとエト・カ・リファの側に閉じ込められていたらしくて、どうやらジルオルが知っているみたいだ」

その言葉を聞いた瞬間、“彼”と“彼女”のこの先を予測したのだろう、幾人かの――神剣さんとか会長さんとか女王様とか大統領とか野生児とか――の顔つきが変わったのを俺は見た。恐ろしい。

そして同じ事を考えたのか、永峰が「へ？　……ふぇえええ！？」と驚いた声を挙げ――それを聞いた世刻が少しむっとした表情を浮

かべた。……おやおや？
その世刻の反応をしっかりと目に留めたのだろうか、会長さんと野生児の表情が……その、なんというか、にやりと。いやほんとお前等怖ぇよ。

「……希美ちゃんが嫌がってるし、無理強いはダメよね？」
「だよね。無理矢理は良くないよねぇ」
「んなっ……！」

かつての自分達を棚に上げていけしゃあしゃあと言う二人に絶句する永峰。
それでも彼女は負けじと声を振り絞る。

「け、けど、ほら！　他に座標を知ってる人も居ないみたいだし！」

そう、世刻――俺は名乗り出る気が無いので除く――以外に根源の座標を知る者が居なければ、結局の所世刻から座標を受け取らなければいけないのだ。そして事ここにいたってアレ以外の方法が示されない以上、きっとアレが一番手っ取り早い方法なんだろう。
さて、この女の戦いを制するのは誰か。
……なんてちょっと楽しくなってきたのが悪かったのだろうか、カティマが「そういえば……」と言って、チラリと俺を見てきた……なんだ？

「先程希美が座標の質問をした時、祐が一瞬反応したように見えましたが……知っているのですか、祐？」

言葉を紡ぎながらツカツカと歩いてきて、俺の前で止まってじっと見てくるカティマ。
カティマから発せられる言い知れぬ迫力に、俺は思わず「お、お

う」と頷いていた。
その直後――目の前のカティマ越しに、ガッツポーズする一部の方々の姿と、「がーん」という擬音が聴こえそうな雰囲気の永峰の姿が。……すまん。
そんな中、ソルがふと疑問をぶつけてくる。
「……って言うか、何で知ってるんだ？」
「ん、ああ、鈴鳴がくれ……あ」
次の瞬間、俺の目の前にいたカティマを押しのけるようにしてルゥが詰め寄ってきて。
「……ふむ、少々聞き捨てなら無い言葉が聞こえた気がするのだが。……祐。エヴォリアといい鈴鳴といい、きみはもう少し節操と言うものを持った方がいいのではないか？　まったく、元敵だとか現在進行形で敵の相手とするぐらいだったらもっと先にしないといけない相手がいると思うのだが。……いや、解っている。きみの心に“渡り（アレ）”が引っ掛かっている以上、きみとそうなるには多少強引にでもこちらから行かねばならないというのは。……はぁ……やはりもっと積極的に動かねばならないだろうか……」
「ご、ごめんなさい」
立て板に水を流す様にジト目で言ってくるルゥ。俺が出来るのはとりあえず謝ることしかなかった。むしろ他に言う事があるんだったら教えて欲しい。何か中盤以降から嬉しくも申し訳ない内容に移り変わっているんだが。
「……と、とにかく、ほら！　望君以外にも座標を知っている人が居た事だし！」

口撃にさらされている俺の様子に冷や汗を浮かべつつ、空気を切り替える様に言い放つ斑鳩。
それに続いてナーヤが「ふむ」と相槌を打つと、
「それにしても、祐だったらのぞみも満更ではないのではないか？」
「へ？」
ナーヤの言葉に続いて、ソルがおもむろに「あぁ、なるほどな」と手を打って、
「確かに理想幹神に連れ去られた時も、望が幾ら呼びかけてもダメだったけど、祐の一声で我に返ってたもんなぁ」
「いや、あれはファイムって言う」
「まぁまぁ、照れない照れない」
「照れてないってばあ！」
何だか酷く雲行きが怪しくなってきた。そう、永峰のみならず俺も。おかしい、どうしてこうなった。
とりあえず先程までのゴタゴタは棚に上げて目の前のルゥと近くのミゥ達やフィアなんかに助けを求めようとしたその時、
「さ、望君からも一言っ！」
「えーっと……希美、よかったな？」
「がーん……う～……もう知らない！　望ちゃんのばかあ！！　いいもん！　先輩、行きましょう！！！」
「ってこら、おい、永峰！？」
がーっと憤慨した永峰は、ズンズンと俺に近づいてくるとおもむろに腕をとって引っ張っていく。
「ああ、祐兄さんが希美ちゃんに攫われました！」なんてユーフ

ィーの声が聞こえたので、引き摺られながら「ユーフィィィィ……」なんて手を伸ばしてみたり。

「先輩、バカやってないで歩いてください」
「はい」

そしてのんびりと事態を見守っていた環さんへ「隣の部屋借りますっ！」と言うと――「はい、かまいません」とあっさり返された――そのまま部屋を出て隣の部屋へ。

入ったのは、障子で仕切られた、四畳ほどの板張りの小さな部屋。その部屋へ永峰に押し込まれるように入り、部屋の中央辺りまで進んだところで――俺の前に立った永峰が小さく溜息を吐いた。

「……うぅ……先輩、どうしましょう……？　それにしても、みんな勝手だよ。第一先輩だって、好きでも無い私とキスするのなんて嫌ですよね？」

どうやら本気で勢い任せの行動だったらしい。

相談に乗る前にとりあえず「ばーか」と軽く小突いてやった。はぁ、やれやれ。

「永峰……お前はもう少し自分の容姿に自身を持て」
「ふぇ？」
「仮に俺がする事になったとしたら……お前みたいな可愛い娘とキスできるのに、喜ばない訳が無い」

そう言ってやると真っ赤になった。うむ、愛い奴。

「……俺から永峰に出せる提案は二つ」
「……なんですか？」

さっきまでとうって変わってしょんぼりとした様子に苦笑しつつ、何となくいつもユーフィーやミゥ達にする様に、その頭に手を置いて軽く撫でてやる。

「諦めて俺から座標を受け取るか、諦めずに世刻から受け取るか」

「ですよね……はぁ」

まったく、さっきまでの勢いはどこに行ったんだか。

仕方ないなぁと思いつつ、撫でる手を強くしてやると、「あぅ」と小さく声を上げた。

「とにかく、座標の入力は出発ギリギリになっても大丈夫なんだから、最後まで頑張ってみろよ。それでももし、万が一ダメだったら……かつての斑鳩やルプトナのよりすんごいのをくれてやる。覚悟してろ」

そう言うと、俯いていた顔を上げて「じゃあ、頑張って望ちゃんからもらわないといけませんね」と、ようやく笑顔を見せてくれた。

永遠神剣之章：１１０．ただ、ともに在ることを。

本日は休養日。……とは言えその対象は基本的にものべーであるため、その背に乗る物部学園へのエネルギー供給――電気や水道なんか――は最低限のものに抑えられており、そのためどうやら今日の食事は『出雲』の方で用意してくれた。もっとも、ここには学園の生徒達も逗留しているため、彼等に出すついでだとのことだけれど。

何にせよ久しぶり――と言っても一週間程度だが――に学園の皆と一緒の食事であり、現在も俺の座っている周囲にも学園の制服を着た者達がいて、それがなんだか懐かしい。先にも述べたが一週間程度だったというのに、だ。まぁ、それだけ長く深く、学園の皆と共に過ごしていたという証拠なんだろう。

食事を終え、フィアの淹れてくれたコーヒーをのみつつそんな事を考えていると、ふと左前方に座っていた、同じく食事を終え何だかぼんやりとしていたルゥと目が合った。……途端に慌てた様に目をそらされる。ルゥの近くに座っているミゥ達も何だか様子が可笑しい……と言うか、ぎこちないと言うか。

「何だ、祐？　振られたか？」

どことなく楽しそうに訊いて来るのは俺の正面に座ったソル。そして彼の向かって右隣に座っていた森が「ほほぅ」と声を漏らす。

そんな彼等に対して何か言う前に、右肩に座ったレーメが「安心しろ、ユウ」と言いながら俺の頬をぺちぺちと叩いた。

「あれは大方、昨日のルゥの発言を意識しすぎてるだけだろう」

そんなレーメの言葉を受けてぎこちない雰囲気があわあわと慌て

た感じになるルゥ達と、何だよソレ、とぐったりとテーブルに倒れこむソル。

一方で俺の左隣に――ルゥの正面だ――に座っていたフィアが「んー……」と何事か考えたと思ったら、おもむろに俺の腕を抱きかかえる様に取った。……えっと、フィアさん？

俺達の間に何かただならぬ空気でも感じたか、突っ伏していた顔を上げて半眼で睨んでくるソル。

一瞬ルゥ達に視線を送り、それから俺を上目遣いで見上げてきた彼女は予想だにしなかった言葉を吐いた。

「……ご主人様、キス、しましょうか？」

直後、ソルが上げていた顔をテーブルに打ち付けるガンッて音と、俺の後ろのテーブルに座っていた誰かが噴出してむせ返る声がした。チラリと後ろをみると、赤いバンダナに学園の制服。ああ、スバルか……すまん、スバル。

とりあえずこちらを見上げてニコニコしているフィアに顔を向ける。

「何なんだいきなり？」

「いえ……戦闘が始まっちゃうと私って影薄くなりますからねー。今の内にアピールしておこうかと」

「ちょ、おい」

あはっと笑いながらゆっくりと顔を近づけてくるフィアだったが、

「こらー！　ズル……こんな場所で何やってるのよ！」

「はーい、ごめんなさい」

もうちょっと、と言った所でゼゥが声を上げるとぱっと離れる。

ちょっと惜しい、と思ってしまったのは仕方ないことだろう、うん。

（……何やってるんだよ）
（ごめんなさい、つい。何となく見てられなくて）
（止められなかったらどうしたんだ？）
（その時は存分にしちゃうつもりでしたよ？）

何となく周囲の空気が先程までとは違う感じになった中、そんな念話を交わしたところで「あの……」と声を掛けられ、振り向くとユーフィーが立っていた。

「少し……二人きりでお話できないでしょうか？」

おずおずと申し出された問いに「いいよ」と答え、立ち上がる。
ナナシとレーメにはフィアの所へ行っててもらい、ユーフィーと共に広間を後にした。

……
……
……

「ごめんなさい、その、呼び出したりして……」

『出雲』の広い庭の一角。『二人きりで』と言われたために、俺とユーフィー以外誰も居ない空間。
俺の前に立つユーフィーが、申し訳無さそうな表情を浮かべてそう言った。
それに大丈夫だよ、どうした？　と返すと、彼女は「訊きたいこ

とがあって」と言葉を紡ぐ。

「昨日、時深さんに『皆さん無事に帰ってきてください』って言われたとき……祐兄さんの表情がちょっと崩れました。その、『まいったな』って感じに。……思ったんです。もしかして『根源区域』での戦いが終わったら、そのままいなくなるつもりだったのかなって」

ユーフィーはそこで一度言葉を区切る。

小さく深呼吸。

そして再び、口を開く。

「祐兄さんは……ここでの戦いが終わった後、どうするんでしょうか……？」

「その、以前時深さんに、『ロウにもカオスにも付かない』って言ってましたし」と続けた彼女は、俺の答えを真剣な面持ちで待っている。

「……俺達は、ここでの戦いが終わったら、この『神剣宇宙』を出て行くよ」

「神剣……宇宙？」

「そう。『永遠神剣』が存在し、『永遠神剣』によって世界の“理”が創られるこの“世界”。そこを出て、まったく別の“理”が支配する世界へと旅をする」

俺がそう言ったところ、ユーフィーはしばしの間俯き加減に何かを考え込んでいた。

そして再び顔を上げた彼女の瞳。そこには強く、確かな意志の光が感じ取れて。

「祐兄さん、前にあたしが、時深さんに言った言葉、覚えてますか？」

そういわれて思い出される、彼女の言葉。

同時に再び彼女の口から紡がれる、その言葉。

「あたしは――祐兄さんと、これからもずっと一緒に居たいって思ってます」

それが例え、神剣宇宙（このセカイ）の“外”だとしても。そう続けられる彼女の言葉が、深く、深く心に響く。

「……今ユーフィーが言った様に、俺達が向かうのは神剣宇宙（このセカイ）の“外”だ。渡るためのゲートを開くには俺とナナシとレーメの力が必要……つまりは、一度行けばおいそれと戻ってこれるわけじゃないんだぞ？」

大切な人と、大好きな人と、下手をすれば二度と逢えなくなるんだよ。

そう告げると、彼女はぶんぶんと、首を大きく横に振った。

「パパやママと離れるのは寂しいし、ちょっと怖いです。けど……祐兄さんと離れるのは、もっと……嫌、なんです……っ」

話しているうちに、彼女の想い（こころ）が雫となって、頬を滑り落ちていく。

彼女の揺れて、震える声が、耳朶を打つ。

……彼女と『悠久』は、全ての永遠神剣の頂点に立つ特殊な三本のうちの一振り、『鞘・調律』の転生体だ。

少なくとも俺は知ることが無かったが、きっと何か重要な役割を持つであろう『コズミックバランサー』と呼ばれる存在。
その彼女が『神剣宇宙』から居なくなったらどうなる――そう思った所で、違う、と、頭を振った。
そうじゃない、と否定する。
そんなことは問題じゃない。そう、俺が、彼女の“想い”にどう答えるか。それが、それだけが、重要な事。
目を瞑ると、初めて出逢ってからのことが、流れるように思い出される。
己で己の頬を張ると、パンッと乾いたいい音が響いた。
突然の俺の行動に驚いたか、目の前のユーフィーが驚いたように目を見開いて、慌て気味に「あの、その」とアワアワとしている。
その様子が何だか可笑しく、くすりと思わず笑みが漏れて。

「初めて逢った時からずっと、側に居てくれたよな」

一歩近づき、くしゃりと彼女の頭を撫でると、顔を上げて俺の目を見つめてきた。

「……俺は弱いな」
「え……？」
「考えれば考えるほどに、ユーフィーが……いつも側に居てくれた人が居ない光景が、上手く想像できないんだ」

そう言うと、「じゃあ！」と勢い込んで問いかけてくる彼女の、頬に付いた涙の跡を指でなぞると、くすぐったそうに目を細めた。

「一緒に来てくれるか？」
「はいっ！」

その顔に笑顔の花を咲かせて、飛びつくように抱きついてくるユーフィーを受け止める。
不意に頬に感じた柔らかな感触に驚き顔を向けると、今度はそれが唇に。
俺から離れてその場で小さく一回転。　えへ、とはにかむ笑顔が眩しくて。

「パパやママにするのとは、全然違う気分です」

なんて赤い顔で言うユーフィーの頭を軽く撫でてから、とりあえず皆のところへ行こうと声を掛け、歩き出した。
「むー、待ってくださいよー」なんて声を背中に受けつつ。
……あー、もう、まったく、顔が熱い。

…
……
……

「けど、祐兄さん。それならルゥちゃんたちも一緒に連れて行かないと、ですね」
「ん？」
「だって、あたしが来るより前から、ずっと一緒に……側に居たんですよね？」
「そう……だな。けど……彼女達は……」
「解ってます。けど、あたしは……そうなれたら良いなって思います。だって……好きな人と離れるのは寂しいですもん」
「だって……何？」
「……な、なんでもありません！　ほら、行きましょう！」

「ああ、って、おい、引っ張るなよ」

永遠神剣之章：１１１．終わりの、始まり。

ユーフィーとの話を終えて皆のところへ戻ろうと、庭から廊下に上がったところで永峰と鉢合わせた。
角を曲がってきた彼女とぶつかり、倒れそうになったところを咄嗟に抱きとめる。
大丈夫か？　と問うと、ありがとうございます、と返って来て。

「で、そんな急いでどうしたんだ？」
「あ、はい、望ちゃんを捜して……たんです、けど、その……先輩？」

何となく様子の可笑しい永峰に「どうした？」と言うと、なんとも言い辛そうにした……と思ったら、後ろから「むー」って言うユーフィーの声が聞こえた。
首を後ろに向ければ、怒ったような、呆れたような、拗ねたような、なんとも複雑な表情のユーフィー。

「……もう、祐兄さん、いつまでそうしてるんですか？」

と、ユーフィーに言われ、ああそう言えばと腕の中の永峰を解放する。通りで様子が可笑しかったわけだな、うん。

「あーっと……すまん」
「いえ、えっと、気にしないでださい」

あはは、と笑って言う永峰。
そんな彼女へもう一度先と同じ質問をすれば、どうやら世刻を捜していたらしい。

そういえば見て無いなーなんて思い、ユーフィーに視線を向けると彼女も頭を振る。

「そうですか……」

ちょっとしょんぼりしながら言う永峰の頭を、こう、思わずわしゃわしゃと撫でながら「がんばれ」と。何となく捨てられた仔犬を幻視した……なんて事はいえない。

「わぷっ……もう……えっと、ありがとうございます……そうですよね、がんばらないと！」

むんっと意気込む永峰の、少し乱れた髪を――俺のせいだが――整えるように、今度は梳く様に撫でてやる。

この娘もなんというかこう、つい構いたくなるタイプの子だよなーなんて思いつつ。

そんな折、不意にユーフィーが空いた俺の左手を取ってきたので視線を向けると、じーっと上目遣いで見つめてくる。

……えっと……はいはい。

しょうがないなと思う反面、そんな仕草がなんとも可愛く思えて、ユーフィーの頭もぽんぽんっと撫でてやると、えへっと笑顔の花が咲く。

「……先輩って、頭を撫でるの好きですよね？」

そんな俺達の様子に、永峰がぽつりと。

そんな事は無い……って言おうかと思ったけれど、自分の現状を鑑みて口を噤む。まぁ確かに、嫌いじゃないけどな？

「……って、こんなことしてる場合じゃないんじゃね？」

「あ」

じゃあ行きますね、と言う永峰にもう一度「がんばれよー」と声を掛け、

「まぁ、ダメだったらダメだったで、それはそれで楽しみにしてるからなー」

「っ！　もう、先輩のばか！」

頬を赤くしながら世刻を捜しに言った永峰を見送りつつ、「希美ちゃん、どうしたんですか？」と訊いてきたユーフィーに、昨日の――俺から座標を渡しておらず、世刻から貰うように頑張れとけしかけた――ことを説明しながら、俺達もその場を後にした。

……

……

……

フィアにナナシとレーメ、アネリスへ、事が終わった後も、ユーフィーも一緒についてくるって事を告げた後――その時側で話を聞いてたミゥ達の様子に、ただならぬものを感じたけれど――「少しは妾にも付き合え」と言うアネリスに連れられて、『出雲』の中を見学するように散歩する。

道中今後の事を少し話しつつ、ふとどこかの通路に差し掛かったときだ。

長い廊下の向こうに時深さんと綺羅を見つけた。

向こうもこちらに気付いたらしく、時深さんが手を振って、綺羅と一緒に小走りで駆け寄ってきた。

「どうしました？」

慌てた様子では無いので緊急事態では無いだろうと思いつつ声を掛ければ「渡したいものがありまして」とのこと。

何だろう、と思う俺に対して、時深さんは隣に立つ綺羅を「さあ」と促す。

その綺羅といえば、時深さんに背中を押されて俺の前に出てくると、おずおずとその手に持ったものを差し出してくる。

藍色の、口を紐で閉じた小さな袋。

「……お守り？」

「はい。時深様と一緒に作りました。……その、祐様が無事にお帰りになりますように、と」

「受け取っていただけますか？」と小首を傾げる綺羅。

何と言うか、その気持ちが嬉しくて、思わず頬が緩むのが解る。

「ユウは果報者よな」なんてアネリスの言葉に「全くだな」と頷きつつ、綺羅には当然のこと、「喜んで」と受け取って彼女の頭を撫でると、パタパタと尻尾が揺れた。

「綺羅、それに時深さんも、ありがとう」

「いえ……私達にはこんなことぐらいしか、して差し上げられませんから」

なんて事を本当に申し訳無さそうに言う時深さん。そんな彼女へ「そんなことないです」と言うと、えっと驚いた顔をされた。

「少なくとも、俺は今二人にとても大きな力をもらいました。それに……」

「それに？」
「ここには今学園の皆が逗留してて、そんな中で俺が……俺達が、後ろを気にする事無く戦いにいけるのは、ここに時深さん、貴女が居てくれるからですよ」
だから、『こんなこと』なんて言わないでくださいと、思ったことがしっかりと伝わるように、正面から瞳を見据えて言葉を掛ける。と、「ぁ……ぅ、その、ありがとうございます……」と小さく返された。
礼を言うのはこっちなんだけどな、なんて苦笑しつつ、二人にお守りの礼を言って――その時、その瞬間、『世界』が震えた。
普段であれば、ただの地震と片付ける、そんな“揺れ”。
「っ！」
けれど俺達は顔を見合わせ、同時に駆け出す。
少なくとも俺には確信があるし、きっと他の皆も、このタイミングで起こった地震にすぐに違和感を感じるはず。そう――今もなお揺れ続ける、この長い異様な“揺れ”に。
向かうは――環さんの部屋でいいだろう。ものべーでいつも集まる生徒会室は、ここからでは遠すぎる。となれば恐らく皆もそこに集まるはず。
長い通路を進むことしばし、着いた環さんの部屋には全員揃っていた。
その中で、確認を取るに尤も相応しいであろう相手の顔を見つけ、歩み寄る。
「ナルカナ、この“揺れ”は――」
皆まで言う前に彼女は「ええ」と頷いて、全員に聞こえる様な声

音で、その答えを告げる。すなわち――

「エト・カ・リファが『時間樹』の再構成を始めたわ」

いよいよ『時間樹』そのものに猶予が無くなり、どのような決着が付くにせよ、“終わり”の時が始まったという、その証左だった。

永遠神剣之章：１１２．其の想い、聖なるかな。

「エト・カ・リファが時間樹の『再構成』を始めたわ」

ナルカナの言葉が、重く響く。

いつか来るであろうと思っていたその行動。それがよもやこのタイミングか、と、誰しもが思っているのだろう、その表情は苦々しい。

「ナルカナ」

そんな重い空気の中、誰かが何かを言う前に俺が声を掛けると、何を言うのかと皆の視線が集中するのが感じられた。

「何？」

「……エト・カ・リファの“説得”は任せる。『再構成』を止めさせてくれ」

「え……？」と、一瞬呆けた声を漏らしたナルカナへ、「お前にしか出来ないことだろ？」と問いかければ、その表情を驚いたものへ変え――

「ふっ……ふふ、あはははは！！　うん、そうね。確かにあたしが適任だわ。……あ、けど望も手伝いなさいよ」

「あ、ああ。それは良いんだけど……どう言う事ですか、先輩？」

ナルカナの突然の指名に頷きつつも、俺と彼女のやり取りに疑問を持った世刻に問われ、ナルカナに視線を向ければ一度こくりと頷いて返してきた。

「……エト・カ・リファは、ナルカナの親友だったんだよ」
「親友っていうか、あの子があたしを慕ってたって言った方がいいんだけど……それにしてもどんな説明するかと思って試しに任せてみたけど……祐、あんたってば何でそんな事まで知ってるのよ？」
「くふふふふっ。妾の担い手（あるじさま）になるような男じゃぞ？　その程度のことは知っていても驚きはあるまい」
「……へぇ。じゃあ問題。あたしの好きなお菓子はなんでしょう？　さあ持ってきて！」
「知らねぇよ」

しかも「答えろ」じゃなく「持ってこい」って辺り、流石はナルカナである。
そんなアホなやり取りをしたところで、「はいはい、その辺にしときなさい」とヤツィータが割って入った。

「それで、どうする？　出発早めた方がいいかしら？」

『再構成』が始まった以上、悠長にはしていられないでしょ？とヤツィータが言うが、ナルカナは頭（かぶり）を振った。

「この“揺れ”は『再構成』に伴う次元振動によって起こっているの。つまり、ものべーには次元振動が続く中を航行してもらわないといけないの」
「……つまり、予定通り今日一日は動かず、明日万全の体制を整えて向かう方が良いってことじゃな？」

確認するように問うナーヤに「そういうこと」と頷いたナルカナ。
その時、部屋の戸が叩かれ、環さんが応対した後、中に通されたのは森と阿川だった。

「前線に赴く皆さんに、来て欲しいところがあるんですけど」

部屋に入るなり、森が開口一番そう発する。

彼等の様子に慌てた様子が無いことから、緊急事態では無いだろうと判断はつく。

こちらの話はタイミング良く一段落したことだし、後は出発してから、到着するまでに詰めれば問題は無い。サレスがそう判断したことで、森達に着いて行くことになった。

道中「この揺れに関しては、皆どう思ってるんだ？」と訊いてみたところ、やはり多少なりとも不安に思っているみたいだ、とのこと。

「……斑鳩、出発前に学園の皆に説明は……」

「……やっぱり、したほうがいいわよねぇ」

そんなやり取りをしつつ、案内されて向かった先は学園の体育館。中に入った俺達を迎えたのは――立食パーティ形式に並べられた料理や飲み物と、椿先生以下、学園の生徒達だった。

「どう言う事だ、これ？」と疑問の声を上げる世刻に、森は言う。

「俺達から皆へ、お礼と激励を籠めての壮行会みたいなもんだよ」

彼のその言葉はきっと予想だにしないものだったのだろう、世刻の顔が驚きから本当に嬉しそうな笑顔になる。

「……ありがとう」

ただ一言。けれど、万感の篭められた一言。

それを受けて、森や阿川達の顔にもまた、心からの笑顔が花咲い

た。

そうして始まった宴は、和やかに、賑やかに、そして、押し寄せているだろう不安を吹き飛ばすように、楽しげに進められる。

先に斑鳩から、この“揺れ”に対する簡単な説明と――無論、『再構成』によって世界が滅びる可能性がある、なんてことは言っていないが――、自分達が明日赴く戦いでそれを止めてみせると言う事、そして恐らく、これが『物部学園』が異世界に旅立つ事になった一連の出来事において、最後の戦いになる事を告げられた。

壁に寄りかかって取ってきたグラスを傾けながら、歓談する仲間たちの様子を眺めていると、これが最後ならばと言わんばかりに旅団のメンバー達は学生達の記念撮影に狩り出されているのが見られた。

……基本的に旅団のメンバーは容姿のレベルが高い人ばかりだからなぁ。特に女性陣は男女問わず人気のようである。

そんな中で、世刻は自分の友人達に囲まれ、何かを貰っていた。確か“原作”では――そう思ったところで、そんな自分の思考に苦笑が漏れた。……まったく、こんな時にソレを持ち出すのは、野暮ってものか。

「もう、こんな所で何やってるんですかー。ほら、美里ちゃんに写真、撮ってもらいましょうよ！　ミゥちゃん達も待ってますよ！」

「ん？　ああ、解ったから引っ張るな」

そんな折に不意に掛けられた声に視線を向けるとユーフィーがやってきていて、おもむろに俺の手を掴むと引いて歩き出す。

彼女に連れられて向かう先では、ミゥ達が集っていて、こちらに気付いたワゥが手を振り替えしたところで、俺の手を引くユーフィーが、小さな声でぽつりと言う。

「……頑張りましょうね、祐兄さん」

それに「ああ」と頷いて、少しだけ歩調を速めてユーフィーの隣に並ぶと、ミゥ達の元へと向かう。

さて、最後まで戦いぬくための思い出（ちから）をもらいますか。

…

……

……

そして迎えた『根源区域』へ向けて出発する日の早朝。左手に違和感を感じて目が覚めた。

若干回らない頭で手を顔の前に持ってきてみるも、そこにあるのは手首から先を包帯に包まれたいつもの手。……けれど、何かが違う。

何だろうと思いつつ巻かれた包帯を解くと、出てくるのは『観望』によって形作られた鈍色に輝く神剣の手――ではなく、薄暗闇の中でもそれと解る、肌色の掌。

「……え？」

思わず漏れた呟き。

慌てて起き上がり、よく見ようと引き戸を開けて外へ出る。

明けの空へと翳してみれば――それは真実、生身の手だった。

握り、開く。

そんな動作の度に感じる“感触”。

「……ははっ」

口から自然と声が漏れた。
そうか――これで俺の体内に在った『観望』とは、本当の意味で一つになったのか、と。
部屋の中に視線を向ければ、ちびノーマを抱き枕にして眠るナナシとレーメの姿がある。ナナシは淡い藍色、レーメは水色の、フィア手作りのパジャマ姿がなんとも可愛い……んだが、ひたすらに無防備だな、お前等。
……と、どうやら煩くしすぎたか、二人が身じろぎするとほぼ同時に目を覚まし、起き上がる。

「おはよう」
「む……うみゅぅ……」
「ぁふ……おはようございます、ますたー……」

レーメはそのまま再びちびノーマへと倒れこみ、ナナシは一度小さく欠伸をすると、ふわりと浮き上がって、多少ふらふらしながら俺の元へ。
そのままぽすっとぶつかる様に飛び込んできたので受け止めてやると、甘える様に頬を摺り寄せてくる。
……ああ、うん、若干寝ぼけてますね。
時間を確認すれば、今は朝の五時五十分。随分早く眼が覚めたものだと思うが、もう一度寝れそうもないので起きる事にし、とりあえず身支度を整えるために着替えて顔を洗ってくる事にした。
朝の静謐な空気は清々しく、『再構成』のために引き起こされてる微弱な振動も気にならない程に気分が良い。
うん、良い旅立ちの日になりそうである。
……

……
……

戦装束を見に纏い、学園の校庭に集った俺達。

「どうせなら勝利の誓いでも立てようぜ」

そんなソルの何気ない一言に同意した俺達は、円陣を組むように立ち並ぶ。

こういう場面での音頭は、やはり世刻かな。そんな風に思っていると、「祐、宣誓を」とサレスに促された。

「……俺？」

「偶々エト・カ・リファによる『再構成』が重なりはしたが、元々の切欠はお前がスールードに“最後の勝負”を持ちかけられたことだろう？　ならばお前が音頭を取るのは当たり前だ」

サレスの言葉に続いて、周りからも「そうそう」とか「早くしなさいよ」とか言ってくる。

「マスター、格好良いのを期待します」

「……ハードル上げるなよ」

何が嬉しいのか、にこにこ顔のナナシに苦笑を返す。

……ここは矢張り、アレですかね。

そう思い、“鞘”からオーラフォトンブレードを引き抜き、空へと掲げる。

皆は何を？　といった表情だったが、俺が「皆、武器を」と言うと、そう言うことかと各々の神剣を空へと掲げた。

「……うぅ……こういう時は、自分の神剣の形が憎い……」
「いいじゃない、あたしなんてそもそも武器が無いわよ」
そんなルプトナとナルカナのぼやきに場を和ませつつ、俺は声を張り上る。
「……強い想いや願いは、時に大きな“力”となる。だから、隣に立つ人を、家族を、仲間を、そして世界を護るために、その“想い”を武器に籠めろ！　例え何があろうとも、護り抜こう、大切な存在(もの)を！　そして――必ず、生きて還ろう。俺達の、還るべき場所に！」
さあ、征こう。

永遠神剣之章：１１３．月の下、心を紡ぐ。

「くおおおぉぉぉぉぉぉん」

出発を告げるものべーの声が響き渡り、環さんや時深さん、綺羅を始めとした『出雲』の巫女達のほか、椿先生や森、阿川以下学園の生徒達の見送りを受け、ものべーはその身を静かに飛翔させていく。

フィアやアネリスと屋上から世界が小さくなっていく様を見ていると、先程――あの円陣の後――に交わした、見送りに来てくれていた皆との別れの一幕が不意に蘇った。

――俺の目の前に立った綺羅は、祈る様にその両手を胸の前で握り締めて言葉を紡ぐ。

「祐様……どうかご無事でお戻りください」

「ん、ありがとう。強力な御守りもあるからな、大丈夫さ」

心配してくれる綺羅に返事をしながらその頭を撫でてやると、くすぐったそうに目を細め、けれどその尻尾はパタパタと揺れる。

彼女のこの仕草は何度見ても可愛いものだ。……犬っ娘恐るべし。

「……なあ綺羅」

「……はい、なんでしょうか？」

「……行く前に尻尾触っていい？」

「駄目です」

試しに言ってみたけど、やっぱり駄目だった。つい「残念」と言葉に出てしまい、一方でそれを聞いた綺羅は何事か少し考えた後「でも……」と言いつつ、撫でていた俺の手をとって、両手できゅっと握ってくる。

「ちゃんと無事に帰って来てくれましたら、特別に触ってもいいですよ」

「よっし、俄然やる気が出てきた」

そう言って互いに顔を見合わせ、同時に小さく笑い合う。

そんな彼女をもう一度撫でてから離れると、綺羅と入れ替わる様に時深さんが進み出て、ひたと俺を見つめてきた。

表面上はもう大分調子も戻っているようだけど、矢張りその目の奥には隠しきれない疲労が見て取れる。

……いや、テムオリン達との戦いからまだ四日だというのに、表面上だけとは言え調子を戻す辺り、流石と言えようか。

「祐さん……ご武運をお祈りしています」

「有難うございます。時深さんに祈ってもらえるなら、負けるはずなんてないですね」

俺の返しに彼女は「もうっ」と小さく笑みを浮かべ、次いでその視線を俺の隣に居たユーフィーへと向けた。

「ユーフォリア……これから貴女が向かう戦いは、恐らくこれまで経験した中でも最も激しいものとなるでしょう。ですが、例え何が起ころうとも、最後まで決して諦めてはいけません。諦めず、最後の最後まで最善を尽くして足掻き続けなさい。そうすればきっと、より良い未来を掴み取れるはずです。……これは未来予知ではあり

ません。けれど、そう、先達からのアドバイスだと思って、心に留めておいてくれたら嬉しいですね」

ユーフィーは時深さんの言葉を確りと心に刻み付けるように視線を合わせ、「はいっ！」と力強く頷いて、そんなユーフィーの様子に時深さんは優しげな笑みを浮かべていた。

空の色が次第に澄んだ青から群青へと変わり始めた。

そろそろ中に入るか。

永峰の話では、座標から計算するに到着まで三日は掛かるらしい。と言うのも、ナルカナによれば恐らく『根源区域』に近づくほどに次元振動が激しくなるため、次元跳躍――所謂ワープだ――で近づくにも限度があるから、だそうで。

つまり、次元振動で空間が物凄く不安定になっているところにワープなんぞしたら、何が起こるかわからん、と言う事だ。

そのため次元跳躍で行くのはこの世界を出た直後の一度のみ。後は通常航行でものべーに頑張ってもらうって方針である。

そんな事を考えながら屋上から降り、生徒会室へと向かう。

その道中、角を曲がったところで誰かにぶつかった。

「きゃっ！」

「おっと」

倒れそうになった相手を咄嗟に抱きとめて「ごめん、大丈夫か？」と声を掛け、視線を向けると――どうやら永峰だったらしく、同じタイミングでこちらに顔を向けた彼女と至近距離で目が合った。

「永峰だったか。……昨日に続いて悪いな」

昨日の午前中、ユーフィーとの話の後にもこんな状況になったなぁ、なんて思いつつ声を掛けるも、反応が無い。

どうした？　と思ったその直後、目に見えて解るぐらいに一気に真っ赤になる永峰の顔。……っておい、何があった？

「せ、せせ、せせせんぱい！？」

「おう。まぁ落ち着け」

よく噛まないなぁなんて場違いな事を考えながら声を掛けても、変わらずあわあわとしている永峰。

「とりあえず、離してあげたらどうですか？」

「……ああ、そうか」

フィアに声を掛けられて現状に思い至り、腕の中から解放して立たせる。

「あの、その、えっと、ご、ごめんなさい！」

「って、おい、ちょっと待て！」

その途端そんな事を言い放って駆け出そうとした彼女を、思わず手を掴んで引き止めてしまった。流石に様子が可笑しすぎる。このまま放置って訳にもいかないだろう。……状況からして、原因は俺にありそうだし。

すると、「はぅぅ……」と妙な声を漏らして動きを止めた。

「……多分俺が何かしちまったんだ……よな？　えー……っと、とりあえず謝るしか出来なくて悪いと思うが、済まない。ただ決戦を

前に仲間内で遺恨は残したくない。文句でも何でも聞くから言ってくれないか？」

そう言って一度頭を下げてから、再び彼女の顔を見ると、永峰は頭をぶんぶんと勢い良く横に振り「ち、違うんです！」と声を荒げた。

「先輩は悪くないんです。その……ちょっと変な“夢”を見ちゃって……」

「夢？」

なんだそりゃ。と思った所で、レーメが「なるほど」と呟いた。

「つまり、ユウが出てくる“夢”を見たのだが、不意打ち気味に至近距離から接したためにその“夢”の内容を思い出して動揺して気まずくなった、と」

「……ふむ。とは言え高々“夢”でそこまで動揺する、ですか。……希美。一体その“夢”の中で、マスターにナニをされたんでしょうか？　是非聞かせて頂きたいですね」

「なっ！？　な、ななな何でもないよ！？　別にその、あの、ほんとに何でもないってば！」

動揺しすぎだ。どうやら相当にアレな夢だったようだ。

そしてたかが夢でこの状況……って事は、相当生々しいと言うか、はっきりした夢だったんだろうな。とは言え深刻な事態じゃなくて良かった。そう思った途端、こう、動揺する永峰を見てると悪戯心が顔をもたげて来るわけで。

「だから落ち着けって」と言ってぽんっと頭を撫でてやると、一瞬ビクっとしたあと「……はい」とゆっくり息を吐いた。

「で、どんな“夢”だったんだ？」
「はい、私が先輩から座標を受け……と……って？」

一息ついて精神的に一瞬緩んだ、そのタイミング。なるべく何でも無い風に聞いてみると、ポロッと漏らした永峰。

……なるほど。座標の受け渡し方法はアレなわけだからなぁ。そもそもこの一連の彼女の様子からして、ソレだけで終わったとは思えない。そりゃ動揺もするか。

納得した俺は、彼女の頭に置いていた手をそのまま彼女の肩へ持っていきぽんぽんっと叩いてやると、どうやら俺が色々と察してしまったのことに気付いたのか、ガクリと項垂れてしまった。

そんな彼女を流石に見ていられなかったのか、フィアが進み出るとそっと永峰を抱き締めてやる。

「大丈夫ですよ、希美さん。夢はあくまでも夢。ほら、貴女の好きな人は誰ですか？」
「ぐす……望ちゃん、です……」

「うん、よろしい」とにこりと笑って離れるフィア。「あの、ありがとうございます」と、何とか笑顔を浮かべる永峰。「では、祐の事は？」とそれまで黙って楽しそうに事態を見守っていたのに声を掛けるアネリス。

「もちろん好きで――……ぁ」

にこりと笑って答える途中でピシリと固まった彼女は、ギギッと錆付いた玩具のように俺の顔を見て――。

「えっと……ありがとう？」
「はわわわ」

再び動揺し出した。
アネリスに咎めるように視線を送ると、苦笑しながら唇だけで「すまぬ」と返してくる。……弄ると楽しいのは解るから強くは言えないけどな。

（ふむ……主様は思ったよりも動揺せんな？）

アネリスからのそんな念話。……やれやれ、こいつ俺が慌てる様を見たかったのか、と小さく溜息。

（……まぁ、嬉しいしびっくりはしたけど……な。解るだろ？）
（何れ消えるものならば、か……すまぬ。浅慮じゃった）

アネリスに「気にするな」とだけ返し、ともかく永峰をこのまま放置もしてられないだろうと思い、フォローの言葉を掛けておく事にしたのだが……。

「大丈夫、解ってる。その『好き』は他の皆に向けるものと同じだよな？」
「そ、そうです！　そうなんです！　お願いそう言う事にしておいて……あははははは……」

余り効果は無かったようである。
おもむろに乾いた笑いを上げ、再びがくりと項垂れた。

「うぅ……いっそもうしにたい……」

うん、まぁ頑張れ。

…

……

……

『話したいことがある。今夜きみの部屋で、一人で待っていてくれないだろうか？』

ルゥにそんな事を言われたのは、屋上から降りて一度生徒会室へと顔を出した後。

その夜、言われた様に一人で自室として使っている部屋に居ると、コンコンッとノックの音。

「はい」

「ルゥだ……入ってもいいかな？」

「ああ、どうぞ」

「失礼する」と言いながら入ってきたルゥは、俺の前まで来るとどこか緊張した面持ちで、ひたと俺の目を見つめてくる。

「それで、話っていうのは？」

「うん……あらためて私の……私達の想いを、きみに聞いてもらいたいんだ」

そう言って、ルゥはいつか聞いた、彼女達の想いを、はっきりと俺に言い放った。

「私達は、これからもきみと共に行きたいと思っている。きみが許してくれるのなら、永久（とわ）に共に歩みたいと、そう願っている」

「けど……君たちには……」
「それでも、だよ、祐。それでもきみと共に在りたい。私達にとって、きみはそれほどまでに大きな存在になってしまったから」
――『彼』が居る。その言葉は俺の口から出る事は無く。けれど、彼女は俺が何を言いよどんだのか解ったのだろう、小さく頭を振って、それに答えた。
「……ありがとう、ルゥ。けど、無理だよ。解っているだろう？」
彼女の言葉は、彼女達の気持ちは、想いは、とても嬉しく、俺の心を暖かくする。だけど、そう、そんな想いを向けられれば向けられる程に、それが叶わぬものだと互いに知っているはずなのに、と、胸が締め付けられる様に痛む。
けれど、彼女は――ルゥは小さく微笑んで、「大丈夫」と、俺を安心させるような声音で、優しく言った。
「あの時……きみに『エターナル』の事を聞いたあの日、屋上に私達とアネリスだけが残ったのを覚えているかな？　あの時彼女に言われたんだ。『もしもこの先――ぬしらが祐と共に歩みたいと本当に願うのならば、妾はその道を示してやろう』と」
「アネリスが……？　……ったく、あいつ……」
ルゥの口から出た意外な名前。
……そうか、あの時残って何の話をしていたのかと思えば、そんな事を言っていたのか。
「彼女が示した方法は二つ。一つはどこかで三位以上の神剣を得て、きみと同じように『エターナル』となること。そしてもう一つは――」

そこまで言って、彼女はおもむろにその身を包む衣服に手を掛け――

「って、おい、ルゥ！？」

繰り返される衣擦れの音に続いて、ぱさりと、それが地面に落ちる音が続く。

「……きみと深い繋がりを持って、『準エターナル』となること」

一糸纏わぬ姿となった彼女は、恥ずかしさに頬を染めながらも確りと俺の顔を見て、優しげに微笑んだ。

「『準エターナル』になるには、二つの方法があるそうだ。一つは上位神剣の“欠片”をその身に宿す事。聞いた話では、『出雲』の環や綺羅はこちらだそうだな。そしてもう一つは――エターナルと、深く繋がること。肉体的に、と言う意味じゃない。存在として、深く、強く繋がることだそうだ。……幸いにも、私達には『同調』と呼ばれる手段があった。他者と記憶や経験を共有し、深く繋がれる方法が」

一歩、また一歩。

言葉を発しながら、ゆっくりと近づいて来た彼女は、触れるほどに近く、俺の顔を見上げて、そっと俺の手を取る。

暖かな、彼女の手。

自分の体温と、思考と、想いが、熱を帯びるのが、確かに感じられた。

「けれど、それをクリスト族以外と行うには……」

「……ルゥ……」
「……祐。私を抱いて欲しい。……けれど、勘違いしないでくれ。私は『同調』するためだけに、きみを求めているのではないんだ。そう……」

一度目を閉じ、そして開いた彼女の瞳に視える、確かな想いが。
それは俺の胸を、暖かく、埋め尽くす。

「祐。……私は、きみを愛している」

…
……
……

宵闇の中、ルゥは静かに俺の手を取り、瞳を閉じて、唄を紡ぐ。
月明かりの下、詠(うた)い響くは、蒼き巫女の祝詞。
其れは深く静かに、染み入る様に耳朶を打ち、

「海原に注ぐ大河よ、大いなる青き乙女よ照覧あれ。

水面に浮かぶ泡沫なる我ら。
揺れて流れて弾けて消える。

我と汝は、交わる河。
我は汝と共に流れ、汝は我と共に注ぐ。
名付けて曰く、命」

――俺と彼女の間に、強く確かな繋がりを齎した。

永遠神剣之章：１１４．幕間、一握の希望。

「ねえ、ミゥ。貴女達は青道君を独り占めしたいとかって思わないの？」

ふと思い立った様に訊ねられた沙月の疑問。

問われたミゥは少しだけ困ったような顔をしたあと、それに答えるために口を開く。

「もちろん思いますよ？　思わないわけが無いです。けど……それ以上に“怖い”んです」

出てきたのは思わぬ言葉。怖い。一体何が怖いのだろうか。姉妹の確執？　他の誰かに独り占めされてしまうこと？　色々な考えが浮かぶが、そのどれもが違うと、そう思った沙月は、「怖いって？」とその言葉の意味を問う。

そして、返って来たミゥの言葉に、小さく息を呑んだ。

「はい。……大切な人を、失う事が」

「で、ですが、別に祐が死んでしまうという事はないでしょう？　もう二度と会えなくなるというわけでも……」

一瞬訪れた沈黙。それを振り払うように、話を聞いていたカティマが声を掛ける。が、その言葉に対してミゥ達が返した反応は、先程よりも更に重い沈黙であり、

「って、ち、ちょっと待って！　まさ本当に！？」

「えええ！？　先輩死んじゃうんですか！？」

「ウソ！？　だってそんなそぶり、全然無いよ！？」

その沈黙を先のカティマの言葉を肯定するものだと判断してしまった沙月や希美、ルプトナが驚愕の声を上げた。
そんな彼女達をヤツィータが「少し落ち着きなさい」と窘(たしな)め、先の沈黙の真意を問おうとした、その矢先。

「ふむ……なるほどな。確かに以前祐に聞いた話からすれば、『会えなくなる』と言うのは間違っておらぬか。……むしろ『思い出』に残る分、そちらの方がマシ、か」
「っ！　……ナーヤさん、知って……いるんですか？」

告げられたナーヤの言葉に、恐る恐る、といった様相で問いかけるポゥ。
そんな彼女へ、ナーヤは一言「うむ」と返す。そうなると次に上がるのは当然の如く、事情を飲み込めない者達からの疑問の声であるのは明白であった。

「ナーヤ、どう言う事？」

意見を代表するように口に出された沙月の問い。
それに対してナーヤは、しばし考えたあと、一度頷く。

「……まぁ良いじゃろ。祐には必要と有れば話しても構わぬと言われておるしな。……ミゥ達も良いな？」

ナーヤの言葉にミゥ達が頷いたのを確認し、彼女は沙月達へと語り出す。永遠者(エターナル)と言う、時間の流れからも逸脱した存在の事を。

……

……

……

短くも、果てしなく重い、以前に祐から聞いた話。それを話し終えたナーヤは、胸の内に溜まった澱を吐き出す様に、一度深く息を吐く。

「そんな……」

「じゃ、じゃあ近いうちに、先輩の事もユーフィーの事も忘れちゃうっていうんですか!?」

「あやつ等の言う事を信じるのなら、な」

「……信じたくは無い……ですね」

信じたくは無い。そのカティマの言葉が、その場に居る全員の想いを代弁していた。けれど、彼女達の脳裏に浮かぶは、かつて――ナーヤが其の話を聞いた日、あの屋上で見た、取り乱したユーフォリアの姿。それは如実に、その話が真実であると……信じたくなくとも、信じずとも、いずれ訪れる未来なのだろうと言う事を知らしめていた。

そして彼女達は思い至り、身体を震わせた。もしも――世刻望が、ナルカナと契約したら――その、可能性に。

「……私達はあの日、アネリスさんにそれを回避する方法を教えてもらいました」

再び訪れた重苦しい沈黙を破り、ミゥがポツリと呟く。

その言葉に「どんな方法!?」と勢い込んで訊ねる沙月だったが、ミゥ達が酷く――そう、言うなれば申し訳無さそうな、と言う雰囲気がぴったりだろうか。表情を曇らせて居る事に気付いた。

ミゥは言う。その方法はただ二つ。一つは彼等と同じ存在……エターナルとなること。そしてもう一つは、それに最も近しい存在……準エターナルとなることだと。

「準エターナル……」

「はい。準エターナルになるには、二つの方法があるそうです。一つは上位神剣の“欠片”をその身に宿すこと。『出雲』の環さんや綺羅さんは『叢雲』の欠片を宿す準エターナルだそうです。そしてもう一つは、エターナルと肉体や精神を越えて、存在として深く“繋がる”こと。……本来であればそのどれもが難しい条件です。ですが、幸いにも私達クリスト族には“同調”と呼ばれる能力がありました。相手と心を一つにし、深く繋がるための能力」

そこまで言った所で、話を聞いていたナーヤが「む？」と難しい顔をしつつ一つ唸る。それに気付いたミゥが「どうしました？」と訊ねる。

「いや……その“同調”とやらは、クリスト族以外にも使えるのか？」

ナーヤの問いにミゥは頭を振ると、「通常であれば無理です」と答えた。

「……ふむ、通常であればと付けると言う事は、方法は有ると言う事か」

「はい。クリスト族以外の人と“同調”するためには、その相手と……その……肉体的に繋がる必要があるん、です」

流石に恥ずかしかったか、照れたように頬を赤らめて言うミゥに、聞いてた面々も「……そう言う方法ね」と少々気まずい雰囲気に。

そんな中ヤツィータが「なるほどね」と、得心が言ったと言う様に声を上げた。

「だから『独り占めはしたい、けど、失うよりはいい』って答え……か」

「……ええ。大切な人を失う辛さは……よく知っているもの……。それ以上に、このままだとその『辛さ』すら『無かった事』になってしまう。そんなのは……絶対に嫌……っ」

振り絞るように紡がれたゼゥの言葉は、クリストの巫女達全員の想いを代弁する叫びだった。

一度経験した『大切な者を失う辛さ』。それを再び経験するのであればまだマシなのだと、それ以上に、そんな『辛さ』を感じる事無くこの先を過ごす事を考えると寒気すら感じると、彼女達は言う。

だからこそ、彼女達は“覚悟”を決めたのだ、と。

もう幾度目になるだろうか、周囲を沈黙が包んだ。

皆の胸に去来するは、青道祐が、ユーフォリアが、辿り、歩む運命か。世刻望が選び、進むやも知れぬ運命か。

……そんな中、誰かが言った。ならばやる事は一つだと。

先程聞いた話では、幸いにも……と言うべきか、少なくともこの時間樹から出なければ“渡り”は起こらず、彼等の存在が『無かった事』になる事は無いと言う。

だから、この戦いを全員無事に乗り切って、『出雲』の人たちに協力をお願いしてでも、大切な仲間のことを忘れない方法を探そう、と。

……誰しもが、心のどこかで解っていたのかもしれない。それはきっと広大な砂漠の中から針を探すようなものなのだと言う事を。不可能に近い奇跡の様なものなのだと。それでも――。

永遠神剣之章：１１５．奏でるは、戦いの賛歌。

ルゥの心と繋がった、その翌日。
この日は結局何か特別な行動をするというわけでもなく終わった。
……と言うよりも、何も出来なかったと言った方がいいだろうか。
校内の時計が昼を過ぎたあたりからだろうか、次第に次元振動が酷くなっていき、その日の夜などはロクに眠る事が出来ないほどの揺れだった。
……まったく、決戦前に消耗してどうするんだ。
なんて思ったところでどうしようもないのだけれど。
そして。
戦装束に身を包み、生徒会室へと集った俺達。
校舎に回すエネルギーなど既に切られ、それらは全てものべーが航行する為に使われているため、部屋の中は薄暗い。
本来であれば、時間樹の枝が発する淡い光が入ってくるであろう窓からは、次元振動による影響か、まるで稲光の様な激しい光が入ってくる。
そんな中で、上下左右にシェイクされるような揺れに皆声を上げながら翻弄されていた。

「希美、大丈夫か？」

そんな中、世刻の声が聞こえ、全員の視線が永峰へと集中する。
答える声は無い。
ものべーの操作に集中しているのだろう。ものべーからのフィードバックも強いのか、脂汗を浮かべながらも、彼女はちびものべーを抱き締めるように抱え、ぎゅっと目を瞑っていた。
そんな彼女の様子に、いつの間にか他の皆からの、揺れに対する文句や悲鳴も消えていた。

一番大変な永峰が必至になっているのに、揺れ程度で弱音を吐くわけには行かない、ってところだろう。

その時ものべーを一際大きな揺れが襲った。

流石にバランスを崩して倒れた永峰を、たまたま近くに居たので後ろから咄嗟に受け止める。とは言え俺自信この状況でバランスを保っていられるはずも無く、彼女の下敷きになるように一緒に倒れ、したたかに背中を打ち付けてしまったが。まぁ、彼女が無事だったようなので良しとしよう。痛いけど。

それにしても……この状況において尚ちびものべーを抱いて集中し続けているのは凄い。もしかしたら、自分が今倒れた事も気付いていないんじゃないだろうか。……それは良いんだが、永峰とものべーの現状のせいで動くに動けない。

どうしたものか……っていうかこれは世刻の役目だろうに。役得といえば役得だが……なんて思った所で、薄暗闇の中、こちらを見ていたらしいルゥと目が合った。

俺の現状を見て、ちょっと不満気な彼女。気まずい……けど仕方ない。だって不可抗力だもの。

とりあえず何とか上半身だけでも起こし、多少は気休めにでもなればと、永峰に単体回復アーツ（ティア・オル）を掛けてやると、彼女の表情が少し和らいだ。

そこで漸く目を開けて、自分の現状を確認したらしい永峰。彼女が何か言う前に頭をぽんと撫でてから「気にするな、集中してろ」と言うと、一度小さく苦笑してから「ありがとうございます」と返って来た。

そのまま再びちびものべーを抱き締め直して瞳を閉じ、ものべーの制御に集中する永峰。

そんな彼女の邪魔をしないように支えつつ、時折回復アーツを掛けてやる。

……それにしてもこれってやっぱりどう考えても世刻の役割だよなぁ……なんて思いつつも、絶え間なく襲い来る次元振動の揺れか

ら気を逸らすために、自然と俺に背中を預ける形になる永峰の温もりやら柔らかさやら色々な感触に意識を集中してみた。うむ、役得である。

それから如何程の時間が経っただろうか。

次元振動の嵐の中を渡りきり、ものべーは見事俺達を『根源区域』へと送り届けてくれた。その代償に、恐らく当分の間は次元間を飛ぶことも出来ないであろう程に傷ついてしまったが。

頑張ってくれたものべーの為にも、負けるわけには行かない。そんな言葉と共に、俺達は最後の戦いの地へと足を踏み入れた。

『理想幹』がこの時間樹の中枢……幹であるならば、『根源区域』はこの時間樹の深奥……根だ。

淡く光を放ち明滅する、正方形のブロックが組み合わさって出来た通路。時間樹の『根』が幾重にも絡まり、神秘的な様相を呈した空間。ナルカナを始め、世刻や暁の様な『前世の記憶』によってここを見たことのある者達はこの光景を眼にして「懐かしい」と称しているが。

そんな中聞こえて来るは、軍靴の音。

通路の向こうに姿を現す、エターナルアバターの群れ。

「……行くぞ。今までのミニオンと同じだと思うなよ？」

サレスの声に『応』と返した皆は、各々の神剣を構える。

――さあ、最後の戦いの始まりだ。

……

……

……

湯水の様に現れるエターナルアバター達。放たれる神剣魔法は雨の如く、振るわれる刃は嵐の如く。

道を進めば進むほどに、戦いは激化の一途を辿る。

深奥にいるエト・カ・リファを目指してひた走る俺達の前にソレが現れたのは、幾度目かのエターナルアバターの襲撃を乗り切り、僅かに一息吐いた時だった。

ズンッと地響きを立て降り立った、しなやかにして強靭な筋肉を有する巨躯。その背には白と黒の翼を生やし――右側のみの片翼だが――羽ばたかせたている。鉤爪の様な足先は大地を踏みしめ、頭部には一本の黒く太い角を有し、その相貌は獣のようだ。

『原初存在・激烈なる力』。

エト・カ・リファによって生み出された、この時間樹が誕生した頃より存在するエターナルのうちの一人。それに続くように、激烈なる力の背後から現れる無数のエターナルアバターたち。

そして――。

「おや……遅かったですね。もう少しでそこの激烈（おおきいの）なる力と一戦交えてしまうところでしたよ」

悪戯っぽく笑いながら、激烈なる力とは別の方角から現れた、彼女。

白き衣を翻し、その背に艶やかな翼をはためかせ、軽やかな鈴の音と共に。

「……鈴鳴、何故……」

あの世界で彼女と出会ってから経過した時間は五日。まだ時間的にこちらにアドバンテージがあったはず……そんな考えから口を突

いて出たその名に、呼ばれた少女は場違いとすら思えるほどの柔らかな笑みを浮かべた。

「おっと、言っておきますが……私は約束は破っていないですよ？」

俺の考えを読んだかのように言う鈴鳴の言葉。約束、と言うのは間違いなく、あの時言った「写しの世界を基準にして七日後」ってやつだろう。……ってことは、まさか……。

“その可能性”に思い至り、そんな基本的な事に気付かなかったなんてと、自分の浅はかさに思わず歯噛みする。

そう、彼女はウソをついてなど居ないのだろう。きっと、既に写しの世界では七日が経過しているのだ。つまり――

「ふふっ、失念していましたね、祐さん？　……この時間樹において、時間の流れと言うものは全て同じと言うわけではないと言う事を。……そう、あなた達がここ、『根源区域』へと向かっている間に『写しの世界』では七日が過ぎていますよ。……とは言え、遅すぎた、と言うわけでも無いですが」

そう言った鈴鳴は、俺達と激烈なる力を警戒しつつも艶やかに微笑みかけてくる。

「今から急いで追いかければ……イャガとスールード（わたし）がエト・カ・リファに辿り着く前に追いつけるかもしれませんね」

そしてそんな言葉と共に、楽しそうにくすくすと笑った。

彼女の言葉に感じる、違和感。

それを感じたのは、彼女が『わたし』と言ったとき。これは以前『写しの世界』において彼女と逢った時に交わした会話の中でも感じたもの。あの時はたしか――『わたしとわたし』だったか。

一体どういうことなんだろうか。そう思い、鈴鳴に注意を払いつつも頭の片隅で彼女に関する事を反芻する。

彼女は少なくとも千年以上は生き、世界規模でマナを集める事ができ、自身の分体を生み出して行動する――そこまで考えて、漸く思い至った。

「……以前にあったときの会話からどこか違和感を感じていたんだが……やっと解ったよ」

「ふむ。何でしょうか？」

『スールード《わたし》』と『鈴鳴（わたし）』のニュアンスの違い。

思い至った結論。

それは――。

「今イャガと行動を共にしているのは……お前の“本体”だな？」

俺の言葉を聞いた鈴鳴は、楽しげに笑みを浮かべて笑う。

「……ええ、そうです。今イャガと共に行動しているのは私の本体です。……イャガとスールード（わたし）。あの二人が相手ではエト・カ・リファといえど然程もたないでしょうから、急いだほうがいいですよ？」

行けるものでしたら。

そう言って神剣を構えた鈴鳴。それに相対し、俺達もまた各々が神剣へとマナを籠めた、その瞬間。まるでそうはさせじと言わんばかりに、怒気を孕んだ咆哮が響き渡った。

「ルォオオオオオオオオオ！！！」

「くっ！　てやああ！！」

痺れを切らしたかのように襲い掛かってきた激烈なる力。その鋭利な鉤爪による一撃を、奴の前に飛び出したユーフィーが受け止めた。

ぶつかり合う爪と光の刃。弾かれるように離れる二人。

そしてそれを切欠とするかのように、事態は急速に動き出す。

「オオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

己の邪魔をしたユーフィーを目先の敵と定めたらしい激烈なる力が再びの咆哮を上げ、それと合図に進軍を始めるエターナルアバターたち。

「祐兄さん！　この敵さんはあたしが引き受けます！　祐兄さんは先に行ってください！！」

一方でユーフィーは『悠久』を激烈なる力に向け、こちらに背を向けたまま、そんな言葉を発した。

それに一瞬「でも」といいかけ、言葉を飲み込む。

状況を判断すれば、この場は任せて進むのがベスト。……ユーフィーの好意を無駄にしちゃいけない。彼女なら、大丈夫だ。……信じよう。

「アバターは我々が引き受ける！　望、ナルカナ！　お前達はエト・カ・リファの下へ急げ！！」

そう判断したところで、サレスが世刻とナルカナへと指示を出し、二人と頷き合って足を踏み出す。

そこに立ち塞がるのは、やはり鈴鳴で――。

「……ふふっ、まあいいでしょう」

強行突破するしかないか、そう思った俺達に掛けられたのは、そんな思っても居なかった言葉だった。

どう言う事だと、思わず訝しげな表情を浮かべてしまった俺に、彼女は言う。

「本当なら貴方の相手は私がしたいところですが……其の役目はスールード（ほんたい）に譲りましょうか、ということです。それに――」

私の相手は、彼女達がしてくれるようですから。

そう言って鈴鳴が視線を向けた先に居たのは、クリストの巫女達。

「そう言う事だ。祐。きみは先に行って、イャガ達を食い止めてほしい。……直ぐに追い付く」

鈴鳴に『凍土』を向けたまま、ルゥが言う。

ここは任せろと、言葉にせずとも伝わってくる。

ならばこそ、俺が返せる言葉は一つだけだった。

「……皆、ここは任せた」

俺達は俺達の成すべき事を成すために、俺と世刻、ナルカナは深奥へ向けて駆け出した。

永遠神剣之章：１１６．戦闘、激化。

「ルォォォオオオオオオ！！！」
「はあああ！！」

振り下ろされる豪腕。襲い来る鉤爪と一体化した『激烈』と『悠久』から伸びた光の刃が交差し、激しい音を立てる。
激烈なる力はその膂力に任せてユーフォリアを叩き潰さんしながらも、必殺の一撃を見舞う機会を伺う。
一方のユーフォリアもまた、スピードと小回りで激烈なる力を翻弄しつつ、全力の一撃を叩きこむ隙を捜す。
繰り広げられる剣戟。一進一退の攻防。互いに隙をうかがいつつ切り結びながらも、決め手となる一撃を放てないままに、一合、二合と刃を重ねるユーフォリアと激烈なる力。
幾度目かのぶつかり合い。その果てに互いの激突の威力に比例する様に二人の距離が空いた。
一度仕切りなおしだと、ユーフォリアがふっと一瞬、そう、ほんの一瞬気を抜いた、その時だった。
不意に背後にズンッと大地を振るわせる、ナニカが降り立ったかのような音がした。
次いで感じるは、眼前の激烈なる力にも勝るとも劣らぬ濃密な気配。

「何――」

思わず振り向いたユーフォリアの目に飛び込んで来たのは、激烈なる力に並ぶほどに巨大な女性と思われるモノ。
その最大の特徴とも言えるのは、あるべき場所に首が無いこと、だろうか。

そう、その女性の首は――その左手に持たれていた。
――永遠神剣第三位『戒め』を擁するエターナル『絶対なる戒め』の降臨である。

「……」
「っ！！」

絶対なる戒めは、その右手に持った大剣を振り上げ、無言のままにユーフォリアに向けて振り下ろす。
ユーフォリアはそれを横に飛んで躱し――次の瞬間、それまで開いていた距離を一気に詰めてきた激烈なる力の鉤爪がユーフォリアを襲う。
咄嗟に張られたオーラフォトンバリアは激烈なる力の一撃を何とか受け止めるも、その攻撃の勢いは止まらずに、オーラフォトンバリアごとユーフォリアの身体を吹き飛ばす。

「くっ……はっ……」

吹き飛ばされ、壁に背中を強打して呻くユーフォリアへ、絶対なる戒めの剣が振り下ろされる。
まずい――。
そう思いながらも何とか『悠久』を構えてその一撃を受け止めようとしたユーフォリアだったが、如何せん体勢が悪すぎた。
ろくに力を籠められない状況。流石に危ないかと、大きなダメージを食らう事を覚悟した彼女だったが、次の瞬間ユーフォリアの視界を覆ったのは、絶対なる戒めの振るう刃ではなく、一人の少女の後姿だった。
ゴシック調の戦装束（ドレス）を翻し、彼女――希美の眼前に張られた強固なブロックは、絶対なる戒めの凶刃を完璧なまでに受け止める。
周囲の空間に響き渡る轟音。

再度振るわれた絶対なる戒めの一撃を、その余りの勢いに立ち位置を僅かに後退させられつつも防ぎきった希美。その横をすり抜ける様に前に出るのは黒の剣姫。

「参ります！」

神剣『心神』に極限まで篭められたマナ。そこから繰り出されるのは、彼女の秘奥義とも言える一撃、『布都御魂の太刀（ふつのみたまのたち）』。

希美に対して更に攻撃を加えようとしていた絶対なる戒めは、そのカティマの攻撃を剣で受け止めるも、勢いに押されてその身を後退させ、彼我の間に距離が空く。

その間にユーフォリアは体勢を整え、希美の単体回復魔法（アースプライヤー）によってダメージが消されると、再び『悠久』にマナを篭めた。

立ち並ぶ激烈なる力と絶対なる戒め。対するはユーフォリア、希美、カティマ。

戦いは更に激しさを増して行く。

◇◆◇

激闘を続けるユーフォリア達と根源を護るエターナル達。そしてサレス達とエターナルミニオン達。それらとは正反対に、最後の一組であるミゥ達クリストの巫女とスールード……否、鈴鳴との戦いは、静かな睨み合いが続いていた。

最初に軽い牽制の様なぶつかり合いを経てからの膠着状態。この状態の原因は、互いに相手に違和感を感じているため、であろうか。

鈴鳴から見ると、怨敵ともいえるスールード（じぶん）と相対しているにも関わらず、余りにも消極的すぎるクリスト達の様子が。

ミゥ達からすると、目の前の人物から感じられる雰囲気が、空気

が、気配が、余りにも『スールード』とはかけ離れていることが、互いに攻め手を鈍らせる要因となっていた。
　であるが故に、ミゥの口からその疑問が出たのは必然と言えようか。

「貴女は……『誰』ですか？」
「私はわたし（スールード）。それ以外の何者でもありません、よ？」

　やもすれば、まるで意味の通らぬ問い。
　対して鈴鳴は、しばしの思案の後にまるで試す様な表情を浮かべ、言葉を返す。
　だがそれに、ミゥは頭を振り、否定の意を向ける。

「……違う。貴女は、『スールード』じゃない……」
「ふっ……ふふふっ……あはははははは！！！」

　ミゥの言葉を受けて、一瞬きょとんとした鈴鳴は、直後堪え切れないというように笑い出した。楽しそうに。嬉しそうに。そう、やっと“そこ”に辿り着いたか、そう言わんばかりに。

「くっ……ふふっ……ええ、確かに今の私の在り方は、本体（スールード）と同じとは言い難いかもしれません、ね」

　鈴鳴の言葉に、一体どう言う事かと訝しげな表情を浮かべるクリスト達。
　そんな彼女達の表情を見て、鈴鳴は言葉を続ける。

「私は確かに『スールード』の分体です。ですが……どうやら少々“影響”を受けすぎてしまったようで、“我”が強くなってしまいまして。つまり……その精神的なり在り方や考え方が、少々本体（スールード）か

ら乖離しているんですよ。……『スールード』の分体で在りながら、『スールード』とは相容れぬモノ……そんな歪な存在が今の私です」

ですから、今の私は『スールード』ではなく『鈴鳴』と呼んでくださいね？

そう続ける鈴鳴の表情は、やはり楽しそうな雰囲気だった。

「でも……どうしてそんな事に……？」

鈴鳴の語る彼女の現状を聞いたポゥの口から漏れた疑問。それが耳に届いた鈴鳴は、小さく一言「まあいいでしょう」と言ってから、再び言葉を紡ぎだす。

「絶望的な状況において尚抗い、そして散り行く人の姿……抗って、抗って、けれど届かず、最後には絶望する。その姿こそ、愛おしく美しい……私はずっと、そう思っていました。ですが、いつからかそれが少しだけ、変わっていました」

「……それは？」

先を促すルゥの言葉に、鈴鳴は「何か」を思い出すかのような仕草の後に、一度小さくくすりと笑みを浮かべた。

「……絶望的な状況において尚、それに抗い、そして乗り越える姿。その命の煌きこそ、尊び、愛すべきもの。そう思うようになっていたんです」

「……」

「ですが、それはあくまで『鈴鳴（わたし）』の考えに過ぎません。本体（スールード）の考えは今も変わっては居ないでしょう。……ふふっ、もう解りますよ（すずなり）うね？　私がこんな考え方をする様になってしまった理由。分体が本体（スールード）から乖離してしまった、その原因が」

鈴なりの言葉を聞いて、ミゥ達の脳裏に真っ先に浮かんだのは、一人の男性。
そしてその予想は間違っていないだろうという予感もまた。
だが、その答えを誰かが口にするよりも早く、鈴鳴が降ろしていた剣を構える。

「……さて、もういいでしょう？　再開といきましょうか」

一瞬、ミゥ達の中に浮かぶ戸惑い。
……今の彼女ならば、無理に戦わなくともいいのではないのか、と言う、思い。
だがそれを見透かすように、鈴鳴は鋭い殺気を織り交ぜた気配を発し、ミゥ達へと叩きつけた。

「……先程私は、抗い、乗り越える姿が愛おしいとは言いました。が、事この戦いに関しては、それは忘れた方が身のためですよ？何故なら――」

その手にする剣を振りかぶり、鈴鳴は言う。ひたとクリストの巫女達を見据えて。……青道祐と共に在る事のできる……“この先”も、彼を支えていくことの出来る彼女達を見据えて。

「――これはただの、八つ当たりですから」

かくて、言葉が空間を統べる時間は終わり、剣戟鳴り響く時間が再び幕を開ける。

永遠神剣之章：１１７．託す想い、譲れぬ心。

クリストの巫女達と鈴鳴との戦いは、再びの膠着状態に陥っていた。とは言え先程とは違う意味での、だが。

先程の状況が『静』だとすれば、今は『動』と言うべきか。

一進一退の攻防。

五人のクリストの巫女達が繰り出す連携攻撃を鈴鳴が防ぎ、鈴鳴が振るう圧倒的ともいえる攻撃をクリスト達が凌ぎきる。

ワゥが放った炎を鈴鳴が切り開き、飛び出たところをミゥが放った閃光が迎撃する。

巻き起こる衝撃をマナ障壁によって防いだ鈴鳴へ繰り出されるゼゥの闇爪。それは惜しくも再度展開されたマナ障壁に防がれるも、そこに接近したルゥとポゥが神剣による攻撃を繰り出す。

それを両手に構えた剣によって受け止めた鈴鳴は、至近距離でマナを炸裂させ、己ごと二人をその衝撃に巻き込んで吹き飛ばす。

鈴鳴に吹き飛ばされたルゥとポゥに入れ替わる様に前にでるゼゥとミゥ。二人の神剣による一撃を、再度手にする剣にて受け止めようとした鈴鳴に対して、死角より襲い掛かるワゥのバズソー。

殺気と直感でそれを察した鈴鳴は迎撃を断念。右後方へと跳躍して三者による攻撃から距離を取る。

だが、そうはさせじとワゥと、復帰したポゥが前に出て、空いた距離を詰めて神剣による攻撃を繰り出した。

ワゥの『剣花』による攻撃とポゥの『嵐翠』による刺突を前へ踏み込むことによって躱す鈴鳴。『剣花』が左の肩口を浅く掠め、『嵐翠』が右の頬に一筋の傷を付けるも、それに構う事無くワゥとポゥへと斬撃を見舞い、二人を地に伏せる。

次いで振るわれる、背後からのゼゥの『夜魄』と、正面から横薙ぎにされたルゥの『凍土』による刃を、前方へ、まるで倒れるかのように姿勢を低く得ることによって躱し、それと同時にルゥとゼゥ

に対して、彼女達の身長ほどもあるマナの弾丸を撃ち込み吹き飛ばす。

『夜魄』によって薙がれた一房の髪が宙を舞い、弾かれた『凍土』が倒れ伏したルゥの直ぐ側に突き立つ音が鳴り響く中、残るミゥへ向かって地面を舐める様に踏み込む鈴鳴の、その背に向かって振り下ろされるはミゥの『皓白』。

大槌の形に形成された、『皓白』の先端に集められた白マナが鈴鳴の背を打ち据え、彼女を大地へ叩きつける。だが、次の瞬間、地面へと打ち付けられながらもミゥの右足首を掴んだ鈴鳴が思い切り腕を引き、鈴鳴はミゥを道連れにする様に大地へと引き倒した。

背中をしたたかに打ち付け、息が詰まるミゥ。その間に鈴鳴は、ミゥの足首を掴んだままに立ち上がる。

長いローブが捲くれて艶めかしい白い素足が晒され、それにミゥが一瞬気を取られた隙に、彼女の腹部に痛烈な掌底を叩きこむ。

声にならない声を上げて、次いで盛大に咳き込むミゥ。

大地に倒れ伏すクリスト達を見やりながら、その場から軽く跳躍して彼女達から距離を開けつつ、鈴鳴はその手を天へと掲げ、マナを撃ち放つ。

「光よ、降り注げ！！」

その言葉に応える様に、空に打ち上げられたマナは幾条もの光の帯となって、大地に、そして倒れ伏すクリスト達へと降り注ぎ――それが止んだ時、そこにはズタボロになって倒れ伏すクリストの巫女達と、その前に悠然と立ち、その様子を見据える鈴鳴の姿があった。

「――此の程度、ですか？」

地面に横たわるクリスト達に順番に視線を送り、鈴鳴はぽつりと

漏らす様に呟いた。
その声音に含まれる感情は『落胆』。そして、『怒り』。

「……正直に言えば、私にとってこの戦いに勝とうが負けようがどちらでも同じでした。私は――ここで消え去る運命ですから」

どうせ聞こえていない。そう思いながらも、鈴鳴は淡々と言葉を紡ぐ。否、正確に言うならば、彼女自身、己の口から流れ出る言葉を止める事が出来なかったから。
そう――きっと、誰かに話したかったのかもしれない。そう思いながら。

「本体（スールード）が負け、本体が消えれば分体である私も消える。逆に本体（スールード）が勝ち、彼女の目的を果たしたとしても――彼女は、私を消すでしょうから」

そう言って、自嘲気味に笑う鈴鳴。
その声音は、何かを耐えるように、小さく震える。

「だってそうでしょう？　分体でありながら本体と精神構造を異にする存在。そんな彼女にとって異常（キモチワルイ）なモノを、残しておく道理はないですから」

そう続ける彼女の表情は、まるで泣きそうなのを必死に堪える幼子のようで。けれど、その表情を見るものは、ここには居なくて。

「私には――もう、『彼』の行く末を見守ることは出来ない……出来ないんですよ」

――けど、貴女達は違うでしょう？

その言葉は、発せられる事は無く。

――だから、私程度は乗り越えて――安心させてください。

その想いは、紡がれる事は無く。

ただ、その視線は、確たる鋭さをもって、未だ倒れ、動かぬ少女達に注がれ続けている。

◇◆◇

＜ルゥ……我が主よ＞

善戦するも鈴鳴の前に倒れ伏したルゥ。朦朧とする彼女の脳裏に声が響く。

その声が自分の直ぐ側に突き立つ己の神剣のものだと理解した彼女は、定まらぬ意識の中、それでも『凍土』の声へと心を傾け、『凍土』もまた応える声は無くともその意識が自分に向いたのを受け、ルゥに向けて言葉を続ける。

＜……汝、『力』を求むるならば我を手にせよ……＞

『力』。

その、今の彼女にとって堪らなく魅力的な言葉に、這う様に『凍土』へと手を伸ばすルゥ。

もう少しで柄に手が届く、そのタイミングで、再び『凍土』の声がルゥの脳裏に響いた。

＜……心せよ、我が主よ。『力』を得る代償を。其れは永遠に続く苦難の道。そう、我を再び手にする時、汝は――＞

「……かま、わない……」

『凍土』の言葉を最後まで聞く事無く、ルゥは消え入りそうな声で、それでも強い意志の篭った声で言う。

どうなるかなど予想はつく。そんな事は覚悟の上……否、望むところだと。

己の内へと意識を向ければ、そこには確かに感じる、熱く、強く、愛おしい繋がり。これがあれば、自分は大丈夫だと。

一方でその様子を見ていた鈴鳴は、満身創痍になりながらも尚武器を手にしようとするその光景に、「ほぅ」と小さく息を漏らした。

諦めない。諦められない。生きるためにただ只管に必死に足掻き、輝く命。

それは――もうじき消えてしまう彼女にとっては、とても、とても眩しく、羨ましいものだったから。

だから彼女は、ルゥが“何か”をしようとしているその行動を妨げるような事は決してしない。いや、むしろ逆に期待を籠めた目で、その行動の末を見守る。

そう、『諦めず、足掻き続ける』その姿は、鈴鳴にとってとても愛おしいものだったから。

そしてルゥの其の手は、『力』を掴み取る。

「だから……私に、『力』を……！」

彼女が吼えた、その瞬間……ビシリ、と『凍土』の刀身に入る、無数の皹。

＜その想い、確かに……＞

そして聞こえた声は、それまで聞こえて来た声とはまるで違う、女性のような柔らかな声。けれどルゥは、その声がこの神剣のものだと本能的に理解していた。

その間も刀身に入った皹は広がり続け――同時に膨大なマナが周囲の空間を満たしていく。

柔らかく、優しく、冷たく、鋭い、怜悧なマナ。

それを発するは、ルゥが手にする皹の入った剣。

やがて、周囲に満ちたマナが急速に剣へと収束していき、まるで薄皮がはがれていく様に、蝶が蛹から孵る様に、皹の入った刀身が、剥がれ落ちていく。

同時にルゥは己の身体が“創り変えられて”いるのを感じていた。

そして――かつて『凍土』だったものは、その姿を現した。

まるで白雪のような、汚れ一つ無い純白の刀身を持つ、一振りの大剣。その姿に魅入るルゥの脳裏に、再び声が響き渡る。

＜私の名は永遠神剣第三位『雪華（せっか）』……この先連綿と続く永久の時を汝と共に。『青き氷精』よ……＞

それを聞いて、ルゥは「こう言う事か」と、かつてあの屋上で聞いたアネリスの言葉を思い出す。

――覚えておくがよい。想いの強さは力を齎（もたら）し、願いの力は奇跡を齎す。もしもぬしが先の言葉を違う事無く貫くのであれば――何（いず）れ、凍れる大地にも華が咲こう――

果たしてアネリスはこうなる事を見越していたのだろうか？……本当に、彼女には感謝してもしきれない。……お陰で、まだ、戦える。

そんな想いを抱きながら、ルゥは『雪華』を驚いた表情で自分を見る鈴鳴へと向けた。

「――待たせたな」
「……ふふっ。本当に……祐さんと出逢ってからは楽しいことばかりですよ。……失ってしまうのが怖くなってしまうぐらいに、ね」

対する鈴鳴もまた『空隙』を構えて静かに微笑む。
その笑みは、スールードが浮かべる様な艶然としたものではなく、他者を見下す様な冷然としたものでもなく、本当に、愛おしいものを見守るような、柔らかで暖かな笑み。
そして次の瞬間には、彼女の雰囲気は“戦うもの”へと変化し、それを受けてルゥもまた、満身創痍の身体を叱咤し、『雪華』を手にした事により己の内から沸きあがるマナを、全身に張り巡らせていく。

「……永遠神剣第三位『雪華』が担い手……『青き氷精ルゥ』……参るっ！」

ルゥの名乗りを受け、鈴鳴は一瞬驚いた顔をし、すぐにその表情を楽しげなものへと変えた。

「ここにきて永遠存在になるとは……まったく、本当に……」

――楽しいことばかりですね。

そして再び、刃は交わされる。

永遠神剣之章：１１８．強き意志、負けられぬ戦い。

対峙するユーフォリア、カティマ、希美の三人と激烈なる力、絶対なる戒の二人のエターナル。
各々が武器を構えたところで、最初に動いたのは激烈なる力だった。

「ルゥオオオオオオオオオオオ！！！」

激烈なる力が発した咆哮。それはその場を包む赤マナを増大させる『煉獄の咆哮』にして、眼前の敵へ己が怒りを炎熱にしてぶつける『激昂の咆哮』。
天空より降りしきる灼熱の塊。
それは着弾と同時に爆発を起こし――

「オオオオオオオオオオ！！！」

直後再び発せられた咆哮は、大気に満ちた赤マナを連爆させる『炎熱の咆哮』。
その声が響き渡った直後、ユーフォリア達の周囲の空間で爆発が連続で巻き起こり、火炎と衝撃をまき散らす。
続いて踏み込んできた激烈なる力は、右手の爪を振り上げ、自らの名を関する攻撃スキルである『激烈なる力』を繰り出し、ユーフォリアとカティマ達との間に振り下ろした。
響くは轟音、発するは爆炎、渦巻くは衝撃波。
それを咄嗟に跳んで躱した三人であったが、跳んだ方向は別であった。ユーフォリアは左へ、カティマと希美は右へ。そしてそのまま激烈なる力はユーフォリアへと踊りかかる。
繰り出される拳を、鉤爪を『悠久』で必死に裁き続けるユーフォ

リアであったが、じわじわと押され、その立ち位置を後退させていく。
激烈なる力の狙いは明白であった。つまりは、戦力の分断。
それを証明するように、カティマ達には絶対なる戒が足を踏み出す。
しまった、そう思ったユーフォリアが何とか合流しようとカティマ達へと視線を向けた、そこに見えたのは――。
「いくよ、じっちゃん！　はあああ！！　ルプトナキーーック！！」
絶対なる戒へと挑みかかるもう一人、ルプトナの姿。そして、それに続いて絶対なる戒に斬りかかるカティマ。
チラリとユーフォリアへ視線を向けた希美が、一度こくりと頷く。
――私達は大丈夫。
そんな声を聞いた気がしたユーフォリアは、希美へ強く頷き返し――激烈なる力に向けて、己が神剣を振りかぶった。

◇◆◇

絶対なる戒に対して間断なく攻撃を続けるカティマとルプトナ。
そして絶対なる戒の攻撃を防ぎ、傷を受ければ単体回復魔法（アースプライヤー）や範囲回復魔法（ハーベスト）でそれを癒す希美。
一見すれば有利に進んでいるかに見える攻防であったが、三人の表情は優れなかった。何故ならば――。
「このっ……ランサー！！」

ルプトナの攻撃スキルである、三連撃を叩きこむ『レインランサー』を受けた絶対なる戒は、蚊に刺された程も効いていないと言わんばかりにルプトナに向けて反撃してくる。
それを後方に跳んで躱したルプトナは、忌々しげにその表情を歪めた。

「う～……全然効いてないよ～……」
「ええ……参りましたね……」

ルプトナの愚痴にカティマが頷く。
幾度かの攻防の後に、彼女達は自分達の攻撃がまるで通っていない事に気付いていた。とは言え全て、と言うわけではない。攻撃の中でも“貫通”効果のある、所謂『ペネトレイト』系の攻撃と、希美による攻撃は確かなダメージを与えているのだ。そしてそこから導き出される結論。即ち、眼前の敵のブロックスキルには“青属性”と“黒属性”を無効化するプロテクション効果が付随している、と言うこと。
さてどうしたものか。このままではジリ貧だ。そうカティマが思った時だった。それまでその右腕の剣による物理攻撃一辺倒であった絶対なる戒が、初めて別の動きを見せる。
絶対なる戒がその左手に掴んでいる己が頭を掲げると、その閉じられた瞳が開き、そこから発せられた“力”――『浄眼』の力がカティマ達を包む。

「くっ……これはっ……」

それによってもたらされた効果は顕著であった。……マナが上手く練れないのだ。
一瞬混乱するカティマ達。そしてそれは絶対なる戒にとって、大きな隙となる。

その直後、絶対なる戒は、その右腕と一体化するように形成された氷の大剣を振りかぶると、その刀身に膨大なマナを集中させた。
繰り出されるのはそれに集められたマナによって薙ぎ払う、己が名を冠するスキルである『絶対なる戒』。

「……っ……やらせる、もんかっ！！」

揮われる暴虐の一撃。それに対して、マナを上手く練れないながらも何とか生み出したブロックによって受け止め、カティマとルプトナを護りきる希美。
その彼女の心意気に応えるべく、二人が前に出て――再び掲げられる、絶対なる戒の頭部。
再度閉じられていた瞳が開き、次いで発せられる『魔眼』による“力”は、急速にカティマ達から『戦おう』と思う気持ち――戦闘意欲を削いでいく。
緊張を伴う、生死を賭けた戦いの最中に、その戦う意志自体を削がれたことにより、致命的な隙を見せたカティマとルプトナ。
そこに再び絶対なる戒が剣に膨大なマナを集め――それによって二人の心中に首をもたげるのは危機感。そして誘発されるように戦わねば、と言う思いもまた湧きあがり始める……が、一歩遅かった。
唸る氷剣。迫る脅威を受け止めるための壁（ブロック）を張る時間も既にない。
「ここまでか」と、一瞬諦めの念が湧き上がり――その二人の前に、二人を庇うように希美が飛び出した。
共に今の『魔眼』を受けたはずの希美。だが、彼女はそれを耐え切り――否、その効果を超える意志を持って前に出る。
迫り来る『絶対なる戒』に対して、希美もまた己が神剣たる『清浄』を振り上げ、練り上げたマナを解放した。

「月神の名の下に、星よ集い吹き荒れよ！　清浄なる光……ここへっ！」

希美が繰り出したのは、彼女の最大の攻撃『スターストーム』。
次の瞬間、希美を中心に、彼女と、そのすぐ後ろに居るカティマとルプトナを包み、護るように、まるでその名の通り星の光の如く煌びやかなマナの嵐が吹き荒れ、『絶対なる戒』と激突する。
拮抗する嵐と刃。それでも矢張り相手はエターナルであった。
じわりじわりと、その氷刃は星の嵐を切り裂き、希美達へと迫り来る。

「くぅうっ……私は、こんな、ところで、負けないんだからあああああ！！」
「ぽえー！」

今もなお、周囲には戦い続ける仲間達がいる。時間樹（コノセカイ）に住む大切な人達を護るために、最奥へ向けて駆ける好きな人がいる。そんな仲間達を想い、気炎を吐いた瞬間、その心に応えるように、彼女の肩にとまっていたちびものべーが咆哮を上げた。
呼応するように一瞬『清浄』が輝き、そして、星の嵐はさらに強く吹き荒れ――彼女等に死を齎すはずであった巨剣を跳ね上げた。
大きく右手ごと剣を上げさせられ、体勢を崩した絶対なる戒。そして、その隙を逃すカティマとルプトナではなかった。
例え戦闘意欲を削がれようと、これほどの希美の姿を見せ付けられ、奮い立たぬ者が在ろうものか。

「ルプトナ！」
「解ってる！　今度はボク達の番！」

同時に駆け出すカティマとルプトナ。
カティマから繰り出されるのは『布都御魂（ふつのみたまのたち）の太刀』。

「一撃で制します。行きます！」
「じっちゃん、見てて！　今、必殺のぉぉ、……え～と、ルプトナナントカっ！」

絶対なる戒が持つブロックスキルたる『絶対なる守り』は、黒と青のプロテクションを併せ持つ。本来であればカティマとルプトナの攻撃は通らないはずであった。が、希美によって作られた大きな隙によって、そのブロックを形成する暇を与えないままに攻撃に移ることに成功していた。

上段からの斬り下ろし、そこから斬り上げ、そして横薙ぎすると同時に刀身に篭められた黒のマナを解放して叩きつける。

続くルプトナが放つ『ランページブルー』は、その脚力を存分に発揮し、靴型永遠神剣『揺籃』による蹴りを無数に食らわせていく。……彼女の締まらない台詞に後ろで希美が苦笑していたのはご愛嬌か。

カティマとルプトナの攻撃の嵐が過ぎ去ったそこには、片膝を付いて動かない絶対なる戒。その右腕の氷剣は半ばから折れ、満身創痍の状況であるにもかかわらず、それでも絶対なる戒はゆっくりと動き出す。

「なっ……まだ……っ！」

絶対なる戒は、立ち上がりつつその折れた氷剣を、己の眼前にて立ちすくむカティマとルプトナへと振り下ろした。

「うわっ！　とお！」

咄嗟に後ろに跳んだ二人。幸いにも折れて本来の長さに届かぬ短さであったが故に、剣は大地を叩くに終わった。だが絶対なる戒にとっては、今の攻撃が直接当たらずとも構わなかった。

その巨体と膂力から繰り出される攻撃を叩きつけられた大地は破砕され、多数の破片をまき散らす。
絶対なる戒は空中に飛んだその破片を、大剣を横薙ぎにして弾き飛ばす。
それは正に弾丸。
弾き飛ばされた瓦礫はカティマとルプトナへと襲い掛かり、二人の全身をくまなく打ち据える。

「ぐっ……かはっ」

衝撃に吹き飛び、倒れ伏す二人。
止めを刺そうとでも言うのか、完全に立ち上がった絶対なる戒は、倒れた二人に向き直り――その前に立ち塞がったのは、運良く今の攻撃に当たらなかった希美だった。
今カティマ達へ回復魔法を使うわけには行かない。そんな隙を見せれば、間違いなく目の前の敵は切りかかってくるだろう。
それに加え、度重なる魔法の使用と先程の『スタースストーム』によって、希美の疲労もまた限界に近いものがあった。だが、だからと言ってここで退くわけには行かない。
カティマ達と絶対なる戒の間に割ってはいった希美は『清浄』を構えて負けるものかと睨み付けた。
そんな希美を嘲笑うかのように、ゆらり、と、絶対なる戒が左手に持った己が頭をゆっくりと掲げ――その瞳が開かれる。

永遠神剣之章：１１９．掲げるは誇り、輝くは命。

絶対なる戒に苦戦するカティマ達の様子を見つつ、ユーフォリアは激烈なる力と激しい攻防を演じていた。

ぶつかり合う鉤爪と光の刃。

横薙ぎにされた激烈なる力の右腕を跳躍して躱し、そのまま上空から叩きつけるように『悠久』を振り下ろすユーフォリア。

対してそれを左腕の鉤爪で受け止め、そのまま大きく振ってユーフォリアを弾き飛ばす激烈なる力。

飛ばされたユーフォリアは、そのまま空中で『悠久』の形状を板状へと変えるとその上に乗り、激烈なる力へと突貫する。それをいなすように躱した激烈なる力は、ユーフォリアの背中に向けて『激昂の咆哮』を発する。

その声を聞いたユーフォリアは『悠久』から飛び降りつつ空中で反転、オーラフォトンバリアを張りながら『激昂の咆哮』によって上空から降り注ぐ爆炎へ『ライトバースト』をぶつけて相殺した。

とは言え、完全に防ぎきるという訳にも行かず、多少の衝撃と熱波は浴びてしまったが。

地上に降り立つユーフォリア。だが、丁度地に足が着いた、そのタイミングで激烈なる力が踏み込んでくる。

ユーフォリアを叩き潰さんと揮われる、激烈なる力の右拳。受けるには体勢が悪い。そう判断したユーフォリアはマナ障壁（オーラフォトンバリア）を張りつつ後ろへ跳躍するも、激烈なる力の豪腕がオーラフォトンバリアに僅かに当たり、ユーフォリアを大地に叩きつけた。

直撃は免れたものの、盛大に打ちつけられ、吹き飛ばされたユーフォリア。その彼女へ追撃を行おうと、激烈なる力が大きく踏み込む。

「っ！　『グラスプ』！」

倒れながらもそれを見たユーフォリアは、起き上がりながら激烈なる力にオーラフォトンを絡みつかせ、その動きを封じる。
効果は一瞬。だが、体勢を整えるにはそれで十分。
起き上がって激烈なる力から一旦距離を取り体勢を整えたユーフォリアは、対峙する激烈なる力の向こうに、倒れ伏すカティマとルプトナ、そしてその二人を庇うように絶対なる戒と対峙する希美の姿を見た。
――助けに行かないと！
そう思いつつも、眼前の敵がそれを許してくれそうもない。
でも、多少無茶をしてでも――そう心に決め、激烈なる力をにらみつけた、その時だった。

「オオオオオオオオオラアアア！！！！」
「バラスターダ！　やっちゃって！」

獣の如き咆哮を上げ、ユーフォリアの横を猛烈なスピードで駆け抜けて激烈なる力へと迫る黒き旋風――ソルラスカ。
ソルラスカはそのまま激烈なる力へと飛び掛り、その直後、激烈なる力の真横に、その巨体に匹敵する大きさの赤き竜が顕現し、ユーフォリアの前からどかすように体当たりをぶちかました。
そのままその赤竜――ヤツィータの神獣『レットドラゴン：バラスターダ』は激烈なる力にブレスを浴びせ、ソルラスカがその身体能力を駆使して連撃を浴びせる。

「ユーフォリア、行きなさい！」

そんな中、ソルラスカに続いて激烈なる力へ挑みかかったタリアがユーフォリアへと声を上げた。
それを聞き、突然の援軍に驚いていたユーフォリアは我に返り、

「はいっ！」と勢いよく返事をすると、絶対なる戒に向けて駆け出す。

一方で激烈なる力はそのユーフォリアの動きに気付いたのだろう、ソルラスカやタリア、ヤツィータよりもユーフォリアに一瞬注意を向け――。

「させません！　喰らいなさい、『無限回廊』！！」

そこに浴びせられたのは、その眼前にふわりと躍り出た、絶の神獣ナナシによる奇襲。

激烈なる力を包み込むように、空間が捻じ曲げられ、圧搾される。

エターナルたるその存在を打ち滅ぼすには至らないまでも、その歩みを完全に止められた激烈なる力は、忌々しげに短く唸る。

「空からの贈り物よ！　受け取ってちょうだい！　『スターザッパー』！」

その瞬間。激烈なる力の動きが止まった、そこを狙い済まして放たれたヤツィータの神剣魔法。

練り上げられたヤツィータの赤マナによって激烈なる力の頭上に穿たれた次元の穴。そこから呼び寄せられ、撃ち降ろされるは煉獄の流星。

対する激烈なる力は、自らに迫り来る『スターザッパー』を頭上に両手の爪を交差させて受け止める。

その直後、激烈なる力を中心として頭上に巻き起こる大爆発。

だが、本来であれば周囲に巻き散らされるはずの炎と衝撃波は急速に収束し、消滅する。赤と緑属性のプロテクションを併せ持つ激烈なる力のブロックスキル『激烈なる守り』によって効果を打ち消されたのだ。

だが、ヤツィータにとってそれは織り込み済みの現象であった。

「ソル！　タリア！」
「応よ！！　出し惜しみなんてしねぇ……全力全開！　自慢の拳……受けやがれ！」
「嵐の如き疾風の牙、耐えれるかしら？　どうだ！」
ヤツィータの声に応え、『スターザッパー』を受け止めるために両手を上げたことによって、がら空きになった激烈なる力の懐へ飛び込むソルラスカ。
繰り出されるのは彼の最強にして最大の技『降天昇地無拍』。
それに合わせて、挟み込むように背後から攻め寄せるタリアは神剣を振りかぶり――自身の奥義たる技『ヘイルストーム』を叩きつける。
「ルゥオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」
対する激烈なる力は、ソルラスカとタリアによる猛攻を受けながらも『炎熱の咆哮』を発する。
それによって巻き起こされた爆発と火炎は、激烈なる力自身をも巻き込みながらもソルラスカとタリアにダメージを与え、吹き飛ばした。
「ルゥオオオオオオオオオオオ！！！！」
そして再び、激烈なる力の咆哮が木霊する。
◇◆◇

掲げられた絶対なる戒の頭部。その閉じられた瞳が開かんとした、その時、希美の横を疾風が駆け抜け、絶対なる戒へと突貫する。

「『ルインドユニバース』！！」

ユーフォリアによる、板状の剣となった『悠久』に乗て突撃する攻撃。だがそれは、絶対なる戒が張ったブロックに受け止められ、勢いを止められる。

その場――絶対なる戒の眼前に降り立ったユーフォリアは、『悠久』の形状を元に戻すとその先に光の刃を形成する。

「ゆーくん、力を貸して！　『プチニティリムーバー』！」

絶対なる戒の頭部目掛けて振り下ろされた一撃は、されど咄嗟に折れた氷剣で受け止められた。

だがユーフォリアはそれに構わず、叩きつけるように連続で攻撃を加える。

勢いに押されてか、じりじりと後退する絶対なる戒。ユーフォリアは更に追撃を加えようと大きく振りかぶり――そこに合わせて氷剣を横薙ぎにされる。

振り上げた『悠久』を咄嗟に縦てて受けると同時にオーラフォトンバリアを張り、その攻撃を防ぎきったユーフォリア。だが、絶対なる戒の巨体に見合った力で振りぬかれた攻撃は、それを受け止めたユーフォリアを希美たちの側へと吹き飛ばすように押し戻していた。

彼我の距離が開いたその瞬間。

絶対なる戒はそれをチャンスと見たか、その左手に持った己が頭部をユーフォリア達に向けて掲げる。

閉じられた瞳が開き、発せられるは『邪眼』の“力”。それは、周囲の空間を揺さぶり、「逆らおうとする思い」ごと粉砕するとい

う、理法を統べる“力”。
だが、それに対してユーフォリアは退かず、負けじと、己がマナを解放する。
『邪眼』によって振動と炸裂を繰り返し、衝撃を撒き散らし始めた空間の中、彼女の背後に顕現する、絡み合う青と白の二頭の龍。
「塵は塵に、灰は灰に……声は事象の地平に消えて！」
撃ち放たれるは、あらゆる力を無（ゼロ）に帰す、双龍の吐息（ブレス）――！
「『ダストトゥダスト』！！」
放たれた双龍のブレスは『邪眼』の効果を打ち消し、絶対なる戒をも飲み込み、その身に宿すマナを多量に消滅させる。
だが、『邪眼』の発動の方が一歩早かったからであろう。ユーフォリアの至近の空間が炸裂し、彼女の身体を衝撃が襲った。
それによって思わず片膝を着くユーフォリア。不幸中の幸いと言うべきか、効果は不完全であったのだろう、戦う意志は折れてはいない。だが、激戦の中で刃を振るい続けた身体は満身創痍。一度膝を着いてしまったがゆえに、蓄積された疲労と痛みが一気に噴出して、立ち上がろうにも身体が上手く動いてくれない。
――お願い、動いて……！
『ダストトゥダスト』によって、絶対なる戒が護りに使うマナを失い、己の能力が上がっている今、この瞬間が勝負を決める最大の好機。それを理解しているからこそ、ユーフォリアは動かない身体を無理矢理動かし、『マナリンク』を利用して周囲のマナをかき集め、その場に何とか立ち上がる。
身体の底の底から、力を絞り出し――ふらり、と、その身が揺れ

た。けど、倒れるわけには行かない。
『悠久』で身体を支え、倒れるのを凌いだユーフォリア。だが、一瞬膝から力抜け、かくりと、再び倒れそうになり――後ろから優しく、抱き締められるように支えられた。
首だけで振り向いた彼女の耳に届いたのは、「任せて」と言う、希美の言葉。

「月光の輝きがみんなを癒してくれる……月光よ、希望の道を照らせ！」

その祈りは、傷つきし仲間を癒す光。
それは、全てを癒す清浄なる慈愛の光。
放たれた癒しの風は戦場を包み込み、その場で倒れ伏す仲間を、戦い続ける皆を、そして、自身の腕の中に居る、小さくて、けどとても大きな少女の傷を癒していく。
希美の想いが、願いが、心が篭められた完全回復スキル『ウィッシュプライヤー』。
それはユーフォリアが最後の力を振り絞るための後押し。

「……ありがとうございます、希美ちゃん……もう、大丈夫です！」
「うん……ごめんね、あと、お願いね」
「っ……はい！！」

希美自身、既に限界であったのだろう。『ウィッシュプライヤー』の効果が消えると同時に、希美はその場にガクリと崩れ落ちた。辛うじて意識は有るものの、動く事は出来そうも無く、後をユーフォリアに託す言葉を途切れ途切れに紡ぎ出す。だが無理もあるまい。
カティマ、ルプトナと三人掛かりであったとはいえ、永遠存在ならぬ身でありながら、エターナルと激闘を演じていたのだから。
だから、その想いに、助力に報いるためにも、そして激烈なる力

と未だ死闘を続ける皆の為にも……そして、自分を、自分達を信じてこの場を任せてくれた、大好きなあの人の為にも、

「原初より終焉まで……悠久の時の全てを貫きます！！」

濃密に練り上げられたマナに乗せ、『悠久』と一つになって、ユーフォリアはただ敵を撃ち貫く“力”となる――！

「ドゥーム……ジャッジメントォォーーーッ！！！」

繰り出される全身全霊を篭めた一撃。

その瞬間、ユーフォリアの姿は一筋の閃光と化した。

原初より、終焉まで。次元を踏破する、避けること叶わぬその一撃は、絶対なる戒の頭部……その瞳と一体化した永遠神剣『戒め』を打ち砕き、そのまま勢いを衰えさせる事なく激烈なる力へと迫る。

ソルラスカ達へ止めを刺そうとマナを練り上げていた激烈なる力は、迫るユーフォリアに気付き、攻撃のためのマナを防御へ注ぎ込む。

両手の爪を交差させ、マナの障壁を張り巡らせてユーフォリアの突撃を受け止める激烈なる力。だが、拮抗したのは一瞬だった。

「お願い、ゆーくん！　力を貸して！　全速前進、突っ切れえええええええ！！！」

吼える声に応えて膨れ上がるマナ。

そして次の瞬間、何かが砕ける音に続き、閃光が激烈なる力を打ち貫く。

正に力を振り絞った一撃だった。

最早まともに着地する事も出来ないほどに消耗したユーフォリアは、その身を投げ出すように地上に落ちると、慣性に任せるままに

二回、三回と転がる。
その動きが漸く止まり、ユーフォリアが軋む身体に鞭打ち、なけなしの力を振り絞って敵の方向を見れば、そこには己の頭部――神剣を失った絶対なる戒と、両腕を粉砕され、その胸に風穴を開けた激烈なる力がマナへと還っていく姿があった。
その光景に、漸く勝てたという実感が湧いてきたユーフォリア。良かったと安堵し、気を抜いてしまったからであろうか。急速に己の意識が遠くなっていくのを感じ――されどそれに抗う事もできず、彼女の意識はそこで落ちた。

――ちょっと休んだら、すぐに行きますから……待っててくださいい……ね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1034l/

永久なるかな　―Towa Naru Kana―

2011年12月27日03時50分発行